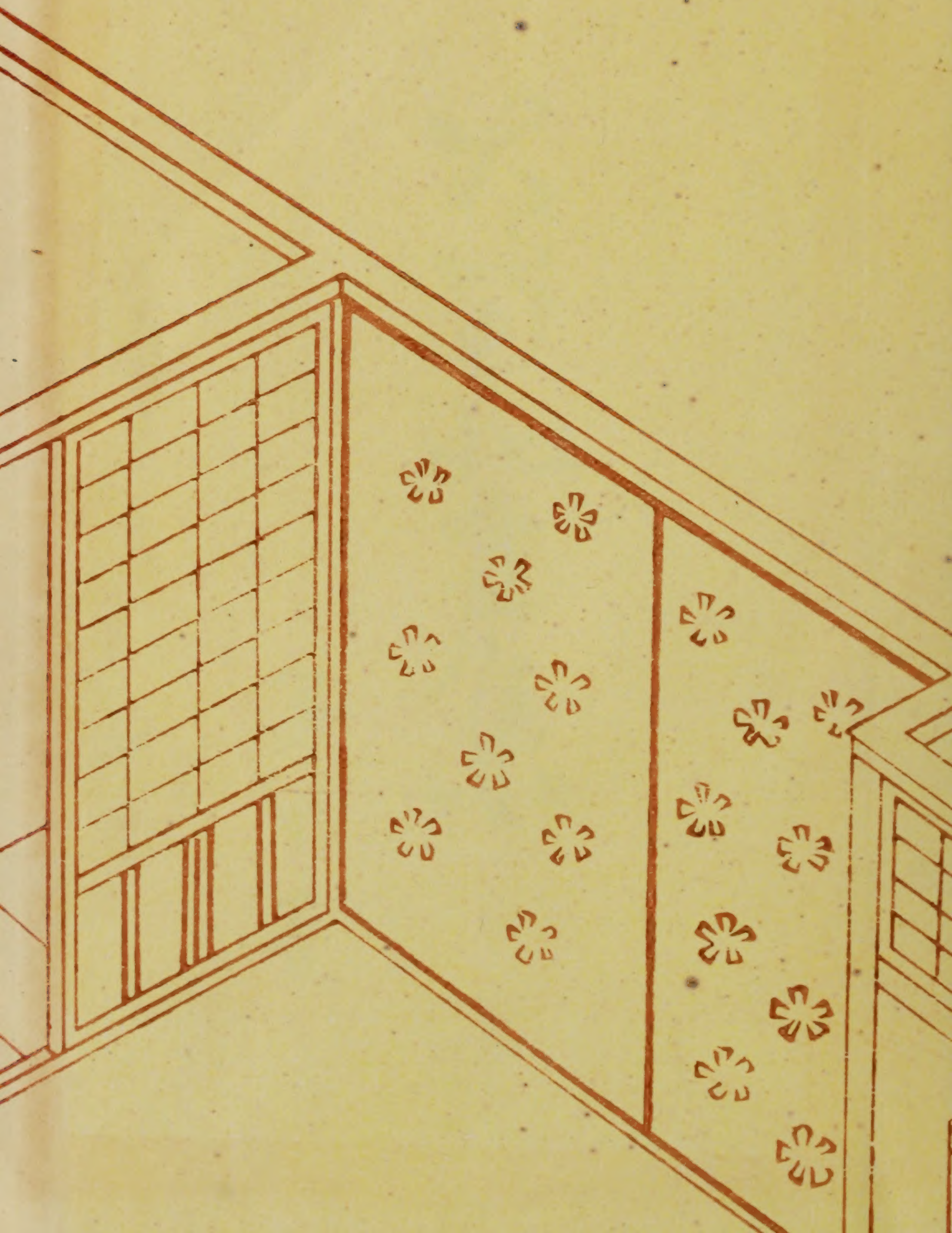




大南北全集

第十巻

大南北全集 第十卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京 春陽堂刊行





お願ひ

毎卷刊行遲延が重なりまして何とも相濟みません。何分にも、活字本を原稿にするのと違ひまして、印刷所へ廻すまでに非常な手數がかゝります爲に、兎角故障が起りがちで、恐縮に堪へません。併し、皆樣のお庇で、あと二册といふまでに漕ぎつけました。

玆で、特に皆樣にお願ひがあるのです。それは、追ひ〳〵卷が進んで參りますうちに、最初は迚も見當らぬと諦めてゐた南北の脚本が、その後折々發見されて參りまして、既に六種ほどに及びました。假にも全集でございますから、これらは是非收容いたしたいのでございますが、豫定の十五册では、到底それは不可能な事なので、更に二卷を增して十七册と致し、これ等新發見の脚本の外、南北作の草双紙小說數種と、南北脚本全部の解題、及び名題上のカタリ等を出來得る限り收容する事と致しました。豫定以上に卷を殖すのは本意ではございませんが、見す〳〵發見された脚本を逸するのも殘念ですし、全集を完全に近づける爲でもございますから、是非御贊成下さいまして、僅か二册の事ですし、折角今まで御講讀を願つた事ですから、十七卷までお附合ひを願ひたいのでございます。

大南北全集十五卷に引き續き別表通り二卷を追加發刊し、當全集の會員の方々に限り特に御頒ち致す

事と相成りましたに就ては、御豫約當初の御申込金を第十七囘目の會費に充當させて頂き、引つゞき每月會費を御拂込み願ひ度う存じます。

尙ほ追加二卷分會費は從前通り一册金四圓五十錢（外に送料市内金十二錢・地方金二十七錢 滿鮮・臺灣・樺太金五十五錢）づゝ御拂ひ込み願ひます。

萬一此の際一時御うち切りの方は御手數ながら至急其の旨御通知被下樣御願ひ申上げます。

本全集の御申込を本會直接でなく他の取次書店へ御申込みの會員諸賢は引きつゞき其の書店へ御申し込み下さい。從前通り配本はその取次書店から致します。

左に、今まで刊行の脚本目錄と、以後收容のものとを揭げて置きます。

	第一卷	四天王楓江戸粧（頼光四天王土蜘蛛退治） 彩入御伽草（小幡小平次お妻八郎兵衛） 霊験曾我籬（亀山と権八と嫁切り）
次々回配本	第二卷	貞操花鳥羽戀塚（高尾の文覚と暫） 伊勢平氏額英幣（清元の茶筌賣り）

次回配本

第十四巻

初冠曾我皐月富士侯（曾我討入と男鏡山）

睦蓬萊曾我（浪人閻の爛右衛門）

第十五巻

獨道中五十三驛（東下り怪談揃へ）

阿國御前化粧鏡（牡丹燈籠と湯上り累）

金幣猿島郡（將門秀郷。南北絶筆）

第十六巻

天竺德兵衛韓噺（南北の處女作天德）

染繮竹春駒（男重の井女馬士）

梅柳若葉加賀染（柳澤騷動と合法太郎）

第十七巻

法懸松成田利劍（日蓮記と累與右衛門）

蝶々孖梅菊（長吉長五郎双子仇討）

外に草双紙數種（挿繪コロタイプ凸版入）

全作解題及び番附カタリ集

大南北全集第十卷目次

挿繪目次

口繪解說

■卷頭に入れた錦繪は、「三賀莊曾我島臺」大詰、魔王宮對面の場が、これから明かうとする幕内の光景を描いたもので、なか〳〵面白い。時致の三十郎、祐經の菊五郎の外に、幕内の人々を加へたところが珍らしい。國貞の筆である。

■「紋盡五人男」の錦繪が見附からないので、狂言は違ふが、幸四郎三津五郎芝翫の五人男を選んで扮裝の見本までに挿入して置いた。雁金五人男といへば、いづれもこれらの錦繪のやうな扮裝をしてゐたものと思つて間違ひはない。

■一九三頁の前に入れた「今やう男達づくし」といふ一枚繪の錦繪は、各種の男達を、いろ〳〵の俳優の似顏で描いたものである。雁金五人男も加はつてゐるし、筆者歌川國兼が珍らしいので特に入れて見た。國兼は初世豐國の門人であつたが、あまり賣出さずに終つてしまつたので、その繪は少ないのである。

■三三頁の前へ入れた時代違ひの錦繪は、俗に三人甚内といつて、解說に記した通り、三世瀨川如皐が「紋盡五人男」へ極めて僅かな補訂を施した狂言なので、本篇とも深い緣があるから、挿入

して置いたゞである。

■大南北の筆蹟が發見されたので、それら本集の「紋盡五人男」の稿本であつたので、特に之を卷頭へ收めた。

■各狂言の櫓下番附の繪本番附は、例のコロタイプや凸版で、各場々々へ挿入して置いた。

解說及年表

紋盡五人男

雁金文七一味の惡黨が處刑になつたのは、元祿十六年の事である。それを俠客に引直して、竹田出雲がその名も「俠客五雁金」といふ淨瑠璃に仕立てあげてから、五人男の名は盛んに喧傳されて、歌舞伎にも移入され、書替へ狂言も澤山に出來た。大阪で並木五瓶の「藍桔梗雁金五紋」江戸で南北の「紋盡五人男」は、その中での代表的なもので、明治まで舞臺に俤を殘した。

本篇は、文政八年四月の中村座に書きおろしたもので、當時の名優達を五人男に見立て、一人々々に見せ場を作つて、充分活躍させたので、大變な評判になつた。殊に團十郎の庄九郎が好評であつた。これ以來、何か別の雁金五人男の狂言が出ても、市川家ではいつも雷庄九郎の役を取るやうになつた。

初演の役割は左の通りであつた。

極印千右衞門、實ハ眞間田甚三(三世尾上菊五郎)安の清兵衞 實ハ里見主水(三桝源之助)里見長狹之助(尾上松助)市右衞門女房、お藤(吾妻藤藏)田川喜惣兵衞(市川宗三郎)白船長右衞門(大谷門藏)非人、傳八(坂東善次)山川屋手

代、甚右衛門（松本幸五郎）醫者、寺原三庵（松本小次郎）乳人、岩野（市川おの江）高島賀平太（尾上菊十郎）伊豆屋女、吉川（尾上榮次郎）宅間女房（澤村しやばく）山川屋丁稚、幸吉（市川高麗藏）團七文七實ハ結城文之助、千右衛門妹、お高（ニヤク岩井粂三郎）布袋市右衛門實ハ齋藤德次郎（五世松本幸四郎）雷庄九郎實ハ小見川傳藏、野田角左衛門（ニヤク七世市川團十郎）非人、九助（中村傳九郎）

再演は弘化四年の七月、中村座で、名題は「五人男俠花姿競」であつた。

千右衛門（坂東彦三郎）清川、文七（ニヤク岩井粂三郎）千吉（坂東竹三郎）曾平太、道庵（ニヤク中山現十郎）長狹之助（尾上菊十郎）白船久右衛門（市川廣五郎）喜惣兵衛（山崎國五郎）市右衛門（尾上多見藏）玄龍（坂東三津五郎）安の平兵衛（關三十郎）岩崎（小佐川常世）千右衛門女房お梅、お高（ニヤク尾上菊次郎）庄九郎、角左衛門（ニヤク八世市川團十郎）

この時は、俳優の都合で、清川と文七、お梅（お藤）とお高を替る事になつたので、役の出し入れなぞに大分改訂を施してある。それから、千右衛門と市右衛門の役を全然入れかへてある。卽ち五人男の悪黨を千右衛門とし、市右衛門を立役に改め、極印鍛冶屋を雁金紺屋と變へたなど、小訂正が所々にある。

第三回目の上演は、安政二年五月の市村座で、名題は「五人男譜膽作俠」と改まつた。

市右衛門、角左衛門（ニヤク關三十郎）文七（中村福助）長狹之助（澤村源之助）清川（中村歌女之丞）喜惣兵衛（關歌助）

久右衛門（坂東村右衛門）曾平太（坂東又太郎）道庵（中村鶴藏）庄九郎（市川高麗藏）平兵衛、玄龍（二ヤク淺尾與六）お梅、お高（二ヤク尾上菊次郎）千右衛門（坂東彦三郎）

慶應三年一月の中村座に上演した「其裏梅俠膽達入」といふ狂言は、「紋盡五人男」へ三世瀬川如皐が、極めて僅かの補訂を施し、役名を變へただけのものである。市右衛門を登美澤甚内、千右衛門と庄九郎を一緒にしてイ菱の甚内、文七を高砂半兵衛、清兵衛を鐘馗の半兵衛、玄龍を尾坂甚内、長右衛門をおひやりこ傳兵衛、等と改めてあるので、番附を見ただけではそれと解らないが、內容は殆んで五人男と違はないのである。卷中挿入した錦繪が、その時の役々で、五人男が四人男に減つただけなのである。

明治十三年二月の中島座では、「五人男劇場新聞」といふ、如何にも明治初年らしい名題で上演された。

清兵衛（勝川又吉）庄九郎、角左衛門（二ヤク關三十郎）文七（尾上幸藏）岩崎（嵐德之丞）長狹之助（市川家團次）久右衛門（嵐璃久三郎）玄龍（尾上多非藏）清川（坂東吉之丞）お菊（澤村巴枝）千右衛門（吉川桂子）市右衛門（中村壽三郎）

三賀莊曾我島臺

文政四年一月、河原崎座に書きおろした曾我もので、一日の狂言を時代、お家、世話と三場に見せた

ところが目新らしい。例によつて、いろ〳〵な世界を組み合せてあるが、偶然にもそれらが、いづれも大近松の作から出發した「薩摩歌」「重帷子」「宵庚申」の三つである事も面白い。

四建目の「權三隱れ家」の場が、「繪本合法衢」の「くらがり峠」から來てゐる事は慥かである。また「御國入曾我中村」の「閑心住居」の場が、反對にこの幕が原據になつてゐる事は直ぐ解る。南北の作物には、俳優の關係で、共通した作意が間々見受けられるのである。

一番目の大詰「魔王宮對面」の場は、その後補訂して一幕物に改め、「念力曾我摺張弓」といふ名題で演じた事もある。

役割は左の如であつた。

源五兵衞女房、小萬。八百屋下女、おさん實ハ宅左衞門娘、おさん(二ヤク中村大吉)古鐵買ひ彌助。八右衞門道心西心。八百屋母、お虎(三ヤク嵐冠十郎)出石千太郎。八百屋丁稚、松太(二ヤク尾上多見藏)近江小藤太成家。蟬田檢校伊仙(二ヤク大谷門藏)八幡三郎行氏。二階廻し、お勝(二ヤク中村十藏)出石宅左衞門(市川門三郎)百足屋金兵衞。賤ヶ谷伴右衞門(二ヤク淺尾友藏)腰元、二の宮後ニ藝者、鶴吉(市川瀧三郎)船頭、音松(尾上松助)千葉奥方、星の井。金英樓女房、おいし(二ヤク市川瀧之助)判人、大磯屋傳三(坂東善次)手引き、丹助(尾上春五郎)彌助女房、お米。海老屋女房、おさよ(二ヤク岩井梅藏)乳母、おこん。藝者、寅吉(二ヤク松本虎藏)遣手、小旦那伊之助。南條定

七（二ヤク松本染五郎）源五兵衛娘、お雪。半兵衛女房、お千代。汐入村紙漉女房、おみの（三ヤク市川門之助）薩摩源五兵衛。野伏り、庚申塚の嘉十。曾我五郎時致（三ヤク關三十郎）笹野權三郎。八百屋半兵衛。工藤左衛門祐經（三ヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は再演されなかつた。

曾我中村穐取込（そがなかむらあきのとりこみ）

文政九年八月の中村座に書きおろしたもので、曾我狂言を秋の世界へ持込み、討入りの後日を仕組んだのは奇拔な趣向である。一番目の大詰を吉原の情景とし、虎少將の姉妹で女の十番斬りを見せたのも初めての思ひつきである。一座に、岩井粂三郎岩井紫若の兄弟が居て、この時代が人氣の出盛りだつたので、この二人を重に働らかしてゐるが特に目につく。粂三郎に、女でありながら男裝をさせ、紫若に、男でありながら女裝をさせるのも、南北らしい皮肉さである。

本集に收容した脚本には、「三建目の返し江の島兒ヶ淵の場」「二番目序幕、淺草觀世音の場」「二番目大詰、問註所の場」が缺けてゐるので、少々筋の通らない憾がある。甚だ殘念だが、どう搜索しても發見出來なかつたのである。その缺けた場の略筋を記すと

見ヶ關の場では、江の島の役僧天日坊が、女六部海月實は伊賀局腰元から、[illegible]、木曾義仲の落胤だといふ事を聞いて心が變り、[illegible]を殺して[illegible]を奪ひ、[illegible]を[illegible]し、その首を切つて、自分が殺された體に見せ、源家の正統と名乘つて出ようと企てる。淺草觀音の場では、天日坊が清水冠者義高と僞つて、賴朝の息女大姫を誘拐する。問註所の場では、藝者小篠が稻葉幸藏の男姿で捕はれ出て、夫の團三郎に對面し、曉丸詮議のため女だてらに盜賊な働らいた事を懺悔して自殺すると、その刀は權助が入れかへて置いた贋の曉丸と分つて團三郎は喜ぶ。天日坊の惡事は露顯する。

「天日坊」の方の筋は、その名が直ぐに暗示を與へる通り、「大岡政談の天一坊」一件を脚色したものである。天一坊を脚本に取込んだのは恐らくこれが初めであらう。木曾義仲へ持込んだのは巧い思ひつきである。傳說と對照すれば、女六部海月はお三婆ア、行實阿闍梨は感應院の住職に當る譯である。その方の筋は餘程面白いらしいが、何分にも缺けてゐるのでどうする事も出來ない。

この狂言の第一の特色は、義太夫を盛んに使つてゐる事である。江戶歌舞伎と義太夫とは、殆んど無關係なのが原則であつた。義太夫は、操り狂言の時に限るものとしてあつた。然るにこの狂言では、「袂ヶ浦の場」「福泉寺堤の場」の外に、大詰の「問註所の場」まで、三幕も義太夫を地にしてゐる。それば

かりか、「稽古所の場」でも、俳優に「昔八丈鈴ケ森の段」を長々と語らせてゐる。斯うまで義太夫を利用したのは、江戸歌舞伎には全く珍らしい。これは、當時非常に義太夫が流行した爲には違ひないのだが、何かまだ外に原因があつたかも知れない。

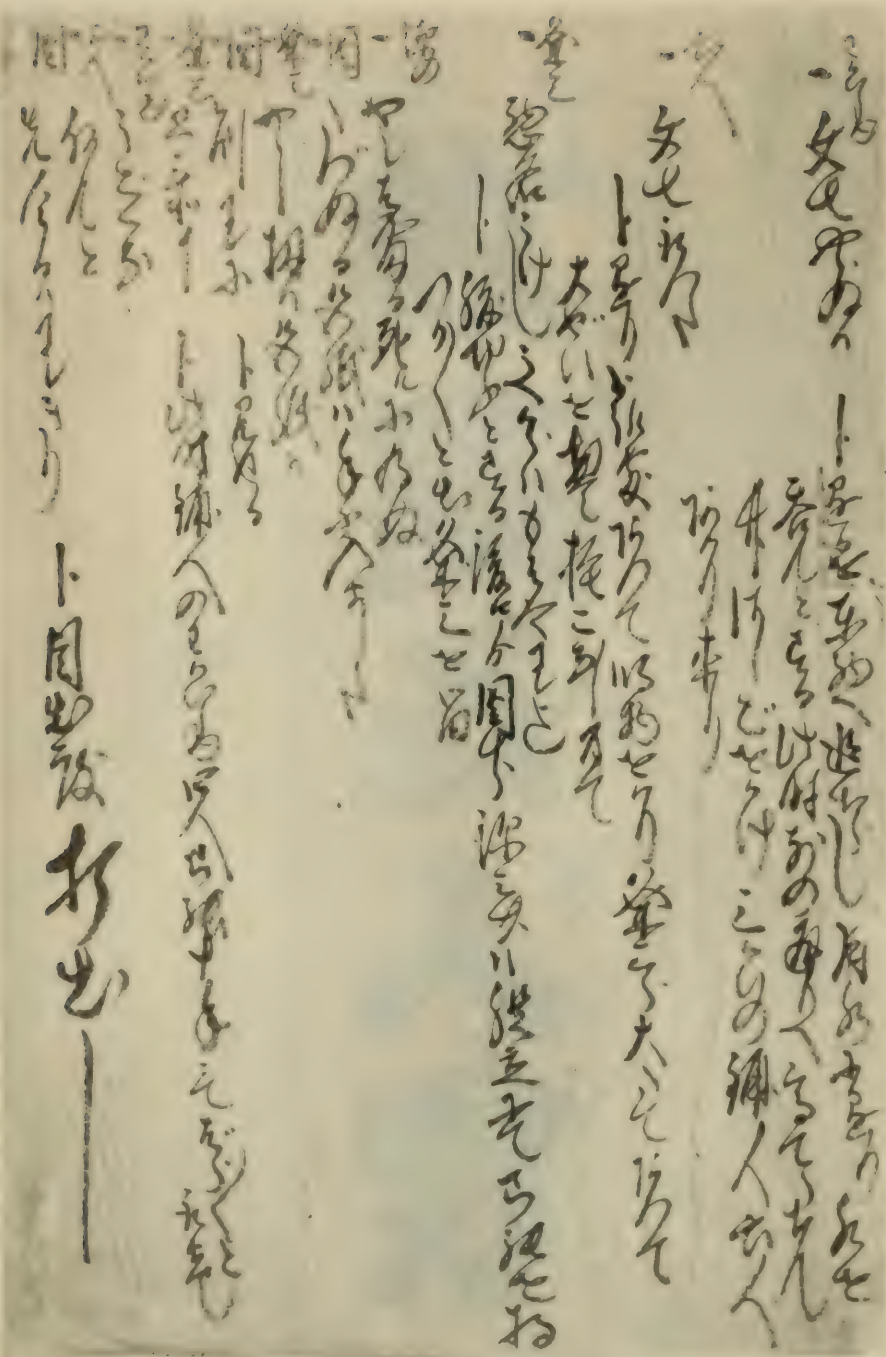
役割は左の通りであつた。

近江小藤太成家。曾我の家臣、團三郎（ニヤク團三十郎）工藤の奥方、梛の葉後ニ舞鶴屋の白藤太夫（三桝源之助）盜人、隱亡權助。荒井藤太（ニヤク中村芝翫）女六部海月實ハ伊東娘辰姫。舞鶴屋女房、お民（ニヤク吾妻藤藏）盜人、坪坂長牛。大藤内後家、榊後ニ遣り手のおくろ（ニヤク大谷門藏）白足屋金兵衛（岩井喜代太郎）箱廻し、喜助（松本染五郎）二ノ宮太郎朝忠（市川惣十郎）鬼王新左衞門（惣領甚六）石部金太夫（市川森藏）漁師、地獄清左衞門（澤村しやばく）岩本院の襌司坊。舞鶴屋新造、楓實ハ化粧坂少將。團三郎妹、お小夜（三ヤク岩井粂若）曾我の滿江（市川おの江）舞鶴屋新造、朝顏實ハ大磯の虎。團三郎女房、お幸後ニ藝者小雛假名稻葉幸藏（ニヤク岩井粂三郎）江の島の天目坊。舞鶴屋傳三實ハ京の次郎祐俊（ニヤク七世市川團十郎）劍澤彈正祐兼（中村傳九郎）

この狂言は再演されなかつたが、嘉永四年九月、市村座で、三世櫻田治助が「新板越白浪」（しんぱんこしのしらなみ）といふ鬼神のお松の狂言を作つたが、その二幕目と三幕目には、この狂言の「稽古所の場」と「問註所の場」をソックリ流用した。小雛を鬼神のお松に、稻葉幸藏を白桒也に變へただけであつた。お松は坂東しうかが

勤めたが、それから巳之助、三津五郎を經て、いま菊之助に傳はり、今日まで舞臺に殘つてゐる。

渥美清太郎識



紋盡五人男（もんづくしごにんをとこ）

紋盡五人男

序幕　新清水の場

役名――男達、雁金文七實ハ結城友之助。同、極印千右衛門實ハ眞間田甚三。同、雷庄九郎實ハ小見川傳藏。同、安の清兵衛實ハ里見主水。同、布袋市右衛門實ハ新藤徳次郎。山川屋番頭、權左衛門。同手代、介右衛門。同、喜八。同、左助。里見息女、清川。同乳人、岩崎。里見長狹之助。田川喜惣兵衛。市右衛門一子、幸吉。遠藤會平太。大坪臺藏。村瀬左仲次。關口林平。奴、伴助。奴、隅田平。男達、白船長右衛門。市右衛門女房、お藤。易者、宅間玄龍。同一子、野田角左衛門。

本舞臺。三間の間、眞中に清水の舞臺。上の方、葭簀張りの水茶屋。下の方、占ひの小屋、所々に櫻の立ち樹、同じく吊り枝。爰に介右衛門、質屋の手代にて、頰かむりをし、左助、喜八。權左衛門、番頭にて、若い者二人、介右衛門を捕へ、ワヤ／＼云つてゐるを、お藤、水茶屋の女房にて、これを

聞いてゐる。大拍子、双盤、鰐口の音にて幕明く。

左助　なにサ、かみさん、構ひなさんな。これにやァ段々訳のある事だ。

喜八　この行道が判らねえと、見世中の者が疑はれやすわな。

権左　サア、いゝ所で逢つた。てまへの為に、大阪中を駈け廻つて歩いた。コレエヽ、色紙一枚でも掛かり物だ。月の切れないうちに無くなつたと云つちやア、第一この番頭のおれが済まねえわい。

左助　盗んだ物を、揃へて出せ〳〵。

介右　見ッともねえ、静かにしなせえな。品さへ返しやァいゝぢやァねえか。

皆々　早く出せ〳〵。

ト介右衛門、モヂ〳〵して、懐より紙入れ、雑物など出して返す。権左衛門取つて

権左　まだ〳〵、こればかりぢやァねえ。餘所から質に取つた色紙も、われが盗んだであらう、それを出せ〳〵。

介右　その色紙とやら、力士とやら、そんな物はおらァ知らねえ。

権左　ナニ知らねえ。さう吐かしやァ、腕づくでも出させるぞ。

介右　腕づくでも、猫鳥でも、おいらァ知らねえ。

皆々　出さにやア、ぶちのめせ〳〵。

ト皆々立ちかゝるを、お藤、この中に入つて留めて

ふぢ　マア〳〵、お待ちなされませ。何やら譯は存じませぬが、御朋輩のお人さうなが、ふとした惡い心から。してマア、その色紙とやらは、どのやうな物でござります。

權左　その色紙といふは、雁金の色紙といつて、定家さまの御直筆。さるお屋敷の寶物だといふ事だから、それで百兩の質に取つた、金目の代物だわな。

ト これを聞いてお藤、思ひ入れあつて

ふぢ　そりや慥か結城のお家の寶物。別れた夫の古主樣。

ト思ひ入れ。

權左　サア、キリ〳〵出せ〳〵。

左喜　出さにやア、そびいて行け〳〵。

ト立ちかゝるを、お藤、支へて

ふぢ　マア〳〵、お待ちなされまし……モシ、お前もマア合點の惡い。その色紙とやらを返しなさんすりや、又お前の身の上は、及ばずながら扱うてあげるほどに、サ、返してあげなさんせ。どうぞ

又借さんも、それさへ戻つたなら、御堪忍なされて下さいませ。

權左 構はつしやるな。甘い酢でも喰へる奴ぢやァねえ。

ふぢ サア、その色紙を、早う出しなさんせ。

　ト これにて介右衛門、懐より箱入りの色紙を出して

介右 そんなら返しやす。

　ト お藤へ渡す。

ふぢ どうぞ、これで御堪忍なされませ。

　ト 渡す。權左衛門、ちよつと改め見る事。此うちお藤、色紙へ目を附け、思ひ入れ。

權左 うぬ、親方までしよびいて行く奴だが、折角かみさんも詫びる事だから、料簡してやるぞ。

ふぢ わたしも共々、有り難うござります。それはさうと、その色紙は、どこのお人が買入れしたのでござります。

權左 サア、この色紙の置き主も、今は行くへが知れず。したが、月切れの代物ゆゑ、百両さへ持つてくれば、誰れにでも請けさせるのサ。

喜八 それ〳〵、定家さまの色紙と云つちやァ、こんな賣れ口の早い物は無いのサ。

左助　それを知つて、此奴が盗んだのだ。

ふぢ　お前も早う、どこへなと行きなさんせ。

介右　アイ〳〵。

權左　まだしも、いゝ所で捕めえた。これも大方、觀音樣のお授けだも知れねえ。

左助　直ぐにお禮參りをなさいやし。此奴にかゝつて、まだ晝飯も食はねえ。

喜八　番頭さん、喜びに晝飯としてえね。

權左　これがほんの、盗人に追ひ錢だ。舞臺から飛んだと思つて、百奢れ。

左喜　かみさん、大きにお世話でござりました。

ト皆々、下座へ入る。此うち介右衞門、ソロ〳〵花道へ來て、懷より袱紗に包みし誠の色紙を出し

介右　大べら坊め。まづ似せ物で、おれが體もあんのん樣。お禮參りもよく出來た。誠の色紙は矢ッ張り爰に。これから直ぐに江戸へ逃げ、この本物で金儲け。

ト立ちどまつて思ひ入れ。お藤見て

ふぢ　なにをウヂ〳〵、早う行きなさんせ。

介右　アイ、大きにお世話でござります。

ト大拍子になり、色紙を懐中して向ふへ入る。此間、藤介見送り、思ひ入れあつて、

ふぢ　正しく今の色紙こそ、結城のお家の重宝、いかなる人が質入れなせしか、その置き主もかくへは……う。金さへあれば請け戻さるゝと、今の話し。人手へ渡らぬ其うちに、どうぞ此方へ……うりはから、在所は知れても大枚百両。別れてからが大分月日。どうぞして市右衛門どのに逢うて、この事を早う知らせたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。双盤、大拍子になり、向うより竹平太、着大小、深編笠、左仲、臺藏、浪人、侍ひの拵らへ、櫻の枝へ樽を通し、両人して提げ、林平、同じく浪人侍ひにて出て来り、その後より長右衛門、大阪の男達にて、附添ひ、出て来り

左仲　時に臺藏どの、高津できめた坊主持ち、これまでも餘程の道のり。今日のやうな上天氣の不漁な日はござらぬ。

臺藏　悪い事を云ひ出して、これがほんの、口から高野とやらでござる。

林平　高野なら坊主は澤山だが、石地藏さへ見掛けぬは、未だ武運に盡きぬところでござる。

長右　イヤ、旦那方、舞臺の根際に、おつなかみさんが見えまするぞえ。花を肴に、又おやりんかいな

三人　イカサマ、それがよからう〳〵。

長右　サア、お出でなされ。
ト皆々舞臺へ來り、床几へかゝる。
ふぢ　ハイ〳〵、これはどなたも、ようお出でなされました。
おかみさん、茶をあけておくれんか。
ト茶、煙草盆を出す。臺藏、お藤を見て
臺藏　ヤア、剛氣に美しいの。
左仲　成る程、生きた辨天を見ちやァ、淸水の觀音を拜むものはない。
林平　成らう事なら、奥の院を拜みてえの。
ト お藤の背中を叩く。
ふぢ　なにをお弄りなされます。
ト此うち臺藏、有りあふ茶碗にて酒を飮み、長右衞門にさし
臺藏　なんでも押へなしの、無いとこつもりにするがよい。
二人　それがよい〳〵。
ト長右衞門飮んで

具右　こりやアえらいワ。なんでも、大阪半分のなくなつたのち、富士見同然ぢやアわいの。此所、伴

りながら

ト林平にさす。林平、引受け

林平　かみさん、一つ飲まねえか。

ふぢ　有り難うござりますが、不調法でござりまする。

左仲　ナニ不調法だ。飲む所ぢやァ飲むだらう。時に、かみさん、肴になりさうな物はあるかの。

ふぢ　何もお肴と申してはござりませぬが

ト遠眼鏡を持出して

ちとお慰みに、舞臺から御覧なされて、それをお肴に召あがりませ。

ト左仲次、舞臺へあがり、あちこちを見て

左仲　なんだ、遠眼鏡か。こいつは面白からう。

ヤア〳〵、奇妙々々。あれが攝州鐵拐が峯と……臺藏どの、御覧なされ。須磨の櫻も盛りでござる。

ト臺藏、林平も上がり來て、臺藏、眼鏡を見て

臺藏　成る程、希代だ。直そこに見えるワ。合法ケ辻の閻魔でござるな。左仲次どの、貴殿の顔に生寫しでござる。

左仲　これは御挨拶でござる。

ト林平、眼鏡を取つて

林平　ドレ〱、拙者は茶臼山から、生玉の方を見ませう。

長右　茶臼山で生玉とは、どうやら氣の惡いこつちやなア。

ト林平、眼鏡にて向うを見て

林平　ヤア、來たワ〱。

臺左　何が來ました〱。

林平　遠藤氏の彼のが、參つた〱。

臺藏　ナニ、彼のが參つたとは、里見家のか。ドレ、お見せなされ。

左仲　ハテ、拙者が先へ。

ト兩人、爭ひ、眼鏡を逆さまに見て

參りは參つたが、まだ十二三里先でござるワ。明日ならでは、これへ參りますまい。

喜惣　目をまはつしやる。眼鏡があちこちでござるワ。

林平　もうあれへ、參つた／＼。

ト三人、揚幕から下りて來り

三人　遠藤氏、お話しの、里見家の姫が、參つた／＼。

長右　こりや面白うなつて來たぞえ。祝うてま一つあがりんか。

三人　それ／＼、酒にしよう／＼。

ト皆々ワヤ／＼云ふ。これにて曾平太、衣紋つくろひ、いろ／＼こなし、花やかなる鳴り物になり、向うより清川、振り袖、矢の字結び。これに岩崎、乳母の形にて日傘さしかけ、櫻木、道芝、若草腰元の形。春野、小姓の形にて、手道具を持ち、附添ひ出てくる。跡より長狹之助、袴大小、若殿の形。隅田平、奴にて附添ひ、この跡より喜惣兵衛、少し老けたる侍ひの拵らへ。伴助、紺看板の中間にて、附添ひ出て來り、皆々花道にとまり

岩崎　御覽遊ばせ。花の都の清水を、爰に移して春景色、咲き揃うた花の盛りは、なんと見事な事ではござりませぬか。

清川　それいなう。咲きも殘らず、散りも始めぬ花盛り、見事な事ではあるわいなう。

櫻木　左樣でござります。殊更今日は長閑にて、その緋櫻も麗かに

道芝　今を盛りと菊櫻、手鞠櫻のはづみよく

若草　その絲櫻絲くゞり、衣紋櫻の八重一重。

春野　今日のお供も初櫻。

櫻木　なんと、好い眺めでは

皆々　ござんせぬかいなア。

長狹　花、霞を帶びて、春風自ら芳しと、實に唐歌にも吟ずる如く、千手の誓ひ、おのがさまぐ、

咲き亂れたところは、隅田平、なんと好い景色ではないか。

隅田　イヤモウ、御前の御意の通り、堪つたものぢやァござりませぬ。

喜惣　拙者めは、生れついての近眼でござりますれば、梢の花が莟んだやら、開いたやら、花見て暮らす日とてもなく、不風流な儀でござるて。

作助　成る程、お旦那の仰せの通り、湯屋と取揚げ婆は近いがよし、お目の近いは、御不自由なものでござります。

岩崎　これよりは、また方丈方の庭櫻。イザまづあれへ。

清川　皆も、おぢや。

皆々　まア、お出で遊ばしませ。

長狭　予も又、方丈方へ。

関川　ハツ。

喜惣　作助、来れ。

作助　ネイ。

　　ト鳴り物になり、この人数皆々舞臺へ來り、よろしく下の床几にかゝる。臺藏、曾平太の袖を引き

臺藏　お喜びなされ。彼のお話しのでござる。

林平　お羨ましい儀でござる。

長右　聞いたより、イヤ又、どえらいものぢやなア。

　　ト口々に云ふ。この時　曾平太、懐より鼻紙を出し、歌を書き、以前の櫻の枝へ結びつけ、作助を招く。

作助　ナニ、奴めに御用か。

　　ト曾平太が側へ行き

お笠の内ゆゑ、どなたやら、一向に相知れませぬ。

ト笠の内を見ようとするを、左仲次、伴助に囁く。

長右　エヽ、成る程、左様ならば、この歌を、お姫様に見せてくれろでござりまするか。

伴助　そこをどうぞ、あんじようしてナ。

三人　奴、頼むぞ／＼。

伴助　畏まりました。

ト岩崎、清川の前へ持ち行き、見せる。岩崎、ギョッとしたる思ひ入れ。清川、笑うてゐる。伴助見て

たゞ笑うてばかりござつては、一向に解りませぬ。御返歌がござらねば、この奴めが相立ちませぬ。

トこれを聞いて

喜惣　コリヤヽ、伴助、これへ持て／＼。

伴助　ヘイ／＼。

ト喜惣兵衛の前へ持つて行く。喜惣兵衛見て、近眼ゆゑ、解らぬ思ひ入れ。

喜惣　櫻の枝へ結びつけしは、定めて花に寄せての歌と見ゆるが、近眼ゆゑ、しかと相解らぬ。

作助　お旦那、御構になされませ。爰に幸ひ、遠眼鏡がござります。せめてあなたでもお讀みなされねば、奴めが相立ちませぬ。

ト有りあふ遠眼鏡を取つて出す。喜惣兵衞見て

喜惣　なんぢや……清水へ來た清川の器量には、膽が潰れて氣が遠くなるかな花もみぢ」

トこれを聞いて

女皆　ホヽヽヽヽヽ。

櫻木　ほんにをかしい

女皆　歌ぢやわいなう。

ト皆々笑ふ。

喜惣　これは如何。きの字盡しのこの歌は、自然と氣性を表はす一首。こりや御返歌が無けりや叶はぬ

ト喜惣兵衞、清川の前へ持つて行き、見せる。清川、あたりへ捨てる。敵役皆々見て

左仲　折角送りしあの歌を

臺藏　手にも觸れずに捨てられちやァ

林平　刀の手前が
三人　濟みますまい。
トこれにて曾平太、編笠を取り、ムツとしたる思ひ入れ●
曾平　返すさへ、心憎しと思ふのに、手にも觸れざる清川どの。これまで度々申し入れても、酢の蒟蒻のともくを附けるは、手前小身ゆゑ御不承知か。小身なれども御直參。殊には舊功の家柄と申し聟に取つても不足はあるまい。心を籠めたるその歌に、一句半句の返歌もなく、打捨てられしはこりや失禮でござらう。
岩崎　これは／＼、曾平太さま。お笠の内ゆゑ、お見外れ申しましたは、幾重にも不調法。段々のお心入れは、有り難うはござりますれど、御存じの通り姫ことは、結城家へかねての縁組み。それゆゑにこそ餘所外へ
曾平　默らつしやい。その結城家の云ひ號けたる友之助は、手前も顔は存ぜねども、家の寶の定家の色紙、紛失ゆゑに家出なしたといふ事は、誰れ知らぬ者もない。又それにおゐやる長狹之助どのは妾腹、惣領の生兒主水は本妻腹なれど、本妻死去のその後は、繼母の我まゝにて、家を繼ぐべき主水は梵天國。

幸蔵　それゆゑにこそ御次男の、長狭之助どのは、ぬく／＼と

左仲　濡れ手で安房の四郡を横領。

林平　その筈でござる。惣領は大べら坊、また物心附いた娘を、いつまでも捨てゝ置くのは、騒動の原でござる。

作助　顔も知れず、行くへも知れねえ貴様に、貞女を立てるも、馬鹿な容態だ。

敵皆　左様でござる。ハヽヽヽヽ。

トこれにて隅田平、ムッとして

隅田　黙らつしやい。最前から聞いてゐりやァ、戀の叶はぬむやくしに、他人のお家のいらざる容喙。今一應云つたなら、この奴めが手は見せぬぞ。

トきつとなる。

長狭　隅田平、扣へい。

隅田　でも。

長狭　ハテ、扣へて居らぬか。イヤナニ、曾平太どのゝ仰せではござれども、捨てたるを起し、絶えたるを繼ぐは、これ即ち聖賢の教へ。まして況んや兄の跡目は、弟が順道。なんと左様ではござら



ぬか。
倉平　サ、そりやア。
長狹　いらぬ御差配、御無用に存ずる……さはさりながら親兄まで、世の人口にかゝるのも、皆某しがあるゆゑに……それゆゑにこそ、かねての覺悟。
ト掠めたる時の鐘になり、櫻の花散る。長狹之助、これへ目を附けて思ひ入れ。
隅田　どいつどなたが何と云はうと、あなたは里見の、お世取り樣でござりまする。
長狹　風も吹かぬに散る花を、色即是空と見る時は、誰れか無常を感ぜざらんや。どうでこの身は
ト思ひ入れ。この時、下座より黑齋・納所坊主にて出て、長狹之助に向ひ
黑齋　長狹之助さまへ申しあげます。師の坊、何やらかねてのお話し。これより直ぐに方丈へ、お出で遊ばされませう。
長狹　それはこの身の願ふところ。然らば直さま。
ト行かうとするを、喜惣兵衞とめて
喜惣　なんの賣僧が長談議、お聞きあるのも何とやら。マヽ、暫時これにて梢の花。
長狹　イヤ、其方達の存ぜぬ事。たらちねを、かゝれとてしも烏羽玉の……サ、我が黑髮を

清川　エ。

長狭　隅田平、參れ。

隅田　ネイ。

　　　ト長狭之助先に隅田平、黒衙附き、下座へ入る。岩崎、清川、跡を見送り思ひ入れ。

岩崎　心ならざる今のお詞

清川　わたしも共に

　　　ト行かうとするを、曾平太とめて

曾平　イヤ、清川どの、待たつしやい。

岩崎　おとめなさるは、何の御用でござります。

曾平　待ちに待つたるこの年月、あまりと申せばつれない仕方、其まゝに差置いては、武士の面が相立たぬ。お禮に一盞あげうと存じて

敵四　これから直ぐに浮無瀬へ

岩崎　そんなら、あなたを

曾平　酒の相手に、是非とも身共が

喜惣　折角の御招待、何は兎もあれ

岩崎　それぢやというて、滅相な。

當平　エヽ、面倒な。引ッ立てろ。

敵四　合點だ

ト嫌がる女形を敵役四人、あちこちと追ひ廻し、よろしく捕へ、皆々花道へかゝる。ト誂らへの鳴物、摺り鉦入り、男達の出の唄になり、向うより文七、跡より千右衛門、清兵衛、續き、庄九郎、ズッと跡より市右衛門、いづれも男達の拵らへにて、腰に尺八を差し、日和下駄にて出て來り、五人、花道に並ぶ。

文七　遠からん者は男達、近くば寄つて浪花の達衆、お江戸の傳法勇み肌、五つ連れたる雁金の、文がゆかりの杜若、江戸紫にあらねども、その染色は今日紺屋。

千右　明日とは云はぬ達入れに、負けぬ氣性の鐵拳、三人鎚に四人鎚、五人男の正銘は、新身き小判の極印に、横ずッ頬へしるしの痣、惡くごたくを吐き出すと、たゝらへかけて吹き直すぞ。

清兵　そこを此方は一黒案、安の清兵衛甘口な、男達とは案の外、案に違はぬゐるけ者、お叱りうけてつらなるも、押しの強弓五人張り。

庄九　跡へは引かぬ家の株、意氣地は元より鳴り強き、初雷のごろつきが、どいつどなたの嫌ひなし、腰に差したる尺八で、眉間眞向線香の、蚊帳を吊つても桑原でも、荒れるや否や稻光り、臍を抱へて用心しろ。

市右　さてその次に控へしは、これも矢ッ張り達衆の端くれ、姿出立も一對の、備前徳利の布袋と違ひ、門んでゐるも先祖へは、どうか立たねえやうなれど、子供好きゆゑ異名をば、其まゝ布袋市右衞門。

文七　立ち並んだる足揃へ。

千右　竹の五行の尺八は

清兵　その音律も鷄が啼く

庄九　東錦繪、五番もの。

市右　見立を寫す出立ばえ。

文千　五ッ雁金

庄滿　花の下

市右　友よびつれて

五人　行かうかい。


ひゐき
連中
中村座



ト右の鳴り物にて、この人數、皆々を押戻して本舞臺へ來る。

曾平 待て〳〵。見れば今大阪中に噂ある、名に聞えたる五人連れ。

作助 一對出立の達衆とやら。お旦那の前とも憚らず、立ちはだかつて慮外な下郎。

臺臓 町人とて容赦はない。

左仲 相手が違ふ。侍ひだぞ。

ト立ちかゝるを岩崎、ちよつと隔てゝ

岩崎 アヽモシ……折に幸ひ姫樣の

ふぢ お身の大事を救はんと

女皆 危ふい所へ、ようこそ揃うて

ふぢ 五人の衆。

ト此の時、市右衞門を見て

ほんにお前は。

市右 ヤ。

ト兩人顏見合せ、岩崎も文七を見て

岩崎　あなたはどうして。

文七　ニ。

ト思ひ入れ。此うち清川、清兵衛を見て

清川　ほんにそれ〴〵、あなたは慥か

ト咎るな

清兵　アコレ。

ト額にて押へる。岩崎、清川に囁く。女形皆々思ひ入れ。

岩崎　サア、互ひに云はぬが花の庭。

庄九　サ、花のあたりは除けて吹けかし、お歴々の御前なれば、町人風情のかけかまひ、内證知つた女中方、床几の端へ、お慮外ながら。

千右　それよ、はる〴〵花の東路から、京大阪の花に浮かれて

清兵　祇園清水音羽の瀧、地主の櫻も及びなき

文七　眺めに盡きぬ五人連れ。

市右　そこらへ見世を張りかけて

五人　ドレ一服と、やらかさうか。

ト三味線入り大拍子になり、五人、床几に腰をかける。喜惣兵衛、思ひ入れあつて

喜惣　イヤ、身共なぞは、近眼の所爲かして、何やら一向に解らねど、物腰にて樣子を聞けば、どうやら胸に一物が

谷平　落ちつき顏の男達。どれも〳〵見かけからして、仔細らしい面つき。

臺藏　この頃見立の錦繪に、見たに違はぬ端手姿。

林平　これが正眞正銘の

左仲　僞りなしの五人男。

臺藏　見るとゾク〳〵襟許から、どうか流行り風でも引いたやうだ。

長右　ハテ、ようごんすわいの。先がこの頃新米の江戸さんなら、此方は浪花堀江の達衆ぢや。どたまいがめてなりと、せりふせにやならぬ。

ト思ひ入れあつて立ちかゝり

サア、ちよつと爰まで出てもらはう。白船の長右衛門が、お附き申したお歷々。辨慶ぢやないぞ。どこまでも肩持つて、出入りせにやならぬヮ。

　ト力味ちらして思ひ入れ。

千右　なんの、うぬが大阪で、達衆が横衆か知らねえが、大勢の女中達を捕へて、無理酒を飮ますのな
んのといふ、そんな達衆があるものか。出入りを好むその氣なら、不肖は此方がしてやるから、
爰で喧嘩の花咲かせ、一番相手になつてやらうヮ。

曾平　そりや面白い、實が入つて、喧嘩の勝負を今爰で

敵皆　白船組の手柄が見たい。

長右　ドリヤ、せりふしてお目にかけませうか。

　トちよつと擂り鉦入りの鳴り物になり、長右衛門、思ひ入れあつて、舞臺眞中へ出て

ヤイ、爰なへげたれめ、おのれ、とひやうもない奴ちや。惡しく味噌こしごたく云ひくさると、
新町橋の上から、道頓堀の眞中へ、どんぶりこと云はしてこますぞ。ヤイ、なんぞ云うてか。云
うて見い。

　ト立ちかゝつて千右衛門が胸倉を取る。千右衛門、その手を拂つて、長右衛門が横ずツ頬をポンと張
り倒す。

敵皆　ヤアヽ。

ト悔り思ひ入れ。長右衛門、顏をしかめて

長右　アヽ、痛いぞ〳〵。えらい目に合はしくさつたなア。

ト顏を抱へて思ひ入れ。

千右　なにサ、婆娑ふさけの白船とやら、惡くごたくを吐くが最後、この極印が手の平へ載せて、新清水の舞臺から、難波の浦へ抛りこむぞよ。

ト立ちかゝるを市右衛門とめて

市右　極印、待ちやれ。大人氣ない。達衆と聞けば、浪花も江戸も男達。五人揃つてこの土地へ、はるばるやつて來て見れば、云はゞおいらが仲間も同然。その上、何の某といふやうな男でもあるめえ。もういゝ加減にして、料簡してやりやれサ。

長右　イヤ〳〵、ほでさつかけては、きく事ぢやないぞよ。

臺藏　それ〳〵、白船が後楯はおいら三人。

林平　引けを取らしては料簡ならぬ。

左仲　出入りが見たい〳〵。

ト三人立ちかゝる。

長右　マアノヽ、其方へ退いて見物さつしやれ……ヤイ、其方は花人の大勢の衆、此方は岩崎なうかい
ゆゑ、遅なしうしてゐれば、ほんまに出入りする氣なら、銘々の橋詰めまで、一人づゝ出て來い
やい。

トまた立ちかゝるを、清兵衛とめて

清兵　コレ、白船とやら。いま聞く通り、なんの仔細も無い事なら、爰は互ひに料簡もの。殊には御入
家のお姫樣もお入りなれば、物事丸く納めるが、よささうなものぢやアごんせぬか。

長右　成る程、貴樣の詞に免じて、そんなら出入りは又重ねて。

清兵　それで此方は落ちついた。

岩崎　わたしらまでも共々に

ふぢ　側で見てさへ、どうなる事かと

女皆　ほんに案じて居たわいなア。

ト此うち喜惣兵衛、清兵衛をジロ〳〵見てゐて

喜惣　ヤ、最前より、案に違はぬ物腰恰好、慥かに貴殿は

ト清兵衛が前へ來て、よく〳〵見て

それ〳〵、よく〳〵見れば、ほんにあなたは里見家の御惣領にて、正しく主水さまに違ひはない

清兵　イエ〳〵、わしは里見とやら、遠見とやらでは

ト思ひ入れ。

喜惣　イヤ〳〵、遠見ではない近眼ゆゑ、よく側で見屆けた。お顔に覺えの、いよ〳〵主水さまに違はぬなり形。オヽ、正眞の、主水さまぢや〳〵。

ト思ひ入れ。

清兵　どう致しまして私しは、決してそんな覺えは、さら〳〵ござりませぬ。

喜惣　成る程、お身の上を、お隱しなさるも御尤も。たとへ里見の若殿主水さまにもせよ、お家を追ひ出されては、風來者も同然な。大阪の町中を、喧嘩して暴れ歩くといふ、男達の其うち。アヽ、こなた樣は好いお身持ち。今は主でも家來でもない。見下げ果てた根性骨。世に云ふ、これが腰拔け武士とやら。

清兵　その腰拔けゆゑ以前は以前、今は町人雁金組、男の中で少しでも、立てられたさの世渡りに、男を磨くおいらゆゑ、悪口されては友達仲間へ、面が立たねえ。

喜惣　でも、見す〳〵、血筋は正しき御主人の

清兵　何をいらざる意見立て。其方へ寄つて

ト寄るな

ト喜惣兵衛を突きのけるとて、よろ〳〵とこけかゝる、作助、立ちかゝつて

作助　お旦那に向ひ、返す〴〵も慮外な匹夫め。

ト清兵衛へかゝる。ちよつと立廻り。此うち庄九郎、莨のんでゐて、この時中へ入り、作助を捕へ、見事に投げる。

敵皆　うぬ、腕立てひろげば、手は見せぬぞ。

ト抜きかけるを、作助、起上がつて

作助　ところを、うぬ。

トまた庄九郎にかゝる。その手を捕へて

庄九　花に鐘、そこ退きたまへ喧嘩買ひ、どいつどなたの嫌ひなく、相手は鎌輪奴御存じの、氣随氣儘の生れつき、跡へは引かぬ江戸ッ子の、水道の水の飲み加減、ぬるい奴なら除けてもやるが、あつくなる程どこまでも、お侍ひでも折助でも、お望みならば今爰で

ト千右衛門、庄九郎を隔てゝ

千右　これサ雷、どうしたものだ。そこを柳にぶん流し

市右　兎角角目の無いやうに

喜惣　然らば互ひに

ふぢ　そんなら此まゝ。

晉平　して又、わいらは

敵皆　何しに爰へ。

庄千　色に逢ひに來た。

敵皆　して、その色と云ふは。

五人　それにござるお姫樣。

淸川　エ、自らを

岩崎　なんであなたを

女皆　色とはえ。

晉平　娘一人に五人の男。

長右　八人聟なら三人不足。

ト あたりを見て

いつそ爰らで手短かに。

ト清川、恥かしきこなしあつて

清川　オヽ嬉し。

ト文七へ寄りそふ。曾平太、これを見て思ひ入れ。

曾平　返す／＼もいま／＼しい。人立ち多い境内で、人の見る目もいとひなく、さて／＼押しの強い奴等。あまりといへば

庄千　羨ましいか。

曾平　兩國の神々舞ではなけれども

喜惣　側で見てさへ立ちぐらみ

曾平　いつそクラ／＼／＼と、清川が幾つにも見えるやうだ。

作助　それ／＼、私しも味な心になりました。

庄九　サア、これからが肝腎の

市右　それよ。幸ひ茶見世の葭簀の内。



千右　その取持ちはお茶屋のかみさん……合點か。コレ

ト　お藤を招き、囁く。お藤、呑みこんで

ふぢ　そんならわたしがよいやうに。

岩崎　この間に、サア〳〵お二人さん。

ト　兩人して淸川文七を無理に連れ來る。

淸川　でも、自らは恥かしうて

文七　詞に任せて

ふぢ　モシ……爰らがきつかけでございませう。

ト　唄になり、兩人を葭簀の內へ押しやる。曾平太、敵役、思ひ入れあつて

曾平　うぬ、いつその事に、戀の意趣ある淸川を

ト　顏にて知らせる。

長右　雁金組も、ぶツちめろ。

敵皆　合點だ。

ト　敵役皆々茶屋の內へ行かうとするを、五人男の者、一人づゝ立廻りあつて留める。

四人　何を、うぬ等が。

ト双盤になり、四人、尺八を拔き、入り亂れになつて追ひ拂ふ。顏役皆々下手へ逃げて入る。四人殘る。

千右　思へば不便な、弱い奴等だ。

市右　それよ、彼奴等にかゝつて、いかい白痴よ。

庄九　其うち斯うしても居られまい。

清兵　これから、ぞめきながらに連れ立つて

四人　ドリヤ、觀音へでも參らうか。

ト賑やかなる鳴り物になり、市右衛門先に四人並んで、石段へ上がりかける。この時、坂の上より玄龍、老けたる拵らへ、切繼ぎ衣裳、小脇差、杖を突き、下りて來り、よき所にて四人に行きあひ、とまる。市右衛門、思ひ入れあつて

市右　エヽ、親仁め、往來の邪魔になる。脇へ退いて通りやアがれ。

玄龍　この廣い往來を、肩で風切るいかもの作り。邪魔になるのはこなさん達。脇へ退いて通るがよいワ。

ト腰を伸して、こなし。市右衞門、ムツとして

市右　おいらに向つて、口のへらないボク／＼親仁。うぬ、婆娑ツぷざけの老ぼれめ。

ト立ちかゝるを、庄九郎とめて

庄九　これサ、布袋、向うは老人、除けて通してやるがいゝわサ、

玄龍　ハヽア、こなた衆は、この頃江戸から登つて來たと噂のある、五人男の暴れ者だな。

市右　何がどうしたと。

玄龍　マヽ、こなた衆にこの親仁が、云つて聞かせる事がある。手間は取らせぬ、マア／＼、あそこへ

ト玄龍下りて來る。皆々舞臺へ下りて來る。

千右　親仁どの、おいらに云つて聞かせる事があると、留めたこなたの姓名は。

玄龍　身共は宅間玄龍といふ、卜筮家でござる。

清兵　その卜筮がこの仲間へ、云つて聞かせる事といふのは。

玄龍　外の事でもござらぬ。こなた衆は僅かばかり、手ぶしの利くのを頼みにして、上見ぬ鷲の喧嘩買ひ、それが世に云ふ井の内の蛙大海を知らず。世間にはどんな強い奴があつて、五人男で候ふの男達で候ふのと、暴れ歩くこなた衆に、吠え面をかはかせる、強い奴があるまいとも云はれぬ。

庄九　コレ、兄貴、マア、待たつしやい。こなたは、まだ性根が直らないな。

市右　ナニ、どうしたと。

庄九　こなたはさういふ短氣者ゆゑ、お屋敷まで追放され、今更改めて言ふでもないが、その後お家の重寶たる、定家の色紙紛失。この色紙は鎌倉どのより、たつての御懇望によつて、攝州津守が申にて、新地五百石のお墨附を頂戴。さるによつて、右の色紙を差上げねばならぬところに、計らず紛失、鎌倉どのゝ仰せを背き、寶を惜しむ僞り者と、疑ひかゝりしお家の難儀、

千右　やう／＼三老方へお願ひ申し、二百日の日延で、若殿友之助さまには雁金文七、斯くいふ眞間田甚三郎は、極印の千右衛門。

庄九　小兒川傳藏は、雷の庄九郎。

千右　姿をやつして町家に暮らすも、寶の詮議、惡者仲間を探らん爲。

清兵　某とても、結城の家に緣あれば、姿をやつして安の清兵衞、心に思はぬ喧嘩好みも、結城の家へを思ふがゆゑ。

庄九　こなたはわしが兄といひ、前非を悔いて御主人の、共に力になりたいと、奇特にも賴まつしやるゆゑ、ともども大事を打明かし、便りに思ふそのこなたが、咽喉元過ぎれば熱さとやら、よい事

にして喧嘩好み。弱い者をば打叩き。それゆゑにこそ今のやうに、不覺を取るのも心がら。眞實誠にお主の爲を思ふなら、今日向短氣は兄者人、改めては下さるまいか。

ト三人、意見する。市右衛門、こなしあつて

市右　貴樣達にさう云はれては、一言も無いが、おれも古主の恩返し、どうがなと思ふゆゑ、五人男の仲間入り、派手な衣裳や身のまはりも、損料借りの上部作り、性根を改め何事も、惡い事はせず、腹も立てず、そこで異名もおれが手に、布袋と附けた市右衛門。

千右　その心にて何ゆゑに、今の不覺は。

市右　あれはほんの時の張合ひ。みんなも不肖して下さい。

トしよげる思ひ入れ。よき時分より、お藤、この樣子を聞いてゐて

ふぢ　あなた方のお話しを承りまして、わたしも安堵。こちの人、よう心を改めて下さんしたな。

ト思ひ入れ。市右衛門、こなしあつて

市右　われは別れた女房お藤、先刻もちよつと見掛けたが、ハテ、變つた所で…………よく達者で居たな。

庄九　そんなならこなさんは、かねて噂に聞いてゐた、この庄九郎が嫂か。

ふぢ　ハイ、どなたもお見知りはござりませぬが、私しはこの人が、お屋敷を出られました時分は、お恥かしながら、江戸の吉原に勤め奉公。縁でこそあれ夫婦となり、二人が仲に子まで儲け、最早十一になりまする。この人の身状が悪さに、七年以前別れまして、それからありとあらゆる憂艱難、この大阪三界まで來て居りまするうちにも、どうぞ心が直りまするやうにと、神様へ御苦勞かけたお庇やら、今の話しを承りまして、此やうな嬉しい事はござりませぬ。ほんにわたしとした事が、自分の身の上ばかり申して、肝腎の事を……モシ、早速お前さん方に、お知らせ申さねばならぬ事は、そのお尋ねなさる色紙の在所は、知れて居りますぞえ。

千右　ナニ、尋ぬる色紙の在所が、知れてゐるとか。

庄九　コレ嫂、そりやァ誠か。早く聞きたい。

清兵　して、その在所は

三人　どこだ／＼。

ふぢ　サ、長町の山川屋といふ質屋に、百兩の質に入つてゐるといふ事を

市右　これサ、お藤、何を云ふのだ。エヽ、女といふものは、譯も知らないで

ふぢ　イエ／＼、最前その山川屋の手代の話しに、わたしがしかと

三人 聞いたと云ふのか。

ふぢ ハイ。

市右 ナニ、それは定家の色紙ではあるまい。色紙のあたつた下馬が、流れにでも出たといふ事を、てまへ、聞き違へたのであらう。コレ、役にも立たない事を云つて、交ぜッ返すなえ。

ふぢ ホヽヽヽ、いかに女子ぢやというて、その位な事を聞き違へてよいものかいな。そして、色紙のあたつた着物を、百兩の質に取る阿房が

市右 これサ、それも大方、錢で百の間違ひであらう。よくツベコベと口を出す女だ。

ト市右衞門、無性にお藤のいふ事を打消す思ひ入れ。

ふぢ イエ〳〵、違ひはござんせぬ。その定家の色紙とやら、先刻山川屋の手代の云ふには、二三日のうちには、その色紙も外へやると云うたぞえ。

庄九 いよ〳〵それに極まらば、質屋へ渡つて色紙を留め、急いで金の才覺を

千右 お國へ飛脚を立てたとて、急な事には間に合はず

淸兵 里見の家の藏屋敷へ、顏出しがなるならば、いとより易い事ながら、繼母の義理ゆゑ今の身では

市右 男は立てゝも金が無ければ、寶の在所は聞きながら、殊によつたら、もしや人手へ。

四人　ハテ、どうしたものであらうな。

ト思ひ入れ。よき時分、後の方より長狹之助、青坊主、雛の衣、四郎、草履、[illegible]になつて、下の方へ出かゝりゐて

長狹　兄上、當所にましませば、猶更安堵。隨分御無事で

清兵　ヤヽ、さういふ聲は

ト振りかへる。この時、長狹之助、笠にて顏を隱し、ツカ〳〵と花道へ行き

長狹　はや〳〵、御歸國あつた上、めでたう里見の御家督を

清兵　ヤ。

長狹　南無阿彌陀佛々々々々々々。

トこなしあつて、足早に向うへ入る。皆々思ひ入れあつて

庄九　心ありげな今の御出家。

清兵　慥かにあれこそ我が弟。

ト思ひ入れ。この時、下座、バタ〳〵にて、隅田平、走り出て來り

隅田　若旦那さま〳〵、若旦那さまいなう。

トうろ〳〵する。

清兵　コレ〳〵、こなたの若旦那といふのは。

隅田　ハイ〳〵、私しは安房の地頭、里見の家來でござりまするが、御惣領が家出なされて、御家督は御次男がお繼ぎなされたが、兄御樣へ義理を立てられ、母御の惡事を諫めかね、思ひがけなく剃髮なされて、行くへ知れず、イヤ、斯ういふうちにも心が急く。お跡を慕うて下郎もお供を……さうだ〳〵。

ト隅田平、逸散に向うへ入る。大拍子、清兵衞、仰天して

清兵　さてこそ今のは我が弟、出家をさせては、繼母へ不孝、それゆゑ惰弱に身を持ちなし、弟に繼がせし義理も無駄事。跡追ひかけて、是非とも家督を

ト行かうとするを、千右衞門

千右　アヽコレ、待つた。そんなら薄々噂に聞いた、里見の家の弟御が、義理に迫つて出家を遂げたかそれ程の弟御、兄貴が留めては、なか〳〵止まる氣遣ひはあるまい。

庄九　こりやァ千右衞門が云ふ通り、思ひ込んで出家された彼の弟御、一應では止まるまい。まづ遠國へ出ぬうちに、おれが行つてお留め申し、その次手には差あたる、長町の山川屋へ行つて、先づ

口先で延して來よう。

千右　それが肝腎。そんなら雷

清兵　弟が事も頼むぞよ。

庄九　合點だ。ドレ、一走り行つて來ようか。

　ト双盤になり、庄九郎、足早に向うへ入る。市右衛門、思ひ入れあつて

市右　あの庄九郎が質屋へ行つて、掛合つたところで、名前は違ふ徳次郎、よもや氣取りは
ふぢエ。

市右　先づ何よりは、寶の在所が知れてめでたい。

千右　庄九郎が行けば氣遣ひないが、たゞ氣がゝりなは金の才覺。

市右　コレ、お主の爲なら喧嘩仕掛けに、金と轉んで、強請り騙りも

清兵　そんなら、大身の相手と見たなら

千右　心に思はぬ惡企み。忠義の爲とはいひながら

市右　エヽ、氣の弱い。

清兵　でも、酒でも飲まねば

市右　嬶ア、取つて來い。
ふぢ　アイ、そんならわたしが一走り。
千右　舞臺の上から花を見ながら
清兵　獻いつ押へつ
三人　引ッかけようかえ。

ト三味線入り大拍子になり、三人は石坂、お藤は下座へ入る。なまめいたる合ひ方になり、葭簀より清川、文七、出て、こなし。此うち岩崎、坂の上へ出かゝりゐる。清川、恥かしきこなし。

文七　親の許せし云ひ號けと、知らず計らず、不思議な縁。今くれ〴〵も云ふ通り、今日は此まゝ、早う屋敷へ。
清川　イエ〳〵、わたしや歸る事は嫌でござりまする。互ひに親の云ひ號け、お顏は知らねど見ぬ戀にあこがれ暮らすこの年月。大悲の誓ひか、思ひがけなき今日の逢瀬。もう斯うなつた上からは、わたしやお前の側を離れる事は、モシ、堪忍して下さんせいなア。

ト寄りそふ。文七、こなしあつて

文七　ハテ、聞分けの惡い。この文七も、屋敷へ歸參の上からは、天下晴れての女夫仲。清川どの、首

居もあるなら、また重ねて。

ト行きにかゝる。清川、縋つて

清川　モシ、そりや胴慾でござりまするぞ友之助さま。

文七　コレ、その名を滅多に……今は俠の雁金文七。

トこの時、岩崎、下りて來り

岩崎　モシ、その雁金の文七とは、今日が日までも餘所に聞き、清川さまの云ひ號け、あなたのお名であらうとは、夢にも知らずゐましたが、この頃浪花の評判にも、爰では喧嘩、彼處では、拔いた切つたの噂さへ、相手變れどその主は、名も變らずに雁金組。あの子をお育て申したる、わたしを始め云ひ號けの、清川さまは猶の事、そのお身持が案じられ、晩から夜の目も合はされませまい。樣子あつてのお身持か、詳しい譯も存じませず、女子のわたしが此やうな、御意見申すも、あなたのお身を、大事々々と思ふがゆゑ。必ず惡う思し召しまするなえ。

ト思ひ入れ。文七、こなしあつて

文七　我が身を思うて、深切なその意見、決して惡うは思はぬが、これには段々、云ふに云はれぬ。

ト思ひ入れあつて

イヤ、必ず案じて下さるな。

ト この時、下座より、腰元皆々、喜惣兵衛伴助、出て出り

皆々 岩崎どの、大事でござりまする〳〵。

ト 口々に云ふ。

岩崎 これはしたり腰元衆、譯も云はずに大事々々と、モシ、喜惣兵衛どの、こりやどういふ譯でござりまする。

喜惣 譯といふのは、若殿長狹之助さまの、お行くへが知れ申さぬワ。

清川 ナニ、弟の行くへが知れぬとや。

伴助 大方、神隱しにでもおなりなされたのでは

喜惣 イヤ〳〵、いま方丈で樣子を聞けば、御家督に望みが無いと云はれて、くり〳〵坊主にならつしやれたとの事。

清川 そんなら兼ねて母樣の、かたましいお心を諫めかね、家出なされて兄上に、里見の家督を讓らう爲か。

岩崎 成る程、こりやてつきりと、そのお心で

皆々　御剃髮なされたのでござりませう。

喜惣　何は兎もあれ、あの若旦那を失くなしては、屋敷へ歸つて申し譯が無い。エヽ、コレ、何方の方へ行かしやつたやら。何を云ふにも、この眼が不自由ぢやによつて、ツイ見失うた。エヽ、どんくさい

作助　モシ／＼、それには幸ひ、爰に八卦小家がござりまする。

喜惣　それこそ屈竟。方角を占うてもらはうか。その易者は、どこに居る／＼。

作助　ソレ、あなたのお鼻の先でござりまする。

喜惣　ドレ／＼……エヽ、此奴、嘘を吐く奴ぢや。

作助　ハテサテ、爰でござりまするよ。

ト作助、喜惣兵衛の手を曳き、八卦小家へ入る。

岩崎　假初ならぬお家の大事。斯樣な折には油斷がならぬ。サア、お姫樣、あなたも早うお屋敷へ。

清川　サヽ、歸りは歸らうが、あなたと一緒に

文七　これはしたり、この文七も、國へ歸參の上からは、直さま使ひをやる程に、マア／＼、一旦屋敷へ歸つて……コレ、腰元衆、此やうな折には、心を附けて、ナ、合點か。

皆々　ハイ〳〵……サア、お歸りなされませいな。

清川　ぢやというて、どうもあなたに

岩崎　エヽ、この子とした事わいなう。

トこなし。三味線入りの大拍子になり、文七に心を殘す清川を岩崎、顔にて叱り、腰元附き、皆々向うへ入る。文七殘り、こなしあつて

文七　さては里見の弟は、兄の主水に義理を立て、剃髪なして世を捨てしか。ハテサテ殊勝な、心だなア。

ト思ひ入れ。よき時分より石坂の上に曾平太、長右衞門、窺ひゐて、この時、舞臺へ出て

曾平　望む所に雁金文七。最前は身共が前で、あの清川とほてくるしい、よくも面當ひろいだな。

長右　エヽ、江戸さんかいな。コレ、こなんは、マア、おらが旦那の思はしつたげんさいを、横盤切つて、よう味な事さんしたの。その返報には白船が、雁金であらうが、釣鐘であらうが、ぐわん……といはせてこますぞよ。

ト唐突に長右衞門、握り拳を振りあげる。文七、ちよつと立廻つて、長右衞門を捻ぢあげる。曾平太、拔きかけるを、片手に留めて

文七　ハヽヽヽ、性懲りもない囚人とやら、開き過ぎたる早蕨の、握り拳の手料理は、おれへの馳走か、骨離せぬのも贅澤らしい。五つ連れたる友鳥も、はぐれて一つの塒でも、水面の泡の浮育ち、さうおやさかいの蝙蝠に、羽叩きされて堪るものか。

ト長右衛門を投げのける。曾平太「ムウ」と抜きかけるを、文七、尺八にて小手をしたゝか打つ。曾平太こなし。文七キッとなつて

誰れだと思ふ、エヽ……イヤ、こりやァ庄九郎のせりふであつた。ドレ、浮無瀬へでも行つて遊ばうか。

ト三味線入り大拍子になり、文七、悠々と石段を上り、入る。長右衛門、腰を撫り、曾平太、手の痺れる思ひ入れ。

長右　アイタヽヽヽ、うぬ、又どえらい目に會はしくさつたな。

曾平　重ね〴〵、遺恨重なるあの文七。もうこの上は

長右　モシ、お旦那、騙すに手なし。浮無瀬へ行つたは幸ひ。暮れ過ぎて、くらひ醉つたその所を、縁の下へ忍び込み、下からグッスリ。こりやァどうでごんすぞいの。

曾平　それも屈竟、さりながら、今一つの思案は、あれなる卜者。劍術手練の宅間玄龍、彼奴を頼んで

五人の奴等を

長右　それでしまふか、緣の下か。二つの挨で雁金組を

曾平　せしめてくれうワ。必ず拔かるな。

長右　見ん事出かして、お目にかけうかえ。

ト時の鐘、大拍子になり、長右衞門は石坂、曾平太は八卦小家の内へ入る。双盤になり、向うより幸吉、丁稚の形、風呂敷包みを持ち、出て來り、花道にて

幸吉　お使ひに出たその次手、向うの茶屋は挂さんの見世。ちよつとお目にかゝつて行かうか。

ト舞臺へ來り、茶屋の内を見て

見世を明けて、どこへかお出でなされたさうな。ちつとのうち爰に待つて

ト床几に腰をかけてゐる。下座より臺藏、林平、左仲次、生醉のこなし、捨ぜりふにて出て來り

臺藏　イヤ、素敵に醉つたワ。コレ、茶屋の女、水でも茶でも醬油でも、一杯くれろ。

左仲　コレ〳〵、殊の外御前がお渇きなさる。水を持てやい。

ト醉つたるこなし。

林平　ヤイ……、丁稚め、わりやァ唖か聾か。なぜ茶を汲んで出さぬのだ。

幸吉　私は茶屋の者ではござりませぬ。飲みたくば茶でも湯でも、汲んで飲ましてやりませう。

喜藏　此奴、武士に向つて慮外を云ふ奴だ。

左仲　其奴、ふん縛つて、あの欄干へ縛しつけるがようござる。

喜藏　それがよい〳〵。これで縛つた〳〵。

ト繩を拾つてやる。

左仲　太い奴だ。動きやアがるな。

ト幸吉を捕へる。

幸吉　アヽモシ。御免なされませ〳〵。

ト詫びる思ひ入れ。此うち掠めて大拍子。下座より權左衞門、出て來り、この體を見て、中へ入り

權左　モシ〳〵、ちよつとお待ちなされませ……ヤイ、わりやア幸吉ぢやアないか。あなた方へ、何な御慮外申したのだ。

三人　イヤ、この小僧めは、太い奴だ〳〵。

ト口々に云ふ。

權左　幸吉、わりやアマア爰へ何しに來た。

幸吉　ハイ、太左衛門橋筋へ、お使ひに參りました。

權左　長町から、太左衛門橋筋へ行くのに、爰を通る譯はない。又いつもの道草か。この茶見世は、われが母親、奉公が辛いから駈落ちして來たのか。

幸吉　イエ／＼、さうではござりませぬ。

權左　今あなた方が、太い小僧と仰しやつたが、買食ひの錢に困つて、あなた方の懐へでも手を掛けたのか。

三人　大方其奴、ぐれの巾着切りだも知れない。

權左　サア、有やうに吐かせ。山川屋の小僧が、泥坊すると云はれては暖簾にかゝはる。この番頭が折檻する。サア、キリ／＼吐かせ。

ト莨盆を持つて幸吉をくらはせる。この時、石坂の上よりお藤、下りかゝり、この體を見て駈け下り、幸吉を圍ひ

ふぢ　マア／＼、お待ちなされて下さりませ。

權左　こなたは、幸吉が阿母のお藤どの。

ふぢ　番頭樣、幸吉がどのやうな惡戯を致しまして、此やうに

權左　この番頭は佛性、悪戯位なら折檻はせぬが、あなたの懐中物を子供の際に

ふぢ　エ。それはマア大それた……コレ、幸吉、わが身は、なんであなた方の懐を

幸吉　イエ〳〵、何しに私しが、あなた方の懐の物を取りませう。母さん、お前を待つて表に居たのを
あなた方が、太い奴ぢやの、巾着切りぢやのと、告げたのでござりまする

ふぢ　オヽ、それなれば　よい〳〵……モシ、あなた方、この子が申すに違ひござりませぬか。それと
もなんぞ、紛失の物でも

臺藏　イヤ、何も紛失した物は無い。

左仲　イヤ、ある〳〵。

ふぢ　エ、そりや、どのやうな品でござりまする。

左仲　イヤ、品ではない、人間ぢや。お頭の遠藤曾平太どのが紛失された。

ふぢ　エヽ、何を仰しやりますぞいな。

林平　イヤ、幸ひあの八卦置きに、頭がどこへ紛失されたか、占つてもらつてはどうでござらう。

臺藏　イヤ、こいつは奇妙々々。

ト三人は八卦小家の内へ入る。お藤、こなしあつて

ふぢ　年端もゆかぬ者を可哀さうに、盗みするとは大事の詞。お前様にも似合はぬ、御麁相でござりませう。

權左　成る程、お內儀、腹の立つのは尤もだが、この番頭が折檻は、使ひに出て道草をくつてゐるゆゑそこでマア今のやうに

ト氣の毒なるこなし。

ふぢ　イエモウ、あなたの折檻なされまするは、そりやモウ當り前の事、少しもお恨みとは存じませぬこの上にも、悪い事がござりましたら、どのやうにも、お叱りなされて下さりませ。ホヽヽヽ………モシ、今日はこの幸吉に、ちつと申して聞かせたい事もござりますれば、少しの間、どうぞお暇を

權左　ようござります。ちつとの間なら番頭が呑み込むワ。コレ、幸吉、阿母の乳を呑んでしまつたら、早く歸れよ。

ト此やうな事を云ひながら、權左衛門、石坂の上へ上がる。お藤、いろ〳〵と幸吉をいたはり

ふぢ　コレ、幸吉、どこも痛みはせぬか。可哀さうに、あの番頭どのも、餘ッぽど意地の悪さうな。ほんに、幸吉や、其方に喜ばす事がある。其方、お顔は知らぬが、常々話して聞かせる、別れた父さ

んに、今日逢うたわいの。

幸吉　そりや、どこでお逢ひなされました。わしもお目にかゝりたうござります。

ふぢ　今に其方にも逢はせやうが、父さんはお主のお爲、大事の寳物を詮議せねばならぬ。この金高も大枚な事。夫といひお主のお爲。わしが眉目形でもよいものなら、又の奉公してなりと思へども、今となつては仕樣もなし。ほんに儘ならぬものぢやわいなう。

ト投げ首して思ひ入れ。幸吉、これを聞き

幸吉　お前といひ、父樣が、それ程までに御苦勞なさる樣子。どれ程の金高でござります。

ふぢ　數も大枚百兩あまり。せめて半金なりとも……アノ其方の奉公してゐやる内には、金もたんとあるであらうに……ほんに、わしとした事が、子供を捕へて、此やうに役にも立たぬ事。今も今とてあのやうに、盗人呼はり。怪我にも人の物など、欲しいと思ふ心を出しやんなや。

幸吉　コレ、母樣、その金は、急にいるのでござりますか。

ふぢ　ハテ、異な事を根問ひする子。急などころか、今宵か明日の朝までに

幸吉　エ。

ふぢ　ほんに優しい其方、よう苦勞にしてたもるの。今日父樣に逢はせたうは思へども、又あの番頭の

意地悪がやかましからう。この頃に旦那へ願うて、一日お暇を貰うて、ゆつくりと逢はせうほどに、今日はマア歸りや。今のやうな無法者が居やうも知れぬ。長町筋まで、わしが送つてやりませう。

ト幸吉、苦勞の思ひ入れあつて

幸吉　今宵のうちに、どうぞして

ふぢ　ヤ。

幸吉　そんなら、母樣。

ふぢ　サア、おぢやいの。

ト鰐口の音、合ひ方になり、おふぢ、幸吉を連れて下座へ入る。大拍子になり、向うより角左衛門、羽織袴、大小、半股立ち、疊んだる箱提灯を持ち出て來り、花道にて

角左　若殿樣のお歸りは七ツ半時、その時分に迎ひに來いと、お旦那喜惣兵衛どのゝ云ひつけ。日ざしも、やう／＼七ツ前。お屋敷を早う出たも、ちよつと親人の宅へ立寄り、御病氣の容態も聞かう爲。

ト舞臺の八卦小家を見て、こなしあつて

今日は慥かに親人には、持病の起り日ぢやが……矢ッ張り見世を出してござるか。ヱヽ、コレ、内にござつて、薬でも立てつけて服まつしやればよいに、いくら云つても、成る程、年寄りといふものは、情の剛いもの。ひよつと月代にでもなつたなら、どうせうと思はつしやなか。ちつとは悴の心にも、なつて見さつしやればよいに……アヽ、コレ、夕風が冷々として来たッ。こりや無理にも宿へお連れ申して

　　トつか〱と花道の附け際まで来り、こなしあつて

イヤ〱、お心に逆らうては、却つて不孝。マア〱、それは気任せにして置いて、腰でも叩いて進ぜようかい。

　　トこなしあると、八卦小家の内にて

皆々　うしやアがれ〱。

　　ト曽平太、喜惣兵衛、臺蔵、左仲次、林平、伴助。玄龍を引ッ立て、出てくる。角左衛門これを見てあわてゝ

角左　マア〱、何か様子は存じませぬが、御免なされませ〱。こりやマア親人には、なんの越度で此やうに。

喜惣　わりや新參の、身共が家來の角左衞門。この宅間玄龍を、親人と云ふからは

作助　ハヽア、そんなら若黨角左衞門どのは、この辻八卦の

三人　御子息樣か。

曾平　何奴が親か知らないが、この親仁こそ當世無双の偏屈者。我れ〳〵が武士道の立たぬ事ゆゑ、かねがね其方が手練を見込み、武士が手を下げ折入つて、賴む一儀を空うそぶき、承引いたさぬのみならず、この曾平太を嘲弄いたす憎くき老ぼれ。

喜惣　まつた身共は、今日お供申したる、主人の若殿逐電ゆゑ、いづれの方か方角を、占へと申しつけしに、易を賴む身共が、氣に入らぬなぞと申して、算木も置かぬ慮外な親仁。

曾平　一旦武士が賴んだ一儀。成らぬと申して、その分で濟まさうか。もうこの上は、刀にかけて

喜惣　成るか、成らぬか

皆々　返答聞かうワ。

ト柄へ手をかけるを、角左衞門とめて

角左　サヽ、樣子を承りますれば、あなた方が皆御尤も。何を申しましても、年寄りまするると、兎角偏屈になりまして……マヽ、お腹も立ちませうが、お待ちなされませ。私しめが、親人にとくと

申し聞けまして

ト皆々をなだめる。玄龍、此うち思ひ入れあつて

玄龍　悴、留めるな、捨てゝ置け。月を重ねし癪の病、病みほうけたる老の身でも、花盛武士の[illegible]、ら刃金、この玄龍の目からは竹篦同然。したい儘のはてゝんがう、させて置け、コレ、お侍ひ、易は聖人の道。その身正道に頼まるゝ事なれば、善悪の道も分けて進ぜる。また其方のお若いのが頼まつしやる事も、そりやハヤ、侍ひの道に叶うた事なれば、年こそ寄つたれ定間な龍、たとへ相手が鬼神でも、頼まれて進ぜないものでもないが、二人が二人、揃ひも揃うた無道な侍ひ。この玄龍は不承知ぢや。

角左　アヽコレ、親人、それではこの場の

玄龍　よいワ／＼。アタ鈍くさい。コレ、餘所を聞いて見さつしやい。

ト癪の起りしこなしにて、よろしく思ひ入れ。

喜惣　うぬ、病みほうけて、五體もきかぬその癖に、我れ／＼を嘲弄するその一言。

會平　面の憎くい老ぼれめ。

皆々　その息の根を留めてくれうワ。

ト皆々立ちかゝる。角左衛門あわてゝ

角左　アヽモシ、お腹立ちは、御尤もではござりまするが、何を申すも老人の事。只管に御容赦を

ト皆々を留める。立廻りに、角左衛門の履きし中抜きの草履、片々脱げる。喜惣兵衛、それを取上げ

喜惣　おのれがやうな慮外者には、この泥草履が相應ぢやワ。

ト玄龍に打つてかゝる。角左衛門これを留める。立廻りにこの草履、石坂の上へ飛ぶ。皆々思ひ入れ。

伴助　ヤア、草履がどこへか。

曾平　エヽ、面倒な。その老ぼれめを、そこへ引出せ。

臺藏　サア、老ぼれめ、そこへ出ろ。

ト慄うてゐる玄龍を、伴助臺藏左仲次林平、引附ける。角左衛門寄るを、喜惣兵衛引附けて

喜惣　コリヤ、身共は主だぞ。びくしやくするな。

曾平　サア、この上は、慮外を吐かした老ぼれめは、この遠藤が一料理。

ト曾平太、拔きかける。この時、石坂の上に千右衛門、大杯の中へ、以前の草履の入つたるを持ち、出て來り

千右　お侍ひ、待たつしやい。

林平　廣言ひろぐ息の根を

左仲　ぶツとめてくれないか。

　　ト三人、千右衛門にかゝるを、一人々々投げのけ

千右　役にも立たぬがらくためら、腕立てひろぐと叩き殺すぞ。

　　ト尺八を振りあげる。皆々這々に後へ下がる。

曾平　重ね〴〵の慮外者。もうこの上は

喜惣　身共が相手に。

　　ト兩人　左右より拔きかけるを、角左衛門とめて

角左　マア〳〵、お待ちなされませ。旦那樣、私しめが、あの町人の相手になりませう。

喜惣　そんなら見事其方が

皆々　あの千右衛門の

角左　相手になつて、お目にかけませう。

　　ト皆々思ひ入れ。角左衛門こなしあつて、千右衛門の側へ行き、ベッタリと座り、手を突き

さて〳〵、存じ寄らぬ事ながら、其許の御立腹は御尤も至極、なんと申さうやうもござりませぬ



が、全く求めて致した儀ではなく、物のはずみにか、思ひがけなき無禮の段、何分にもお赦しあるやう、幾重にも其許の、膝を抱へねばならぬ仕儀、相成りませう事なれば、何卒御容赦の程を

千右　これサノヽ、お侍ひ、こなさんの詫び事を受けやうといつて、持ち出した杯ではない。殊には又其やうな神妙な人を、決して相手には望まぬ極印。相手にするのはどこまでも、そこにまごつく二人の侍ひ。

角左　サ、そこを只管、御勘辨をお願ひ申す。侍ひの數ではござりませぬが、痩せても枯れても、兩腰を挾む私しが、斯樣にお詫び申す程に、成らぬところを幾重にも

市右　勘辨してくれろと、百萬だら云つたとて、高の知れた徒三ぴん、小一朱一つの才覺も……イヤ、相手にするのは、高祿取りの二人の侍ひ。大身でありながら、詫び事するならするやうに、なんとか轉んで來さうなものだな。

ト思ひ入れ。角左衛門、市右衛門を見て、こなしあつて、石段を上がり、市右衛門の側へ行き

角左　見受けますれば其許にも、あの極印どのとやらの、御同役さうにござるが、只今お聞きの通りの仕儀、何分にもあの方の前を、お執成し下さるやう。

市右　否だ。知らない。

角左　ハテ、左様に云はれずと、幾重にも貴殿を、お頼み申しまする程に、極印どのが御勘辨の儀を、お取持ち下さるやう……これはしたり、どうぞ偏へに

ト袖に縋る市右衞門、煙草の煙を吹きかける。角左衞門、思ひ入れあつて

サア、其許の腹の癒るやう、身共を如何やうともなされた上、何分とも御勘辨のあるやう

トまた袖に縋るを

市右　エヽ、小うるさい、この三ぴんめ。

ト持つたる煙管にて角左衞門の眉間を打つ。これにて額に疵附く。角左衞門思ひ入れ。皆々見て

曾牛　なんの事だ。口では立派に極印が、相手にならうと請合ひながら、あやまりたつぱいするさへあるに

皆々　ぶち割られたる眉間の疵。

喜惣　エヽ、役に立たずの腰抜けめが。

千右　イヽヤ、腰抜けは田川喜惣兵衞。家來の疵は主人の大恥。これでも相手にならねえのか。

ト思ひ入れ。此うち玄龍、始終俯向いてゐる。この時、角左衞門の額の疵を見て、思ひ入れあつて

玄龍　ヤイ、伜、爰へ來い。

ト角左衞門、悄々と玄龍の側へ行く。玄龍こなしあつて

コリヤヤイ、侍ひたる身は、果し狀の返事遲きさへ、恥とするは刀の手前。それになんぞや、放蕩無頼の町奴に、面を打たれし眉間の疵、血を見ながらもオメ〳〵と、其まゝ差置く卑怯者。親が流儀の一子相傳、吉岡流の印可の太刀は何の爲。親が病苦を救はんと、一季半季の奉公稼ぎ、よしない人を主人に取つて、わりや性根が、なまり居つたな。

角左　アイヤ、何しに性根がなまりませう。東西分かぬ砌りより、北も南も木刀の、先で覺えし角左衞門。拙者もあなたの實の悴、鯉口切らば五人三人、血の雨降らすは瞬くうち。

玄龍　オヽ、潔い〳〵、サヽ、親が太刀筋見物する。見ン事相手を、この場に於て。

角左　イヤ、切りますまい。

玄龍　そりや又なぜ。

角左　親人、あなたの爲に。

玄龍　ナヽ、なんと申す。

角左　お年の上とはいひながら、長々の瘧の御病氣、御全快あるやうにと、神へ誓ひのこの鯉口。

ト刀を拔き出して見せる。小さき守り札にて鯉口を留めてある。玄龍、これを見て

玄龍　ムウ、その鯉口を寸にて、留めし倅が心底は。

角左　侍ひたる身が刀の鯉口、神符を以て留め置きまして、まさかの時はオメ〳〵と、首さしのべて討たるゝ心は、親人の病苦を救はせ給へと、我が一命を祈誓にかけたる神への心願。ナニこれしきの恥辱はおろか、たとへこの上人前にて、なぶり殺しにあふとても、それこそ望むこの身の大願。さら〳〵無念なとは存じませぬ。

玄龍　オヽ、出かした。愛い奴ぢや、と申したいが、ヤイ倅、そりや孝行に似た不孝といふもの。生先ある若者の、武士のすたるを何しに親が喜ばう。もう餘命もないこの親を、庇ひ立てしようより、サヽ、其方が武士を、この場で立てろ。

角左　アイヤ、この儀ばかりは親人の、お詞背くも神への心願、なか〳〵誓ひは破れませぬ。

ト千右衛門こなしあつて

千右　ハテ、腰抜け武士には惜しい御家來……サア、二人の侍ひ、慮外ひろいだ杯の、この納まりは、どう附ける。

市右　高祿取りのお侍ひ、相手になるのが恐ろしくば、慮外の詫び代、御大身、どうかもくの附けやうもありさうなものだな。

く じ 日 塲 の





曾平　ムウ、すりや、金子にて扱へと
市右　白では云はぬが、其方の胸に。
喜惣　そりやハヤ、何より易い事。それにてこの場が納まるなら、直さま金子差出さう、と申したいが
罷りならぬ。たとへ武士道は捨てるとも、身共少しもいとひ申さぬ、譬への武士の名よりも得。
遠藤どの、いづれも、斯様な所に長居は無益。
千右　イヤ、この杯の、納まり附かぬ其うちは
市右　貧乏ゆるぎもさせはしまい。
喜惣　その納まりも附けてやらう。
千右　して、この杯の納まりは。
喜惣　ヤイ、角左衛門、おのれには暇をくれたぞ。
角左　すりや、私しにお暇を
喜惣　身共が家来でないならば、草履の主の角左衛門、踏むとも蹴るとも殺すとも、其方達の腹の癒る
やう、勝手におしやれ。
女龍　悴が暇は、此方から望むところ、それで身共も心の安堵。

千右　返す〲も卑怯な侍ひ、その兩腰は何の爲。ハテ、張合ひのない二本棒。

市右　慮外ひろいだ詫び代も、それなりけりで、歸るのか。

曾平　返す〲も我れ〱が、遺恨重なる雁金組。

皆々　この仕返しは

千右　何がどうした。

ト尺八を持つて立ちあがる。

喜惣　爰らが卽ち兵法の

曾平　成る程、奥の手。

ト皆々コソ〱と花道へ行く。

市右　ざまを見ろ。

ト大拍子になり、喜惣兵衞、曾平太、臺藏、左仲次、林平、向うへ、伴助は下座へ入る。角左衞門、玄龍、顏を見合せ、思ひ入れあつて

角左　親仁樣、もうお歸りなされませぬか。

玄龍　悴、其方も歸るか。

角左　御同道いたしませう。

玄龍　すりや、どうあつても、相手は此まゝ。

角左　モシ、お手を引きませう。

ト角左衞門、玄龍の手を取る。玄龍思ひ入れあつて氣を替へ、兩人、花道へ行く。千右衞門、こなたあつて

千右　年は若いが、辛抱強いお侍ひ。あつたら武士へあのやうに

市右　疵を附けたも忠義の爲だ。

玄龍　男を立てると思ひの外、喧嘩に事よせ金銀を、貪り取らんむさい根性。

角左　親の病氣でないなれば、ナニ安穩に、相手を此まゝ。

ト思ひ入れ。

玄龍　伜、疵は痛みはせぬか。

角左　ハテ、命冥加な

玄龍　ヤ。

ト角左衞門、フツと氣を變へ

角左　ナヽ、參りませう。

ト時の鐘、靜かなる大拍子にて、兩人向うへ入る。この時下座より、左助、喜八、出て來り

喜八　コレ〳〵、市右衛門どのが、爰に居た〳〵。

左助　モシ〳〵、番頭がお前に逢ひたいとて、ぐれッ返して探してゐますヮ。

市右　ナニ、番頭がおれを探してゐる。

喜八　あの質が流れに出たによつて

市右　エヘン〳〵。

ト思ひ入れあつて

コレ、極印、おらアちつと爰に用があるから、おぬしは浮無瀬へ行つて、飲んでゐるがよい。

千右　成る程、文七や清兵衛が、さぞ待ちかねて居るであらう。そんなら布袋、おぬしも後から、

市右　用さへしまへば、爰から直ぐに

千右　ドリヤ、行つて飲み直さうか。

ト大拍子になり、千右衛門、石坂の上へ上がつて入る。

市右　コレ、人の聞く所で、ちつと氣を利かせて物を云やアがれ。

ト叱り散らす。下座より權左衛門出て

權左　こなたは德次郎どの、イヤ、大さうに探したよ。

市右　さうだといふ事だが、コレ、德次郎といふ名は、滅多に云つてもらふまい。

權左　そりやァ云つて悪い事なら云ふまいが、いつぞやこなたが入れた定家の色紙、もう月が切れたによつて、外へ賣つてしまふから、この事をちよつと斷わらうと思つて。

市右　コレ〳〵、番頭、どうして〳〵、あの色紙を、外へ賣られてなるものか。持つてゐれば、大金になる代物。百兩ばかりで流してしまふは、あんまり殘念だ。もう二三日のところを待つてもらひたい。

權左　どうして〳〵、あの質ばかりは待たれぬ、といふ譯は、薄々聞けば色紙の出所、あんまり明るい代物でもないといふ事。持つてゐて、ひよんな苦厄介を引受けやうより、一日も早く賣つてしまふが、此方も勝手サ。

市右　ナニ、おれが置いた代物に、出所が暗いのと、そんないさくさがあるものか。

權左　イエ〳〵、無氣味な代物だといふ事を、聞きましたよ。

市右　エヽ、この男も、誰れに聞いたか、馬鹿正直な。そんな事を云はずと、是非二三日

權左 待たれやせぬて。

市右 そんなら利上げをしませう。

權左 置き主のこなさんが利上げをすれば、流されもせまいが、利上げといつたところが、十兩も入れねば、留めて置かれませぬよ。

市右 いゝよ、承知だよ。

權左 そんなら、サア、十兩受取りませう。

市右 今やるのか。

權左 金が無ければ、早速お流れサ。

市右 エヽ、たうとうおれを裸にしやァがる。

ト市右衞門、手早く帶を解き、襦袢一つになり

サア、これを利上げの方にやる代りに、何奴が行つてせぐつても、おれが置き主だと云ふと諾かねえぞ。

權左 こなたもそれを幾度斷わる。この番頭は、まだ老ぼれはしない。コレ〳〵、これを風呂敷へ包んで脊負つて歸れ。

左助　成る程、男達といふものは、氣前のいゝものだ。

ト市右衛門が身ぐるみを大風呂敷へ包んで背負ふ。喜八、脇差を持ちかけ

喜八　ハヽヽヽヽ、五人男も、たうとう裸が一人出來たやつサ。

左助　モシ、番頭さん、布袋にしては小さな腹だね。

喜八　さうして、さつぱり笑はない。

權左　馬鹿を云へ。笑ふのは閻魔樣だ。布袋といふものは、昔から腹を立てゝゐるものだワ。

市右　エヽ、人の氣も知らねえで、無駄を云やアがるな。

權左　ソレ見た事か、腹を立つたワ。

ト大拍子になり、三人、足早に向うへ入る。よき時分よりお藤、後の方に樣子を見てゐて

ふぢ　こちの人、市右衛門どの。

市右　嚊ア、そんならわりやア、今の樣子を

ふぢ　アイ。

市右　アイぢやアねえワ。亭主の裸にされるのを、見てゐる女房があるものか。アヽ、寒くなつた。コレ、その着物を一枚貸せ。

ふぢ　サア、貸してもあげうが、今も今とて様子を聞けば、お主の家のお宝も、元はお前が

市右　やかましいわえ。脱ぎやアがれ。

ト無理にお藤が帯をほどき、上着を一枚脱がせて、それを着て、お藤が下締を帯にする事。此うちお藤、市右衛門の顔を見て、呆れたるこなしにて、手早く自分も帯を締め、ツカ／＼と寄つて市右衛門の胸ぐらを取る。

エヽ、何をしやアがる。

トこなし、よき時分より作助、窺ひ出て、市右衛門が姿を、つく／＼見て

作助　男達には稀有な形だな。

ト思はず市右衛門が側へ寄るを、市右衛門「エヽ」と殴り倒す。作助、見事にかへる。此はずみにお藤、ベツタリと下にゐる。この途端、木の頭。

ふぢ　エヽ、お前はなア。

トこなし。市右衛門、手拭をグル／＼と頭へ巻き、肩にて笑ふ。これをキザミにて、よろしく、ひやうし

ト双盤のツナギにて、引返す。

幕

二幕目

長町裏の場
浮無瀬の場

役名――雁金文七實ハ結城友之助。安の清兵衛實ハ里見圭水。極印千右衛門實ハ眞間田甚三郎。易者、宅間玄龍。遠藤曾平太。大坪臺藏。關口林平。村瀬左仲次。白船の長右衛門。田川喜惣兵衛。同、奴作助。料理人、六兵衛。太鼓持ち、卒八。若い者、ない八。野田角左衛門。

本舞臺、正面黒幕、日覆より松の吊り枝、鍍金の半月を引出し、舞臺上手へ寄せて繪心に高札場、下手藪疊。爰に臺藏、左仲次、林平、以前の形、大小、尻からげ、頬かむりにて立ちかゝりゐる見得。
時の鐘にて幕明く。

臺藏　なんと左仲次どの、今日新清水で恥辱を取りし曾平太どの、その恥を雪がんと、我れ〳〵ども朋友のよしみ、彼の老ぼれを釣り出して、バッサリやる互ひの手筈。

左仲　左やう〳〵、たとへ如何なる手利にもせよ。高が老ぼれ、なんの手間隙……併しながら、もう曾平太どのも見えさうなもの。

林平　さればでござる。……併し、この川添ひは一筋道、外へ廻らう氣遣ひはござらぬて。

し不覺を子の恥として、親の慈ひを引出すうつけ。それに引かへこの年月、二君に仕へず義を守り、古主を捨てぬ某に向ひ、逆意を起す不仁の振舞ひ。

曾平　サア、敗賊の身を以て、無禮な繰り言、その息の根を止めてくれるワ。

玄龍　イヤ、その舌の根を斷ち切つて

曾平　何を小癪な

ト曾平太また切りつけるを、玄龍あしらふ立廻り。曾平太、透を見て切つて行くを、玄龍、身をかはし、曾平太の肩先を、したゝかに切り下げる。曾平太、其まゝ倒れるところを玄龍、のしかゝつて止めを刺す。時の鐘にて、向うより角左衞門、小提灯を提げ出て、草履の鼻緒の切れしを直しながら

角左　エヽ、急げば廻ると折も折、草履の鼻緒が切れたるも氣がゝり。御老體のその上に、御病身の親人樣、どうぞ何事も無ければよいが。

ト云ひながら舞臺へ來て、提灯にて血汐を透かし見て

角左　ヤヽ、夥しいこの血は

ト玄龍、透かし見て

玄龍　さういふ聲は、忰ぢやないか。



角左　あなたは親仁樣。して、この死骸は。

玄龍　身を待ちうけて騙し討。是非なくこの場で仕止めてくれた。

角左　そんならあなたが

　　ト此うち玄龍、思ひ入れあつて、我が腹へ刀を突ッ込む。角左衛門、恟りして

ヤヽ、こりや親人樣には、何ゆゑに。

玄龍　切腹なしたは汝が爲。

角左　ナニ、拙者が爲とは。

　　トあたりの死骸を見て

見れば餘人を害せし樣子。モシ、親仁樣。エヽ、聞えませぬ。遺恨か無禮か存ぜねども、御料簡ならざる儀にて、討ち果せしは是非なけれど、御切腹とは日頃に似合はぬ、早まつたなされ方。現在忰の私しへ、一言なりと御相談下されなば、親に代るは子の習ひ。御老病のあなたのお體御大切と存ずるゆゑ、神へ誓ひの鯉口に、札を附けたる立願も、何の爲と思し召します。先程も面體へ、疵を附けられ、侍ひの、ヂッと辛抱いたせし事も、今々思へば皆無駄事。モシ、親仁樣情ない事して下さりましたなア。

玄龍　サ、その面體の衰ゆゑに、身が切腹は、みな其方が爲。

角左　エヽ、なんと仰しやりまする。

ト竹笛入り、合ひ方になり

玄龍　この年月の憂艱難、浪人せしも、今討ち果せし彼れが業。どうで命を捨てる果、世に便りなき親一人、忰といふては其方一人。結城家代々、吉岡流の劍術師範、これまで人に手を下げぬこの玄龍、その忰の其方が、清水にての今日の恥辱、親の病氣の立願とは、世間の人はよも知るまい。一生人の笑ひ草。身共はこの世に生きてからが一二年。其方はまだ〳〵登り坂。玄龍が忰角左衞門、臆病者の名を取つては、生涯削るに削られぬ、よしなき願掛け致せしも、親があるゆゑその身の不覺。親が死すれば願掛けも、足手まといも何もない、一本立ちの角左衞門。不法無禮の五人の奴原、一々切つて、今日の恥辱を雪いでくりやれ。

角左　すりや、私しが一分を、立てさせん爲の御生害。ハヽア、親の心子知らずとは、思ひ當りしその御慈悲。御病氣平癒なさしめんと、拙者が愚昧な心から、抜かぬ刃に親に親を害す、子は下ろさねども親殺し。聊か親へ孝行と、思ふ心が皆不孝。立願かけし神にさへ、見放されたる罰當り。思へば〳〵我が心が、我が身の敵か。エヽ、死なしたり、口惜しい。

玄龍　イヤ、願掛け致す孝行より、五人の奴等を討ち放し、天晴れ宅間が悴角左衛門と、云はるゝ噂を未來へ聞かすが、この上も無き其方が孝行。まだその上に、心苦しき一つの思ひ。古主の結城に秘めある寶、定家の色紙紛失にて、鎌倉どのゝお咎め嚴しく、若殿はじめ家出なし、いま詮議最中と聞く。何卒右の寶をば、詮議仕出して歸參の種と、思ひ附いたる陰陽師も、ほんの身の上知らずとは、今の我が身に當りし諺。其方、寶詮議仕出し、再び野田の角左衛門、吉岡流の家を起しなば、忠孝兩道傳ひの、道も立てぬく天晴れ手柄。

角左　ムウ、有り難き思し召し。五人の奴原討つて捨て、我が身も共に冥土まで、お供申さん所存なるに、かゝる大事を承る上からは、粉骨細身いたすとも、御存念を達し申さん。さはさりながら現在の、親を見殺し剩さへ、多くの人を殺害なさば

玄龍　サ、それゆゑ某この所で、よしなき奴原殺害なせしも、人殺しは皆この親が命一つ、身に引受くれば、氣遣ひ無用。

角左　でも親人に科人の、汚名を取らすも

玄龍　ハテ、人を害して刃に死するは、武士の家には珍らしからず。其方はこれより少しも早く、今日の仕返し、必ず後れを取らぬやう

角左　仰せにや及ぶべき。親人の御生害も、元の起りは五人の奴原、目前親の敵も同然。たとへ千萬の惡者なりとも、五人の首を並べん事、つばな摘むより易き事。お氣遣ひ下さりますな。

玄龍　ムウ、流石は悴角左衞門。サヽ、少しも早く

角左　これより直ぐに

ト この時、左仲次起きあがつて

左仲　人殺し。

ト角左衞門に組みつく。角左衞門、左仲次の手を捻ちあげ

角左　ア思へばよしなき立願にて、神へ誓ひし札守。刃の封も

玄龍　切つてしまへば

角左　五人の奴原、まツこの通り。

ト左仲次を抜討ちにポンと切る。玄龍、タヂ〳〵となる。

玄龍　出かした悴。ハテ、潔い。

角左　親人樣、これがこの世の

玄龍　未練な事を……はや行け。

角左 ハツ。

ト ごんの送りにて角左衛門、愁ひのこなし。玄龍、落入る仕組みよろしくあつて、角左衛門、逸散に向うへ入る。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、中足、本緣の屋體、向う塗り骨の障子、欄間に浮無瀨と書きし額を掛け、軒口に丸提灯をかけ、上下に四ツ目垣、これに皐月、芽出しの紅葉などの植込み。上下ともに風雅なる枝折り戸よろしく飾りつけ、流行り唄にて道具納まる。

ト 爰に長右衛門、以前の形にて、料理人の六兵衛を捕へゐる。お辰、お春、いづれも仲居の形にて、これを留めてゐる。卒八、太鼓持ちにて、同じく留めてゐる。

卒八 モシお前さん、五月の節句ぢやあるまいし、大聲をあげて、どうしたものでござります。

ト 留める。

仲居 マア〳〵、御料簡なされませ〳〵。

長右 イヤ〳〵、料簡ならぬ〳〵。コレ、おのれらも大阪者ぢやないか。それに所の者の贔屓はせいで東の果の江戸からうせた、五人男を大事にさらして、大阪でどえらい男達と、名を聞いてさへ人

の恐るゝ、白船の長右衛門がお遊びなさるゝに、この座敷へ上がらうと云へば、骨切りたやの、痰切りぢやのと、分け隔てをしくさるが、ぐう／＼と胸が悪いぞ、けたいが悪いぞ。へけたれめが。濟まぬぞ／＼。

六兵　アヽ、モシ／＼、なんぼお前が調子がよいとて、さう耳の側で怒鳴りつけられては、耳の宿替へに、小豆粥でも炊かにやなりませぬ。マア、お靜かになされても、譯の解る事でござります。

卒八　それに當時若手揃ひ、玉川上水、江戸で産湯の東ッ子、上方三界お上りの、その方人の男達は、氣立がよくつて程がよし

六兵　それ／＼、それに第一、お拂ひが早くつて強くつて、底に情のあるお方。當時での切れ手といふものだから、鬼に鐵棒、どこへ行つても通りがいゝのサ。

はる　それにマア、貸切りのお座敷へ、外のお客を上げ申しては、大抵むづかしい事ぢやござんせぬ。して見れば、こちの内の難儀でござりますわいな。

たつ　さうでござんすとも。音に聞えた江戸さん方、東のお方がきかぬと云うては、大抵の事ぢやござんせぬぞえ。

はる　お前のやうな男達は、生ぬるうて人が怖がらぬわいなア。

長右 ヤイ〳〵、この衒妻めら。お上かろしめた事をまき出したな。寢粉になつた辛子ぢやないが、きかぬというてはきかぬのぢや。惡く頤たゝいたら、どたま毆りいがめてこますぞ

女二 それ〳〵、その惡態がぬるいわいなア。

長右 なんと吐かすぞ。

六兵 モシ〳〵、お前がなんぼ、男達々々と、手前味噌をあげなされても、年寄りのあもつきで、肝腎の時に役に立たぬぞえ。マア、腹を寢かして、よう聞かんせや。第一が吝嗇漢で、弱くつて、氣がきかないで、程惡るで、その上おまけが此方の内にも、一分二朱ばかり下がりがござりまするが、今以て野面のぼん助。その癖、大風ばかりまき出して、お拂ひなしのすつぺらぼん助。

卒八 腹を立つたところが、脊を立つたところが、それだけの男達、先度も利き酒に出した酒を只飲み逃げ。駈落ち等一切仕り候ふといふお客樣、お前、覺えがござりませうがな。

長右 エヽ、やかましいわえ。金銀は佐渡の蚯蚓の糞、世界の湧き物ぢや。コリヤヤイ、金遣うて男達と云はれるなら、大阪中の金持ちは皆男達ぢや。金が無うても、人に負けぬが、ほんまの男達の生粋ぢやわい。

はる なんぼさう云はしやんしても、金を捨てゝこそ浮む瀬と云ふぞえ。

たつ　切れぬと云うても、お前さん、遣ひ過ぎぬわいな。
はる　それぢやによつて、誰れもお前を
兩人　立てやせぬぞえ。
長右　イヤ、人は立ていでも、おれ一人立てる。今日も新清水で五人の奴等と、一々に出入りして、物の見事にえらい目に
兩人　お前が會うたのかえ。
長右　ヤ、さては見て居たか。
兩人　大方そんな事であらうと思うたわいな。ホヽヽヽ。

ト矢張り流行り唄の合ひ方。この時奥よりない八、若い者の形にて、棕櫚箒を持ち、急がしく出て來り

ない　コレ〳〵。仲居衆、忙がしくなつて來た。彼の五人の達衆樣方が、たつた今爰へお出でなされまする。お座敷を掃除せにやならぬ。

トあたりを掃きながら

コレ、こなた衆も、酒肴の支度でもせぬかいの。

長右　コリヤ〳〵、若いの、そんならなんと云ふ、いま爰へ五人男が來ると云ふか。

ない　乘込んでゝござりまする。

長右　ヤア〳〵、爰へ來ては、堪らぬ〳〵。

六兵　イエ〳〵、お前も云ひがゝり、この座敷にお出でなされませ。

長右　サア、云ひ出した事、後へは引かぬ白船ぢやが、急にひだるうなつて來た。マア、食事してから出入りせうかい。

平八　難波での男達と云はれる長右衞門さま、ひだるうなつたとは、きつい下卑藏。その辛抱では、まさかの達引は覺束なすのお香々、ちやら〳〵無理とは思はれない。

長右　ハヽア、おのれ俳諧を知らぬな。ひだるきは殊に戰の大事なり。

平八　腹がへつたと明ける逃げ道。とは、どうでござえすの干物。

長右　その干物でなと、一杯底を入れようか。

ト立ちあがる。

兩人　と云うて逃げたものかいな。

六兵　コレサ、仲居衆、こんな唐變木に……イヤ、通り者に構はずと、酒肴の用意じもしなせえな。

たつ　ほんに、さうせうわいな。
はる　弱蟲さん、これにゆるりと
長右　なんぢや。
兩人　サア、行かうわいな。
ト矢張り流行り唄、六兵衞先にお春お辰、卒八ない八附いて奥へ入る。あと合ひ方
長右　よし／＼、五人の奴等が、爰の座敷へ來るこそ幸ひ、下家に忍んで今にグッシャリ、ビリ／＼ビリッ。うまい／＼。
ト頷づき、長右衞門、緣の下へ忍ぶ。流行り唄になり、奥より以前のお春お辰、大杯と銚子を持ち、六兵衞卒八ない八、臺の物、雪洞燭臺、莨盆を持ち、跡より文七、千右衞門、淸兵衞出て、二重に住ふ。
卒八　座敷が變れば品を變へ、酒の手管の祕術を盡し
ない　裏切り御順の亂れ飲み、肴あらしに責めよせて
六兵　敵に鰹の勝鬨をさしますぞえ。
ト文七こなしあつて杯を取上げ

文七　コレ〳〵、これが名代の大杯。江戸ッ子が盛り潰されたと云はれては、世間へ立たねえ。もう一つ重ねようか。

千右　それ〳〵、鳴戸梅ケ枝瀧の音、この杯は七合入り、一足飛びに恂り丸で、瀧飲みとやらかさう

清兵　この清兵衞が飲んだる器は、幾世我が脊子君が爲、貝の杯飲み干した。なんときついものか。

六兵　イヤモウ、これまで數多諸方からお出でなさる、酒戰に負けぬ旦那方も、春風といふ六合入りで一つあがるとツイべた〳〵。

卒八　それに引かへ、あなた方は、猩々まであがつても、ちつとも酒の氣も無いやうに

たつ　これでは此方の旦那さんも

はる　一向頭は上がらぬわいなア。

千右　ハヽヽヽヽ、ちつとさうもあらうかい。コリヤ〳〵、もうこれぎりで杯は無いか。

清兵　杯が無けりやア、なんぞ代りに……オヽ、有る〳〵。

ト卒八の持つてゐる烟草盆の火入れを取つて

幸ひ、この火入れをぶちまけて、昨夜からの持越し酒を、灰汁で洗つて惡酒の出現、江戸ッ子の腹綿を、ドレ、洗つて見せべいか。

トこの時、下手より長右衛門は、顔を出してゐる。清兵衛、長右衛門の顔の上へ盃を上てとけと、長右衛門の額、眞白になり、これにて奥へ引込む。

サア、これで始めよう。一つ注ぎやれ。

はる　ちよつと濯いであげませうかいなア。

ト取らうとするな

清兵　イヤノ＼、灰の附いたが、醉が廻るであらう。ワハヽヽヽ。

文七　イカサマ、稻妻のある夜知らせよ四郎右衛門と、談林が浮無瀨の秀逸。また大阪にも洒落があれば あるものだ。時に、布袋や雷はどうした。

千右　市右衛門は後から來る筈なれど、庄九郎は、いま奥で話した通り、長町の彼の質屋へ

文七　アヽ、彼の事を聞きに行つたのか。

ト思ひ入れ。

清兵　それに、わしも、ちよつと頼んだ事があれば、來るとも餘ツほど遲うごんせう。

文七　遲くとも、彼の便りが知れさへすれば、ナア、極印よ。

千右　さればサ、たとへ知れても、急に金が

ト　あたりへ思ひ入れあつて、丼の肴を縁より下へぶちまけ
サア、今度はこれで一杯始めませう……サア、ついだ〳〵。
兩人　きつい事でござんすなア。
ト時の鐘、合ひ方になり、向うより角左衛門出て來り
角左　いま來る道で噂を聞けば、五人の奴等は浮無瀨に居るとの事。内で殺せば家内の難儀、どうぞ外へ呼び出したいものだが。
ト舞臺へ來る。此うち舞臺は、捨ぜりふにて酒盛りしてゐる。此うち角左衛門、枝折り戸の外にて内を窺ひ、白刃を拔き、草履にて寢刃を合はせ、思ひ入れあつて
角左　頼まうござる〳〵。
はる　ハイ〳〵、どなたでござりまする。
ト門口へ出る
角左　ちよつと一杯飲みに參つた。座敷へ案内仕れ。
ト云ひながら、委細構はずズツと通る。
六兵　アヽ、モシ〳〵、此お座敷は、江戸の五人様の貸切り。外の座敷へ、お出でなされて下さりませ

たつ　さうして、私どもでは、お一人のお客はお斷わり申します。苦しうない者だ。
はる　お氣の毒ではござりまするが、お一人ではお客になりませぬ。
たつ　どうぞお歸りなされて下さりませ。
角左　イヤ、苦しうない。五人の男達が借り切つた座敷、身共承知で參つた。
　ト構はず上がりさうにする。
皆々　モシ、それではあなた
　ト留めるを角左衞門、振り切り、上へ上がつて眞中へ撞と坐る。
清兵　ムウ、貴樣は誰れだ。人の借り切つて置く座敷へ、ツカ〳〵と、無遠慮な男だ。サア、立たねえか。立たねえと撮み出すぞよ。
文七　ついぞ見ず知らずの男だが、五人の者の借り切る座敷を
清兵　承知で來たとは合點がゆかぬ。先づその譯から聞かうかい。
角左　譯と申すは此方より、其方にきつと覺えがある筈。
　ト此うち千右衞門は角左衞門の顏を見て
千右　ヤ、こなたは今日新清水で

角左　面體へ疵を附けられた、野田角左衞門」よもや忘れはさつしやるまい。

千右　そんなら今日の仕返しに。

清兵　噂に聞いた出入りの仕殘し。そんならそれでお侍ひが

角左　仕掛けて來たも相手が相手。男の意地と侍ひの

清兵　顔が立たぬと身を捨てに……サ、身を捨てゝこそ浮無瀬の

角左　その獻立は生物の、精進ならぬ太刀の魚。

清兵　なまらぬ刃金の切れ味を

角左　馳走になるか、振舞ふか。

清兵　生死は互ひの運と運。

角左　こりや出入りが

兩人　面白うなつて來たわえ。

トこなし。

六兵　アヽモシ〳〵、こりや係りあひになりは、致しませぬか〳〵。

卒八　どうやら無氣味な事だ。

ト兩人、ウロ〳〵する。

女二　こりや、どうしたらよからうぞいなア。

ト立ちさわぐ。

千右　アヽイヤ、何も氣遣ひな事ぢやァねえ。てまへ達は、マア奧へ

皆々　でも、どうやら爰を

千右　ハテ、此方の內へ迷惑のかゝる事ぢやアねえ。マア〳〵、奧へ。

皆々　ハイ〳〵、兎角よろしうお賴み申します。

ト踊り地の合ひ方にて、皆々、ワヤ〳〵云うて奧へ入る。

角左　見れば、五人のうち、二人は不足なれども、相手は五人の仲間同士、一々に首を並べる。覺悟して、それへ出さつしやい。

淸兵　ムウ、相手になれなら相手にならう。花に風、そこ退きたまへ喧嘩買ひ、喧嘩に花を咲かせるも樣子は知らねど仲間の出入り、買つた思案の淸兵衞が、この達引はどこまでも、存じ寄べく候かしくと、名乘つて出面も江戸生粹、それを見眞似の達入れに、五分でも引かぬ雁金組。一番相手にならうわえ。


雷庄九郎
加賀屋芝翫
三
五渡亭
國貞画

ト立ちかゝるを千右衞門、よろしく留めて

千右　清兵衞、待ちやれ。これには深い樣子のある事。今日の相手はこの極印。この出入りは、おれに任せて……ハテ、おぬしやア酒でも飮んで、見て居やれサ。

トよろしく留めて思ひ入れ。

イヤナニお侍ひ。成る程、こなたは人中で、面に疵を附けられては、男が立つまい。此方も覺えの出入りゆゑ、仕返し合點、さりながら、こなたにかゝつた云ひがゝりといふでもなし、畢竟云はゞ親御とやら、年寄りを捕へて惡侍ひが、無法の有り條、それを見て居て氣の毒と、思つたゆゑに侍ひへ、かゝつた出入りが間違つて、辛抱強いこなさんが、詫びにござつたその時に、そんならいゝワと引かれぬ仕儀。こなたに毛頭云ひ分は

角左　エヽ、默らつしやい。出入りの筋も、喧嘩の譯も、町人同士なら納得いたす儀もあらうが、もうこの場になつて、譯も筋も要つた事ではない。サア、相手にならぬか。

千右　サア、心の急くは尤もながら、見所のあるあつたら侍ひ、男を磨く千右衞門が、手を突いてこの通り、あやまるからは、こなたの男も立ちさうなもの。今日の出入りは此方が惡い。どうぞこなたが勘辨して

文七　これはしたり、千右衛門、譯は知らねど侍ひに、手を突いてあやまつては、江戸の達衆の面が立たぬワ。

清兵　相手が侍ひ武家方ゆゑ、引けを取つたと云はれては、五人ながら男が立たぬワ。その仕返しは眞劍で、切ツつはツつも男づく。是非とも相手はこの清兵衛。

ト　また立ちかゝる。千右衛門、猶も兩手を突いて

千右　ハテサテ、今まで人にあやまらぬ、この千右衛門が、あやまつたと笑はれやうが、非道に命を取るのは無法。惡い事ゆゑ詫びるが正當、これが誠の男達。サ、男が頼む、この場の詫び、當つて碎けて下せえな。

角左　ハヽヽヽヽ、男達々々と、手前極めの町奴、非義働らかぬ正當な、誠の男がなんで又、僅かな事を云ひ募り、金で出入りを扱へがしの詞の端。

千右　ヤ。

角左　それでも男か、達衆の端かゞ行き違ひに喧嘩を仕掛け、揚句の果には金銀を、貪り取る盜人めら生けて置いては世上の難儀。念佛なりと題目なりと、唱へた上で、それへ直れ。

ト　きつと云ふ。清兵衛こなしあつて

清兵　聞いて居られぬその惡口。なんでおいらが盗人だ。サア、それ吐かせ。品によつたら赦さぬぞよ

千右　ア、コレ、そこが間違ひ。只管おれが詫びねばならぬ、今日の出入り。

角左　口ほどにも無き卑怯者。涙をこぼして兩手を突き、御免なされと詫びる事なら、不便にもあり、此方にも、赦してやりたきものなれど、堪忍ならぬと申す譯は、手前の親ども、五人の者へ仕返しさせんと、切腹して相果てたワ。

三人　ヤア。

角左　今日清水にて思ひのまゝ、恥をかいたその上に、面へ疵まで附けられても、その時刀へ手を掛けぬは、親どもが老病、癒やさん爲の願掛けにて、無念を忍ぶ鯉口へ、封を附けたる札守、その辛抱も親どもを、大事と思ふ心から。その大切な親が死んでは、願も誓ひも皆無駄事。お身達が手を下ろさいでも、それから起つた親の生害、なりやコレ五人は、親の敵も同じ事、討たねば未來の親どもへ、云ひ譯立たぬ。

千右　サア、それほど親へ孝行の、こなたと見たゆゑ只管に

角左　今あやまつたとて役には立たぬ。五人の仲間の其うちに、頭とやら、尻尾とやら。サ、相手にならぬか。エヽ、張合ひの無い臆病者めが。

ト側にある火入れを取つて、文七へ打ちつける。これにて額へ疵つく。千右衛門清兵衛、掛りするを文七、キッとなる。

千右　ヤ、若殿様へ疵を附けられては

角左　ナニ若殿とは。

清兵　もう料簡が

ト抜いて角左衛門へ切りつける。角左衛門も、抜き合はせ、立廻りうち、千右衛門は文七ないたはる。角左衛門、清兵衛、立廻つてキッと見得。この時、下家の長右衛門、抜き身を縁の下より突き出してゐる角左衛門、この刀に貫かれ、撞となる。皆々見て、思ひ入れあつて

千右　ヤ、、思ひがけなき下家より

角左　下家に忍ばせ、騙し討とは卑怯の振舞ひ。

トこの聲に長右衛門、そろ〳〵這ひ出て、手負ひの角左衛門を見て

長右　ヤ、、五人のうちと思ひの外、南無三、違つた。

ト逃げ出さうとするを清兵衛、引ツ捕へて

清兵　さてこそうぬは下家に隠れ、何者に頼まれた。


長町の場



千右　なんで下家に踞んでゐた。

清兵　騙し討と云はれては、男を磨く五人の名折れ……サ、眞直に、吐かせ〳〵。

ト　きつと引附けて、こづく。

長右　ア、、申します〳〵。爰を緩めて下さりませ。その頼んだ人といふは

千清　何者だ。それ吐かせ。

長右　その頼み手は、アノ、誰れでもねえ……ムウ、斯うぢやワ。

ト　また逃げようとする。立廻つて清兵衛、長右衛門をポンと當てる。長右衛門、悶絶する。角左衛門苦痛の體。

千右　ア、コレ、思はぬ間違ひ、その深手は

清兵　とても存命覺束ない。

角左　倶不戴天の父の仇、せめて一太刀

ト　よろ〳〵しながら文七にかゝる。ちよつと立廻つて

文七　不便ながらも、この世の暇。

ト　鳴り物、所作の切れにて、兩人立廻りのうち、千右衛門は眞中にて兩人の刀を取り合ひ、廣蓋にて

押へる。この時、長右衛門、起上がり、切つてかゝるを清兵衛、文七、刀を打ち落し、又かゝるを脇腹へ刀を突ッ込む。長右衛門「ソア」と立ちすくみ、苦しむ事、双方より〳〵して、清兵衛、長右衛門を切りふせる。

千右 二人ともに、マア〳〵、待つたり〳〵。

文七 千右衛門、そこ退け〳〵。

千右 イヤ、あなたにお怪我ある時は、これまで盡す心も無駄事。マア〳〵、その刀を納めて下さい若旦那……コレ、お侍ひ、斯うなるからは是非に及ばぬ。この極印の千右衛門さへ、掛替へのない命を捨てゝも、文七どのゝ身の上は、どこがどこまで庇はにやアならぬ。おれが相手だ。

ト角左衛門、よろめき〳〵切りかけるゆゑ、文七、ちよつと立廻り、清兵衛、角左衛門をいたはり

清兵 アヽ、コレ〳〵、二人とも、マア〳〵待つた……エヽ、さりとては待たつしやれ。

トよろしく思ひ入れあつて

コレ〳〵、この二人は大事の體。何方に怪我があるとても、日頃の望みも叶はぬぞや……コレ、お侍ひ、苦痛を堪へて下されい。人に洩らさぬ大事ながら、打明けるのも互ひの爲だ。

ト角左衛門、立ちかゝらんとあせるを、ヂッと留めて

コレ、苦痛を堪へて、聞いて下さい。

ト合ひ方になり

これなる雁金文七どのは、結城の若殿友之助さま、又この極印の千右衛門は、その家來の、眞間田甚三と申す者。この度計らずお家の重寶、定家の色紙紛失。鎌倉殿の御懇望ゆゑ、日を切つて詮議の爲、小見川傳藏とこれなる甚三、友之助どのへ附添うて、町家に交り諸所方々、件の色紙詮議の爲に、この年月の千辛萬苦……この清兵衛も結城と違緣、浪人ゆゑに共々に、力を添へる

も武士の金鐵。

ト千右衛門も思ひ入れ。

千右 今日、新清水で、市右衛門の女房が、長町の質屋に、件の色紙が、百兩の質物に、入れある事を聞きしゆゑ、これを見屆け、今日明日は、人手へ渡る絶體絶命、その金の才覺ゆゑ、清水にての喧嘩仕掛けも、相手が大身の侍ひと見たゆゑに、金と轉んで色紙の質請け、忠義ゆゑの横しま事。心を知らぬこなさんゆゑ、この千右衛門へたつての詫び事、氣の毒ながら引かれぬ譯は、金にせんとの右の次第、藪に萬鍬もこなたの因果、親御の切腹、猶更に、憤りも尤もゆゑ、晝間詫びたるこなさんが、この詫び事も聞かぬは道理。さりながら、科なきこなたを、殺す所存は毛頭

ござらぬ。縁の下に忍びゐたは、察するところ我れ〳〵へ、意趣ある者の人違ひ。たゞ何卒も忠義の爲と、推量してお侍ひ、料簡附けて下されい。

ト これを聞いて角左衞門、張り詰めし氣のゆるみし思ひ入れ。

清兵 委細の樣子は聞かれる如く、こなたが親御へ孝行も、千右衞門が主人へ忠義も、落ちる所は皆一つ。爰の道理を聞分けて、あるにあられぬ間違ひの、深手ながらも急所は除けた。養生加へて生き長らへ、親御の名跡立てゝ下され。

ト 角左衞門、チツと顏を上げ、思ひ入れあつて

角左 その孝行も追善も、長らへ果てぬ不忠者、親へ不孝のこの身の因果。とても存命思ひもよらぬ。

千清 とは又なぜに。

角左 雁金組の頭といふは、結城の若殿友之助さま、さうとも知らずお手向ひ、不忠者の某ゆゑ。

文七 我が本名を聞くと其まゝ、存命ならぬと申すのは

千右 これには何ぞ

三人 深い樣子の

ト 角左衞門、思ひ入れあつて

角左　様子といふは拙者が誤り、知らぬ事とて古主の若殿、疵を附けたる罰あたり、廻り廻つて親と子が、長らへ果てぬも因果の道理。片輪車の世に立ちし、例し少なき傾むく運命……ア、、人間の榮枯は、あざなへる繩の如しと、拙者が親は結城家に劍道師範、野田角左衞門と云ひし者。遠藤嘉太夫が讒言にて、お屋敷を追放、その砌りは、拙者は未だ三歳の折なれば、物辨まへは無かりしが、浪人のうち親どもは、宅間玄龍と名を改め、二君に仕へず、時節あらば、古主の結城へ歸參の願ひ。然るにこの度お家の寶、定家の色紙紛失を、ほのかに聞く親玄龍、古主の結城へ、歸參の種と、思ひ暮らせし其うちに、今日の災難、引くに引かれぬ日頃の氣質に、我れを諫めて自殺の今端、五人に仕返し、その跡にて、紛失の寶詮議し出し、殿へ差上げ、絶えたる野田の家を興し、吉岡流を今一度、世に出しくれよと今端の頼み。お氣遣ひなされますなと、氣を鐵石にこの所へ、參つて見れば案の外、心ありげに千右衞門の詫び言、様子あらんと思へども、親の死去ゆゑ無念も重なり、古主と知らず若殿へ、疵を附けし誤まりは、取りも直さず主殺し。その申し譯は、まッこの通り。

ト刀を我が腹へ突き立てる。皆々見てこなし。竹笛入りの合ひ方。

文七　古主の我れと知らざれば、無禮をせしも皆尤も、とは云ふものゝ不便の有樣。

千右　あたら若者、命を捨てさせまいと、心盡しも水の泡。
文七　早まつた事いたしたなア。
角左　そのお詞が智識の導引……寶詮議は若殿はじめ、忠義の各々随所へは、これとても氣遣ひなし。只この上のお願ひは、拙者が麁忽の申し譯、腹切つて相果つるも、親の遺言空しくならぬやう、首尾よく御寶が手に入らば、野田の名跡誰れなりと、繼がせて親の御勘當、お赦しあるやう、コレ、御兩所、今端の願ひ聞入れて、御推擧願ひ奉る。
文七　ハテ、思ひがけなき其方が身の上。尤も父の話しにて、結城家の吉岡流
清兵　他家に少なき一流なれば、家來といへど師の恩ある角左衞門、改易なせしは誤まりと、折々行くへをお尋ねありしが、さては貴殿が子息でありしか。
千右　それにて思ひ當りしは、今日清水にて見掛けし手練、正しく覺えの吉岡流。知らぬ事とて思はぬ無禮。氣遣ひめさるな、親御の遺言、野田の家名再興は、某が知行にかへても取立て申さん。
文七　義名を忘れぬ志し。父に代つて親の勘當赦し、再び元の主從と、冥土の親へ申し聞けよ。
角左　ハヽア、有り難きそのお詞。あの世の父へ善き土産。親子その日に相果つるも、一世にあらぬ三世の御恩、今際にお目見得いたすのも、身を捨てゝこそ浮瀬の

文七　月も惜しさよ雲がくれ。
清兵　闇のあの世へ
千右　照らすは主君の
角左　お詞一つ。
文七　あと氣遣はずと、成佛いたせ。
角左　南無阿彌陀佛。

ト角左衛門、嬉しきこなしにて、ガックリと落入る。

千清　アヽ、あつたら侍ひ
文七　不便な最期

トこの時、奥より六兵衛出て來り、この體を見て

六兵　ヤア、そりやこそ、人殺し／＼。

トどん／＼になり、奥へ逃げて入る。奥にて「人殺し／＼」の聲。バタ／＼音する。

清兵　コレ／＼、極印、あの人聲。この通り二人まで、死人のある上は、云ひ譯立たぬこの場の仕儀。爰には居られぬ、千右衛門、文七どのを同道して、裏道より、早くこの場を、落ちたり／＼。……

この清兵衛には人殺しと、名乘つて出れば後腹病めず、サ、少しも早く、落ちさつしやい。

　ト身づくろひする。「待宵」の唄になり

千右　待て〳〵清兵衛、おぬしばかりを人殺しにしては、仲間の義理が立たぬわい。

清兵　ヤア、義理も仲間も、其方は大事の願ひのある身。

千右　それだといつて

　トこの時、早拍子木打つ。若い者大勢、棒を持ち、上下へ出て來り、ドヤ〳〵立ち蛛む。

大勢　人殺しだ〳〵。動かすな〳〵。

　ト騷ぐ。これにて上の枝折り戸へ千右衛門、下の枝折り戸へ清兵衛、立ちはだかつてこなし。

千右　待て〳〵。いかにも人殺しは、五人男の其うちで、極印の千右衛門。

清兵　イヤ、人殺しは安の清兵衛、逃げも隠れもせぬほどに

千右　家内の奴等も靜かにしろ。

清兵　たつて騷ぐと、死人の山だぞ。

皆々　ヤア〳〵〳〵。

　トこれにて大勢鎭まる。

清兵　サア、千右衛門、おれが爰へ殘るから、文七どのを庄九郎に渡し、共々頼むと云つてくりやれ。

千右　ハテ、埒もない。人殺しはこの千右衛門。

文七　イヤ、五人男と云ふからは、雁金組のめどになる、この文七が

清兵　人殺しになつて、紛失の色紙は、誰れが詮議をすると思ふ。

文七　ヤ。

清兵　うろたへる所ぢやあるまいが。

ト向うバタ〳〵になり、喜惣兵衛と伴助、前幕の形にて、直ぐと舞臺へ來り、內へ入り

喜惣　人殺しは五人男といふ事だが、あの中の主水さまが人殺しになつては、少し此方の工面が惡い。

作助　左樣でござります……サア〳〵、退かつしやい〳〵。

ト大勢を突きのける。

大勢　ソリヤ、役人樣が、來たぞ〳〵。

喜惣　片寄れ〳〵。

ト伴助、外より淸兵衛を見て

作助　モシ〳〵、若殿樣は、これにお出でなされまする。

喜惣　ドレ〳〵。

ト近眼ゆゑ、千右衛門の側へ行き

申し、若殿樣。

作助　アヽ、モシ〳〵、此方にお出でなされまする。

喜惣　さうか〳〵。……オヽ若殿さま〳〵。ヤレ〳〵、よく爰にお出でなされました。御次男の長之助さま、どう氣が紛れてやら、坊主におなりなされて御出奔。お供に參つた拙者が、殿樣を失ひしては、のめ〳〵屋敷へ歸られませぬ。あなたは御惣領の事、どうぞ私しを助けると思し召して元の通り主水さまにおなりなされて、お屋敷へお歸りなされて下さりませ。

作助　へい〳〵、私しの旦那が、殿樣を失くして、誠に困りまするゆゑ、お願ひにあがりました。どうぞ殿樣におなりなされて下さりませ。

清兵　ヤイ、喜惣兵衛、わりや今日、主でも家來でもないと云つたぢやないか。

喜惣　サア、あの時は口が辷つて、そんな事も申したかは存じませぬが、それは只管御堪忍なされませ。

コレ、われもあやまれ〳〵。

作助　ハイ〳〵、なんだか知らぬが、無性にあやまります。どうぞ御料簡下さりませ。

喜惣　あなたがお歸り下されぬと、私しは切腹いたさねばなりませぬ……イヤ、切腹いたすはいとひませぬが、命が惜しうござります。殊に大切なお家が退轉いたします。御先祖への御孝行と思し召し、どうぞお歸りなされて下さりませ。

淸兵　イカサマ、差當つて里見の家督に困るであらう。歸つてやりたきものなれども、この淸兵衞はたつた今、人を殺した科人ゆゑ。

喜惣　イヤ〳〵、人殺しは幾人切つても、一人下手人が出ればよろしうござります。

作助　五人男の内外の者を、お出しなされて、あなたは矢ッ張り

千右　それ〳〵、淸兵衞は元へ歸參をすれば、これ程めでたい事は無い。殿樣になつたら、色紙の質請けな

淸兵　そりやァおれが胸にある……今愛を行くと、否とも二人は科人……ムウ……コレ〳〵、喜惣兵衞てまへは人殺しの捕り手に來たのであらうな。

喜惣　エ。

ト合點のゆかぬこなし。

淸兵　サア、お役人、この淸兵衞に繩打つて、里見の屋敷へ引かつしやれ。

ト後手に廻して、こなし。

喜惣　アヽ、モシ〳〵、どうして私しは

清兵　ハテサ、呑みこみの悪い奴等だ。おれを人殺しの科人だと云つて、繩を打つて連れて行かぬと、アレ、あの大勢の人達が承知せぬ。さうせぬと、わいらまで、人殺しの飛ばッちりが、かゝらうも知れぬぞよ。

喜作　エヽ、

清兵　サア、それだによつて、ナ、ソレ、おれに繩を打つて、人殺しの科人にして連れて行けば、跡の二人の難儀もかゝらぬ。イヤサ、かゝる繩目も、身から仕出した手悪戯。サ、お役人、繩を打たつしやい。エヽ、キリ〳〵繩を打たつしやいな。

ト摚と下に座し、後手に覺悟の思ひ入れ。喜惣兵衛、やう〳〵呑みこみ

喜惣　成る程〳〵、人殺しの科人なりと、いづれなりとお成りなされて、一緒にお出で下さりませう。

清兵　そんなら直ぐに……サ、キリ〳〵繩を

喜惣　でも、勿體ない

トうぢ〳〵する。

清兵　繩を打たねば、われを代りに
喜惣　アヽ、モシ〱、打ちます〱。下手人の名代、眞平だ。
清兵　そんなら、繩打て。
喜惣　ハイ〱。然らば若殿。ではない、科人、捕つた。
ト繩かける。
清兵　斯うなるからは人殺しの科人、安の清兵衛が、いま召捕られて行くぞ。外に人殺しは一人も無いぞ。科人だぞ〱。
ト云ひながら門口へ出る。文七、千右衛門、思ひ入れ。
喜惣　そんなら若殿、ではない、科人
伴助　キリ〱歩め。
文七　そんなら清兵衛
清兵　屋敷へ歸らば、とも〲力に
千右　質請けの事も
清兵　とつくり胸に……イヤ、首になつて逢ひやせう。

ト時の太鼓、三重になり、清兵衛先に喜惣兵衛、作助、縄を取つて引添ひ、向うへ入る。若い者皆

ぜりふにて附いて入る。

十右　故郷へ飾る錦にあらで
文七　花も實もある今の早速も
千右　あかりを立てる男氣も
文七　この身のあかり立つまでは
千右　一先づ爰を

ト この時、ない八出て

ない　人殺し。

ト文七へかゝらうとする。千右衛門、立廻つて、よろしく文七の方へ投げてやる。文七、取つて押へる。千右衛門、思ひ入れあつて

千右　飛んで灯に入る夏の蟲。
文七　毒喰はゞ皿。
千右　やらつしやりませ。

文七　ムウ」

ト呑みこみ、拔討ちに、ない八へ刀を浴びせる。「ワッ」と立ち身にて苦しむ。

千右　天晴れ、見事。

ト手を打つ。文七、刀を引く。ない八、見事にかへる。双方見合つて、千右衛門、文七の刀を拭ふを木の頭。

兩人　ムヽ、ハヽヽヽヽヽ。

ト文七、千右衛門、奧口を窺ふ仕組み。踊り地にて、よろしく、ひやうし

幕

三幕目　長町山川屋の場

役名＝＝布袋市右衛門 實ハ新藤徳次郎。雷庄九郎 實ハ小兒川傳藏。山川屋丁稚、幸吉。

本舞臺、眞中二間ほどの塗り家造りの質見世、緣に戶納めあり、上の方、誂への土藏、前側駒寄せ、下手、板塀、忍び返し、見越しの松。この塀の前に用水溜。すべて質屋見世先夜中の體樣、よろしく飾

りつけ、時の鐘にて幕明く。

ト下手の板塀の側に、菰かむり一人寐てゐる。市右衛門、以前の女の着物のまゝ、腰に出刃庖丁を挾み、頬かむりして、向うより早足に出てくる。舞臺へ來ると、縫ぐるみの犬、吠えつく。

市右　シイ〳〵。野暮な畜生だ。

ト舞臺へ來て、袂より餅を出してやる。犬、これを食つてゐるうち、市右衛門、上手の土藏の前の駒寄せを踏み越し、この間へ入る。そろ〳〵家尻を切る。下手より夜蕎麥賣り出てくるゆゑ、駒寄せの内へ踞む。花道より按摩出て來り、花道にて行きあひ

蕎麥　按摩さん、もう何時だの。

按摩　蕎麥屋さん、何時だとは、此方から訊く筈だ。併し、夜中に逢ふ者は、いつでも按摩と蕎麥屋ばかりだ。時を訊くのも、あんまり古風だの。

蕎麥　そこで捻つて、わしが方から訊きました。

按摩　大方、昨夜の今時分だらう。

蕎麥　これは古風でないでもない。

按摩　按摩鍼イ。

蕎麥　蕎麥イ〳〵。

ト蕎麥屋は向うへ入る。件の犬、按摩に吠えつく。

按摩　エヽ、この畜生め。毎晩通る者を吠えやアがる。達引のねえ畜生だ。

ト杖にてくらはせる。犬、頻りに吠える。按摩、杖にて追うて上手へ入る。市右衛門、あたりを見て、又そろ〳〵家尻を切る。時の鐘、合ひ方にて、向うより庄九郎、頬かむり、思案しながら出て來り、思ひ入れあつて

庄九　思ひがけない里見の若殿、出家を留めようと追ひかけては見たが、皆くれに行くへが知れず、其まゝにして置いては、清兵衛に濟まぬなれど、先づ差當る脊に腹は、此方の尋ぬる色紙の事。苦勞になるゆゑ晝間來て、樣子を聞けば百兩の質物、明日は餘所へ賣るとの話し、どう都合しようにも、早急な事ゆゑに、心に思はぬ盜み根性。お國へ歸參のその後は、利に利を添へてその時詫び。どうぞ首尾よく

トあたりを見て、舞臺へ來り、あちこち見廻す。市右衛門、人影見えるゆゑ、また踞みゐる。庄九郎これを知らず、駒寄せへ足を踏みかけ、間へ下りようとして、市右衛門の頭を踏む。

市右　アイタヽヽヽヽ。

庄九　ヤ、誰れやら人が

　ト市右衛門、立ちあがり、透かし見て

市右　さう云ふ聲は、庄九郎ぢやアねえか。

庄九　こなたは兄貴。その態は。

市右　エ。

庄九　どうでもこなたは、まだ止まぬな。

市右　コレ、静かに云へ。

　ト市右衛門、ノコ／＼駒寄せを出る。

庄九　コレ、こなた、なぜあんな所に踞んでゐたのだ。イヤサ、何が不足で盗人根性……小遣ひ湯錢髪結ひ錢、女郎買ひの金までも、都度々々わしが仕送つてゐますぞえ。それになんだ、この態は。五人男の達衆のと、これが世間へ知れたなら、わしや仲間はさておいて、大事のお主のお名まで出ます。ほんに／＼、こなたは／＼、身の廻りは、どうさしつたのだ。

市右　バッタリに賣つてしまつた。

庄九　エ、そんなら明日から仲間の附合ひ。

市右　否だの。止めだ。

庄九　そりや又なぜ。

市右　忠義の爲といふ事ゆゑ、おれも善心に立返り、とも〴〵力と思ひの外、忠義どころか大それた、盗人仲間の男達、それゆゑおらァ、附合ひは御免だ。

庄九　コレ、兄貴、盗人仲間と云はつしやるが聞き憎い。こなたの心に引くらべ、なんで盗人仲間でござるよ。

市右　わりやァ今、藏の前の駒寄せへ足を踏みかけ、なぜおれが頭を踏んだ。

庄九　エヽ。

市右　それ見ろ。うぬ一人いゝ子の振りで、悧巧らしくおれへの意見。うぬが盗人根性を棚へ上げて、忠義を立てる正當な、お兄ィさんを勿體ねえ、身狀が惡いの泥坊のと、ほんにわりやァ、情ねえ心になつてくれたな。

庄九　そんならこなたは、いよ〳〵本心、忠義一圖に

市右　善心になつたこの兄より、惡人になつた庄九郎、おれより餘ッほど、わりやァ太いぞ。

庄九　その正當なこなさんが、なぜ又あの駒寄せの内に踞んで居たのだ。

市右　エ。
庄九　成る程、正當なお兄イさんだア。
市右　ありやアなによ……あんまり犬が吠えるから、彼處へ逃げ込んだのだ。
庄九　アヽ、さうかえ。わしも犬が吠えたゆゑ
市右　それで、おれが頭を踏んだのか。
庄九　マアさうサ。
市右　とんだ間違ひだ……そんなら又、犬に吠えられぬうち
庄九　早くどこぞへ行かつしやい。
市右　大きにお世話だ。てめえも歸れ。
庄九　わしも歸りますが、お前も早く
市右　そんなら爰で別れやう。
庄九　氣を附けて行かつしやりませ。

ト時の鐘になり、市右衛門は東のあゆみ、庄九郎は花道まで來り、兩人よろしく立ちどまり、こなしあつて、また元の所へソロ〳〵歸つて來り、藏の側へ寄り、兩人一緒に駒寄せへ足を踏みかけようと

して、南方より透かし見て

市右 また來たか。

庄九 こなたも矢ッ張り

市右 斯うも心の合ふといふのは

庄九 もしや互ひに

市右 おれが盜みは忠義の爲。

庄九 そんなら色紙を

市右 金に困つて出來心。

庄九 心は同じ庄九郎も、よんどころなく主人の爲。

市右 それゆゑ、おれが、

庄九 イヤ〱、兄貴。こなたは屋敷を出てから餘程の年數、殊にその時分は輕い身の上。見た事もないあの色紙、何を目利きに盜まうと思はつしやる。

市右 エ。

庄九 サ、それゆゑわしが忍び込み、色紙は盜んで來るほどに、こなたは外に

市右　頑張るのか。おれが切つたあの家尻、あれから忍んで

庄九　ムウ、丁度幸ひ。氣を附けて下さい。

　　　ト庄九郎、市右衛門が明けし藏の穴より忍び込む。

市右　とんだ所へ庄九郎め。エヽ、いまいましい。

　　　ト時の鐘、バツタリと音するゆゑ、市右衛門、思ひ入れ。下手の塀の松ヶ枝を攀ぢ登り、幸吉、財布を懐中し、塀より用水溜へ下り、下へ飛び下りて、ホツと息を吐き、向うへ行かうとする。市右衛門、透かして見て

　　　コリヤ／＼／＼、小僧、待て／＼。

幸吉　ハイ／＼、御免なされて下さりませ。私しは金も何も盗みは致しませぬ。見遁がして下さりませ。

市右　なんだ、此奴は、誰れも聞きもしねえのに……ハヽア、わりやア金を盗んで、駈落ちをする小僧だな。

幸吉　イヽエ／＼。

　　　ト慄へて居る。市右衛門、押へて

市右　嘘をつくな。

ト懐へ手を入れる。

幸吉 あれえ〳〵。

ト云ふ口を市右衛門、押へて

市右 コレ、泥坊すると、首を切られるぞ。この金は、小父さんに寄越せ。

幸吉 イエ〳〵、否でございます。この金は母様が、無くてはならぬと云ふゆゑに

市右 ソレ見ろ。矢ッ張り盗んだらう。いゝ子だから、おれにくれろ。

幸吉 どうぞ堪忍して下さりませ。

市右 寄越さねえと、これこだぞ。

ト腰の出刃を出して見せる。

幸吉 あれえゝ。

市右 サア、寄越すか。

幸吉 どうもやられませぬ。

市右 剛情な小僧だ。ソリヤ、光るぞ〳〵。

ト出刃を振り廻して嚇す。幸吉、逃げんとする。いろ〳〵踠く拍子に、市右衛門の持ちし出刃、思は

ず幸吉の脇腹へ突き立てる。幸吉「ワツ」と苦しむ。

それ〳〵、それだからよせばいゝに。

ト幸吉、苦しみながら、市右衞門の足に縋りつき

幸吉　これ、小父樣、なんでわしを殺すのぢや。

市右　なんの、おれが知るものか。てめえがこの出刃へ觸つたから惡いのだ。おれは知らねえ〳〵。

幸吉　あれえ〳〵。誰れぞ來て下され。この小父さんが

市右　エヽ、やかましいわえ……斯うなつたら仕方がねえ。可哀さうだが、殺らさざア

ト出刃を拔く。幸吉落入る。

ヤア、こいつはごねた。ホイ、可哀さうに……アヽ、まゝよ。

ト出刃にて抉る。立廻りの拍子に財布、あたりへ飛びしゆゑ、市右衞門、尋ねながら

どこへ金を拋りやアがつたか。

ト此うち用水溜を見て思ひ入れ。幸吉の死骸をその中へ打込み、蓋をして、こなし。此うち、籔の崩れより庄九郎、色紙の箱を持ち出て來る。市右衞門は矢張り金を尋ねてゐる。庄九郎見て

庄九　コレ〳〵、兄貴、何を探してゐる。

市右　今、妾らへ金を

庄九　ナニ、金とは。

市右　イヤサ、首尾はどうだ。

庄九　どうやら斯うやら、色紙はまんまと……若殿にもさぞお喜び。甚三郎にも落ちつかせて

ト云ひながら、箱の蓋を取り、袱紗包みを持ち、下手の町木戸前の誰哉行燈の灯にて透かし、よく改めて

ヤヽ、箱の上書は御祐筆、源藏どのゝ手蹟に相違なけれど、中は眞赤な

市右　似せ物か。

庄九　エヽ、これまで心を砕きしに、思へば無駄事。エヽ、いま〳〵しい。

ト　あたりへ抛る。市右衛門、こなしあつて

市右　その箱が似せ物では、さては本物は、どいつか摺り替へたな。なんであらうと、箱が正眞の物ならば、それから使つて中の品も、また詮議の種になるまいものでもない。捨てずとおれに渡して置きやれ。

庄九　イカサマ、似せ物とて詮議の手がゝり。

ト捨てた色紙を拾はんとして、地を探り、手に血の附きしこなし。

夥しい、この血は。

市右　エヽ……その血も無駄事。

トあたりを尋ねる思ひ入れ。庄九郎が捨てし色紙を懐中する。

庄九　この血汐といひ、こなたの素振り。

ト目を附ける。この時、上手より番太郎、火の用心のぶら提灯、拍子木を打ちながら出て来り、潜り家尻を見て

番太　ヤヽ、家尻が切つてあるワ。

ト兩人を見て

うぬ、泥坊め。

トこれにて庄九郎、恟り。市右衞門、番太郎の持ちし拍子木を引ツたくり、その紐にて番太郎の首を締める。番太郎、苦しみ踠く。市右衞門、持ちし拍子木をチョンと木の頭の心にて打つて、花道へこなしあつて

市右　早く逃げろ。

ト顏で知らせろ、庄九郎、思案の思ひ入れ、向うへ入る。市右衞門、キツと見得、跡よろしく、キザミにて、ひやうし

幕

四幕目

時雨ヶ岡御行の松の場

役名――乞食、新米の三ハ雷庄九郎。醫者、砂原道庵。紙屑買ひ、太郎八。雪駄直し、九助。乞食、傳八。同、三。同、富。同、友。同、文。同、色八。鍛冶屋丁稚、長松。千右衞門妹、お高。

本舞臺、向う淺黄幕、上下折り廻し一面の建仁寺垣、上下とも藪疊、よき所の傍示杭に、いゝ、根岸坂本道と記しあり、幕の內より、傳八、三、富、友、文、色八、いづれも乞食にて、めい〱煙草入れ巾着手拭なぞを取ひろげ居る。すべて根岸邊の構へ、夕暮れの體、禪のツトメにて幕明く。

傳八　コレ、房州、われが今日の仕事は、その紙煙草入ればかりか。いつまでも〱埒の明かぬ

三　ちつと精出して勤めぬかい。

富　それだといつて、新米のおいらが、仕着けもせぬ仕事。さう働らきがなるものか。
友　さう云つても、對馬は手ばしこい。大分やつて來たな。
文　馬鹿を云へ。人聞きの惡い。こりやァおれがお持ち料だァ。
傳八　あれ見や。越中め、褌ばかり荷厄介にしてけつかる。
色八　越前が革巾着、越中に褌とは、まんざら退いた仲ぢやァねえ。
富　そりやァさうと、いつもの古鐵買ひめは、何をしてゐやァがるか。いつも來る時分だが、どうしやァがつたか。
文　頭の籠に大分赤い物が見えるが、そりやァ何だな。
傳八　これか。

ト紙屑拾ひの籠より造り花の切り屑を出して

こりやァ造り花のお剩りだが、仲間の仁助に賣つて、手品の種に使ふといふ算段よ。
文　成る程、きめ細かに裁くぜ。樂はさせねえの。
傳八　一通りぢやァ喰へねえ。火を打ちつけねえか。
色八　アイ／＼。

ト火打ち道具を出し、火を打ちつける事あつて

ハイ、つきやした。

ト出す。

皆々　ドレ、一服やらかさうか。

ト皆々煙草のみゐる。禪のツトメにて、向うより太郎八、紙屑買ひの拵らへにて、荷を擔ぎ、呼びながら出る。上手より九助、雪駄直しにて、荷をかたげ、呼びながら出て、行きあふ。舞臺の皆々も、待ちかねし思ひ入れ。

九助　屑屋さん、今か。

太郎　ハイ、今日は、ちつと來やうが遲うございました。

傳八　遲いどころか。いつもの刻限より小一時も遲いぜ。

富　もう善性寺の入相を打つたぜ。

傳八　マア、おれの屑から、値を附けたり〳〵。

ト籠の屑を出す。

富　古褌に手拭に、紙煙草入れが一つと、煙管が一本よ。

太郎 ハイ〳〵。

ト屑の目をかけたり、品物を廣げて見る事なぞよろしく、此うち九助、荷を下ろし、箱の中より取つ簪を出して

九助 これを値をよく買つてくんねえ。

太郎 おもらひ申しますとも。

ト取つて、捻くり見て

三匁五分にしきやア踏めないが、百五十に買ひませう。

九助 もう十六文買ひなせえ。はずんでもいゝぢやアねえか。

皆々 この人は埒の明かねえ男だ。

太郎 其やうに急かつしやるな。賣買ひにも相場のあるもの。褌が二十四文、手拭が八文、紙屑が七十二文、紙煙草入れに煙管が百八文よ。これで買ひ過ぎた位よ。

色八 これサ、其やうにしつかいゝを云はねえものだ。おれも此ごろまで、壁に御報謝といつたが、面が古くなつては、世間でその手を喰はねえから、商買替へをするつもりサ。なんと、この足駄を買つては下さるまいか。

太郎　右足駄は眞平御免だ。なんぞ鐵物はござりませぬか。

傳八　おれが紙屑籠の中に、古藥罐を入れて來た。値をよく買つてくれねえか。

九助　その藥罐を値をよく買つたら、おれが鐵鎚も賣つてやらうワ。

ト直しの荷より鐵鎚を出して見せる。太郎八取つて

太郎　成る程、この鐵鎚は性がよい。丸三の印がある。こりやア賣人の使ふ鐵鎚だな。六十四文に買ひませう。

九助　おきやアがれ。二匁五分で買つた鐵鎚を、六十四文とは

皆々　泥坊より太い事を云ふぜ。

太郎　應買ひだと思ふなら、また外へ見せるがようござる。わしを泥坊より太いとは、あんまりな……

イヤ、泥坊といへば、去年の冬上方で、五人男のうちに、泥坊とやら人殺しとやらで、文七といふ若衆がお尋ね者。その人相書のお觸れを受取つて來たが、皆の衆、これを見さつしやい。

ト懷中よりお觸れ書を出す。

傳八　ハヽア、こなたは紙屑買ひの手間に、そんな事の世話もするのか。

太郎　わしは紙屑買ひこそするが、これでも内へ歸ると、大家さんサ。

九助　これサ、そんなに味噌をあけずと、屑でも値をよく買ふがいゝ。
傳八　おれがこの紙屑を買つてくれないか。
太郎　いま云つた通り七十二文サ。

トすてぜりふにて傳八の紙屑を荷の中へ明ける時、屑の中より紙細工の猿の面出る。九助見て

九助　その屑の中に猿の面がある。そいつは流しの道具になりさうなものだが。
傳八　いかさまなア。明日はなんぞ流しに出ようと思つたが、したみの市は器用だから、おれが猿廻しで流さうぢやアねえか。
三　飯蛸の聲で猿廻しなら
富　こいつは錢にならうわい。
友　乞食のお猿も古風なやつサ。
太郎　この頃は紙の面を冠つた物貰ひが大分あるが、彼奴等も顔を隠して商賣するからは、どうでろくな者ではあるまい。
九助　この人は、おつな事を云ふが、おらが仲間には、顔を隠して商賣する者がある、それが怪しいと云ひなさるのかえ。

太郎　どうで面を隠すからは、胡散臭いのサ。
九助　此べら坊め、途方もない事を吐かすが、なんでおいらが胡散臭いのだ。悪く口を叩きやアがると
　叩ッ挫くぞ。
太郎　此奴が〳〵、非人の分として慮外な事を。
皆々　何を此奴が
九助　叩ッ挫け。
皆々　合點だ。
太郎　うぬら、手向ひしたら免さぬぞ。
皆々　疊んでしまへ。

ト雷の音になり、太郎八、天秤棒を斜に構へる。皆々、縫ひぐるみにて太郎八に打つてかゝる。太郎八、支へながら、最前の觸れ書を落す。傳八、これを紙屑籠へ拾ひ取らうとする。立廻り、ゴッチャになるゆゑ、件の觸れ書を引裂き、あたりへ捨てる。トゞ太郎八、脾腹を當てられ、ウンと反る。皆々この體を見て悄り

皆々　紙屑屋が死んだ〳〵。

巳八　はずみとはいひながら、とんだ事を仕出かした。此奴がごねたら、おらが仲間は、[illegible]には居られまい。

傳八　あた棒よ。併し、どこへ巣を變へるにしても、おぬしが金の一件は

九助　さればサ。去年大阪に居る時、山川屋といふ質屋の門口で、内から出る盗人が落した、五十兩といふ金を拾ひ、江戸へ下つて商賣に、取りつかうと思ふうち、さる鍛冶屋で、金が無ければならぬといふゆゑ、妹のお高を書き入れて貸したが、その證文も爰に持つてゐるワ。

ト紙煙草入れより證文を出して見せる。

皆々　こいつは、氣が惡いな〳〵。

九助　コレ、何事も知らぬ顔で

皆々　ドリヤ、野天を始めようか。

ト時の鐘、掠めたる雷の音になり、皆々上手へ入る。合ひ方、時の鐘になり、向うより道庵、慈姑頭、醫者の拵らへにて、提灯を下げ、出て來り

道庵　今鳴る鐘は上野の暮れ六ツか。廓中で大分暇が取れたと見える。

ト云ひながら舞臺へ來り、思はず太郎八に爪づき、恟りして

これは眞平御免下され。

ト提灯にて太郎八を見て

イヤア、家主の太郎八どのぢや。癪でも發したのか。

ト用水桶の水をすくひ、太郎八に飲ませ、介抱して

大家の太郎八どの〳〵。

ト呼び生ける。これにて太郎八、心附き、思ひ入れにて、ムックと起きて

太郎 うぬ、乞食めら。

ト思ひ入れ、きつと道庵を見る。

道庵 コリヤ、太郎八どの、心が附きましたか。

太郎 ヤ、道庵さまではござりませぬか。

道庵 こなたは、どうしたのでござる。

太郎 乞食めらと喧嘩をして、思はず目を廻しましたが、よい所へお前がござつて、やう〳〵氣が附きましたのサ。

道庵 乞食と喧嘩をするとは埒もない。それでも怪我がなくてようござる。見れば、この代物が落ちて

ござる。早く取片附けさつしやい。

太郎　どうぞ灯をお貸し下さりませ。もう暮れましたな。

道庵　今六ツを打つたばかりサ……サア、灯はわしが見せませう。

太郎　ハイ／＼、有り難うござります。左様なら私しは

ト雷の音、時の鐘、合ひ方になり、提灯の灯にて、散らしたる紙屑を籠の中へ入れるとて、引裂きし觸れ書も屑と心得、道庵も手傳ひ、一つに取まとめ、荷の中へ入れて居る。此うち向うより庄九郎素人らしき非人の拵らへにて、頬かむり、絲立を着て走り出て來り

庄九　アヽ、桑原々々。

ト云ひながら、思はず道庵に縋りつくゆゑ、道庵、愕りして

道庵　アヽ、コレ／＼、どうするのだ／＼。

庄九　わしは雷嫌ひ。助けて下さりませ／＼。

道庵　これはしたり、誰れが好きな者があるものか。

ト庄九郎を見て

ヤア、てまへはお菰か。エヽ、穢ない、其方へ寄れ／＼。

庄九　ハイ、私しは上方から、御當地へ參り立ての物貰ひ、何の勝手も存ぜぬ者。御免なされませ〳〵

ト片脇へ寄り、雷を恐れる思ひ入れ。

道庵　時に太郎八どの、よい所でお目にかゝりましたが、先達てより貴公にお賴み申した、淺草七軒町の極印鍛冶屋の妹、お高が事は、首尾よく參らうか。どうぢやな〳〵。

太郎　その事も油斷なく、かゝつては居りますが、五十兩の持參は、お前も御承知。併し、爰に一つの難儀といふは、あのお高は男選み。その上、兒は派手な形が好きだから、お前を聟とは

道庵　これは〳〵御挨拶。男選みとあれば、愚老なぞは一番に思はれる男振り。隨分形も派手に致して參らう。面白し〳〵。

ト一人ホク〳〵して喜ぶこなし。

太郎　併し、あの娘は、頭が野郎でなうては、亭主に持たぬと申すが、野郎なれば、男に申し分はござりませぬ。

道庵　成る程、それはむつかしいわえ。野郎になるはいとはねど、砂原道庵といふ野郎もあるまい。この儀は當惑。ハテ、どうか致しやうが

ト思案のうち、フト庄九郎を見て

コレ〳〵、太郎八どの〳〵、斯様いたしては

ト庄九郎の方へ指さし、思ひ入れあつて囁き

と云ふ趣向は、どうぢや〳〵。

太郎 それは好い思し召し。いま聞けば、あの物貰ひは、上方から參り立てと云へば、人に顔を見知られぬこそ幸ひ。あの男に掛合つて見ませう。

ト庄九郎を此方へ招き

さて先生、外の事でもないが、こなたは上方から來たと云へば、人もこなたを知るまい。なんと近頃不請ながら、五十兩の持參を持つて、好い娘の所へ、聟に入つては下さるまいか。菰かぶりをしてゐるより、よい相談ではござらぬか。

ト庄九郎、これを聞き、恟りして

庄九 エヽ、左樣なら私しを、五十兩の持參を持たせ、好い娘の所へ聟入りしてくれろとかえ。それは何とも迷惑な事でござりまするが、不請ながら、聟入りを致しませうか。

太郎 それは近頃忝うござる……モシ、道庵さま、お前もお禮を仰しやりませ。

道庵 これは〳〵お菰先生、餘儀なき事をお賴み申し、早速の御承知忝い。併し、そこに一つのお賴

みがござるて。聟入りの節、貴公は花聟、愚老は供を致して参るて。先づ杯も貴公は致さるゝが、彼の床入りの砌りは、愚老と其許と入れ替りに致すのぢや。その儀を別してお頼み申すて。

庄九　エヽ、左様でござりまするか。肝腎の床入りを、お前がなさるゝとは、聟の入れかへは迷惑な事でござりまするな。

道庵　サ、御尤もな事ではござるが、入れかへ放しにも致すまい。捨利の所は、貴公へ進上いたさう。

庄九　せめてさうでもなされぬと、帳面が片附きませぬ。

道庵　それで物事極まりといふもの。喜びに一ッしめませう。

ト三人、手を打つ。

庄九　左様なら明日、お前さんのお内まで。

道庵　愚老が宅は下谷坂本、何か用の事は、太郎八どのに聞いて下され。

庄九　畏まりました。左様なら、これでお別れ申しませう。

太郎　そんなら必ず忘れまいぞ。

庄九　ハイ〳〵、畏まりました。

道庵　サ、一緒に参りませう。

ト時の鐘、合ひ方になり、庄九郎は下手へ入る。太郎八、荷を擔ぎ、這入と捨ぜりふ言ひながら上手へ入る。跡よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、向う黒幕、眞中に九尺の不動堂、出入り狐格子、上の方に高札を立てし御行の松、上下竹藪茂り、よき所に石の手水鉢。日覆より松の吊り枝。すべて根岸時雨ヶ岡の體にて、矢張り時の鐘にて道具納まる。

ト時の鐘、向うより吉原素見しの仕出し、この中へ夜蕎麥賣り、按摩、武家、町人の仕出し、三河島あたりの百姓、煎菜商ひの戻り、思ひ／＼の仕出し出て、捨ぜりふにて東西へ別れて入る。四ツ竹もやうの合ひ方へ、捨て鐘、鳴り物にて、向うより以前の庄九郎出て來り

庄九　アヽ、なんだか素敵に淋しい所へ來た。オヽ／＼、向うに宮が見える。

ト云ひながら舞臺へ來り、思ひ入れあつて

先刻、持參附きの聟になれと賴まれたが……江戸は廣い。馬鹿な奴もあるものだ。時に、今夜の宿はどこにしよう……ムウ／＼、この辻堂の内……なんだ、不動樣か。幸ひだ……ドリヤ、通夜をしようか。

ト絲立を着たるまゝ、辻堂の内へ入る。あと本釣り鐘、かすめたる雷の音、雨車、合ひ方にて、向うより長松、丁稚、襦袢一つ、藁草履を履き、五徳の上へ蠟燭三本立て、はつちやう笠にて蠟燭の火を防ぎ、跡よりお高、振り袖娘、やつしの上へ白地の浴衣を羽折り、傘をさし、釘と鐵鎚を持ち、帶へ鉦を挾み、足駄がけにて出て來り

長松　あの鐘は上野の四ツだな。モシ、お高さん、丑の時參りは、八ツに出るものだが、今やう〳〵四ツでござります。その上、供を連れてくる丑の時參りが、どこの國にあるものだ。お前はなんで此やうな、願掛けをなされまする。

たか　サア、わしが兄さんは人樣にも、附合ひ廣きお方なれど、其方衆も知つての通り、常々から短氣な生れつき。この間弟子に來やつた文吉とやら、兄さんの連合ひお蔦さんと、何やら譯のある樣子。ひよつとして兄さんへ、この事が知れたら、どのやうな事にならうやら、それが悲しさに、悋氣ではなけれども、どうぞして仲を遠ざけたいわたしが願掛け。思うた同士の緣を切るには、なんとやらいふ木を服ますと、緣が切れるではないかや。

長松　そりやア板橋の緣切り榎サ。この近所からは遠いゆゑ、爰の御行の松を緣切り榎にして、それでお前は時參りかえ。

たか　女子の身で、夜道もいとはぬ願掛けも、親ない内は兄さんへの孝行。不動様へお願ひ申すうち、待つてもゐられまい。其方は先へ歸つてたも。

長松　先へ歸つて寢るのは嬉しいが、お前、歸りはどうなされます。

たか　わたしや金杉の伯母さんの所から、送られて行くほどに、其方は爰から

長松　そんならわたしは歸りませう。

　ト行きかける。

たか　アヽコレ、わしが爰へ來た事を、必ず誰れにも云ふまいぞや。

長松　アイ／＼。

　ト行きかけて立戻り

　モシ、早う戻つて下さりませ。

　ト矢張り右の鳴り物にて、長松は引返して向うへ入る。お高殘りて思ひ入れ、舞臺へ來て

たか　爰が名に聞きし御行の松……南無大聖不動明王、嫂と文吉が仲を、事ないうちに遠ざけ給へ。南無不動明王々々々々々。

　ト一心に念じる。この時、風の音して、件の蠟燭消える。これを見て

折悪い、御灯の消えたさうな。併し、時参りは人目を忌むと云へば、暗きを幸ひ、あの松へ

ト釘と鐵鎚を出して、暗き心にて探り寄つて、松の木へ釘を打ちつける。この鎚音を聞きつけ、下手の藪の内にて、以前の九助、丸に三の附いたる鐵鎚を腰に挾み、傳八を先に以前の乞食皆々、探り探り出て來り

九助　素敵に暗い晩だア。

皆々　九助、今の音はなんだ。

九助　てつきり丑の時参り、そこらに居るか。尋ねろ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト蒜れ廻る。お高驚き、逃げんとするを九助、透かし見て

九助　そこに見える白い形は

皆々　慥かに女だわえ。

ト捕へる。お高、悔りして

たか　アヽモシ、御免なされませ。

九助　さういふ聲は、慥かに女だ。

たか　あれえ。

　ト逃げるを引ッ捕へて、

九助　ドッコイ、逃がしはせぬぞ／＼。

傳八　九助、念佛講だ。合點か。

色八　藪陰へ引摺り込め。

皆々　合點だ／＼。

　トお高へかゝるゆゑ、逃げんとすれど詮方なく、持つたる鐵鎚を打ちつける。この時、九助も腰に挾みし鐵鎚を落し、そこらを尋ねながら、見えぬゆゑ

九助　待て／＼。大事の鐵鎚を、今のどさくさに玉無しにした。

傳八　鐵鎚ぐらゐに構ふ事があるものか。打ッちやつて置け／＼。

　ト此うち文、お高の抛つたる鐵鎚を拾ひ取つて、透かし見て

文　爰にあつた／＼。

九助　丸三の印か。さうか／＼。

文　印が暗くつて解るものか……ソレ、受取つた。

ト出す。九助取つて

九助　只捨てゝはうまらねえ。これは斯うして置いてト、サア、これからが仕事だ。

ト お高の持つて來たる鐵鎚を自分のと心得、腰に差し、逃げんとするお高を、皆々寄つて押へつけ、手荒くする。この時、堂の内より庄九郎出かゝり、様子を窺ひ、前へ出て

庄九　ヤ、女一人を大勢寄つて

たか　モシ、助けて下さりませ〱。

皆々　サア、やッつけろ〱。

ト立ちかゝるを、庄九郎、高札を取つて打ち散らす。これにて皆々、下手へ逃げて入る。お高、庄九郎に取りつき、慄へゐる。庄九郎、あたりを窺ひ見て、

庄九　エヽ、太い奴等だ。モシ〱、女中さん、お怪我はござりませぬか。

たか　イエ〱、別條はござりませぬ。これと申すもお前のお庇。エヽ、有り難うござります。

庄九　なんの〱、其お禮には及びませぬ。併し、お前も大膽な、この暗いのに、女一人は危ないもの
サア〱、早く歸らつしやりませ〱。

たか　ハイ〱、私しも心願がござりまして、不動様へ時參り、危ふい所を、お前のお庇で

ト この時分、雷薄く鳴る。庄九郎の足へ、九助の落したる鐵鎚觸るゆゑ、取上げて見て

庄九 ハヽア、そんなら女中さんは時參りか。道理で鐵鎚が落ちてござりまする。これを持つてござりませ。

ト出す。お高、自分の鐵鎚と心得、何心なく取つて

たか これは／＼、何かと御深切に、有り難う存じまする。

ト行きかゝる。これにて雷烈しく鳴るゆゑ、庄九郎「ハッ」と云うてお高に縋りつく。お高、悔りして

アレ、悪い事をなされまする。

庄九 悪戯ではござりませぬ。私しは生れついて、雷が大嫌ひ。それゆゑ思はず抱きついたのでござりまする。

たか エヽ、お前もお嫌ひと見えますわいな。

庄九 私しは雷は大嫌ひでござります。それゆゑ今のやうに抱きつきました。眞平御免なされませ……

サア／＼、早くお出でなされませ。

たか これはマア、有り難うござります。

庄九　お靜かにお出でなされませ。
たか　お別れ申しませう。
ト此うち雷、段々と薄く鳴る。その間にお高、行かうとする。庄九郎も行かうとして、フッと心變りし體にて、合ひ方になり、兩方へ別れしが、兩人ソロ〳〵と立戻りくる。お高は松へ殘りの釘を打たうといふ心、庄九郎はお高に心あつて立戻り、兩人バツタリ行きあひ、吻り。
庄九　桑原々々。
ト お高へ縋る。お高、こなしあつて
たか　これはしたり、雷さんは、鳴りは致しませんわいな。
庄九　ヘエヽ、さうかえ。わしはまた鳴ると思つた。そんなら、この間に早く歸らつしやりませ。
たか　ハイ。
庄九　女中さん、ほんに先刻は、危ないところでござりましたな。
たか　ハイ、危ふいところを、あなたのお庇で助かりました。有り難う存じまする。左樣なら、これでお別れ申しませう。
庄九　アモシ……氣を附けてお出でなせえましよ。

ト思ひ入れあつて行きかゝりしが、ソロ／＼立戻り來て、お高も又引な打たうと松の方へ行きかゝる、雷

人また行きあたり

たか　又お歸りなされましたな。

庄九　今度は雷ではないが、私しは……こいつはどうも

ト　お高に縋りつく。お高、悄りして

たか　アヽ、コレ／＼、滅相な。お前はマア、どこのお方ぢやえ。

庄九　わしは上方から來立ての、お孤でござります。

たか　エヽ、汚ない。爰を放しや／＼。

ト振り切るをキッと捕へ

庄九　イエ／＼、わしは放しませぬ。どうやら味な心になりました。コレ、女中さん、今のお禮に

ト縋りつく。

たか　アレ、また惡い事を

ト逃げにかゝるを、キッと捕へ

庄九　そりや情ない／＼。お孤めらに會つて、難儀をする所をば、救つた私し、それぢやアお前は、恩

知らずといふものだぜ。

たか　ぢやというて、お孤の其方に

庄九　御報謝お願ひ申しまする。

ト追ひ廻し、帶の端を引ツ張る。これにて解ける。よろしく思ひ入れ。これにて時の鐘、雷やんで、月出る。お高、月あかりにて庄九郎の顏を見て、こなしあつて

たか　ヤ……尋ぬるお方に、てもマアよう似た

ト見惚れるこなし。庄九郎も思ひ入れあつて

庄九　ナニ、おれが似たとは

ト時の鐘、また月隱れる。庄九郎、空を見て

エヽ、生憎月が

たか　ま一度お顏を

ト顏を見たきこなし。この聲をしるべに九助、窺ひ寄つて

九助　〆めた。

トかゝる。お高驚き

たか　あれえ。

トこれにて庄九郎、九助を突き廻し、ちよつとお高を探り見て、構ふ心の立廻りよろしく、九助を當てる。九助、タヂ〳〵と下手へよろめき、此うちお高、爪づき轉ぶ。庄九郎、お高を押へ、よろしく、こなし。九助、見事にかへる。木の頭。兩人、色もやうよろしく　これなキザミ、ひやうし

幕

大詰　極印鍛冶屋の場

役名――極印千右衛門 實ハ眞間田甚三。雷庄九郎 實ハ小兒川傳藏。雁金文七 實ハ結城友之助。千右衛門女房、お蔦 實ハ里見息女清川。市右衛門女房、お藤　非人、九助。安の清兵衛 實ハ里見主水。里見長狭之助。非人、傳八。同、富。同、色八。同、友。山川屋手代、介右衛門。手捌取り鐵。同、忠。同、十。米澤屋文助。千右衛門妹、お高。醫者、砂原道庵。家主、太郎八。奴、伊達助。布袋市右衛門 實ハ新藤德次郎。

本舞臺、三間の間、常足の二重、正面佛壇を仕込みし押入れ、のれん口。下の方、鍛冶屋の鞴場、上

の方、二階屋體。下の見切り、朝鮮矢來、いつもの所に門口、この外へ路地口を取りつけ、すべて淺草七軒町あたり、鍛冶屋の體。爰に鐵、忠、鍛冶屋の手間取りにて、合ひ鎚打つて仕事の體。お藤、世話女房にて、取散らしたる膳椀を片附けてゐる。お蔦、振り袖、やつし前垂れがけにて、眼病ゆゑ火鉢へ薬をかけ、眼を蒸してゐる。各自思ひ入れよろしく、てんつゝにて幕明く。

忠　鐵公、延しを仕舞つたら、丁へひやかす氣は無えか。

鐵　あるのサ〳〵。おれも堂前や吉原中をひやかして、爰のお高さんに似た女があれば、上がらうと思ふが、あの位な代物は、どうも見えないワ。

ふぢ　モシ〳〵、お前方、仕事の間がよくば、鹽梅の變らぬうち、おあがりでないかえ。

鐵　長屋中へ膳を配るが、なんでござりますえ。

つた　今日は千右衛門さんの、御先祖の命日ゆゑ、心ばかりの精進物。お前方も、膳へ据つて下さんせえ。

忠　有り難うござります。折惡い、おかみさんの眼が惡くて、さぞ鬱陶しうござりませう。

鐵　爰の内のお蔦さんは、千右衛門さんといふ亭主があつても、振り袖を着てゐるな。畜生め、うまくして喰せるな。

ふぢ　おかみさんは眼が惡し、今日の忙がしいのに、妹御のお高さんは、どこへ行きなさんしたえ。
つた　あのお子は、昨夜觀音樣へ、お籠りに行かしやんしたゆゑ、まだ寐てぢやわいな。
鐵　觀音樣も凄まじい。昨夜は根岸へ通ふ神サ。
忠　ナニ、お高さんは根岸へ通ふ。そいつはどういふ譯で
鐵　譯は矢ッ張り、そんじよそれサ。
　　　トお蔦の方へ思ひ入れ。
忠　左樣さなア。爰の下齒は、千右衞門さんの目を拔いて、新參の文吉を
ふぢ　これはしたり、滅多な事を。
鐵　お高さんといひ、おかみさんまで、內中が色氣で、氣が揉めるわえ〳〵。
忠　そりやアさうと、新參の文吉は、この忙がしいのに、どこへ行つたしらん。
つた　あのお方は、髮結ひを尋ねに行たわいの。
鐵　あの文吉め、又どこぞへ入り込んで、女に鼻毛を延してゐるであらう。
ふぢ　ハテ、其やうに云はぬもの。今の浮世は、男が好いとて、女は惚れぬぞえ。兎角褸許の浮世。
二人　ヤア、そんなら金さへあれば

ふぢ　女子はどうともなるわいな。

忠　それを聞いては、今から精出し

鐵　ドリヤ、鐵を延ばさうか。

トてんつゝになり、兩人、合ひ鎚にかゝる。女形二人、あたりを片寄せてゐる。向うより文七、若衆かつら、やつし形。十、これも鍛冶屋の手間取りにて出て來り

十　コレ〳〵、新參の文吉、内は法事や仕事で忙がしいに、どこへ行つたのだ。

文七　ハイ、傍輩の衆が、髮結ひどのを尋ねて來いと云はれますゆゑ、勝手は存じませぬが、方々尋ねて

十　おきやアがれ。場所違ひの髮結ひを尋ねて、ナニ知れるものか。内は忙がしい、早く歸りやアがれ。

ト文七を突きとばす。

文七　ハテ、この人は……ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

ト舞臺へ來り

十　早く内へ入りやアがれ。

ト門口から突き入れる。お蔦、見て

つた　コレ〳〵、其やうに手荒くせぬもの……文吉さん、只今お歸りなされましたか。あなたのお戻りが遲いゆゑ、大抵お案じ申した事ぢやござりませぬ。

鐵　こいつはをかしい。爰のかみ樣は、内の弟子をつらまへて、べらぼうに叮嚀な御挨拶だ。

忠　どうでも怪しい、譯があるわえ〳〵。

十　それ〳〵、柳樽にもある通り「町内で知らぬは亭主ばかりなり」と、こいつは七兩二分では、濟まないぞ〳〵。

文七　コレ〳〵、お蔦さまは、千右衛門さまのお内儀にも、ならうといふ御身分。私しはこの間、弟子になりました新參者。お互ひに大事の身の上、不義がましい事があつては成りませぬ。滅多な事を仰しやつて下さるな。

鐵　白を切れば切るほど猶怪しい。日頃から短氣な千右衛門さん、重なつた所を見附けられ、四ツにされるを見るやうだ。

つた　これはしたり、又しても其やうな事を。それにはなんぞ、證據でもあつてかいの。

忠　證據の無い事は申しませぬ。私しはさる人に、昨夜とつくりと聞きました。

つた　其やうな事を何者が、アノ……

忠　それを云へば、血で血を洗ふやうなもの。

つた　なんとえ。

鐵　まだその上に、親方が留守の晩には、傍輩の者を寐こかしにして、若衆の夜這ひを、度々見ましてござりますよ。

ト持つたる鐵鎚を叩き立てゝ云ふ。

ふぢ　お前方は、どうしたものでござります。人も尋ねぬお二人さんの讒訴。世間へ聞えたら千右衛門さんの男が立ちますまい。

つた　云はゞ女房のわたしも、主の手前、どうも顔が合はされぬ。其やうな噂は、この上ともに、云うてたもるないの。

十　ナニ、たもるないとは、なんの事だえ。

忠　イヤ／＼、なんぼ其やうに云うても、二人は色に違ひ仲町廣小路。

ト鐵鎚を叩いて思ひ入れ。この時、持つたる鐵鎚にフッと目を附け

イヤア、今まで氣が附かなんだが、この鐵鎚は違つてゐる。これには丸に三の字の印。直しの持

つ鐵鎚だが、それにしても、内の印の附いた鐵鎚が見えぬわえ。

鐵　ハヽア、聞えた。そんならもしやお高さんが、この間根岸へ時參りに

皆々　ヤア。

鐵　イヤサ、時々道具は、改めるがようござる。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより千右衞門、一本差し、取交ぜし活け花を持ち、町人形の文助、介右衞門、半合羽、旅人逗留の形にて、後に下がり出て來り、花道にて

文助　モシ〳〵、千右衞門さまではござりませぬか。

ト呼ぶゆゑ、振りかへつて

千右　これは馬喰町の米澤屋の御亭主、どこへござります。

文助　ハイ、お前の所へ參じまする。用事と申すは、私し方に逗留の、大阪の客人、今日は同道いたしました。

千右　エヽ、アノ、山川屋の

介右　モシ〳〵、千右衞門さま、介右衞門でござります。大阪の見世で質に取りました、宗家の色紙、好い賣り口はお江戸と存じ、下りましたを幸ひと、お前が求めたいと、この間半金五十兩受取りま

したが、後金五十兩が延引ゆゑ、今日は持つて參りました。殊に口入れの文助さまも同道して、その譯聞かうと參りました。

文助　モシ〳〵、千右衞門さま、客人も長逗留ゆゑ、困られまする。どうぞ今日中にも片附けて、早う大阪へ立たせてあげて下さりませ。

千右　成る程、尤もなお賴み、如才は無いが、金づくの事、いづれ今日中には譯を附けて進ぜます。して、その色紙はえ。

介右　ハイ〳〵、卽ち持參いたしました。

ト白木の薄箱を見せる。

文助　左樣なら、どうぞ今日中に、譯を附けて進ぜて下さりませ。介右衞門さん、お前、直ぐにぬしのお宅へ行つて、待たつしやるがよい。

介右　左樣いたしませう。

文助　そんなら、わしは爰から歸りまする。千右衞門さま、お賴み申しまする。

千右　心得ました。お世話でござりました。

ト唄になり、文助、引返して入る。兩人、門口へ來て

お蔦や……お藤どの、歸つたよ〱。

皆々　ソリヤ、親方が、歸つたぞ〱。

ト俄かに鎚の音を烈しくさせる。千右衛門、介右衛門、内へ入る。

つた　千右衛門。いま戻つてか。

文七　アコレ……親方樣。お歸りでござりまするか。

千右　オヽ、文吉か、精出して仕事を見習へよ。今日は、おなたの御眼病は……イヤサ、嚊アどん、眼病はどうだな。

つた　ハイ、今日は大分よろしうござります。

鐵　大分よろしい筈サ。親方が留守にさへなれば、文吉と、おかみさんと

三人　アヽ、氣が惡い〱。

千右　やかましいわえ。無駄を云はずと、仕事をしやァがれ。

三人　ハイヽ。

ト鞴場へ立つて行く。介右衛門、文七を見て

介右　あの若衆は、大阪を逐電した、雁金文七ではないかの。

ト文七ギックリ思ひ入れ。千右衞門、引受って

千右 ア、コレ、とんだ事を云ふ。それは、わしが弟子サ。顏形まで似た者は、世間にいくらもあるものサ。

介右 ハテ、瓜を二つに割らずと其まゝ

ト思ひ入れ。この時お藤、介右衞門を見て

ふぢ ヤア、お前は大阪の、山川屋の介右衞門さんではござりませぬか。

介右 こなたは布袋のかみさん、どうして爰へ。

トもぢ〳〵する。

ふぢ サ、わたしやお前の親方さんへ、奉公にあげた幸吉が、行くへ知れぬとお内からの知らせ。もしや伊勢參りでもしやせぬかと、あの子を尋ねて故鄕の江戸へ、亭主の行くへも尋ねて下りましたわいな。

介右 わしは質に取つた色紙の事で、ツイ江戸へ下りましたて。

ト後先な事を云ふ。

千右 市右衞門がお內儀は、小僧が奉公先の若い衆ゆゑ、大阪からの馴染か。人といふものは、どこで

逢ふも知れないものだな。

介右　あのお藤どのは、どうして爰の内に

千右　サア、布袋市右衛門と異名を取つた、子煩惱であつたが、身持ちが悪いゆゑ、女房子にも生別れ、あのお内儀も、市右衛門が行くへは知れず、息子は迷子になつたゆゑ、元が江戸生れ、子と亭主を尋ねながら、よんどころなくわしが内の居候ふサ。

文七　折悪い、お蔦さまの眼病ゆゑ

つた　この眼病も、あなたの事が苦になるゆゑ。

ト文七へ思ひ入れ。

纎　その病持ちには誰れがする。

忠　あの文吉めがさせる業だ。

千右　また役にも立たぬ無駄を吐かすか……眼病は晝過ぎから痛むといへば、奥へ行つて休息しやれ。

ふぢ　ほんに、それがよろしうござりませう。

つた　そんならお前も御一緒に

千右　嬶アどん、この花を佛様へあげて下さい。

ト拵つて歸りし花を出す。お蔦、探り寄るを千右衛門見て

文七　これはしたり、氣の附かぬ。文吉、お蔦が手を引いてやりやれ。

文七　ハイ。私しがお手を取りませう。

つた　あなたとお手を取り交さば

ト嬉しき思ひ入れ。

千右　この上もない病の妙藥。

ふぢ　イヨ、通り者なるそのお裁き。

忠　あのマア二人の

三人　いちやつきわえ。

ト立ちかゝるを、お藤、隔てゝ

ふぢ　アヽモシ、花に嵐の吹かぬうち

文七　奥でゆるりと、お蔦さま

千右　ヤア。

文七　ドリヤ、お脊中を撫りませうか。

ト唄になり、文七、お蔦の手を取り、お藤附いて、門口へ入る。合の唄切れると、鳥追との唄に附になり、向うより非人一人、紙細工の猿の面をかぶり、酔つたる體にて踊りながら出る。傳八、この縄を取り、富、似せ壁にて、首へ一升徳利をぶら下げ、三人とも酔つたる體にて出て來り

富　壁に御禮謝〳〵。

傳八　サア〳〵、惡魔除けのお猿が參りました……お猿はめでたやなア。

富　ハイ、旦那樣、壁が一疋參りました。

ト門口にて手の内を乞ふ。十、見て

十　手がふさがつてゐる。通れ〳〵。

富　オイ〳〵、鍛冶屋さんでは出ないと仰しやる。

傳八　鍛冶屋の貧乏とは、よく附けたものだ。

富　その代り、爰の軒下で、一杯やらうぢやアねえか。

傳八　肴はおれが氣取つて來たぞ。

ト竹の皮包みを出す。

富　お猿も、面のまゝ、やらかせ〳〵。

ト袂より茶碗を出して、三人酒を飲む。

介右　時に千右衞門さん、色紙の事で江戸へ下り、逗留のうち、吉原の櫻にはまり、金も餘ッほど遣つたゆゑ、後金を取らにやァ歸られませぬが、いよ〳〵後金は

千右　今日中に方を附けてやる。その譯といふは、わしが妹のお高が所へ、五十兩の持參で聟が來る筈。その金を取つて、お前の方は、今夜中に

ト此せりふを門口の傳八聞いて

傳八　なんだ、今夜爰の内へ聟が來ると。

富　こいつはおつになつて來たわえ。

ト門口の三人、内へ目を附け、よろしく思ひ入れあつて

傳八　ハイ、御免なされませ。

ト内へ入ろ。千右衞門見て

千右　ヤ、てまへは非人の傳八ではないか。

傳八　左樣でござりまする。モシ、旦那え、いま聞けば、お妹御の所へ聟入りがあると仰しやるが、お前さん、それぢやァあの九助に借りた、彼の相談が

ト云はうとする。

千右　ア丶コレ、何も云ふな、あの時の事は、おれが胸にあるワ。何も云ふな〳〵。

ト　いろ〳〵思ひ入れ。

傳八　イエ〳〵、お前が胸にあると云ひなさつても、旦那方と、わしらが仲間とは、また格別なものだから、なんであらうと、聟入りの始末を聞いて行つて、九助にもとつくりと話して

千右　ヤイ〳〵、われが何も聟の始末を聞くにやァ及ばぬワ。なんであらうと、用があるなら九助を寄越せよ。

傳八　イヽエ、わしが聞いて行くワ。旦那、乞食のわしには、掛合ひは出來ねえのかえ。

千右　知れた事だワ。わいらが知つた事ぢやァない、口出しをしやァがるな。

傳八　口を出したがどうした。乞食の傳八が、口を出したが惡いのか。

千右　この、イケ乞食めが。

ト立つて傳八を外へ突き出さうとする。

傳八　なんだ、この二才は、乞食をぶつのかえ。

富　コレサ、旦那衆だワ。靜かにしやな〳〵。



根ぎしの場



かぢやの場

傳八　否だ〳〵。〆めるなら〆めろ。乞食を〆めろ〳〵。

千右　うぬ、そのいけ口を

ト立ちかゝり、騷ぐな、皆々中へ入つて留めろ。介右衞門も件の色紙の箱を持つたるまゝ、留めろと て、ちよつと箱を下に置き、皆々千右衞門をなだめろうち、捨ぜりふ。此うち、猿の面をかむりし乞 食、そつと起きて、この箱を取つて、見えぬやうに、懷の似せ色紙を入れかへて、元の所へ置く。皆 皆これを知らず、ワヤ〳〵云うて千右衞門を留める事。介右衞門、心附き、ちやつと箱を取つて懷中 する。面をかむりし非人、また元の所へ寢る。富、思はず立つて

富　これサ、靜かにしやれな。

介右　イヤア、譩が立つたな。

傳八　亭主が相手だぞ〳〵。

千右　やかましいワ。乞食の相手になるものか。

ト鐵が持つてゐる丸三の鐵鎚を取つて、傳八の頭をくらはす。少し疵つく。

傳八　アヽ、痛いぞ〳〵〳〵。爰の亭主が、乞食の頭を

ト鐵鎚を見て

ヤ、こりやァ慥か九助が鐵鎚。どうして爰に

忠　やかましい。歸りやァがれ。

　ト向うへ突き出す。皆々、千右衛門を留める。傳八は鐵鎚を持つて

傳八　この鐵鎚が、相手だ〳〵。

皆々　エヽ、歸りやァがれ〳〵。

傳八　否だ〳〵。

富　ハテマア、來やれな。

　ト傳八を引ッ張り〳〵、腰茣蓙も足駄も忘れ、鐵、忠は、傳八を突きやり〳〵、捨ぜりふ、角兵衛獅子の鳴り物にて、皆々、ワヤ〳〵云うて向うへ入る。

介右　イヤモウ、上方でも御當地でも、誠に癩病に棒打ちでござりまする。

十　併し、あの乞食の頭へ疵が附きやした。

千右　なんの、彼奴等が腦天を、叩き割つても大事ないわえ……大事といふのはその色紙。必ずともに

介右　いづれ返事を聞いて參りませう。其うちお宿を

千右　さうさつしやりませ……コレ、十八、此お方を案内して

十　心得ました。サ、お客人、斯うござりませ。

ト唄になり、十、案内して介右衛門、のれん口へ入る。千右衛門、佛壇に向ひ、線香を立てゝゐる。この唄をかり、向うより太郎八、頬かむりにて、紙屑の荷をかたげ、息せきと出て來り、門口へ來て面かむりの乞食が寢てゐるを見て

太郎　これはしたり、門口になんだ、此奴は。サア／＼、立つて行け／＼。

ト引起して叱る。乞食は圖々しく、面のまゝ路地の内へ入る。

さて／＼、大家といふものは、乞食の寢せ起しまで世話をするわえ。

ト内へ入り

コレ／＼、千右衛門どの、聟の相談が、極まつた／＼。

千右　ヤ、大家さんかえ。聟の相談は極まりましたか。

太郎　極まつた段か。向うは大金持ちの俗醫者どの、その名も砂原道庵といふ、イヤ、とつけもない好い男だ。その上に、相談通りに、五十兩の持參金。なんと、家主は働き者でござらうが。

千右　それは近頃御苦勞でござりました。五十兩さへ持參があれば、晝でもよいから、いま直ぐに連れてござりませ。

たか　エヽヽヽ。アノ、わたしへ今日聟さんがござんすえ。お前もマァ滅相な。いかにわたしがやうな者ぢやというて、得心もさせいで、其やうな事をして、マア、聟さんは、何人でござんすえ

千右　サ、その聟どのは、俗醫者との事。知つての通り、おれが連れて來たあの女房は眼病。家の内へ醫者を聟に取ると、内中の者が煩らつても案じが無いから、そこで醫者を聟に取るのよ。

たか　エヽ、滅相な。わたしや醫者さんは否でござんす。ほんにこれまで、お前には云はねども、わたしには願ひがあるゆゑ、どうも男を持つ事は

千右　エヽ、そんならおぬしは、約束した男があるのか。

たか　イエ〳〵、なんの其やうな

千右　無いなら聟を

たか　サア、それはナ

　　トこの時、十、出かゝりゐて

十　イエ〳〵、聟の相談は、御無用になされませ〳〵。

たか　サ、わしもその心ぢやによつて、こなさんも兄さんへ、よいやうに云うて、聟さんの事を

十　わしが變替へさせまする。氣遣ひなさるな。聟は變替へ〳〵。

千右　やかましいわえ。われが何を知つて。コレ、妹、否でも應でも、おぬしに聟を取らせねばならぬワ。

たか　イエ〳〵、お前が其やうに云はしやんしても、聟さんは持ちませんわいな。

千右　イヽヤ、兄が持たせるワ〳〵。

たか　持ちませぬわいな〳〵。

千右　うぬ、其やうな強情な事を。兄の威光で持たせるワ。

たか　否ぢやわいな。

千右　まだその口答へを

ト立ちかゝる

ト　ハテ、近所へ外聞が惡うござりやす。

ト千右衛門をなだめる。唄になり、向うより清兵衛、羽織袴、大小。伊達助・奴の拵らへにて、深き塗り網代の笠をかむり、紗の法衣、旅僧の拵らへの出家の行く先を圍ひ出てくる。伊達助はいの字を書きし額を持ち、讀みながら出てくる。花道にて伊達助、出家をキッと留めて

伊達　御前様、この出家は旅僧と見え、額のあらまし詳しく聞けば、何か様子の

ト清兵衛、額を見て

清兵　假名のめの字を書いたるこの繪馬、殊に願主は七軒町、鍛冶屋千右衛門が妻蔦と、記せし手蹟の樣子。心覺えの妹が

ト云ふのを旅僧聞いて思ひ入れ。

それを持參のその出家。

ト目を附ける

伊達　いよ〳〵こなたは頼まれてか。

トこれにて旅僧うなづく。清兵衛目を附ける。

清兵　ハテ、姿形も

ト思ひ入れあり

して、千右衛門とは

伊達　即ちあれなる

清兵　供いたせ。

伊達　ハツ。

ト唄になり、直ぐに門口へ來り

賴みませう〳〵。

十　ソリヤ、聟が來たぞ〳〵。

たか　聟さんなら、わたしや、逢はぬわいな〳〵。

千右　逢はさないで堪るものか。コレ

たか　知らぬわいな。

ト振り切つて奥へ入る。

十　コレナ、聟でもいゝわな。わしが居やす。わしが居るわな。コレ、お高さん〳〵。

ト同じく入る。

伊達　賴みませう〳〵。千右衞門どの、お宅でござるか。

千右　アイ〳〵、誂らへ物なら、お入りなされませ。

伊達　お聞きなされましたか。

清兵　然らば許しやれ。

ト繪馬を持ち、合ひ方になり、内へ入り、上座へ通る。伊達助、門口へ扣へる。件の旅僧、笠を傾む

　け、同じく門口に扣へる。千右衛門、思ひ入れあつて

千右　どうやらお顏もどこでやら、お見受け申したお歷々。して、あなた樣は。

清兵　かゝる姿で參りしゆゑ、見忘れもこりや尤も。用事といふのは外ならず、多田の藥師へ納むるこの繪馬、願主は即ち七軒町、鍛冶屋千右衛門妻蔦と記せしこの手蹟。いよ／＼この家の女房とな

千右　へイ、蔦と申すは、わしが女房。それをあなたが、お尋ねなされまするは

清兵　見覺えあるゆゑ。

千右　エ。

清兵　身共が妹の筆勢に、よくも似寄りのこの手蹟。それゆゑこれへ尋ねて參つた。千右衛門、其方が女房はその以前、清川と申したであらうな。

千右　エ、どうしてそれを御存じの……あなたのお面、伺ひますれば、慥かに去年

清兵　この姿ゆゑ忘るゝも道理。身共が正體

　ト合ひ方になり、羽織大小袴を取り、一本差しになる。此うち伊達助、駈けよつて手傳ふ。

五人男の仲間うち。

　ト男達の思ひ入れ。千右衛門見て

千右 オヽ、おぬしは安の
清兵 清兵衛ぢやわいの。千右衛門、さて〳〵、久しや〳〵。
ト大胡坐かく。
千右 おぬしも健で、よう尋ねて來やつたの。
ト思ひ入れあつて
以前は以前、今の身は、本地へお歸りなされしあなた。何ゆゑ今日私しの
清兵 尋ね來るも外ならず、妹清川、結城の次男友之助への云ひ號け、然るにいつぞや某こと、上京の
その砌り、妹ことは館を立退き、行くへ知れず。さある時には家の掟、妹ながらも死罪は遁がれ
ぬ。その女は詮議最中。繪馬の文字が似寄りの手蹟、千右衛門が妻の蔦、その女こそ某が、もし
や尋ぬる妹かと、わざ〳〵これへ尋ね參つた。樣子といふは……千右衛門、マア、此やうな譯ぢ
やと思やれ。
ト町人に碎けし思ひ入れ。この時、二階の障子を明け、お蔦窺ふ。
千右 アヽ、そんなら極印が女房の、蔦の手蹟がお屋敷の、淸川さまとやらいふお方に、似たので、あ
なたが

清兵　わざ〳〵爰へ
千右　折角お出でなされても、女房の蔦は
清兵　逢つてあるか。
千右　いかにも左様。
清兵　ハテ、深切に、よくも庇うて
　ト思ひ入れ。この時、お蔦思ひ入れあつて
つた　不孝な妹の身の上を、案じてはる〴〵、兄上様の
清兵　ヤ、聲は慥かに
長狹　清川さまの
　ト旅僧笠を取る。長狹之助、寺坊主の拵らへ。
つた　ヤヽ、弟が物ごし
清兵　さては、いよ〳〵
　ト見上げる。
千右　コレ

ト隔てる。お蔦、硝子を閉す。途端に簪落ちる。清兵衛、取つて

清兵　紋は雁金、女子の道具に

千右　エ。

ト思ひ入れ。

清兵　何かといかい、世話でござらう。

千右　すりや、御出家も

ト長狭之助へ目を附ける。

長狭　里見の次男長狭之助、今は出家の世捨て人、姉の行くへを知らん爲、この程よりの裏屋住み、繪馬を頼みしこの家の女中、姿變れど清川さまと

伊達　お察しあつて受取るあの繪馬。

長狭　武家を望まぬこの身ゆゑ、今は館も捨て坊主、町家を修行も後世の爲。實の姉者に逢はんものと爰らあたりを離れぬ旅僧、只願はくは結城家にて、失せし色紙を尋ね出し、友之助どのへ云ひ譯立たば、清川さまとめでたう祝言。

清兵　ヤ。

長狹　イヤサ、出家のこの身は、後世こそ大事。

清兵　然らば我れらは今までの、町家へ使つてこなたの内に、大名變じてござつたと

千右　殿は鍛冶屋の居候ふ、以前の友達、安の清兵衞。

清兵　極印千右衞門。

長狹　姉者人なる清川どのゝ

清兵　云ひ號けせし友之助、今は日蔭の雁金文七、花を見捨てゝ遠國他國へ

千右　イヽヤ雁金、高飛びを、させぬ心であのお蔦、振り袖のまゝ女房と、云ふ極印が心のうちに

長狹　二人を隱まふ、正しく主の

千右　アモシ……出家のいらぬその助言。

清兵　下部はこの旨、屋敷へ歸つて

伊達　して、御前には、矢張りこの家に

清兵　極印鍛冶屋にいしかつて　事の樣子を……下郎は先へ

伊達　然らば下郎は

長狹　身は三界に家なき出家。さはいへあたりに借家して

清兵　姉が力に、ナ

ト簪を投げやる。長狹之助、取つて

長狹　布施物しかと

●清兵　受けてくりやれ。

ト唄、時の鐘になり、長狹之助は簪を持つて路地へ、伊達助は引返して向うへ入る、千右衛門、あとを見送り。

千右　あの御出家は、わしらが長屋の獨り住み。素性を聞けば

ト清兵衛と顏見合せ、思ひ入れ。

清兵　さて、これからは久しぶりの極印、以前の事を忘れかねて、また武士を捨てる氣ぢやが、なんと身共を、內へ置いてはくれまいか。

千右　そりや易い事ぢや。併し、今日はおれが妹の所へ、聟が來るから、マア、わざと、吸ひ物の支度でもせずばなるまいが、わしが親の命日、精進物でなりと祝言の拵らへ。おぬしは、あの鞴場へ、鍋を吊して、吸ひ物の支度を賴むワ。

清兵　合點だ〳〵。予は鍋を掛けて吸ひ物の拵らへ。して、千右衛門は

千右　おれは味噌を摺りにかゝらう。サア〳〵、清兵衛、働らいてもらはう〳〵。

清兵　合點だ〳〵。

ト唄になり、千右衛門、摺鉢を引寄せ、味噌を摺りにかゝる。清兵衛は竈場へ鍋を吊し、火を燃す事この模様よろしく、向うより庄九郎、上下にて、一腰を差し、派手なる拵らへ、太郎八、踏込みを穿き、鰹節鯣の編みした白木の臺へ載せ、跡より道庵、撫でつけの頭にて、甲看板を着て中間の形、挾み箱を擔ぎ、供の見得にて出て來り

庄九　モシ〳〵、旦那樣、嫁の内は、向うでござりまするか。

道庵　これはしたり、その旦那あしらひは無用〳〵。頼んだ貴樣は、杯までの聟樣よ。愚老は中間の可内と云やれ。もし用があらば、家來參れ、可内參れと、大風に云やれ、その時愚老は、ネイ〳〵と云ふワ。よいか〳〵。

庄九　左樣なら私しは、旦那の道庵さま、旦那は中間の可内と申しまするか。よし〳〵、……可内、參れ。

道庵　ネイ〳〵〳〵。

太郎　これはよいわえ。併し、持參金の五十兩はナ。

道庵　その金は、コレ〳〵、爰にあるヮ。てまへに渡すから、杯が濟んで、好い時分に出しやれ。サア
サア渡すぞ。五十兩あるぞ。忘れまいぞ〳〵。

ト庄九郎に包み金を渡す。

庄九　心得ました〳〵。好い時分に渡しませう。……可內、供を致せ。

道庵　ネイ〳〵〳〵。

ト門口へ來り

太郎　サア〳〵、聟樣ぢや〳〵。

道庵　聟が來たぞ〳〵。

千右　サア〳〵、聟が來たさうな〳〵。

淸兵　なんぢや、聟ぢや、それは混雜であらう。

太郎　サア〳〵、聟樣、あれへお通りなされませ〳〵。

庄九　然らば御免下されい……コリヤ、家來可內。

道庵　ネイ〳〵〳〵。

ト庄九郎、上へ通る。

太郎　コレ〳〵、兄貴々々、此お方が妹御のお高どのへ、聟入りなさるゝ砂原道庵さまぢや。お近附きにお近附きに。

千右　これはしたり、お前が道庵さまでござりまするか。私しがお高の兄の、千右衛門でござりまする

庄九　エヽ、其許様がナ。身共は即ち聟の道庵でござりまする。不調法者、この上ともに

ト両人、顔見合せ、

千右　ヤ、聟といふのは、雷だの。

ト惘りする。

太郎　ナニ雷だ。

道庵　イヤ、桑原々々。

ト耳をふさいで思ひ入れ。清兵衛見て

清兵　ヤヽ、成る程、雷ぢや〳〵。

道庵　アヽ、まだ鳴りまするか。

ト耳をふさぐ。

千右　これはしたり〳〵。この聟様の事は、去年まで雷の

庄九　アヽコレ、舅御どの〳〵、その雷と申したは、去年まで大阪住吉に於て、雷おこしのごろ〳〵屋、其ごろ〳〵屋を致した私しゆゑ、そこで兄御も雷と

千右　ツイ口癖の雷と、それで思はずハイ爰で

清兵　思ひがけなう安の字の、この清兵衛も今方爰へ、久し振りでの顏合せ、三人寄れば

庄九　文珠の智慧も分別も、今に尋ぬる定家の色紙、在所もそれと

千右　やう〳〵知れた。

庄清　ヤア、アノ、色紙の行くへが

ト思ひ入れ。太郎八、何氣なう

太郎　コレ〳〵、四海浪なら、祝言のお定まり。

道庵　ちつとも早く、祝言を〳〵。

庄九　これはしたり、可内、默らぬか〳〵。

道庵　ネイ〳〵〳〵。

太郎　コレ〳〵、兄貴、聟樣が持參金も、お持ちなされたほどに、マア〳〵、嫁御を〳〵。

千右　成る程、肝腎の嫁が出ませぬ。コレ〳〵、お藤どん、お高を爰へ連れて來て下さりませ。

ト奥へ向ひ、呼ぶ

ふぢ　アイ〳〵。サア〳〵、來なさんせいな。

トのれん口より、嫌がるお高を連れて、丸行燈を持つて出て來る。

たか　これいなア、捨てゝ置きなさんせ。わたしや今宵の祝言は、否ぢやわいなア〳〵。

ふぢ　さうではござんせうが、千右衛門さんも、五十兩といふ金の工面の最中。それぢやによつて、ちつとの間辛抱して

千右　ハテ、金さへ取れば、跡はてまへの勝手次第、合はせ物は離れ物。併し、この雷がどうして金の

ト思ひ入れ。

庄九　持參は卽ち五十兩、この通り〳〵。

ト見せる。道庵あわてゝ

道庵　アヽコレ、まだ早いぞ〳〵。杯してから渡すのだぞ〳〵。

庄九　コリヤ〳〵、可內、何をおのれが、扣へてゐやれ〳〵。

道庵　ネイ〳〵〳〵。

庄九　コレ〳〵、仲人どの、何に致せ、持參金も渡しませうが、嫁御に逢はせては下されぬか。

太郎 左様でござりまする。サア／＼、女中、嫁御を聟どのに引合はせた上、杯を早く、頼みます／＼

ふぢ 左様でござりまする。お前方、銚子杯を揃へて、お頼み申します／＼。

清道 オツト承知々々。

ト あたりより杯と銚子、三方に長熨斗を運ぶ。

ふぢ サア／＼、わたしがお酌をするほどに、サ、お高さん、お前始めて

たか エヽ、知らぬわいな。

ふぢ ハテ、それでは悪い、お前が始めて、あの聟様へ

ト庄九郎を見附け

ヤ、お前は主の弟御。どうして爰へ。

ト云ふを押へて

庄九 アヽコレ、今宵思はず持参金を、持つた花聟、わしは聟、ナ……ぢやによつて、爰で身の上云うては悪い。他聞の手前、知らぬ同士／＼。似た者は、世間にいくらもある習ひでござるて。

ト呑みこます。

ふぢ さう云はんすりや今爰で、千右衛門さんの妹御と、同じ仲間の

ト思ひ入れあり

マア〳〵、お前が飲んで

トお高に杯を無理に持たせ、お藤、酌する。道庵思ひ入れ。

道庵　然らば可内が、めでたく謡ひませう。エヘン〳〵……杯をすると其まゝ、持參金渡すと、聟は入れ變る、床入りするは愚老なり……エヽ、おめでたうござります。

ト此うちお藤、酌してお高に飲ませて、杯を庄九郎にさす。これにてお高、庄九郎を見て、思ひ入れあり

たか　ヤ、聟さんといふお醫者さんは、主さんかいな〳〵。

千右　オヽヨ、この雷が、今夜の聟どの。

たか　いよ〳〵あなたが聟さんなら、わたしや祝言いたすわいな。

太郎　それはめでたい。祝言々々。

庄九　然らば持參の五十兩。

ト千右衛門に渡す

千右　この金あれば、尋ぬる色紙を

庄九　ヤヽ、すりや、その金で彼の色紙を
たか　早く杯を聟さんへ
ふぢ　風が變つて、どうやらこの子が……サア〳〵、聟樣、お前
　　ト杯を差出す。
庄九　然らば聟が
　　ト杯を取上げる。
道庵　めでたい〳〵、謠ひだ〳〵………床入りの時入れかへに、それを愚老は待ちゐたり〳〵。
　　ト庄九郎、酒を飲む事あつて
庄九　思ひがけなう雇はれの、聟入りをするその兄は、同じ朋友、眞間田氏、
千右　妹が聟は同家中、殊に五人の仲間うち、その雷に思はぬ小舅。
清兵　添へ聟即ち淸兵衛が、案に相違のめでたい祝言。
たか　案じるよりは嬉しい今宵、この上ともに、必ず見捨てゝ下さんすなえ。
　　ト庄九郎へ寄りそふ。道庵心得ぬ思ひ入れ。
千右　めでたく祝言調うて、持參の金が色紙の後金。

庄九　それ手に入らば若殿の、お身の明りも立つ道理。
清兵　その上にては友之助、清川二人もあやかる祝言。
たか　見染めたお方が五十兩、持參で聟にござんすとは、冥加ないやらこの上に
ふぢ　云ひ分のないお高さん、ゆるりと爰でしげりなさんせ。
　　トよき時分、そこへ蒲團を敷く。
たか　エヽ、嬉しうござんす。
千右　其うち、わしは
清兵　兄貴と一緒に
千右　聟どの
庄九　舅御……併し夢なら
たか　覺めては、わたしや
　　ト庄九郎に寄りそふ。道庵氣を揉み
道庵　コレ、約束が
　　ト寄るを、太郎八とめて

太郎　跡でゆるりと
ふぢ　お供さん。
道庵　イヽヤ、愚老は
清兵　ハテ、わしらも一緒に
千右　ドリヤ、開きませうか。

ト唄になり、この人數皆々、道庵氣を揉むを、太郎八連れて奥へ入る。兩人顏見合せ、思ひ入れ。合ひ方になる。

庄九　コレ〳〵、お高どのとやら。有やうは、わしは雷庄九郎というて、こなたの兄貴とは兄弟同然の者だが、お主の爲に去年中、五人連れ立ち大阪住ひ。定めてこなたも知つてであらうが、どういふ事で、こなたはわしを
たか　アイ、其お尋ねに、わたしやどうやら面伏せ。

ト合ひ方。

まだ兄さんも鎌倉の、お屋敷にござんすうち、あの江の島へお參り申せし道すがら、遠乘り姿のお侍ひ。形も立派なその出立ち、その時わたしや

ト思ひ入れあり。

オヽ恥かし。

トこなし。

庄九　アヽ、そんなら去年若殿の、お供いたして遠乗りの、その時こなたは

たか　アイ。

ト俯向いて思ひ入れ。

庄九　ハテ、縁といふものは、どこにどのやうな

ト思ひ入れ。よき時分、道庵、ソロ／＼と出て來り、庄九郎と顔見合せ、行燈の灯を消せと仕方して見せる事。庄九郎、これに構はず、お高を引寄せて

どこにどのやうな色戀があらうやら、イヤ、知れぬものぢやて。

トいろ／＼あだつく。道庵、堪りかね

道庵　エヽ、自烈たい。

ト行燈の灯を吹き消し、床の上へ來り、眞中へ入る。此うち捨て鐘、合ひ方。道庵、思ひ入れあつて

實の色男は、愚老ぢや／＼、道庵ぢや。

ト　お高に縋りつく。

たか　アヽコレ、誰れやら爰へ

庄九　其奴は、間男であらう〳〵。

道庵　イヤ〳〵、間男ではない。實の聟だぞ〳〵。

庄九　イヤ、間男だ〳〵。

ト呼び立てる。この時、奥より酒に醉つたる十、蠟燭を持つて、太郎八も附き、出て來り

十　なんだ、いま聟が來たに、もう間男か〳〵。

ト醉つたる思ひ入れ。

庄九　間男だ〳〵。

道庵　イヤ〳〵、實の聟だぞ〳〵。持參金は、おれがのだ〳〵。

ト騒ぐ。十、灯を行燈へ移し

十　なにが實の聟だ。コレ、よく嘘を吐くな。此方の男は、先刻來た聟に違ひない。てまへはその時に、供をして來た折助だワ。

道庵　イヤ〳〵、先刻は折助でも、實の聟はおれだ〳〵。金もおれがのだ〳〵。

十　イヽヤ、われは折助だ〳〵。

太郎　アヽコレ、それにはちつと譯があつて、この折助どのが、聟だよ〳〵

十　ナニ聟だ。こなたは仲人ではないか。その仲人が、聟と折助を履き違へて濟むものかな

ト留める。

道庵　べら坊め、愚老は間男ではないワ。聟だ〳〵。

十　なに、うぬは折助だワ〳〵。

ト兩人爭ふうち、太郎八、氣を揉み、門口に壁の忘れし腰茣蓙に附きし繩を取つて、道庵が帶に結びつけ、兩方をなだめて

太郎　コレサ、間男でない、お前は聟だよ〳〵。

道庵　知れた事だ。聟だぞ〳〵。

十　ナニ折助め。

ト爭ふうち、向うより富、忘れし腰茣蓙と足駄を尋ね、走り出て來り

富　先刻の喧嘩に、壁の道具を忘れた。慥か爰らに

ト見附け、取上げて



花川戸助六

イヤ、有つたぞ〳〵。これで躄も落ちついた。

ト腰莫蓙を腰へ當てゝ向うへ行く。道庵、この繩に引かれ、向うへ思はず行く。十、見附けて

十　ヤイ〳〵、折助め、なぜ逃げる〳〵。

道庵　ナニ逃げるものか。逃げはせぬワ〳〵。

十　それでも、それ〳〵、矢ッ張り逃げるワ。

道庵　おきやアがれ。聟が持參を置いて、ナニ逃げるものか〳〵。

ト云へども、富、腰莫蓙を腰へ巻き、躄り〳〵

富　叶ひませぬ躄には、何も後生と思し召し

ト躄り〳〵向うへ入る。道庵、これに引かれ、後向きになつて

道庵　逃げはせぬぞ〳〵。聟が持參を置き逃げ、駈落ちはせぬぞ。

十　それでも、逃げるワ〳〵。

ト兩人爭ひ〳〵、向うへ入る。太郎八は見送つて路地へ入る。庄九郎お高見送り

庄九　イヤ、餘ッほどな、たはけ者だ。

たか　そんなら今のあのお方が

庄九　誠は敷金持參の聟の正銘、斯ういふおいらは、似た山聟サ。

たか　その聟さんが間違うて、わたしが仕合せ。

庄九　結ぶ妹背の

たか　かための杯。

庄九　變りはせぬか、女房ども。

たか　わたしが聟さん。オヽ、嬉し。

　　ト抱きつく。この時、奥にて人音するゆゑ、兩人ほぐれる。千右衞門、介右衞門を引立て出る、これに清兵衞お藤、附き出て來り

千右　ヤア、盜人野郎め。うぬ、五十兩騙つて、後金まで取つて渡したに、此やうな似せ物を、授けたな授けたな。

　　ト件の箱に摺りかへし色紙を入れてあるを、介右衞門に見せる。

清兵　アヽ、そんなら、この大阪から下つた質屋の手代が、あの色紙を

庄九　その男は山川屋の手代。そんなら江戸へ下つてゐるのか。

ふぢ　モシ〳〵、この手代どのは、山川屋を駈落ちしたと聞きましたわいな。

千右　さうであらう〳〵。サア、手代め、誠の色紙を、出しやァがれ〳〵。

ト締めあげる。

介右　アイタ〳〵。これサ、わしは上方で、色紙を盗んで駈落ちしたが、爰へ來て、ナニ悪い事をするものかな。わしは摺りかへはせぬよ。

千右　それでも色紙が似せ物だ。先刻の五十兩も、返しやァがれ〳〵。

ト介右衛門が懐より、五十兩を引出す。

たか　ヤ、その金は庄九郎さんが、持參金の五十兩。そんならそれが

介右　コレ〳〵、千右衛門さん、いま云ふ通り、大阪に居るうち、似せ物を拵らへて、箱へ入れ置き、それから駈落ち。誠の色紙は貴樣達に賣つて金にしようと、箱へ入れて持つて來たに、わしが拵らへた似せ物が、どうして又この江戸に有つて、わしが手へ廻つて來たのか。誠にこれが、天命といふものだな。

ト色紙を取つて思ひ入れ。庄九郎も見て

庄九　成る程、こりやァ大阪で見たこの似せ物。これが江戸まで廻るとは

ト思ひ入れあり

ア丶、そんならあの時捨てもせず、受取つたは兄貴の布袋。もしや當地へ

ト お藤と顔見合せて思ひ入れ。

千右　マア、何にしろ、この手代め、逃がしては蔓を失ふ。此奴は斯うして

ト有りあふ繩で縛りあげ

コレ、妹、お藤どのも、臺所へ連れて行き、此奴を逃がさぬやうに、合點か。

ふぢ　心得ました。サ、お高さん、お前も一緒に

たか　アイ、わたしやアノ庄九郎さんに

千右　この男には用もあり、マア／＼おぬしは

たか　そんなら必ず、モシ、庄九郎さん

庄九　マア／＼、奧へ

ふぢ　サア、來なさんせいなア。

ト お高を先に立て、件の繩を引ッ張り／＼、介右衛門を引摺つて暖簾口へ入る。二人殘つて

千右　コレ、この似せ物が手に入つても

庄九　誠の色紙が出でざるうちは、若殿樣の矢張り御難儀。

清兵　さすれば妹の清川も、心遣ひに今の眼病。繪馬に掛けたる心願も
ト繪馬を見て思ひ入れ。
庄九　大阪住ひの去年の事、あの山川屋にあるを聞き、兄の手引きに仕附けぬ盗人。首尾よく行つたが眞赤な似せ物。その又似せが廻り〳〵て、爰へ出たのも、正しく彼のが
ト市右衛門の事を思ひ出す體。
清兵　兄とはいへどあの者は、噂の高い新藤徳次郎といふ盗人。それが勸めに大阪で、五人男と異名して、ありとあらゆる横しまも、みな新藤が勸めと云へど
千右　もしこの江戸へ來てゐては、布袋が口からこの身の舊悪。
庄九　誠に兄だがあのやうな、心の悪い者もない。弟の身でさへ身の毛が戰つ。當所に居ぬのが四人の仕合せ。もしや居たなら、滅多に話しも
ト三人寄つて話しのうち、よき時分より門口へ、件の猿の面かむりし非人、路地より出て、ウソ〳〵内を窺ひ居る。千右衛門、見附けて
千右　わりやア先刻の物貰ひ、日の暮れたにまだ居たか。ひつこい乞食だ。通れ〳〵。
ト云はれ、面のまゝズツと入り、三人の中へドツサリ坐る。

庄九　ヤ、此奴はなんだ。

千右　この乞食めは、通れと云ふは内ぢやアない。外へ通れといふ事だ。ひつこい物もらひめ。キリキリ外へ

ト引立てにかゝる。この時障子屋體より文七とお高、覗く。庄九郎見て

庄九　ヤ、さてこそ若殿、この内に

ト思ひ入れ。

千右　イヽヤあれならこの間、鍛冶屋の弟子になりに來た、丁稚の文吉。

清兵　文七なれば雁金の、四人寄つたら久しぶり。

庄九　解けた話しも出來やうが、それも兄だが布袋が居ては

市右　滅多に出來ぬか。

ト猿の面のまゝセリフ。三人、愕りして

三人　慥かに聞けば

トこれにて文七、障子を閉す。市右衛門、目を附ける思ひ入れあつて

市右　五人男の仲間でも、それ程までに刎ね出され

三人　よもや、これほど落ちぶれは
　　　　　ト目を附ける。
市右　イヤ、落ちぶれた。四人の手合ひはそれ相應、どうした事か福人の、布袋ばかりはこの態で、爰
　　で逢ふのも、かむつた猿の
三人　ヤ。
市右　面目ない話しだ。
　　　　　トこれにて猿の面を取る。三人見て
三人　そりやこそ布袋だ。
市右　仲間の手合ひ、さて久しぶりだの。
　　　　　ト合ひ方かはる。
庄九　コレ、兄貴、今日まで行くへの知れないこなた、この又江戸へござつたら、以前の舊惡、その身
　　の爲に
市右　ならぬは承知だ。尋ねられると聞いたから、面を隱した猿の面。爰から直ぐに蝦夷松前、一夜の
　　うちにも走る氣だが、併し路銀に差支へ、巣立ちが出來ねえ。分けてこれまで懇ろに、五人連れ

なる仲間同士。モシ、お大名の清兵衞さま、極印は鍛冶屋見世、庄九郎は弟の事、頭も爰に居候ふか。四人揃つてござるなら、ちつとかそつとか物は相談。腹の膨れた禪寺の、布袋も首が細つたで、自身に廻る奉加帳、苦しがりには愛想が盡きるの。

ト思ひ入れ。三人、こなしあつて

千右　仲間のうちならまんざらに、見捨てる事でもなけれども

清兵　大祿取りも物好きな、知行に更へる男達。

庄九　色紙の行くへも今以て、それゆゑあらゆる艱難に、こなたの無心も

市右　出來ぬと云ふのか……どうするものだ。併しこの頃評判の、鍛冶屋の内に妹のお高、あの子を路銀に借りて行かうワ。極印、妹を貸しやれ……。……エヽ、コレ、貸す氣は無いか。

ト云ひかける。千右衞門、默つてゐるゆゑ、思ひ入れあつて

挨拶ないは不承知か。どうするものだ、貸さずばよいワ。ドリヤ、歸らうか。その代りには、おれがこの身にかぶれが來ると、四人が四人、抱いて入るよ。その時吠え面、見るやうだ。

ト門口へ行くを庄九郎、駈けより

庄九　兄貴。待たッし。

市右　イヽヤ、歸るワく。

庄九　これサ短氣な。物は相談。わしもこの家へ聟入りしたので、云はゞ遁がれぬ一家内。こなたもわしが兄といひ、矢張りこの家の親類縁者。そんなら、まんざら

ト云はれ、市右衛門、思ひ入れあつて

市右　イカサマ、云へばそんなもの。弟が聟の内なれば、兄の布袋も縁者の第一、お高が爲の小舅兄さん。こいつは當分、此お内のお世話にならうか。

トどつさり居しかる。よき時分よりお藤出かゝりゐて、この時、ツカく寄つて

ふぢ　コレ、市右衛門どの。

市右　ヤ、わりやア嬶ア。どうして爰に。

ふぢ　お前と悴が行くへを尋ね、江戸へ歸つてお内のお世話に……コレ、こなさんも千右衛門さんによう禮云うて下さんせ。

市右　おきやアがれ。何も仲間内の極印に、禮を云ふ譯はねえ。その位な事は有うちだッ。鍛冶屋の世話になるよりは、禪坊主の世話になれ。そこが布袋の嬶アだけだ。ハヽヽヽヽ、こいつは大笑ひだ。

ト嘲ける。お藤、ムツとして

ふぢ　コレ、お前、無駄口どころぢやござんせぬ。あの大阪で山川屋へ、奉公にやつた幸吉が、ゆく／＼も知れず、その上お前はお尋ね者。近頃世間に評判の、アノ新藤德次郎

ト云はうとする。

市右　やかましいワ。たは言を吐きやアがるな。人も聞かねえ問はず語り。おらア今日から、爰の内のごろつきだ。女房連れての居候ふは、外聞が悪い。うぬはどこぞへ巣を變へろ。サア、出て行け出て行け。行きやアがれ。

ト手荒く突き放す。お藤、紙屑の前へこけかゝり、籠はかへつて紙屑こぼれる。三人、立ちかゝつて

千右　これはしたり、今まで世話したあの内儀、一緒に居てもいゝぢやアねえか。

庄九　これサ兄貴、他人の内の世話になるのに、ちつと内緒にさつしやいな。

清兵　併し、持つて生れたその氣前、灰にならずば、アヽ、直るまいかえ。

市右　おかたじけ。その位なところサ……コレ、嬶ア。わりやア父、預かつた餓鬼はどうした。

ふぢ　ハテ、今も云ふ通り、主人の内を家出して、あの子の行くへが知れぬゆゑ、尋ねてわたしや下つたのぢやわいな。

市右　なぜ餓鬼をなくした。大方拔け參りにでもうせたのであらうに、わりやァ彼奴が居所を、しつかりと突きとめて江戶へは歸りやァがらぬ。エヽ、うぬ、はッつけ女め。

ト莨盆を取つて、お藤をくらはす。

三人　これはしたり、其やうに

ト捨ぜりふにて三人とめる。

ふぢ　聞きなさんせ、あのやうな無理を云はれまする。コレ、あの子の事ばかりかいな。こなさんの事も氣になるゆゑ、わたしや江戶へ下つたのぢやわいな。それにマア、其やうな無理云うて

ト立ちかゝるを千右衞門とめて

千右　これサ、かみさん、常の氣前は知つてゐあらうに、マアノ\、捨てゝ置いて、こなさん、奧へ、ござりませノ\。

トお藤を奧へ突きやる。

ふぢ　ぢやというて、あんまりでござんすわいな。

庄九　ハテ、極印があゝ云ふからは、姉御、マアノ\、奧へ行かつしやいノ\。

ふぢ　それぢやというて、あんまりな手前勝手を

庄九　ハテ、解つて居ますよ〳〵。

ト引分けるゆゑ、お藤、小言云ひながら、合ひ方になり、暖簾口へ入る。

市右　打ッちやつて置け。山の神が荒れ出すと、しけ日和と同じ事だ。

淸兵　ヤレ〳〵、騒がしや〳〵。久しぶりで男達の附合ひ。イヤ又、大名よりは、餘ッほど氣が晴れてよいものぢや。

トあたりを見て

これはしたり、爰ら中が紙屑だらけぢや。

ト片寄せんと反古をしまひ、何心なう取上げ見て

アヽ、何ぢや、こりや女の文ぢやな。しかも色文と見えるが、肝腎の所が見えぬワ。そこらに千切れがあらう。尋ねて見やれ〳〵。

市右　ナニ、色文の千切れたのだ。そいつは嘸氣障であらうが、何も慰みだ、尋ねて見さッし〳〵。

庄九　反古を探すも色紙の手がゝり、もしや多くの

三人　ヤ。

庄九　尋ねて見さッし。

ト紙砧の入りし合ひ方になり、四人、反古を尋れ、選り分ける事。

有つたぞ〳〵。慥かにこれだ………なんだ……「去年大阪浮無瀬にて、野田角左衞門を手にかけ逃げ去り候ふ曲者は、雁金の文七とも、まツた仲間のうちなりとも……」

ト觸れ書の千切れを讀む。

千右 ヤ、そんならそれを、當時嚴しい………コレ、その後を〳〵。

清兵 コレ〳〵、爰に文七といふ反古が

ト反古を取る。

三人 して、その後は〳〵。

清兵 なんぢや………「文七元結、岩戸香、舞臺白粉、櫛、油」………アヽ、こいや松本の引札か。

市右 どうやら、これがお觸れの千切れ。

ト取上げ見て、

一巾にも極印千右衞門、安の清兵衞兩人は、その侍ひを殺せし荷擔人」………イヤア。

千右 爰に似寄りの

ト反古を取つて

「立ち所に平癒する事、神の如し。本所吉田町、あうこ散」………アヽ、こいつは夜啼薬の能書だ。

ト捨てる。庄九郎、反古を見て

庄九 慥かにこれが………「山川屋と申す質屋の家尻を切つて盗みしは定家の色紙、その盗賊は男達雷の………。」後が見えぬワ〳〵。

清兵 コリヤ〳〵、これぢや。

ト扇の破れしを取つて

なんぢや………「庄兵衛無用花の山」……ハテ、こぢつけ地口の反古か。

ト千右衛門、抜き本の反古を取つて

千右 「景清が行くへはと、問はれし時の」………アヽ、こりやァ琴責の床本か。

清兵 「阿波の徳島、父さんの名は十郎兵衛………嬶さんは肱常持ち」………アヽ、順禮殺しに、梅川の床本ぢやな。

庄九 爰にも抜き本、千切れたる………これがどうやら觸れ書のやうだ。

ト取つて

「當年十一、名は幸吉」………ヤ。

市右　似寄りのその名が

ト手早く取つて

丁稚の身にて五十兩、奪ひ取つて立退きしと、家内は存じ候ふところ、跡にてあたりの用水桶に、件の幸吉が死骸これあり候ふゆゑ、親どもを尋ねしところ、母親こと伊勢參りと存じ、尋ねに出で候ふゆゑ、親どもの行くへ、今に相知れ申さず候ふ」………ヤヽ、そんならあの時、殺した餓鬼は

ト思ひ入れ。

庄九　もしやこなたの

千右　悴とやらを

市右　アヽ、知らぬ事とて

ト反古を握つてキッと思ひ入れ。この時、清兵衛、件の千切れを取つて、反古を殘らず一つにして、前なる火鉢へ打込む。煙硝火立つ。

清兵　その幼子を火花も同然。

庄九 人と質の善し惡しは

千右 煙となつて、後の世に知る。

庄清 これで安堵の

ト思ひ入れ。よき時分、路地より太郎八、錠を持ち、出かゝりゐて、この納まりにうち覗き

太郎 ハテ、きな臭い。

ト額を差込むを千右衛門、突き出し、シヤンと戸を閉す。唄になり、千右衛門清兵衛、思ひ入れあつて奥へ入る。太郎八、起きあがり

締めます〳〵。

ト錠を振つて路地へ入る。合ひ方、時の鐘。向うより九助、傳八、富、三、友、窺ひ〳〵出て來り

傳八 コレ九助、そんならてめえは

九助 鍛冶屋へ仕掛けて女の出入り。その時わいらも

皆々 呑みこんだ。

ト九助、内へ入つて

九助 御亭主、お留守か……こんたは誰れだ。

庄九　おれはこの家へ、今夜聟入りの、花聟樣だワ。
九助　ア丶、こなたが聟か。そりやァ幸ひ、コレ、みんな來い〳〵。爰に聟が居るわえ。
皆々　そいつは奇妙だ。入れ〳〵。

トどや〳〵と内へ入り、大胡坐をかき、捨ぜりふにふざける。庄九郎、悄りして

庄九　ヤイ〳〵、わいらは乞食どもぢやァねえか。なんでこの家へ暴れこみ、その態はなんだ。
九助　祝儀を貰ひに來やしたよ。
傳八　旦那、聟入りの祝儀を下さい。祝儀を貰ひに來た。大勢ぢやァござりやせぬ。
皆々　五人の仲間へ、祝儀を下さい。下さりませう。

ト立騒ぐ。この時、暖簾口よりお高、出かゝり、窺ふ。

庄九　入り聟といふはおれだが、こりやァわいらは祝儀に事寄せ、何やらねだりにうせたのだな。
九助　オ丶、貰ひに來たのだ。祝儀が出ずばこなさんの、首を祝儀に貰ひに來た。不請であらうが、首を下さい。
皆々　聟の祝儀に、首を貰はう〳〵。
庄九　なんと吐かす。こりやァうぬらに、何か當りが

九助　ォヽ、あつて來たのだ。當るといふなア、コレ、この證文だ。

ト懷より出す。

庄九　ナニ、證文とは、なんの證文。

九助　爰の妹のあのお高、おいらに遣らうと千右衛門どのが、自身に書いたこの證文。

ト開いて差出す。この時、お高、駈けより、證文をよく〳〵見る。

庄九　ャ、わりやお高か。いま聞く通り、非人が大勢

たか　成る程、こりやコレ兄さんの、手蹟に違はぬこの證文、五十兩の借金にわたしを書入れ、金が濟まずば妹のお高、渡さうといふ、こりやコレ文言。わたしに隱して、なんで此やうな

九助　さういふ證據があるからは、お高は此方にかゝり合ひ。金が濟まねば乞食の女房。そこへ入り聟した貴様は、云はゞ間男。

皆々　間男だ〳〵。

庄九　ャイ〳〵、千右衛門が承知の上、妹を乞食へ書入れやうが、この庄九郎は知らぬ事。間男とは、なんで吐かす。

九助　四の五はいらぬ。このお高から擔いで行け。

皆々　合點だ。

　　　　トお高へかゝる。庄九郎支へる。

九助　女を此方へ渡さずば、五十兩の金を渡すか。

庄九　サア、そりやア

九助　證文通りだ、指でも附けるな……サ、引ツ淩へ。

皆々　呑みこんだ。

　　　　トお高へかゝる。この時、千右衛門走り出て、大勢を投げのけ、九助を締めあげる。

皆々　ヤ、こなたは亭主の

千右　千右衛門だ。チダバタ騷ぐと、うぬら一々

　　　　ト合ひ方。

九助　アイタヽヽヽ。コレ、千右衛門どの、金も返さず妹に、なんで聟を取つたのだ。

たか　この文言にわたしを書入れ、五十兩といふ金を、借らしやんしたはコレ兄さん、よく〳〵な事でござんせうが、なんでこれまで沙汰なしに、モシ、隱さんしたが、わたしや恨めしうござんすわいな。

庄九　定めてこれには千右衛門、様子があつて借りた金。返してしまふも今さらに

千右　此奴が金を借りたのも、色紙の手附けの五十兩、今また聟の持參金、あつても益なき色紙の代は

物、直ぐにその金、此奴等に

九助　そんなら金を

ト寄るを投げつけ、件の五十兩を打ちつける。

千右　金を改め、證文寄越せ。

九助　すりや、この金が

ト取上げる。

皆々　首尾よく取れたか。

九助　誠に小判で五十兩、受取るからは、ソレ、證文。

ト渡す。千右衛門、ずん〴〵に引裂き

千右　この上、云ひ分あるまいな。

九助　イヤ、貸し金受取つても、女を抱き寐のこの九助、妹の縁は切れぬと思やれ。

千右　ナニ、妹をうぬが抱き寐とは。

九助　時雨ヶ岡の暗まぎれ、お高と契つた上からは、女房に下さい、貰つて行かうワ。

庄九　ヤ、時雨ヶ岡の暗き夜に

九助　しかも昨夜の夜も更けた、御行の松のあたりにて、乞食のわしがなぐさみもの。

庄九　ヤ。

ト思ひ入れ。お高、こなし。

九助　それぢやァ今夜の聟どのも、乞食のお剰り貰ふ氣か。

たか　イエ〳〵、其やうな覺えはない……とは云ふものゝあの夜さに、非人と云やつたその者の、顔は見えねど、もしやはそれが

ト九助を庄九郎かと間違ひの心意氣。

九助　覺えがごんせう。寐たであらうが。

ト僞り云ひかける。

たか　イエ〳〵、其やうな覺えはない。

九助　證據があるよ。

千右　ナニ、妹と契つた證據がある。

九助　ありますよ。こなさん、先刻仲間の傳八、彼奴の頭をくらはした、その鐵鎚の印しは丸に、雪駄直しの手馴れた道具。どうして爰の鍛冶屋にあつたの。

ト件の鐵鎚を出す。

千右　それがあつたら、なんで證據だ。

九助　サ、そこが魂膽色事師。あの子と契つたその砌り、時参りに持つて來た、爰のお内の印しの鐵鎚。それを直しの鐵鎚と、また逢ふまでの印しにと、取交したる千の字の、鎚は此方の道具であらう。これではお前もまんざらに、拔差しならぬ釘かすがい。なんと證據でごんせうがの。

千右　かゝる證據のある上は、惡名拔けぬ妹が災難。

庄九　乞食と枕かはしたと、聞いては場所もどうやらに、それと云はれぬ事ながら、……そんなら乞食とまだ外に

ト心得ぬ思ひ入れ。奥より市右衛門、出かゝりゐる。

たか　さてはあの夜の暗まぎれ、落した鎚が取變り、それを囮に云ひかけの、その譯云はんも大それた緣切る爲と一筋に、その譯とても

ト苦しき思ひ入れにて泣き落す。

市右　聞けば乞食と契つた女、弟は乞食のお剩りを、女房にもらつて持つ心か。
庄九　假に頼まれ聟入りの、じやれが高じて夫婦の固め。併し兄貴の手前といひ、直さま緣を切らねばなるまい。
千右　非人の噂を聞く時は、妹わりやァ時參りに、何を願うて夜夜中。
たか　云へば身の恥、云はいでも、この身の恥と思ふから、云ひ譯いたすも兄さんの、お內儀さんと云はしやんす、屋敷勤めのお蔦さん、弟子に來やつた文吉と、どうやら譯のある樣子。見かねていらぬ緣切りの、御願をかけし神木の、釘を打つたるその時に、用意の鎚が間違うて、今さらそれが、この身の難儀に。
庄九　よし時參りが誠にせよ、鎚が兩方變りしは、云ひ譯暗き暗まぎれ。
市右　乞食の女を、われはよもや
庄九　向後、緣は切りまする。
たか　そんならどうでも。モシ
ト庄九郎へ縋るを突きのけ
庄九　犬同然な女房は持たぬワ。

ト振り切る。お高、庄九郎を見詰め、思ひ入れあつて

たか　そりや胴慾でござりまする。

ト泣き落す。

九助　胴慾くらべは此方にも、金は戻れどお高との、縁を結ぶか但し又、足を洗つて入り聟か。持參も直ぐに五十兩。その譯道を附けて行きやす。

皆々　其うち、わしらは

九助　富と三とは、歸つて始末を

富三　呑みこんだ。

千右　いづれわいらに用事もあれば

九助　金は濟んでも高利の勘定。

傳友　取つて歸るよ。

千右　少しの間。

九助　待つてゐやすよ。

ト唄になり、ワヤ／＼云うて奥へ入る。富と三は向うへかゝり、引返して路地へ入る。

市右　サア、弟、われは殘るか。

庄九　イエ〳〵、わしは極印と、縁は切らねど、お高が體裁、世間の手前、足を留めては

市右　そんなら一緒に。

ト立上がる時、大叺の莨入れを忘れ置く。庄九郎、見附けて

庄九　兄貴、こりやァこなたの

ト差出すとて、中にある色紙を見附け

ヤ、こりやコレ定家の

ト云ふを、手早く取つて懐へ捻ぢこみ

市右　夜更けぬうちに

ト兩人門口へ出る。

千右　雷、待ちやれ。

庄九　用があるか。

千右　無實の災難、お高が難儀、おれも一人の妹だ。非人と寐たとの惡名消したら、又もおぬしは

庄九　そりやァその時の話し合ひ。今の惡名、末代まで

千右　清くいつたら、必らずその時、女房に持ちやれ。
庄九　悪名消しやれ。
千右　消して見せうワ。
市右　ナニ、この噂が、よもや急には
千右　命をきりに
庄九　かけても消すか。
千右　雷。
庄九　極印。
兩人　詞をきつと
たか　アヽモシ

ト寄るを、千右衞門とめる。

市右　エヽ、夜が更けるワ。

トせり立てる。唄、時の鐘にて、市右衞門、ズウ／＼と先に立つ。庄九郎、懷の色紙に目を付け、兩人向うへ入る。お高、思ひ入れあつて、門口へ走り出るを、千右衞門とめて

千右　妹、わりやア氣色を變へて

たか　庄九郎さんにこの身の云ひ譯、その上わたしや身を投げて

ト行くを引留め

千右　あの男なら、命も捨てるか。

たか　悪名消えるものなれば、なんで命を

千右　惜しまぬ心か。流石は極印が一人の妹。われに話すは、コレ

ト引寄せて囁く。お高、思ひ入れあつて

たか　そんならお前の女房ぢやと、世間へ云へど有やうは

千右　里兒の姫君、清川さま。

たか　して、弟子入りの文吉どのは

千右　即ちあなたの云ひ號け、結城の御次男。

たか　さうとは知らで縁切りの

千右　丑の時なる大願が

たか　屆いた女の念力にて

千右　願望叶へば、あなたの眼病。

　ト件の繪馬を見せる。

たか　エヽ、アノわたしゆゑ、清川さまの

千右　お主も同じあなたの御病氣。

たか　癒す仕やうは

千右　男に添やれ。

たか　エ、男に添へとは。

千右　その男こそ庄九郎。

たか　でも、惡名が消えねば所詮

千右　その惡名も、清川さまの、あの御病氣も、暫時のうちに

たか　そのお詞に違ひがなくば、どうぞ惡名

千右　その消しやうは

たか　エ。

　ト寄るを千右衞門、拔打ちにお高の首を打ち落し、直ぐに取上げ、思ひ入れあつて

千右 出かした、妹。其方が悪名、兄が面晴れ。爰で直さま、奥の大勢。

ト氣を變へ、キツと裾をからげる。木の頭。裏向きで奥を見込む。木につき、時の鐘、よろしく、ひやうし

幕

ト直ぐに双盤にてツナギ、引返し。

本舞臺、正面、練り塀、内より見越しの柳、すべて淺草寺町の景色。禪のツトメ、時の鐘、時鳥の聲にて幕明く。

ト下座より四つ手駕籠、提灯を下げ、駕籠舁き、かけ聲にて走り出て、向うへ入る。向うより若い者の素見し三人、女郎買ひの話し捨ぜりふにて、よろしく、下駄がけにて出て來り、行き違つて下座へ入る。この跡へ下がつて市右衛門、四十八文のぶらを灯し、庄九郎附き、出て來り直ぐに舞臺へ來る。此うち一つ鉦、蛙の聲。

庄九 コレ〳〵、兄貴、そんならお前は、道々云はつしやる通り、直ぐに奥州へ

市右 高逃けりをしねえぢやア、どうで今度は遁がれぬ破目。その上に大阪で、うぬが餓鬼とも露知らず、殺して取つたその金も、人の寶。アヽ、天道ほどイケ意地の悪い奴はないなア。

庄九 さう聞いては命つく。夜のうちに奥州街道へかゝるがよい。併し、路銀はござるか。

市右 ナニあるものか。そこは又、盗人根性のある奴は、路銀の無い位には怖かねえの。併し、てまへも五人男の仲間うち、かぶれが來たら早く逃げやれ。サ、爰で別れよう。隨分息災でゐやれ。

ト行かうとするを、庄九郎とめて

庄九 アヽモシ、こりやアお前、路銀もいらぬと云はつしやるか、その路銀とは、慥かお前は、アノ懐の

市右 アヽ、これか。定家の色紙か。

庄九 サヽ、そればかりで主人を始め、わしらが苦勞をするのでござる。

市右 われとおれとが大阪で、家尻を切つて盗んだ色紙は、眞赤な僞せ物。その僞せ物をてまへは捨てたが、おらァ矢ツ張り持つてゐて、今日といふ今日、鍛冶屋の見世のごてつきに、ちらりと見附けた質屋の手代、彼奴が持つてうせた、誠の色紙と摺りかへて、コレ、正眞正銘、爰にあるの。誠にあの番頭めは、盗人の上を行く、イヤ、太い野郎だ。

ト莨入れより出して見せる。

庄九 サヽ、さう見たゆゑに、何氣なう附いて來た。コレ、兄貴、知る通りのお主の御難儀、その色紙な

差上げて、文七さまの悪を抜かねば、お家の爲にならぬ。サ、その色紙を、庄九郎に渡して行かつしやりませ。

市右 ナニ寄越せ。イヤ、てまへもわつけも無い事を云ふな。こりやアおれが路銀の足しに持つて來た。無駄を云はずと、エヽ、歸れ〳〵。

トかきのけて行くを引留め

庄九 サヽ、路銀が無くば尤もだが、金さへあれば道中は、好きに出來やう。色紙は下さい。金は進ぜる、金は進ぜる。

市右 ナニ又、金を取らずにやるものだ。して、金はいくら寄越す。

庄九 五十兩やります。色紙を下さい〳〵。

ト懷へ手を入れる。一つ鉦、蛙の聲。

市右 コレ〳〵、エヽ、何をするえ。さう云つても、金を取らねばやらねえの。サ、金を寄越せよ〳〵。

庄九 サア〳〵、やります〳〵。やりはやらうが、爰にはござらねえ。

市右 さうして、どこにある〳〵。

ト迫る。庄九郎、思ひ入れあつて

庄九　それ〳〵、千住の宿へ行けば、心あたりがあるから、あそこまで來て下さい。

市右　どうで道だ、行つてやらう〳〵。金を取らねば、色紙は渡さぬワ。サ、夜のうちが肝腎だ。早く行かう、早く行かう。

庄九　先へさへ行けば、きつと渡します。その時、色紙は下さりませよ。

市右　ハテ、やるよ。

庄九　そんなら、提灯は、わしが持つて行きませう。

市右　アヽ、てまへが提灯を持つか。久し振りで供を連れるワ。

ト提灯を渡す、庄九郎取つて先へ行く。

庄九　サア行きませう。

ト時の鐘、送り拍子木になり、庄九郎、提灯を持ち、市右衛門附いて東のあゆみへかゝり、段々と話しながら歩む。よき時分、正面の道具、鷹揚に廻る。

本舞臺、町家の夜の景色、戸を締めたる家並び、件の兩人、花道へかゝる時分、舞臺は植木の生垣、千部提灯、開帳札、淺草田圃の道具に納まる。

ト掠めて禪のツトメ、蛙、時鳥の聲。一つ鉦聞え、よき時分、庄九郎、わざと爪づき、灯を消す。

市右　どうした〳〵、提灯を消したな。

庄九　こりやア麁相。ツイ爪づいて

ト身拵らへする。

市右　こいつは暗いな。アヽ、灯を借りたいな。

ト何げなく行くを、庄九郎、一腰を抜き、いろ〳〵あつて、思ひ切つて市右衛門を切り下げる。「ワツ」

と飛びのき

うぬ、なぜ切りやアがつた〳〵。人殺しだ〳〵。兄殺しだ〳〵。

ト聲を立てるを庄九郎、しがみつき、市右衛門が口を押へて

庄九　尤もだ〳〵。兄に手向ひ、弟の身で、それといふのもお主の難儀。無ければならぬその色紙。殊にこなたが召捕られ、五人のその名を云はれては、結城のお家のお爲にならず、その上里見の主水さま、あなたのお爲にも猶ならぬ。それゆゑ殺す。コレ、兄貴、死んで下さい、免さつしやい

市右　うぬ、よくも騙してこの兄を切つたな。切つても死なぬ〳〵。もうこれからは雁金組、四人の奴等も新藤が、同類なりと云ひ上げて

ト捌れかへして行くを庄九郎、滅多切りにする。これより誂らへの鳴り物、庄九郎、切り伏せ〳〵、市右衞門が、片息になるを取つて引伏せ、色紙を取つて

庄九　これが欲しさに、現在兄を……南無阿彌陀佛々々々々々々〳〵。

ト止めを刺す。この見得にて、寺鐘の送りにて、道具廻る。

本舞臺、元の鍛冶屋の道具に戻る。

ト爰に傳八、友、糊紅にて、手負ひし體、のた打つてゐる。千右衞門、縄襷、九助、手を負ひゐるを、立廻りよろしくあつて

九助　こりやア主の千右衞門。乞食と侮り、譯も吐かさず切りつけたな。

千右　うぬが證據を拵らへて、僞り吐かしたばつかりに、庄九郎が男もすたり、可哀や妹もこの通り、兄にも恥を與へた腹癒せ。お高が敵、覺えたか〳〵。

ト九助をむごく苛なむ。この時、バタ〳〵と人音して、庄九郎、走り出てくる。此うちすて鐘。庄九郎、ツカ〳〵と内へ駈こむ。千右衞門驚き、九助の死骸へ蒲團を着せる。庄九郎は門口をシャンと閉めて、兩人思ひ入れ。千右衞門、窺ひ見て

そこへ來たのは

庄九　庄九郎だ〳〵。

千右　雷か。緣の切れたるこの內へ、何しに戻つた。

庄九　オヽ、おれが緣は切れたが、去り狀忘れた。その去り狀を渡しに來た。これを渡せば、いよ〳〵緣は切れた證據。ソレ

ト色紙を差出す。千右衞門取つて

千右　ヤヽ、こりやコレ尋ぬる定家の色紙を

庄九　それが卽ちおぬしへ去り狀。極印、さらば。

ト行かうとするを、きつと留めて

千右　去り狀なりとこの色紙、渡した心は、こりや的切り、兄の惡者手にかけて、持つて來たには違ひない。その上、人を殺めしと、五人の科を身に引受け、名乘つて牢へ入る氣か。よもや違ひはあるまいな。

庄九　さう見拔かれては是非がない。成る程、兄を殺した雷。仲間の科はおれ一人、我れと名乘つて、この身の片附き。

千右　さういふおぬしの心なら、ま一度お高に逢うて行きやれな。

庄九　イヤ、一旦縁を切つた女に、再び逢うては未練が出る。殊に逢つても用なき女。裏から直ぐに

ト行くな引留め

千右　是非とも別れに一目なりとも、逢つて回向を……コレ、兄が頼みだ。

トお高の切り首をよき所へ直す。

庄九　ヤヽ、そんなら可哀や、早まつて

千右　乞食と枕を交した女、おぬしの面が立たぬとの。詞に愛でゝ相手の大勢、殘らず仕留めた上からは、これでは男が立つ道理。妹に替へても雷が、面を汚さぬ極印が根性。否であらうがこの首と祝言頼む、庄九郎。兄が頼みだ、どうぞ未來は

ト首を差つける。庄九郎、思ひ入れあつて

庄九　エヽ、誤まつた〳〵。その魂ひを見損なひ、縁を切つたは生涯の誤まり。お高も乞食とくらがりで、身を穢したと云はれた時、その男こそ我れなりと、おれが方から云ふならば、斯うした事もあるまいに、昨夜根岸の暗がりで、思はず契り交したる、無宿の男は即ちおれだ。雷だ。暗くて相手の顔は知らず、乞食の九助と思つてか、知らぬ事とて早まつた。コレお高、願ひの通り、お



引返し



れが女房だ。女房だわやい。

ト首に向つて思ひ入れ。

千右　妹、聞いたか。あの一言を智識の引導。浮かんでくれろ。成佛しろ。併し極印は乞食でも、人を殺めし上からは、召捕られぬうち見事に死んで

ト刀へ手をかけるを、庄九郎とめ

庄九　ヤレ待て、極印。おぬしは殺さぬ。現在兄を手にかけた、重罪人の庄九郎、この身に引受け、おれさへ死ねば、浪風なう……跡を賴む。

ト刀を取つて腹へ突き立てんとする。千右衞門とめて

千右　イヽヤ殺さぬ。おれが死ぬのを留めだてして、われが死ぬのは恨めしい。極印は爰で

ト腹切らうとする。庄九郎とめて

庄九　イヽヤ、殺さぬ。死ぬのはおれだ。

トまた刀へ手をかける。

千右　コレ、早まるな。

トその手を留めて

死ぬのはおれだ。

庄九　イヽヤ、死ぬのは

ト兩方、あちこち死なうとしたり留めたり、兩方、互ひに思ひ入れあつて

兩人　われは殺さぬ。おれが死ぬ。

ト兩人一度に思ひ入れ。この時、上手座敷の障子へ物音して、血煙り立つ。兩人見附けて

ヤヽ、障子へかゝりし血煙りは

ト思ひ入れ。屋體の内にて

清兵　これぞ非人を殺めし女。

庄九　ヤヽ、聲は正しう。

ト思ひ入れ。障子蹴放し、内には清兵衛、立ち身。お藤、出刃にて自殺の體。長狹之助介抱してゐる體。

庄九　ヤヽ、里見の殿樣、主水さま、御出家さまは御次男の

千右　ヤヽ、布袋の女房がこの體は、そんなら亭主の最期と聞いて

清兵　現在弟雷が、手にかゝりしと聞きしゆゑ、科を女房が身に引受け、庄九郎をば助ける心。

ふぢ　まだその上に大勢の、非人を切つたも女のわたし。その下手人になつて死ぬのが、お二人さんへ御恩返し。
長狹　白殺の女が今際の際、未來を助ける出家が介錯。南無阿彌陀佛。
ふぢ　南無阿彌陀佛。
ト笛を搔切り、落入る。
清兵　新藤こそはお尋ね者、横死なしたが却つてその身の……さは知らずして、女がかゝる最期の樣子
トこの時、介右衞門窺ひ出て
介右　色紙をおれに
トかゝるを清兵衞、介右衞門を見事に切り下げる。この途端、所々にて早拍子木、早太鼓きびしく打ち立てる。「アリヤ〳〵」の聲する。皆々、キッとなつて
清兵　さては訴への者あつて
千右　町家を圍むあの人聲。
庄九　ハテ、小ざかしき
ト思ひ入れ。この時、奧よりお蔦、書置を持ち、走り出て來り

つた　モシ〳〵、一大事がござんすわいな。
長狹　ヤヽ、氣色變つて姉上樣。
清兵　妹清川、あわたゞしい。
つた　お忍びなさるゝ玄七さま、この文渡して何れへやら。文言見ればこりや書置。どうぞあなたのお行くへを

ト書置を清兵衛に渡す。

庄九　さてはその身の前非を悔ひ
千右　名乘つて出づるお心か。
長狹　さはさりながら姉上樣、あなたの眼病、平癒の樣子。
つた　ヤヽ、俄にわたしが眼の病、快氣なせしか……さてはお高の一筋に、若殿樣と此わしを、不義と思うて緣切りの
清兵　打つたる釘が思はずも、眼病となりしが大願の、お高が念も晴れ渡り
長狹　胸の曇りも忽ちに、晴るれば直さま御全快。
つた　心がゝりは若殿樣、あなたのお行くへ、二人の衆。

千庄 直さまこれより

ト行かうとする。忍びゐたる富、三、飛んで出て

兩人 うぬらをやつては

ト千右衛門庄九郎へかゝるを、双方立廻つて、兩人一緒に當てる。其まゝ立ち身。

清兵 アヽコレ

トこれにて千右衛門庄九郎、お藤の死骸に思ひ入れあつて

千庄 不便なこの場の

ト兩人を見事に投げ、顔見合せる、木の頭。

皆々 有樣ぢやなア。

トこれをキザミ、木につき、どらの送り、よろしく、ひやうし

幕

ドンドンのツナギ、引返す。

本舞臺、うしろ黒幕、土藏の屋根、舞臺は一面跳らへの屋根。爰に文七、大童になり、拔刀。町人大勢、尻からげ、六尺棒を持ち、取卷きゐる見得にて幕明く。

皆々　文七、やらぬワ。

ト　かゝるを東西へ追ひ散らし、用水にかゝり、水を飲まんとする。この時、前の通りへ、高提灯、竹梯子を掛け、捕り手六人、上がり来り

捕手　文七、捕つた。

トかゝる。よろしくあつて鳴り物をかり、文七、大タテあつて、大勢を切つて捨て、こなしあつて

文七　悪名うけし上からは、最早これまで。

ト腹切らうとする。後より庄九郎、清兵衛、股立ちにて、弓張りを持ち、ツカ〳〵と出て文七を留め

清兵　ヤレ早まるな。死ぬには及ばぬ。

庄九　尋ぬる色紙は手に入りました。

文七　ヤヽ、さては色紙が

庄九　即ちこれに。

ト見せる。

文七　エヽ、忝い。

トこの時、別の捕り手四人、弓張り十手にて、パラ〳〵と取巻き

捕手　動くな。

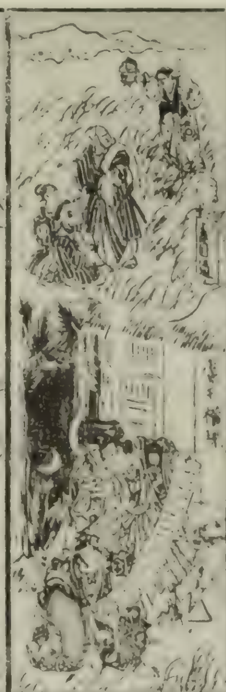
三人　なんと

庄九　まづ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

三ケ荘曽我島台（さんがのしやうそがのしまだい）

時代狂言　役人替名







世話狂言　役人替名

世話狂言　役人替名

大寸

三賀莊曾我島臺

第一番目　三建目

鎌倉千葉屋敷の場
小袋坂の場

役名——萬壽君賴家公。千葉惡五郎經景。工藤犬坊丸祐友。近江小藤太成家。八幡三郎行氏。榛谷十郎。原小次郎。藤摩腰元、諸。千葉奥方、星の井。梶原平三景時。源五兵衞女房、小萬。笹野若黨、彌助。腰元、二の宮。判人、大磯屋傳三。乳母、おこん。醫者、岡田正庵　小幡村百姓、太次兵衞。出石千太郎。賤ヶ谷作右衞門。出石宅左衞門。源五兵衞娘、小雪。千葉家中、薩摩源五兵衞。安達家中、笹野權三郎。八百屋半兵衞。

本舞臺、三間の間、瓦葺き、白漆喰、塗り板、下、樋なしたる屋敷長屋、扉附きの出格子、これに簾な掛け、忍び返し黑板塀、この内に妙見大菩薩と書きし幟、これより上手に兩扉の冠木門、この前に松飾り、但し下座の方に出入りあり、舞臺下の方に四斗樽の手水桶、竹の棹に掛け手拭大分吊し、爰に

文内、布子羽織、一本差し、中間の拵らへにて、臺に腰をかけ、手水柄杓を持ち、塀の前に茶屋の出し臺、長床几並べ、仕出し三四人これへかけ、煙草、茶を飲みゐる。茶屋の亭主、やつし前垂れがけ、茶を運びゐる。上の方に大藤内、古き麻上下、大小の形の上へ湯襷、烏帽子をかむり、札守の入つた箱を持ち、片手に鈴を振り立てゝゐる。すべて、鎌倉千葉家の門前、妙見縁日の模樣、日々に仕出し大勢、捨ぜりふよろしく、門の内と花道へ行きかふ見得。鳥追ひ唄、通り神樂にて幕明く。

文内　清めのお手水〳〵。

大藤　高天ヶ原に神止まりまし〳〵て

ト中臣の祓をよみゐる。

仕出　今日は取分け長閑で、妙見樣は大きにお仕合せでござりまするな。

同　左やうサ、夥しい參詣でござります。

亭主　旦那方、もう一つお茶を召上がりませ。

ト丸盆に茶碗を大分のせて差出す。

仕出　アイ〳〵。併し、茶よりは腹が餘ツほど北山時雨。そろ〳〵出かけませう。

同　わしらはこれから櫻屋で、ドレ、一杯飲んで行きませうか。

ト各自茶代を置いて出かける。

亭主　マア、御ゆるりとなされませ。

ト矢張り通り神樂、鳥追ひの合ひ方。此うち仕出し左右へ入る。この仕出しに交り、門の内よりおこん、前帶、乳母、木綿やつしにて、赤子を肌に負ひ、片手に文箱を持ち、草履下駄を履き、出て來る

こん　ソリヤ、おんもみな御覽遊ばせ。此やうに賑やかでござります。アレ〳〵、あのやうな美しい姐さんや、よい男がいくらも通りますよ

大藤　ドリヤ、見世を借りて一服いたさうか。

ト床几にかけ、煙草をのむ。

文内　ハイ〳〵、お淸め〳〵。淸めのお手水〳〵。

トおこん、文内を見て

こん　オヤ、お前は笹野三太夫さまの御家來衆。

文内　オヽ、文内でござる。おこんどの、こなさん、在所からいつ戻らしやれた。

こん　アイ、やう〳〵昨日戻つて參じました。それといふのも、わたしが親仁の大病、お暇を貰うて參るにも、此お子さんがお乳にお困り遊ばすゆゑ、旦那さんからお預かり申して、在所へ行て看病

いたしましたが、たうとう親仁も、病死いたしましたわいな。

文内　ヤレ／＼、それはハヤ氣の毒な。さぞや力落しであらう。

こん　なにサ、年の事でござりますから、仕方がござりませぬ。それはさうと、お前、おつな見世をお出しだね。

文内　イヤハヤ、わしがお旦那にも、不慮な事で、俄に若旦那にも浪々のお身の上。定めてこなさんも聞いたであらうが、親旦那三太夫さまには、御用先にて不慮の横死。殊更、百兩といふ金子を奪ひ、殺害なして立退きし、その曲者は何者とも、今以て相知れず、それゆゑ權三さまには、御追放のお身の上。

こん　ほんに、昨夜、權三さまにも、お目にかゝりましたが、それゆゑ此方のお屋敷へ、掛り人におなりなさるとは、おいとしい事でござりますわいな。

文内　イヤモウ、それについては、この文内めも、當時お部屋の御厄介。今日は又お屋敷内の、妙見樣の初の縁日。此やうに御門前へ、手水桶を出しまして、小遣ひ取りを致すのも、即ち源五兵衞さまのお指圖でござるて。

ト此うち大藤内、思ひ入れあつて

大藤　イヤナニ、身共は知る人ではござらぬが、承れば、何やら、不幸の事でござるな。アヽ、この間、餘所事に承つたが、武州の小幡村とやらで、安達の家中、笹野何某とやらいふ侍ひが、闇討ちに横死との風聞。ヘエ、それが其許の御主人でござるか。ヤレ〳〵、氣の毒千萬な。

文内　御推察下さりませ。

こん　オヤ〳〵、わたしや斯うしては居られぬ。雪の下までお使ひに行くのであつたわいな。

文内　ハア、雪の下は、どこへ行かつしやるのぢや。

こん　なにサ、わたしどもの在所の近所へ、里にお出で遊ばした、お雪さんといふお孃さんを、幸ひわたしが戻りがけに、連れ立ち申したが、わたしや昨日、直ぐにお屋敷へ戻り、お孃さんは里親の太次兵衛さんがお連れ申して、昨夜、雪の下の宿屋へお着きなされたゆゑ、御新造さんの、コレお文を持つて、今お迎ひに行かねばならぬわいな。

文内　オヽ、それは元日からお取込みな事ぢやの。イヤ、わしも今朝、暗いからこれへ出たゆゑ、まだ源左兵衛さまのお宅へ、御祝儀にも上がらぬ。この間に、ちよつと行つて來ようか。

こん　サア〳〵、ちよつくり行て參りませう。あれ程早う行て來いと云うたにと、また御新造樣に叱られぬやうに、ナア、お坊さん。

文内　それ〳〵、あなた、これにお出でなされませ。

大藤　そんなら、行てござりませ。

こん　ドレ、お姉さんをお連れ申して參じませうか。

ト通り神樂にて、おこんは花道へ、文内は門内へ入る。

大藤　コレ〳〵、茶屋の御亭主、見世はわしが氣を附けて進ぜるが、ちよつとこの先の梁川まで、賴まれて下さるまいか。

亭主　アイ〳〵、畏まりました。何の用でござりますな。

大藤　イヤ、アノ梁川に、小藤太どのといふお侍ひがござる筈ゆゑ、成景が、千葉の門前にお待ち申して居ると云うて下され。

亭主　アイ〳〵、心得ました。そんなら見世をお賴み申します。

大藤　オヽ、合點ぢや。早く行てござれ。

ト矢張り通り神樂にて、亭主は花道へ走り入る。引違へて、向うより正庵、慈姑頭、着附、羽織、醫者の拵らへにて、ふらそこを持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來り

正庵　ドリヤ、これで一服いたして參らうか

ト床几へ腰をかける。

大藤　これは岡田正庵老でござるか。

ト正庵、大藤内を見て

正庵　ハア、どなたかと存じたら、其許は、吉備の宮の神職、大藤内どのでござるな。

大藤　左やう／＼、元は吉備の宮の神職も、世の盛衰に是非なくも、斯樣に落ちぶれ、所々方々、今はやう／＼中間の、祓をよんで背戸門に、日がな一日立ち歩くて。

正庵　それは何かと、御心勞な儀でござらう。

ト大藤内は、正庵の持てるふらそこを見て

大藤　時に、岡田氏、おてまへが持つて見えられたそのふらそこ、そりや何でござるな。

正庵　ヘエ、これでござるか。これは、よんどころなう外から賴まれまして、製法いたした、味な妙藥でござるて。

大藤　ハテ、味な妙藥とは。

正庵　イエサ、これは守宮の生血でござりまするて。

大藤　ナニ、守宮の生血とな。

正庵　いかにも。定めてお聞き及びもござらうが、この一藥を酒に浸して、男女に用ゆる時は、情を増して心を通じまする事、至つて深く、和漢とも、これに上越す良藥はござらぬ。

大藤　すりや、その器の一藥が、男女に用ゆる良藥とな。

正庵　左樣でござる。又はこの生血を墨へ摺り入れ、身體へ附けまする時は、消ゆると申す事がござらぬ。併し、たとへ夢になりとも、心を通じます時は、その墨が消え失せまする、不思議な妙藥でござる。

大藤　イヤ、さう聞いては、この成景も、ちと用ひて見たい心もござるが、なんと、少しばかり御無心申す事は

 トあたりへ思ひ入れ。此うち、後へ伊之助出かゝり、窺ひ居て、大藤内が側に置きし札箱の錠を、そろ〳〵引ツ摑み、袂へ入れる。これを大藤内見附け、恟りして

ヤア、おのれ盜人め。

ト引ツ捕へようとする。曲撥になり、伊之助振り切り、逸散に花道へ逃げて入る。

ソレ、泥坊々々。

ト大藤内うろたへ、矢張り曲撥にて、伊之助の跡を追うて向うへ入る。此うち正庵はふらそこな大事

に抱へ、うろ〳〵して、この跡を見送り

正庵　ヤレ〳〵、油断も透もなる事ではない。イヤ、定めし源左兵衛どの〻内儀には、待ちかねてゞあらう。ちつとも早く、ドレ、行つて參らうか。

ト鳥追ひ唄、通り神樂になり、正庵、門の内へ入る。直ぐに向うより宅左衛門、麻上下、大小。後より伴右衛門、同じく麻上下、大小の形にて出てくる。雲八、中間の拵らへ、持草履を持ち、附き出て來り、この後より渚、着流し、腰元の餘所行きの形にて出て來る。後より中間一人、甲斐絹の風呂敷包みを持ち、附添ひ、出て來り、花道にて

宅左　なんと伴右衛門どの、日の初めとは申しながら、一しほ四方の春景色。取分け鎭宅靈府の尊星へ夥しい今日の參詣。誠に北辰妙見の利益。なんと有り難い事ではござらぬか。

伴右　イカサマ、宅左衛門どの〻申さるゝ通り、殊更長閑けき春の麗か。

ト渚を見て

オヽ、見れば、源左兵衛方の女中ぢやな。

雲八　左樣でござります。最前も鶴ケ岡で見掛けましたが、源左兵衛どの〻御内室、小萬さまの御代參と相見えまする。

諸　いかにも。旦那樣には、お上の御用につき、小萬さまの仰しやりつけで、鶴ヶ岡への御代參、只今戻りがけでござるわいな。

宅左　それは〳〵、大儀であつた。然らば、賤ヶ谷氏。

作右　サヽ、ござりませ。

ト矢張り右の唄にて、皆々、舞臺へ來り

諸　左樣なら。私しはお先へ。

ト行かうとする。

作右　アヽ、コリヤ〳〵。幸ひ、お身にちと尋ねたい事がある。宅左衛門どの、其許には、アヽ、これにて一服おあがりなされ。

宅左　然らば、兎も角も

ト三人、床几へ腰をかける。

作右　イヤナニ、其方が内方に居らるゝ、あの笹野權三どのには、舊冬も兎角間違うて逢ひ申さなんだが、變る事もないか。どうぢや〳〵。

諸　ハイ、隨分お變り遊ばす事もござりませず、殊更あなたには、これまで日々の御佛參とあつて、

今朝も早う松葉ヶ谷へ、お出で遊ばしましてござりまする。

宅左　イヤハヤ、權三にも、不慮の事にて、源五兵衞どの方の厄介。其許にも御存じの通り、一體あの者は安達家の藩中にござれど、フトした緣にて、身共が筆道の門弟ゆゑ、外なりませず、甚だ氣の毒に存ずるて。

作右　左樣でござる。時に、あの權三どのには、姉御がござると　かねぐ\承り及んだが、定めし其方は存じ居らう。して、それはどう致されたな。

諸　成る程、そのお姉御樣は、御幼少の折から、町家にお里へ遣はされ、其まゝ今はお千代さまというて、淺草邊の、慥か八百屋仁右衞門どのとか申す方へ、御養女になりなされたとの事でござりまする。

宅左　ナニ、淺草邊にて、八百屋仁右衞門とあれば、身共が以前召使ひし者、今は町人となつて、その仁右衞門方へ聟入り致し、八百屋半兵衞と申すが、すりや、女房の千代と申すは、權三の姉であつたか。ハテ、知らぬ事とて

作右　イヤ、緣といふものは、どこにどういふ釣張りが……イヤ、釣張りと申せば、彼の釣り筆の傳授の儀、あの女子の小萬どのへ、孰へ遣はされたが、どういふ仔細でござるな。

宅左　仔細と申して、別儀ではござらぬ。小萬どのと申し、權三が出精、双方とも劣らぬ藝道、さりながら、傳授の儀は、權三へと存じたなれど、小萬どのには、その以前より身が門弟、女子なれども上席なれば、是非に及ばず、傳授は彼れへ讓つてござる。

伴右　イカサマ、小萬どのには、手蹟といひ、器量は元より、氣前はよし、一家中にあのやうな代物は、又とござるまい。

雲八　その筈でもござりませうか。以前は情を賣つた勤めの身、それしやの果ならまんざらな、野暮と違つて粹の骨頂、どこに一つ云ひ分はござりませぬ。

伴右　その云ひ分のない代物を、女房に持つた源五兵衞どの、剰へ二人の子までなしたる深い仲、思へば思ひ廻す程、アタ羨ましい……イヤサ、女で傳授を受けるとは、羨ましい事でござる……それにつけても、ちと頼みたい事がある。御免下され。

　　ト宅左衞門が前を通り、下の方へ來り、渚に向ひ

外の事でもないが、身共、あの權三に、日頃から樣々と……サ、其方へ頼みといふは

　　ト懷中より文を出し

これを、そもじ、內々あの權三へ手渡し致し、そこをどうかよいやうに、ナ、色よい返事を……

イヤサ、いろ〳〵用事は、傳授の儀を遣はせば、よきに返事を、コレ、頼む〳〵。

ト渚、文を取つて見て

渚　「權さままゐる、御存じより」……此やうなお使ひは、御免なされて下さりませ。

ト文を投げ返す。伴右衛門取つて

伴右　ハテサテ、何も氣遣ひな事はないワ。

ト宅左衛門へ思ひ入れあつて

筆道の儀を申し遣はすに、その取次の出來ぬとは、ハア、聞えた、すりや、身共が取次は致さぬと、あの源五兵衛が云ひつけられたか。

渚　左樣ではござりませねど

伴右　然らば、身共が取次は、なぜ致さぬ。

渚　オヽ、それ〳〵、筆道の傳授の儀と仰しやりまするゆゑ。

伴右　ヤ。

ト思ひ入れ

渚　サア、この間、小萬さまの仰しやりまするには、一旦傳授を受けたなれど、女子の事ゆゑ、小幡

村へ里に遣はし置いた、惣領の娘、あのお雪を呼び戻し、幸ひ浪人の權三どのと娶合せ、家督を讓りたいと仰しやりましたれば

ば權三どのへ、讓りたいと仰しやりましたれば

作右　コレ〳〵、すりや、なんと云ふ。あの權三を、小萬どのが、養子に致すとな。

雲八　アヽイヤ、併しあの權三さまには、養子の事は御不承知と、申す噂でござりまする。

作右　そりやその筈の事。あの權三には、云ひ交した男がある。

諸　エ。

作右　その男は外でもない、卽ち源五兵衞どの。衆道狂ひ、誰れ知らぬ者もないに、それを今更、聟に取るとは、小萬どのゝ心底、通り者も事による。イヤハヤ、呆れて物が云はれぬ。

宅左　アヽ、イヤ〳〵、身共これにて承り居つたが、小萬どのゝ心底、全く思慮なき事にもござるまい。察するところ、家中の手前、殿の聞えを憚りて、親子の因みを結ばゞ、義理に逼つて自ら、衆道の仲も絶つ道理。諫めかねたる女の操。こりや、さうなけりや叶ふまい。

ト　この時、四ツの太鼓鳴る。

雲八　最早四ツのお太鼓でござる。

宅左　身共は直さま、お役所へ相詰めるであらう。

伴右　拙者は只今お後より。

渚　左様なら、伴右衛門さま。

伴右　とはいへ、この文。

渚　エ。

宅左　アイヤ、然らば曉ヶ谷氏。後刻、御意得ませう。

ト唄になり、渚、會釋して先に立ち、宅左衛門跡より、雲八附いて門の内へ入る。伴右衛門殘り、あと見送り

伴右　エヽコレ、幸ひ逢うたあの渚、あの堅造の出石めが、邪魔になつたばつかりに、たうとうツン逃がしてしまつたか、よし〳〵、この上は、源左兵衛と彼の權三、二人が仲を囮にして、有ること無いこと、あの小萬へ……さすれば日頃悋氣してゐる事なれば、忽ちグツと取つてくるワ。所を身共が、祕術を以て

ト思ひ入れあり

殊更、いつぞや笹野三太夫を、中間の彌助が仕留めし折から、彼れが奪ひし百兩の金子。尤も僅かの金ながら、先づその金子を以て人をなづけ、その上、千葉の家の重寶たる、天國の短刀、ま

つた、月星の一軸、この二品を奪ひ取り、それを囮に殿を押しこめ、弟たる惡五郎どのゝ家督になせば、その時こそは身共は御家老。若衆は權三、女房は小萬。イヤ、こいつは

ト手を打つ。この途端、チヨン、とキツカケ。伴右衛門、口を押へ、あたりへ思ひ入れ。この見得、曲太鼓にて、此まゝ道具ぶん廻す。

本舞臺、正面、三間の間、二重舞臺、見附け、茶壁。正面、更紗のれん。上の方、一間、前側、あかり窓、鼠壁。横手、瓦燈口、これに太鼓張りの障子あけたてあり、この前通り、沓ぬぎ。南の方四ツ目垣、槇をあしらひ、臺附きの振りよき松の立ち樹。下に門口、これに薩摩源五兵衛と記したる標札を打ち、注連飾り、松を立て、禮受けの帳面、手札受け、よろしく、千葉家中の體、爰に小萬、女房の拵らへにて、火鉢を扣へ、秋田風呂にきびしよをかけ、茶を拵らへてゐる。こなたに正庵、以前の形にて、右のふらそこの藥を、屠蘇の銚子へ仕込みゐる。三重舞臺に喰積の三方、杯臺に三組みの杯直しある。兩人、この見得、鞠唄、通り神樂にて、この道具とまる。

正庵　サア／＼。斯樣に致しおいてござれば、最早用ひましてもよろしうござるて。

小萬　これは／＼正庵さま、何かと、いかいお世話樣でござりました。サア／＼、お煮花が出來まして

ざりまする。

ト茶碗へ汲んで出す。

正庵　イヤ〳〵、お構ひ下さるな。時に、この間も、あらましお話しも承つたが、其許様と申し、源五兵衛さまにも、まだお若いに、俄に御養子をお急ぎには、及びさうもないものでござりまする

小萬　左様ではござりまするが、この間もお話し申した通り、餘所へ預け置きました、私しが娘も、最早成長いたしました事なり、又お前にも御存じの通り、こちの内に居りまするあの權三、幸ひ似合ひの縁邊と存じまするゆゑ、あの子を聟養子に致さうと、内々相談いたしましたところが、どういふ事やら二人とも、ツイに逢うた事もなければども、互ひに不承知のやうにござりますれば、どう致したものであらうと、いろ〳〵案じまして、フトお前にもお話し申しましたところが、それには斯う〳〵いふ藥があると仰しやつたゆゑ、折入つてお賴み申しましてござりまするが、早速おしつらひ下さりまして、お嬉しう存じまする。

正庵　イヤモウ、お間に合はゞ、愚老も甚だ重疊にござる。イヤ、左様なら、最早お暇いたすでござらう。

小萬　それは餘りにお早々でござります、わざとお屠蘇をお祝ひ申しませう。

正庵　今日はお預け申しませう。愚老ことも、殿の御用向きにつきましてナ、明朝、箱根の山中へ、藥草を尋ねに參らねば相成りませぬ。それについて、何かと用事もござりまするて。

小萬　それは御苦勞に存じます。左樣なら近日、この方より、お禮に參りまするでござりませう。

正庵　然らば、源五兵衞どのへも、よろしう。

ト門口へ出る。

小萬　左樣なら正庵さま、ようお出でなされました。

ト通り神樂にて正庵、花道へ入る。小萬、思ひ入れあつて

それはさうと先刻にから、あのおこんを迎ひにやつたに、もうあのお雪を連れて戻りさうなものぢやが。それにつけても、こちの人の、この程のあの身持ち、兎角男といふものは、油斷のならぬ、世話の燒けたものぢやわいの。そりやモウ、わたしとても、今では斯ういふ身の上なれど、以前は賤しい勤めの身の上、殊更、在所育ちといひ、父樣は八右衞門といふ農業人、緣でがな、源五兵衞どのと馴れそめ、日毎に通うて下さんす、その深切にほだされて、勤めのうちに身重になり、人目を忍び、やう〳〵と、生み落すと其まゝ、小幡とやらへ里にやつたあのお雪。その後夫婦になるまでの苦勞も、今ではこちの人、忘れさんすも男の習ひ。さりながら、あの紺三どの

に迷ひ、明暮れあの子の事ばつかり。御家中の思惑をも、いとはしやんせぬ源五兵衛どの、わしが悋氣もするやうに、云へば云ふほど募るとも、聞入れさんせぬと思ふから、いつその事、あの權三どのを貰ひうけ、娘のお雪と娶合せなば、親子の義理に搦まれて、フッツリ思ひ切らしやんすは知れた事。それにつけても二人とも、不得心なは、どうも合點が……ア丶、それも、お雪に逢うた上は、又どうなりとならうかいなア。

ト毬唄、角兵衛獅子の鳴り物になり、向うよりお雪、縞やつし、振り袖衣裳の形に、紅縮の裂れの眼掛けを持ち、出てくる。跡より太次兵衛、木綿やつし、脚絆、おしよぼからげの形、田舎者の拵へにて、風呂敷包みを脊負ひ、跡よりおこん、以前の形にて、矢張り赤兒を脊負ひ、これに附き、出て來り、花道にとまり

太次　サア／＼お雪どの、源五兵衛さまのお宅へ來ましたぞや。コレ／＼、必らず内へ戻らしやれても、機嫌ようさつしやれや。併し、產みの親子の仲は又格別、まんざらな事もござるまいかい。

ゆき　そりやモウ、實の父さんや、母様の手許へ戻る事は嬉しけれど、聞けばわたしに、アノ聟さんとやらを取らしやんすとの事。どうも、それがわたしや

こん　なんのお前、其やうな事を、キナ／＼思し召す事はござりませぬ。マア／＼、なんであらうと、早

くお出でなされませ。

太次　それ／＼、親御にも、さぞかし待遠に思はつしやれてもござりませう。ちつとも早く、サヽ、ござりませ。

ゆき　それぢやというて

太次　アヽ、これはしたり。コレ／＼、お前、先へ案内して下され。

こん　左様いたしませう。私しが又、よいやうに申しあげます。サア、お出でなされませ。

ト矢張り右の鳴り物にて、三人、舞臺へ來り、おこん、門口を明けて

こん　御新造さま／＼、サア／＼、戻りましたわいなア。

ト内へ入る。

小萬　オヽ、おこんか、大抵待つた事ではない。コレ／＼、お雪を連れてかや。

こん　ハイ／＼、お連れ申して參じました。サア／＼、早うお入りなされませ。

太次　左様なら、お許しなされませ。

ト兩人、捨ぜりふにて、お雪を無理に連れて内へ入る。

小萬　これは／＼太次兵衛どの、ようこそ見えられました。

太次　ハイ〳〵、これは早、あなたにも、お變りもござりませず、おめでたう

ト此うち小萬、お雪を見て、此せりふに冠せて

小萬　コレ〳〵、お雪かいの。サア〳〵、此方へ來や。コレ、わが身は、どうしたものぢやぞいの。

ト立ちあがり、お雪の手を取り

オヽ、わが身は眼が惡いのかいの。そりやマア、いつからの事ぢや、や。當分の事かいの。オヽこの子とした事が、親の内へ來て、何も遠慮する事は無いぞや。

ト此方へ連れて來る。お雪、モヂ〳〵と手を突き

ゆき　母様には、お變り遊ばす事もなう、お嬉しう存じますわいな。

小萬　オヽ、わが身も息災で、わしも嬉しいわいの。さうして、母が其方へ逢ひに行たも、明くればモウ一昨年になるぞや。コレ〳〵、お雪、マア、ちよつと立つて見やいの。

ゆき　アイ〳〵。

ト立ちあがり。思ひ入れ。

小萬　さうぢや〳〵。ほんに、あの時より、滅切り脊も伸びてぢやわいの。コレ〳〵、マア、ちやつと坐りやいの。

ト これにて、お雪、坐る。

オヽ、さうしてマア、見れば、髪も美しう、早う結うてぢやの。

太次 イヤモウ、その髪も、今朝ほどツイ、ちよこ／＼と出來ましたて。

小萬 これはマア、時分がらといひ、お前には、大きに御苦勞でござんしたな。

ト此うち、おこん、有りあふきびしよの茶を汲み

こん サア／＼、お茶一つおあがりなされませ。

ト兩人へ差出す。

太次 イヤ／＼、お構ひなされますな。

こん 申し、御新造樣え。昨夜もちよつと、お話し申しました通り、私しが在所から戻りがけに、太次兵衛さまのお内へお寄り申しまして、兎や斯う仰しやるお孃さんを、いろ／＼とお勸め申して、えいやらやつと、お連れ申して參りましたわいな。

太次 時に、舊冬はあなたから、詳しい御狀でござりましたゆゑ、早速、このお子へ、右の趣きを話しましたところが、以ての外の樣子。その砌り、御返事に申してあげましたが、何かハヤ心得ませぬ事で、とんと私しも、合點が參りませぬが、あなたへ對しましても、どうかサ、私しどもが此

お子を、麁末にでもお育て申しましたゆゑ、其やうな我まゝな事も出來ましたやうで、甚だお氣の毒に存じまする。

小萬　コレ、お雪、わしが云ふ事、よう聞いてたも。こりや云はいでも知れた事ぢやが、わが身は、藥の上からナ、これにござる太次兵衛どのへ里に遣はし、わしが手しほにはかけねども、現在血を分けし實の娘。もう頃合ひの嫁入り盛り。又、男の子はあるというても、まだ東西。それゆゑ、どうぞ相應な者をと、思ふに幸ひ、器量といひ、手蹟といひ、云ひ分ない好い殿御があるほどにわが身に娶合せ、行く〳〵は、夫源五兵衛どのゝ跡式をも立つる相談、さう成りさへすりや、外外へ嫁入りすると違うて、なんというても遠慮は無し。わが身の爲にも、よいといふものぢやぞや……併し、年のゆかぬ時分には、あの殿御ならでは、とサ、思ふ事もまゝある習ひ。そりや、わしとても合點なれど、是非ともあの子を貰ひうけ、養子にせねばならぬ義理。その譯合ひも今爰で、まさかそれぞと打明けて……サ、云ふに云はれぬ事ゆゑに、どうぞ聞分けて、男を持つてたも、や、……オヽ、この子とした事が、涙を溢して……それ〳〵、顔が臺なしになるわいの。

ト顔を拭いてやる事などあつて

オヽ、サア〳〵、もうよい〳〵。さういふ事なら、定めし親甲斐に、無理な事とも思やらうが、

わが身の心たつた一つで、ナ、こちら夫婦は云ふに及ばず、太次兵衛どのにも大抵の喜び。一ツ方四方の丸う納まる事といひ、第一わが身は、わしが手許に居る事ぢやゆゑ、大抵よい事ぢやないぞや。サヽ、それぢやによつて、よう合點して見やいなう。

ゆき　サア、母さんの其やうに云はしやんす事、聞分けぬではござんせぬが、わたしやフトした事で、云ふに云はれぬ

小萬　そんなら、云ひ交した男があると云やるのか。

ゆき　アイ。

ト恥かしき思ひ入れ。

小萬　して、そりやマア、いづくの誰れぢや、や。

ゆき　サ、それは。

小萬　サ、それをこの母に、云うて聞かしやいの。

太次　アヽイヤ、それを私しが、いろ〳〵と根問ひ致しましたが、いづくの誰れやら、名も知らぬとの事でござりまするて。

小萬　ヤ。

ト思ひ入れ。

こん　オヤ〳〵、馬鹿らしいお孃さんだね。どこの國にマア、云ひ交した男の名を、知らぬといふ事があらうかいな。モシ、其やうな者へ義理立てをなさらずと、アノ御新造樣の仰しやる通り、殿御をお持ちなされませ。それは〳〵可愛らしい、しかもまだお若衆さんで、あのやうな好い殿御が、又と外にあらうかいな。ならう事なら、お前に代つて、わたしが殿御に欲しいわいな。ホヽヽホヽヽ。

小萬　ほんにマア、いかに年がゆかぬというて、呆れたものぢやわいの。大方わしも、そんな事であらうと思うた。サヽ、其やうな、譯も無い事を云はずとも、この母が云ふ通りにしたがよいぞや。

太次　左樣でござります。何事もあなたが、惡いやうになされたものではござりませぬ。マア、なんであらうと一旦は

ゆき　ぢやというて、外の殿御は

小萬　すりや、此やうに云うても聞入れず、我まゝ氣まゝを云やるからは、わが身はアノ、親の詞を背きやるのかいの。

トお雪、思ひ入れあつて

ゆき　イエ〳〵、どう致しまして、背きは致しませぬわいな。

小萬　背かぬ者がなぜに又、わしが云ふ事を諾きやらぬぞいの。

太次　アヽ、イヤ〳〵、あなたのお詞背かぬと、云はつしやりますからは、定めし少つとは、聞分けもござりませうほどに、あまり其やうに、一旦に仰しやりましたなら、さうでもござりませぬ、萬一、思ひ詰めた心から、ひよつと致した事でも

小萬　成る程、それもさうぢやわいの。そんならアノ、斯うしてたも。殿御に添ふ事が否ならば、アノ祝言の杯事ばかりをしてたもや。その杯事ばかりをしやつたならば、その代り、後はわが身の勝手にさすほどに、サア、さうしやいの〳〵。

ゆき　サ、そりやモウ、杯事ばかりならよけれども、一つ寝なと致しますやうな事は

小萬　イヤ〳〵、それはさす事ぢやない。その杯事さへ承知なら、それでよい程に、在所の父様とも連れ立つて、わが身は奥へ行て、マア、顔でも直しやいの。

ゆき　アイ〳〵、

ト思ひ入れ。

小萬　モシ、太次兵衛さん、お前、この子を連れてござんして、よう合點のゆくやうに、云ひきかせて

下さんせ。

太次　ハイ／＼、そりやお氣遣ひなされますな。左樣なら私しが、猶又詳しうこのお子にも、とつくりと、お話し申すでござりませう。

こん　サア／＼、お二人樣、マア、あれへお通りなされませ。

ゆき　そんなら、母樣。

小萬　オヽ、めでたう奥で雜煮など

こん　わざとお祝ひなされませ。

太次　左樣なれば、御遠慮なしに。

こん　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、おこん先に立ち、お雪後より、太次兵衛附いて奥へ入る。小萬殘る。矢張りこの唄のうち、向うより權三、若衆形、着附、袴の形、大小にて出てくる。跡より伴右衛門、以前の形にて出て來り、花道にて

伴右　アヽ、コレ／＼、權三どの、丁度よい間にお見掛け申した。早々と、どちらへ御歩行ちやな。

權三　アイヤ、拙者めは今朝、松葉ケ谷より心願ござつて、鶴ケ岡八幡へ參詣いたし、只今戻りがけで

ござります。

作右　それはようこそ、イヤ、かね〴〵身共が其許へ、申し入れた儀、ナ、定めてお心には染むまいが身が心根をお察しあつて、どうぞ偏へにコレ、お頼み申す〳〵。

ト嫌らしき思ひ入れ。

權三　何御用でござりましたやら。いづれに致せ、拙者はちと宿許へ、取急ぎまするゆゑ……作右衞門さま、御免下され。

トつか〳〵と舞臺の方へ來る。

作右　これは御挨拶。左樣なれば身共も、お宿へちよつとお寄り申して

ト跡より附いて舞臺へ來る。權三、門口を明け

權三　これは小萬さま、只今戻りましてござります。

ト內へ入る。

小萬　オヽ、權三どの、よう戻らしやんした。コレ、お前の歸りを、待ちかねて居ましたわいの。

ト此うち伴右衞門、門口より內を窺ひ

作右　御免下され……イヤ、これは小萬どのにも、これにござつたか。

ト内へ入る。小萬、迷惑なる思ひ入れあり

小萬　これは伴右衛門さまでござりまするか。ようお出でなされました。

ト伴右衛門、眞中へ入り

伴右　身共只今、お役所より戻りがけ、あの裏門にて……イヤ、左樣申せば、權三どのなり、小萬どのなり、ツイ一網に、サ、かゝる首尾は又とあるまい。權三どの、なんと好い春ではござらぬか。

ト嫌らしく權三へ思ひ入れ。

權三　ハイ、好い春でござります。

トつんとして脇を向く。

伴右　サア、其やうに好い春ぢやによつて、なんとソレ、好い返事をしては下さるまいか。コレ、どうぢや、どうぢや。

權三　これは伴右衛門さまには、お目にかゝる度毎に、やゝともすれば、返事せいの何のと、どう致して左樣な事が

伴右　イヤサ、その返事して下されと申したは、オヽ、それ〳〵、身共、歳旦心に一首仕つたゆゑ、これを其許に

ト懐より文を出し

これ十、命がけで心一ぱいを、書き認め置いたれば、御覧の上で、ナ、ソレ、どうぞ其許の返事を

コレ、頼むワノ〜。

ト権三の懐へ無理に文を入れようとするを、権三、振り払ひ

権三 アヽイエ、其やうな儀は冗談、存じませぬ。

トきつと云ふ。

伴右 これほどにしたり、其やうに無下になさるゝ事はござらぬ。三人とも、云はゞ浪人の身ではござらぬが、兄弟他人の始まりとは申せども、世に申す、兄弟分のよしみと申す事もござれば、その兄弟分の因みを、ナ

ト権三へこなしあるを、振り切つて

権三 イヤ、不作法千万、其やうな儀がそうひよつと、浦五兵衛どのへ知れましたら、其許様のお為にもなりますまい。

伴右 知れうが知れまいが、もう斯うなつたら

ト又こなしあるを振り、中へ入つて

小萬　これはしたり、伴右衞門さま、これはマア、どう致した事でござりまする。あなたにもお似合ひなされませぬ。其やうに無體な事を……アヽ、こりや伴右衞門さまには、御酒機嫌でござりまするな。

伴右　アヽ、ミヤノ〜、酒機嫌ではござらぬ。身共が所望申すは、貞實大事な、源五兵衞どのゝやうに美しい小萬といふ女房を持ちながら、これなる權三にも迷ひ、暇に暇に側に附いてゐるのとは違ひ申す。よいノ〜、さういふ事なら、コレ、小萬どの、其やうな水臭い事を言つてゐる事はござらぬ。身共も又向後、權三が事はフッツリとナ、思ひ切るほどに、ソレ、目頭から言ふ通り、いつそ二人へ面當に、なんと小萬どの、この伴右衞門に乗りかへる氣はござらぬか。コレ、どうでござる、どうでござる。

小萬　これはマア、伴右衞門さまとした事が、滅相な、そんな水臭い事言はしやんすと、マア、心ようなされたなら、わたしが又あの子にも、よいやうに御返事を……とナ、言うたところが、さう性急に參るものではござりませぬほどに、なんに致せ、マア、アノ、奥へ行て、お待ちなされませいな。

伴右　そんじさへ呑みこんでくれる事なら、いつまでなりと待ちもしようが、もし不承知のその時は、

コレ、小萬どの、必らず返事を

小萬　ハテマア、ようござります。マア〳〵、奥でゆつくりと、お待ちなされませ。

伴右　そんなら必ず小萬どの……さはいへ、ちよつとこの文を

ト權三へかゝるを拂ふ。これにて文を前へ落す。

アヽコレ、手には觸れねど

ト文を取上げ

捨ても置かれずぢやな。

ト唄になり、伴右衛門、思ひ入れあつて奥へ入る。あと合ひ方。

小萬　ほんにマア常々から、逢ふ度毎にあのやうに、譯もない事ばつかり。必らずお前にも、心にかけなさんせぬがよいぞえ。

權三　イエモウ、私しことも、今さら改め申すには及ばねど、親ども不慮の最期を遂げ、家斷絕に及びしより、情ある源五兵衛どのゝお世話で、今はお宅に同居の身の上。それを附けこみ日頃から、伴右衛門どのゝあの無體。それゆゑ源五兵衛どのゝ手前も如何と、お恥かしう存じまする

小萬　サ、それといふのもこの程から、くれ〴〵お前に云ふ通り、源五兵衛どのゝ聟と定まり、女房を

持たしやんすりや、何しにあのやうな事云ふ者は無いぞや。尤もお前には源左兵衛どのへ、義理を思うてゐやしやんせうが、又こちの人の云はしやんすには、さうする時には、殿への聞えといひ、一家中の思惑もよければ、ならう事ならさうしたけれど、わしが發言はしにくい程に、どうぞわが身、あの子に得心のゆくやうに、よう話してくれいと云はしやんすゆゑ、さうしなさんすりや、お前なり、こちの人なり、双方ともによいといふものぢやによつて、嫁と祝言して下さんすりや、わたしとても、大抵の喜びではござんせぬわいな。

權三　そりやモウ、源左兵衛さまの爲とござりますれば、隨分承知いたしてござりまするが、嫁御と祝言いたしましては、かねぐ〱お話し申しまする通り、私しが云ひ交しました、女子へ、どうも

小萬　ムウ、そんならお前は、その女子への義理を立てさへして、源左兵衛どのゝ爲には、構はしやんせぬと云はしやんすのか。

權三　イエ〱、どう致しまして、全く左様ではござりませねど。

小萬　そんなら、斯うしなさんせ。嫁のお雪も、折角呼び迎へた事なれば、どうかあまり性急なやうなれど、善は急けぢやによつて、誠の祝言は追つての事にして、わざと學びに、なんと杯事ばかりして下さんせぬかいな。

權三　ぢやと申して、あまりさしかゝりまして急な事ゆゑ、私しとても、誠に當惑いたしまするが、併し、折角それ程までに、事を分けて仰しやりまする事、否と申すも如何。たゞ何事も源左兵衛どのゝ、爲とあるゆゑ是非なくも、結ぶ妹背の女夫事、枕交さぬ事なれば、そのお詞に從ひまして杯事ばかりは兎も角も、マア、お心任せに。

小萬　オヽ、それがよい／＼。さうしなさんせ。いま云ふ通り、お雪も奥に來てぢやゆゑ、さういふ事なら後とも云はず、娘もこれへ呼ぶほどに、ちつとも早う杯事を

權三　アヽモシ、くれ／＼も、杯事ばかりで

小萬　そりや合點でござんすわいな。

權三　必らずともにその事を

小萬　ハテ、氣遣ひしなさんすな。

ト奥へ向ひ

コレ、渚、お雪を爰へ連れておぢや。

ト奥にて

渚　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。

ト合ひ方になり、奥より渚、先に、お雪が手を取り、出て來る。權三は下の方に俯向いて思案の思ひ入り。

小萬　ハイ、お雪さんをお連れ申しましてござりまする。

ゆき　コレ、お雪、サヽ、こちへおぢや。定めしわが身もアノ奥で、太次兵衛どのから詳しい話しも聞きやつたであらうが、親々への孝行ぢやと思うて、モウ〳〵、何にも云はずに内祝言の、杯事ばかりぢやと思うてゐる程に、ナ、よう合點してたもや。

小萬　サア、父樣や母さんのお爲とあるゆゑ、よう合點して居りまするが、必らずともに杯さへすりやよいのでござりまするかえ。

渚　オヽ、杯さへすりやよいわいの。

小萬　申し、御新造樣、お雪さまの仰しやりまするには、杯事ばかりならよけれど、殿御と一つ寢するやうな事があつては、云ひ交した殿御へ立たぬ程にと、そればつかりお案じなされてゞござりまするわいな。

　そりや何もかも、わしが承知ぢやて。さう物事が解りさへすりや、何も案じる事はないわいの。サヽ、それさへ得心なら、あれに居る聟どのも承知の事。サア〳〵、二人ともそこへ出て、ちや

つと杯事を

渚　でも、俄の事ゆゑ、アノお杯の用意は

小萬　イヤ／＼、ほんの學びばかりの事ゆゑ、幸ひめでたう。ドレ、その屠蘇を持つておぢやいの。

渚　畏まりました

ト以前の屋體の銚子、三組みの杯を持つて來り

左樣なら、お酌は私しが、致しまするでござりませう。

小萬　サア／＼、そんなら權三どのにも、マア、これへござんして

トこれにて權三、是非なく、よき所に來り

權三　左樣なれば、わざと學びに、杯事ばかりを

トこの時、權三お雪、顏見合せ、思ひ入れあつて

ヤア、其方は

ゆき　さう云ふお前は

權三　ほんに思はぬ雨舍りに

ゆき　云ひ交したるいとしい殿御。

權三　すりや、源五兵衞どのゝ娘御であつたか。

ゆき　モシ、おなつかしうござんしたわいな。

ト思ひ入れ。

小萬　そんならアノ二人とも、云ひ交した相手があると云うたは

ゆき　アイ、あのお方で

權三　あの娘御で

兩人　ござります る。

ト兩人、恥かしき思ひ入れ。

小萬　ヤ。

ト思ひ入れあつて

ほんにマア、この子とした事が、油斷も隙もなるこつちやない。呆れたものぢやわいの。

ゆき　申し、母様、わたしや早う、ほんまに祝言が、致したうござりますわいの。

ト小萬、思ひ入れあつて

小萬　イヤ〳〵、よう思うて見れば、互ひに不得心の祝言。こりやモウ、杯事は止めにしませうわいの

兩人　そりや又なぜでござりまする。

小萬　ハテ、二人とも、杯事だけといふ女夫仲。それになんの杯事も、いらぬものぢやわいの。

ゆき　イエ〱、そりやアノ、外の殿御と思うたゆゑ。あの權三さんなれば、致さいで

ト恥かしき思ひ入れ。

權三　殊に幸ひ、今日は日柄も善く、善は急げと仰しやつた事もござりますれば

ゆき　申し、母樣、お前の云はしやんした通り、早う祝言いたしたうござんすわいな。

小萬　それ見やいの。それにマア、何ぢやの、かぢやのと、人には大抵案じさして……それぢやによつて、疾にわしが云ふ事聞きやればよいに。なんのマア、母に如才がござらうかいの。

ト此の時、奥より太次兵衞、出て來り

太次　ヤレ〱、御新造樣、あれで何もかも承りましたが

ト權三に向ひ

これは、あなたには、お初にお目にかゝりました。さて〱、不思議な御緣でござりまするな。

小萬　オヽ、太次兵衞さん、お前も喜んで下さんせ。此やうなめでたい春は、ござんせぬわいな。

太次　左樣でござりまする。斯樣な事なら猶更、ちつとも早う御祝言を

渚　それがよろしうござりませう。左樣なら、ドレ、お酌いたしませう。
ト銚子を取上げる。小萬、これを留め

小萬　ア、イヤ〳〵、斯ういふ事なら、その屠蘇には及ばぬ。そりや惡い〳〵。

小萬　オヽ、惡いと云うたは、オヽ、それ〳〵、その屠蘇は毒ぢやわいの。ゆき申し、母樣、祝言の盃事を致しまするに、惡いといふは

兩人　エヽ、なんの屠蘇が毒でござりませう。
ト思ひ入れ。

小萬　アヽイヤ、何も驚く事はない、斯うぢやわいの。一體、その屠蘇といふものは、惚れぬ同士はよけれども、どうやら惚れ合うた仲にはきつい毒。

兩人　エヽ。

小萬　サア、惚れ合うた仲には、屠蘇は毒ぢやと、サア、お醫者方の話し。それなれば、矢ッ張り只の酒がよい程に、コレ、渚、奧の銚子を、早う持つておぢやいの。

渚　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。
ト渚、奧へ入る。

太次　左様ならば、このお銚子は、此方へ斯様に片附けて置きませう。

ト右の居蘇の銚子を二重舞臺に片附け

時に、差づめ、お取持ちなり、仲人役は、この太次兵衞でござりまする。

ト奥より諸、銚子を持つて出て來り

諸　ハイ、外のお銚子を持つて參じましてござりまする。

小萬　サア〳〵、そんなら娘、わが身から始めてアノ聟どのへ。

ゆき　そんなら、わたしから始めますのかえ。

ト　お雪、杯を取上げ、諸、酌して、杯事よろしくある。

太次　左様なら私しが、わざと幾久しうお祝ひ申しませう……千秋萬歳の、千箱の玉を奉る。

ト謠ひ

ヤレ〳〵、おめでたう存じまする。時に、仲人は宵のうちと、私しは直ぐに、お開きに仕りませう。

小萬　これはしたり、お前もマア、今宵は此方へ泊つて行きなさんすがよいぞや。

太次　イエ〳〵、有り難うはござりまするが、明後日は年越しではあり、左様なら若旦那、お雪さまに

も、隨分ともに。
ゆき 何かと、いかいお世話に
小萬 そんなら又そのうちに
太次 ハイ〳〵、お尋ね申しますでござりませう。
ト通り神樂になり、太次兵衛、花道へ入る。あと合ひ方。
小萬 サア〳〵、もうこの上は二人ながら、隨分仲ようしてもらはねばなりませぬ。
ゆき サア、そりやモウさうぢやけれど、不思議な縁と云ひながら、思ひもよらぬ雨舍りに、ふとした殿御の惡さやら、その眞實なお心が、どうもわたしや
權三 アヽ、これはしたり、どうして、なんの其やうな事であらう。それ程わしが心を疑うてなら、オオ、それ〳〵。
ト懷中より袱紗包みの赤木の短刀を出し
こりやコレ、父上からの讓りの名作、赤木作りのこの短刀、肌身離さぬ大切な品なれど、變らぬ誓ひに幸ひと、其方へ渡して置く程に、必ず大切にして下され。
ト短刀を渡す。お雪、受取り

ゆき　そんならアノ、いつまでも、お前の心が變らぬといふ、これが誓ひでござんすかえ。
小萬　オヽ、さういふ慥かなしるしがあれば、なんの疑ひには及ばぬ、さりながら、大切の品といひ、殊に名作とあるからは、切るといふ詞もあれば、その短刀はこの小萬が、預かつて置きませうわいの。
ゆき　アイ〳〵、さういふ事なれば、これはお前にお預け申しませう。
ト小萬へ渡し
モウ〳〵、此やうな嬉しい事はないわいな。これといふのも母樣のお庇。
權三　何から何まで、御夫婦の御厚情
兩人　お嬉しう存じまする。
小萬　オヽ、それでわたしも落ちつきました。それはさうと、わしは何やら、アイタヽヽヽ。
ト思ひ入れ。
兩人　申し、どうなされました。
小萬　アヽ、イヤ〳〵、久しいものぢやが、こりや持病の癪氣。つい納まるほどに、何も案じる事はない。サ、内祝言とはいひながら、何も遠慮はないほどに……コレ、渚、つい色直しのさゝめ言、爰で

とつくり、ナ……サ、こりや療治せにやならぬわいな。

ト唄になり、小萬、思ひ入れあつて、奥へ入る。權三お雪、渚、殘る。あと合ひ方になり、こなしあつて

渚　御新造樣の粹なお捌き。サアノヽこれから、かけかまひのない、世間晴れての御夫婦樣。

ゆき　わたしらを爰へ殘し、女夫の固めせいと、云はぬばかりのお計らひ。

權三　ほんに、縁といふものは味なもの。いつぞや小和田村にて、思はぬ縁の俄雨。

ゆき　わたしもその時、傘を、取りに行く間も身をいとひ、暫しは舍る物蔭に

權三　互ひに濡れじと寄りそふうち

ゆき　雨の霽れ間に月あかり

權三　見合す顏は

ゆき　可愛いお前。

權三　濡れし二人が敷寐の袖を

ゆき　縫ひ合せたるつま結び。

權三　ほどけぬ仲の、身ごろと

ゆき　身ごろ。
權三　不思議な緣で
兩人　あつたなア。
ト思ひ入れ。
渚　最前より、お前樣のお話しは、誠に深い御緣の話し。今からお仲もよう、鬼の留守に洗濯とやらお氣詰まりにならぬやう
ゆき　それ〳〵、權三さまにも、堅苦しうなされずと、お袴をお取り遊ばしませ。
權三　それぢやというて、袴を取つては、あまりに失禮。
渚　ハテ、今日からあなたのお屋敷。御遠慮なう、御休息遊ばしませ。
權三　でも、それでは
渚　ハテマア、よろしうござりまする。
ト權三の袴を取らせる。
ゆき　これからは、今までの御氣鬱を散じるやうに、何なりとお氣に入つた事をして、お慰め申してたもや。

渚　畏まりました。お慰みになる事は、何がよろしうござりませう……モシ〳〵、お屋敷の内で、隠れんぼはどうでござりませう。

ゆき　こりやよからうわいなう。

権三　そんなら、おれが鬼にならうか。

渚　イヽエ〳〵、あなた様は、鬼に致してはあまりに恐れ多い。私しが鬼になりませう。イエ〳〵、よい事がござります。こりや、鬮取りに致しませう、長が鬼でござります。

ト門松の葉を取つて鬮にする。捨ぜりふにてこの鬮を引く、お雪、長いのを引いて

ゆき　ヤア〳〵、わたしが長いやうぢやわいな。

権三　サア〳〵、お雪が鬼ぢや。

ゆき　そんなら、わたしが鬼になるのかいなア。

渚　サア〳〵、鬼におなり遊ばしませ。

ト手水鉢の手拭を取つて、お雪に目隠しをさせる。通り神楽、合ひ方になり、渚、権三、手を叩き

二人　おゝにや鬼や、今年の鬼は、油断がならぬ〳〵。

ト囃しながら、鬼事よろしく、権三、渚に囁やき、袴を持つたまゝ、上手の屋體に隠れる。渚は奥へ

入る。お雪、これを知らず、堂に廻る。この時、奥より作右衛門、出て来る。お雪、両人と心得、作右衛門を捕へ

ゆき　サア〳〵、捕へた〳〵。これから鬼を渡したぞや。

ト　お雪、目隠しを取り、作右衛門を見て思ひ入れ。

作右　ヤイ〳〵、イケ馬鹿々々しい。侍ひを捕へて何とする。

ゆき　あなた様は御家中のお方。お免し遊ばしませ。

作右　見れば、ついに見馴れぬ女中。このお屋敷の腰元か。

ゆき　成る程、御存じないは御尤も。私しは幼少の砌りより、他家にて成長いたしました、源左兵衛の娘、雪と申す者でござります。

作右　さては、かね〴〵噂ござつた、お雪どのとは其許でござるか。存ぜぬ事とて失禮申した。眞平御免下されい。

ゆき　これは〳〵御挨拶、其やうに仰しやりましては、却つて迷惑でござりまする。不調法の私し、この上ながら、よろしうお頼み申しまする。

作右　イヤ、その儀はお互ひの事。拙者ことは、賤ヶ谷作右衛門と申す者、以後はお心安くお頼み申す

ハテ、爭はれぬ。御器量と申し、とりなりまで、母御の小萬どのに……イヤ、母御と申せば御内室小萬どのは。

ゆき　ハイ、只今奥に居られまする。

作右　然らば、拙者がお話し申したい事がござる、なんとこれへお呼びなされては下さるまいかな。

ゆき　畏まりました。

作右　それは忝い。ちよつとこれへと申し傳へて下され。

ゆき　左樣なら、お待ちなされませ。

ト合ひ方になり、お雪、奥へ入る。

作右　そんならあれが、小和田村とやらへ、里にやつたと聞いた、源五兵衞と小萬が仲の……ハテ、いい娘になつた。彼奴も只は置かれぬわい。

トこの時、小萬出て來り

小萬　アイ〳〵、ちよつと行て來るぞや。

ト作右衞門見て

作右　オヽ、これは小萬どの。

小萬　作右衛門さま、これにお出でなされましたか。

作右　さて、小萬どの、別儀ではござらぬ。最前お頼み申した、ソレ、身共が心底、權三どの、御返事は、如何でござるな。

小萬　サア、最前は御返事を、致させませうと存じましたなれど、權三ことは、今日改めて、聟と定めましてござれば、私しとても親子の事、それゆゑどうも

作右　すりや、なんと云はつしやる。權三どのは、聟養子となられましたか。それは何よりおめでたい事。その儀によつて、取持つ事はならぬと云はつしやるか。

小萬　ハイ、親子の間柄、この事ばかりは

作右　ならぬと云ふのか。

小萬　余人をお頼みなされませ。

作右　事を分けたるそのお詞、聞分けました。權三どのは思ひ切りませう。その代り、幸ひ源左兵衛どのもお留守なら、小萬どの、お情にあづかりたい。

トしなだれる。

小萬　その思し召しは、有り難う存じまするが、そりや御座興でござりませう。殊には夫のある身。ど

う致して左様な事が

作右　エヽ、源五兵衞どのはあやかり者。御器量といひ、そのマア貞女な事わい。こりやモウ堪らぬ。

　　ト縋りつく。

小萬　アレ、何をなされますぞ。

作右　小萬どの、拜む〳〵。

　　ト舞の鳴り物になり、小萬逃げるを追ひ廻す。この時、小萬、落ちてある手拭にて、作右衞門へ目隱しする。

ヤアヽ、コレ、どうする〳〵。逃がしはせぬ〳〵サ。

　　ト小萬の帶を解きかけるゆゑ、振り放し、帶を抱へ、上手の障子屋體へ入る。作右衞門これを知らず暴れてゐる。向うより源五兵衞、羽織袴、大小。跡より彌助、中間の形にて附添ひ出て、直ぐに舞臺へ來る。作右衞門、小萬と心得、源五兵衞に取りつき

サア〳〵、捕へた〳〵。どうぞ身共の

　　ト目隱しを取つて見て

イヤア、貴殿は源五兵衞どの。

源五　これは作右衞門どの、何をなされる。

作右　サア、これは。

彌助　ハヽア、たつた一人で、鬼渡しをなされたな。

源五　大人氣ない。何者を相手にその戯むれ。

作右　サ、只今、小萬どのを

源五　初春早々、鬼は禁物。彌助、西の海へ追ツ拂へ。

彌助　お旦那のお留守に、御新造樣と鬼渡しは失禮。サ、お歸りなされませ。

作右　歸りは歸るが、アノ小萬どのを

ト思ひ入れ。彌助、豆を薄く振りにて

彌助　鬼は外〳〵。福は內。鬼は外。

作右　福は內〳〵、福はうちお目にかゝりませう。

ト通り神樂になり、作右衞門、件の文を落し、向うへ入る。彌助、思ひ入れあり

彌助　アノ作右衞門さまとした事が。ハヽヽ……旦那樣、御覽じませ。一夜明けますと又格別。明日は御親類樣の方へ、御年始でござりませうな。

源五 その節は大儀ながら、其方を供に召連れるぞ。

彌助 畏まりました。

ト この時、源五兵衛、伴右衛門の落したる文を取上げ見て

源五 なんぢや……「權さままゐる、御存じより。」

彌助 エ。

源五 家内の者は如何いたした。戻つたぞよ／＼。

ト 云ひながら、件の文を袂へ入れる。

彌助 お旦那のお歸り。御新造さま／＼。

ト この聲を聞いて上の方障子の内より小萬、帯を抱へ、權三は袴を持ち、出てくる。源五兵衛は兩人の形を見て、ヂロリと思ひ入れ。權三は袴、小萬は帯を結びながら

小萬 これは／＼、我が夫源五兵衛さまには

權三 只今お歸りでござりましたか。

源五 オヽ、今戻つたぞ。

彌助 モシ、御新造様、若旦那、何を其やうに帯紐解いてソワ／＼と……とつくりと御吟味なされませ

源五　默れ彌助、何事も身が胸にある。下部の分でいらざる事を。扣へて居れ。さりながら、小萬、權三。

ト兩人を尻目にかけ

晝中に、その形は何事ぢや。假にも養子ともなすべき權三に、みだらがましい事の無い事は、身共は承知いたし居れど、身が留守といひ、あの小座敷で。人の見聞、何とも見悪い。もしも斯樣な事が、世間の噂になつてお見やれ。其方達ばかりか、この源五兵衞が面皮にかゝる。さりながら人心。もしや誠に……イヤサ、必らずともに武士の面へ汚さぬやうに二人とも

小權　エ。

源五　火鉢を持ちやれ。

ト小萬、思ひ入れあつて火鉢を出し、權三は莨盆を出す。

權三　御歸宅の事を、お雪に知らせまして

小萬　わしは、お煮花でも申しつけませう。

ト兩人、立たうとする。

源五　イヤ〳〵、茶は欲しうない。只今、同役どもが方にて、薄茶の馳走になつた。矢張り其まゝ。

小萬　左樣なら、お銚子なりと。

彌助　ハテ、旦那があれ程に仰しやりまするを、無理に勸めて二人一緒に、この座を立つとは臑に疵。ソワ〳〵せずとお二人樣、ゆるりとお話しなされまし。

權三　成る程、主のお留守に、此やうな形を致して居りましたゆゑ、其方までが詞の端々、源五兵衞どのゝ手前、何とも以て氣の毒千萬。これと申すも最前から、腰元どもと戯むれに、隱れしあれなる小座敷に

小萬　其方が居るとは露知らず、樣子あつて隱れしが

權三　形も形とて二人が二人

小萬　何もそゞろに譯合ひを、お話し申すも云ひ譯がましい。申さぬ前に身の潔白。

權三　誓ひのしるしは

兩人　ハテ、何をがな。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、小萬は最前の生血を入れしふらそこを持ち、その酒を件の硯へ入れる。

源五兵衞見て

源五　合點のゆかぬ女房小萬、器の中には何やら血汐。硯へ入れしその品は

小萬　ハイ、これは最前正庵どのより預かりましたる、宮守の血汐でござりまする。

彌助　ヤヽ、その血汐を、それなる硯へ入れられしは。

小萬　仔細は即ち、まツこの通り。

ト左の腕へ「五大力」と書く。彌助見て

彌助　合點の參らぬ御新造樣

源五　何ゆゑあつて、その文字を

小萬　我が夫にも御存じあらん、すべて宮守と申す蟲は、執念深く、まつた悋氣も强きゆゑ、肌ふれたる男女に、注ぎかくるといへど、なか〳〵肌身へ附く事なし。されどもこの通り、墨黑に文字、アリ〳〵と肌身へ附く、洗へどこの文字消えずといふ。また殿御に添ふ時は、忽ち消える……宮守の奇瑞。これにてお疑ひ、お晴らしなされて下さりませ。

彌助　成る程、あなたの仰せの通り、聞き傳へたる話しはあれど見るが初めて。宮守の奇特。して又、權三が潔白は。

源五　私しが心底も、まツその如く、また五大力菩薩は、締りを守護し給ふゆゑ、我れも心の戸締りよく、親の敵を討つ心。心願達するそれまで、其許樣のお側離れず

權三

ト これも腕へ「五大力」と書く。

彌助　イカサマ、これは御尤も。不慮の事からあなたを始め、この下郎まで、このお屋敷の御厄介、さほどの事もお辨まへあるに

源五　權三と申し、女房小萬、帶紐解いて、何ゆゑあれで。

小萬　サア、今の通り誓ひを立つて、お話し申すも面目ない事ながら、權三どのとあなたと譯ある噂、女子の淺い心では、嫉ましう存じましたゆゑ、これを遠ざけんには、權三どのを養子となし、娘お雪と夫婦となさば、お前とは親子となり、その義理に引かされて、自然と仲も離るゝ道理。

權三　その娘御と露知らず、いつぞやふとした轉び寢に

小萬　それも他生の緣とやら。內祝言もめでたう調ひ、互ひに喜ぶその折から

權三　腰元どもに戲むれの、思はず隱れし小座敷も、神ならぬ身はそれぞとも

小萬　知らずあなたの留守の間に、あの伴右衞門が、道ならぬ事申すゆゑ、恥しめ歸すもはしたなう。よんどころなうあの小座敷、暫し隱るゝわたしら二人。

權三　お雪と緣組みせし上は、義理ある仲の續き合ひ。

小萬　何しに不義がましい事がござりませう。これにてお疑ひ

兩人　お晴らしなされて下さりませう。
彌助　ハヽア、潔白なるその申し開き、こりやさうなうては叶はぬ筈。
源五　いかにも其方が申す通り、源五兵衛、承知いたした。この上は、權三と身共は舅。
權小　すりや、お疑ひ晴れし上は
彌助　いよ／＼若旦那を御養子とか。
權小　チエヽ、忝い。
　　ト此うち、お雪、出て來り
ゆき　そんなら、わたしと權三さんは、父さんも御承知の上
源五　ハヽア、父さんと申すからは、こりや、里に遣はした娘のお雪か。久しく見ぬ間に、よう成人いたしたな。いま途中で逢うても一向知れぬ。我が子ながらも見違へたわえ。
ゆき　わたしも父さんのお顏を、ハッキリとも見られぬこの眼病。そんならいよ／＼、内祝言を調へて
源五　オヽサ、天下晴れての夫結び。
小萬　仲睦まじう幾千代まで
ゆき　變らぬ妹背、末長う

權三　義理ある親御へ孝行は
彌助　夫婦仲よく、家內安全。これで下郎も一つの安堵。
源五　どうぢや、二人の者、嬉しいか。
權三　嬉しうなうて、なんと致しませう。
ゆき　南無御兩親大明神樣。
小萬　御覽じませ。あのマア、嬉しさうな顏わいな。ホヽヽヽヽ。
　　ト思ひ入れ。向うより若黨一人、走り出て來り
若黨　ハツ、申しあげます。
彌助　何事でござる。
若黨　今日千葉家へ、賴家公お入りにつき、源五兵衞さま方に御同居の、權三どのを同道にて、急ぎ出仕いたされよとの、御內意でござります。
　　ト云ひ捨て、引返して入る。
源五　今日賴家公、當家妙見宮へ御參詣とは、かねて存じ居つたれど、陪臣の某と申し、他家より同居の權三をば、火急のお召しは心得ぬ。

權三　左樣でござります。私し風情が恐れ多い、輕家公のお目通り、仰せつけらるゝとは、何とも以て

彌助　イヤ、こりや斯樣でござりませう。若旦那權三さまには、御手蹟は出石宅左衞門さまの御弟子、槍術は槍の權三と、異名をお取りなされた程の事なれば、ナア、御新造樣。

小萬　それ〳〵、この度の流浪、上聞に達し、新地にてお取立の吉左右か。

ゆき　何にも致せ、火急のお召しとあれば、片時も早う。

源五　衣服をこれへ。

小雪　畏まりました。

ト小萬お雪、廣蓋に載せたる上下を出し、兩人へ着せかへる事よろしく

源五　彌助、大儀ながら又ぞろ出仕。

彌助　お供いたすでござりませう。

權三　左樣なら母上樣、御機嫌よろしく。

小萬　隨分萬事に心を附けて。

權三　畏まりました。

ト此うちお雪、權三へ思ひ入れ。

源五　コリや、お雪、何をうつかり。聟どのへ挨拶いたせ。

ゆき　ハイ、左様なら、我が夫にも御機嫌よう。

トこなしあつて

權三　つい行てくるぞよ。

ト彌助、二人を見て

彌助　御覽じませ、御新造樣。

小萬　ハテ、よう似合うた

彌助　花嫁。

源五　花聟。

權雪　エッ

ト思ひ入れ。

源五　女房ども、火の用心しやれ。

ト唄になり、源五兵衞權三に、彌助附いて向うへ入る。あと合ひ方にて、小萬、お雪、こなしあつて

小萬　サア／＼、めでたう御出仕なされた上は、其方もゆるりと休息しや。

ゆき　有り難う存じまする。何は兎もあれ、お召し物を
小萬　イヤ〳〵、其方は勝手が知れまい。女子ども、來いよ〳〵。
ゆき　イエ〳〵、それには及びませぬ。勝手を覺えるため、お召し物は私しが
小萬　オヽ、よい心掛け。そんならわしも手傳うて
　　トお雪は權三の衣類、小萬は源五兵衛の羽織を疊まうとして、羽織の袂より、最前拾ひし文を出し
　このお羽織の袂より、この文、ナニ、「權さままゐる、御存じより」……ハテ、心得ぬ。權さまと
　は、權三どのゝ事。御存じよりと、この名宛は
ゆき　どうやらなまめく、そりや色文。
小萬　そんならこちの人は、浮世の義理も辨まへず、まだ權三どのを
ゆき　エ。
小萬　思へば〳〵
　　ト羽織を持つて思ひ入れ。お雪、見て
ゆき　アヽモシ、それではお羽織に
小萬　また綻びが

ゆき　エ。

小萬　切れて來たわえ。

ト思ひ入れ。唄になり、此まゝ道具廻る。

本舞臺、平舞臺、正面、金張りつき大瓦燈口、摺込みの交貼り、欄間その外結構に飾りつけ、誂らへの通り。爰に二疊臺を直し、この上に賴家、壺折り衣裳、刺貫にて住ひ、上の方に景時、白髮の梶原、柿の素袍。原小次郎、榛谷次郎、素袍、立烏帽子、大名の形。星の井、裲襠衣裳。宅左衛門、上下衣裳、老けたる拵らへ。伴右衛門、惡五郎經景、上下衣裳にて左右に別れ扣へゐる。すべて千葉家館の體。管絃にて道具とまる。

ト向うより侍ひ一人出て來り

侍ひ　ハツ、申しあげまする。お召しによつて、御家臣薩摩源五兵衛方に、同居仕りまする笹野權三、お次に扣へましてござります。これへと申しませうや。如何でござりませう。

景時　兩人の者、急いでこれへ呼び出だせ。

惡五　兩人、急いでこれへ。

權源　畏まりましてござりまする。

ト向うより源五兵衛、權三、前幕の形にて出て、直ぐに本舞臺へ來り

源五　思ひがけなき陪臣の某、笹野權三

權三　火急のお召しによつて、出仕いたせし我れ〳〵兩人

作右　成る程、合點がゆくまい。笹野權三は槍術手練、上聞に達せしゆゑ

惡五　我れ〳〵へ仰せつけられ、お目通りに於て槍術の御見覽。

景時　まだその上に筆道は、これなる出石宅左衞門、弟子にて能筆と聞き及ぶ。

作右　それはなまめく華奢風流。

小次　治國も亂を忘れずと

榛谷　武術手練の兩人。ソレ

作惡　覺悟。

トかゝる。權三、兩人を相手に立廻つて、よろしく兩人を打ち据ゑ

權三　御覽の通りいづれも樣、この上にもお望みとござらば、どなたでも容赦なく、槍の一手をお目にかけませう。

皆々　サ、それは。

權三　御返答が承りたい。

星井　若輩者には似合はぬ手の内。武術の嗜み、感心いたした。

宅左　御覽相濟む上は、武門の冥加。君のお詞下し置かれませうなれば

星井　有り難うござりまする。

頼家　文武兩道に秀でし其方。この上ともに出精いたせ。

權三　御幼君なれども、栴檀は二葉より芳ばしと、冥加にあまるその御諚。

源五　同道いたせし某まで、他聞の思惑。

兩人　有り難う存じ奉りまする。

　　　トこの時、向うにて

呼び　犬坊丸出仕。

景時　ナニ、犬坊丸の

皆々　出仕とや。

呼び　犬坊丸出仕。

ト呼び、誂らへの鳴り物にて、向うより犬坊丸、長上下。跡より近江小藤太、八幡三郎、出て來り、

伊之助、縛られ、侍ひ二人に引立てられて出て來り、花道に住ひ

犬坊　實に麗かな春の空、夜陰はそれと月星の、千葉の館へ今日の出仕は、父祐經の名代として、即ち犬坊丸祐友。

近江　お供はいつも相變らぬ、春の世界の初役に、いづれも樣のお許しうけ、怖々出たる某は、近江の小藤太成家。

八幡　同じく八幡の三郎も、八幡知らずの盲目蛇、物に怖ぢざるこの曲者。

伊之　縄目の恥も七つ屋の、暗闇へ行くこの身の上。ならう事なら初春の、年玉心にお武家樣、どうぞ免して下さりませ。

近江　今さら未練なその繰り言。

八幡　何は兎もあれ、直さま御前へ

近江　まづ入らせられませう。

ト皆々舞臺へ來る。

宅左　祐經どのゝ名代として、犬坊丸祐友どの。

皆々　只今出仕めされたか。
源五　見ますれば、合點の參らぬその繩付き。
權三　賴家公の御前とも憚らず
惡五　何ゆゑあつて引据ゑめされた。
近江　只今主人犬坊丸、これへ來かゝる路次に於て、狼藉いたせしこの者。
八幡　御家來衆、囚人を引ツ立てさつしやい。
侍ひ　ハア……科人、立ちませう。
伊之　立ちませうとも〳〵。隨分立ちます……これは、どなたも御苦勞でござります。
ト侍ひ附いて下手へ入る。
景時　合點のゆかぬ祐經どの、今日賴家公の御內意あつて
惡五　當屋敷の妙見宮へ、御參詣の折なれば、早速出仕あるべきところ
伴右　所勞の屆けもござらぬが、何ゆゑ出仕めされぬな。
近江　主人祐經は皐月下旬、富士の御狩の惣奉行を蒙むりしゆゑ
八幡　山神をいさめのため、伊豆相模の山々を、日毎に行道。まつた一つは、地理案內を知らんが爲

犬坊　出仕を止めて斯くの仕儀。それゆゑにこそ犬坊丸、君の御機嫌、伺ひ奉る。

星井　今日頼家公の御參詣は外ならず、當家の妙見宮、御信心とござるゆゑ

惡五　天下の御外聞にもかゝはるゆゑ、北辰の二字を、能筆選み給ふとある。

源五　イカサマ、大切の儀にござりますれば、一臈職御出合ひの上にござらねば

景時　指圖あるべき筈なれど、この座に居ねば是非に及ばぬ。

八幡　然らばこの上は、出石宅左衞門どのは、能筆の聞えござれば、貴殿お認めなされては如何でござるな。

宅左　行氏どのゝ思し召し、有り難うはござれども、私しの一流、釣り筆の傳授は、これなる源五兵衞が妻、小萬に讓りましたれば、この儀は何卒

權三　御免を蒙むり、小萬に仰せつけ下さりませうなれば、筆道の冥加と、有り難う存じまする。

近江　默れ、權三とやら。天下の諸侯は無筆のやうに、イケ生ぬるい女なぞに

權三　ヤ。

近江　生若輩の分として、何を知つて……すッ込んで居らう。

權三　ヤ、なんと。

ト思ひ入れ。八幡、引止め

八幡　小藤太どのゝお詞ではござれども、諸寺諸山を見ますれば、和泉紫兩式部、小町の人々、勅命を蒙むり、女筆の額はいくらもござる。

近江　ヤア。

八幡　それに女筆を譏つては、一天下を譏るも同然。違命の罪は遁がれまい。

近江　サ、それは〻

八幡　其許のお詞とも存ぜぬ。こりや、ちとお麁相かと存じられます。

星井　然らば、この上は宅左衞門、筆道の弟子筱野權三、能筆の聞えあれば、額奉納の筆意は、彼れめに命じてよからう。

作右　イヤ〱、奥方、暫らくお待ち下さりませう。拙者とても宅左衞門の門弟、かねて承り及びしゆゑ、卽ちこの手見せ。宅左衞門さま、御覽下さりませう。

ト書き物を出して見せる。

宅左　成る程、見事な御手蹟ではござれども、諸人に見せまする筆法なれば、なか〱この位な事では

作右　ヤ。

宅左　もそつとお稽古なされませい。
作右　すりや、これでは役には立ちませぬか。エヽ、いま〳〵しい。
　　ト書き物を打ちつける。
八幡　恐れながら、奉納の筆意は、權三とやらに、仰せつけられ下さりませう。
頼家　然らば願ひに任せ、其方に申しつける。
源五　有り難き御諚ではござれども、若輩者といひ、不調法なる悴と申し
權三　殊には、釣り筆の傳授うけませねばなりませぬ。この儀は只管、御免下さりませう。
宅左　イヤ〳〵、辭退いたすは上への恐れ。小萬どのに傳授を許しあれば、聞き及びたる間柄、傳授を受けつぎ、奉納の額へ、北辰の二字を
權三　有り難きそのお詞。然らば辭退申さず、これより直ぐに傳授を受けつぎ
宅左　心を籠めて筆意の妙。
權源　有り難く、お受け致すでござりませう。
作右　ハテナア、同じ弟子朋輩でも、權三どのは能筆、その上、槍術は、槍の權三と異名を取つたる御名人。ハテ、羨ましい。あやかる爲に、ちよつと身共が、貴殿を祝して。

ト小柄な手裏劍に打つ。權三、打ち返す。

天晴れ御手練。ところを、斯うして。

ト立ちかゝる。袴を打ちかへし縫はれ、よろめく。

權三　ハテ、御油斷な。貴殿のお袴へ小柄が立つて。

作右　いつの間にやら。おのれ權三め。

ト立ちかゝる。見事に投げる。

小次　權三、出かした。

棒谷　天晴れ手の內。

景時　額奉納の筆意は、權三と極まる上からは

惡五　この度諸家の系圖改め、並びに重器の御改め。

犬坊　まづ差あたる千葉の重寶。

源五　天國の短刀、折紙もろとも、拙者預かりござれば、後刻、筆法傳授相濟みなば、忰權三に持參いたさせ、まつた一品の重器と申すは

宅左　空海上人より當家へ傳はる、月星の畫像。この二品は、私し忰千太郎、預かりなれば

源五 右の品とり揃へ
宅左 御覽に入れますするでござりませう。
八幡 左樣ござらば 拙者は主人へ、その旨言上。
景時 若君樣には先刻より
惡五 餘程の間、何かと御氣鬱。
宅左 御座を改め、御休息。
賴家 然らば、方々。
權三 拙者はこれより、直さま歸宅。
宅左 行け。
權三 ハツ。
皆々 まづ、入らせられませう。
ト管絃になり、權三は向うへ入る。皆々、奧へ入る。惡五郎、景時、伴右衞門殘り
兩人 伴右衞門、心が附いたか。
ト伴右衞門、心附き

作右　滿座の中で面目ない、今の體裁。おのれ童め、覺えてゐろ。

景時　ハテ、勝つも負けるも時の張合ひ、長い月日のうちには、仕やうもやうはいくらもあらう。落ちついてゐろ／＼。

惡五　この上は、當家の重寶、天國の短刀、折紙もろとも、權三親子が預かりなれば、それを竊かに盜み取り、二人の奴に梵天帝釋をくはせるより、外に思案は無いわえ。

作右　イカサマ、流石は千葉家の御次男樣、天晴れの御計略。

景時　して又、盜むその手段は。

惡五　されば、源五兵衞方に祕め置く寶の在所、勝手知つたる手引きの者は

作右　オット皆までのたまふな。それこそ屈竟の者がござる。

兩人　して、その者は。

作右　コレ。

ト下の方へ礫を打つ。垣の蔭より彌助、伊之助を引ッ立て、出て來り

彌助　作右衞門さま、合圖の知らせは、何の御用でござります。

作右　外でもない。コレ

ト囁く。

彌助　何事かと存じましたら、お心安い事。併しながら、萬一見咎められました時は、お前様方はじめ私しも詰まりませぬ。その仕様は、コレ

ト伊之助を見せる。

伴右　こりや、最前の囚人。

景時　又ぞろ爰へ、何しに來た。

伊之　假の獄屋へ打込まれ、冷え凍えてゐた所へ、この人がござつて、何やら用があると、これまで引出されて參りましたが、所詮助からぬ私しなら、未練に命は惜しみませぬ。サア、すつぱりとやらつしやりませ。

彌助　成る程、性根が据つて面白い。その覺悟なら、刃物だめしに。南無阿彌陀佛。

ト一腰を抜き、伊之助の縛り繩を切る。

皆々　これは。

伊之　首はコロリと思ひの外、こりやどうだ。

彌助　命助けたその代り、頼みがあるが、聞いてくれるか。

伊之　命にかへる寶はござりませぬ。何なりと仰せつけられませ。して、そのお頼みは、

彌助　頼みといふは外でもない。コレ

ト囁く。伊之助、呑みこみ

伊之　畏まりました。そんならお前が手引きして、その天國の短刀折紙。

彌助　盗んでくれゝば、褒美は前金。

ト懷より包み金を出してやる。伊之助取つて

伊之　イヤア、こりやァ正眞の小判。忝い。

景時　前金に遣はすとは

彌助　ハテ、物事この位に致さねば、萬事うまくは行きませぬ。

伊之　有り難い。命助かつた上にこの褒美。

作右　その勢ひで、少つとも早く

伊之　畏まりました。そんなら必らず

彌助　手引きは今に

景時　合圖を待つて

惡五　必らずぬかるな。
伊之　心得ました。
ト向うへ走り入る。
景時　コレ〳〵、彌助、滅法界な大金をやるとは
伴右　あんまりはづみ過ぎるではないか。
彌助　やつても大事ござりませぬ。
兩人　そりや又、なぜに。
彌助　あの金は、一兩々々、三ッ石の極印。わしが持つても遣はれぬゆゑ。
伴右　遣へば忽ち、その身は
彌助　寂滅。
景時　あの金は、いつぞや笹野三太夫が、千葉の用金百兩、箱根權現へ奉納の途中、小和田の松原で其方が、三太夫を殺害なし、盗み取つた極印金。
伴右　その上、ヅキの廻りさうな金ゆゑ、あの伊之助に摑ませ、萬一捕へられたその時は、三太夫を殺したも、極印金を盗んだも

彌助　科は彼奴に塗りつける、私しが狂言。いづれも樣、どんなものでござりまする。

兩人　天晴れ惡智慧。

彌助　モシ。

ト思ひ入れ。管絃になり、景時眞中に、三人は目と耳を押へ、庚申の見得にて、道具廻る。

本舞臺、元の屋敷に戻る。燭臺照らし、權三、着流し、一本差し。小萬、以前の形にて、短刀の入つたろ箱を持ち、立ちかゝつてゐる。合ひ方、入相の鐘にて道具とまる。

小萬　春の日とはいへど最早入相。今日のお召し、何事かと存ぜしに、お前のお首尾よろしきゆゑ、わしも喜びますわいなア。

權三　有り難きそのお詞。滿座の中にて後れも取らず、首尾よく歸宅いたしましてござります。

小萬　して、我が夫には、いまだ御殿にお出でかや。

權三　左樣でござります。親人へお預けの天國の短刀、折紙もろとも、私し持參いたし、御內見の濟まざるうちは、御歸宅はござりませぬ。

小萬　然らば、この短刀、折紙を、片時も早う御前へ差上げ、首尾によつては望み通り

ト件の短刀、折紙の箱を、よき所へ置き

筆道の傳授も、其方に讓り遣はすぞや。

權三 有り難う存じます。何事も御兩親のお情。よろしく御傳達下さりませ。

小萬 いかにも、其方に讓り遣はす。わしはこれ程に思うてゐるが、まだ其方の心は直らぬか。

權三 私しの心が直らぬとは、何ゆゑでござります。

小萬 心が直らぬと云ふは、この文。

ト以前の文を出して見せる。

權三 その文は、なんでござります。

小萬 コレ、この文を見や。「權さままゐる、御存じより」……こりや最前、こちの人の袂から出た文これは源五兵衛どのゝ手蹟と違うてはあれど、此やうな書面は、後の證據となる物ゆゑ、手筋を變へて認める習ひ。まだ其方と源五兵衛どのは、譯があるかと思へば、わしや腹が立つてならぬわいなう。

權三 成る程、其やうに思し召すは、御尤もでござりますが、今では續く間柄。どう致して、左樣な事がござりませう。何卒御疑念、お晴らし下さりませ。

小萬　いかにも、其方の云やる通り、以前と違ふ緒きあひ、左樣な事はあるまいとは思へども、此やうな艶書を見ては、もしやと疑ふのも女子の廻り氣。この上ながら忠孝全う、身を愼しむがよからうぞや。

權三　すりや、お疑ひは晴れましたか。

小萬　いかにも疑ひ晴れました。

權三　エヽ、有り難うござります。左樣ござらば、先刻申しあげし通り、今日御前に於て、御奉納の額北辰の二字、某へ仰せつけられましてはござれども、いまだ釣り筆の御傳授受けませねば、この儀心に任せず。何卒母樣より、御傳授お許し下さりませうなれば、有り難う存じます。

小萬　外ならぬ聟舅となる上は、他家へ許すよりは、わしも本意なれど、傳授の事は物忌みの上、許すべき筈ながら、火急の事ゆゑ、その儀に任せぬ。然らば卽刻、釣り筆の傳授を

權三　有り難う存じます。然らば出石どの丶

小萬　筆意の極意は、他見を憚れば

ト屛風を引き廻し、兩人、思ひ入れあつて、小萬、傳授の入りし箱を持ち來り、中より一卷を出し、ちり手水にて、件の卷き物を開く。權三、受取り

權三　すりや、これが御傳授の一卷でござりまするか。

小萬　いかにもそれが筆意の一卷。傳授は卽ち心の獨讀。

ト權三、讀む思ひ入れ。下手より伊之助出て來り、屛風の外にある寶の箱を明け、中より折紙と短刀を出し、箱を元のやうにして門口へ出る。この時、彌助も下手より窺ひ出て、兩人囁き、伊之助、二品を渡す。彌助、受取り、逃げろといふ思ひ入れ。伊之助、呑みこみ、最前の金を出し、禮をいふ心にて押戴き、一散に向うへ入る。彌助も下手へ入る。伴右衞門出て、門口に窺ひゐる。權三、小萬、こなしあつて

權三　母人樣、有り難う存じます。筆意の御傳書、慥かに承知いたしました。

小萬　この上は身を愼しみ、何事も麁略なきやう、しかと其方へ。

權三　御傳授大切に、相守るでござりませう。

ト件の一卷を戴く。この時、小萬、權三が帶の縫留を見附け

小萬　この帶の端に、松と菊との比翼紋あるからは、まだ其方はこちの人と、誓ひを結んでゐやるのか。

權三　只今も申しあげます通り、一旦は兎も角、只今にては、どう致しまして

小萬　そんなら此やうな帶、見るもなか／＼辛氣の種。結び目ほどくが、わしへの潔白。

權三　アモシ、それではわたしが

ト權三の帶を解く。

小萬　その替へ帶は、わしが下締め。

ト小萬、下締めを解かうとて、思はず抱へ帶をほどく、この時、伴右衞門、門口へツカ〳〵と入り、二人の帶を取り、屏風を引きのけ、兩人をキツと引きつけ

伴右　間男見附けた。動きやアがるな。

小萬　ヤア、いつの間にやら伴右衞門さま。

權三　全く以て私しどもは

小萬　左樣な事ではござりませぬ。

ト云ひながら、最前お雪が置いたる腰帶を締める。

伴右　左樣な事でないも凄まじい。畜生同然のうぬら。この樣子を御前へ直さま。

兩人　モシ、それはあなたの御料簡違ひ

伴右　イヽヤ、さうは云はさぬ。この帶を證據に

兩人　コレ、待つて下さりませ。

ト留めるを振り切り、二つの帶を持ち、逸散に向うへ入る。あと見送り

權三　思ひがけない作右衞門どの。

小萬　ハテ、身に覺えなければ、申し譯はいつでも立つ。

權三　いかにも誓ひし五大力、犯さぬ證據は、文字がありく。

小萬　犯せば忽ち文字消えると、最前申しあげたれば、明かなる二人の誓ひ。

ト兩人、文字を見せる。

權三　然らば、片時も早く、二品の寶を

ト短刀、折紙の箱を見て

ヤヽヽヽ、この中には、短刀折紙がござりませぬ。

小萬　なんと云やる。

ト同じく中を見て

ヤヽ、いつの間にやら寶の紛失。ホヽホイ。

權三　すりや、最前傳授のうちに、寶の紛失はこの身の越度。申し譯には……さうぢや。

ト腹切らうとするを、小萬とめて

小萬　コレ、待つてたも。寶の紛失は、其方ばかりの越度でない。夫の留守を預かれば、この小萬にも難儀がかゝる。

權三　ヤア。

小萬　其方が一命捨てたりとも、失ひし寶の行くへが知れますか。

權三　サ、それは。

小萬　殊に願ひある其方の身の上。いま犬死したなれば、親御三太夫どのゝ敵は、誰れが討ちまする。

ト權三、思ひ入れあつて

權三　ムウ。いかにも、御尤もなるその仰せ。然らば、この上は、敵の手がゝり、寶の詮議を

ト立ちあがる。小萬、思ひ入れあつて

小萬　コレ、其方が行かば、わしも一緒に、この場を立退き

權三　ア、イヤ／＼、あなたを同道いたしては、いよ／＼以て世の人口。どうしてこの儀は。

小萬　その心遣ひは尤もなれど

ト腕へ思ひ入れ。

コレ、この通り、誓ひを立てゝ五大力、これが慥かな身の潔白。兎やかう云ふ間も寶の詮議、手

延びにならぬ其うちに、わしも共々。

権三　いかにもっよし疑ひ受くるとも。お家の寶手に入らば、この身の汚名は晴るゝ道理。

小萬　得心行たなら、サヽ片時も早う。

ト此の時、奥にて

ゆき　母上樣、権三さま、いづれへお出でなされました。権三さま〳〵

ト呼ぶゆゑ、兩人、こなしあつて

権三　ありやお雪が聲。

小萬　見附けられては互ひに未練が

権三　この間に早う。

ト兩人、門口へ出て、思ひ入れあり

さはいへ一目。

小萬　アコレ、未練な事を。

ト権三、氣を替へ

権三　ござりませ。

ト唄、時の鐘にて、兩人、思ひ入れあつて向うへ入る。彌助、窺ひ出て、內へ入る。お雪、奧より出てくる。

彌助　お雪さま、これにござつたか。大變な事がござります〳〵。

ゆき　彌助とした事が、騷々しい物の云ひやう。大變とは、そりや何の事ぢやぞいな。

彌助　エヽ、お前樣が、おいとしうござります。

ゆき　コレ〳〵、譯も云はずに、わしがいとしいとは、そりや何事。

彌助　サア、お聞き下さりませ。御新造樣と權三さま、道に缺けた事をなされ、その上、預かりの寶を持つて、駈落ちをなされました。

ゆき　何をじやら〳〵と、物堅いお二人、其やうな事があつてよいものかいなア。

彌助　知らぬが佛、嘘はない。證據は、この箱を御覽じませ。

ト寶の入りし箱を見せる。お雪、見て

ゆき　ヤヽ、お預かりの寶は紛失。すりや、お二人樣は

彌助　疾に家出なされました。

ゆき　チエヽ、つれない我がお二人。この上は、遠くは行くまい、この道筋。

彌助　御尤もだ〳〵。跡追ひかけて、ちつとも早く。
ゆき　そんなら跡を、よいやうに。
彌助　心得ました。
ゆき　お跡を慕うて……さうぢや。

ト時の鐘の送りにて、お雪、向うへ入る。彌助、ニツコリと思ひ入れ。この時、お雪と摺れ違うて、傳三、判人の拵らへにて出て來り、門口にゐる彌助を見て

傳三　ヤア、そこにゐるは、彌助どのではないか。
彌助　こなたは大磯屋の傳三。なめら三寶。

ト逃げようとするを引ッ捕へ。

傳三　ドッコイ、逃がしはしない。おれが判で賣つたこなたの女房を、揚げ玉にしたゆゑ、おれは先方へ云ひ譯がない。サア、女を返すとも、金を渡すともさつしやい。
彌助　成る程、女を引揚げたはおれが惡いが、何を云つても爰は奉公先、國へ歸つて女房を、連れて來るまで待つて下さい。
傳三　イヤ、もう一時も待つ事はならぬ。そんなら女の代り、金でも預からねばなりませぬ。

彌助　女房を賣るほどで、どうして、その金があるものか。
傳三　イヤ〳〵、なんでも今日は、方を附けて下さい。
彌助　それだといつても、どうも金は
傳三　無いでは濟まない。百貫の抵當にも笠とやら、貴樣の懷に覗いて見える物は、どうか金になりさうだ。それを預けて下さい。

ト懷より件の短刀、折紙を引出す。

彌助　これサ〳〵、こりやア大事の代物だ。
傳三　その大事の物と見たゆゑ、おれが預かる。金が出來たら取りに來さつしやい。これは預かりました。

ト捨ぜりふにて傳三、件の品を持ち、向うへ入る。

彌助　これサ〳〵、それをやつてはならぬ。返してくれ〳〵。

ト時の鐘、合ひ方になり、追ひかけて行かうとする。向うより千太郎、剃立て、上下衣裳、大小にて月星の畫像の入りたる箱を、三方に載せ持ち、出て來り、彌助に行きあひ

千太　其方は、權三どのゝ御家來、彌助ではないか。

彌助　あなたは出石千太郎さま、いづれへお越しなされます。
千太　今日は、千葉の家の重寶、御内見のよし。即ち某方に預かりある、月星の畫像持參いたし、權三どの同道にて、御前へ出仕の爲。
彌助　すりや、それが月星の畫像とやらでござりまするか。アノ、それが
ト思ひ入れ。
それは御苦勞に存じます。主人權三も、宿に居りますれば、御同道にて御出仕なされませ。
千太　然らば案内いたせ
彌助　畏まりました。
ト合ひ方、生け殺しあつて、兩人舞臺へ來る。
お相役、出石千太郎さま、お出でゝござります。
二宮　ハイ〳〵、畏まりました。
ト奥より二の宮、振り袖衣裳。おこん、以前の形にて、子を抱いて出てくる。
これは〳〵、千太郎さまには、ようお出で遊ばしました。
千太　この二の宮どのには、何御用あつてこの所へ。

こん　ハイ、このお子様は、御新造様のお弟子ゆゑ

二宮　明日は書初めの事、お手本をお貰ひ申しに參じました。

千太　それは御出精。定めて御手蹟も、お見事でござりませうな。

二宮　アレ、又お弄りなされまする。

こん　モシ〳〵、お二人様、幸ひ今日は上首尾。旦那様もお留守なれば、日頃つもるお話しをなされませ。私しがよいやうに致してあげませう。

二宮　それぢやというて、どうしてマア。

彌助　ハヽア、そんならお二人様は、ちん〳〵鴨か。私しへの御遠慮なら、決して御無用。乳母どのゝ申す通り、それにてちよつと、ちよん〳〵幕。

二宮　サア、わたしや嬉しいけれど、どうやらあなたのお心が

千太　知れぬといふは二の宮どの、此お屋敷へ毎日々々ござるからは、權三どのとも譯があらうも知れぬ。

二宮　また其やうに、わたしが心を疑うてかいなア。

千太　七人の子はなすとも、女に肌は許されぬとやら。怖い事〳〵。

トこの時思はず最前の文を見付け

コレ、見さつしやれ。わしが云はぬ事か「權さままゐる、御存じより」……其方の文。こりや腹が立つて來たわえ〳〵。

二宮　イエ〳〵、そりや私しは存じませぬ。大方お前さんが、權三さんの前髮ぶりに、お心をかけられて

千太　イヤ、こりや其方の、附け文ぢや〳〵。

ト此じやらくらのうち、彌助、箱の中より畫像を出し、そつと懷中する。三人これを知らず

二宮　イエ〳〵、わたしや存じませぬわいなア。

彌助　ソリヤ〳〵、戀いさかひが始まつた。おゝしき〳〵。

ト云ひながら下の方へ行く。惡五郎、後より窺ひ出る。

こん　その戀いさかひは後の事。この間に早う、お二人樣。

ト二の宮を千太郎の方へ突きやる。

千太　そんなら、どうでも

二宮　千太郎さま。

千太　二の宮どの。
二宮　オヽ嬉し。
　　ト兩人ひつたりとこなし。
こん　オヽけなり。
　　ト思ひ入れ。この時、惡五郎、ツカ〳〵と寄つて、物をも云はず兩人を引きつける。三人、悑りして
千太　ヤア、あなたは若殿
兩人　惡五郎さま。
惡五　不義者見附けた。動きやアがるな。
　　ト皆々よろしく思ひ入れ。時の鐘、合ひ方にて道具廻る。
本舞臺、元の御殿に戻る。所々に銀張りの燭臺。爰に源五兵衞、近江、八幡、宅左衞門、伴右衞門、景時、星の井、榛谷、小次郎、立ちかゝつてゐる。管絃にて道具とまる。
近江　伴右衞門、あわたゞしい、何事でござる。
伴右　寶の内見、あまり遲刻ゆゑ、權三方へ參りしところ、源五兵衞どのゝ留守を幸ひ、御内室小萬ど

彌助　すりや、死ぬにも死なれぬか。ハヽア。

ト泣く思ひ入れ。

八幡　然らば、いま一品の月星の畫像は、

トこの時、下座にて

惡五　その二品は惡五郎、持参いたすでござりませう。

ト管絃になり、下座より惡五郎。千太郎二の宮おこんを引ッ立て、出て來る。

榛谷　惡五郎には何ゆゑあつて

小次　この三人を引ッ立てめされた。

惡五　即ち不義者でござる。

皆々　なんと。

惡五　これなる乳母めが取持ちにて、二人の奴等が乳繰るうち、月星の畫像は紛失いたしてござる。

宅左　ヤヽ、すりや大切の畫像、紛失とや。して〳〵、それには何ぞ申し譯があるか。悴、早う申せ〳〵

千太　サア、申し譯いたさば、卑怯には似たれども、最前源五兵衛どの方へ立寄り、權三どの同道いたさんと存ずるうち、思ひがけなき寶の紛失。その場にありし、證據と申すはこの一通。

ト以前の文を出す。

近江 なんだ。「權さまゐる、御存じより……ハ、ア、さてはこの盜賊も權三であつたか。併し、たとへ證據があればとて、寶が無ければその身の越度。

宅左 親の面までよごす憎くい悴め。この上は、侍ひらしく、切腹いたして、申し譯仕れ。

千太 仰せまでも候はず、疾くより覺悟。

源五 拙者とても同じ罪。二人一緒に

兩人 南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとする。

星井 ソレ、留めい。

八幡 御兩所、待つた。

兩人 ぢやと申して。

八幡 ハテ、奧方の御意でござる。

兩人 ハツ。

ト扣へる。星の井、件の文に目を附け

であらうワ。

宅左　イヤ〳〵、濁りを打てば權さま。その濁りの所よりちぎれて居れば、こりや、こん様まゐる。このこん様とは、誰れやらであつた。

こん　ハイ、其こん様は、私しでござります。

伴右　アヽ、コレ〳〵何を

宅左　ハヽア、こんさまとは、其方が事か。

こん　ハイ、左様でござります。日頃、心の丈を通はすため、おの字を取つて、こん様は、ハイ、私しでござります。

宅左　然らば、伴右衛門どの、兩人動くな。

伴右　全く以て。

宅左　ないとは云はさぬ。同筆のこの艶書。

伴右　サア、それは。

宅左　不義の兩人、繩打たうか。

伴右　サ、それは。

三人　サア〳〵。

作右　エヽ、いま〳〵しい。此やうな。アヽコレ、たつた一度で、エヽ、いま〳〵しい。

ト　おこんの横面を殴り倒す。

宅左　この上は、兩人の者、門前より阿房拂ひ。誰ぞ參れ。

若黨　ハア。

ト　若黨二人出る。

行氏　兩人を追ひ拂へ。

若黨　立たつしやい。

作右　立つとも〳〵、腹が立つ。どいつも、こいつも覺えて居れ。

こん　乳母の役も今日限り。この子はお前へ、お返し申します。

ト　赤子を源五兵衞の前へ置く。

作右　いま〳〵しいこの有樣。併し、敵役の納まりは、この位のものか。待て〳〵。引込みの趣向は、斯うもあらうか。

こん　モシ、こちの人、その狂歌はえ。

ト おこんの顔を見て

作右 あんまり呆れて、狂歌も出ぬわえ。

星非 この上は、悪五郎こと、君の御饗應疎かにせし科によつて、蟄居申しつける。

悪五 イヤア。

星非 源五兵衛千太郎には追放。さりながら、來春までに寶詮議いたしなば、本地へ歸參申しつくるぞ

源五 すりや、一ヶ年の日延べ、仰せつけられ下さりますか。

千太 何から何まで、この上も無き御仁心。

兩人 チエヽ、有り難う存じまする。

宅左 さりながら、千太郎め……勘當いたす。勘當いたせば赤の他人。不便加へず、追ひ拂へ。

景時 不義の二人、追ひ拂ふ役目は、幸ひあの彌助とやら。

彌助 畏まりました。すりや、不慮の事にて千太郎さまは、御勘當の身。ハテ、是非もない、世の成行きでござりますなア。

二宮 そんなら、これから

千太 しるべ求めて

宅左　二人の者を、追ひ拂へ。

彌助　ハツ。

ト彌助、割り竹を持つ。

千太　左樣なれば、いづれも樣。

彌助　サア、お出でなされまし。

若黨　立ちませい。

伴右　べら坊め、立つてゐるわえ。

ト伴右衞門、おこんに若黨二人附き、東の口へ入る。千太郎、二の宮に彌助附いて花道へ入る。

近江　たとへ寶が手に入つても、女敵二つの首無ければ、安閑と屋敷へは歸られまい。

景時　首があつても寶が無ければ

榛谷　寶があつても首が無ければ

小次　二つ合體せぬうちは。

源五　いつかな歸らぬ。二つの首に折紙短刀揃へし上、やがて歸參を

景時　人に女房を取られる位で、寶詮議も烏滸がましい。それも他人である事か、聟にすれば肉身同然

榛谷　寢首でも掻かれぬがまだしもの事。
宅左　その追放に、重荷の赤子。
　ト赤子を源五兵衞抱きあげる。赤子泣く。
源五　オヽ、いんのこ〳〵。
　ト思ひ入れ。
星井　片時も早う。
源五　ハツ。
　ト源五兵衞思ひ入れ。花道へかゝる。
景時　待て。寶詮議の日限相違せば
皆々　千葉の家は、忽ち滅亡だぞ。
　ト源五兵衞思ひ入れあつて
源五　委細承知仕りました。
星井　やがてめでたう
皆々　君の御歸館。

宅左　急いで出立。

源五　ハッ。

ト平伏する。木の頭。この時、赤子泣く。皆々思ひ入れ。これをキザミにて、ひやうし　幕

幕の外、三重になり、源五兵衞、向うへ入る。あと禪のツトメにて引返す。

本舞臺、向う黑幕、板松の並木、すべて小袋坂、夜の體。木魚の入つたる合ひ方、時の鐘にて幕明く。

ト東の口より千太郎出る。跡より彌助、葛籠を脊負ひ、六尺棒を持ち、出てくる。

彌助　千太郎さま、この道は石が高うござります。お怪我なされますな。

千太　イヤモウ、何から何まで其方の深切、他人とは思はぬ、忝い／＼。殊にはわしばかりか、葛籠の中の二の宮まで、何かの厄介。禮は詞に盡されぬ。

彌助　これは／＼、痛み入つたるそのお詞。不慮の事にて御流浪の身。この葛籠の中の二の宮さま、さぞ御窮屈でござりませう。

千太　今に知るべを求め、其方にもゆるりと休息させます。いま少しのうち辛抱して下され。

ト葛籠へ思ひ入れ。

千太　オヽ、誠に旅の衆。すりや、呼び生けて下されたは
半兵　わしでござります。待ちなせえよ。さういふ聲は、どこか聞いたやうだが。
　　ト提灯にて、よく〳〵顔を見合せ
千太　ヤア、わが身は半兵衞ではないか。
半兵　さう仰しやるは、若旦那千太郎さま、どうして爰に。
千太　サア、不慮の事にて、この身は御勘當。
半兵　エヽ、そりや何ゆゑでござります。
千太　委細は後での事。何は兎もあれ、あの葛籠の中の
　　ト行きかゝる。
半兵　ヤヽ、すりや今のドサクサに、葛籠を……遠くは行くまい。
　　ト行きにかゝる。この時、千太郎、「ウン」となるゆゑ、立戻つて
　　エヽ、それにしても、お一人では置かれず
千太　半兵衞、萬事は其方、よきやうに。
半兵　お案じなされますな。

ト抱きおこす。この時、彌助、氣が附き、葛籠を脊負ひ、花道へかゝる。

千太　アレ〳〵、葛籠を

半兵　そんなら、彼奴が

ト彌助の顔を見ようとて、提灯を差しつけるゆゑ、彌助、立廻つて、提灯を叩き落す。この時、千太郎、ころぼうて寄る。半兵衛介抱しながら、向うを見て

半兵　そんなら今のは

彌助　エイ。

ト礫に今の提灯を打ちつける。

半兵　夜稼ぎださうな

ト提灯を半兵衛落す。木の頭、よろしくキザミ、ひやうし

幕

第一番目　四建目　權三隱れ家の場

役名——箱根の杣、彌助。同女房、お米。薩摩源五兵衛。同女房、小萬。神職、大藤内成景。

近江の小彌太。賤ヶ谷下部、土手平。腰元、二の宮。判人、大磯屋傳三。巾着切り、伊之助。源五兵衛娘、お雪。杣、彌藏。笹野權三。

本舞臺、三間の間、向う山幕、眞中に松の大樹　この枝に誂らへの畚を吊し、焚木入れてあり。この所すべて箱根山の體。爰に雲助四人、焚火を焚き、土手平、旅奴の形せしを取卷き、ワヤ〳〵云つてゐる。馬士唄、禪のツトメにて幕明く。

皆々　これサ〳〵、奴どん、酒手を下さい〳〵。

土手　これはどうしたものだ。馬にも駕籠にも乘りもしないで、酒手をくれろとは、無體な事を云ふ手合ひだ。

雲一　知れた事だ。なんぼ雲助だといつて、乘りもしねえものを取るものか。

雲二　それだから料簡して、酒手ばかりで通してやらうといふのだ。

雲三　こんたは、どこの二合半か知らないが、おいらが斯うしてゐる所を、素通りをする氣か。

雲四　酒手が無くば、その身ぐるみで料簡してやるワ。

皆々　なんでも、只は通さないぞ〳〵。

土手　なんだ、おれに裸になれと。そんなら、うぬ等は追ひ落しだな。

皆々　やかましい。引ッ剝げ〳〵。

土手　ヤイ〳〵〳〵、うぬら、この奴を只の二合半と思ふか。千葉家の侍ひ、雜ヶ谷作右衞門どのゝ家來、土手平といふ、歴とした、矢ッ張り只の折助だ。うぬ等、眞向から撫切りといふ所だが、そんな古風なせりふは措いて、コレ、てまへ達に相談があるワ。なんと半口乘らないか。

雲一　何を世迷言を吐かすのだ。小面倒な。ぶッちめろ。

皆々　合點だ。

ト立ちかゝるを

土手　アヽコレ、金になる相談だ〳〵。

皆々　ナニ、金になる相談だ。

土手　オヽサ、コレ、てめえ達は、おれが身ぐるみ取つたところが、その人數では旨い酒も飲めないワ。相談といふは外でもない、今爰へ、餓鬼を抱いた侍ひが來るが、これは矢ッ張り、おいらが元ゐた屋敷の、薩摩源五兵衞といふ侍ひ。れこしきはしつかり持つてゐるワ。此奴を、なんとする氣はないか。

雲一 そいつは大きにあるな。併し、そりやアこんたの知つた侍ひか。

土手 一體、旦那の云ひつけで、その源五兵衛の跡をつけて、道でやらかすつもりであつたが、どうもおれ一人では手剛い奴。てめえ達に讓つてやるワ。これ、しつかり持つてゐたぜ。コレ、働らいてくれ。

雲二 金にさへなる仕事なら、やつて見まいものでもないが。

雲三 そんなら、その侍ひが、今爰へ來るのか。

土手 來る段か。併し、おれは顔を知られてゐるから、コレ、斯うしてくれろ。

ト皆々へ囁く。

皆々 オツトよし。呑みこみ〱。

ト皆々、菰や蓆をかむり、あちこちへ寢る。土手平は松の樹へ登り、窺ひゐる。雲助一、畚より粗朶を出し、焚きつける。山おろし、馬士唄になり、向うより源五兵衛、逆熊の鬘、旅形にて、赤子を抱きいぶりつけながら出て來り、花道にて思ひ入れあつて

源五 ヤレ〱、知らぬ山道を、あそこや爰の貰ひ乳に、殊の外手間取つて、存じながらのこの夜道。これにつけても、心得がたきは笹野權三、女房小萬。彼れら兩人に限つては、なか〱不義密通

などを致す者にては、あるまじきとは思へども、折悪しく寶の紛失。朋輩どもの思惑といひ、退引きならぬ刀の手前、我れと主人へ暇を乞ひうけ、此やうに幼子を抱へ果しなき長の旅路。何卒一日も早く、天國の短刀を尋ね出し、品によつては、二つの首をも引ッ提げて、立歸らねば世の人口。アヽコレ、娘お雪めも、いづれにさまよひ居るやら。兎にも角にも、果敢なきものは武士道の表。アヽ、せまじきものは宮仕へぢやなア、……オヽ目が覺めたか。これはしたり、又しても、父に乳は無いもせぬものを、馬鹿な奴ではあるわい。オヽ、たがよし〱。この風で、さぞ寒からう。

ト向うを見て

幸ひ〱、あれに焚火してゐるさうな。ドリヤ、あたらせてやりませう。

ト本舞臺へ來り

雲一 イヤナニ、ちとその焚火が所望いたしたいが、如何でござるな。

源五 アヽ、易い事でござります。サア〱、あたらつしやりませ。

それは近頃忝い。ヤレ〱、よい所に火があつて、この坊主めが仕合せでござる……ソレ、ふがう燃えるワ。なんと温かであらうが。

ト赤子を温めるこなし。土手平。上にて「それだ〳〵」といふ思ひ入れ。雲助一、呑みこみ

雲一　いゝよ、承知だよ……アヽ、お前はお侍ひの子持ちだな。

ト雲助二も起きて

雲二　それは、さぞ道中で困らつしやるであらう。

源五　イヤモ、推量して下され……イヤ、承りたい事があるが、この邊に、山稼ぎを致す、彌助と申す者を、お身達は御存じないか。

雲一　アヽ、慥かそれは、鹿道越の一ツ家であつた。

雲二　まだ爰からは、二十丁もある山坂道。

兩人　旦那、駕籠に乘つて下さいな。

源五　お身達の庇で、この坊主めも火にあたつた代り、駕籠に乘つてもよいが、して、賃錢はいか程で貸してくりやる。

雲一　駄賃に、いくらかくらといふ好みもないが、マア、こなたの持つてゐる路銀はありたけ

雲二　その着る物も大小も、酒手にして

兩人　乘つて下さい。

ト源五兵衞、思ひ入れあつて

源五　ハヽヽヽヽヽ、お身達も何を申すやら、座興にも程のあるもの……イヤ、お庇で大分暇とつた。これからソロ〳〵參らう。これは忝うござつた。

ト行きにかゝる。

兩人　コレ、待たつしやい。

源五　ムウ、身共に待てとは、なんぞ用があつてか。

雲一　用事といふのは今云つた、路銀と大小縕袍を

兩人　貰ひたいのだ。

源五　なんと。

兩人　コレ、みんな、起きろ〳〵。

トこれにて雲助の三四も起きあがり、前後左右より源五兵衞を取卷き

雲三　コレ、お侍ひ、こなたの來るのを先刻から、網を張つて待つてゐたのだ。

雲四　所詮素手では通さない。往生際よく

皆々　置いて行きやァがれ。

源五　さては其方どもは、幼子連れたる一人旅と、侮つての物取りか。但し又、何者にか頼まれたか。

　　ト木の上にて

土手　オヽ、その頼み手はこの奴だ。

　　ト源五兵衛、火影にてちよつと見て

源五　サ、そちや慥かに土手平。すりや、伴右衛門めが

土手　ソレ、疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

　　ト皆々、縫ひぐるみを持つて源五兵衛へ打つてかゝる、山おろし、馬士唄、禪のツトメにて、源五兵衛、赤子をかばふこなし、そこにある四つ手駕籠を枷に、よろしく立廻りあつて、源五兵衛、吊してある畚の中へ赤子を入れ、これより鳴り物變つて、烈しきタテになり、皆々を切り立てる。よき程に土手平、上より畚繩をほどく。これにて畚はドツザリ下へ落ち、赤子泣き出す。源五兵衛、駈け寄るを、また引上げる事、下ろす事などあつて、これを枷に立廻り、トヾ源五兵衛、皆々を見事に切りちらし、赤子を抱きあげ、ホツと思ひ入れ。この時、土手平、松の樹より飛び下り

土手　源五兵衛、うぬを

ト切つてかゝるを、かい潜つて刀を打ち落し、見事に投げる。これにて赤子また泣き出す。

源五　オヽ、たがよく〱。コレ、其やうにせわるとナ、また怖いお爺が

ト雲助一、起きあがつてかゝるを、よろしく立廻つて

コレ、此やうに、バア。

トぽん〱と左右へ投げのけ

オヽ、いんのこ〱。

ト赤子をいぶりつけながら、三人を相手に立廻つて、よき見得になり、山おろし、禪のツトメにて、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、藁葺き、栗丸太、二重の世話屋體。正面、納戸口、暖簾、鼠壁、神棚、札箱、上の方、一間の屋體、これに臼を据ゑ、同じく下座、岩組みの張り物、瀧落ちるを掛け樋にて取り、米を舂く仕掛け、尤も葭簀の上げ下ろしあり、下の方、栗丸太の簀戸、外に片蓋の木部屋。よき所に白梅の立ち木、軒面、或ひは松の枝に、獸の皮へしんしを張り、干してあり、すべてこの道具、箱根鹿道越の山中、獵人の家のかゝり、山おろし、在郷唄にて道具とまる。

ト爰にお米、世話女房にて、絲を取りかけ、圍爐裏へさしより、茶の下を焚いてゐる。正庵、醫者、藥箱持ち、一人扣へ、伊之助、山裁附、木樵の形にて、板に貼つたる觸れ書を持ちゐる。

伊之　コレ、お内儀、彌助どのは、どこへ行かれたな。

よね　山稼ぎに參りました。四五日、宿へは歸りませぬ。モシ、伊之助さん、お前、なんぞ用でもござんすのかえ。

伊之　なんぞ用ではない。おれにマアとんだ物を掴ませて、エヽコレ、ほんの寶の持ち腐れとやらだ。

ト思ひ入れ。

よね　ハイ、お茶あがりませ。

ト正庵へ出す。

正庵　イヤ／＼、構はつしやるな／＼。時に、愚老に見てくれいと云はれる、病人はどれにござる。

よね　ハイ、只今納戸に臥つて居られますが、どうぞ御苦勞ながら御覽じた上、お藥をお願ひ申しまする。

正庵　マア／＼、いづれ脈を伺つた上の事に致しませう。

ト山おろし、賽の河原の念佛太鼓になり、向うより大藤内。小彌太、兜巾篠懸、金剛杖、旅山伏の姿

にて出て來り、門口へ來り、小彌太は法螺貝を吹き、大藤内は鈴を振る。

大藤　高天ヶ原に神とゞまりまし〳〵て、目に諸々の不淨を見れども、心に諸々の不淨を見ず。

伊之　爰のお内儀は手がふさがつてゐらァ。通らつしやい〳〵。

大藤　口に諸々の不淨を云へども、心に諸々の不淨を云はず。

伊之　エヽ、通れと云つたら通らつしやい。

ト門口へ立ちかゝり、三人フッと顏見合せ

小彌　ヤ、其方は、伊之助ではないか。

大藤　とんだ所で逢つたなァ。

伊之　ヤ、小彌太さまに大藤内さま。わしやァ又、只の物貰ひだと思つて、とんだ麁相を申しました。御免なされませ。サア〳〵、此方へお入りなされませ。

小彌　オヽ、おぬしが知つた内か。左樣なら、一服のんで行かう。

伊之　コレ、かみ樣。これは、おれが知つた法印樣に

大藤　毎年參る、大藤内でござる。

伊之　ちよつと爰を貸してあげて下さりませ。

よね　ハイ〳〵、此方へお入りなされませ。

兩人　然らば免さつしやい。

　　ト兩人、內へ入る。

正庵　左樣なら愚老は、病床へ參つて、見て進ぜう。

よね　ハイ〳〵、お願ひ申しまする。

正庵　コリヤ、市助、その藥箱を持つて來やれ。

供男　ハイ〳〵、畏まりました。

よね　モシ、あなた、此方でござりまする。

　　ト暖簾へ指圖する。矢張り念佛太鼓にて、正庵、供男に藥箱を持たせ、奧へ入る。

大藤　コレ、伊之助、おぬしはヅキでも廻つて、山稼ぎと化けたのか。

伊之　モシ、如才も無くつて

　　ト額をしかめて思ひ入れ。

よ。　コレ、お內儀、此お觸れ書は、隣村からこの村へ、順繼ぎで來たが、お尋ね者のお觸れでござる

よね　エ、そりや、どういふお尋ね者でござりますえ。

伊之　こりやアなにサ、千葉の家中、薩摩源五兵衞といふ侍ひの女房小萬と、笹野權三といふ侍ひと、密通して、寶物を盗み出して、駈落ちしたさうサ。それゆゑこの通り嚴しい御詮議。尋ね出して訴人をした者には、御褒美を遣らうといふお觸れ書サ。

ト此うちお米思ひ入れ。

よね　そりや變つたお觸れでござりまするな。併し、女子を連れての駈落ち者、關所手前の此あたりへは、なか／＼來る事ではござりますまい。

ト思ひ入れ。

小彌　イヤ、無いとも云はれぬ。皐月下旬の狩倉の儀につき、この鹿道越にも新關が据つたが、この度箱根權現の祭禮につき、夜に入つては格別、晝のうちは、隨分女も通すといふ事ぢやて。

大藤　取分け今日よりは、祐經どの〻迎ひの同勢、晝夜限らず旅行いたす折なれば、もしや紛れて參るまいものでもない。

伊之　それに今夜は、魔王の宮の人身御供。あの目論見がお上へ知れたら

大藤　エヘン／＼、心に諸々の不淨を云へども、口に諸々の不淨を云はず。

ト鈴を振つて紛らかす。

小彌　イヤ〳〵、苦しうない。身共とても、この大藤内どのに、内外を打明けて、事を計るこの小彌太、

大藤　それ〳〵、この小彌太さまも、曾我の奴原を附け覘ふ爲の似せ山伏。殊に地理巡檢に立越えられた祐經どの

ト大藤内、ウカ〳〵と云ふ。小彌太、伊之助、奥へ心遣ひあつて、法螺の貝を吹きかけ、紛らかす。此うちお米、絲車にて絲を取りながら、この話しを聞いてゐて、この時、悄りして

よね　オヽ怖。この法印さんとした事が、ほんにマア、悄りさせなさんした……モシ伊之助さん、何ちややら怖らしいお前方の相談……サ、こちの内には、奥に病人もある事、悪い冗談しなさんすぬし達を、早う連れ申して下さんせ。

伊之　ほんに、こりやア心附かなんだ。併し、病人といふが、誰れが來て煩らつてゐるのだえ。

トお米、思ひ入れあつて

よね　サ、それはナ……オヽ、それ〳〵、アノ、わたしが親類内より、四五日あとに、逗留に見えましてな。

トしどろもどろに挨拶する。伊之助、思ひ入れ。

伊之　ハテナア……モシ、歸らうぢやアござりませぬか。

大藤　イカサマ、左樣いたさう。お內儀、世話でござつた。

ト三人、門口へ出て、思ひ入れあつて

小彌太さま、そんならいよ〳〵祐經どのを

小彌　窺ひよつて

伊之　殺らす手立の囑托は。

小彌　盜み置いたる工藤の系圖。これを汝に

ト系圖の一圖を伊之助に渡す。

伊之　しつかりと預かりました。

トこの話し聲をお米聞きつけ、そろ〳〵門口へ行き、この時、戶を明け

よね　モシ、お前方、まだそこにお出でなされまするか。

二人　エヽ、恟りさせた。

ト三人行きにかゝるを

よね　アヽ、モシ〳〵、大藤內さま、あなたに少つと、お賴み申したい事がござりまする。

伊之　ハヽア、亭主の留守に　おいら二人は追ひ歸し、あの大藤内どのばかり留めるは

よね　エ。

伊之　ほんに、間男のお觸れ書、忘れさつしやるなよ。

ト山おろし、念佛太鼓になり、兩人、向うへ入る。大藤内、内へ入り、思ひ入れあつて

大藤　コレ、お内儀、亭主の留守に、身共に用事とは、大抵推量いたしたが、どうか身内がゾク〳〵するやうだ。サヽ、早う聞かせて落ちつかせて下され。

ト お米の側へ寄る。

よね　ネヽヽヽ、あなたとした事が、せはしない。私しがあなたに用事と申しましたはナ。

大藤　オヽ、大概知れた。

よね　どうぞ、こちの人の身の上を、御覽じて下さりませ。

大藤　エ。

ト當の違ひし思ひ入れにて

アヽ、こなたの亭主が、どうしたと。

よね　サ、四五日以前、山稼ぎに出まして、今に歸りませぬが、いつ頃戻りますか、ちよつと占方を御

覽じて下さりませ。

大藤　エヽ、なんの事だ。それなら見るに及ばぬ。もう百年經つても歸りはしない。

よね　エ、そりやなぜでござりますえ。

大藤　この大藤内が思ひでよ。

よね　エヽモ、あなたもおやら〳〵と、何を仰しやりますぞいな。ホヽヽヽ。

ト大藤内、小腹の立つ思ひ入れ。山おろし、馬士唄になり、向うより二の宮、跡より彌助、山裁附獵人の拵らへ、葛籠を脊負ひ、鐵砲を擔ぎ、出て來り、花道にて

彌助　歩きつけぬ山坂道、ホツとしたであらうが、もうあそこがおれの内だ。氣を丈夫に持つがよい。

二宮　さうでござんすかいな。どうぞ少しも早く彼のお方に

彌助　オヽサ、逢はせうよ。マア〳〵、内へ入らつしやい。

ト兩人、門口へ來り

オイ、嬶ア、いま歸つたよ。

ト内へ入る。二の宮は門口に居る。

よね　ヤ、こちの人、歸らしやんしたか。四五日、内へ戻らしやんせぬゆゑ、大抵案じた事ぢやござん

せぬ。

彌助　さうであらうとも。思ひの外、獵が利いたから、直ぐに山おろしにかゝつて

大藤　それは金儲けの筋で、めでたうござる。

彌助　ヤ、大藤内さま、この間は、お遠々しうござりまする。

ト思ひ入れあり

モシ、お前、ひよつとお札でも持つてござりやアしないか。

ト、とつかはと二重舞臺へ上がり、神棚の札箱の中より月星の二幅を取出し、舞臺の人へ見せぬやうに、見物へ見せて改め、落ちつきし思ひ入れ。ちよつと神を拜む振りにて紛らし

イヤ、久しぶりで内の太神宮樣を拜んだ……コレ、姐樣、爰がおれの内だ。遠慮せずと、入らつしやい。

二宮　アイ〳〵。

ト内へ入る。お米、大藤内、これを見て思ひ入れ。

よね　モシ、こちの人、あの女中は、ありやなんでござんすえ。

彌助　この姐えか。こりやアちつと譯があつて、連れて戻つたが、てまへにも、とつくり相談せねばな

らぬ事があるて。

よね　エヽ、道理こそ、蟲が知らせて案じられた。そんならお前は、あの女中の事で、四五日、宿へも戻らしやんせぬのかえ。

彌助　さうよ。これには段々、道行のある話しよ。

よね　エヽ、常から悪性なこなさん、その道行も大抵知れてゐるわいな。

ト悋氣のこなし。二の宮、氣の毒なる思ひ入れ。

彌助　成る程、てめえが其やうに疑ぐるも無理はないが、この娘は千葉の屋敷の腰元、云ひ交した男を尋ねるとて、屋敷を駈落ちして、まごついて居たのを、こいつはおつな代物、一山稼いだら、一かどの金に……サ、路銀も持たずに、まごついてゐるのが不便さに、この子を湯本の福住へ預けて、少し金を借りたが、この頃獵が利いたによつて、福住へは立て金して、内へ連れて戻つたのよ。

トこの話しのうち、お米、急いて

よね　もしナ〳〵、こちの人、お前も好い加減な間に合せを云はしやんせ。常からお前の心ゆき、外に譯が無うて、なんの其やうに深切にしさうなものかいな。いかに甲斐ない女房ぢやとて、よい加

減に踏みつけにしなさんせ。

トこなし。二の宮、氣の毒なるこなしにて、そこへ出て

二宮　モシ、お前が腹立てさんすも無理ならねど、わたしや二の宮と申しまして、千葉の屋敷に腰元奉公。お前のお内方と、譯のある女子ぢやござりませぬ。眞實外に、いとしいお方がござんしてす

よね　エヽ、お前までが、わたしを白痴にしなさんすかいな。

ト煙管を抛る。

彌助　イヤ、この山の神め、投打ちをひろぐな。惡くふざけると、うぬ、叩き出してしまふぞ。

よね　こりや面白い。叩き出されるものなら、叩き出して見やしやんせ。

彌助　さう吐かしやア、うぬ、叩き出して見せうか。

トそこにある火吹竹を持つて立ちかゝる。大藤内、この中へ分け入つて

太藤　これサノ〳〵、御亭主、どうしたものだ。マアノ〳〵、こりやア身共に預けさつしやい。又お内儀もお内儀だ、箱根權現はお祭で、强飯は食ひ飽きしてゐるであらうに、燒餅はあんまりもたれるわな。

彌助　譯も聞入れずに、イケふざけた唐變木だ。

ト火吹竹を抛り出し、下に居る。

よね　ホヽヽヽ、たんと氣の毒がつて下さんせ。

大藤　これサ、それが惡い……ハア、こりやこの女中が爰に居ては、お內儀の角は折れぬ。コレ、女中、ちよつと此方へ來さつしやい。

ト二の宮を門口へ連れて出て

オヽ、幸ひ〳〵、爰に木部屋がある……コレ、女中、兎角こなたがあそこに居ては、あのお內儀の癇癪が納まらぬによつて、事の解るまで、爰へでも入つてゐるがよい。

二宮　ハイ、どうなとあなた、よいやうにお賴み申しまする。そんならわたしや、この內へ入つて居るのでござりまするか。

大藤　オヽサ、ちつとのうちの隱れんぼ。この大藤內が來て、よしと云ふまでは、出ては惡いよ。

ト二の宮を物置の中へ入れ、戶をたつて門口へ來る。

コレ、御亭主、今の事は身共に預けさつしやるがよい。又お內儀もとつくりと、筋道を聞かつしやるがよい。得て料簡違ひのあるものだて。

彌助　これは、ひよんな事で、大きに御苦勞かけまする。

大藤　なにサ、色氣があつて、とんだい〻て。ハヽヽヽ。

彌助　なんと、狸汁でも致しませう。一杯お神酒をあげさつしやらぬか。

大藤　忝いが、今日は例年の通り、人身御供の祭日なれば、身共甚だ忙しうて

ト物置に向ひ

コレ、女中、必らずそこを出まいぞ。出ると又お内儀が

ト指にて角を拵らへ

これぢやぞ。

トこれをお米に見附けられ

ハヽヽヽ、ドリヤ、取つて來よう。

ト山おろし、念佛太鼓になり、大藤内、物置へ思ひ入れあつて、向うへ入る。兩人殘り、こなしあつて

よね　モシ、こちの人、そりや男の働らきで、てかけ妾もある習ひ、無下なう腹立つぢやなけれども、まだ親方へ、わたしが身の代も殘つてあるぢやござんせぬか。それにマア

彌助　ハテ、聞分けの悪い。いま云つた通り、ありやア千葉の屋敷の腰元、ちよろまかして連れて來た

も、あれをどうか煮燒して、てめえの身の代の方を附けようと。

よね　エヽ、なんと云はしやんすえ。

彌助　サア、てめえの身の代の方を附けぬうちに、なんのつきに小嫌らしい、外の女を引摺り込むものか。あの女は、まごついてゐるが不便さに、連れて來てやつたのだ。

よね　眞實さうした譯なら、腹立てはせぬけれど

ト思ひ入れあつて

この間から、こちの内にお出でなんす、權三さまといひ、殊に小萬さまには御病氣の事なり、その中へ、又ぞろどこのか

彌助　エヽ、あれ程てまへに、出て行けがしにしろと云つて置いたに、アヽ、埓もない。

よね　エヽ、お前もかけ構ひない。女子さへ連れて戻りながら、現在お主の落目、どうして見捨てゝ去なされうぞ。モシ、その上、隣村から、此やうなお觸れ書が來てゐるぞえ。

ト觸れ書を見せる。

彌助　アヽ、なんだ……「安達の家中、笹野權三こと、千葉家の侍ひ、薩摩源五兵衞妻小萬と密通の上、兩人鎌倉を逐電の砌り、月星の掛け物、天國の短刀紛失、これ正しく彼れら兩人が仕業に相違な

く、重罪の輩、見附け次第訴へ出づる者には、よろしく褒美たるべきものなり」

　　ト讀んで、思ひ入れ。

よね　モシ、其やうなお身の上、猶更お見捨て申しては

彌助　こりや短刀も一軸も……うまい風の吹き廻し。品によつたら訴人して

よね　エ。

彌助　こりやア女房、よくお留め申して置いたぞよ。

　　ト思ひ入れ。奥より正庵、供男を連れ出て

正庵　ヤ、これは御亭主、お歸りかな。さて、病人の女中を見ましたが、隨分と本復は致すが、兎角陰氣の生れの女中、氣の凝りと見えまするてナ。

よね　左樣なら、どうぞお藥を

正庵　藥は直ぐに、奥で調合いたして參つたが、斯うでござるて。

　　ト煎藥の包みと、粉藥の包みを出し

この煎藥へ、この粉藥を、耳搔で三すくひ程入れて煎じるがよい。時に云はねばならぬ事がある

この粉藥を、必らず平生の人に、間違つて服ませてはなりませぬぞ。

よね　へエ、そりや又なぜでござります。
正庵　こりやア砒霜と申す毒藥でござるて。
彌助　エッ
正庵　サア、この毒藥も、病症によつて、卽ち藥となるぢやて。無病な人が服する時は、忽ち逆上して吐血いたすか、輕うして生れもつかぬ聾となり申す。必らず氣を附けさつしやるがよい。
よね　ハイ〳〵、畏まりました。
トこの話しを彌助、マヂ〳〵聞いてゐる。
正庵　時に、愚老はお暇申しませう。
ト門口へ出て
イヤ、お内儀、あの女中は鎌倉にて、愚老も存じて居るが、何か味な噂を承つたが、變つた所に居られますな。
よね　ハイ、ちと譯がござりまして、私し方に……モシ、正庵さま、この事は必らず、沙汰なしにお賴み申します。
正庵　申して悪い事ならば、他言は致さぬが……ハテ、どこに知る人があらうも知れぬものぢやてナ

……イヤ、お暇申す。

ト山おろし、念佛太鼓になり、正庵、供男を連れ、足早に向うへ入る。

よね　ドレ、お藥を煎じてあげませう。

ト七輪へ藥罐を掛け、正庵が敎へた通りに仕掛ける。件の粉藥の剩りを、彌助、思ひ入れあつて、ソツと懷中する事あり

彌助　コレ、嬶ア、四五日ぶりで、てめえの顏を見たら、なんだか味な心になつた。納戸へ來て、足でも撫つてくれろえ。

よね　エヽ、お前もじやら〳〵と、何を云はしやんす。あの美しい女中さんを連れて歩いて、どのやうな面白い事があつたか知れぬわいな。

彌助　エヽ、まだ廻しかけるな。コレ、その譯も、とつくり話して聞かせるワ。サア、納戸へ來たり來たり。

よね　ぢやというて、納戸にはアノ小萬さまが

彌助　ハテ、小萬さまが居やうが、二朱銀さまが居やうが、間男をする代物だ。おれの嬶アに、誰れが遠慮がいるものか。

よね　ハテマア、このお藥を煎じて

彌助　丁度よい加減に詰まるであらう。サア、來いといふに。

よね　エ、モウ、忙しない。

ト念佛太鼓になり、彌助、無理にお米を連れて奥へ入ると、下の方、軒端の梅に鶯啼く。山おろし、木魂の入りし誂らへの鳴り物になり、向うより權三、好みの形、半弓を持ち、山鳥を腰に附け、忍び姿の小鳥狩の體にて出てくる。よき程に、上の方、葭簀を卷きあげる。内に小萬、病體にて、臼へ米を入れて居る見得。兩人、鶯に目を附け、こなしあつて

權三　鶯の聲なかりせば雪消えぬ、山里に居て春を知るべき。

小萬　しても殊勝らしい春告鳥、籠の中の時鳥、笹野權三と恥かしや、憂き濡れ衣の名の立つて

權三　軒端もかほる槍梅の、折知り顏の人來鳥。

小萬　世を忍ぶ身も、憂を忘れて

權三　さても興ある

兩人　初音ぢやなア。

ト兩人、思ひ入れあつて、權三、舞臺へ來る。

權三　小萬さま、只今歸りました。

小萬　オヽ、待ちかねた權三どの、病氣のわしを一人置き、どこへござつた事ぢややら。まだ山々は去年の雪、さぞ寒からう。粗朶を焚いてあたらせませうか。

權三　イヤ〳〵、お構ひなされまするな。世を忍ぶ身とは申しながら、まだ當年は、弓始めも致しませぬゆゑ、小鳥狩と志し、やう〳〵矢の根に、血を注いで參りました。お喜び下さりませう。

ト よき所へ坐るとて、以前の觸れ書を見て

ナニ〳〵……「安達の家中、笹野權三こと、千葉家の侍ひ、薩摩源五兵衞妻小萬と密通の上、兩人鎌倉を逐電の砌り、月星の掛け物、天國の短刀紛失、これ正しく彼れら兩人が仕業に相違なく

ト 讀みさし、思ひ入れあつて

ヤヽヽ、すりや、この如く、最早世上に

ト 小萬と顏見合せ、ホツと溜息を吐き、俯向く。

小萬　……重罪の輩、見附け次第、訴へ出で候ふ者には、よろしく褒美申しつくべきものなり」。

ト 兩人こなしあつて

權三　ヤヽヽヽ、搗てゝ加へて、身に覺えなき盜賊の惡名。こりやモウ、存命するほど恥の恥。小萬さ

まゝ、さらばでござりまする。

ト脇差へ手をかけ、腹切らうとする。小萬、縋つて

小萬 サヽ、尤もぢや／＼、尤もぢやが、この小萬が、たつた一言云ふ事がある。マヽ、待つて下され
や。

トきつと留める

權三 でも、武士たる者が、世にも稀れなる不義の汚名、受け足らいでコレこの如く、覺えなき盗賊の

小萬 汚名を濯ぐは、天國の、短刀折紙二品を、わたしら二人が尋ね出し、夫へ手渡し、その上にて、お主へ願うて娘のお雪、其方へ添はせしその上にて、二人連れ立ち家出せし、その云ひ譯に自害して、わしさへ死ねば物事の、丸う世間も濟むぢやないか。權三どの、思案して見やしやんせ。

權三 小萬さま、それで物事濟む事なら、かゝる苦勞は致しませぬ。短刀折紙尋ね出し、持ち歸るそれまでは、いかほど日數がかゝるやら。其うちお前と差向ひ、二人暮らしてあるなれば、世の人口と存ずるゆゑ、その儀がどうも

小萬 こりや氣遣ひさんすな。人の譏りは知らねども、源五兵衞どのに於て、よもや二人は立退いても不義せぬ證據は、コレ爰に。

ト腕をまくり

二人一緒にこの如く、誓ひに書きし五大力、宮守の血汐のこの文字、二人が心にいたつらの、あれば忽ち消えるといふ、その譯知つての上からは

權三　それは屋敷で疑ひを、晴らす當座の誓紙がはり。不義ならぬ身の矢張り不義者。

小萬　それぢやによつて、いま云ふ通り、寳取り得たその後で、わしさへ自害したなれば

權三　小萬さま一人自害して、この權三が生き殘り、まぢ／＼お雪と夫婦になり、それで拙者の倖ひが立ちませうか。この上は潔く、源五兵衛どのゝ刀で死ぬるがまだしも……おさらばでござりまする。

ト行かうとする。

小萬　アヽコレ、權三どの

ト留める。よき時分、彌助出かゝり窺ふ。

權三　イヽヤ離して

ト振り切り行くを、彌助とめて

彌助　若旦那、まづ／＼お待ちなされまし。

権三　其方は彌助、今日歸宅おしやつたか。

小萬　他行の留守も、何かと内儀の心添へ、過分にござるわいの。

彌助　ナニ其やうなお心遣ひ。お家の寶紛失と申し、お二人の家出。殊にはその身に覺えなき、盗賊の惡名にて、配符の廻りしお尋ね者。この樣子では源五兵衞さまにも、武士が立たずとお二人を尋ね、女敵討ちもあらんかと、案じましたが大きな相違。承れば源五兵衞さまは、遊里へ入込み、以ての外のお身持ち放埓。あのお心では、お氣遣ひな儀はござりませぬ。よしお二人が、きつと守つてござつても、人の口には戸が閉てられぬ。ハテ、毒くはゞ皿。今からお二人、御夫婦におなりなされたと申しましてから

トいはうとする。

権三　ヤイ〳〵、其方までが穢らはしい。聞く耳持たぬ。権三は武士ぢや、侍ひぢやぞ。

トきつといふ。彌助、こなしあつて

彌助　これは不調法を申しました。御免なされませ〳〵。

小萬　物事立派な権三どの、みだらな事は、どうして〳〵。兎角頼むは佛神の加護。一日も早う、寶の手に入るやう………アヽ、儘ならぬ浮世ではあるわいの。

權三　これはしたり、其やうにキナ〳〵思し召すと、また病氣に障りますわいの。

小萬　それぢやというて、其方が今のやうに突き詰めた料簡。一倍案じられるわいの。

權三　左樣なら、私しも思ひ止まつて、時節を待ちませう程に、必らずお案じなされますな。

彌助　左樣でござります。兎角時節をお待ちなさるに如くはござりませぬ。御辛抱なされませ。

權三　爰は端近で、山風が當りませう。マア、納戸へお入りなされて

彌助　女房に、お御足なと、撫つておもらひなされませ。

小萬　さま〴〵の心遣ひ、嬉しうござる。そんなら權三どの、得心して、時節を待つて下さるか。

權三　待ちませいでわいの。サ、あなたはマア、奥へお出でなされませ。

小萬　それでわたしも落ちつきました……ドリヤ、讀みさした普門品なと、讀誦しませうか。

ト思ひ入れあつて奥へ入る。

彌助　ハテ、お氣の毒な。若旦那も、さぞ御氣鬱でござりませう。大事のお望みある御身。その御氣鬱を晴らす爲、幸ひ爰に濁り酒。お杯をあげたいが、アヽ、なんぞ肴があればいゝが。

權三　何かと心遣ひ、忝い。コリヤ彌助、肴は幸ひ、山にて射とめたるこの小鳥、これは如何であらうな。

彌助　ヤ、これは何よりの品。早速庖丁いたしてあげませう。
ト彌助、山鳥の皮を剝ぐとて、出刃を入れる。この鳥の血、刎ねて、權三が袖にかゝりし思ひ入れ。

權三　身が衣服へ、その鳥の血が刎ねたと見えるわえ。
ト彌助、權三の小袖を見て

彌助　ヤ、このりや麁相いたしました。眞平御免なされませ。

權三　イヤ、苦しうない。武士の衣類に血の附くはめでたいが、もしやこの身の成行きは、衣類も朱に染むといふ
ト思ひ入れ。

彌助　マア、それはお脫ぎなされませ。女房に、撮み洗ひにでも致させませう。

權三　左樣いたさうか。
ト上着を脫ぐ。

彌助　併し、其まゝではお寒うござりませう。
ト思ひ入れあつて、そこにある二の宮が葛籠の中より、振り袖の女小袖を出し

幸ひ、有り合したこの衣類。マア、寒さ凌ぎに、これなと召してござりませ。

ト引ツかけさせる。權三見て

權三　こりや女子の衣裳ぢやないか。

彌助　ちつとのうち、召してござりませ。

權三　これは異形の姿ぢやわえ……オヽ、どうやら着附けぬ衣類の所爲なかして、いかう寒うなつて參つた。

彌助　モシ、その間、圍爐裏で榾を焚いて、おあたりなされませ。

權三　焚火の御馳走かな。

ト振り袖のまゝ、圍爐裏へ榾をくべる。この時、風の音して、風吹き入つて灰を吹き立て、權三の頭へかゝりし體。彌助見て

彌助　アヽソレ、お頭が臺なし灰だらけ。手拭なとお卷きなさるがよい。

ト權三に手拭をかむせる。

權三　これは忝い。

ト權三は火を焚きつけ、彌助は鳥を拵らへにかゝる。山おろし、馬士唄になり、向うより傳三、旅形、

　ぜげんの拵らへ、以前の大藤内附き、出て來り、花道にて

大藤　いま道々話しの娘は、アレあの木部屋へ、ちよろまかして置いた。おてまへ、よく見た上、相談して下され。

傳三　心得ました。あの内の亭主は彌助といつて、わしも懸りあひのある男だが、イヤモウ、挺でもいかねえ奴でござります。

大藤　そんなら必らず、コレ

　ト囁く。傳三、呑みこみ

傳三　アイ、承知でござります。

大藤　きつとこなたを頼みましたぞ。

　ト大藤内、引返して揚げ幕へ入る。傳三、舞臺へ來り

傳三　彌助どの、内かな。判人の傳三が來たよ。

　ト内へ入る。

彌助　アヽ、傳三どのか。又やつて來たのか。

傳三　來ないでどうするものか。どの道方を附けると約束の金を、ぶんなぐつてどうするのだ。石が舍

利にならうが、今々は是非々々あの女の、方を附けてもらはねばならぬよ。

彌助　サア、是非とも方を附けようと思つてゐるが、ちつと此方に目算の違つた事があつて

傳三　久しいものだ、こなたのちやらッぽこも聞き飽きた。はる〴〵江戸から足を運んで買ひ歩いた、人の奉公人を揚げ玉にして、ぬく〳〵と女房にしてゐるのを、料簡して、今まで繩を締めておいたのは、この判人が情だ。モウ〳〵、今日は絶體絶命、方を附けぬうちは、この屋かばねは動きはしないよ。

彌助　それだと云つて、おれも素手で流して置きはしねえワ。いつぞやこなたに渡して置いた、彼の品をナ

ト小聲にて、權三に聞かせぬこなしにて云ふ。

傳三　その品も、今日持つて來た。こんな物を預けて、金を引摺られてゐるより、どうぞ現金にしてもらひたい。

ト懷より短刀折紙を出しかける。彌助、こなしあつて

彌助　これはしたり、爰へ出しては

ト權三へ心遣ひのこなし。權三、ちよつと見て

權三 寸尺といひ、袋の模樣、慥かにその短刀は

傳三 アヽ、この品かえ。こりやァこの彌助どのが

ト云はうとするを

彌助 アヽコレ……モシ、若旦那、この短刀は、この傳三どのが、拂ひ物だと申しましてナ、ソレ、先達てから、ソレ、貴樣が度々賣つてくれろと云つて、持つて來たぢやァねえか。おれが屋敷奉公もしたものだから、拂つてくれろと申しまして、ソレ、おれを賴んでおやァねえか。

ト思ひ入れ。傳三、呑みこみ

傳三 ムウ、成る程、さうだ〳〵……モシ、これは拂ひ物でござります。この彌助どのが、私しへ預けたものではござりませぬ。

權三 コリヤ、町人。ちよつと見せやれ。

ト傳三が持つてゐる短刀折紙を取つて、よく〳〵見て

これや紛ふ方なき千葉家の重寶……この短刀ゆゑ盜賊の

ト思ひ入れ。彌助、南無三といふ思ひ入れを隱し

彌助 そんならそれが……ハテ、どこのどいつが物したもので、どこからどこを廻つて來たものしらん

ト空とぼける。

權三　出所さへも分明ならず、詮議いたさば

ト思ひ入れ。

彌助　もし事荒立てゝ今の御身、何かにつけて、ナ、モシ、御合點が。

權三　ムウ。コリヤ、町人、して、この短刀の價は、いか程ぢや。

トこれにて傳三、困りし思ひ入れにて

傳三　サ、その價は、カウト、あの女の後金が

トもぢ〳〵してゐる。彌助、引取つて

彌助　これはしたり、物覺えの惡い。こなた、先達て、百兩だと云つたではないか。

傳三　オヽ、成る程、百兩だと云つた。それ〳〵、百兩々々。モシ〳〵、その價は、百兩でござります

ト權三、思ひ入れあつて

權三　尋ぬる品は早速に手に入つたれど、百兩の金子の調達。差當つて……ムウ。

ト當惑のこなし。傳三、ヂロ〳〵見て

傳三　コレ、彌助どの、ちよつと貴樣に逢ひたい。

ト彌助なブッと下の方へ招ぎ、小聲になつて

コレ、ありやア女のやうでもあるが、女なら、剛氣な代物だな。

彌助　ナニ、ありやア……ムウ。して又、女ならどうする。

傳三　先づ百兩に買ふな。

彌助　そんなら、あれが女なら、こなた、百兩に買ふか。

傳三　もの云はずよ……ハヽア、讀めたわえ。ありやアてつきり娘に違ひないが、こなた、男のやうに態度を仕込んで置くも、こりやア大方、山越しをする目論見か。こなたはマア、ぜけんの上を越す、おつかない男だぞ。

ト彌助、思ひ入れあつて

彌助　ハテ、感心なものだ。商賣がらとて、よく見た。沙汰はこれぎり、ありやア女よ。

トこの聲を權三、聞きかぢり

權三　ナニ、身共を女ぢやと申すか。

ト彌助、目まぜして

彌助　アヽ、コレ、女だ、この人には女と云つて、サ、女と云つても大事ない、女だ〳〵……コレ、そん

なら、いよ〳〵こなた、百兩に買ふな。

傳三 玉さへ得心すりやア、恩ひら無しに

權三 何か心得ざる二人の相談。コリヤ、彌助〳〵。

ト彌助を呼ぶ。これにて彌助、此方へ來り、權三を上の方に連れて行き、小聲になつて

彌助 モシ、若旦那、今の相談をお聞きなされたか。あの者が、あなたを女と見立て、百兩に買ひたいと云ふこそ幸ひ、モシ、この通り國々へ、配符の廻つた笹野權三、男で居ては危ないもの……サ矢ツ張り生れついた女で、ナ、その身を賣れば……モシ、早速この場で、短刀も手に入ります。それのみならず、女になつて江戸へお下りなされ、人立ち多き遊里の勤め、さすれば敵の手懸りも……サ、堅き心をとりをいて、女郎になるがその身も出世……類ない事と思し召しませうが、左樣なさると、三方四方のあたりの望みも、ナ、モシ……サ、爰の道理を辨まへて、ナ、女郎になつて

トよろしくこなし。

權三 ぢやと申して、あまりと云へば

彌助 御得心なければ、この短刀も、人手に渡りますぞえ

ト短刀を見せる。

權三　サ、それは。

彌助　コレ、この通り、配符が廻つて居ますぞえ。

ト觸れ書を見せる。

權三　サ、それは。

彌助　モシ、親御の敵、討ちたくは思し召しませぬか。

權三　サ、それは。

彌助　サヽ、とつくりと分別なされ、得心あるが、その身のお爲……イヤサ、女郎になるが、よさゝうなものぢやぞよ、

トせりふ廻しよろしく、云ひくろめる。權三、とつくりと思ひ入れあつて

權三　成る程、身共は女子……イエ、わたしは女子。この場で短刀手に入る時は、小萬どのに渡し置き源五兵衛どのゝ武士の立つやう

ト云はうとするを

彌助　アモシ……もうそれでよし、それでよし。

傳三　どうだな。得心したかな。

ト彌助、また此方へ來り

彌助　サ、すつぱりと承知した、そんならどうぞ、こなたを賴む。

傳三　合點だが、おれも今爰に金は持ち合さぬが、なんと物は相談、斯うしてくれまいか。貴樣の女房に懸り合ひの、後金が五十兩あるワ。この短刀も返すッ。そこで彼の娘を、おれが目先に連れて行けば、直ぐに胸倉の五十兩も借りて、こなたに渡せば、跡の事もなし、こなたの女房の方も附くといふものだ。コレ、どうぞさうして下さい。

彌助　エヽコレ、現金でゆきたい所だが、こなたにも、いろ〳〵な苦厄介をかけた代り、エヽ、さうしてやらう。

傳三　それでおれも、苦が拔けるといふものだ。して、親許は。

彌助　おれが妹だわな。

傳三　それぢやァいさくさ無しだ。そんなら手附けに、この短刀は渡して行かう。

彌助　しつかりと受取つた。そんなら證文の時、後の五十兩を

傳三　勿論サ……おらァこれから、駕籠を雇つて迎ひに來よう。

彌助　ムウ、さうするがいゝ〳〵。

ト傳三、門口へ出て

傳三　アヽ、今日は思はぬ掘出し物をしたわえ。

彌助　おれに引摺られたのが、勿怪の幸ひだらう。

傳三　うさアねえ、そんなら姐え、行つてくるぜ。

ト山おろし、念佛太鼓になり、傳三、イソ〳〵として向うへ入る。兩人殘り、思ひ入れ。

林三　計らざる女子の姿を、誠の女子と思ひ込み、利慾にふける今の町人。

ト手拭を取る。

彌助　それも短刀受取る爲。その上、敵をお尋ねなさるには、これぞ幸ひ好い手段。

ト思ひ入れ。よき時分よりお米、奥より出かゝりゐて

よね　そんならあなたは、浮世をお忍びなさる爲、女子の姿と

彌助　コレ。

ト消して

小萬さまにお逢ひなされては、女子の愚痴にて何かの妨げ。この短刀は彌助めが、小萬さまへ、

しかとお渡し申しまする。

權三　成る程、小萬さまへは、後にてよしなに執成してくりやれ。さはさりながら、せめて樣子を書き殘して。

よね　そのお頭のしがも、わたしが、勤めのうちに嗜なみの、櫛笄にて目立たぬやう、みのなとかけて結ひ直して

權三　さはいへ身共も侍ひの、假にも女の姿となり、殊に遊里の勤め奉公。

彌助　それも卽ち武士道を、お立てなさるゝ一つの手段。

權三　でも、あまりと申せば云ひ甲斐なき。

兩人　モシ。

ト彌助は短刀と折紙、お米は觸れ書を、左右より差しつける。

權三　ハテ、世の中の成行きぢやなア。

トちつとこなし。唄になり　權三、短刀と折紙を持ち、お米ついて奧へ入る。彌助殘る。向ふより大藤內、白羽の箭と弓を持ちて出て來り、花道にて、舞臺の方を見て、思ひ入れあつて引返して入る。

彌助　ハテサテ、思ひもよらぬ。いつ何時、どういふ幸ひが來やうも知れぬものだ。今の短刀、小萬ど

のへ、渡すと云うて權三を騙し、矢ツ張り短刀おれが手へ、金の代りに權三をやつて、ほいまくつたら死なうがまゝ。あの小萬も騙して置いておれが妾。その上、連れて來たこの女を、湯女に賣つたら餘程の金。それを路銀に女房を連れて、こんな山家は驅落ちして、京大阪へたつた一飛び。ハテ、爰ばかり日は照るまいし

ト國太夫を語り

誠に希代、妙々。

ト獨り喜ぶ。この時、弦音して、藁家の棟へ白羽の箭立つ。彌助、恟りして

なんだ、今の弦音は。

ト見て

イヤア、おれが家の棟木へ白羽の箭が立つたが、アヽ、まだこの上に好い事が來るかしらぬ。金儲けも、斯う度々では誠にうるさい。

ト獨り言云うてゐる。風の音になり、向うより大藤内、幣を持ち、彌藏、筒ツ袍、山裝附、柚の形。簑笠の百姓六人、白木造りの輿を擔ぎ、ワヤ〱云うて出て來り

彌藏　モシ〱、向うの家なら、彌助が内でござるが、娘があればよいが。

ト云ひ〳〵、この人數、門口へ來て

コレ〳〵、彌助、内にか。當年の人身御供は、貴樣の内が當つたほどに、支度さつしやれ〳〵、

百姓 サア〳〵、早く娘を出しやれ〳〵。

彌助 コレ〳〵、なんと云ふ。いま弦音して、おれが家へ箭が立つたを見て、人身御供に娘を寄越せか

彌藏 ハテ、神慮に叶うた愛の娘。氣の毒ながら、渡しやれ〳〵。

彌助 これサ〳〵、そりやァ貴樣、無理といふものだ。

彌藏 何が無理だ〳〵。

彌助 ハテ、神の靈夢であらうがまゝ、おれが内には夫婦かけ向ひ。娘と云うては持ちもせぬに、そこへあの箭が立つたといふは、そりや神樣の心得違ひ、間違ひだ〳〵。

大藤 イヤ〳〵〳〵、ナニ神に間違ひの心得違ひのと、いふ事があるものか。コレ、彌助どの、貴樣がなんぼさう云つても、無いとは云はさぬ。最前の女夫喧嘩、大藤内がしつかり見届け歸つた娘。コレ〳〵、この木部屋へ入れて置いた。このやうな美しい

ト木部屋の戸を明けて二の宮を引出す。

二宮 こりや、わたしをどうなされまする。コレ、彌助どの、どうぞわたしを

彌助　アヽ、そんならこなたは彼の子を、こちの娘と思ふか。

大藤　よし思うても思はひでも、爰の内に娘というては、この子ばかりぢや。

彌藏　門の五もいらぬ。成景さま、柩の内へぶち込んで、ちつとも早く

大藤　合點ぢや。百姓衆、頼みます。

百姓　心得ました。

ト二の宮へ立ちかゝる。

二宮　アヽ、滅相な。なんでわたしを

彌助　その女は預かりもの。人身御供にやられるものか。

彌藏　それでも神慮に叶うた娘。早くさつしやい。

大藤　合點だ。

彌助　イヽヤ、やられぬ。

ト寄らうとするを、彌藏、支へて留める。その間に門口にては、大藤内、二の宮を無體に柩へ打込み、百姓皆々舁きあげ、山おろしになり、ワヤ〳〵云うて、逸散に向うへ入る。留めんとする彌助を、彌藏、無理に突きこかし、これも百姓の後を追うて向うへ入る。彌助、起上がり

彌助　神の告げでも靈夢でも、預かりものを渡してすまうか。オヽイ神主どの、近所の衆、待たつしやい待たつしやい。

ト同じく向うへかゝる。山おろしになり、向うより傳三、走り來り、花道にて行きあひ

傳三　コレ／＼、貴樣の內へ行くところだ。いま見た娘を連れに來た。駕籠も宿に待たせて置いた。サ連れて行かう／＼。

彌助　さうではあらうが、ちつと此方に

傳三　ハテ、今夜夜立ちだ。渡して下さい。

ト押し戻し／＼、內へ歸つてくる。彌助、迷惑なるこなしにて內へ入る。

彌助　モシ、權三さま……イヤ、妹、先刻のお方が

ト合ひ方になり、奧より權三、女の髮に結ひ直し、件の短刀折紙、書置と共に持ち、お米ついて出て來り、思ひ入れあつて

權三　コレ、彌助……彌助どの、小萬さまのお目が覺めなば、この短刀を添へたる折紙、この文は身の云ひ譯、詳しう書いてあるほどに、あなたへきつと屆けて下され。

ト三品を差出す。お米、取つて

よね　あなた樣へはわたしが、きつとお屆け申すでござりませう。

權三　この上ともに病氣の樣子、心を附けて二人の者、よきにいたはり

ト思ひ入れ。彌助、こなし。

彌助　氣遣はおとも、ちつとも早く。

よね　せめて、あなたにお逢ひなされて

彌助　コレ。

ト思ひ入れ。入相の鐘鳴る。傳三、氣を急き

傳三　イヤア、もう入相か。夜に入つたならこの山道。暮れないうちに、ちつとも早く。

ト權三が手を引き、外へ來る。權三、振返つて

權三　くれ〴〵頼む、夫婦の者。

傳三　ヤ。

ト思ひ入れ。權三、氣を替へ

權三　サ、參りませう。

ト唄になり、入相の鐘、山おろしになり、傳三、權三が手を引ツ張つて、向うへ入る。お米、氣の毒

なろこなし。彌助、仕濟まし顔にて

彌助　先づ、首尾よく一人は片附けた。これから爰を立退く算段。それにしても、仕事しかけた二の宮を、あの神主めに浚はれたが、あの行き方も

ト思ひ入れ。

コレ、女房、その短刀も折紙も、此方へ寄越せ。

よね　こりや奥の小萬さまへ、お屆け申せと折角のお頼み。權三さまのお文を添へて、お目が覺めたら

彌助　馬鹿を云へ。それを屆けてたまるものか。その短刀と折紙は、おれが手から出して金にするワ。又おれが手にあの一軸、一つにすれば餘ッほどの大金。

よね　そんならこなさん、深切らしう

彌助　云つたは嘘だ。なんのよしみに。

よね　エヽ、さういふお前の無得心。モウ〳〵、愛想が盡きた。この上は、お前には構はぬ。あの奥の小萬さまへ、この二品にお文を添へて

彌助　べら坊面め。小萬に渡して詰まるものか。此方へ寄越せ。

よね　イエ〳〵これは、あのお方へ

彌助　エヽ、寄越しやァがれ。

ト爭ひ〳〵、無理に引ッたくり、文はあたりへ捨て、短刀折紙を懐へ捻ぢこむ。お米、聲立てるゆゑ、無理に引ッ捕へ、手拭をはませ、荒繩にて縛り、あちこちして、最前持ち歸りし葛籠を明け、お米をこの中へ打込みて、繩をかけ、

イヤ〳〵、隱して置いた一軸も、置いては行かれぬ。

ト神棚より守札を取つて、中に隱せし月星の二幅の畫像を取出して懷中し

サア、これからは、あの二の宮が跡追うて、取返したらこれも金。うつかりしては居られぬわえ

ト嘻き思ひ入れにて、下手を尋ね、草鞋を取出し、穿いてゐる。捨て鐘、山おろし、誂らへの合ひ方。

向うより源五兵衛、以前の形にて出て來り、花道にて後振り返り、思ひ入れあつて

源五　往來を惱ます追ひ落しの輩と思ひしに、さては作右衛門が廻し者であつたか。卑怯未練な人外め……承れば權三が小者、彌助が在所は箱根の山中、鹿道越と聞いたゆゑ、あれにて尋ねしに、此あたりとの事。もしや二人が忍び居るか。それへ便つて

ト思ひ入れ。

アヽ、それにしても、殊の外息切れ致した。せめて白湯など一つ所望して

ト向うをためらひ見て

向うに人家があるさうなが、あれへ便つて

ト門口へ來り、窺ひ見て

アヽ、暗い樣子ぢやが……賴みませう〳〵。

彌助　アイ、誰れだえ。

源五　イヤ、身共は鎌倉方より參つたる、旅の者でござるが、幼子を抱へ、甚だ難儀。尋ねたいは此あたりに、鎌倉の屋敷に奉公いたした、彌助と申す者の住家、御存じなら敎へさしつて下され。夜に入つて、殊の外難儀仕るて。

トこの聲を聞いて彌助、さては源五兵衞と思ひ、ワナ〳〵して思ひ入れ。鼻を抓み、作り聲にて

彌助　アイ、その彌助が內はまだ山奧で、なか〳〵夜は行かれませぬ。わしが呼んで來てやりませう。入つて待たつしやりませ。

源五　それは忝い。お呼び下さるなら、鎌倉の武士と云はずに賴みます。

彌助　よし〳〵。

ト門口へ出る。

源五　アヽ、モシ／＼、無心ながら、白湯一つお振舞ひ下され。

彌助　閻爐裏にあつた。飲まつしやい。

源五　ハイ／＼、免さつしやりませ。

ト内へ入り

アヽ、まだ灯が附きませぬの。

ト探り／＼内へ入る。彌助、向うの方へ行く振りにて、足音高く聞かせ、引返し、差したる一腰の鯉口くつろげ、探り／＼木部屋へ入る。爰より縁の下へ忍ばんといふ思ひ入れして入る。源五兵衛、閻爐裏の埋み火を見附け、鑵子を探り寄る。此うち捨て鐘、山おろし、誂らへの合ひ方。上の屋體の簾をかきのけ、小萬、探り／＼出て、窺ひ見て

小萬　そこに誰れかござんすの。

源五　左樣でござります。

小萬　アヽ、灯も附けいで、二人の衆は……あの人も、もう寢てかしらぬ。

源五　どうぞ白湯を一つ。

小萬　憚か藥罐に

源五　ハイ〳〵。

ト探り〳〵、間違ひて件の藥の入りし藥鑵を探り、有りあふ茶碗を探り取り、これに注ぎ、思ひ入れあつて

アヽ、お茶か〻なんでも大事ござらぬ。

トこの藥を思はず飮む。小萬は、あたりを尋ね

小萬　爰らに行燈が

ト探す拍子に、權三が殘し行つたる手紙を探り取り、思ひ入れ。

封じの儘なるこの手紙、捨てゝあつたは

ト心得ぬこなしにて、あたりを尋ねる。此うち源五兵衞、件の藥を飮むと其まゝ、逆上したる思ひ入れ。小萬は納戶を探り、行燈を尋ね出し

アヽ、やう〳〵と爰に行燈が

ト探り寄つて附木を抽出より出して、あたりにある土火鉢の炭團の火を移し、行燈を灯し、上の方にて拾ひし文を開き、後向きになつて讀むこなし。源五兵衞、圍爐裏の際にて、件の毒氣廻りし思ひ入れにて

源五　この子を一日抱きかゝへ、歩いた所爲か逆上して、今の今まで耳やかましう聞えたる、谷の水音一度にとまり、松吹く風の聞えぬは……殊に氣分も常ならず。

ト思ひ入れ。

小萬　この文言では、いとしや權三どのは、何奉公か知らねども、その身を賣つて他國すると、わしへ殘したこの書置、その代りには短刀折紙、二品ともに彌助へ渡し、源五兵衞どのへ渡してくれと、詳しい文言。それに二人も居やらぬは

源五　熱氣盛んに兩耳の、痺るゝ如くにありながら、物音更に聞えぬは

小萬　聞けばどうやら

ト振りかへり、源五兵衞も小萬の方を見る事あつて、兩人キッと顏見合せ

源五　ヤ、女房小萬め。

小萬　源五兵衞どの。

源五　よくもおのれは

ト駈け行き、小萬を捕へる。小萬、思ひ入れ。

小萬　これには段々

ト云はうとするを、キッと引附け

源五　おのれ、逃ぐるとて逃がさうか。サ、實の行くへ、權三めはいづくに隱るゝ。サ、それ吐かせ、それ吐かせ。

ト引附ける。この音に赤子、泣き出す。小萬、思ひ入れあり

小萬　ヤ、そんなら我が子の三五郎

源五　ヤア、今となつて知らぬとは、命惜しさの卑怯な女め。

小萬　アヽモシ、さら〳〵命は惜しみませぬ。連れて退いたる權三どの、その身を賣つて金拵らへ、短刀折紙手に入つて、小者の彌助に渡せしと、詳しい文言。彌助に逢うたら二品も

源五　これほど云うても返答打たず、蟄して居るは、云ひ譯ないか。云ひ譯なくば、ぶつ放さうか。コレ、おのれ、この忰が目にかゝらぬか。畜生め。

小萬　身腹痛めし我が子ぢやもの、可愛うなうて

源五　ナニ、知らぬと吐かすか、人外めが。

ト引附ける。小萬、思ひ入れあつて

小萬　これ程わたしが申す事、彌助が戻らばその二品、知るゝ道理といふ事が、どうやらお前は聞えぬ

樣子。

源五　啞になつてか、身共にばかり物云はせ、一言一句の返答打たぬか。膽の据つた畜生め。

小萬　そんならこれほど譯云ふが、聞えぬ樣子は、もしや先刻のあの藥、闌爐裏に掛けしを、お前はあれを

源五　返答せねば刀の手前、是非に及ばぬ

ト拔いて切りつける。小萬、逃げる立廻り、有りあふ行燈を突きこかし、暗がりとなる。兩人、危ふく立廻つて、二重舞臺へ上がる。この時、下家より白刃出る。上は立廻り。また白刃引き、外へ突き出す。兩人、危ふき立廻りよろしく、小萬、有りあふ葛籠を枷に立廻り。此はずみに葛籠の紐切れて蓋開き、中よりお米、縛しめのまゝ出て中へ入り、暗がりの立廻り。源五兵衞は小萬と思ひ、お米を切る。これにて「ウン」と苦しむ。この時、彌助、床板を刎ねのけ、這ひあがつて、探り〳〵葛籠へかゝり、蓋開きあるゆゑ恟りして、尋ぬる手先へ、小萬が觸るゆゑ、お米と心得、上の方にて、逃げろ〳〵と押しやるはずみに、小萬、思はず崖の口より谷へ落ちる事。彌助、これを知らず、思ひ入れあつて

彌助　ちつとも早く、小萬さま。

ト大音に呼ぶ。源五兵衛、始終を考へ、思ひ入れあつて

源五　ヤ、外に荷擔人、慥かに權三。

彌助　南無三。

ト懐の一軸二幅を持ち、逃げんとするを、暗がりにて源五兵衛、彌助を捕へんとするとて、件の月星の一軸を落す。源五兵衛、探りよつて星の一軸を取上げる。彌助も探り廻り、月の一軸を取上げる。

源五　こりやコレ一軸。

彌助　すりや、一幅を

源五　二品揃へて

ト立ちかゝる。彌助、逃げんとして、有りあふ松明、柴を取つて打ちつける。松明、圍爐裏へ入り、パツと燃えあがる。柴へは權三が書置からみ、源五兵衛の前へ落ちる。手早く源五兵衛、書置を取上げる　その隙に彌助、かい潜つて、燃えつきし松明を持つて、上の方の崖より谷へ飛びこむ。源五兵衛は小萬と心得、お米を切る。この時、縛しめの繩切れて、苦しみながらお米、源五兵衛へ縋り、兩人、立廻りながら二重舞臺へ上がり、また切りつける。圍爐裏の柴、燃える。これにて、思ひ入れあつて

この一軸があるからは、尋ぬる短刀……ヤヽ、こりや人違ひ。

ト驚ろき、件の書置を見て

この書き物の手蹟は權三。

よね　アモシ、お二人樣は

ト源五兵衞、文言を見て

源五　この文言は權三と小萬、不義にはあらぬその云ひ譯、前非を悔みてその身を賣り、金拵らへて短刀折紙、家來彌助に渡せしと、書いたる文言、すりや、その品は

よね　夫ながらも横しまな、連合ひ彌助が短刀も

源五　アヽ、何を申すか、身共が耳へは……コレ、しつかり申せ。

ト氣をいらち云ふ。

よね　これほど云ふに、邪慳な侍ひ。ニヽ

トこなしあつて、縡切れて落入る。

源五　コリヤ女、心を慥かに……ヤ、縡は切れたか……アヽ、不便なものゝ

ト思ひ入れにて源五兵衞、涙を押へ、顏を外けるこなし。この見得にて源五兵衞、泣き落し、赤子を

いぶりつける體にて、其まゝこの道具をセリあげる。左右の道具變る。

本舞臺、箱根谷底の體。山組み、早瀬の流れ、樹木茂りし體。向う揚げ幕へ新關の門の戸を引出す。ト爰に小萬、落ちたる體にて、氣絶してゐる。これをお雪、眼の盲ひたる體にて、實の母とも知らず介抱してゐる體にてセリあがる。彌助が持ちたる松明、よき所に燃えてゐる體にて道具とまる。

ゆき　水音烈しく木魂の音、分けて上より、何やら落ちたは

ト尋ねよつて、小萬に探りあたり

ヤ、どうやら女中の手觸りにて、氣を失なうて……アヽモシ、女中さま、心を慥かに、コレ、氣が附きましたか。コレ、女中様。

トこれにて小萬、心附き

小萬　アヽ、恐ろしや、崖とも知らずこの谷へ、落ちると思へば正氣を失ひ、氣絶なしたを介抱なされて、助けてたもつた、お前は爰らに、お住ひなさるゝお方かえ。

ゆき　イエ、わたしは旅の者。男の行くへを尋ぬれど、眼病重つて盲目同然。さはさりながら今の物いひ、慥かに母に、よう似たお聲。

ト小萬、松明の灯影に窺ひ

小萬ヤ、其方は

ト思はず聲立てるを、お雪、聞いて

ゆきヤ、母さんかいな。モシ、思ひがけなう

ト縋りついて

わたしや放さぬ。コレ、母さん、わたしもどうぞ、連れて行て下さんせ。モシ、母さん、わたしや常から目の性の、惡い生れか此やうに、盲目も同然な、淺ましい身になつたわいな。モシ、母さん、どうぞわたしも、お連れなされて、權三さんに逢はせて下さんせ。モシ、眞實お前に心ある、權三さまなら緣切つて、もう〳〵添ひは致しませぬ。この心根を不便とも、思し召してわたしも一緒に、お連れなされて今一度、どうぞ逢はせて下さりませ。

ト取りすがる。小萬、淚にむせび、こなしあつて、物云はんとして、堪りかねて泣き伏す。お雪、こなしあつて

そのお嘆きは、いよ〳〵違はぬ、お前は母樣、モシ、もの仰しやつて下さりませ。お氣に違はゞあやまりませう。どうぞ娘、雪かと、詞交して下さりませ。

ト纏りつく。小萬、縋りかれ、「ワツ」と泣き、思ひ入れあつて

小萬　尤もぢや〳〵。コレ、もの云ひたうてもこれがマア、娘か雪かと恥かしい、わしが口から云はれうか。今となつては其方の眼病、この母の顔見られぬが、まだしも天のお助け。もうこの世ではどうも其方に

ト思ひ入れ。お雪、小萬が裾に取りついて

ゆき　アヽモシ、母さん、どのやうな辛い悲しい目にあうても、大事ござんせぬ。どうぞ連れて行て、親子が仲睦まじう

ト思ひ入れ。

これを思へばその以前、産み落ちると里親の、手で育つたる悲しさは、實の父さん母さんの、お聲も顔も眞實の、兩親ながらとつくりと、覺えませぬはお側にて、育たぬ悲しさ。迎ひが來ても、眞實の、親の手許へ行く事が、ふつ〳〵否であつたのは、七夜のうちから十七年、在所で育つた悲しさゆゑ。今その罰が一時に、報うて來たのか、コレ母さん、どうぞ免して、わたしも連れて

小萬　アヽコレ、身腹痛めた娘ぢやもの、側に置かいでなんとせう。産み落すと其まゝに、藝者のうちは恥かしう、里親とつたがわしの誤まり。なんの其方に科は無い、皆この母が後での後悔。一つ

に居られぬ身の因果。今も今とて思はずも、夫に逢うて身の云ひ譯がしたうても、尋ぬる品を渡さねば、疑ひ晴れぬ二人は不義者。

ゆき　エヽ、そんなら爰へ父さんも

小萬　まだその上に權三どの、書置殘して他國へござんす、跡追はうにもこの山道。まだも助けは祐經さまを、お迎ひの同勢お通りゆゑ、今宵ばかりは通路の新關、御免の上は跡追うて、其方は隨分怪我せぬやうに

ゆき　そんなら逢ひたい權三さま、此あたりにとあるからは、關所のお免し幸ひに、わたしもお跡に

ト立上がり、眼見えぬゆゑ爪づき、よろ／＼として倒るゝ。小萬、心遣ひあつて

小萬　アヽコレ、この山道を女子の足、殊に兩眼不自由の其方。

ゆき　戀しいお方に、逢はるゝ便りも

小萬　そのゆかしいと思ひやるお方、母が逢はせて。

ゆき　エ、そりや眞實か。モシ、母さん、どうぞ逢はせて

小萬　逢はするほどに、肌身に添へてこの品を、失はぬやう大切に

ト權三より受取りし赤木作りの短刀をお雪に渡す。探り取るとてお雪、小萬が放す。この間に小萬、

ゆき　アモシ。

　　花道へ走り行き、振りかへる。お雪は小萬を捕へんとして

　　ト思ひ入れ。

　主に逢はすと仰しやつて、この短刀は。

小萬　權三どのから預かつた、主の大事な赤木の短刀。

ゆき　すりやアノこれが、戀しいお方の

　　ト抱きしめる。

小萬　母も權三の跡追うて。

ゆき　どうぞわたしも

　　トまた立ちあがる。

小萬　娘、息災でゐや。

ゆき　エ。

　　ト時の鐘寂しく鳴る。小萬、思ひ切つて、揚げ幕の關の内へ走り入る。

胴慾なコレ、母さん、眼は不自由でも女子の念力。お前に連れ立ち、男の行くへ

ト立ちあがる。この時、向う揚げ幕の關の內にて

呼び　お關所締まります。

ト大聲に云ふ。この途端に向う揚げ幕にてチョンと木の頭を打つ。仕掛けに門の戶、シャンと閉まる。

この音を聞いて

ゆき　すりやモウ關が……ハア丶。

ト泣き落す。これを舞臺にてキザミの拍子木よろしく、時の太鼓だらに打ち、ひやうし引附けると、山おろしのツナギにて引返し。

幕

第一番目　大詰　箱根魔王宮の場

役名――曾我五郎時致。近江小藤太成家。八幡三郎行氏。近江の小彌太。杣、彌藏。神職、大藤內。腰元、二の宮。大磯屋傳三。晝鳶、伊之助。工藤左衛門祐經。

本舞臺、三間の間黑幕、杉の吊り枝、上の方に岩組み。爰に件の柩を直しある。下の方に四つ手駕

籠を下ろしあり。爰に小彌太、氣を失なひ、倒れゐる。大藤内、伊之助、彌藏、立ちかゝつて呼び生けてゐる見得。掠めてチヤツパ入りの神樂、山おろし、時の鐘にて幕明く。

三人　小彌太さま〳〵。

ト呼び生ける。小彌太、心附きし思ひ入れ。

お心が附きましたか。

小彌　これは面目もない仕合せ。大藤内どの、お聞きなされ。只今この所にて、時致に出ツくわし、引ツ捕へんと存ぜしところ、彼奴が力でしたゝかに、面を打たれて目くるめき、殘念ながら氣絶のうち、ツイ見失なうてしまひました。

大藤　それは殘念。拙者は仔細ござつて、人身御供のこの柩、この所に据ゑ置き、暫らく爰を遠ざかりしが、その間の事でござらう。

伊之　お怪我が無うてまだしも仕合せ。それはさうと、成景さま、百姓どもの來ぬうちに、彼の娘を、ちつとも早く。

彌藏　そりやアおれが忍ばせて置いたが、受取つて行く判人傳三は

傳三　疾から爰に待つてゐました。

ト駕籠の内より出て

どうで江戸へ送る、奉公人の連れもあれば、ちつとも早く彼の駕籠で……して、その娘は。

大藤　この山合ひに。

ト上の方の山の蔭より、二の宮を連れてくる。二の宮、こなしあつて

二宮　思ひがけなう此やうな、怖い所へお連れなされて、こりやマアわたしや、どうなる事でござんすぞいなア。

大藤　どうするものだ。神慮に叶つた女ゆゑ、人身御供に供へるのを、あの人の願ひゆゑ、山神へお詫びの上で、こなたの命は助けてやるワ。

二宮　エヽ、そりや有り難うござります。わたしはちつと願ひのある身。左様なれば少しも早う

ト行かうとする。

伊之　アヽ、コレ〳〵、この山道を女の足で、どうして一人で行かれるものか。送つてやらうと、山駕籠を雇つて置いたワ。

二宮　何から何まで御恩の程、エヽ、有り難うござりまする。

大藤　その禮は後の事、氏子の者が來ぬうちに

二宮　そんなら此まゝ

ト駕籠へ乘る。木蔭より雲助二人出る。

傳三　サア／＼早く、わしが宿まで……成景さま。

大藤　渡したぞ。

傳三　やつてもらはう。

ト山おろし、捨て鐘になり、駕籠を急がせ、傳三附いて向うへ入る。この途端に下座より、簑笠の百姓大勢、松明を振り立て、出て來り

百姓　サア／＼、神主さま、お清めが濟んだら、早く柩を

皆々　送りませう／＼。

大藤　そんなら急いで、頼みます／＼。

皆々　心得ました／＼。サア、舁きあげろ。

ト柩を荷ひあげ

イヤア、初手より大分、重くなつた／＼。

大藤　ナニ重いものだ。輕い筈だ。

伊之　これはしたり、それを滅多に、ナ

大藤　成る程、さうだ……サ、急いでござれ。

ト山おろし、時の鐘になり、百姓皆々、柩を舁きあげ、大藤内と伊之助附いて下座へ入る。小彌太彌藏殘つて

彌藏　かね〴〵あなたのお賴みの爲、魔王の宮を窺ふところ、山籠りの行者こそ、疑ひもなき……モシ

ト小彌太に囁く。

小彌　身共も左樣に目を附けた。工藤祐經、富士の御狩の根方に立越え、地理案內のその場所を、見極めるとは正しく僞はり、身が推量に違ひなく。

彌藏　いよ〳〵それに極まらば、近よつて人知れず。

小彌　コレ・……萬事はあれにて

彌藏　ござりませう。

ト山おろし、掠めて、チヤツパ入りの神樂にて、兩人、思ひ入れあつて下座へ入る。この鳴り物にて道具廻る。

本舞臺、正面、魔王權現と額を掛けたる古宮、帳かけあり、大木の杉、爰に矢立の杉といふ高札立て、所々に杉の大樹、誂らへ凄き道具にて納まる。

ト矢張り件の鳴り物。下座より百姓、柩を荷ひ來る。跡より大藤内、三方に大土器、高盛りにせし供へ物を持つて、伊之助も指圖して、百姓、よき所に柩を直し、大藤内は三方を柩の前に供へる。

皆々　これで役目は濟みました。

大藤　御苦勞でござつた。

百姓　サア〳〵、皆の衆、御神體の出ないうち、早く麓へ

皆々　さうしませう〳〵。

ト捨ぜりふにて皆々、怖るゝ體にて、一人の百姓は簑笠も忘れ、あたりへ落し、皆々逸散に向うへ入る。兩人あと見送り

伊之　ハテ、臆病な奴等だ。着てゐた物まで忘れて行き居つた。

ト簑笠を取つて思ひ入れ。この時、大藤内、伊之助の懐へ手を差しこみ、件の系圖の一卷を取出す。

伊之助、その手を取つて

大藤内さま、わしが預かる工藤の系圖、三箇の莊の一卷を、こりやアどうさつしやるのだ。

大藤　ハテ、てまへ達が持つたとて、役にも立たぬこの一巻。この成景が預かつた。
伊之　イヽヤならねえ。貫稼ぎより野太いこなた。どうしてこれを

トやらじと立廻り。大藤内、一腰を拔き、切りつける。立廻つて古宮の帳の際へ行く。兩人、一巻を爭ふ。この時、帳の破れより手を出し、件の一巻を奪ひ取る。兩人見て

兩人　南無三、一巻

ト立廻つて大藤内、伊之助を當て、帳を搔きのけ、白刃を持つて駈けこむ、伊之助、心附き

伊之　慥かに宮へ

ト立ちかゝる。この時、パツタリ音して、帳へタラ〳〵と仕掛けにて血汐かゝる。

ヤ、この血煙りは

ト續いて宮へ入らんとする。太刀音して伊之助、一刀に切られし體にて、「ワツ」と苦しみ、タヂ〳〵となつて舞臺よき所へ倒れる。内より件の白刃を投げ出す。これをキツカケに時の鐘、山おろし、夜神樂になり、帳を卷きあげる。祐經、誂らへの大兜巾、長き頭の鬘、異形の面、白き飾り、山伏の形高足駄、胸に鏡をかけ、誂らへの斧、山神の拵らへにて、片手に鈴を振りて出て來り、伊之助の死骸を蹴飛ばし、件の一巻を懷中して、櫃の方へ窺ひより、鈴を投げ捨て、斧を以て櫃のよき所を打つ。

これにて角、崩れる。近よりてこの崩れより手を差込む。中よりこの手をキッと捕へる思ひ入れ。これにて祐經、キッとなり、この途端にバッタリ音して、柩バラ〳〵と碎け、内より時致、油氣なきさらけの稚兒髷のそこれたる拵らへ、蝶の散らし模樣、廣振り袖を丸揩けに挾み、紅絹の腰引、附け太刀にて現はれ出て、キッと見得。この途端に冠りし面落ちて、兩人立廻つて思ひ入れ。この時、鳴り物は三保神樂になる。時致、思ひ入れあつて

時致　まだ宵闇の箱根山、矢立の杉の御社に、人身御供の今日今宵、合點ゆかずと柩のうち、忍んで樣子を窺ふところ、姿異形の御身こそ、正しく神體に非ずして、人民惱ます魔王の神、出ッくわせたる某こそ、この山内の稚兒あがり、箱王丸も今の名は、曾我の五郎時致と、改名なしたる我まゝ者、神か變化か化け物か、その俗性を顯はすまいか。

トきつと詰めよる。祐經、思ひ入れあつて

祐經　愚かなる凡夫の問ひ事かな。予が神體はこの社、有りと思へば有り、無きと思へば無き神の、心を僞はる現在の旅、殊に汝は河津の次男、今は太郎を後の親、曾我の家名を受けつぎて、五郎時致とはおことよな。たとへ勇力無双にして、いかほど血氣に逸るとも、神力自在の我が五體へ、やはか敵する事あらんや。及ばぬ事、叶はぬ事。

ト思ひ入れ。時致こなし。

時致　事をかしき異人の一言。眞にて逆を打つ。凡夫なれども神ならずや。

祐經　たとへ神と思へばとて、親の敵も討たざる汝、未だ孝道立たざる上は、神體とは云はれまじ。

時致　父の仇には共に天を戴かぬ道理。敵を討たんとこの年月、心を盡せど情なや、今にも敵に逢へばとて、面體知らぬこの時致。何卒敵のその面ざし、知らんが爲に、神に誓つて

祐經　その孝心を感ぜしゆゑ、敵の面體、いま眼前に見知らせくれん。

時致　すりや、時致に敵の面ざし、見知らせんとのたまふか。

祐經　いかにも。其方が孝心察せしゆゑ、この場に於て、敵の面を。

時致　して、その敵の面體は。

ト祐經、思ひ入れあつて

祐經　かゝる闇夜に、ハテ、何をがな。

ト思ひ入れ。この時、風の音、凄き合ひ方、チョンと知らせにつき、正面の杉の間より、葉越しの月現はれる。祐經、思ひ入れあつて、胸に掛けたる神鏡を取つて、あたりに有りあふ供へ物の三方の上へ載せ、これを差出し

五郎ヤイ。
時致　ヤ、なんと。
祐經　今ぞ汝がこの年月、逢ひたい見たいと願ひたる、父の敵の面ざしに、逢うて覺えよ、イザ、立ちよつて。
時致　ドレ。

トさしよつてキツとなり

いづくに敵の面體が
祐經　月は一つ、影は二つ、胸の鏡の月魄に、うつるは卽ち河津が敵、工藤左衞門祐經の
時致　すりや、面體が月の鏡に

ト三方のまゝ、鏡を取つて、下にて覗く。祐經、立ち身にて、斧を杖にして、上より見下ろしてキツと見る。この面影、三方の鏡にうつる思ひ入れ。兩人、キツとなる。岩戶神樂を崩したる誂らへの合ひ方。

月にうつらふ異人の面、これが敵の左衞門に
祐經　似たりや似たり、祐經に逢はせし同然。これ皆汝が孝道の、心を感じて權現の、仰せを受けし予

が面、とくと覺えて、本望達せよ、五郎時致。

時致　仰せにや及ぶべき。日頃逢ひたい見たいと存ずる、敵左衛門祐經の、その面體と思へばこそ

祐經　親を討たれて無念に思ふか。

時致　さん候ふ〳〵。似たと思へば鏡にうつる、異人の面も祐經と、思へば〳〵口惜しい。

ト鏡の中の顏を見詰め、持つたる三方を握りこぼつ。祐經、思ひ入れあり

祐經　天晴れ時致、勇ましゝ。さりながら祐經は、皐月下旬の富士野の狩倉、奉行の役を蒙りあれば
その儀終らぬ其うちに、敵討ちなば養父の難儀。必らずとも早まるな。

時致　幸ひその節紛れ入り、本意遂げんがよき時節。

祐經　その詞、理なくては叶ふまじ。もし狼藉者入りたりと、頼朝守護なす大小名、イデ組みとめんと
群がり立てば

トこの時、後に窺ふ小彌太、彌藏、走りよつて

小彌　怪しい異人。

彌藏　時致、見附けた。

ト彌藏は時致へ、小彌太は祐經へかゝる。立廻りよろしくあつて、二人を引敷き

時致　そのお尋ね至極せり。兄祐成も、某も、本望達する上からは、とても存命望みなく、切り死いたさん身の覺悟。

祐經　尤もさこそあるべき筈。されども狩場の地理案内、知らで叶はぬその大望。予が知らしめん、承れ……皐月下旬の富士野の狩、乾に當つて頼朝の、假家をしつらひ大小名、思ひ／＼の假家の地取り。

時致　して又我れ／＼兄弟が、目ざす敵の、假家はいづれに。

祐經　それぞ御領の假家より、辰巳に當つて庵に木瓜、幕張りあるがよき目當て。

時致　敵左衛門祐經の

ト組みつく二人と立廻りあつて

祐經　假家と心得、切り入れ、時致。

時致　おんでもない事。その時こそ、歩みの板まで、まツこの通り。

ト支ゆる彌藏を見事に投げる。

祐經　孝道立つる兄弟と、知らで警固の諸大名、すはや夜討と木戸々々固め、ひしめかん事疑ひなし。

時致　その時こそは祐成時致、死物狂ひの働らきに、天運叶ふその時は、大祖父伊東が仇敵、御領の假

家へ近よつて

祐經　ヤレ聲高し、血氣の時致、父の敵を討ちおふせば、それにて念願叶ふの道理、無益の刃向ひ理なきに似たり。されども支ゆる輩は、是非に及ばぬ、十番切りと末の世に

時致　その名を揚げんは裾野の狩倉。

祐經　皐月下旬の時到らば

時致　十八年の恨みを晴らし

祐經　成就なさんは眼前たり。

兩人　うぬを。

トかゝろ。立廻りあつて祐經、斧を以て小彌太を見事に打ち倒す。時致は彌藏をキツと締めあげる。

これにて兩人血を吐く。

祐經　アヽ勇ましや

時致　嬉しやなア。

ト兩人は見事にかへり、死ぬ。

して、我れ／＼に何縁あつて、斯くまで詳しく告げ給ふぞ。

祐經　縁はあらねど天帝より、孝心深き汝等兄弟、惠み賜はるその印し、いま改めて遣はす一卷、この
　書を空んじ、兄弟ともに敵を討てよ。
時致　返す〲も異人の敎へ。然らばこの書を空んじて、容易く本望。
　ト懷中より件の三箇の莊の系圖を出して渡す。時致、取つて
祐經　討てよ時致。
時致　イデ、一卷を
　ト開かんとする、この時、向うにて
大勢　ハイホウ。
　ト聲する。時致、キツと見て
時致　あの人聲は。
祐經　汝を搦めん捕り手ならん。とく〱麓へ下山せよ。
時致　して又、御身は。
祐經　予はこれよりも山々嶽々、身は寄るべなき雲水の
時致　流れとあれば、イザお暇。

祐經　勝利を待つぞよ。

時致　ハツ。

　　ト思ひ入れ。向うにて

大勢　ハイホウ。

　　ト聲する。山おろし烈しく、時の鐘。祐經、キッとなつて正面の宮の内へ入る。帳下りる。時致、思ひ入れ。

時致　思ひがけなき異人のしめし、正に常々信心なす、伊豆箱根二所權現の、この時致を憐れみ給ふかさるにても、もし追手に出合ふとも、姿を變へて

　　トあたりに捨てある簑笠を取つて

隱れ簑笠、これ幸ひ。朝日の上らせ給ひなば、この一卷を拜すべし。イザ、急ぎ深山を……さうぢや。

　　ト思ひ入れ。鼓の合ひ方、山おろしになり、時致、こなしあつて、東の歩みを、簑笠かざし、悠々通り、中の間の歩みまで行く。この時、時の太鼓になり、向うより侍ひ三人、いづれも祐經の合ひ印つきし花色絹羽織、小倉の袴、股立を取り、大小。次に奴二人、袷看板、釘抜きの紋附き、柿の手綱染

めの襟をかけ、庵に木瓜の紋附いたる伊達飾りの附きし挾み箱を擔ぎ、次に二人の槍持ち、次に小藤太行氏、祐經の刀を持ち、後より陸尺四人、派手なる拵らへ、挾み箱、乘り物を擔ぎ、後より奴八人いづれも派手なる看板、その外に中間六人、めい／＼疊みし提灯を持ち、足早に出て來り、乘り物は宮の前に舁きすゑる。侍ひ中間、振りわつて並よく左右に別れ

皆々　お迎ひ。

小藤　夜陰の御歸館、路次の狼籍氣遣はしく、罷り越したる小藤太成家。

行氏　かねてのお祈り滿願の、卽ち用意の御乘り物、警固仕つてござりまする。

ト宮の内にて

祐經　兩人大儀。直ぐさま歸館の供いたせ。

ト鼓の合ひ方になり、祐經、烏帽子、熨斗目大紋の下、小さ刀、中啓を持ち、片手に件の異人の鬘と兜巾をかけたるまゝ持ちたる體にて、立ち身、床几にかゝりゐる。行氏、思ひ入れ。

兩人　ハア、。

行氏　かゝる山野に御身をこらし、御行まします御主人の、變らせ給はぬ尊顔を拜し、三郎行氏、いかばかりか、大悦至極に存じ奉りまする。

祐經　富士の根方を巡檢と披露し、心願あつてこの山中、今ぞ滿願、急ぎ麓へ。

行氏　ハツ、仰せに從ひお迎ひのその間、目立たぬやうに灯を遠慮。最早御歸館、いづれも灯を

小藤　提灯照らし、御警固いたせ。

ト庵に木瓜の提灯を一度に差上げる。時致、キツと思ひ入れ。

祐經　然らば此まゝ。

行氏　殿の御立ち。

皆々　ハヽア。

ト對面三重になり、祐經、鬘を持ちたるまゝ、乘り物へ乘る。この途端に鳴り物をかり、時致は歩みより窺ひ〳〵、舞臺へ來る。同勢は乘り物舁きあげ、居並ぶ。時致、ツカ〳〵と來り、供廻りを搔きのけ、乘り物へかゝる。行氏制する。

皆々　お乘り物へ近寄る狼藉。

時致　同勢美々しく殊さらに、紋は庵に木瓜のして、御家名は。

行氏　工藤左衛門

皆々　祐經さま。

時致　ナニ、祐經とや。

　　ト乘り物を目がけ、近寄る。行氏、支へる。

成家　待て／＼。主人に近寄る素丁稚め、狼藉ひろがば小藤太成家、どつけえ、そつけえ、やりやアし
　よねえ。

　　トこの時、祐經、キツと時致を見下ろす。時致、見上げて思ひ入れ。

時致　ヤヽヽ、駕籠の內なる面體は、只今逢ひし異人の面、似寄りは正しく左衛門と敎へありしが、
　矢張り異人が河津が敵

祐經　工藤左衛門祐經なるワ。

時致　すりや、祐經にてありつるか。さは知らずして、やみ／＼と

　　ト思ひ入れ。

祐經　討ち果さずば實父へ立つまい。この場で討たば曾我の難儀と、いま云ひ聞かす詞の如く、異人の
　面によう似た祐經。最前渡せし一卷を、よくも空んじ、後しての參會。

時致　敵と知らばこの一卷、なに其まゝに受くべきぞ。

　　ト思ひ入れ。思はず小口を見て

ヤヽヽヽ、三箇の莊の系圖の一卷。
祐經　元へ戻すが曾我への家土産。
時致　慥かに落手。
ト懷中する。
行氏　系圖は河津へ納まるとも、云はゞ現在一家の曾我どの。
祐經　討たれてくれん契約は、異人と見せし某が、能に用ひしこの鬘、空の頭は即ち首級。直さま汝に
ト件の鬘を差出す。行氏、取つて
行氏　主人の賜物。
ト時致に渡す。
時致　敵の首級とあるからは、この後互ひに出合ふ時は
祐經　予が首取れよ。
時致　おんでもない事。五つや三つの頃よりも、思ひ込んだる左衞門祐經。
ト鬘を引裂く。途端に中より一枚の切手落ちる。時致、取つて
こりやコレ狩場の

祐經　切手やす〳〵本望遂げよ。
時致　云ふにや及ぶ。幸ひ思はず今日今宵
行氏　場所も多きに山中にて
祐經　面體教へんその爲に
時致　出つくわせたる御身こそ
祐經　其方がかね〴〵つけ覘ふ
時致　敵左衛門祐經どの。
祐經　河津が次男箱王も
時致　絕えて久しき
祐經　一家の參會。
時致　思へば〳〵
祐經　五郎時致。
時致　祐經どの。
祐經　ハテ珍らしい

祐時　對面ぢやなア。

奴皆　アリヤ〳〵〳〵

ト時致を棹に取巻き、提灯を上げる。この途端に乘り物を差上げる。中間、時致へかゝるを見事に取つて投げる。木の頭。カケリを交ぜて、よろしく、ひやうし　幕

ト引附けると直ぐに打込み。この鳴り物に習つて、上の方より、六阿彌陀二番長命寺沼田村講中と朱にて書いたる石の傍示と、石の庚申塚を引出し、下の方へ納めると、知らせ。これにて打込み打上げる。「二番目ぢや〳〵」と呼びあつて、シヤギリになり、いつもの通り二番目の人數の呼び、殘らずあつて納める。直ぐに知らせあつて役觸れ。

口上　東西、只今仕りましたる狂言の儀は、御存じ知られましたる通り、建久四年曾我兄弟、敵討ちまでの間。これより年數一ケ年相經ち、建久五年、富士の裾野の本望の後日、お家世話二流れの狂言。役人替名。

ト序幕の役人觸れ殘らずあつて

いよ〳〵この所、第二番目、六阿彌陀道、王子村の場、其ため口上左樣に。

ト入る。

小忌かきシヤギリ打上げ、知らせの木について念佛太鼓、双盤の鳴り物になり、東西より長方の仕出し、六阿彌陀参り、この中へ交り、讀賣二人、評判記の摺り物を持ち、兩方より出て來り

讀賣　所は駿州厚原村、荒人神御利益の次第を御覽じろ。紙代板行代が四文々々。

この人数の中を通り、東西へ別れ入る。矢張り右の鳴り物にて、向うより四つ手駕籠一挺、これに深川の藝者鶴吉、餘所行きの形。おいし、金英樓の女房の形。お豐、輕子の形。松太、八百屋下男の拵らへにて、風呂敷包みを持ち、出て來り

とよ　モシ〳〵、おかみさん、今日は六阿彌陀参りと、王子参りで、賑やかな事でござんすなア。

いし　わたしらもおツつけ年がよつたら、彼岸参りに出ようわいな。そりやさうと、こちの若い者喜八は、どうしやつたぞいな。

松太　あの人は、いま道の居酒屋へ寄りましたが、大方、矢大臣でござりませう。

鶴吉　モシ〳〵、松太さんえ、お前の旦那、半兵衛さん、今日は王子と堅々の約束、なぜ此やうに遲い事でござんすえ。

とよ　ハテ、御如才のない半兵衛さん

いし　大方いまにお出であらう。

鶴吉　そんなら王子の海老屋へ行て、待たうかいな。

とよ　サア〳〵、駕籠の衆、急いでおくれえ。

ト双盤の鳴り物になり、この人數、上の方へ入る。矢張り右の鳴り物にて、向うよりお虎、八百屋の婆、六阿彌陀參りの拵らへ。お千代、女房の形。後よりおさん、下女の形にて、風呂敷包みを脊負ひ出て來り

さん　サア〳〵、阿母樣の例の御氣性、ちつとも早く、お千代さま。

千代　それぢやというて、わたしや草臥れて歩かれぬわいな。

とら　ブラ〳〵しては、六阿彌陀樣を殘さにやならぬ。わしは先へ……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト足早に上の方へ入る。

さん　アレ〳〵、阿母樣は、先へお出でなされました。

千代　はぐれぬやうに、ちつとも早う。

さん　サア、お出でなされませ。

ト右の鳴り物にて、兩人も上の方へ入る。知らせにつき、鰐口の音になり、流行り唄になる。

第二番目 序幕

王子海老屋の場
谷中芋坂の場
根岸行者松の場

役名——古鐵買ひ、彌助。半兵衛母、お虎。八百屋下女、おさん。深川藝者、鶴吉。金英樓女房、おいし。海老屋女房、おさよ。金英樓輕子、お豐。野伏り、庚申塚の嘉十。八百屋丁稚、松太。百足屋金兵衛。轡田檢校伊仙。同手引、丹助。船宿、九右衛門。野伏り、西ヶ原の八兵衛。中間、元助。半兵衛女房、お千代。

本舞臺、三間の間、九尺の亭屋體。向う障子、これに出入りあり、上の方、王子稻荷奉納の石燈籠、庭の入り口、掘拔きの井戸。此うしろ勝手の格子づくり。舞臺よき所に床几二脚ほど直し、すべて王子海老屋のかゝり。幕の内より金兵衛、町人。九右衛門、船宿。おさよ、海老屋の女房。およし、下女にて、酒肴を取亂し、皆々拳を打つてゐる。右の鳴り物にて幕明く。

皆々　ハウハマセイゴウ〳〵スムエ。

ト件の鳴り物にて、向うより轡田検校、丹助の手引に手を引かれ、出て來り

丹助　モシ〳〵、お危なうござります〳〵。

轡田　オツト合點だ。もう王子へ參つたの。

丹助　向うが卽ち、馴染の海老屋でござります。

轡田　そんなら、あれまで、早う參らう。

丹助　サア、斯うお出でなされまし。

ト兩人、舞臺へ來る。おさよ見て

さよ　これは〳〵、轡田検校さま、よう入らつしやりました。

轡田　オヽ、内の内儀か。この間は逢ひませぬ。

九右　手引の丹助先生、お供では又、飲めるな〳〵。

丹助　これは船宿の九右衛門さま、むか金さま、王子へ御參詣でござりまするか。

金兵　先生、お久しぶり。丁度よい、一つ上げませうか。

轡田　そのお聲は、どうやら承つたやうな聲ぢやが。

よし　先生樣、當てゝ御覽じませ。

轡田　當りました。百足屋金兵衛どのでござらうがな。
金兵　こいつは感心々々。サア〳〵、お一つお上がりなされませ。
丹助　私しも一つ頂戴鏡立と洒落ませう。
　　ト杯ごとよろしくあつて、奥にて
喜八　モシ〳〵、おかみさん、どこへお出でなされます。
　　ト喜八、若い者の形。おいし、お豊、出て來り
いし　このマア半じるしさんは、なぜに遲い事でござんすな。
喜八　私しがそこらまで、お迎ひに行きませうか。
　　トこの時、金兵衛、喜八を見て
金兵　さう云ふおぬしは、金英樓の喜八ではないか。
喜八　旦那、今晩は、定めて船なら、私しどもの方へお出でござりませう。
金兵　云ふにや及ぶ。ずい行き〳〵。時に、今日はお内儀と二人か。
いし　イエ〳〵、今日はさるお客樣の仕舞ひで、鶴吉もこれへ參りました。
九右　して、その客人は、

喜八　ハイ、只今後からお出でござります。

金兵　そいつは奇妙。客人の來るまで鶴吉を、ちよつとこれへ呼んでくれ。

とよ　畏まりました……モシ〳〵、鶴吉さん〳〵。

ト奥にて

鶴吉　アイ〳〵、只今參じます。

ト云ひながら出てくる。

さよ　左樣なら、お前樣は、お馴染でござりますかえ。

いし　鶴吉、金兵衞さんがお出ぢや。御挨拶申しや。

鶴吉　ハイ……金兵衞さん、ようお出でなされました。

金兵　どうだ鶴坊、いつも御盛んだな。

九右　成る程、なか金さんが熱くなるのも尤もだわえ。

金兵　サア、それゆゑ、源太ではないが、夜毎々々に通ふが、今に靡かない。なぜおぬしは、おれを惡しくする。

鶴吉　お前さんを惡しくする譯ではござんせぬが、お前も知つて居なさんす、八百屋の半兵衞さんの仕

舞ひで、毎日々々の居續け。今日も今日とて王子參り。
轡田　して見れば、誰れが目も違はぬもの。いゝ女だ。
よし　モシ〳〵、檢校さん、お前さんにも、好い惡いが知れますかえ。
丹助　ハテ、おれの旦那は勘がいゝから、女の好い惡いを知るのは奇妙だ。
轡田　それぢやによつて、この間中より、小雛といふいゝ新造があるゆゑ、度々呼べど、男嫌ひで、わしを一向寄せつけぬ。どうぞあの小雛を、手に入れたいものぢやが。
とよ　モシ〳〵、先生さん、それは幸ひの事でござります。その小雛さんとやらは、二三日のうち、判人の大磯屋傳三さんの世話で、金英樓へ住替へに參ります。その時必らず入らつしやりませ。
轡口　そいつは奇妙。出たら早速知らせて下さい。是非おれが手に入れねばならぬ。
さよ　ほんに、その小雛さんとやらは仕合せ。先生さんの事なら、早速好い御相談もござりませう。
金兵　イヤモウ、氣にさへ入れば、早速身請け。ナア、御坊。
轡田　金でゆく事なら、親子兄弟ともに、捨てゝは置きませぬ。
喜八　あの小雛さんの親は、無いさうでござります。
いし　慥かあの子は、兄さんが、本所中の鄉で、古鐵買ひの彌助とやら申すさうでござります。

とよ　早くその彌助さんに掛合ひ、身請けの御相談をなされますやうに、致したう存じます。

いし　ほんに、身請けと申せば鶴吉も、近いうちに八百半さんの方へ、身請けされて參る筈でございます。

九右　ヤア、アノ鶴吉を半兵衞の方へ身請けされては、金兵衞さん、お前、それでは

金兵　ハテ、其やうに騷ぐ事はない。半兵衞のしみつたれが、ナニ身請けが出來るものだ。この鶴吉はおれが身請けして、金兵衞さまの御新造樣。ナア、鶴吉。

ト思ひ入れ。

鶴吉　有り難うござりますが、わたしはちつと

金兵　身に願ひと、古風な事を云はずと、おれが云ふ事を聞けば、まづ當時、ちよつとした新道へ、黑塀造りの圍ひ者とはどうだ。

九右　イヤ、その新道で思ひ出した。私しどもの新道に、女の手習ひ師匠がありますが、眞面目な面をして、騙りをするさうだが、女にも、太い奴があればあるものサ。

禪田　それより太いは八百屋半兵衞とやら。いま聞いてゐれば、金の無い癖に、この鶴吉を身請けとは

丹助　ほんにお臍が

喜八　茶にした話しだ。

よし　座敷を變へて

轡田　飲み直さうか。

九右　そんなら百足屋。

金兵　おれは鶴きに

ト思ひ入れ。

轡田　ハテ、未練を云はずに

皆々　サア、ござりませ。

ト流行り唄、鰐口の音にて、金兵衛、轡田検校、丹助、九右衛門、およし附いて奥へ入る。鶴吉、おさよ、おいし、お豊殘る。この鳴り物なかりて、向うよりお千代、おさん、以前の形。跡より嘉十、菰を着たる非人の拵らへにて、附いて出て來り

嘉十　お通りの旦那方、御新造樣、御報謝お願ひ申します／＼。

さん　今もあれほど遣はしたに、しつこい物貰ひ、附きやるな／＼。

千代　ハテ、其やうに云はずと、手の内を遣りやいなう。

さん　御新造樣が、あのやうに仰しやるゆゑ、また遣はすぞ。もう附くな〳〵。

ト巾着より錢を出してやる。

嘉十　彼岸の御功德、御新造樣、有り難うござります。

トお千代をヂッと見てゐる。

さん　彼岸と申せば、このマア阿母樣は、どこでおはぐれなされましたやら。

千代　それいなア、もうお出でなされさうなものぢやが。

さん　併し、この道より外、紛ふ道はござりませぬ。何にも致せ、あの海老屋へ行て、お待ち申しませう。

ト嘉十を見て

このマア物貰ひは、御新造樣のお顏ばかり見て、氣味の惡い。早う行きや〳〵。

嘉十　ハイ〳〵、參じます〳〵。

ト云ひながら、お千代をヂロ〳〵見て、下座へ入る。

千代　コレ〳〵、おさん、今の物貰ひは、何ぢややら氣味の惡い」

さん　お前さん、お頭の物を御用心なされませ。この人込みでは、物騷でござります。

千代　物騒と云へば、この間、お家主様をお頼み申し、家藏を書入れ、内々お借り申した五十兩の金も、
内へ置くが不用心ゆゑ、見や、阿彌陀樣へ參るにも、此やうにして居るわいな。
ト懐より五十兩の金を出して見せる。
さん　滅相な。大枚五十兩の金子、これまで持つてお出でなされましたか。隨分大切になされませえ。
何にも致せ、海老屋へ行て
千代　母さんのお出を待たうかいな。
さん　それがよろしうございます。サア、お出でなされませ。
ト兩人、舞臺へ來る。おさよ見て
さよ　これは〳〵、お久しぶりでござります。今日は六阿彌陀御參詣でございますか。女中さん、お前
もお草臥れでござりませう。マア〳〵、これへお掛けなされませ。
さん　お構ひ下さりますな。御新造樣、お掛けなされませ。
千代　左樣なら、どなたも御免なされませ。
ト兩人、床几へ腰をかける。
鶴吉　私しどもに御遠慮はござりませぬ。

皆々　御ゆるりと御休息なされませ。

とよ　ほんにわたしは最前より、いろ〳〵の事で忘れて居りました。海老屋のおかみさん、どうぞこの手拭をお稲荷様へ、お納めなされて下さりませ。

ト杏葉菊と抱き柏の比翼紋、深川金英樓内鶴吉、と染めたる納め手拭を大分出す。おさよ取つて

さよ　ハイ〳〵、畏まりました。後ほど納めますでござりませう

ト此うちお千代、囁く。おさん、呑みこみ、おさよの袖を引き

さん　モシ〳〵、おかみさん、あのお客様方は、どなたでござんすえ。

さよ　皆さんは、深川金英樓のお方でござりませう。

千代　そんなら噂に聞いた金英樓の……イヤ、どなた様も、ろく〳〵御挨拶も申しませぬ。今日は、よう御參詣なされました。

いし　お前さん方こそ、よう御參詣。見ましたところが、まだお若い女中さん

鶴吉　阿彌陀様へお參りなさるとは、御奇特でござんすな。

いし　して、お前さん方はえ。

さん　ハイ、私しどもは、淺草山谷でござります。

千代　見受けましたところが、流石は色町の女中さん、くつきりとした藝者衆。そんならお前が全盛の

さん　旦那のお馴染、鶴吉さん。

千代　コレ……お茶を一つおくれなされませ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より松太、捨ぜりふ云ひながら出て來り

松太　エヽ、いま／＼しい。おればかり座敷へ置き、なぜ爰へ來てゐる。其やうにわしを安くする事はない。今日一日は、八百屋半兵衛の名代ぢやぞ。

ト思ひ入れ。おさんお千代、松太と顏見合せ

さ千　ヤ、わが身は、松太ぢやないか。

松太　ヤア、お前はおかみさん、おさんどのか……南無三、身の上の大事とこそはなりにけり。

さ千　何を云やるぞいな。

喜八　そんなら、お前さん方は

いし　山谷の八百屋、

さよ　半兵衛さんの

鶴吉　お内儀さんか。

いし　モシ、ゆるりとこれに。

皆々　サア、お出でされませ。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。お千代おさん、松太残つて

千代　コレ／＼、松太、爰へ半兵衛さんが御一緒かや。

松太　イエ／＼、旦那さんは、一緒ではござりませぬ。

さん　あの衆達のござるに、旦那さんの一緒でない事があるものか。隠さずと、ほんまに云うて聞かしや。わしが好い物を買うてやりますぞや。

松太　そんなら、云ひませう。旦那様は今方、染井のお屋敷に行かれました。わしに、あの衆達と、爰で待つてゐろと申されました。奥に居りましたが、私しは硯蓋の鮑も慈姑も、摘んで食ひは致しませぬ。御免なされまし／＼。

千代　其やうな事を訊くのではない。旦那どのは染井のお屋敷へ、何の用で行つたのぢや。

松太　サア、その用は、今あれに居た、鶴吉といふ藝者を身請けしたいが、百両といふ金が無いゆゑ、その工面に、お屋敷へ行かれました。

さん　ヤアノヽ、あのむづかしい母御様のあるに、見世の代物、仕込みまで、女房のお前さんに任せ、よい機嫌らしい、毎日々々深川通ひ。その上、大枚百兩といふ金を出して、藝者を身請けなさる事が、母御様のお耳へ入つたら、大抵の事ではござりますまい。

松太　そりやモウ忽ち、半兵衛さまは梵天國。おかみさん、なんぞ料簡はござりませぬか。

千代　サア、互ひに云ひ交した上からは、今さら變更へせぬは、こちの人の氣性。其やうな事もあらう端ナ、母さんに隱して、拵らへて置いた五十兩の金で、主の顏の立つやうに

さん　そんならお前さん、その金で

松太　ハテ、男思ひの事ぢやな。

ト思ひ入れ。下座より元助、中間の形にて、状箱を持つて出て來り

元助　モシ、物が尋ねたうござる。わしは田舍者ゆゑ、道が不案內。この王子へお使ひの次手に、淺草の山谷とやらへ行きたうござるが、どう參りませう。

さん　ハイ、その道は、もそつとお出でなさると、細い川がござります。それに附いて眞直に行て、又お訊きなされませ。

元助　それを行けば、山谷町へ行かれますか。それは忝い。

千代　モシ〳〵、お前さん、山谷は、いづれをお尋ねなされます。
元助　わしは八百屋半兵衛と申す人の所へ行きます。
千代　それでは千葉の御家中、出石宅左衛門さまの、お使ひでござりませう。
元助　こりや魂消申す。こなたは、どうして知つてござる。
松太　そりやその筈の事、八百屋半兵衛さんのおかみさんだものを。
さん　モシ〳〵、お前さん、これからお出でなさるのも餘程の道、苦しうなくば、このおかみさんに、お渡しなされませ。
元助　それは幸ひ。お内儀とあれば間違ひもござるまい。然らばこのお手紙、半兵衛どのへ届けて下さい。
ト状箱を出して渡す。
千代　私しが慥かに受取り申しました。
ト一通を取つて懐中する。
元助　これでわしも、足が助かりました。
トこの時、七ツの鐘鳴る。

さん　ありやモウ七ツ。この阿母様は、何をしてござるやら。
千代　コレ〳〵、松太、其方は旦那どのゝお迎ひに行かぬか。
松太　畏まりました。
元助　そんならおれも、道まで一緒に。
松太　ドリヤ一走り、行て参じませうか。
　ト時の鐘、流行り唄になり、松太元助、向うへ入る。あと合ひ方になり、兩人こなし。お千代、件の一通を見て
千代　此お手紙を見れば、八百屋半兵衛どのへ、出石宅左衛門とあるが、こりや正しくいつぞや、紛失と聞いたお家の寶、月星の畫像の行くへ知れねば、半兵衛さんのお主筋たる、宅左衛門さま御親子の、身にもかゝはる一大事。どうぞして寶を手に入れ、こちの人に忠義を立てさせたら、その義理で、惡所通ひも遠ざかる道理。
さん　私しもお家に御奉公いたし、何か樣子を見まするに、旦那樣へ貞女のあなた。それに引かへ、邪慳な阿母樣。
千代　サア、あれも本の母さんではない。わたしが誠の親達は、安達の御家中、笹野三太夫さま。わし

が少さい時、母さんに別れたゆゑ、少しの縁で引取られ、育てゝ下さんした八百屋の母さんも、御病死なされ、その跡へ、今の母さんは雇ひ奉公、いつの間にやら八百屋のお内儀。仁右衛門さまも去年御病死、便りないわたしが身の上。弟の權三は、親の敵も討たず、行くへ知れぬとの事。女ながらも父さんの敵、どうぞ討ちたいこの身の願ひ。

さん　ほんに、お痛はしいあなたのお話し。世にはいろ／＼な事があるもの。私しは父、尋ねまする男がござりますれど、今に在所が知れませぬ。

千代　そりや大方、云ひ交した男であらうが、もう餘程めぐり逢はぬか。

さん　ハイ、斯うぢやによつて、餘程久しく逢ひませぬ。

ト指を折つて思ひ入れ。お千代、おさんの指を見て

千代　ソレ、其方の小指は、切れてあるぢやないか。

さん　エ…………サア、仔細ござりまして

千代　して、その仔細は

さん　サア、どうもお恥かしながら

ト思ひ入れ。この時うしろに、嘉十、以前の形にて、下座より出かゝり、お千代に見惚れてゐて、こ

の話しを聞き
嘉十　エヽ、羨やましい。
　　ト思ひ入れ。これにて兩人悧りして、ちやつと飛びのき
兩人　ヤヽ、其方は先刻の物貰ひ。
さん　アタしつこい。あれ程お錢をやつたに、まだそこに居やるか。早く行きや。
嘉十　どうも行かれませぬ。
さん　ほんに困つた事ではあるぞ。
　　ト此うち下座より八兵衞、親仁の非人にて出かゝりゐる。
　早く行かぬと、これぢやぞ／＼。
　　ト有りあふ竹にて叩き立てる。八兵衞、前へ出て
八兵　モシ／＼、マア／＼、御料簡なされ。……この男は、まだ行かぬか。旦那方へ對し、不躾な、早
　う行け／＼。
嘉十　どうも行かれませぬ／＼。
　　ト矢張りお千代を見てゐる。おさん見て

さん　コレ〳〵、この物貰ひは、狂人ではないかえ。

八兵　イエ〳〵、なか〳〵左樣な者ではござりませぬ。これには、いろ〳〵な譯合ひがござります。

千代　狂人でもなく、此やうにしてゐる、して、その仔細は。

八兵　サア、その仔細は、此奴が口からは、どうも申されますまい。私しがその譯を申しませう。眞平御免なされませ。

トお千代の側へ寄り

この男は、まだ仲間の新米でござりますが、しかも後の月、あなた樣が、觀音樣へ御參詣なされた時、此奴にお手の內をおやりなされましたを、その時から、恐れ多い、旦那方の御新造樣に惚れて戀病。あなた方がお通りなさるを見て、狂人のやうになり、附いて參じました。とても此奴は、今に病死いたします。爰に一つのお願ひは、近頃申しかねますが、おあがりなされた杯を、捨てる心で此奴に、獻して遣はさつて下さりませ。それでこの者が病氣も直ります。誠にそれが彼岸のうちの、御功德でござります。どうぞお願ひ申しあげます。

ト此うち嘉十、さし俯向いて思ひ入れ。おさん、こなしあつて

さん　賤しい非人、其やうな事は、思ひもよらぬと申すところなれど、非人ながらも優しい心に免じて

御新造樣へお願ひ申して遣はすぞ………お聞きの事なれば、お否でもござりませうが、どうぞお杯を

千代　わたしがやうな者を、それ程に思うてくれるは、非人ながらも嬉しい心底。その心に免じて、その杯を

八兵　左樣なら、お杯を下されますか。コレ、われはあやかり者。喜べ／＼。

ト嘉十、嬉しき思ひ入れ。此うちおさん、杯を取つて出す。お千代、取上げる。おさん、酌をして、嘉十に獻す。嘉十、一つ飲んで嬉しき思ひ入れ。八兵衞見て

非人の手に觸れましたこの杯、お貰ひ申して參じます。

トこれを聞いて嘉十、件の杯を持ち、よろしく思ひ入れ。

千代　ほんに、見かけによらぬ、優しい心でござんすな。

さん　これもどうした因緣やら、世に珍らしいこの杯

八兵　耆婆扁雀の藥より、此奴が爲には大妙藥。

千代　本復したなら、また其うち

嘉十　御報謝よりは、ちよつとあなたを

ト お千代の側へ寄らうとする。おさん隔てゝ

さん　モシ、斯樣な所に長居は恐れ。

八兵　私しもお暇申します。

千代　そんなら奥で

さん　御新造樣。

嘉十　もうお別れか。

ト思ひ入れ。

千代　必らずともに

嘉十　エ。

さん　無事で居やれ。

ト唄になり、お千代の手を取り、兩人奥へ入る。八兵衛は向うへ入る。嘉十、名殘をしげに跡を見送つてゐる。てんつゝになり、向うより彌助、古鐵買ひの拵らへにて、荷を擔ぎ、出て來り

彌助　古鐵買はう〳〵。まだ屑は溜りませぬか〳〵。

ト呼びながら舞臺へ來て、兩人顏見合せ

嘉十 ヤ、わりや彌助ではないか。

彌助 嘉十郎。こいつは堪らねえ。

ト逃げようとするを引ッ捕へ

嘉十 イヤ／＼、逃がしはせぬぞ／＼。われに逢ひたくてゐたところだ。

彌助 おれに逢ひたいとは、そりや何の事。わいらがやうな非人に用は

嘉十 無いとは云はさぬ。コレ、よう聞けよ。一昨年の冬、おぬしが頼みで、笹野三太夫といふ侍ひが百兩の金を持つてゐるによつて、その金を取つてくれ、もし手に餘らば、殺しても大事ないと云ふゆゑ、宿場人足になつて、たうとうその三太夫を殺し、金を取り、おれに大骨を折らせて、分け前もくれぬ。今日は是非とも、譯を附けてもらはにやならぬぞ。

彌助 ヤイ／＼、爰は諸人の入込む所、滅多な事を云ふな。おれは其やうな覺えはないぞ。

嘉十 覺えないとは云はさぬ。その證據は、コレ爰に。

ト懐より手紙を出して見せる。

彌助 ヤア、その手紙は。

嘉十 「密々に申し入れ候ふ、我れら主人三太夫こと、箱根山寄附の金子百兩、持參いたし、當二十

五日、鎌倉を出立いたし候ふ、同道は忰權三、さすれば一人にて參りかね候ふ間、貴公樣その節、海道に待ちうけ、人足の體に見せ、足場よき所にて、權三をやり過し、貴公と我れらにてその金を奪ひ、分取りに致したく候ふ、この段内々頼み入り候ふ、後にて手紙は火中下さるべく候ふ、以上、嘉十郎どのへ、彌助――…………なんと動きは取れまいがな。

彌助　サア、それは。

嘉十　但し、分け前を寄越すか。

彌助　サ、その金は。

嘉十　無いと云へば此方も自棄無茶。どうでおれもブラ〳〵病ひ、死ぬならわれを未來の道連れ。この手紙を持つて、彌助と申す者、人を殺し、百兩の金子を取りました、その時の相棒りは私してござると、おれが身を捨て、訴人をせうか。

彌助　サア、それは。

嘉十　分け前寄越すか。

彌助　サア、その金は。

嘉十　サア〳〵、どうだ。

彌助　成る程、今までおぬしに分け前やらぬは、おれが悪かつた。併し、てまへもおれも、話し合つて見れば、あんまり退いた仲でもあるまい。其やうに手ひどくいふ事はないわい。

嘉十　成る程、おれもおぬしに勸められ、あの出石宅左衛門とやらいふ侍ひの内へ、夜盜に入つた事もあつたな。

彌助　それ〳〵、久しい跡の事よ。その時てまへは、内の娘を一人でなぐさみ、おれに指を咬へさせた事もあつたぜ。

嘉十　その時はおれも、八右衛門といふ百姓の息子、数へて見れば二十年も跡の事。その時、娘が喰ひついた指はこの通り。その女も、世間の噂が恥かしいかして、屋敷を駈落ちとの事。

彌助　そこの内に、小さな餓鬼があつたが、今では成長して、出石千太郎とやら。廻り〳〵て、おれは笹野三太夫へ中間奉公。矢ツ張り心が直らぬゆゑ、主を殺して取つた金、殘らず三ツ石の極印。詮議が強いから遣はれぬといふは、これも天命。なんと恐ろしいものではないか。

嘉十　ハテ、それはおぬしが廻り合せといふもの。おれは、その時の分け前は、取らにやならぬぞ。

彌助　それだといつて、爰には金が

嘉十　そんなら金の出來るまで、代物でも預けてくりやれ。

彌助　代物といつたところが、何も無いが、爰に千葉家の重寶、天國の短刀と、月の畫像といふ物がある。この掛け物は、大金になる代物。賣り口の出來るまで、おぬしに預けて置くワ。

ト渡す。嘉十見る。此うち後に金兵衛出かゝり、窺ひゐる。

嘉十　なんだ、こんな物。金になるかは知らぬが、どうやらおれには解らぬ。それより手短かに、金になりさうな物を預けてくれっ

彌助　よくいろ／＼な事を云ふ男だ。そんなら爰に、いま買つて來た、がた／＼丸の脇差が一本。これでもよくば預かつて置きやれ。

ト古き脇差を渡す。嘉十、よく／＼見て

嘉十　これが何になるものか。もつと何ぞ預からう。

彌助　預ける物はもう無い。それで料簡してくれ／＼。

嘉十　イヤ／＼、この位な事では料簡ならぬ。そんなら矢ツ張り、この手紙を持つて代官所へ

彌助　これサ、どうぞ料簡を

嘉十　イヤならぬ。

ト兩人爭ふ。この時、金兵衛、中へ入り

金兵　コレ〳〵、古鐵買ひと菰ツかぶり、何を爭ふのだ。

彌助　ヤア、お前は百足屋の金兵衞さん、どうして爰に。

金兵　サア、聞いて下され。三ツ石の極印打つた金を遣ひ、その科で鎌倉を御追放。今では江戸へ來て矢ツ張り質屋商賣サ。

彌助　ヤア、そんならあの金で……ハテ、それはお氣の毒な。

金兵　時に、お菰と貴樣の爭ひは。

嘉十　旦那樣、お聞きなされて下さりませ。世にある時、この人に貸しがござります。

彌助　それを今返せと云ふゆゑ、わしも困るから、代物を預けてやりましたが、それでも料簡せぬゆゑの爭ひでござります。

金兵　それで樣子が解つた。こなたも菰かぶりに借りがあつては濟むまい。金はおれが貸してやるから早く方を附けてやるがよい。

ト紙入れより三兩出して渡す。彌助取つて

彌助　お馴染とて、さしかゝつた難儀、お救ひ下され、有り難う存じます。お禮は後で……サア、嘉十郎、この金を三兩に、その代物を預かつて置いて、後金が出來るまで待つてくれ。

嘉十　イヤモウ、少しでも、正直の金が手に入れば、此方も心よいといふもの　先刻から惡口したも、
金が欲しいゆゑの事。腹も立たうが、堪忍してくれ〳〵。

彌助　男は當つて碎けろとやら、これで双方

金兵　仲よくして、てまへも早く、足でも洗ふがよい。

嘉十　有り難う存じます。何も申しますも、この間は病氣ゆゑ

彌助　ヤレ〳〵、それは難儀であらう。殊にはその身の上。ハテ、なんぞよい……………オヽ、これはさ
ろお醫者樣より、下された萬金丹、外の藥を服まずと、これを服んで、早くよくしやれ。

ト件の藥を出す。

嘉十　それは忝い。そんなら外の藥を服まず、こればかり服むのぢやな…………金兵衛さまとやら、
何かとお世話樣でござりました。

彌助　そんなら預けた代物は

嘉十　慥かに預かりました。早速後金出來たなら、大勢ではござりませぬ、たつた一人のこのお孤に、
取らせてやつて

彌助　ヤ。

嘉十　下さりませう〳〵。

ト時の鐘、合ひ方になり、嘉十、こなしあつて向うへ入る。兩人、捨ぜりふ云ひながら、跡見送つてゐる。この時金兵衞、嘉十が落したる手紙を拾ひ、中をちよつと見て

金兵　この手紙は、いま話しの、むづかしい一件の………あのお孩が落して行つたか。

彌助　モシ、それは大事の手紙。どうぞ此方へ

金兵　ハテ、此方も大事の金を貸したからは、これは當分、三兩の抵當サ。

彌助　ヤア、そんならその手紙を。ハテ、如才のない金兵衞さん。

ト思ひ入れ。この時、後へ轡田檢校、探り〳〵出て窺ひゐる。

金兵　時に、いま聞いてゐれば、天國の短刀とやら、折紙あるとも、そこに持つてゐるさうだが、いゝ賣り口が出來たか。

彌助　なにサ、大枚の代物ゆゑ、賣り口も急にはござりませぬ。どうぞ早く金にして、それを元手に、古鐵買ひの彌助も、一株ありつきたうござります。

トこの時、轡田檢校、探りよつて

轡田　ハヽア、そんならお前が、吉原に居る小雛が兄の、彌助といふ人ぢやな。

彌助　ハイ、私しは小雛が兄の、彌助でござります。して、お前様は。

轡田　わしは轡田伊仙と申して、御大家方へお出入り致す、盲人でござる。

彌助　その檢校さまが、私しと小雛と同胞とは、どうして御存じでござります。

金兵　ハテ、そこが蛇の道は蛇とやらで、この先生樣は小雛が一の客。それで大方御存じであらう。

轡田　お話し申すも面目ござらぬが、小雛には屬魂惚れてゐますが、今にどうも靡きませぬ。御舍兄の威光で、靡きますやうにお頼み申す。事によれば身請け致し、宿の妻とも致す存念。さうなる時は貴公も、其まゝでは置きませぬ。何卒お取持ち下されませう。

彌助　何がさて、同胞出世とござりますれば、お取持ち致さいでなんと致しませう。

轡田　それは忝い。時に只今承れば、天國の短刀とやら御所持との事。手前出入り屋敷で、その短刀をお望みなさるが、なんと口入れ致して進ぜませうか。

金兵　成る程、これはようござりませう。先生ならば先方へ、掛合ひ方が猶早うござる。その短刀を預け、賣り口を聞いてもらふがようござらう。

彌助　思し召しは、有り難うござりますが、大枚の代物なれば

金兵　ハテ、今も申さるゝ通り、小雛を身請け致さうといふ大盡、何が間違ひござりませう。

轡田　それとも御胡亂に思はつしやるなら、此方もお斷わり申す。

彌助　イエ／＼、其やうな事ではござりませぬ。私しも、早く金に致したい事なれば、どうぞお願ひ申します。卽ちこれが短刀、折紙でござります。

ト件の二品を轡田檢校に渡す。

轡田　二品とも、慥かに預かりました。

金兵　その品を、先生に預ければ大丈夫。今の菰ッかぶりにも、大事の繪を預けたではないか。

彌助　ハテ、彼奴に預けて置くも、大丈夫でござります。

兩人　そりや又なぜに。

彌助　今の乞食めが、病氣と聞いたゆゑ、深切ごかしに藥をやつた、ありや大毒藥。服むと忽ちコロリ往生、その後へ廻つて、今の金も畫像も取返す私しが狂言、なんと巧いではござりませぬか。

金兵　成る程、聞けば聞くほど

轡田　怖い男だぞ。

彌助　先刻から餘ッほど隙がいつた。ドリヤ、そこらを廻つて參じませうか。

ト荷を擔ぎあげて

左樣なら何分、賣り口をお賴み申します。

轡田　オット合點、併し、賣り口無い時は

金兵　堪忍信濃の善光寺。

轡田　嘘を築地の御門跡。

金兵　なんと、この洒落は

彌助　古い／＼。古着買はう／＼。

ト時の鐘、合ひ方になり、呼びながら彌助、下座へ入る。あと兩人、こなし。

轡田　まんまと首尾よく彼奴を騙し

金兵　その二品を預かつて

轡田　折紙は似せ物をさせ

金兵　誠の折紙は此方へ捲きあげ

轡田　短刀も似合ひの品と摺りかへて

金兵　相談出來ぬと彼方へ返し

轡田　誠の品は屋敷へ賣つて

金兵　金は二人で山分けに
轡田　もしやその事、彼奴が聞いて
金兵　ごたつきかゝるその時は
轡田　今の手紙で訴人と云へば
金兵　ギウとも云はず、青菜に鹽。
轡田　天晴れ妙計。
金兵　コレ、祕すべし／＼。

ト思ひ入れ。この時、奥にて

丹九　否だ／＼。なぜおいらを、そんなに安くしやアがる／＼。

ト云ひながら、丹助、九右衛門、出てくる。

轡田　丁度よい所へ家來丹助。サア／＼、歸らう／＼。
丹助　ナニかへる。盲目の玉子ぢやアあるめえし、かへるとも勝手にするがいゝ。おらア盲目の手は引かない。
九右　盲目手引き物に怖ぢずと、今から吉原と洒落べい。

丹助 それがいゝ。サア〱、來やれ〱。

ト兩人、醉つたるこなし。無駄を云ひ〱、向うへ入る。

金兵 彼奴等は惡い酒だぞ。

權田 コレ〱、おれを一人置いて、どうする〱。

金兵 丹助ヤイ〱、これは困つたぞ。

權田 どうも仕方がない。金兵衞どの、わしを一緒に連れて行て下され。

金兵 それなら、おれがこなたの手引になるのか。

權田 どうぞ、御苦勞ながら

金兵 こいつは、とんだ目にあふものだ。

ト時の鐘になり、金兵衞、權田檢校、向うへ入る。右の合ひ方になり、奥よりお千代、おいし、出て來り

千代 只今奥にて申しました通り、お前の抱へなさんした、あの鶴吉さんとやら、こちの人の氣に入つた女中さんと、かね〲聞いて居りましたゆゑ、いつぞはと思うて居りましたが、今日逢うたが深い御緣。どうぞわたしが身請けして、圍うて置いて進ぜたいと思ひます。して、身の代わえっ

いしハイ、鶴吉が身の代は、百兩でござります。

千代そんなら、爰にわたしが内證の金が、五十兩ござります。どうぞこれを手附けに、取つて置いて下さりませ。

ト懷より最前の五十兩を出して渡す。此うち鶴吉おさん、出かゝり窺ひゐる。

いしイヤモウ、お内方樣が、御悋氣もなされず、御身性合ひの事を思うて、其やうな事は間々ある事。左樣なら、あの鶴吉を差上げませうが、私しは女の事、印形もござりませず、手附け證文とても、

千代ハテ、それには及びませぬ。お前も金英樓のお内儀さん、口約束も明日の朝まで、間違ひもござりますまい。

いし左樣なら明日、手附け證文を、早速持たせて差上げませう。

千代後金次第で、直ぐに身請けも

トこの時、鶴吉、前へ出て

鶴吉最前より何かの樣子、承つて居りましたが、お内儀樣の思し召しは、有り難うは存じますが、それではどうか、お前へ私しが濟みませぬ。

千代　ハテ、亭主の氣に入つたお前ゆゑ、わたしが身請けを

鶴吉　それぢやというて

ト　おさん出て

さん　あのやうに云はしやんすも、野暮なお方ではなし、持ち前の御氣性から。ハテ、まんざらのお方ぢやないわいな。

鶴吉　左樣なら、お詞に甘へまして

いし　この上ながら、何かとよろしう。

さん　奥底なしに打解けて

千代　この子はわたしが妹分。

鶴吉　そんならわたしを…………エヽ、有り難うござります。

ト　思ひ入れ。この時、奥より、おさよ、お豐、およし、喜八出る。

さよ　どなたもマア、御ゆるりとなされませ。

とよ　今日はお世話になりました。どうやら曇つて參りました。

喜八　それゆゑ、駕籠を雇ひに行きましたが、みんな出拂つて、やう／＼一挺參りました。

さん　日は暮れかゝる。どうやら雨が降りさうな。

千代　その上、駕籠が無いとあれば、こりやどうしたらよからうぞいな。

さよ　お傘をお持ちなされませ……コレ、およし、その傘を持つて來な。

よし　ハイ〳〵。

ト海老屋の番傘を持ち出して、おさんに渡す。

さん　傘はお借り申しませうが、この位な事では、お前樣のお召し物が濡れませう。幸ひ〳〵、爰に阿母樣の懷中桐油がござります。これをあなた、召しませぬか。

ト包みの中より、桐油を出して見せる。

千代　それぢやというて、桐油をわたしが

さよ　ハテ、夜に入りましては、恥かしい事はござりませぬ。桐油をお召しなされませ。

千代　夜に入ると云へば、このマア母さんは、どうなされましたやら。

さん　なんにも致せ、暮れぬうち、根岸通りを參じませう。

ト兩人、高からげ、身拵らへ、跣足になり、傘を持ち、思ひ入れあつて

千代　そんなら深川のお内儀さん。

いし　明日、今の證文は

鶴吉　必らずともに、お前さんにも

皆々　御機嫌よろしう。

さん　左様なら、どなた様も

千代　お先へ參じまする。

ト入相の鐘、流行り唄になり、お千代おさん、向うへ入る。舞臺の皆々、あと見送り、思ひ入れ。件の鳴り物にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、卒塔婆を結ひ込んだる寺の藪垣。爰に九右衛門、丹助、以前の形にて、草履を持ち、腕まくりして、雨舎りの體。すべて根岸のあたり、夜の景色。雨車、時の鐘にて、道具とまる。

九右　なんと、べら坊に降つて來たではないか。

丹助　それサ、傘を買ひたいには錢が無し

九右　どこぞで借りようにも馴染が無し、こいつは詰まらぬわえ。

丹助　ハテ、其うちには止むだらう。昔、太田了竹といふ人の歌に、急がずば濡れもしまいにお旅人、後
御無心ながらお火を一つと、

九右　旅人もちやつと身構へて

ト淨瑠璃を語る。

丹助　何を云ふのだ。

ト兩人、藪際に立ちかゝつてゐる。雨車、時の鐘になり、向うよりお千代、前の桐油を引ッかけ、後よりおさん、風呂敷を肩へ着て、兩人、傘をさし出て來り

さん　モシノヽ、辷ります。お危なうござりますぞえ。

千代　このマア母さんは、何をなされてござるやら。

さん　大方、道で雨舍りしてござりませう。ちつとも早う歸りまして、迎ひに人を出しませう。

千代　それがよからう。其方も危ないぞや。

ト兩人、捨ぜりふよろしく、舞臺へ來る。九右衞門、丹助　囁き

兩人　二人の姐さん、待ちなせえ。

ト出るゆゑ、兩人、恟りして

千さ　エヽ、お前方は、

九右　ハテ知れた事、この海道に網を張り、こなた衆の來るのを待つてゐたワ。

千代　エヽ、そんならお前方は

さん　お泥坊さんかえ。

丹助　其やうな者ではない、雨舍りサ。

九右　見れば、美しい女中が二人。

丹助　丁度此方も男が二人。

九右　どうぞ、その傘の中へ、入れてくんなさい。

さん　お易い事ではござりますが、私しどもは、道を急ぎますれば

千代　どなたも、ゆるりと止めてお出でなされませ

ト兩人、行かうとする。

丹助　其やうに云はずと、入れて下さい。

九右　相合傘で濡れたい〳〵。

トしなだれかゝる。

千さ　アレ、惡い事をなされますな。

兩人　こいつは堪へられぬ。

ト縋りつくを振り放し

千さ　アレ、誰れぞ來てくれぬかいな〳〵。

兩人　これサ〳〵。

ト逃げるを追ひ廻す。右の鳴り物にて、向うより嘉十、以前の形、安下駄を穿き、紋提灯をともし、出て來り、この體を見て、有りあふ縫ひぐるみを持つて追ひちらす。これにて九右衛門丹助、逃げて入る。あと三人こなしあつて、顏見合せ

嘉十　ヤ、あなたは。

さん　こなたは先刻の物貰ひどの。

千代　危ふい所へ、よう來て下されたな。

嘉十　イヤ、斯樣申しては憚りながら、これも矢ッ張り盡きせぬ御縁、先程は有り難う存じました。私しもあのお杯で、心が晴れたかして、病氣もよろしうございます。御恩返しに、道までお送り申しませう。

さん　地獄にも近附きとやら、よう深切に來て下されたな。

千代　そんなら、どうぞ送つて下され。

嘉十　畏まりました。お氣遣ひなしに、斯うお出でなされませ。

ト雨車、時の鐘にて、嘉十、盆提灯を持ち、お千代おさん附いて、東の歩みへかゝり

さん　よい所でこなたに逢うて、私しどもは助かりました。

千代　これも欠ッ張り、阿彌陀様のお庇。そりやさうと半兵衛さんは、今日深川の衆達と、王子へ一緒

と聞いたが、なぜにお出でなされぬやら。

さん　旦那様は、手附けの金の事は御存じないゆゑ、金才覺にお出でなされたのでござりませう。

千代　ほんに、こちの旦那どのゝ女狂ひには、困るわいな。

嘉十　モシ、先程から聞いて居りますれば、此お方が旦那々々と仰しやるは、何でござります。

さん　アイ、それは此お子様の、お連合ひサ。

嘉十　すりや、いよ〳〵、この女中様には、御亭主様が

さん　しかも歴と。

嘉十　エヽ、羨やましい。

兩人　ヤ。

嘉十　ソレ、水溜りが

さん　ヤツトコナ。

ト　お千代の手を取り、思ひ入れ。此うち、よき時分、舞臺の藪垣を引いて取る。

本舞臺、三間の間、黒幕。眞中に一間、扉附き狐格子の堂。よき所に石の手水鉢。左右藪垣の茂り。松の大樹。同じく吊り枝。白木の鳥居。すべき根岸御行の松、不動の境内、夜の體。石の鳴り物にて道具とまる。

ト三人、捨ぜりふにて花道に廻り、舞臺へ來り

さん　もう爰は、どこでござんすえ。

嘉十　ハイ、根岸の御行の松、不動前でござります。

千代　そんならこれから、八丁續きも同然。お前は早う行て、休息しなさんせ。おさん、何なりと遣はして。

さん　畏まりました。

ト巾着より二朱銀一つ出して、紙に包み

これは聊かなれど、あのお子様のお志し、其方に下さる。取つて置きや。

ト出す。此うち嘉十、俯向いてゐる。

サア、これを持つて、早う休息しやッ

嘉十　ハイ、有り難うござりますが、私しはどうも行かれませぬ。

さん　そりやなぜに。

嘉十　行かれぬといふは、これゆゑに。

ト提灯を置き、お千代に抱きつく。

千代　アヽコレ、何をしやる。

ト突きのけるを、又縋りつく。おさん支へて

さん　すりや、最前あれほど譯を云うても

嘉十　どうも思ひ切られませぬ。たつた一度のお情を

千代　すりや、どうあつても聞分けないか。

ト振り放す。この時、嘉十の懐より以前の一軸出る。お千代、手早く取つて見て

千代　この一軸は。

嘉十　千葉家の重寶、月の畫像とやら。

さん　半兵衛さまの

千代　尋ねる一品。

ト思ひ入れ。その手を嘉十取つて

嘉十　そんなら、これが欲しいのか。

千代　どうぞわたしに

嘉十　これが欲しくば、自由になるか。

千代　穢らはしい。どうして其方と

嘉十　そりや又あんまり

ト寄るを

さん　コレ。

ト支へる。嘉十、以前の脇差を抜き

嘉十　ソリヤ、抜いたぞ〳〵。否だと云へば、たつた一突き。

千代　コレ、滅相な事を……たとへ死ぬるとて、どうして其方と……ア、コレ、滅多な事を。
さん　今まで優しい戀病と、悄れて居たのは
嘉十　噓だ。
兩人　ヤア。
嘉十　あんまり白でぶちまけるも、恥かしさに思ひつき、顏にも似合はぬ戀煩らひ。無理合點で惚れた宿無し。どうで捨て鉢。自由になるか、否だと云へば無理心中、殺して置いても抱いて寐る。性根を据ゑて、返事をしやれサ。
ト振りあげる。おさん、その手に縋り
さん　ア、コレ、早まるまい。この戀わたしが取持ちませう。
下嘉　ヤ。
さん　その代り、たつた一度で
嘉十　思ひ切ります。
千代　それぢやといふて。
さん　サア、この人に思ひを晴らさせた上、どうぞその一軸を

嘉十　随分こなたにくれてやる。そんなら爰で

千代　ヤア。

ト思ひ入れ。

さん　モシ、何事も私しが……サア、私しがお取持ちしてあげやうけれど、何を云うても互ひに初心」

嘉十　そんなら灯を

ト吹き消す。時の鐘になり、三人、暗き思ひ入れ。おさん、お千代に囁き、お千代の桐油を、おさん着て、おさんの風呂敷をお千代に着せ

さん　モシ、御新造様、私しは爰で番をして居ります」お前さん、その代り、お望みなさる一軸を

千代　そんなら、わたしは

嘉十　この堂で

さん　ちつとも早う。

ト思ひ入れ。嘉十は、桐油の手触りあるゆゑ、おさんをお千代と心得、手を取つて堂の内へ入る。お千代、おさんと見せる心にて、堂の脇に踞みゐる。雨車、時の鐘になり、向うより九右衛門、丹助、以前の形にて出て来り

九右　なんと、今の女は、何方の方へ行つたらうな。

丹助　それサ、あの非人めが交ぜッ返して、大事の所をチヤアフウにしてしまつた。

九右　アヽ、氣が悪くなつて來た。今から吉原へ急がう。早く來や〳〵。

丹助　併し、レコは有るか。

九右　マア、それからそれ、堀の大黒屋の婆アに脊負はせる氣だ。

丹助　そんなら早く、サア、急がう〳〵

　　ト捨ぜりふあつて、下座へ入る。矢張り右の鳴り物にて、向うよりお虎、糸立をかむり、高からげ、跣足にて出て來り、花道にとまり

とら　おゝ、暗いワ〳〵。此やうに枝葉の茂つた所は、どこであらう。ハヽア、爰は御行の松の不動様時に、娘やおさんは、どこではぐれたしらん。何にもせい、マア不動様へ行て、端折り直して

　　ト舞臺へ來り、腰帯を締め直し、身拵らへしてゐる。堂の内より兩人出て、こなし。お千代、おさんの側へ寄り、桐油を着替へ、嘉十の側へ寄り、囁き、一軸をくれと云ふ心。嘉十、又お千代に囁き、何なりと形見をくれと云ふ思ひ入れ。お千代、心得、四ツ紅葉の笄を抜き、嘉十に渡す。此うちおさんは身拵らへ。お虎、人影が見えるゆゑ、ソロ〳〵と探り寄る。この時、お千代が落したる、宅左

衛門より來りし一通を拾ひ、透かし見ながら、思はずこの中へ入り、嘉十はお千代と心得、件の一軸を出す。お虎、探り寄つて、手に觸る一軸を取る。この時、嘉十、糸立を着てゐるゆゑ、お虎を引ッ捕へ

嘉十　ヤ、此奴は慥か

とら　盜人ぢやアない、不動參り。

トこの聲を聞いて

千代　ヤア、お前は母さん。

さん　阿母樣か。

とら　どうして二人は

千代　ヤ。

さん　アモシ。

ト兩人、桐油をかむる。木の頭。嘉十は笄、お虎は二品を透かし見る。この仕組みよろしく、

ひやうし　幕

第二番目　二幕目

金英樓の場
猪の堀の場

役名——稲の谷半兵衛實ハ小萬。源五兵衛娘、お雪。藝者、鶴吉。金英樓女房、おいし。輕子、お豐。船頭、梅鉢屋音松。古鐵買ひ、彌助。出石千太郎、轡田檢校伊仙。藝者、粂吉。船宿、江戸屋九右衛門。若い者、喜八。船頭、松本屋の市。手引き、丹助。藝者、寅吉。大磯屋傳三。百足屋金兵衛。二階廻し、お勝。薩摩源五兵衛。舞鶴屋新造、小雛實ハ權三。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面、塗り骨の腰障子、左右の袖、同じく折返し腰障子。花道よき所に二階の上がり口を取附け、この道具すべて、深川金英樓の二階がゝり。爰に寅吉、女藝者の形、癇癪を起し、大風を云つてゐる。音松、市、船頭の形。福藏、太鼓持ちの形。粂吉、藝者にて、寅吉を皆皆なだめてゐる。鶴吉、これも腹立てゝゐる。千太郎、町人の形にて、これを制してゐる。佃にて幕明く。

皆々　マアく、靜かにしなさいく。

市　寅吉さん、お前、何をそんなに腹を立つのだ。

寅吉　これサ、市どん、聞いてくんな、あの千さんが、今度來た新子を買はうと云ひなさるけれど、まだ判の濟まねえ子だから、お部屋で出されねえと云ふから、まんざら主の顏を潰されもしまいとわつちが出てあげようと云つたら、鶴吉さんが素敵に急腹を起して、わつちの事を厚かましいのなんのと、さうして見ると、どうか千さんと鶴吉さんは、譯でもあるやうだ。わつちも深川七場所は云ふに及ばず、宿場から切り見世まで稼いだ寅吉だよ。お前方にこめられちやアうまらねえよ。

音松　お前も方々よく稼いだの。この間丸八で、板の間を稼いだのもお前か。

寅吉　この野郎め、同じやうに洒落るなよ。

粂吉　これサ、鶴吉さん、お前また寅吉さんが、千さんに出ようと云ふのが、なぜ腹が立つのだえ。

鶴吉　それでもあんまり厚かましい。なんぼ千さんが心よしでも、寅吉さんが出てあげようと、女の方から恩をかけるやうな物の云ひやう。それとも千さんが、お前の氣に入つたら、どうともしなさんせ。

千太　これはしたり、おぬしも、よく物を積つて見やれ。どうしておれがあんなものを

寅吉　なんだ、あんなものとは、わつちの事かえ。さう云はれては、わつちも達引、年季を入れても、

呼び通さねばなりやせん。
音松　お前が年季を入れたところが、一年に二朱一本ほか附けはせまい。
市　とんだ布子だ。
粂吉　モシ、鶴吉さん、お前、其やうに熱くなつて、兎やかう云ふと、どうかそれでは寅吉さんの云ふ通り、千さんと色のやうだよ。
鶴吉　でも、誠は主と
千太　アヽコレ。
ト押へる。
福蔵　鶴は千年といふから、鶴吉さんと千太郎さんとは、退いた仲でもねえ。
寅吉　虎は千里の藪さへ越すにナウこれの、といふ唄があるから、寅吉も千さんに縁のねえでもねえよ
音松　そりやァお前の若い時分流行つた唄だものを、ナニ今の者が知るものか。
寅吉　なんでも千さん、わつちを立てゝおくれ。
鶴吉　何をお前が厚かましい。
寅吉　鶴吉さん、利いた風だよ。

ト佃になり、寅吉千太郎に取りつく。千太郎逃げ廻る。皆々、寅吉を突き倒す。この時、障子の口より轡田検校、丹助の手引にて、跡より金兵衛、九右衛門。お勝、二階廻しの女にて、喜八附き、皆皆出て來り、此うち舞臺の人數、逃げて奥へ入る。

かつ　マア、これへお出でなされませ。

ト皆々座に附き

九右　お勝どん、この客人は今夜お初だよ……モシ、あなた、思し召しでもございますか。

丹助　わしが旦那樣は、思し召しの大當てがあつてお出でなされた。

轡田　聞けば爰の内に、小雛とやらいふ藝者があるさうぢやが、それを求めたいものぢやて。

かつ　左樣でございまするか。その小雛さんは、やう／＼今夜吉原から、住替へに參りまして、まだ證文いたしませぬゆゑ、どうもあの子は

金兵　これサ、お勝どん、そして、おれが買はうといふ鶴吉は。

喜八　その鶴吉さんも、八百半さんの揚詰めゆゑ、盜みはさつぱりお斷わりでございまする。

金兵　エヽ、いつも／＼イマ／＼しい揚詰め、おれは格別、今日お連れ申したあなたへ、なぜ新子が出されぬ。

丹助　新子が出されずば、飴細工にでもなされまし。
轡川　イヤ〳〵、身共は是非とも新子に致したい。
かつ　いづれ此方の内で抱へる藝者。その子の兄の彌助さんも、判人の傳三さんも、今お部屋で證文の最中。その間に名代の藝者衆など……ナア、九右衞門さん。
九右　さうサ、お前は彌助さんが來てゐて嬉しからうよ。
かつ　又そんな惡玉を……憎いよ。

ト九右衞門の脊中をくらはす。

九右　モシ、旦那、今に證文も濟みますとサ。それまで名代の子を買つて、一つおあがりなされまし。
金兵　はつたいの粉なら、茶請けにもならうが、名代の子は詰まらぬ。併し、鶴吉も名代か。
かつ　マア、さうなされませ。コレ、喜八どん、どなたが明いて居たつけの。
喜八　寅吉さんに粂吉さん。
かつ　そんなら、さう申して來な。
喜八　ハイ〳〵。

ト階子の口へ下りる。

轡田　コレ、金兵衛、てまへ、船宿と馴れ合つて、大方身共を盲目ぢやと思うて、てまへが好い子を來るのであらう。

ト盲人根性を云ふ。

かつ　成る程、さう思し召すも御尤も。そんなら鬮取りになされませ、サア……この長い方が粂吉さん短かい方が寅吉さん、お二人ながらお引きなされませ。

ト金兵衛、轡田、取つて

丹助　金兵衛さんの方が長うござります。

かつ　そんならお前が粂吉さん、あなたが寅吉さん、それで極まつた……サア、どなたもお出でよ。

ト佃になり、寅吉粂吉に喜八附いて出て來る。

寅吉　オヤ、九右衛門さん

粂吉　この間は。

ト二人よき所にゐる。

かつ　あなた、ちよつとお杯を。

ト金兵衛は粂吉、轡田は寅吉と杯事濟む。

金兵　ア、、これが鶴吉の名代か。鶴の代りに鶩ぢやな。

粂吉　イヤ、利いた風だよ。

轡田　ヤア、こりやア小雛の代りに次郎左衛門ぢや。ナニこれが子供か、大供ぢや。

喜八　大供の黒仕、それで色が眞黑でござります。

寅吉　喜八どん、大きにお世話よ。いつそ口が惡いよ。

喜八　口が惡いから、張らずに壺を持つて居りまする。

寅吉　オヤ〳〵、人の惡い。ちよぼ一ではあるまいし。

喜八　どつちが人が惡いか知れねえ。ハヽヽヽヽ。

轡田　コレ、金兵衛、身共が買はうと思つた、小雛とやらは出されぬといふ。なんだか氣が滅入つた。外に藝者を呼んで、一つ飲まうではないか。

九右　お勝どん、誰れぞあるか。

かつ　今夜は大客で、藝者がみんな出切つてしまひました。困つたものぢや。喜八どん、どうせうの。

喜八　丁度よい事がござります。下へ來てゐる女按摩の娘を、呼んではどうでござります。

轡田　イヤ〳〵、身共は平常弟子どもに揉ませて居れば、望みにないて。

金兵　イエ〳〵、療治にせずとも、藝者代りに呼んで見ませう。
喜八　そんなら呼んで來ませう。

ト下へ下りる。

寅吉　あのマア按摩さんは、誠にいゝ聲だよ。
粂吉　さうサ、いつそいゝ聲だ。
九右　聲もいゝが、なんと唐人踊りでも踊らせるがいゝ。
寅吉　さうサ、踊らして遊ぶがよからうわいな。
丹助　成る程、そいつは、とんだ遊び物が出來たわえ。

ト此うち喜八、階子の口へ上がつて

喜八　サア〳〵、來なさい〳〵。

ト佃になり、喜八先にお雪、按摩にて、音松附添ひ、出て來り

ハイ、お約束の藝者衆が參りました。
ゆき　これはどなたもお免しなされませ。お療治は、どなたでござりますかな。
かつ　イヤ〳〵療治ぢやアない。今夜は藝者衆が切れ物ゆゑ、藝者代りに雇つたのぢやわいな。

ト お雪、恟りして

ゆき これは又、滅相な。目も見えませぬ私し。どうして左様な事が。

金兵 オツト、目の見えぬはちつと差合ひ……こりやア、盲目にしては惜しいもの。なんぞ藝があらうな。

かつ なんぞ、やらかしな〳〵。

ゆき どう致しまして私しは……もう〳〵、御免なされて下さりませ。

轡田 コリヤ〳〵、てまへ、盲目とあれば、檢校の身共が云ひつける。踊りは見えぬゆゑなんなりと、唄つて聽かせろ〳〵。

金兵 それが否なら、コレ〳〵

ト有りあふ丼なお雪に持たせ

これで、一つ飲め〳〵。

ゆき イエ、私しは、一向不調法でござります。

皆々 酒が否なら、踊りを踊るか。

轡田 檢校の身共が詞を背けば、按摩商賣を差止める。サア〳〵、なんなりと、唄へ〳〵。

皆々　そこで唄やれ。

ト手拍子を打つ。誂らへの合ひ方になり、お雪、迷惑なるこなしにて泣く。

かつ　そりやこそ涙ぢや。

皆々　踊りはどうぢや〳〵。

金兵　それが否なら

皆々　酒を飲まさうか。

轡田　キリ〳〵唄ふか。

皆々　サア〳〵、唄やれ〳〵。

ト手拍子にてお雪を苛める。お雪、堪りかねて逃げ出す。皆々押へ

寅吉　めくら〳〵の若松様よ。

皆々　唄も唄はず泣きくさる。

ト皆々お雪の兩手を持つて、あちこち突き廻し、お雪、帯もほどけ、しどけなき形になり、皆々これを突き倒し、奥へ入る。轡田検校も、探り〳〵入る。お雪残る。合ひ方。

ゆき　エヽ、情ない、胴慾な。目の不自由な此わしを、皆寄つての弄さみもの。これといふのも、戀し

と思ふ權三さんに、見捨てられてのこの苦勞、まだこの上に、どのやうな、辛い憂目にあふとてもま一度殿御に逢ひたいと、思ふ女子の一念力、それ樂しみに長らへゐれど、ひよつとこの姿を見やしやんしたら、さぞや愛想も盡きるであらう。殊更わたしが母さんは、道ならぬ權三さんと、云ふに云はれぬ因果なこの身。去年箱根の山中で、思ひがけなう母樣に行きあうて、どうぞわたしも御一緒に、お連れなされて、權三さんに逢はせてと、願うた時に母さんが、權三さんの差してござんした、赤木とやらいふ守り刀、これを連れそふ男ぢやと、諦らめてくれコレ娘と、お渡しなされたこの短刀。わたしや今日まであなたと思ひ、大事にかけて居りまする。

ト懷より赤木の短刀を出し

これまでに思ひ詰め、目の盲ゐたも男ゆゑ、泣きくらしたるこの年月。ちつとは不便と思し召し神さま佛さま、どうぞ助けて下りませ。

ト泣き落す。持つたる短刀を下に置き、解けたる帶を締め直さんとして、この時、奥にて人音するゆゑ

アレ又今の衆が

ト短刀を置いたまゝ、上手の屛風の内へ、探り〳〵隱れる。佃になり、奥より金兵衞、轡田檢校、丹

助、皆々微醉ひのこなしにて出て來り

丹助　お前もガツ〳〵して、ちよんの間に出かけたな。

金兵　馬鹿を云へ。鶴吉といふ當があるもの、あんな鶩に、なんの構ふものか。

轡田　イヤ、身共も當が違うて、けたいな晩ぢや。時に金兵衛、彼の短刀は大事な物ゆゑ、遊びに來るにもコレこの通り、懷中してゐるが、二階廻しめらが見付け居つたら、お腰の物はお預かりと云ふであらうと、イヤ、大てい心遣ひの事ではない。此やうに帶が解けてゐるが、外の人が居ては……コレ、氣を附けて下さい。

ト短刀を下に置き、帶を締め直す事。

金兵　なんだ。帶がほどけた。ハテ、色には目の無い……ホイ、これは麁相。

丹助　モシ旦那、それに似寄りの短刀、いろ〳〵探しましたが、どうも無いものでござります。

轡田　てまへが以前、刀屋であつたゆゑ、この短刀の似寄りを、柳原でなと見付けて、あの彌助めが賣つてくれと云うて預けた短刀、また取りにうせたゆゑ、爰には持合さぬと僞り、今度來たなら、似せ物をやつて、この短刀は又此方で金にする。なんと巧い狂言であらうがな。これがほんの、盲目が目明きの眼を拔くといふ仕組みぢやて。

金兵　奇妙々々。幸ひ折紙は、わしが預かつてゐますゆゑ、この折紙を敷寫して、これもわしが贋を拵らへてあげましたが、これも彌助へ。

ト紙入れを出し、中より誠の折紙を出して見せる。

蟬田　オヽ、その折紙も、まんまと喰はせてやつたちや。

金兵　そんならこれは、わしが預かつて置きませう。まだその上に彌助の方から、引ッさらつたこの手紙。

ト同じ紙入れより手紙を出し

もし短刀のもくが割れると、この手紙が此方にあれば、これも一つの企みの元手。

蟬田　二品ともにしつかりと

金兵　私しが預かつて置きます。

ト懐へ入れる。此うち蟬田檢校、形を直し、叮嚀に帶を締め直す。この時お雪も帶を締め直して、屏風の中より探り／＼出て、檢校の置きし短刀と、赤木を取違へて懐中する。これを三人知らず、この時、奥にて

とよ　コレ、お雪さん／＼、そこにお出でか。

ト呼びながら出てくる。これにて檢校うろたへ、同じく取違へて赤木を懷中する。

サアノ〳〵、見通しのお客が、療治をしたいと仰しやるから、早く來ておくれ。

ゆき　また藝者の代りに行くのではございませぬかえ。

とよ　イエノ〳〵、今度はそんな意地惡をするお客ではない。サアノ〳〵、來ておくれノ〳〵。

ト通り神樂になり、お豐、お雪を連れて奧へ入る。この鳴り物なかりて、二階の口より、おいく、女房の拵へ。後より小雛、孔雀染めの振り袖、新造の形にて、彌助、傳三、小雛の袖頭巾を持ち、お勝附き、皆々出て來り

かつ　幸ひ爰にお客樣もお出でなさる……モシ、今度新子の小雛さんといふは、この子でございます る。

金兵　成る程、深川には珍らしい孔雀染めの振り袖、これが彌助どのゝ妹か……時に、彌助どの、この間の手紙の三兩はまだかな。

彌助　ア、コレ、惡い〳〵。

ト押へる。

轡田　オヽ、彌助どのか。この間の彼の品も、おッつけ賣り口が知れまする。

彌助　エヽ、これはしたり、それを云つては

ト心遣ひの思ひ入れ。

縛田　何はしかれ、小雛を早くきめたいな。いし武文の濟まぬ前から、あの通りお客さんが、お待ちかねだや。今わしが云うた事、よう合點してお客を大事に勤めて下さんせ。

傳三　去年中からおれが判で、方々へやつたが落ちつかず、聞けば男嫌ひだと云つて、客を振るさうだが、モウノヽ、そんな我まゝは云はせない。それとも、なんぞ振る筋があるのか。コレ、彌助どん、おれも大金を出して買つた奉公人だ。そんなに得手勝手に勤められちやア、この判人は上がつたりだ。但し貴樣は、この妹と馴合ひで、百兩踏む氣か。

ト彌助思ひ入れあつて

彌助　コヽ、妹、あれほど兄が割り口説きを云つて聞かせたに、なぜ勤めをせぬのだ。てまへを賣つた百兩の金も、おれが米味噌の金に遣つたといふでもない。その身の代で、あの代物は、ナ……そんなら金は生きてゐるぞや。それにてまへがふてゝ、勤めをせぬから、今の通り傳三どのが、おれへをかしく搦むのだ。なぜ勤めをせぬ。サア、なぜ否だよ。

かつ　これサ、この子は、そんなに俯向いてばかりゐずと、挨拶をしな。彌助さんも、あのやうに氣を揉んで居なんすのに、なんぼ藝者の勤めでも、さう辛い事ばかりあるものぢやないわいな。ちつとは勘辨して見な。

いし　そりやモウ、夜毎に替る枕の數、辛いは尤もぢやけれど、公卿の娘も世に落ちれば、勤めするとやら。斯うしてお前を抱へて見れば、わしが子も同然。及ばずながら、心の屆くだけは氣を附けて使ふほどに、心を取り直して勤めて見やしやんせ。ハテ、世間に鬼ばかりあるものぢやないわいな。

ト深切に云ふ。小雛、こなしあつて

小雛　おかみさんといひ皆さんが、事を分けて云つてくんなんすを聞分けぬ、あんまりないつこく者と思ひなんせうが、苦海に沈む初めから、お客を振れば折檻され、打ち擲かれるも、覺悟の前。どうした事やら、それほど痛い目を見るより、男と寢るのが、しみ〴〵辛くつてなりいせん。これも一つの因果でござんすわいなア。

傳三　アレ、あの通り名乘りかけて、男と寢るのがしみ〴〵辛くつてなりいせんといふ奉公人だものなこりやア住替へに出すも尤もだ。コレ、兄貴、どう考へて見ても二人して、傳三を百兩踏む狂言

だな。

彌助　サア、貴樣がさう云ふも尤もだが、……コレ、妹、てまへが勤めを嫌がるばつかりで、判人の傳三どのが、この間から、あの通りの勘繰りだ。……併し、勤めを嫌がるのも、コレ、妹、なぜてまへは勤めを否がるのだ。それぢやアこの兄が、傳三どのへ立たないぞ。エヽ、腹の立つあまツちよめ。

ト小雛なくらはせにかゝる。小雛思はず

小雛　こりや、おのれ現在主を……サア、主の威光も、兄の高下も、男嫌ひの生れつき、これがわたしの身の病。どうでこの身は振り袖の、籠の孔雀の寢鳥も同然。打つとも突くとも勝手にしなんし

彌助　うぬ、そのイケ口を

トまた振りあげるを、傳三支へ

傳三　コレサ、なんぼ兄でも證文すれば、爰の内の奉公人、疵でも附くと、その飛ばッちりは、この判人が迷惑する。マヽ、それよりはこの子の腹を、よく訊くがよからう。

金兵　成る程、こりやア餘ッほど根強い代物だ。

轡川　その代り、取組んだら餘ッほど面白からう。猶々身共は執心ぢや。

丹助　こりやァてつきり、足のある代物だらう。

三人　困りものだぞ。

かつ　ほんに、そこどころに、さつぱり氣が附かなんだ。それほど勤めを否がるは、外に蟲があるに違ひない。サ、その色男は、どこの誰れぢや。それを云ひな。

傳三　おれも如才なく洗ひ拔いたが、足らしいものは、さつぱり無えと思ふが、それとも有るかも知れない。お勝どん、洗つて見てくんねえ。

かつ　そりやモウ、若いうちの樂しみだものを、無くつてどうするものか。サア、その男の名を云ひな。これサ、先刻にから、人にばかり口をきかせて、お前、年をとつた者を馬鹿にするのか。さういふ男が無けりやァ勤めに出るか。

傳三　その男の名を云ふか。

彌助　勤めをするか。

三人　サア〳〵。

かつ　エヽモウいつそ、自烈たい子だ。斯うして

ト煙管を振りあげる。この時、稻の谷半兵衞、羽織袴、大小、頭巾をかぶり、出て來り、お勝の手を

　　　とめる。皆々思ひ入れ。

稲谷　即ち小雛が、色でござる。

皆々　ヤア。

稲谷　身共と申す深田のあるこの小雛、外の客を嫌ふも尤も。向後小雛は身共が揚詰め。皆も、さう心得てくりやれ。

　　　ト小雛、彌助、稲の谷半兵衛を見て、

小雛　ヤア、あなたは樣か。

　　　ト悔りする。稲の谷半兵衛、顔で押へる。

彌助　正しくあの時、谷底へ……イヤ、尋ね求めしこの年月。

小雛　ほんに、思ひがけない。

傳三　小雛が色と名乗りかけて出さつしやつた、見れば立派なお侍ひ。こりや惡足でもあるまいかえ。

いし　吉原からのお馴染か　して、あなたのお名は。

稲谷　サア、その名は包んで侍ひの、滅多に申さぬ家名實名、小雛が色のその名なら、義太夫本でもある通り、彼の小雛半兵衛、その半兵衛の家名は稲の谷。それを即ち身共が隱し名。サア、そこら

で大概、濟まして置きやれサ。

金兵　ハテ、出來合ひの小雛半兵衞ほどあつて、丁度爰らで、近江八景合點のゆかぬ。

丹助　何を云はつしやる。

轉田　小雛が深間のそのお方、姿形は見えねども、五音はどうやら色深い、定めて器量も、女子のなづむ……エヽ、羨やましい。

小雛　でもマア、思ひがけない、どうして爰へは尋ねて

彌助　私しもあなたにお目にかゝり、お渡し申さにやならぬ品……ハテ、尋ねる時は、めぐり逢はぬものでござります。

傳三　ハア、そんなら兄貴は知つたお方か。たとへ小雛が色にもしろ、此方は矢ツ張り知らぬ顏の、半兵衞さまにもしませうが

かつ　深い色ぢやと仰しやるには、なんぞ慥かな

稻谷　證據と申すは、即ち爰に。

ト小雛の腕をまくつて、五大力の文字を見せ

そも逢ひそめしその日より、仇し枕は交さじと、戀の誓ひの五大力、宮守の力はこの如く、洗へ

ど落ちぬ心の契約、云はゞ二人の入れ黒子。

ト自分の腕も皆々へ見せ

・なんと慥かな、證據であらうがな。

かつ　成る程、これは珍らしい、痛い目をせぬ入れ黒子。わたしらもあのやうに、ナア、彌助さん……

サア、それ程慥かな證據があるからは、違ひもあるまい。ねえ、おかみさん。

いし　この商賣の表向き、身爲めにならぬ色は迫く。仇や浮氣の仲でなく、それほど深う云ひ交した、色客なればなんのマア、小雛が末の頼みにも……それでわたしも、落ちついたわいなア。

稲谷　サア、疑ひ晴れたら、直ぐに結ぶの

ト權三の手を取る。

權三　それぢやというて、今さらに

稲谷　ハテ、それでなければ、この場の納まり……サア／＼、早く床を廻してくりやれ。

辨丹　こりやまた怪しからぬ。

金兵　鶴吉といひ小雛まで、おいら二人はどうするのだ。

かつ　でも、先度から馴染のお客、お氣の毒ながら

ト眞中へ屏風を立て廻し

モシ、ちつとあちらへ。

ト屏風に芥川の繪、描いてある事。

轡田 小雛が稻の谷半兵衛の

金兵 鶴吉が揚詰めは八百屋半兵衛。

丹助 半と半との伸びが出て、たうとう此方は、ぐれになつた。

轡田 ぐれか、ほんまか知らねども、彼の品の賣り口あれば、彌助どん

彌助 アヽ、滅多にそれを

ト氣を揉む。

金兵 手紙も爰に。

ト紙入れを見せる。

彌助 サア、爰に〳〵。

ト胸を叩く。此うち小雛半兵衛、屏風のうちにこなしあつて

稻谷 屏風の書面は芥川、昔男の色ごのみ。

彌助　今は女も業平と

小雛　道に背きし妹脊川、この身に迫る緣さへ、芥の川の底深き、この深川へ流れ來て

稍谷　仲洩らさじと語らふも

彌助　芥の川の

かつ　仇な契り。

小雛　それぢやというて。

傳三　恥かしからう。ソレ、頭巾。

小雛　でもマア爰で

稍谷　ハテ、斟酌せずと

いし　二人しつぽり

兩人　ヤ。

稍谷　ハテマア、來やれといふに。

かつ　おしげりなされませ。

ト唄になり、芥川の屏風を引きまはす。これにて彌助、傳三、おいし、奥へ入る。

金轡　エヽ、なんの事だ。
かつ　あなた方も名代の、お座敷はこれに。
　　ト上下へ屏風を立てる。金兵衛、上の方へ行かうとする。
・アモシ、あなたは奥でござります。
丹助　おいらは、いづれ船衆と一座だ。
かつ　それでも粂吉さんは、奥にお出でなされます。
金兵　イヤ〳〵、おれは爰は動かれぬ。
金兵　でも爰は
かつ　ハテマア、お出でなされまし。
　　ト無理に金兵衛を引ッ張る。此はずみに金兵衛、紙入れを落す。これを知らず、引ッ張られて入る。
　　丹助も附へて入る。檢校殘り
轡田　大事の短刀、二階廻しめらに見附けられてはならぬ。これは斯うしつかりと下へ入れて
　　ト短刀を蒲團の下へ入れる。この時、金兵衛の落せし紙入れ、手に觸るゆゑ、探り見て
こりやァ慥か金兵衛が紙入れ、大事の物を落して行つた。こりやァ滅多な者に預けられぬわえ。

ト持つて思ひ入れ。奥より千太郎、鶴吉、出て來り、檢校を見て

鶴吉　此方はわたしの場所。あなたは、あちらでござんす。

辨田　アヽ、さう云ふは、先刻の名代か。サア／＼、爰へ／＼。

ト手を引く

鶴吉　エヽもう穢ない、お前の合ひ方は慥か寅吉さん、あちらへ行きなさんせ。

千太　アヽ、そんなら寅吉のお客か。モシ／＼、あなた、あちらでござります。サア、お出でなされまし。

辨田　ハア、外に男が一人居るな。てまへは若い者か。さうか／＼。

ト千太郎鶴吉、顔見合せ

千太　ハイ、成る程、若い者でござります。どうぞあちらへお出でなされて下さりませ。

辨田　コレ、若い者、いかに身共が盲人ぢやとて、侮つて、イヤあの女郎は出されぬの、此方ではござりませぬと、よい加減に嘲弄いたせ。こゝな下素野郎め。

ト千太郎、ムツとして

千太　なんぢや、下素ぢや。下素も凄まじい。この座頭の坊め。

ト檢校の頭を喰はせる。

轡田　ヤア、此奴が〳〵、お客の頭を喰はしたな、おのれ、その分では

ト隱せし短刀を持ち、紙入れは矢張り忘れて、千太郎を追ひかける。千太郎鶴吉、逃げ廻る。檢校、ウロ〳〵して、上手の屛風の方へ行く。千太郎、後から突き倒す。これにて檢校、蒲團の中へ轉げこむ。此うち音松、ソツと下手の屛風の中へ入り、坐つてゐる。兩人、これを知らず

千太　サア、これでよいぢや。

鶴吉　お前に話しがあるわいな。

ト屛風の中へ入らうとする。

音松　ドツコイ、さうは成らぬ。八百半さまから云ひつかつて、外の客へはちよつとも出さぬ、揚詰めの鶴吉さん、横盤切るとは千太郎さん、さう巧くはなりますまい。

千太　南無三、てめえはいつの間に。

音松　斯ういふ事もあらうかと、ほんに油斷がなりませぬ。

鶴吉　コレ、市どん〳〵。

ト奥より市、菓子臺を持ち、出て來り

市　鶴吉さん、お前の用は、この事かえ。

鶴吉　それを、あの子へよいやうに。

市　コレ、音公、鶴吉さんが、お前にやつてくれと。

ト菓子を出す。

音松　ハヽア、おれを子供と侮つて口ふさげ。爰は一番通り者になつて、コレ、市公、この菓子をかけて、下で双六を振つて、遊ばうぢやアないか。

市　それがよからう。そんならその菓子を、なんぞへ包んで行かう。

ト音松、検校の置きし紙入れを見附け、中より折紙を出し

音松　丁度爰に、こんな大きな反古があつた。これへ包んで行かう。

千太　コレ、その紙入れは、誰れぞ主があるのであらう。

鶴吉　大方、今の座頭さんのであらう。

市　そんなら、あそこへ。

ト間違つて稲の谷半兵衛の屏風へ紙入れを投げこむ。

千太　これはしたり、そこは盲目の居る所ぢやアねえ。

音松　ハテ、跡は構はぬ。サア、行かう。

ト　よき所まで行きかけて

鶴吉さん、半兵衛さんへは、知らん顏だよ。

鶴吉　承知ぢやわいな。

音松　エヽ、畜生め。

ト　佃になり、音松、市、下へ下りる。奥より寅吉、出て來り

寅吉　今夜は素敵に廻しの多い晩だ。おいらが客人の盲目さんは、慥か爰だつけ。

ト　上手の屏風を明け

モシエ、お休みかえ。

瞽田　愚老を待たせ居つた。サア〳〵爰へ。

寅吉　お前の氣のある、小雛さんの名代、わたしは否だらうね。あの子とわつちは、どつちがいゝえ。

瞽田　されば、どつちがよいか、おれにはさつぱり見えない。

寅吉　小雛さんは、器量ばかりサ。

ト　思はず赤木の短刀を見附け

エヽヽヽヽ。

ト膽を潰す。

榊田　どうした〳〵。

寅吉　お前、わつちと心中する氣だね。氣味の惡い。

榊田　ナニ、われがやうな者と、誰れが心中するものか。

寅吉　それでも、こんな物が。

ト短刀を見せる。

榊田　アヽコレ

ト手早く取つて

可愛い奴ぢや。

寅吉　嘘ばつかり。

ト屏風引廻す。階子より市、出て來り

市　モシ、千太郎さん、お前に逢ひたいと云うて、仲間の衆が尋ねて來た。

ト屏風より千太郎鶴吉出て

千太　ハテ、今時分、何の用であらう。ちよつと逢つて、來ずばなるまい。

鶴吉　今夜に限つて、エヽ、自烈たいねえ。

千太　ハテ、せはしない。

ト佃になり、鶴吉附き、千太郎、市、下へ下りる。チヨンと誂らへの黑幕、振り落す。薄ドロ〳〵にて、胡蝶二羽飛び廻る。よき所にて飛び去る。ドロ〳〵、誂らへの鳴り物になり、右の黑幕、切つて落す。

本舞臺、向う打拔き、萩尾花、秋草茂りし體。左右、紅葉の大樹、日覆より紅葉の吊り枝、舞臺前も秋草盛りの體。芥川の浪板。爰に、十二單衣、檜扇を持ちたる小萬を、烏帽子、業平菱の裝束着たる權三、脊に負うて、芥川の見得。誂らへ、雲上なる合ひ方、かすめて雨車、蟲の音にて道具とまる。

ト向う千草の中より、松明見える事。兩人、思ひ入れあつて

小萬　白玉か、なんぞと人の問ひし時

權三　露と答へて消えなんものを……昔男にあらねども、勿體なくもお前樣、殊に師の恩深かりし、その御方を大それた

小萬　不義の汚名も夫がさね、連れて立退く芥川、露蟲の音を押しわけて、忍び逢ふ夜の草枕、今も追手にあふ時は

權三　鬼一口の大難と、思ひながらも惡縁の、我れを追ひくる灯影ぞと、見やれば官人雜式の、千草押しわけ、アレ〳〵

ト松明見ゆる方を思ひ入れ。

小萬　道に背きし戀路にて、かゝる高位の御姿と、勿體なくも僞りの

權三　我れもこの世に在原の、成りゆく果を思ひ知る。惜しき命にあらねども、寶を取り得、潔う、身を捨て草の、露の間も

ト矢張り右の合ひ方にて、小萬を脊負ひ、見上げ見下ろし、思ひ入れあつて、よき所へ下ろす、いたはるこなし。

小萬　かゝる姿に樣を變へ、二人さまよひあればとて、やがてぞ秋の朝顏の

權三　盛り短かう、あなたにも

小萬　其方も共に、萎るゝ身の上……今の夫の刃にて、死ぬるこの身はいとはねど

權三　身に覺えなき寶の盜賊、盜人なりと捕へられ、死なんずよりは潔う

小萬　これなる流れへ身を投げて、同じ所に死ぬるとも

權三　離れ／＼に死なずんば、後の世までの惡名を

小萬　實に尤ものその詞。一つに死なば云ひ譯立たず。妾も離れ、身の覺悟。

ト兩人、手を取りあひ

兩人　南無阿彌陀佛。

ト「雉子」の唄になり、草叢より月出る。

〽雉子なく、野邊の若草摘み捨てられて、寄るべ定めぬ身は陽炎の

トこの唄のうち、正面の流れへ寄り、權三は短刀を拔き、腹を切る思ひ入れ。小萬は上の方へ入水せんといふ思ひ入れにて、裝束の上を脫ぎかけしこなし、唄切れる。合ひ方になり、件の流れへ二羽の胡蝶狂ふ模樣。兩人これへ思ひ入れ。權三、よき時分、腹へ突かんとする。小萬見附け、駈けよりて留め

小萬　アヽコレ、待ちやいなう。死ぬる今際に二人の影、見ればいとしき殿振りは、昔男もなんのその、この姿に及ぶべき。

權三　玉簾深き御方の、いとも妙なるお姿を、あの水底へそもやそも、なんのやられう、やられませう

小萬　その底深き愛着の、狂ふ胡蝶の妹脊事、長らへ果てぬ事なれば、道に違うて一度の情。アレ

〽蟲さへも、つがひはなれぬ揚羽の蝶。

コレ

ト裾を押へ、顔見合せ

とても浮名の立つたる二人、身の云ひ譯にどのやうな、苦勞苦患をしたとても、誰れが誠と思はうぞ。せめてこの世にあるうちに、その美しいかんばせの、殿御の情にあふなれば、女子と生れし甲斐あるわたし。

權三　すりやお前様のお心は、今までの氣に似もやらで、女の道も世の中の、譏りも受くるお心か。

小萬　身の惡名も皆合點。濡れぬ先こそいとふ身の

權三　さう仰しやれば私しも、所詮死なねばならぬ身の、今の今までつれなくも、義理を思うて居りましたが、なに木竹でもない權三、毒くはゞ皿とやら。

小萬　さういふ心になつたなら、わしも心が解け合うて

ト兩人こなし。

權三　かゝる姿を見咎められなば

小萬　ハテその時は、互ひの命。

權三　お前ゆゑなら、死ぬるが本望。

小萬　エヽ、その口を

〽知らず知られぬ仲なれば、うかれまいものさりとては、我が身末の放れ駒、長き夜すがら引きしめて

權三　斯う打解けし上からは。

小萬　必らず變つて、モシ

〽昔語りの飛鳥川。

トこの唄よき切れに、屏風を引出し、二人を隱す。この途端に道具、順よく段々に變り、件の金炎楼の二階になる。直ぐ佃になり、階子の口より喜八、油注ぎを持ち、上がつてくる。寅吉出て

寅吉　誰れだ。今夜の寐ず番は喜八どんか。

喜八　お前、まだ寐なさらねえか。

寅吉　眠たくつてならねえに、客人が按摩を呼んでくれと云ひなさる。一人呼んで來て下さい。

喜八　いま時分ゐればいゝが……ほんに、あの按摩がゐたかも知れぬ。

寅吉　それ〳〵。あの子でもいゝ。早く連れて來な。

喜八　慥か下に居た筈だが。

ト階子を下りろ。摺れ違つて粂吉、出て來り

粂吉　寅吉さんか。

寅吉　オヤ、粂吉さん、お前、何をしてゐるのだ。

粂吉　聞きねえな。わつちが客人は、素敵に鼾をかいて、寐言ばかり云つて、やかましくつてならないわな。

寅吉　それでも小言よりはましだの。

ト云ひ合つてゐる。階子の口より

喜八　オットト危ない。此方だ〳〵。

トお雪の手を引いて上がり來り

寅吉さん、この子を連れて行つてやんねえ。

ト云つて階子を下りろ。

ゆき　ハイ、お療治なされたいと仰しやるお座敷は、どれでござります。

寅吉 按摩さん、サア、連れて行つてやらうよ………粂吉さん、お聞き。わつちが客人は、目も無い癖に、懐へ刺身庖丁のやうな物を入れてゐるから、わつちは又無理心中かと、お部屋へ話さうと思つたら、客人が云ふには、必らずさういふ事ではない、こりやァ下へ預ける筈だが、大事の品ゆゑ持つてゐる。天國の短刀といふ物だと云ひなさつた。それでちつとは落ちついたよ。

ト此うちお雪、天國と聞いて思ひ入れ。

粂吉 天國とは、龜井戸の天神樣にあるぢやァねえか。

寅吉 そんな事だよ。

トお雪、聞き耳して

ゆき モシ〳〵、その天國と申す短刀を、どなたが持つてお出でなされまする。

寅吉 なにサ、痰切りぢやァねえ、刺刀の大きなやうなものだ。あの療治を頼むといふ客人が持つてゐるよ。

ゆき すりや、その天國を

寅吉 エヽ、自烈たい。甘酒ぢやァねえ、天國だよ………ほんに、甘酒で思ひ出した。まだ正月屋が居やうの。

粂吉　慥か門口に居たよ。
ゆき　モシ〳〵、お前樣、その天國とやらを持つてお出でのお客樣は、どれにお出でなされまする。
寅吉　オヤ〳〵、この按摩さんは、天國々々と、コレ、柿を干した甘干しぢやァねえよ。それが聞きたくば、早く療治に行きねえな。
ゆき　ハイ、參りますでござります。
トうろ〳〵する。上手にて
緋川　どうだ。按摩は來たか。早く呼んでくれぬかえ。
ト手を叩く。
寅吉　アレ〳〵、客人が呼びなさるわな。早く行きねえな。
ト押しやり〳〵、お雪を屏風の內へ突きやる。
粂吉　寅吉さん、正月屋を奢りねえな。
寅吉　オヤ〳〵、厚かましい。お前には鴨蕎麥の貸しがあるよ。
粂吉　エヽ、いゝ、しよにんな事をお云ひだね。コレ、わつちはお客に、年玉だといつて、羊羹を貰つたよ。
ト出して見せる。

寅吉　ちつとおくれ。

粂吉　エヽ、厚かましい。

ト逃げ廻る。寅吉、追ひ廻して歩く。喜八出て

喜八　モシ〳〵、引過ぎだわな。靜かにしなさいな。

粂吉　それだといつて、わつちが持つてゐるものを、この子が

寅吉　エヽ、ちつとばかりくれても、損はねえわな。

喜八　これはしたり、どうしたものだ。

トあちこち追ひ廻し、奥へ逃げて入る。薄ドロ〳〵、唄にて、件の胡蝶二羽舞ひゐる。

〽口舌は宵の夢となる、二つ枕の妹脊川、袖から袖へ手を入れて、じつとしめたる下紐の

ト屏風を明ける。稲の谷半兵衛、小雛、夢の覺めたる思ひ入れ。顔見合せ、悔りして

稲谷　そんなら今のは夢であつたか。枕邊に立てし屏風の繪、たとへにもいふ思ふ事、夢幻じといふ如く

小雛　主は誰れとも知らぬ身の、結び交せし下がへの、つまならぬ身の情なや、悪い心に業平の、二條の君を負ひ參らせ、千草かきわけ秋の野の

稲谷　その草むすび夫むすび、實にはあらぬ芥川、昔男の業平と、思へば矢ツ張り權三どの。

小雛　負うたる君は小萬さま、しどろもどろに見し夢は、これぞ五臟の煩らひと、思ひながらも

ト顏見合せ、思ひ入れあつて

稻谷　屏風の繪こそ今の身と

小雛　さてはお前も、この繪の夢を

稻谷　身のいたづらを眼前に。

小雛　お前も

稻谷　其方も

小雛　思ひ廻せば恥かしい

稻谷　夢とはいへど心の迷ひ。

小雛　神の御罰か、思へば〳〵

ト兩人、思ひ入れ。

疑ひうけても心は潔白。腕に書きし五大力。

稻谷　かの生血にて認めし、よもや文字は

ト腕を見る。消えたる體。兩人、恂りして

小雛　ヤヽヽヽ、こりやコレ誓ひし五大力、夢のうちなる戯れが、誠となつてか、あと方なう消えしは今の正夢の、戯むれ事が二人とも、心通ひてこの如く、消えたる上は云ひ譯ならぬ、夢とはいへど不義同然。

稲谷　殊には二人、思はぬ邪道へ落ちまいものとこの年月、心の錠を卸ろしたる

小雛　その甲斐もなう、いたづらに

稲谷　夢の心が通ひてや

小雛　誓ひに立てし五大力。

稲谷　生血の墨の痕もなう

小雛　消えたる腕は、お前も

稲谷　其方も。

小雛　誓ひの文字の無き上は

稲谷　不義ならぬ身も密夫の汚名、夫へ對して云ひ譯も

小雛　なき命ぞと

稻谷　この身の覺悟。

小雛　小萬さま。

稻谷　權三どの。

小雛　こりやモウ

稻谷　及ばぬわいなア。

ト手を取りあふ。

〽憎や男のあてことを、聞いているさの障子より

トこの時、屏風のうちにて

轟田　大盗人め、逃がしはせぬぞ〳〵。

ト屏風を明け、お雪、探り〳〵逃げるを、檢校も、探り〳〵追ひかけ出る。これにて兩人、また屏風のうちに隱れる。この時、金兵衛丹助お勝も、奥より出てくる。

金兵　なんだ、枕探しだ。

この按摩めは盗みをする。枕探しだ。若い者は居ぬか。コレ〳〵、金兵衛どの〳〵。

丹助　どこに居ります〳〵。

かつ　モシ〱、お客様、マア〱、お靜かになされまし、見れば按摩のお雪どの、この瞽女がアノ、手癖の悪い事を
ゆき　アヽ、モシ〱、どうしてわたしが左樣な事を
轡田　左樣な事も凄まじい。コレ、取られた品は爰にゐる、金兵衞どのゝ紙入れ、わしが蒲團の下へ挾んで置いたのが、見えぬぞ〱。サア、詮議して見さつしやれ〱。
金兵　イヤア、そんなら、見えぬといふは、わしが紙入れか。あの中には、彼の手紙もあり、何より大事の折紙が
丹助　それぢやァ捨てゝは置かれぬ。きつと詮議するがようござります。
かつ　この上とても、お客の品に別條あつては、二階を預かつてゐる、わたしどもが濟みませぬ……
コレ、こなさん、いよ〱あなたの紙入れを取つたのか。サア、隱さずと、有やうに云はしやんせ〱。
ゆき　イエ〱、わたしや紙入れとやらを取りは致しませぬ。そりや人違ひでござりませう。
轡田　イヽヤ、さうは云はさぬ。わりや療治に來ると其まゝ、そこらあたりを探す樣子。感のよいおれぢやによつて、コリヤ何を探すと云うたれば、直ぐにそこを逃げようとしたツ。それが曲事ぢや

なぜ又、蒲團のまはりを探り廻したのぢや。

金兵　さう聞いては油斷がならぬ。コレ、お勝どん、其やうな胡亂な者を、この二階へ上げるは、てまへ達の不念といふものぢや。サア、きつと詮議して、出させろ〳〵。

かつ　ハイ、さう仰しやれば、わたしらが皆越度、白い黒いは、きつと分けてお目にかけませう……コレ、按摩どの、あゝ聞いては、こなさんが怪しい。なぜ又療治に來て、探し事をしたのぢや。サ、それを云はしやんせ〳〵。

ト嚴しく云ふ。お雪オロ〳〵して

ゆき　アヽモシ、其やうに仰しやるなら、隱さずに申しませう。いま爰へ參りました時、藝者衆の仰しやるには、天國とやらいふ短刀を、あのお客が持つておいでと聞いたゆゑ、わたしやその天國があらうかと存じまして、蒲團の下をツイ尋ねました。どうぞ堪忍なされて下さりませ〳〵。

ト云ひ譯する。天國と聞いて敵役皆々顏見合せ、恟りする。此うち小雛、この樣子を聞いてゐる事。

かつ　コレ〳〵、その云ひ譯では、紙入れは取らぬが、天國とやらなら、こなた、盜む心か。

ゆき　さうではござんせぬが。

トつかへる。

かつ　イヽエ、そりや云ひ譯にならぬ。して、天國といふは、どんな物ぢやえ。

ゆき　アイ、天國といふは、短刀の事で

かつ　コレ〳〵、この二階へ、誰れが刃物を持つてござんせう。よし持つてござんせうが、それを認めて、お預かり申すがわしの役ぢや。して又、その短刀とやら、なんでこなさん、尋ねるのぢや。

ゆき　サア、それは。

かつ　サ、それ云はしやんせ。云はにや嘘か。オヽ、こなさん、實の瞽女ぢやないの。眼の見えぬ振りをして、茶屋々々の二階を窺ふ似せ盲目…………ホヽ、これはしたり、旦那、御免なされませ……サ、誠のところは眼が見えるか。サ、それを云はしやんせ。云はにやこなさん、斯うして

ト　お雪を捕へ、太股を抓る。

ゆき　アヽモシ、僞はりは申しませぬ。誠のその天國を

かつ　天國とやらなりや、なんで女按摩が欲しがるのぢや。

ゆき　サア、それは。

かつ　云はぬと斯うして

ト　また抓る。

ゆき　アヽモシ、左様なら、申しませう〳〵……モシ、何を隠しませう、私しは侍ひの娘、その天國
の短刀ゆゑ、親どもの難儀と聞き、それゆゑ思はず、尋ねる心になりましたわいなア。

かつ　ようヌケ〳〵と嘘をつく。此やうなしみつたれな形をして、侍ひの娘ぢや。エヽ、こゝな嘘つき
按摩め、嘘でなくば、その親の名は、何と云ふえ。

ゆき　サア、それやどうも

かつ　それやこそ嘘ぢや。親の名も知らぬ侍ひの娘が、あるものかいの。

ゆき　イエ〳〵、存じては居りまするが、親のその名は

かつ　云はれぬのか。

ゆき　アイ、どうも今さら

かつ　云はねば、いよ〳〵偽はり者。吐かさぬうちは、縛りあげて

榛田　亭主を呼びにやり、先へ預けて吟味しやれ。

金兵　失なうてはならぬ紙入れ、おれも手傳ひ、出さねばならぬ。サ、あまめ、うせう。

　　トお雪を引きつける。

ゆき　アヽモシ、御免なされませ。

かつ　そんなら盗んだ紙入れ、出しや。

ゆき　そりや存じませぬ。

金兵　エヽ、情の剛い奴。

かつ　縛つておくれ。

ト　お雪を引きつけ、打擲しながら、連れて行かうとする。この時、小雛、中へ入り

小雛　マア〱、待つて下さんせ。

かつ　こりやア小雛さん、譯も知らいで、なぜ止立て。

小雛　イエ〱、大概屛風の内で……して、客人の見えぬと云はしやんす紙入れの、色や地合ひは、どのやうな。

金兵　オヽ、その紙入れは、表は黒羅紗、裏は白地の唐甲斐絹、銀金物の一文字。

ト　小雛、思ひ入れ。

小雛　そんならもしや、これではないかえ。

ト　出す。金兵衛取り

金兵　これだ〱。違ひなし〱。

かつして、紙入れが、どうしてお前の
小雛　手へ入つたは宵のうち、屏風の外で男の聲、主は無いかと尋ねる樣子、誰れか知らぬが奪ひ合うて、外から屏風へ打込んだ、その紙入れが、あの子の難儀に。
榊田　どこから出やうが、あれば重疊。して、その中に別條ないか。
金兵　中改めて。
　　　　　　ト　よく〳〵見て
ヤ、、、、彼の手紙はありながら、見えぬは大事の折紙が
小雛　エ、そりやなんの折紙
　　　　　　ト　思ひ入れ。
金兵　その折紙は大國
　　　　　　ト　云はうとする。
榊田　ア、コレ、云つては惡いぞ〳〵。
丹助　下には彌助が……ナ、ソレ、彌助が聞いては、惡いぞ〳〵。
榊田　おれは目無しと思つても、彌助に耳が、ナ、コレ、聞いては惡いぞ。折が……云ふな。云つて

は悪い〳〵。

小雛　そんならそれが、お前の紙入れ。

かつ　隣りの座敷にあるものを、見えぬ〳〵と仰しやつた、そればかりで按摩の娘を

ゆき　すりや、私しへ疑ひは

金兵　品が戻ればよけれども、紙入れよりは大事の折紙

繩田　見えぬ詮議も、晴れではならず。

丹助　下には彌助が

ト思ひ入れ

かつ　向後、女の按摩とり、二階を止める。サ、わしと一緒に

トお雪を引きつける。小雛、支へ、

小雛　云はゞわたしが先刻から、出さぬが誤り、少しのうちもこの子に疑ひ。この上ともに茶屋〳〵の二階で疑ひかけぬやう、わたしが意見も云ひたうござんす。この子はわたしに、ちつとの間

かつ　ならぬと云ふ所ぢやが、今日吉原から住替へに、ござんしたお前、殊にお客の検校さまが、世話もしたいと仰しやる様な、お前の云はしやんす事ぢやによつて、ナ、モシ、お客さん、お聞きの

通り、あの子の云ひ條、立つてあげたら

ト檢校聞いて

紳田　さうとも〳〵。小雛が頼まば、この上の蔓にする氣で、なんでも諾いて

小雛　この子はわたしに

かつ　ちつとのうちは心任せに。それといふのも、お客の惚れた

金兵　それで其方は濟む形。濟まぬはおれだ、折角ものした折紙が

小雛　エ、

紳田　エ、コレ、シイ〳〵〳〵。

ト思ひ入れあつて

して、紙入れに、件の手紙が

金兵　爰にあるのサ。

ト差出す、檢校取つて、探り見て

紳田　これも大事の彌助が手紙。また失なうては、後でどのやうな……目の無いおれには劣つたこなた、この紙入れは、矢ッ張りわしが

金兵　そんなら見えぬあの品は
かつ　明日は居續け朝直し、お殘りなされてとつくりと
丹助　紙屑籠の店卸し。
かつ　藝者衆呼んで
彈田　酒にしようか。
金兵　それといふのも、按摩めのおかげ。
ト　お雪を蹴飛ばす。
小雛　アヽコレ。
ト　お雪を圍ふ。
かつ　サア、見通しへ
ト　皆々入る。小雛、お雪殘る。
小雛　コレ、其方は、ようマア無事で、なつかしかつたわいの。
ゆき　エ。
ト　小雛思ひ入れ。

小雛　サア、無事でこの場を納めたも、側で見る目がいとしうて、わしやコレ其方の……サア、目かいも見えぬ者を、打ち打擲が不便さに。

ト苦しき思ひ入れ。

ゆき　これはマア、どなたかは存じませぬが、段々のお志し、お庇でこの場の難儀が助かりまして

トお雪も涙ながらに云ふ。この時、稲の谷半兵衛、堪りかねて出て

稲谷　コレ、娘、なつかしかつたわいの。

ト寄らうとする。小雛、隔てる。

ゆき　エヽ。

小雛　アイヤ、ありや、わたしが客人ぢやわいの。

トお雪、思ひ入れあつて

ゆき　エヽ、お客様でござりますか。先刻から、お恥かしいこの身の疑ひ。賤しい女子ぢやとて、譯も聞かいで打擲ばかり。

トぢつと泣く。

稲谷　オヽ、尤もぢや／＼。科ない娘をあのやうに

トまた寄らうとする。小雛、隔て

小雛　アヽモシ

〽洩れ出づる、月は冴ゆれど胸の闇。

ト半兵衛、その様子を見て、いろ／＼こなし。

ゆき　あの奥の間で、騷ぎ唄の文句に、よう似たわたし。月は冴ゆれど胸の闇、この目が見えぬばつかりに、疑ひうけた紙入れの、在所が知れたで疑ひ晴れ、それと申すもあなたのお庇、有り難う存じます。

小雛　ナニこれしきの事、禮に及ばう。世が世であらば理不盡に、あの町人に

ト思はず男のセリフになる。お雪、思ひ入れ。

ゆき　さう云はしやんすお前のお聲、どうやら尋ぬる殿御の調子。

ト小雛、思ひ入れ。

小雛　イエ、町人づれが憎い仕方と、わたしや涙が

稻谷　實の子ぢやもの、無念でなうて

ト思ひ入れ。

さぞや無念であらう。

ト氣を變へて思ひ入れ。此うち胡弓入りの合ひ方。奥よりおいし、お豐、粂吉、市、出て來り、銚子杯など半兵衛の前へ差出し

いし　これはお客様、まだ御寢なされませぬか。これで一つおあがりなされませ……これはしたり、小雛も目が覺めてゐやるか。

市　おかみさんの來なさつたは、上方藝者の親子が來て、「妹脊川」といふ端唄を彈くから、それを肴にお客様に、一つあげようと思つて

とよ　こりや按摩のお雪どん、まだ居なさんすか。

粂吉　お勝どんが見たら父叱らう。もう、歸りや〳〵。

市豐　サア、歸りや〳〵。

小雛　アヽこれいな、その按摩さんは、お勝どんに譯を云うて、ちつと話しがあつて

いし　其方が留めて置きやつたのか。

小雛　アイ。

ト思ひ入れ。

稻谷　見ればどうやら褄はづれ、賤しからざるその女ゆゑ、有るか無きかは知らねども、今の樣子を現在の、親どもが見たなれば、さぞ悲しからう、無念であらう。いとほしなけに、目かいも見えぬ女を捕へ

ト思ひ入れあつて

見聞き致した某も、無念殘念口惜しい。餘所の事でも侍ひの、身につまされて此やうに、因果な事が浮世に二つと、コレ

ト思ひ入れ。

あらうかいやい。

〽髮のほつれのはら／＼はらと。

ゆき　どなたかは存じませぬが、御深切な只今のお詞、母の素性を娘の身で、申し憎い事ながら、どなた樣にも、お聞きなされて下さりませ。もと私しが母さんは、乳が細いゆゑ七夜のうちより、里親へ行て十七年、實の親の手しほにて、育てさんせぬものゆゑに、親子の情合ひ薄いゆゑ、去年箱根で思はずも、めぐり逢うても目は不自由。一緒に連れてと願うたを、叶はぬ事とその時に、下さんしたこの守。

ト懐より赤木と變りし天國を出さうとする。小雛、押へ

小雛　アコレ、守といふは掛け守、定めし肌身を離さず

ゆき　イエ／＼、これは赤木とやらの

小雛　サ、赤地の錦の守袋は、女子の嗜み。なんであらうと、この二階では、ナ、モシ、滅多な事を……それぢやによつて、守り袋でござんせうな。

トお雪、合點のゆかぬ思ひ入れにて

ゆき　アイ、成る程、掛け守でござります。その守は私しが、尋ねまする殿御の御所持。その品渡して母さんは行くへ知れず、親子一緒に居られぬ仕儀。殊に今では盲目の、逢うたというても情ない

稍作　でも父親と、今では一緒に

ゆき　イエ／＼、その父さんも、どこにどうしてござんすか。まだ當歳の弟もあり、親々達は寶を尋ねその手がゝりと思ふから、最前聞いた天國の噂、もしやはそれと尋ねしゆゑ、盗人の惡名うけたを、お情深いお世話になるも、尋ぬる品の手蔓なりとも聞出だし、兩親にも捨てられし、夫の爲にもならうかと、心にも無い盗み氣の、出たのも親が大事ぞと、致した事でござります。モシ、お客樣、どなた樣も、必らず惡う思うて下さりますな。

ト ちつと泣くこなし。

いし　ほんに優しいその話し

とよ　涙がこぼれるわいな。

小雛　深切な志し、其方の尋ねる男が聞かば、さぞや嬉しう思ふであらう……思ひなさんせう、ナウ、皆さん。

稲谷　そりや思はいで。男ばかりか母親も、身腹痛めた娘ぢやもの。

ゆき　エヽ。

稲谷　ハテ、不便な娘の話しぢやなア。

ゆき　初めて逢うたあなた方、さほどにまでいつくしみ、有り難うござりまする。お世話にあづかるお二人様、この身の譯も親々の、家名實名申す筈。どうも云ふに云はれぬ……云はれぬ譯のある、包み隠して……ほんに、長々しい身の上話し。ハイ、もう參りませう。

市　サア／＼、夜の更けぬうち、歸るがいゝ／＼。

ト お雪、立たうとする。

小雛　アヽ、モシ、按摩さん、お前の内は

ゆき　ハイ、どこと定まる所もなう、瞽女のお内を借りて

稲谷　それがマア、どうなるものかいなう……今の女中の手荒いゆゑに、髪もほぐれて、アヽ、あのやうに

小雛　コレ。按摩さん。この頭巾でなと

ト渡す。

ト両人、いろ〳〵思ひ入れあつて

ゆき　エヽ、有り難うござります。何から何までお優しい。お辭儀申さず……先刻にからのお態度、よう似たとは思へども、それは母さん、あなたはお侍ひ。殿御に似たは女中さん。この眼が明いてゐるなれば、せめて母とも夫とも、思うてなりと、お禮申して。

稲谷　尤もぢや。何を隠さう

小雛　アヽ、コレ、名乘り合うては

ゆき　エ。

ト立ちよらうとする。

いし　これはしたり、御寢なるわいなア。

トお雪立つ。

〽繻子つめりのあとつけて、子は安方の安からぬ、親は空にて血の涙、誰が節つけてよう唄ふ、さてこそうられ安方の

大勢 ヤンヤ〳〵。

ト件の唄にて、皆々、思ひ入れあつて奥へ入る。お雪は階子の下へ下りる。半兵衛こなし。

稲谷 コレ、娘、堪忍してくれ〳〵。これがマア、なんと辛抱ならうぞいの。産み落して十七年、里親ばかりの手に育ち、去年賓の親の手へ、來やると其まゝ、思ひがけない二人が災難、心にもない密夫ぞと、疑ひかゝりしその上に、お家の寶を奪ひしも、權三小萬と世上の取り沙汰、この身になつては短刀折紙、尋ね求めて夫へ渡し、その後にては潔う、わしも其方も女敵と、討たれて死んで源五兵衛どのゝ、武士の道を立てゝ進ぜねば、女子の道が立たぬわいの。コレ、娘、絶えて久しい親子の仲、ヤレ娘かと取りついて、名乘りあひもある事か、作り聲して空にのみ、泣く音血を吐く時鳥、子と名乘られぬ世の成行き、親は鬼とも畜生とも、この世からなる阿鼻叫喚、この苦しみを眼前に、見えぬ其方が羨やましいっ いま別れてはこの母も、もうこの世では逢はれぬほどに、無事で暮らしてこの母が、跡とむらうてくれ、コレ、それぱかりが、わしの頼みぢや。

一遍の回向念佛を、コレ、どうぞ唱へてたもいなう。

小雛　お前ばかりか私しも、一緒に死なねば源五兵衛どのへ、侍ひの義理立たず、不義にあらねど是非なくも、密夫になつて覺悟の權三。さはさりながら手がゝりは、お雪が今の詞の端、尋ぬる天國この二階との噂といひ、心憎きはあの盲人、正しく彼れが

稻谷　殊に彌助が來てゐるからは

小雛　渡してやつたる紙入れに　折紙見えぬと云うた町人。

稻谷　割符を合はす、この家の二階。

小雛　こりや、今宵は延されぬわえ……あなたがあつては足手纏ひ。

稻谷　すりやアノわしは

小雛　出逢ふ所は棧橋の

稻谷　河岸に繋いだ船のうち。其方も跡から、權三どの。

小雛　アモシ……お近いうちに

トこなしあつて

稻谷　身共が兩腰。

ト小雛、階子の口へ行き

小雛　お勝どん、お歸りだよ。

ト唄になり、この道具廻る。

本舞臺、矢張り仕切りしたる小座敷。すべて廊下の體。よき所に仕掛けの屏風。よろしく道具とまる

ト矢張り騷ぎ唄にて、彌助お勝、出て來り

かつ　彌助さん、お前、待遠であつたらうの。

彌助　時に、頼んだ事はどうした。

かつ　案じなさんな。帳場に預けた脇差、ソツと隱して持つて來た。この上お前、首尾よく行つたら、いよ〳〵わたしを女房に

彌助　ナニ騙すものか。併し、先刻ちよつと話した折紙は、おれが持つてゐるが、短刀はあの盲目の客の方にある。それにしてもあの權三めを、生けて置いては……彼奴も今夜殺らす工面で、てまへに頼んだこの刃物。

かつ　そんならお前の妹だと云つて、仕替へに來た小雛、ありやァ男か。

彌助　ありやア男よ。侍ひ客といつたのは、コレ。
　　ト囁く。
かつ　エヽ、そんなら主人の
彌助　コレ……二人を殺らすは
かつ　それでも客は、たつた今
彌助　歸りは小船、彼處に待ちうけ、權三も共に
かつ　仕舞ひをつければ、寶はお前が
彌助　ズッシリ金に
かつ　エヽ、嬉しい。
　　ト寄りそうて思ひ入れ。奧にて人音するゆゑ、兩人思ひ入れ。彌助は屛風の中へ隱れる。お勝は奧へ入る。引違へて榊田檢校、探り〳〵出る。跡より九右衞門、附いて出て來り
九右　モシ〳〵、旦那、内證で何の御用でござります。
榊田　コレ、貴樣に用といふのは、コレ、この事よ。
　　ト懷より間違ひし赤木の短刀を出す。

九右　そりやァお前の話しの、天國とやら。

轡田　オツト、靜かに云はつしやい。この短刀を懐へ入れてゐるから、どう撥られるものか、殊に、彌助は居るし、滅多には出されぬ。夜の明けぬうち歸るから、船を拵らへて置いて下さい。

九右　そりやァ呑みこみました。

轡田　頼んだぞや。

ト佃にて、九右衛門、下へ下りる。この時、小雛出かゝり、兩人の話しを聞いてゐて

小雛　お客さん、もうお歸りかえ。

轡田　ヤ、さういふ聲は、小雛でないか。

小雛　アイ、わたしやお前に逢ひたうて、座敷を尋ねて

轡田　そりやァ有り難い。何ぞ用でか〱。

小雛　外の事でもござんせぬ。わたしが兄の彌助どのが、天國とやらいふ短刀を、お前に預けたと申しますが、ほんまの事でござんすかえ。

轡田　アヽ、あの短刀の事か。成る程、おれが預かつて、外へ賣るつもり。先刻も彌助が返せと云つたが、此方も賣れる口があるから、置いて來たと云つたは嘘。矢ツ張り爰に。

ト懐より出して見せる。

小雛　その短刀とやらには、折紙が

榊田　あるとも〳〵。よく知つてゐるな。その折紙は、彌助が持つてゐる。コレ〳〵、小雛、てまへは惡い兄を持つたぞや。どうぞ少々金を出しても、手を切るがよい。さうすれば、この短刀を賣つて、てまへを引取り、女房にするワ。アヽ、あのやうな兄は、縁を切つてしまふがよい。

小雛　そりやモウ、わたしもさう思うてゐやんすが、よもや彌助どのが、何をマア惡い事を

榊田　コレ〳〵、あの彌助は、追ひ落しで人殺し、とんだ舊惡のある惡人だ。なんぼ妹でも、知るまい、知るまい。

小雛　エ、そりや又なんで、それが

榊田　イヤ〳〵、外でもねえ、先刻おれが尋ねたを、てまへが拾つたこの紙入れ。斯ういふ手紙があつたゆゑ、サア〳〵、これを見ればよく解る。讀んで見や〳〵。

ト紙入れのまゝ出して渡す。

小雛　心惡いとは思うてゐれど、よもや其やうな

ト手紙を開き見て

「密々にて申し入れ候ふ、この度我れら主人三太夫こと、殿の御用につき、箱根山寄附の金子百兩持參いたし、當る二十五日、鎌倉出立いたし候ふ、同道は忰權三、さすれば一人にては覺束なく候ふ間、貴公その節、海道に待ちうけ、人足體に見せ、足場よき所にて、權三をやり過し、貴公我れらにて、その金は奪ひ、もし手に餘り候はゞ殺害いたし、金子を奪ひ、分け取りに致したく候ふ、この段内々頼み入り候ふ、跡にて手紙は火中下さるべく候ふ、以上、嘉十郎どのへ、彌助」……ヤヽヽヽ、そんなら親人を殺せしは、嘉十郎といふ盜人め、その相摺りは家來の彌助。さうとは知らず今日まで、助け置いたか。エヽ、殘念な。

ト思ひ入れ。屏風の蔭にて彌助、立ち聞きして、ワナ〳〵慄へ、件の一腰を持つて窺ふ。檢校、心附かず

轡田　コレサ〳〵、其やうに腹を立てずと、意見を以て、それで聞かずばその時こそ、今云ふ通り兄の緣切り。その相談が上分別。それだによつて、おれが女房に

ト抱きつく。小雛、キッとなつて

小雛　現在主を手引きして、殺さすのみか金子を奪ひとり、權三がかゝる艱難も、皆彼奴めが起す事。まだも天道忠臣を、憐れみ給ひ、これまで尋ぬる天國の

ト検校が持つたる短刀を奪ひ取る。悔りして

縛田　ヤ、そんなら小雛は男だな。

ト聲立てるを引ッ捕へ、立廻り。この途端に彌助、屏風の中より白刃を突き出す。小雛、検校を引きつけ、白刃の手をキッと捕へて

小雛　さてこそ彌助だな。

彌助　南無三。

ト逃げんとして手を放す。白刃落ちる。小雛、手早く取りあげる。

縛田　小雛は男だな。

ト聲立てるを、短刀を咬へ、検校を見事に切る。この音に驚ろき、彌助、ソッと夜着をかむる。時の鐘、凄き合ひ方。小雛、彌助を尋ねる思ひ入れ。奥より丹助出て來り

丹助　サア〳〵、旦那、船がようございます。參りませうか。

ト何心なう行かうとして、検校の死骸を見附け

ヤヽ、旦那が切られて…………ヤレ、人殺し。

ト聲立てる。小雛、見事に切り倒す。彌助、慄へ〳〵、夜着を出て、屏風の中へ隠れる。小雛、白刃

を下げ、あたりを窺ひ、彌助が脱ぎ捨てし夜着を怪しみ、上より突いて見る。彌助、これを見て、慄へながら夜着をかむつて縮む。いろ／＼あつて、ト、下へ下りる。奥よりお勝、出て來り

かつ　彌助さん／＼。どこぢやえ。首尾したかえ。權三とやらを人知れず

ト小雛を見て

ヤ、先刻の新造。そんなら、いよ／＼男だな……アレ、人殺し。

ト聲立てる。小雛、切りつける。お勝、有りあふ夜着を打ちつける。いろ／＼立廻つて、お勝の腕を切る。お勝、慄へ／＼、いろ／＼あつて、ト、仕掛けにて、首を切り下げる。小雛、行燈を下げ、方方尋ねる體にて、奥へ入る。奥より九右衞門、喜八、何心なく出て來り、

九右　檢校さん／＼、もう歸らうよ。

喜八　お前、まだ早うござります。

九右　イヤ／＼、外に話しもあるから……アヽコレ、暗い。灯をつけねえか。

喜八　アイ／＼、いま灯しやす、鼠が舐めたか。どうした。

ト尋ねる事。此うち奥より小雛、行燈を下げ、件の手紙の入りし紙入れを咬へ、出て來る。この灯にて、死骸を見附け

九右　ヤ、誰れだか切られて

喜八　ヤ、先刻のお客が……　……ヤ、人殺し〳〵。

ト云はうとするを、小雛、白刃を振りあげ、立廻りあつて、咬へし紙入れを打ちつける。中より手紙落ちる。喜八、これを持つて奥へ逃げて入る。九右衛門、逃げんとする。小雛、切りつける。行燈を踏み倒し、暗き思ひ入れ。

小雛　すりや、彌助めを取り逃がしたか。エヽ、殘念な。

ト思ひ入れ。九右衛門、立廻り。トヾ仕掛けにて小雛、九右衛門をポンと切る。その首、行燈へかぶりつく。木の頭、よろしく、ひやうし

幕

本舞臺、うしろ黒幕、藪疊、上手に柳の大樹、靈巖寺境内と書いたる傍示杭、浪板、すべて下木場、藪の内、入り口。淨心寺の題目太鼓に、法禪寺の一ツ鉦聞え、時の鐘にて幕明く。

ト雨車。向うよりお雪、件の頭巾、下駄、傘にて、杖を突き、歸り道の體にて出て來り、上手から金兵衛出て、眞中にて行きあひ

金兵　イヤア、藪の内から療治に歩く女按摩、いゝ所で逢つた。コレ、ちよつとあの材木の陰へ、來て

くれぬか〳〵。

　ト手を取つて引ッ張る。

ゆき　アヽモシ、悪い事をなされますな。お前は慥か、金兵衛さんとやらではござんせぬか。

金兵　オヽ、おれは金兵衛さんだ。猪の堀から覘つて來た。コレ、どうだ。

ゆき　エヽ、こなさんは、其やうな悪い事なさると、きゝませんぞ。

　ト杖で拂ふ。

金兵　ナニきかねえ。おれがいゝ事をしてやるから、ちよつと來てくれ。

ゆき　うるさうなさると、刃物を持つて居りまするほどに、切りますぞ〳〵。

　ト件の袋入りの天國の短刀を抜いて嚇す。金兵衛、飛びのき、窺ひ

金兵　ヤア、嚇しに云ふかと思へば、わりやァ刺身庖丁を持つてゐるな。それで切られて堪るものか。

　サ、刃物を此方へ、寄越せ〳〵。

ゆき　寄つたら切るぞ…………アレ、誰れぞ來て下さんせいな。

金兵　コレ〳〵、其やうな大きな聲をするものぢやァねえ。ちよつと、あそこへ

ゆき　アレ〳〵、悪い事を

ト滅多切りに突く。金兵衛拂ふ。この時、藪の蔭より、犬二疋出て來り、金兵衛に飛びつく。金兵衛この犬を追うて、お雪にかゝり、持つたる短刀をもぎ取つて、あたりへ捨てる。お雪、驚ろき、尋れる。犬は二疋とも金兵衛へ喰ひつく。

金兵　アイタヽヽヽヽ。畜生め、シイ／＼

ト逃げる。犬は飛びつき、下座へ追うて入る。かすめて禪のツトメ。お雪、白刃を尋れる思ひ入れ。向うより源五兵衛、赤子を懷へ入れ、四十八文のぶらを灯し、小降りの雨を凌ぐ心にて、通りかゝる。爰にて赤子泣くを、いぶりつける。お雪、これを聞いて

ゆき　モシ／＼、どなたかそれへ、お出でなされましたかえ。

源五　アヽ、何ぢややら、暗闇に氣味の惡い。

ト聞えぬ思ひ入れにて、行かうとする。

ゆき　アヽ、モシ、わたしや落した物を尋ねまする。どうぞそこらを御覧じて下さりませ。

源五　何ぢや／＼。見れば頭巾をかぶつて、女のやうでもあり、顏を隱して物云ふやうぢやが、一向に解らぬわえ。

ト怪しむ樣子。その間にお雪、短刀を探り、やう／＼取り得て

ゆき　嬉しや／＼。夫の大事の守り刀。やう／＼取り得て

ト手拭を出し、白刃を拭ふ。源五兵衞、間違へて、心中する女と心得、うろたへて提灯を藪にかけ、駈けよつて、お雪の手を捕へ

源五　コリヤ女中、なんで自害するのぢや。マア／＼、放しやいの。

ゆき　イエ／＼、わたしや自害ぢやござんせぬ。この守り刀は、尋ねる夫の

源五　これはしたり、放しやれといふに。

ト一向に聞えぬゆゑ、殺すまいと無理にもぎ取らうとする。お雪は大切の品ゆゑ、放さぬ思ひ入れ。兩人、放せ放さぬと間違ひの仕組み。源五兵衞、其うち灯にて白刃をキッと見て

ヤ、、、白刃の金色常ならず。これぞ正しく尋ねる天國。どうして女が

ト思ひ入れ。お雪、こなしあつて

ゆき　イエ、この品は、尋ぬる男の赤木作り、その天國の短刀ぢやござりませぬ。どうぞお放しなされて。

源五　これはしたり、惡い合點ぢや。この往來の途絶えを幸ひ、爰で死なうと思ふのか。コレ、さるにてもこの短刀、どうも身共が見覺えの

ゆき　アヽモシ、どうぞ放して

ト振り切らうとする。

源五　ハテ、情の剛い。見所あるゆゑ、その短刀、身共が改め、直ぐに戻す。

ト無理に借りて見たき思ひ入れ。お雪は白刃を取らるゝと心得、放さぬ心。兩方、奪ひ合つて、源五兵衞、取るはずみに、お雪の脾腹をしたゝかに突く。これにて「ワツ」と倒れる。源五兵衞、その聲が耳にかゝらぬゆゑ、白刃をよく／＼見て

ヤヽヽヽ、推量に違はず、これぞ尋ぬる天國の短刀。何者なれば、どうしてこれを

ト此うちお雪、よろぼひ／＼

ゆき　アレ、人殺し／＼。

ト聲立てる。源五兵衞、心附かぬ思ひ入れ。天國に血を注ぎしゆゑ、雷、薄く鳴り出す。

源五　コレ／＼、女中、どうしてこなたは、この短刀を

ト手負ひと知らず、立ちより見て、恟りして

ヤ、こりやこの女が肋をかけて、そんなら怪我で

ゆき　人殺し／＼。

ト喚くた、源五兵衛、介抱して

源五　コレ〳〵、こりや怪我ぢや。氣をしつかりと、コレ女中。

ゆき　アヽモシ、どうぞ助けて下さりませ。赤木作りは夫の形見。それぱかりは、渡さぬ〳〵。

源五　この短刀は、お主のお家にかゝはる寶、是非とも貰ふ。コレ、思はぬ怪我も不便と思へど、これぱかりは、横しまながら

ゆき　これほど云ふに聞入れなく、非道な其方は、盗人ぢやな。

源五　聞入れなくば武士の常、切り取りするも侍ひの

ゆき　エヽ、胴慾な。どうぞ助けて……………コレ、命のうちに兩親に、一日なりとも逢ひたい願ひ。

源五　その惡口も尤もぢや、道理ぢやけれど、コレ、理非辨まへぬも流石は女、どうで存命こりや叶はぬ。不便ながらも、是非に及ばぬ。

ト件の短刀にて切る。お雪、苦しむ。雷、段々に鳴り出す。一ツ鉦、凄き合ひ方。お雪、有りあふ傘にて拂ふ。提灯落ちて消え、暗き思ひ入れ。これより兩人とも盲目同然の立廻り。よきほどに白刃な傘を突き立て、よき所へ落す。この時、金兵衛、窺ひ〳〵出て來る。此うちお雪「人殺し〳〵」とよろぼひ廻る。源五兵衛、お雪に探りよつて

今の天國、どうぞ身共に〳〵。

ゆき　おのれが取つて置きながら

源五　ヤ、女が持つたる天國が

ゆき　赤木作りを、どうぞ返して

ト探り〳〵立ちかゝる。雷きびしく鳴る。金兵衛、尋ね廻り、件の短刀の立ちし傘を取つて行かうとする。源五兵衛、探り寄つて引きつける。立廻りのうち、思はず前の流れへ打ちこむ。短刀刺したるまゝ、傘は流れて入る。この時、雷きびしく鳴り、落ちる事あつて、正面の柳へ煙硝火立つて、木は二つに裂ける。此はずみに三人とも、ハッと倒れる。源五兵衛、やう〳〵心附き、起きあがる。この時、雨晴れて雷やみ、空へ月出る。源五兵衛、お雪を見附け

源五　手負ひの女、助け置いては後日の難儀。不便ながらも

ト窺ひよつて一腰を抜き、お雪に止めを刺さんと、胸許を引明け、月の光に、よく〳〵見て

ヤヽヽヽ、姿形は變れども、娘の雪に似寄りの女。

トお雪これを聞いて

ゆき　その名を知つた盗人めは

源五　いよ〳〵われがお雪なら、おりや其方が親。

ゆき　千葉の御家中、薩摩氏。

源五　オヽ、源五兵衛ぢや〳〵。

ゆき　ナニ、父さんかいなア〳〵。

ト縋りつき、顔見たき心にて

わたしや眼が見えぬわいな〳〵。父さん、逢ひたうござんす。お顔が見たい。よう息災でござんしたなう。

ト縋りついて思ひ入れ。

源五　尤もぢや〳〵。娘と知らで、現在親が

ト爰にて兩耳聞える思ひ入れにて

ヤ、娘が云ふ事、我れが云ふ事、今の今まで潰れしこの耳が、速やかに聞えるは

トあたりの柳の裂けたるを見附け

さてこそ今のあの光り、時ならぬ雷と、思ひしばかり聞えぬ耳、あたりに落雷いたせし様子、その鳴る音に思はずも、耳が明いたか、病は平癒、眞人間になつたるか。エヽ、忝い。

ト思ひ入れ。

ゆき　あなたの病氣は癒りましたか。それでわたしも、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。

源五　オヽ、喜んでくれ、コレ娘。……今さら病は癒つても、可哀や娘は親の身で

ゆき　死ぬるも因果。あれほど譯を云うても、その時は

源五　聞えぬ耳に情ない、現在娘を、聾の悲しさ。

ゆき　わたしも目かいの見えぬが因果。

源五　手しほで育てぬ其方ゆゑに

ゆき　お顔もお聲もうろ覺え。

源五　よも娘とも

ゆき　父さんとも

源五　只一筋に短刀が

ゆき　その短刀とは、こりやコレ赤木の

源五　イヽヤ、あれこそ誠の天國。

ゆき　でも母さんが箱根にて

源五　すりや、女房が渡したか。

ゆき　アイ、わたしが戀しい權三さま、あなたの形見と思へとあつて

源五　あの小萬めが渡したか……………すりや、二人とも、いよ〳〵盜賊。

　　トきつと思ひ入れ。お雪、心附いたる思ひ入れにて

ゆき　イエ〳〵、よもや母さんが、お家の寶をなんのその。いま思へば宵のうち、茶屋の二階で天國の短刀持つた客人と、家内の衆のその噂、聞くと一圖に欲しうなり、帶締め直すその時に、どうか變りしやうなりしが、そんならあの時

源五　權三と小萬が短刀を、持つて駈落ちしたにもせよ、赤木作りと僞はつて、其方に渡さんやうもなし。そんなら其方が云ふ通り、外に天國所持せし者と、その時思はず取り替り、其方が持つたる天國の、その證據には云ひ傳ふ、その刃にて血をあやせば、時ならずして雷鳴發し、さてこそ爰へかゝりし雷。

ゆき　目かいの見えぬわたしの麁相が、廻り〳〵て父さんの

源五　尋ぬる短刀手に入りしも、深手を負うたる娘が働らき。

ゆき　死ぬる命は惜しまねど、心がゝりは權三さん。アノ母さんのお命も、どうぞ助ける

ト縋つて思ひ入れ。

源五　助けたうても刀の手前。

ゆき　すりや母さんも、我が夫も…………ハア、。

ト氣ないらち、ウンと倒るゝ。源五兵衛、駈けより、介抱する。この時、金兵衛心づき、件の傘を奪ぬる心。

源五　コリヤ娘、心を慥かに

トいろ／＼こなし。金兵衛、流るゝ傘を月あかりに見附けて

金兵　流るゝ傘は、慥かに天國。

ト行かうとするを引とめ

源五　流れを慕うて

ト掻きのけ、行かうとする。お雪「アッ」と倒れるゆゑ、心を殘して立ちもどり、お雪を抱へて思ひ入れ。金兵衛、思ひ入れあつて、源五兵衛へかゝるを、投げのけ、お雪、息を引取るゆゑ、源五兵衛こなし。

南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト お雪、落入る。源五兵衞、泣き落す。ゴン〳〵の送りにて、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方、陸の體。その外、浪板大分。下手、樋の口。枯れ葭、水門を取りつけ、猪の堀のあたり、材木置き場。爰に小船一艘、内に半兵衞、小萬の形に變り、上へ羽織を着て、彌助、小萬を口說きゐる樣子。時の鐘、木魚の合ひ方にて道具とまる。

ト 彌助、無體に抱きつく。小萬、いろ〳〵あつて

小萬 コリヤ彌助、そちや氣が違うてか。わしに向つて其やうな、不義がましい、家來の身で、こゝな不所存者めが。

彌助 モシ〳〵、家來が主のお内儀を、口說く事が御法度かえ。さう云はずとも、家來の彌助ハ

ト うるさくまとふ。小萬、突きのけ、こなしあつて

小萬 おのれ、無體な事しをつて、今にも權三どのが見えたら、きく事ぢやないぞ。それにわが身は短刀折紙、いつぞや箱根を立退く砌り、權三どのから預かつて、今に渡さぬ橫道者。サ、二品をたつた今、爰へ出しや〳〵。

彌助　コレ〳〵、その二品も短刀ばかりは、賣り口あるゆゑ人手へ渡し、わしが方には、コレ、折紙ばかり。

ト薄箱に入れあるを出して

コレ〳〵、この通り肌身も離さぬ。これをお前に渡さうが、河岸をついたる小船の中、蒲團かむつて、きまつておくれな。

ト寄るをキッと留めて

小萬　又しても〳〵、無體のあり條。その折紙をわしに渡しや。權三が來てから短刀の詮議。サ、それを云や〳〵。

彌助　モシ〳〵、お前は何も知るまいが、女に化けた權三どの、金英樓の人殺し。その科ゆゑに繩にかゝり、暗い所へ納めたワ。

小萬　ヤ、、すりや、權三どのには人殺しの科ゆゑに、繩にかゝつて引かれたか。

彌助　先刻、牢へ入りました。

小萬　すりやアノ誠か、眞實か。最前までも短刀折紙、其方の手より受取つて、殿へ差上げ我が夫に、尋常に討たるゝ覺悟。その心ゆゑお雪にも、逢うたなれども他人向き、詞交さず別れし娘。もう

さう聞いてはその二品、わしが手から差上げる。サ、その折紙も、渡しや〳〵。
ト彌助にむしやぶりつく。
彌助　サア〳〵、渡してやるその代り、わしにも少しはお情を
トしつかうする。小萬、思ひ入れあつて
小萬　サ、從ふほどに、その折紙
ト手早く取つて、有りあふ刀へ手をかける。彌助、これを捕へ
彌助　手輕く騙して、おれを切る氣か。それでは滅多に折紙は
トもぎ取らうとする。
小萬　イヽヤ渡さぬ。なんのおのれに
ト船より向うへ飛ばうとする。彌助、折紙の箱を取返さんと、兩人、船の内にて奪ひ合ひ、思はず小萬、折紙の箱を持つたるまゝ、前の川へ落ちる。彌助、悔りして
彌助　南無三、折紙ぐるみ小萬は川へ……………まだもそこらに
ト肌を脫ぎ、川の中へ手を差しこむ。この手を川の底よりしつかと捕へる。
さうだ〳〵。彌助がこの手を、しつかり取つた。

ト船へ引上げんとする。下より小雛の權三、件の短刀を咬へ、白刃を提げ、彌助が手に捕まり、船へヌツと上がる。彌助、小萬と心得。

危ない事だ。餘ッほど水を飲んだであらう。

ト介抱せんとして、兩人、顏見合せ

權三　彌助めか。

彌助　ヤ、權三どのか。

權三　うぬ、よくも親人を

トこの隙に彌助、逃げんとする。權三、捕へ

おのれが方に折紙ある筈。それ渡せ。

彌助　その折紙はたつた今、小萬が持つて、この川へ、身を投げた〳〵。

權三　すりや、小萬どのは

ト川へ思ひ入れ。

彌助　こなたも、後から

ト有りあふ刀を抜き、切りつけるを、キツと留めて

權三　よくもおのれは、嘉十郎といふ、相撲りを頼んで我が親人を、去年小和田の並木にて

彌助　それ知られたら

ト振り切つて、船より陸へ飛びこし、逃げんとする。權三同じく飛び上がつて、彌助を切り下げる。時の鐘、かすめて屋根船の佃騒ぎ聞え、兩人立廻りあつて、彌助、糊紅になり、のたうつて倒れる。權三、乘りかゝり、止めを刺し、持つたる袋入りの守り刀を、よく〳〵見て

權三　ヤヽヽヽ、こりやコレ所持せし赤木の短刀、いつぞやお雪に渡せしと、小萬どのゝ物語り。それをどうして、あの盲人が……殊に折紙、水中へ、小萬どのともに入水とあれば、潮の滿干を詮議せん。あつて益なきこの似せ物。騙かられしか。

トあたりへ捨てる。時の鐘、誂らへの合ひ方。權三、小船へ飛び乗り、棹さして、川を漕れる心にて花道へかゝる。この途端に蘆間を掻きわけ、源五兵衛、窺ひ出て、捨てある赤木作りの短刀を拾ふ。權三は船に棹さし、花道の方へ乗り出す。この時、船の前へ、天國の短刀の白刃差したる傘、流れ來るを、棹にて掻きよせ、權三取りあげ、月にかざす。源五兵衛は赤木の短刀を月にかざし、兩人、思ひ入れあつて

源五　こりやコレ權三が、守り刀の赤木の短刀。

權三　これぞ尋ぬる天國の

源五　ヤ、さういふ聲は

權三　源五兵衞どのか。

源五　權三め。

權三　アモシ、御尤もだが、短刀は手に入つても、折紙揃はぬ其うちは、權三が命は、預かりましたぞ

トこれにて船の櫓を取る。木の頭、源五兵衞、キツと見得。よろしく、ひやうし、幕

ト幕の外、權三、短刀を咬へ、船を押して花道へかゝる。時の鐘の送りにて、入る。知らせにつき、シャギリ。

第二番目　三幕目　山谷八百屋の場

役名――八百屋下女、おさん　實ハ　宅左衞門娘、おさん。半兵衞女房、お千代。藝者、鶴吉　實ハ　腰元二の宮。八百屋母、お虎。出石千太郎。出石宅左衞門。八百屋丁稚、松太。判人、大磯屋傳三。若い者、喜八。船頭、音松。乞食、源。同、辰。野伏り、庚申塚の嘉十。八百屋半兵衞。

本舞臺、三間の間、一面の二階家。眞中に二間、障子明け閉てあり、この左右地袋、中庭に入り口山形に八の字を染めぬきたる軒暖簾をかけ、平舞臺、上手一間の障子屋體、此うち一間の押入れ、小袖簞笥、これに續いて暖簾口。下手、乾物簞笥、その外、乾物見世の書割り、この前に青物の棚、流し、この上に人參午旁葱菜、その外いろ〳〵の青物を並べ、いつもの所に門口、この外、路地口。下座の口を板塀にて見切り、すべて淺草山谷八百屋のかゝりよろしく、爰にお千代、世話女房の拵らへ。傳三前幕の判人、喜八並んでゐる。てんつゝ、通り神樂にて幕明く。

傳三　モシ〳〵、くれ〴〵も旦那が仰しやるには、後金の事は内へ掛合つて、受取るやうにと、ナア、喜八公。

千代　そりや、いづれ後方までには、どうともしやんせう程に、マア、こちの人の戻らしやんした上の事いなナ。

喜八　マア〳〵、お歸りまでお待ち申しませう。

傳三　なんにしろ、旦那もモウ戻りさうなものだが。

ト流行り唄になり、花道より半兵衛、音松、出て來り、舞臺へ來て

半兵　サア〳〵、戻つたぞ〳〵。

ト内を見て

コレ〳〵、てまへ達は、よくおれ一人置いて、先へ來たな。

兩人　マア、旦那、お歸りなされましたか。

菅松　オヽ、こりやァみんな御苦勞であつた。おかみさん、この間はお目にかゝりませぬ。

ト此うち半兵衞、上の方へ通る。

傳三　モシ〳〵、旦那、只今鶴吉さんをお連れ申して、お前にお渡し申しましたが、後金の五十兩は、どうあつても直ぐに、お貰ひ申して參らにやァなりませぬ。

半兵　そりやァ合點だが、今といつちやァその金は

千代　サア、その後金の事は、得意先の拂ひの參る、心當てもござりますれば、あの下女のさんと、松太を取りにやりましたれば、今に戻りますでござりませうほどに、どうぞそれまで、待つて下さんせいなァ。

喜八　コレ〳〵、おかみさんがあのやうに云はつしやる事、よも間違ひはありますまい。

傳三　ようござります。そんなら晩までのところは待ちますよ。

菅松　ほんに、おかみさんに、この間のお禮も云はなんだ。

ト懷より茶屋場の菓子を出し

モシ、この菓子は、昨夜金英樓の二階で貰つたを、火繩箱へ入れて持つて參りましたが、お慰みにおあがりなされませ。

ト　お千代の前へ出す。

千代　アイ〳〵、ほんに深切な。こりや、お忝うござんす。

喜八　時に昨夜の騒動で、内は亂騒ぎ。もう開き扇としやせうか。

半兵　ほんに、先刻ちよつと噂を聞いたが、てまへもとんだ目にあつたさうだな。

喜八　左やうサ。モシ、お聞きなさい。餘ッほどなあわて者だな。切られたにしては痛くねえと、探つて見たら、ぶッつけられた紙入れにあつたこの手紙。

ト前幕の手紙を出し

おらァさつぱり讀めねえ。コレ、音公、お前、ちよつと讀んで見ねえか。

音松　エヽ、薄ッ氣味の惡い、おらァそんな物は知らねえ。

ト手紙を引ッたくつて捨てる。

傳三　モシ〳〵、おかみさん、そんなら晩まで間違ひなく、お頼み申します。幸ひ今夜は、この表の琴

の師匠に、浚ひがあるから、それを聴いてゐますから、歸りにお寄り申しませう。

音松　そんなら、もうお暇申しませう。

喜八　旦那、おめでたうござります。

半兵　オヽ、みんな大儀であつた。

傳三　鶴吉さんは、慥かに渡しましたよ。

千代　アイ／＼。そんなら傳三さん、皆ようござんした。

ト通り神樂になり、傳三は下の路地へ入る。音松と喜八は花道へ入る。兩人殘り

半兵　あの藝者の鶴吉を、今日といふ今日、おれが内へ連れては來たが、後金の五十兩といふ金の工面もし間違つたその時は

トお千代と顏見合せ、思ひ入れあつて

ドレ、一つ飲み直さうか。

ト唄になり、半兵衞、ツイと奧へ入り、お千代殘る。直ぐにこの唄にて、向うより徳松、丁稚の形。小提灯を持ち、出てくる。跡よりお虎、後家の形。おさん、松太、御膳籠を差擔ひに擔ぎし見得、これなお虎、引ッ張つて出て來り

とら　ヤイ〳〵、キリ〳〵と戻り居らぬか。

　ト云ひ〳〵出て来り

ウヂ〳〵せずと、行き居らぬか。

　ト二人を引廻して、突きやる。

徳松　阿母様、危なうござります。

とら　オヽ、伊勢八の小僧どの。もうよい程に、戻つて下され。

徳松　でも、お宿までお送り申しませう。

とら　イヤ〳〵、それには及ばぬ。よう送つて下された。よろしく申して下され。

徳松　左様なら、この間にお出でなされまし。

　ト引返して入る。

とら　サア〳〵、早く歩き居らぬか。

さん　でも、此まゝお内へ戻りましては

松太　それ〳〵、この間に、ちよつと一歸り。

　ト行かうとする。

とら　アヽ、そんならわいら、どうでも內の代物を、盗み出したに違ひはないな。
兩人　どう致して左樣な事を
とら　ないなら早く行き居らぬか。
兩人　ハイ、參ります〳〵。
　　ト唄の切れにて、お虎、荷繩を捕へ、內へ引戻してくる。お千代、見て
千代　母さん、お歸りなされましたかいな。
とら　アイ、わしが內ぢやもの、歸らいでは……コレ、日が暮れゝば暗うなるは知れてあるよ。迎ひの
　　者寄越したとて、ほんに罰も當るまいに。
千代　ハイ、お迎ひもあけうと存じましたが、折惡う下女も松太も、使ひに參つて
とら　その使ひも、合點がゆかぬゆゑ、道で逢うて連れて戻つた。二人ながら、入り居らぬか。
　　トこれにて二人は、手持ちなう入る。
千代　ヤ、そんなら其方衆も
さん　阿母樣にお目にかゝり、お內へ歸れと仰しやるゆゑ、ツイ存じながら
　　トうぢ〳〵する。

とら　ヲヽ、わしが見附けたばつかりに、連れて戻つた。コレ、さんよ、わいらが持出したその籠の内
わしがよう改めて

ト立ちかゝる。おさん隔て

さん　ハイ、こりや何でもござりませぬ。
とら　何でもないものを、なんで又持出した。

ト二人を掻きのけ、籠の中を見て

籠の中には千代が着類と、また外に古袷、古布子、夜夜中に持出すは、こりやおのれ、盗み出し
て駈落ちするのか。
兩人　アヽ、滅相な。左樣な事を
とら　さうでなくば、なぜ持出す。その始末を吐かし居らぬか。
松太　アヽ、申します〳〵。私しが此やうに、布子も帶も脱ぎましたは、アヽ、何かであつた。

ト籠の内なる布子と帶を取つて

アヽ、思ひ出されぬ。その譯ちよつとお家主へ行て、問うて參りませう。

ト布子を抱へて走り入る。

とら　あのやうな白痴ばかり云うてゐるから、見世に一向締りがない。下女や丁稚の着類は格別、千代が小袖も頭の道具も持出すは、主と家來が馴れ合うて、內の道具を先へこかし、わし一人に難儀をかける工面しやるのか。

千代　イエ〳〵、勿體ない、左樣な事を

とら　エヽ、また吐かすのか。おのれら、ぶちのめして白狀させて

ト棕櫚箒を取つて二人をくらはす。お千代とめる。この時、奥より半兵衛出て來り、これをとめて

半兵　モシ〳〵、マア、お待ちなされませ〳〵。

とら　こりや半兵衛、珍らしう內に居やつた。わが身は知るまいが、お千代を始め此奴等が、おのれ〳〵の着類を集め、この暗いのに持出すは、云ひ合せの駈落ちか。きつと詮議をしやいなう。

半兵　それは不屆き、憎い奴でござります。コレ、女房、てまへも留守に居ながら、なんの番をして居るのだ。大方それも例の質置き。質屋へやるも何もかも、この半兵衛がよう知つてゐる。ナ、定めし何かの。ナ、承知でゐるが、コレ、質を置くなら、主の半兵衛、おれが置くわえ。

トきつと云ふ。

千代　さうではござんせうが、母さんへもお前にも、沙汰せぬばかりは、わたしが惡う

とら　オヽ、悪いく\〵。なんぼわれが着類でも、云はゞ亭主の拵らへた品、沙汰なしにしてよいものか、なう。半兵衞、おぬしも又この頃は、内を外なる深川通ひ。いま講中の衆の話しには、その馴染の藝者とやら、此方の内へ連れて來たとの事。アイ、めでたうござる。その藝者どのに、近附きになりませう。どこにござるく\〵。

半兵　アヽ、モシく\〵、その譯合ひもお聞きなら、成る程、お前にもお逢はせ申しませうが、マアく\〵お靜かに仰しやりませう。

とら　それ見やれ。此方から口むしつたら、ツイ白狀する愚なこなた。女房に飽きたなら、去つてしまやたとへ金遣うた藝者でも、男の心と秋の空。コレ、そいつらばかりが女ぢやない。矢ッ張り内にも色よいものが

ト思ひ入れ。

半兵　イエモウ、それと申すも、ツイお屋敷の權門に、行きかゝつた深川遊び。ハイ、私しが不埒でござりまする。お氣に違ひましたら、勘當なされませ。どうで小糠三合の私し、誠に身持ちが惡うござりました。

とら　イヤく\〵、なんぼわが身が藝子狂ひしようが、わしに知らさぬやうにするのも女房の勤め。母親

に氣を揉ますも、女房の不働らき。こりや千代が悪い。わが身が悪いわいの。

千代　ハイ、心附きませぬ私し。成る程、私しが麁相でござりまする。

とら　さうなうては……コレ、一體其方は、笹野三太夫といふ侍ひの娘。幼ない時から、死なれた仁右衛門どのが養子娘。聟の半兵衛も、何とやらいふ侍ひの、世話になつた武士あがり。牝鳥すゝめて牡鳥と、道樂になつたのも、みな千代が悪いから。佛の事を譏るぢやないが、死んだ先妻が、いらざる千代を貰うたで、今では八百屋の身代の、害になるのはこの女。聞けば親の三太夫どのとやらは、切られて死んだとの事。その子の權三も行くへなう、云はゞ縁起の悪い女ぢやゆゑ、身上直しに勘當して、追ひ出したなら、內の工面も直らうわいの。

さん　アヽ、モシ〳〵、そりや悪い思し召しでござりまする。お果てなされた御夫婦樣が、養女になされたお千代樣、そのお方をお前樣が、今さら左樣なされては、御先祖へ立ちますまい。そりやお心違ひでござりませう。

ト云はうとする。

とら　默りや。何をわれが小差出た。今の身上叩いて、先祖も萬艘もいつた事ぢやない。半兵衛は入り聟の義理がある。死なれた衆に義理はない。なう、半兵衛、さうぢやないか。

半兵　ハイ、どうか左樣なものでござりませう。

　　ト思ひ入れ。通り神樂になり、向うより嘉十、前幕の非人にて出て來り、門口より内を窺ふ。お千代こなしあつて

千代　もと私しは武家の胤、町家のお役には立ちますまいが、只今お内を出ましては、かゝらふ島の無い私し。どうぞ母さんの御勘辨を持ちまして、水仕奉公も同然な、身になりましても、どうぞお内に

とら　イヽヤ、ならぬ。飯炊き女同然な、身分になつても半兵衞と、別れとむないその根性。猶ならぬサ、出てうせい〳〵。

　　トお千代を引立てる。皆々とめる。

半兵　アヽ、モシ〳〵、お腹の立つのも尤もぢやが、幼少から養女に參つたこのお千代。こりや、私しが出て參りませう。

千代　アヽモシ、お前が爰を出なさんすなら、わたしもお内を、義理にも出ねばなりませぬ。

とら　イヤ〳〵〳〵、それでは二人先々で、一つにならうが、危ないもの、二人は出されぬ。千代めばかりは内には置かぬ。

さん　モシ〳〵、阿母様、左やう仰しやつては、どう云へば斯う云ふとやら申す譬への通り、お前様が
あまり強情に聞えまして、世間の思惑
とら　ヤイ〳〵。何をおのれが、飯炊き女の癖に。わしが又強情を云へばどうする。口の過ぎた下素女
め。うぬ、棕櫚箒でくらはせて
ト箒を取つて振りあげる。お千代、縋つて
千代　アヽモシ、近所へ外聞が悪うございます。
ト留める。
とら　何が外聞が悪い。わしが折檻するを、こりやわが身、奉公人の贔屓するのか。
千代　イエ〳〵、左様ではござりませねど
とら　左様でなくば退いてゐや。下女めが腰押しすりや、その相伴に、わが身も合せて
トお千代を打つ。
さん　これはしたり、なんのあなたを
ト留める。
とら　エヽうるさい奴等ぢや。いつその事に、二人ながら

トおさんを箒にてくらはす。お千代、留めると、これもしたゝかに打つ。半兵衛、留めるを横に[illegible]
法の體。門口の嘉十、ズツと入り、お虎を突きのけ、箒を引ッたくる。皆々見て

千さ　ヤ、わが身はこの程

嘉十　アヽモシ、存じませぬ。私しは非人、物貰ひ。旦那方にお近寄きはござりませぬぞ。ハイ、乞食でござります〳〵。

半兵　その物貰ひが、此方の見世へ

とら　乞食のうぬらが何知つて。身穢ない非人め、なぜ此わしを……ヤ、わが身は

トよく〳〵見て、思ひ入れ。

嘉十　乞食でも非人でも、わしはこなたの實の息子。母さん、お達者で、おめでたうござります。

トこれにて皆々悔りする。

半兵　コレ、非人、おれが母御を母さんとは

千代　どうも合點の

嘉十　參らぬも尤も。八百屋の母御は乞食の阿母、その連合ひは八右衞門とて、柴又村で水呑み百姓、姉は藝者で小萬とやら、先は知らねど家中の女房。弟のわしは嘉十郎。こなさんの悪根性を、親

仁が見限り、姉御を連れて別れ〳〵。こなたは在所を出た時は、わしを連れてのお助け嬶ア、この江戸へ出て月雇ひ。血筋を引いた此わしは、十歳の年からぐれになり、今では宿無し苦しがり、それに引かへこなさんは、有卦に入つたか出世して、爰のお内の御隠居様と、聞いたによつて餘所ながら、錢貰ひにと來たところ、昔に變らぬ惡根性。もういゝ加減に直して下さい。直さざアこなさん逆さまに、無間地獄がものはあるわえ。

ト思ひ入れ。お虎、こなしあつて

とら　久しぶりの息子どの、その態で來て母親に、よう天井を見せやつた。成る程、以前はわしも宿無し、お千代は爰のお娘御。先妻が死なれたゆゑ、雇ひ嬶アがズル〳〵ベツタリ、いかにも八百屋の阿母様、息子の意見がこの身に浸みて、また宿無しになりませう……ハイ〳〵、お孃様、御免なされませ。私しは宿無し。お娘御のお千代さまは、お屋敷生れ。爰のお内でお育て申した、私しはハイ、宿無しでござりまする。身穢ないゆゑ、只今急に追ひ出されまする。ハイ、宿無し婆アに、御報謝なされて下さりませ。

ト喚く。皆々思ひ入れ。お千代、オロ〳〵して

千代　ア、モシ、以前は以前、今は今、八百屋の母さん、さう仰しやつては世間の手前。どうぞ御料簡

なされて下さりませ。

とら　イエ〳〵わたしや、ハイ、宿無しでござります。

さん　これはしたり、あのやうに仰しやつてゞござりまする。どうぞ御堪忍なされまして

半兵　あいらが申すばかりでなく、この半兵衛めがお詫び言。母者人、何分御料簡なされまして

とら　聟どのゝ詫び言なら、乞食々々もこれぎりに、爰の内に居てやるが、内外の奴等は勿論、千代も
この上、孝行盡すか。

半兵　そりやモウ、きつと申しつけまする。コレ、女房、あの通りぢや。内外の者もお氣に違ふと、主
のおれが料簡せぬぞ。

さん　ハイ〳〵、きつと守りまする。

千代　お心が直りまして、エヽ、有り難うござりまする。

とら　喜び次手に、コレ、半兵衛、いま來たわしが悴は、こなた、どうせうと思やるぞ。

半兵　ハテ、お訊きなうても只今から、この半兵衛が弟分。今日からわしが、片腕とも賴みまするて。

とら　すりや、この悴を弟分に

嘉十　アヽモシ、それではわしが、どうやら強請りに來たやうで

半兵　イヤ、強請りでも騙りでも、緣者のこなた、見捨てはせぬ。
嘉十　そりやア忝い。
とら　流石は聟どの。併し、わしが方から賴みはせぬ。面々勝手にする事なら
半兵　身に引受けて世話をします………コレ、さんよ、奥にあるわしが着替へ、なんぞ見附けて、ぬしに着せかへ
さん　ハイ〳〵、畏まりました。モシ、お千代さま、旦那樣があゝ仰しやつては、どうでもあの乞食……イヤ、お乞食樣は、こちのお內の掛り人。こりや、滅多に御油斷はなりませぬぞえ。
千代　わしもさうは思へども、主の云はんす事ゆゑに
半兵　亭主の好きな赤鰯、さう思つてゐやれ。
とら　それともお千代が不承知なら、息子を連れて出て行かうか。
千代　イエ〳〵、あなたは夫の弟御樣。
さん　併しお內は藝者のお妾、その上非人の居候ふ。
とら　どうしたと。
さん　イエ、一向な、御子息樣でござります。

嘉十　半兵衞どのゝ着替へなと、着替へてお前のお側にゐるが

ト於千代の側へ行く。半兵衞思ひ入れ。お千代、ツンとする。

さん　アヽコレ

トおさん、隔てんとして、嘉十が小指を見附ける。嘉十もおさんが小指を見附ける。思ひ入れ。

お前の小指は

嘉十　思はず怪我で………てまへの小指は

さん　生れもつかぬ

嘉十　ヤ。

とら　その指が

さん　怪我でござりまする。

嘉十　ハアヽ。

ト思ひ入れ。

半兵　着替へてござりませ。

ト唄になり、お虎先に嘉十を連れ、お千代おさん、心得ぬこなしにて、奥へ入る。半兵衞殘つて、思

ひ入れあり

そんなら今のが悪者の、嘉十と噂のある男。あの阿母の實の息子。親は百姓八右衛門、姉といふのが小萬とあれば、權三とやらと

ト思ひ入れ。奥より鶴吉、走り出て來り

鶴吉 モシ、半兵衛さん、いま奥へ阿母樣がござんして、わたしと半兵衛が仲は、いつから深うならんしたと、それは〳〵しみしつかう聞かしやんして、わたしや煩さうてなりませぬ。どうぞあの婆さんの居ぬ所へ、置いて下さんせいなア。

半兵 ハテ、阿母に逢はないといつて、わづか一軒の内で、どう其やうに

鶴吉 おやというて、どこになりと居りませうほどに、ござんせぬ所へ

半兵 アヽ、そいつはちつとむつかしい。どこへ置かうな。二階は阿母の居間なり、藏の二階へも上がるであらうし、オヽ、いつそ、この押入れの内がよい。爰だ〳〵。

ト正面の押入れを明け、この中へ鶴吉を隠し

敷物があるまい。幸ひ爰の毛氈を

ト件の毛氈を押入れへ入れ

コレ、棧橋は爰でもよしか。渡ると云つたら、半兵衛が客だと云ひねえ。ハヽヽヽヽヽ。

ト戸をさす。唄になり、半兵衛、上の障子の内へ入る。この唄をかり、暖簾口よりおさん、針箱に繼ぎ物を抱へ、出て來り

さん アヽ、しんどや／＼。やう／＼勝手元は片附いてしまうた。これからゆるりと髪なと結うて……と云ふ所ぢやが、朋輩と云うては無し。また明日の仕掛けもせざなるまいし、昨夜繼ぎさして置いた仕事もあり、マア／＼、この繼ぎ物から片付けて置きませう。アヽ、これを思へば、せまいものは下女奉公ぢやなア……何やら爰に反古が……幸ひ茶焙じへ。

ト最前の手紙のちぎれの半分を拾つて茶焙じの枠へかけ、繼ぎ物にかゝる。路地の内にて、しめやかなる琴唄になる。おさん、これを聞いて

アヽ、ありや裏の所の師匠で、月次の浚ひか。あの琴唄を聽きながら、木綿物の繼ぎはぎも、そぐはぬものぢやなア。

ト矢張り仕事してゐる。向うより料理屋の男二人、二藤といふぶら提灯をともし、御膳籠に仕出しの仕込みたるを擔ぎ、出て來り

若甲 浚ひのある琴の師匠は、慥かあの八百屋の裏だ。

同乙　いゝかよ。とんだ所へやるまいぞよ。

若甲　ナニ、あの裏に逢ひないが、念のため、表の八百屋で訊いて見よう。

同乙　さうするがよい〳〵。

若甲　モシ、ちつと物が訊きたうござります。

ト門口を覗き、おさんが居眠りしてゐるを見て

アヽ、女中が仕事をしながら、眠つてゐるワ。訊くがものはない。

同乙　裏へ入つて訊いて見よう。

ト云つて路地へ入る。矢張り琴唄、これをかりて向うより千太郎、一本差しにて出て來り、花道にて

千太　昨日お屋敷の便りを聞けば、いよ〳〵二幅のあの畫像、今明日に在所知れねば、大殿には御切腹さすれば親人も重き罪科に…………それを聞きつゝウカ〳〵と、どうマア斯うしてゐられうぞ。それにつけても、半兵衛どのに逢うた上で

ト門口にて内を窺ひゐる。此うちおさん、矢張り居眠りしてゐる。捨て鐘、琴唄。奥より半兵衛、出て來り、おさんを見て

半兵　アヽ、おさんが繼ぎ物を仕掛けて、もう船を漕ぎ出すか。併し、居眠るが、飯炊き女の當り前だ

な。

ト嘲笑ふ。この聲を門口の千太郎聞いて

千太　ヤ、半兵衛どの、こなたに逢ひたう

半兵　千太郎さま　して、まだ寶の手懸りは。

千太　コレ、半兵衛どの、かねぐ\尋ぬる二幅の掛け物、最早日限りも今明日、いよぐ\その品手に入らねば、お家の大事。さすれば父も御切腹。その儀に身共、當惑いたして

半兵　御尤もでござりまする。この半兵衛も如才なう、尋ねまするが、今にその品

ト思ひ入れ。

お氣遣ひなされまするな。今明日には、きつと在所も……モシ、千太郎さま、殊にお前の苦になさる、あの深川の

千太　以前は二の宮、今は藝者の

半兵　その一品は手に入れました。

千太　半兵衛どの、忝い、が、寶が出ねば、この身を捨てゝ

半兵　これはしたり、親御様より御恩を受けし私しが、いづれあの品尋ねるまでは、短氣なお心。

ト思ひ入れあり

一寸伸びれば尋とやら。」その憂晴らしは、モシ

ト千太郎を連れ、件の押入れへかゝり、そつと戸を明ける。鶴吉見て

鶴吉 ヤ、千太郎さん

千太 鶴吉か。

半兵 アイ、渡りやす。

ト千太郎を内へ突きこむ。この時

さん 泥坊々々。ソレ、泥坊が

ト聲するゆゑ、半兵衛うろたへ、シヤンと戸を閉す。合ひ方、捨て鐘。おさん。鼾をかく。半兵衛、
思ひ入れして

半兵 おきやアがれ。鼾をかくな。そんなら今の泥坊は、此奴が寐言か。エヽ、色氣のねえ。」併し、晝の疲れに夜に入ると、あの通り針仕事。」但しは水仕のおさんでも、下女相應に苦になる事が

トこの時おさん、居直つて思ひ入れ。

さん あればこそ現にも。モシ、旦那様

半兵　ナニ。

　　ト窺ひ見る。おさん、また居眠る思ひ入れ。

　べら坊め。ドレ、寐言を聞いて、帳合ひにでもかゝらうか。

　　ト變つた合ひ方になり、半兵衞、かけ硯、帳箱、行燈、算盤を取つて、勘定にかゝる。

さん　夜泊りなされぬ旦那様が、降つて湧いた深川通ひ。それを悋氣もなされぬは、貞女なお千代さま
あのむづかしい母御様、目顔を忍び朝な／＼、觀音様へ日參と、お內を出るのはお見世の代物、
それ買出しに、女子のあるまい

　　ト此うち半兵衞、フツと聞き咎め

半兵　ナニ、あのお千代が、商賣物の買出しを

　　ト振り返つて云ふ。おさん、鼾をかく。

　イヤ／＼、寐言のあとは、打たないものだな。

　　ト矢張り帳合ひしてゐる。

さん　その上先の藝者衆を、請け出してあげたなら、お內においでなさらうと、七所拵へ、八九の苦
しみ、工面なされた五十兩。

半兵　ヤ、あの手附けの金も、工面十面。
さん　その御苦勞を世間の噂、裏や背戸やの嬶達が、旦那を譏つてあなたをば、褒めそやしたる仇口をお聞きなされて涙ぐみ、わしが半分旦那どの、譽めらるゝなら肩廣う、晝も錢湯へ行かれうに、悪い噂が悲しいと、仰しやつたその時は、心ない下女ながら、身につまされて貰ひ涙。あのお優しいお内儀を、捨てゝ家出のお心は、そりやお情ない、聞えませぬ、旦那樣。

ト思ひ入れあつて、また鼾をかき、寢返りして泣顏隱し、寢言ながら意見の思ひ入れ。お千代、出かかり、立ち聞いてゐる。半兵衞、さてはと思ひ入れあつて

半兵　女房が云はぬ強意見、主に向つて云はれぬ下女が、これ聞けがしのその寐言、半兵衞、胸に承知した。併し身持ちの悪いのも、御恩になつたお方の御子息、寶を失なひ御苦勞を、身に引請けし半兵衞が、母といふのも繼しい仲、それゆゑ連れそふ千代にまで、隱した譯と現にも、われが口から云うてくれ。殊に寶の詮議も今日か、明日とも待たれぬ日限りの切端。いよ／＼知れねば半兵衞が、科引受けて世話するお人、助けにやどうも男が立たぬ。茲の道理を寐言になりと、女房が後で恨まぬやうに、あの押入れのお二人を、賴むは千代と下女のさん、コレ

トおさんの方へ思ひ入れ。おさんもそつと目を明け、ちやつと寢た顏する。

頼んだぞよ。

トお千代、窺ひゐる。半兵衛、門口へ行かうとするを、走りよつて

千代　コレ、旦那どの、なんの女房にその遠慮。隔てさんすが却つて恨み。

半兵　そんならこれまで口外せぬ、この半兵衛が腹の中、納めた事を

さん　存じたゆゑに旦那様、あなたは斯様な様子かと、申されませぬ下女水仕。それゆゑ今の御意見を寐言ながらの不調法。色氣はなれた山出し下女。旦那様、お免しなされて下さりませ。

千代　お前のお世話なさるゝお方、お尋ねなさるその品も、もしやこれかと思うたゆゑ、少しなりとも女房のわたし、手助かりと思ふから、怖い思ひでやう／＼と

半兵　ヤ。

さん　取り得し品もその場にて、ほんに鵙の嘴とやら。でも手懸りはその砌り、阿母様が

トあと云ひさして、こなし。

半兵　すりや半兵衛が苦勞の根本、察せしゆゑに手懸りを

千代　アイ、折角取り得て

半兵　して、その品は。

さん　アイ、旦那樣、申し譯もない。ひよんな事をしましたわいなア。

ト思ひ入れ。四つ竹の合ひ方になり、向うより源、辰、乞食の形にて、貧乏樽と子犬の死んだを二つ、古き提げ籠へ入れ、これを持つて出て來り

兩人　ハイ、旦那、御祝儀に參りました〳〵。

ト喚く。半兵衞、見て

半兵　見れば賤しい乞食めら。なんの祝儀と喚くのだ。

源　ハイ、お內儀のお千代さんへ入り聟。

辰　わざつと祝つてこの惡樽、生臭物は犬ッころ。

兩人　ハイ、おめでたうござりやす〳〵。

半兵　ヤイ〳〵、此奴等は、味な事を云ふが、お千代はおれの女房だが、それに入り聟の祝儀とは

ト奥より嘉十、出かゝり

嘉十　イヤ、その譯わしが云ひませう。

ト嘉十、着物を着替へ、貧乏德利と肴の入りし鉢を持ち、お虎も出る。

半兵衞どの、外でもないが、貴樣の女房お千代どのへ、疾から氣のある弟分、宿無しの嘉十郎が

入り聟します。こなさんもその心で、不肖ながら、内儀はわしが貰ひますぞよ。

ト火鉢の側へ坐り、徳利を火鉢へ突ッこむ。

半兵　亭主の極まつてある女房に、アノこなたが

千代　そんならこの程いろ〳〵と、無理云うたのも、てつきりと

さん　拵らへ事で今日爰へ、そんならアノ、矢ツ張りその時

ト思ひ入れ。半兵衛も心得ぬ體。

とら　イヽヤ、久しぶりの親子、相談づくでしはせぬぞ。お千代は覺えの、こりやある事。

源　爰の内儀は、乞食と色事。

半兵　ナニ、乞食と女房が……すりや、半兵衛が縁切る工面か。併しそれには、何か様子が……コレ、女房、よもやてまへは

千代　サ、譯といふのは王子にて

さん　お内儀さんを兎やかうと

嘉十　云つたも此方にキッとした、證據を握つて云ふ話しだ。

半兵　何が證據だ。

嘉十　證據といふはこの間、女房にならう、入り聟にと、亭主のあるを合點で、内祝言の杯を、したのが慥かなコレ證據。後で兎やかう無いやうに、その杯もコレ爰に。

ト前幕に貰ひし杯を出して見せる。半兵衞、見て

半兵　そんなら女房は、非人と祝言。

千代　エヽ、滅相な。それには段々譯ある事。

さん　その證人は、わたしがキッと……エヽ、こりや、拵らへ事ぢや〳〵。

とら　イヤ〳〵〳〵、わしに隱して、そんならお千代は、亭主に飽いてか……コレ、半兵衞、女房に嫌はれ、我が子ながらも、非人に其方、見替へられては、男が立つまい。

半兵　左樣なれば私しは、今さら女房に飽きられて、去り狀出さぬ其うちに、直に跡目の嘉十郎、内證すつぱり拵らへて

千代　アヽモシ、どうしてわたしが、お前を退けて、外の男を持つやうな、心があらば斯うした苦勞、なんの苦患を

半兵　サ、さうは思へど差あたる、あの杯が

さん　モシ、旦那樣、あの杯の譯なれば、わたしがとつくり

嘉十　コレ〳〵、杯ばかりかまだ外に、云ひ交したるキッとした、證據といふはお內儀が、非人にくれた四ツ紅葉、この簪で約束した。

ト件の簪を出す。半兵衞、見て

半兵　見覺えのあるお千代が簪。女房、これには

千代　その簪を渡したも、このほど王子で屋敷の御家來、お前の所へ來た手紙、開いて見れば馬像とやら、無ければ叶はぬ賴みの文言。折よく歸りに似寄りの品、もしやこれかとその時にさん云ふに云はれぬ情ない、憂い目堪えて手に入れて、又も失ひ云ひ譯の

半兵　サ、譯があらう、譯があらうが、非人と知れては、おれが男の立たぬ事。

さん　イエ〳〵、それはわたしが代つて、なんのあなたに

ト心遣ひ。

半兵　よし譯合ひがあらうとも、門を張つたる八百屋半兵衞、世間へ面が立つものかえ。エヽ、大たはけめ。

トお千代を突きのけ、キッと思ひ入れ。

千代　尤もでござんす。只一筋に聞く時は、お前の恥にと思はんせう。それも尤も……わたしにも、

及ばずながら料簡の、無いを見す〱

嘉十　コレ〱、お内儀、もう斯うなつちやァ隠すに及ばぬ。王子の帰りの俄雨、根岸通りの暗まぎれ連れになつたが縁の端、下女が取持ち、こなさんと、闇が仕合せ、月夜なら、どうしてあんな……それも渡したあの書像、この簪と取りかへたも、こなたが頼んだばつかりに、渡してやつたは約束事。それでお千代は、おれの女房。

千代　それぢやというて

嘉十　たつた一度で大事の代物、それぢやァ手もなくおぬしは騙り。こりやァ亭主と馴合ひか。

千代　イエ滅相な、なんのマァ

嘉十　そんなら斯うと明かしてしまへ。

千代　サア、それは

嘉十　サア〱〱

ト火鉢にかけし徳利を見附け

南無三　アツ、、、。

ト茶碗につぎ

横なやうだが半兵衛どん。

ト一口ガブリと飲み

アツヽヽヽヽヽ……無理ぢやァあんめえ。

とら　それといふのも、みんなお千代が心一つ。悪い事したその時の、非人はわしが悴ゆゑ、拵らへ事と半兵衛の、思ふ所が云ひ譯ない。この事聞く其まゝに、今朝からのほせたその上に、一倍氣合ひが。アヽ、こりや、持病の癪めが手傳ふわいの。

ト胸を押へて思ひ入れ。

嘉十　何かの氣がねでお前の持病。幸ひ爰に持ち合す、萬金丹を白湯で用ひて

ト彌助より貰ひし薬を渡す。

とら　流石は悴、孝行な其方の薬、萬金丹とはよい縁起、服んで持病の蟲押へ、アヽ、持つべきものは息子どの……コレ、半兵衛、千代にあゝした間違ひがあつても、其方は女房に持つか。わしなら去つてしまひます。それとも其方は、この千代を

半兵　イヽヤ、去ります。

千代　エ、すりやアノ、わたしを

とら　こりや、さうなうては
半兵　去りまする。向後女房は捨てまする。
嘉十　捨てる神ありや又拾ふ、神は即ち我れらが女房。
　　　　トお千代の手を取る。
千代　エヽ、なんの其方に
　　　　ト振り切る。
嘉十　でも、二代目のお千代が亭主。
千代　去られたからは此お内。
　　　　ト思ひ入れ。
とら　イヽヤ、半兵衛が縁切れても、家の娘のわが身ゆゑ、跡目は直ぐに嘉十郎、女夫にします。
嘉十　そんなら内儀をアノわしに
半兵　左様ござらば私しは、お内を出まして
とら　お千代を去つてこの母が、其方は忰が兄分と、見込んで内の片腕に、頼むしるしは………コレ、ナ

ト懐より扇箱に入りし件の月の畫像をちよつと出しかける。半兵衛、思ひ入れあつて

半兵　それぞ慥かに尋ぬる畫像。どうしてお前の

とら　手紙で詳しう

ト根岸で拾ひし手紙を、ちよつと見せる。お千代、見て

千代　そんなら手紙も

とら　この文言では主人の難儀、その品故に。ナ……サ、それぢやによつてこの家を、滅多にわが身は……コレ、わしも有やう外へやるのも、ナ……何かは二階で

ト思ひ入れ。

さん　畫像とあれば、あの夜に落したその品を

半兵　それ拾はれて阿母の、手にあるうちは私しも、今から内の居候ふ。

源辰　祝儀を下さい〳〵。

とら　祝儀はわしが

ト包み金を二分やる。兩人取つて

源　仲間にならぬ旦那衆

辰　エヽ、おめでたうございます。
とら　今宵改めこの悴、半兵衞、わが身と兄弟の、その杯も、即ち爰で
ト作の杯を取つて思ひ入れ。
嘉十　その杯でお千代どの、わしも改め、極まつた杯。
千代　杯ごとは熱湯を、飲む苦しみのわたしが思ひ。
さん　千代八千代とも云ひかはし、三國一の聟樣と
半兵　杯しやれ。
千代　エヽ、胴慾な。
とら　何が胴慾。
ト思ひ入れあり
アイタヽヽヽヽ、どうでも持病が
嘉十　藥服まんせ。
とら　二階で何かは
さん　アヽ、もつれた祝言。

半兵　母者人。

とら　半兵衞……來てたもや。

ト唄になり、乞食二人は向うへ、お虎は二階へ、おさんは暖簾口へ、別れて入る。半兵衞お千代嘉十郎殘る。合ひ方。

嘉十　兄分の半兵衞どの、氣の毒ながらお千代は、今からわしの女房に。さう心得て下され。

半兵　そりやモウ母の指圖なら、泣く子と地頭。

千代　僅かな手蔓を云ひ立つて、心にもない恥かしい、夫の手前も

嘉十　亭主といふは今からおれぢや。必らずともに間違へまいぞ……コレ、女房、いかうわしも氣が盡きた。煮花なりともワッサリと、半兵衞どのへも、茶なりと煎じて。

半兵　杯ごとも改まる。そんなら茶なりと、兄弟分の固めのしるし。

千代　わたしが煎じて……ほんに、幸ひ貰うた菓子が

ト合ひ方になり、件の折紙に載せし盆の菓子を出し、手紙の反古をかけし茶焙じを取出し、嘉十これを取つて

嘉十　ドレ〳〵、何かの見習ひ。茶でも焙じて。

ト三人、捨ぜりふにて、嘉十、火鉢の上へかざし、茶を焙じる。お千代、棕櫚箒にてそこらを掃かんとして、落ちてある手紙の破れを見附け、取上げて讀む事、半兵衛、菓子盆を取つて、片寄せんとして、フッと目を附け、三人思ひ入れあつて

半兵　お千代が出したこの菓子を、包んだ反古は慥かに折紙。しかも短刀天國の……これでも反古か。

嘉十　この茶焙じはちぎれた手紙、しかも名宛は……嘉十郎どの、彌助とあるは、此ちう王子で、彌助に見せたこの手紙。どうして爰へ、めぐり〳〵て

ト思ひ入れ。お千代、これにてこなしあつて、讀みさしたる手紙を、ちやつと隱し

千代　エヽ、そんならちぎれたその手紙は

嘉十　彌助とやらが、おれの所へ寄越した手紙……アヽコレ、大事の所が、もしやそこらに

ト滞れる思ひ入れ

千代　成る程、お前は嘉十郎、そんならいよ〳〵、お前の方へ

嘉十　彌助といふが寄越した手紙だ　ちぎれた後が肝腎の

トそこらを見て

アヽ、まゝよ、名宛がなけりやア、證據になるまい。

千代　成る程、宛名がちぎれてゐては、別して證據に

半兵　この天國の折紙も、不用ながら、持つてゐたなら、なんぞの用に

ト懐中する。二階にてお虎

とら　コレ、半兵衛、ちよつと來てたも、コレ、來やいの。

ト呼び立てる。

半兵　ハイ／＼、只今それへ。

ト思ひ入れ。

嘉十　兄貴の前では差合ひだが、あの阿母も、餘ッほどこなたを

ト思ひ入れ。

云ふも野暮かえ……コレ、お千代、あの小座敷に寢るほどに、必らず後に

千代　アヽモシ、主の聞く前

ト半兵衛へ思ひ入れ。

半兵　ハテ、去つた女房に心は殘らぬ。

千代　そりやマァほんまに

ト云はうとして後云ひさす。

嘉十　道樂だけに半兵衛どの、よい思ひ切り……イヤ、男はそこらだ。併し不氣味な手紙のちぎれ。爰へ置いては

ト茶焙じのまゝにて取つて

千代　コレ、お千代、必らず來いよ。

千代　エヽ

ト思ひ入れ。

半兵　針の蓆の

嘉十　ドリヤ、寢所へ

半兵　みな煩惱の、犬ぢやなア。

とら　半兵衛や〳〵。

ト唄になり。半兵衛、折紙を懷中して二階へ上がる。嘉十、件の茶焙じを持ち、上の障子屋體へ入る。お千代殘る。合ひ方。爰にて奧口見廻し、行燈引寄せ、手紙のちぎれしを出し、よく〳〵見て

千代　宛名はちぎれてその後は……、主人三太夫こと殿の御用につき、箱根山寄附の金子百兩持參いた

し、當る二十五日鎌倉を出立いたし、同道は忰權三」

　　トよく〳〵讀み

いよ〳〵違はぬ敵の片割れ、彌助といふ奴賴みし文體、その荷擔人の嘉十郞。おのれ其まゝ、なんの置かうぞ。

　　ト思ひ入れ。奧より松太、蒲團を持ち、出て來るゆゑ、手紙を懷へ入れる。

松太　オヽ、おかみさん、まだ御寢なりませぬか。お前も定めし氣が揉めませうが、何を申すも親の事親というてもあの婆ア、誠に彼奴は鬼が婆アか、婆アが鬼か、只の人間ではござりませぬ。

千代　これはしたり。其やうな事云はずと、ちやつと寢や〳〵。

松太　アイ〳〵、寢るにお辭儀は致しやせぬ。ハイ、御免なされませ。お先へ臥りまする。

　　ト木枕を出し、寢莫蓙を出し、蒲團かむる。合ひ方、時の鐘。お千代、思ひ入れ。

千代　どうで今宵は延されぬ、女ながらも武士の娘。弟權三に、代つてわしが

　　ト思ひ入れ。合ひ方になり、こなしあつて、暖簾口へ入る。この合ひ方にて、二階の障子引拔く。屛風を立て、行燈を置き、お虎、鏡臺を据ゑ、半兵衞、毛拔にてお虎が白髮を拔いてゐる。火鉢に土瓶かけあり。

半兵　モシ〳〵、ちよつとようござりますか。
とら　オヽ、大きによい……定めし其方も、肩を揉めの足を揉めのと、うるさう思やらうなう。
半兵　エヽ、お前樣、勿體ない、どうして其やうな事が
とら　その口を忘りやんな。わしや、ちつとわが身に云ひたい事が……アイタヽヽヽ、アヽ、また持病の癪が
ト胸を押へる。
半兵　アヽモシ、どうなされました。お藥を取つて參りませうか。
とら　イヤノ〳〵、藥は先刻息子がくれた萬金丹、口中の匂ひもよくするさうな。
ト包みを出す
半兵　そりや好い藥がござりました。幸ひ火鉢に白湯もあり。
ト湯を汲んで出す。お虎、思ひ入れあつて
とら　其方が服めと云やれば、萬金丹を
半兵　あがりませ〳〵。
とら　そんなら服んで

ト件の藥を服み

アヽ、氣が霽々としたわいの。コレ、半兵衛、先刻に見せたこの一軸、これがわが身、欲しいかや。

ト一軸を見せる。

半兵　その一軸は私しが、お世話いたすそのお人へ、渡してどうぞ御難儀を

とら　そんならわが身にやりませう。これやる代り、わしが頼みを

半兵　サ、それは

トつかへる。

とら　きいてたもれば、この品を

ト思ひ入れ。

オヽ、しんき。

ト思ひ入れ。これより獨吟になり、二階の模様よろしく、奥口よりお千代、出刃を隠し持ち、出て來り、屋體の内へ思ひ入れあつて、見世にある手桶と砥ぎ石を出し、行燈の灯にて件の出刃を怖々砥ぐ思ひ入れ。二階にては、お虎、半兵衛思ひ入れ。上はをかしみ、下は凄く見える仕組みあつて、唄切

れる。

半兵　サ、その儀ばかりは

とら　エヽもどかしい。きかねば、この品、其方には

ト立ちかゝり、取らうとして、ワツと苦しみ、血を吐く。半兵衛、吻りして差寄り

半兵　母者人、どうなされました〳〵。

とら　ヤア、俄にわしは胸苦しう、血を吐いたるは、もしや服んだる萬金丹が、毒ではないか。

半兵　エヽ、そんなら今のアノ薬が

とら　わしが手づから毒を服んだか。それといふのも、其方が返事しやらぬばかり。もうこの一軸は、やらぬ〳〵。

半兵　イエ〳〵、この品ばかりは私しが

ト一軸を持つて二階より駈け下りんとする。お虎、苦しみながら

とら　イヤ〳〵、やらぬ、アレ、半兵衛が親を毒害して、大事の品を持つて行く。半兵衛は親殺しぢや

半兵　エヽ、滅相な。どうして

ト引ッ捕へ、口を押へる。この時、障子屋體より物音して、障子蹴放し、内より木綿蒲團を投げ出し、

嘉十、切られし體にて走り出る、お千代、件の手紙と出刃を持ち、立廻りながら出て來り、よろしあつて

嘉十　うぬは亭主を殺すのか。

千代　手紙で知れた父さんの、敵は彌助、その荷擔人の嘉十郎、恨みの刃

嘉十　何を女が

ト立廻り、二階にてはお虎、一軸を取返さんとする。半兵衛、渡さじと、上下にて立廻り。此うちおさん、暖簾口より走り出て、この體を見て慄へ出し、寢てゐる松太を起す。松太、寢惚け顔にて起きて、これを見て外へ逃げて出る。おさん、續いて門口へ出て、慄へ〳〵松太に囁く。松太、呑みこみ、向うへ走り入る。おさん、慄へ〳〵、除けて通り、奥へ駈けて入る。此うち凄き合ひ方、捨て鐘。お千代、嘉十、立廻りあつて、嘉十倒れる。お千代、止めを刺さんとする。この時、二階の半兵衛、一軸を持ち、駈けて下りる。お虎、苦しみながら追ひかけて、下りるゆゑ、お千代、有りあふ松太が蒲團を取つて、嘉十へかぶせる。お虎、下にて、よき所へ倒れる。お千代、驚ろき、立ちかゝるを、半兵衛見せじと、屋體より投げ出したる蒲團を取つて、お虎へ打着せ、兩人顔見合せ、ホツと思ひ入れ、時の鐘。

半兵　去つた女房、なぜ出て行かぬ。
千代　アイ、出て行かうにも、去り狀が
半兵　なけりや行かぬか。
千代　アイ、去り狀貰はぬ其うちは、サ……貰はぬうちは、非人の女房。
半兵　乞食の女房になつたお千代、三日せいでも一夜さで、もう心まで
千代　アイ、貰ふが役目、去り狀を、お貰ひ申して
半兵　その去り狀は
千代　去り狀貰へば夫婦でなう、夫婦でなければ姑さんの、緣が切れゝばこちの人、親殺しの惡名も
半兵　ヤ。
　　ト思ひ入れ。
千代　それゆゑ去り狀、欲しうござんす。
半兵　去り狀やれば緣も切れ、もし嘉十郎が女房と云はゞ、それでは其方は、現在亭主を
千代　それぢやによつて、お前へ難儀のかゝらぬやうに
　　トこの時おさん出て

さん　イエ〳〵、その去り状、必らずお書きなされますな。いとほしなげにお千代さま、今更どうして退去りを

千代　わたしを去らねば母さんの、今の様子で

さん　ハテ、何事も私しが計らひまする。御夫婦とも、差出た下女めと、お叱りもござりませうが、私しにお任せなされて

千代　それ程までに

ト よき時分、松太、宅左衛門、門に出て窺ひゐる。

半兵　云やる事でもこの體裁、殊に身請けの後金も

ト 門口より

松太　その後金の五十兩

ト 半兵衛の前へ置く

半千　ヤ、どうして金が

松太　訴人の褒美ぢや。

半兵　ヤ、なんと。

ト思ひ入れ。門口にて

宅左　金受取れば人殺し、身共が繩打ち

半千　疾より覺悟。

ト行かうとする。おさん留めて

さん　イエ、科人は下女の私し。

半兵　すりやアノ其方が

さん　私しが仕業。

宅左　繩かけ、役所へ

トつかつかと入り、おさんへかゝる。

半兵　ヤ、あなたは出石

宅左　この家の訴へ、役目を願うて……して、科人は……ヤ、正しく其方は

さん　あなたは父樣。

半千　ヤ。

宅左　イヽヤ存ぜぬ。血迷うて何をウカウカ。流石は女。

ト思ひ入れ。

さん　よう似たあなた。私しの親は侍ひ。その以前、お國勤めの留守のうち、女ばかりと盗賊忍び、もの暗まぎれ情なや、無體に肌を穢せよと、捕へられてもかよわい女、憎さも憎しと左の方、喰ひきる小指は後日の證據。さはさりながら一度でも、肌を穢せば夫も同然、この後男を持つまいと憎い男に心中立て、我が身も同じく指切つて、直ぐに屋敷を家出して、町奉公の水仕業、お内へ參つた御奉公　御恩になつた旦那樣。この程とても根岸にて、非人が捕へて無體な事。その時とてもあなたに代り、身を穢したは此おさん。それも旦那がお尋ねなさる、品が欲しさのひよんな身替り。それに今宵のこの災難。我れと名乘つて主殺し、身に引受ける下素女。お役人樣、この上は、情かけずと私しを、お引きなされて下さりませう。

ト思ひ入れ。宅左衞門、こなしあつて

宅左　知らぬ事とて今宵の體裁。また不所存な悴めは、家來筋なる半兵衞が、世話してくれるこの内によもや娘が……よもや斯うした憎い女。云はゞ主の半兵衞が、世話する者は弟の

さん　すりや弟の千太郎、それをあなたが

ト半兵衞に向ひ、思ひ入れ。

半兵　今宵手に入るこの畫像、片々あつても揃はねば、いま一品を尋ねた上へ

さん　お頼み申す。御夫婦よろしう

宅左　依估なき身共が、役目は即ち、不便ながらも

　　トおさんへ立ちかゝり、捕り繩たぐつて思ひ入れ。お千代、縋つて

千代　科なき者を情ない

　　トおさんを圍ふ。この時、蒲團刎ねのけ、嘉十、よろぼひ寄つて、おさんに縋り、左の手を差出し、苦しき體にて

嘉十　指の無いのは、その夜の盜人。

さん　エ、そんならこなたが

　　ト嘉十を見詰めて思ひ入れ。

嘉十　小和田で親御を

　　トお千代へ思ひ入れ。

千代　いよ／＼親を

嘉十　思はず毒を阿母に、服ませたわしもあの人も、親子惡人、どうで非業の

ト落ちてある出刃を取つて、胸へ突き立て、撞と坐す。

さん　惡に根強き親と子の

半兵　弟御樣に、逢うて別れの

ト駈けよつて押入れの戸を明ける。向うの壁、切りぬき、二人とも斷落ちの體。

お二人ながら敷きおいた、あの毛氈も

宅左　不所存ながら一人の悴

松太　爰から直ぐにお二人を

さん　弟が難儀のその品を

半兵　命にかへても半兵衛が

トこの時、表に傳三立ちかゝつて

傳三　先刻の後金

ト内へ入る所を

松太　ソレ、五十兩。

ト投げつける。

傳三　慥かに金は……ヤ、人殺し。

　　ト聲立てるを、半兵衛、引きつけ

半兵　夜更けぬうちに

千さ　少しも早う。

半兵　二人の行くへ。

　　ト門を明ける。源、辰、出て

兩人　人殺し。

　　ト立ちかゝるを、立廻つて二人を内へ投げこむ。

宅左　爰かまはずと

半兵　合點だ。

　　トしやんと裾をからげる。松太、門口を閉めて押へる。宅左衛門、傳三をキッと留める。おさん、お千代、二人の乞食へ蒲團をかぶせ、キッと押へる。この立廻り、曲撥になり、半兵衛、向うへ走り入る。これに習つて、舞臺の見得よろしく、鳴り物について

幕

第二番目大切　庵室女敵討の場

淨瑠璃　旨就宵庚申　清元連中

役名――源五兵衞女房、小萬。藝者鶴吉實ハ二の宮。半兵衞女房、お千代。紙漉き、おみの。八右衞門道心、西心。出石千太郎。八百屋丁稚、松太。賤ケ谷伴右衞門。百足屋金兵衞。日雇取り、番七。庄屋、杢右衞門。薩摩源五兵衞。笹野權三。八百屋半兵衞。

本舞臺、三間の間、中足の鼠壁、眞中に佛壇。上の方、反古貼りの障子、藁葺き、竹の簀戸。下座の方に湯灌場を取附け、所々に墓所、柳の立ち樹。舞臺よき所に圍爐裏、鑵子を置き、樒の枯れ枝、二枚折りの屏風を立て、これに春といふ文字交りし中文字の書き物貼り交ぜあり。下の方に首塚、線香を供へ、柾木の垣根。爰に番七、日雇取りの形。伴右衞門、寺の穴掘りにて、よき所を掘つてゐる。杢右衞門、家主にて、編笠をかむり、羽織、踏込みの形にて、世話をしてゐる。上の方に新佛を埋めし體。西心、老けたる道心の拵らへにて、回向してゐる。差荷ひの早桶に、前幕の稻の谷半兵衞の羽織かけてある。この模樣、葬禮の鳴り物、半鐘の音にて幕明く。

作右　サア〳〵、よくば埋めてしまはう。
杢右　川流れの佛は、家主の世話は當り前。併し、お布施は二百でござらうよ。
西心　そのマア川流れの佛へ、この羽織は過ぎ物ぢやが、お侍ひの川流れかな。
杢右　イヤ〳〵、女でござる。しかも、わしらが近所の女、筆の師匠。どういふ譯やら、身を投げて死んだと見え、この羽織を着て、手に薄箱をキツと摑んだ浮き死骸。
番七　そこで手習ひ子供の親達が、古い白無垢を買つて來て、師匠の事ゆゑ着せて來た。
作右　アヽ、そんならこの佛は、假埋めでござるの。
西心　左やう〳〵。それぢやによつて香剃りもなう、其まゝに埋めまする。ほんに、帳面へも附けて置きませう。
ト帳面硯箱を出し、これへ附ける思ひ入れ。
番七　アヽ、弔ひの佛を、帳面へ附けますかな。
西心　附けいでわいの。假埋めは、猶々附けにやなりませぬ。昨日も猪の堀から、若い女の切られた死骸、アレ、あそこへ埋めましたが、何者が切つたやら、憎い奴もあるものでござるて。
作右　それも大方金英樓で、男が女藝者に化け、多くの人を切つた噂。その類でござらう。殊に八丁縄

手にかゝつた獄門も、嘉十郎とやらいふ非人ぢやとの事。

杢右　サア、あの獄門は、八百屋の阿母に毒を服ませた、息子の嘉十とやら。それを八百屋の女房お下代が切つたとやら、又は親の敵ぢやとも云ひまするて。

西心　エヽ、そんならアノ、獄門に掛けてあつたは

番七　野伏りの嘉十サ。可哀さうな事と思ふから、あの首塚へ葬むつてやりました。

西心　エ、そんならこなたがあの塚へ……南無阿彌陀佛々々々々々々……ハテ氣の毒な。よう葬むつてやらつしやりました。

作右　葬むろといへば、早く埋めてしまはうではないか。

杢右　さうして下され〳〵。

三人　サア〳〵、やらかせ〳〵。

ト掘つてある切り穴へ桶を納め、捨ぜりふにて伴右衞門、番七、土をかけて

サア〳〵、これでよし〳〵。

杢右　時に、掛けて來た羽織、寺へ納めて、もう施主は歸りませう。サア、坊樣、羽織を渡しましたぞや。

西心　これは忝うござります。早速お施主の見る前で、七ッ屋へ葬むります。コレ、番七どの、貴樣歸りがけに伊勢七へ寄つて、この羽織で好いほど借りて、次手に小僧に油一合、持つて來いと云うて下され。

番七　合點だ〳〵。上借りはせぬが、四文一合、駄賃に飲みます。

西心　ハテ、透かさぬ男ぢや。

杢右　サ、暮れぬうち歸りませう。あのお人、大儀でござつた。

伴右　ハイ〳〵、これは遠方御苦勞でござりました。

ト合ひ方、木魚の音にて、番七、右の羽織を持ち、杢右衞門先に、話しながら花道に入る。伴右衞門帳面を見て

ハテ、坊樣は惡いお手だの。それに引替へ、あの屛風の貼交ぜ、中にも「春」といふ字は、さて見事だ。その上、ありやア女の手だね。

西心　左やう〳〵、あれは、この八右衞門道心が娘の手蹟、今では別れて音信不通。その娘の書いた物ゆゑ、あの屛風へ貼つて置きました。

伴右　なんだか見事な手蹟と見えます……イヤ、大分寒くなつた。拔かないうちに、錢湯へ入らうわ

い。

西心　わしは又、灯をつけて……イヤ〳〵、油は皆になつた。それゆゑ頼んでやつたが、アヽ、まだ持つて來ない。其うち、焚附けの樒をこなして

ト枯れたる樒の束ねたるを出し、鉈にてこなす。

作右　そんなら、わしは錢湯へ入つて、また話しに來ませう。

西心　さうさつしやりませ。

作右　ドリヤ、入つて來ませう」

ト合ひ方、木魚の音にて、伴右衞門、花道へかゝる。向うより定七、侍ひにて、中間一人を連れ、出て來り

定七　イヤ、ちと物が尋ねたい。此あたりに、以前は武士にて、今は浪人、貧しき暮らしと

トこれにて伴右衞門、思ひ入れあり

作右　左樣仰しやるは、南條定七どのではござらぬか。

定七　ヤア、臊ケ谷氏、これは〳〵。拙者、貴公の御宿所を、わざ〳〵尋ね參つた。ハテ、よい所でお目にかゝつた。

作右　イヤモウ、お目にかゝつて、面目もないこの態、お恥かしう存ずるて。

定七　サ、その寄るべなき浪人も、有卦に入つたか貴公の仕合せ。作右衛門どの、喜ばつしやれ。今日歸參が叶ひました。

作右　それは耳寄り。して、その仔細は。

定七　知らるゝ通り二幅の掛け物、紛失は出石親子が越度となり、まつた天國、添へたる折紙、その紛失は源五兵衞が誤まり、詮議の日限りも今日限り。いよ／＼出ねば大殿は切腹。さすれば跡目は惡五郎さま。さるによつて、あなたの指圖で、貴公の行くへ尋ね來れと、大小衣服も持參いたさせ、山谷の出茶屋に待たせ置いた。少しも早く同道いたして

作右　然らば貴殿のお世話を以て

定七　直さまお目見得。

作右　定七どの

定七　サ、御同道いたすでござらう。

ト合ひ方、木魚の音にて、この三人、向うへ入る。西心、あと見送り

西心　何か解らぬ今の樣子　耳にとまるは娘の噂、久離切つて源五兵衞どのゝ女房と、その時から出家

して、俗のその名は八右衛門道心。二人の子供はありながら、男の餓鬼は母に附けて行くへ知れず、その悴めが心の惡さに、この間八丁繩手、母を害して獄門に、かゝりや繋がる姉の小萬、これも不義にて權三とやらと、駈落ちなしたを女敵と、尋ねる男も定めし難儀。たゞ不便なは二人の孫、顏も知らねば他人も同然。まづ差あたる嘉十郎、惡い奴でも母めも共に、親が回向を……

南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向なし、首塚へ塔婆を立て、線香を供へ、佛壇の前にて回向のこなし。この時、合ひ方、木魚の音。向うより源五兵衞、着流し、大小　草履にて、子を抱き、樒を持ち、出て來り、花道にとまり

源五　生者必らず哀別離苦といへども、我れは離別もなさゞりし、妻ゆゑかゝるこの苦勞。たゞ不便なはこの悴、搗てゝ加へて非業な娘、親が手にかけ殺すとは、因果同志か情なや。折角手に入る天國は、權三が所持の

ト間違ひし短刀と　五立目の一軸を出し

赤木作りのこの短刀、尋ねる品は出もやらず、思ひがけなく箱根にて、手に入りたりし星の畫像これも出石千太郎、めぐり逢ひなば手渡しと、思ふ日限りも今日が切端。尋ねる道もいつとなく娘を葬むる無緣寺へ、來たも佛の導きか、逆さまながら、今日も回向を

ト舞臺へ來り、內へ入り、上手の新佛の前へ樒を差し
光明遍照十方世界、南無阿彌陀佛々々々々々。
トこの時、赤子泣き出す。これにて西心、心附き、上の方を見て

西心　いつの間にかは昨日來た、娘の墓へお侍ひ樣。こりや御緣家でござりまするか。
ト云ひながら舞臺へ下りる。

源五　左樣ではござらぬが、噂に聞けば不便な最期。それゆゑ、わざ〳〵
ト思ひ入れあつて、下手へ來る。

西心　それは御奇特。澁茶なりとも進ぜませうか。
ト此うち源五兵衞、屏風の貼交ぜを見て、思ひ入れあつて

源五　數多ある其うちに、時めく「春」の文字の筆法。
ト此うち落ちてある帳面を拾ひ、裏書を讀む心あつて
して、この帳面の、この名前は

西心　愚僧でござる。やう〳〵この頃道心の、名も八右衞門といふ百姓、浮世を捨てゝこの庵へ。
トこれにて源五兵衞、さてはト思ひ入れあつて

源五　すりや其許が今道心、以前のお名は八右衛門とな。

西心　ハイ、年寄りまして、せう事なしのでも坊主。

源五　いよ／＼貴僧が八右衛門の、成れの果なら折に幸ひ、この庵室に隠まひ置かるゝ、娘の小萬、まつた相手の笹野權三、二人の者をこれへ出し、お渡しなされて下されい。

ト　きつと云ふ。西心、悄りしたる思ひ入れにて

西心　ヤ、何と云はるゝ。一人住ひのこの庵に、男女二人を隠まひしとは、そりや又なんで。

源五　小萬が親の貴僧ゆゑ、殊に屏風の手蹟といひ、親子の縁に引かされて、二人を隠まひ置かるゝ様子。これまで疎遠の聟がお願ひ。舅どの、何卒お渡しなされて下され。

西心　思ひがけない其お頼み。すりや、其許様が

源五　初めて逢うたる源五兵衛、抱きしは即ち、お前の孫の三五郎、小萬が産みしこの子悴。

ト　見せる。西心、思ひ入れあつて

西心　イヽヤ知らぬ、存じませぬ。

源五　ヤ、なんと。

西心　その小萬とやら、毛頭存ぜぬ、さりながら、屏風の貼交ぜ書いたる女、いかにも出して見せませ

う。

源五　そんなら二人を

ト西心、帳面の中の戒名を出し、源五兵衞に突きつける。源五兵衞見て、

干霜凉意信士、俗名權三。太阿情念信女、俗名小萬。

ト思ひ入れ。

そんなら二人は

西心　盜賊が參らぬその先に、變死か横死か知らねども、二人が戒名。お侍ひ、お望みなればこの通り

この戒名では、よもやこの世に

源五　二人が死ねば二品の、寶が出ても本國へ、歸參のならぬ

トこの時、源五兵衞、思ひ入れあつて

ト氣を變へ

この幼子を御出家樣、なんと、お貰ひなされては下さるまいか。

西心　そりや又なんで。

源五　今宵につゞまる大事の望み、足手まとひのこの幼子、出家と見かけて其許へ、拙者、養子に遣は

したい。

西心　坊主が持つて咎なき幼子、孫でも子でもなきその子倅、なんとして……お斷わり申しませう。

源五　お心強くば是非がない。然らばお寺を暫時借用、この場に於て。

ト短刀を出し、赤子を刺し殺さうとする。西心、これをとめて

西心　ヤヽ、こりや何ゆゑ、その悴を

源五　今宵につゞまる我が命、果てたる跡でこの幼子、犬の餌食にならうより、現在親が

ト突かうとする。西心とめて

西心　貰ひませう。孫でもなけれど人の命、助ける役なりや、しつかりと。

ト西心、赤子を抱きとる。

源五　忝い。左樣ござらば拙者も安堵。心殘りの無き上は、片時も早く

トつか〱と門口へ出ようとする。西心、入れ替つて門の戸をシヤンと締める。

何ゆゑ門口を閉てめされた。

西心　泊めませう。今宵につゞまる命と聞き、捨てゝやるのは本意ならず、殊にこの子の馴染むまで、ひらに今宵は一宿なされ。

源五　未練なやうでも恩愛に、引かれて今宵は餘所ながら、囘向をするもアノ娘へ

ト上手へ思ひ入れあり

西心　まだ油さへ無き庵室、灯がはりに焚火をば、夜着と蒲團と心得て

お詞に甘へまして

源五　それも宿世の縁ある御寺、御遠慮なしに奥の間で

西心　ゆるりと横に

源五　休息しませう

ト時の鐘、合ひ方になり、源五兵衞、もしやトあたりへ思ひ入れあり、奥へ入る。西心、赤子をいぶりつけて

西心　アヽ、泣くな／＼。併し、乳が無いゆゑこの痩せやう。ドレ／＼、添ひ寢してやりませう。

ト佛壇の下より蒲團を出し、圍爐裏へ火をくべ、柏餅になり

男の子なりや、柏餅は當り前。ゆるりと爰で……見れば見るほど、どうやら娘に

ト口を押へる。赤子泣き出す。

いんのこ／＼

ト思ひ入れ、捨き合ひ方、一ツ鉦、暮れ六ツの鐘になり、向うより權三、前幕の儘の徐中長宿が衣裳を着て、大小、頰かむりにて、件の羽織を片手に持ち、番七が襟髪を摑み、出て來り、花道にて

權三 コレ、いよ〳〵今云つた通り、この羽織を着た女の死骸。

番七 ハイ、その女の死骸が、淺草川へ流れ寄りましたゆゑ、いろ〳〵しても放さぬ箱。こいや念の掛かつた品ぢやというて、矢張り其まゝ箱を持たせて、葬むりました。その羽織は寺へ納めて、死骸はあの庵へ、假埋めに投込み同然。

權三 そんならいよ〳〵……南無阿彌陀佛。

ト思ひ入れあつて、番七へ囁く。番七、呑みこみ、慄へ〳〵舞臺へ來り、權三は悠々と門口に窺ふ。

番七、門を叩き

番七 コレ、油を買つて來た。爰を明けて下さい。

トこれにて西心、起きあがり

西心 馬鹿々々しい、何をして居たのぢや。今そこを明けてやらう。

ト門口へ來る。此うち捨て鐘。番七、向うへ逸散に逃げて入る。引違へて伴右衞門、小袖、尻からげ大小、頰かむりにて、弓張りを隱し持ち、花道より舞臺を窺ふ。此うち、闇爐裏の火、しめる事。

焚火も消えて眞暗がりぢや。ソレ、門を明けて

ト門を明ける。權三、スラリと一刀を拔き、西心の目先へ突き出す。西心、ハツと慄へ出し

こりや又なんで、この庵へ

ト慄へながら云ふ。

權三 盜みに來ました。聲を立てなば忽ちに……それが怖くば何事も、身が云ふ事を

西心 滅相な。音に聞えた貧乏寺。金というては叩き鉦、それさへちやん／＼ちやんころの、一文なしのこの庵室。

權三 盜みに來たのは、望みがござつて。

西心 何を盜みに。

權三 佛を盜みに。

西心 今日の佛の持つて居る、箱は慥かに

ト思ひ入れ。

權三 サ、なんであらうと女の佛、キリ／＼爰へ出して下さい。

西心 易い事ぢやが、一旦葬むるその死骸、掘りかへす事成らぬと云つたら、どうやら愚僧がこの身に

かゝる……モシ、お前はその、女の佛の

權三　緣者でござる。只今道にてこの羽織、持參の者を引ッ捕へ、樣子を聞いてワザ／＼と、嚇しなくれてこの寺へ、參つたところが庵主はお一人。氣の毒ながら

西心　左樣なら、どうござつても、土をかむつてゐる女の佛を

權三　假埋めと承る。掘出してなと、身共が爰で

西心　心得ました……いま埋めたばかりゆゑ、直に只今

權三　お賴み申す。とく／＼案內。

ト變つた合ひ方。西心、慄へ／＼、上の方に行き、いま埋めし場所を尋ね廻る。此うち門口の作右衞門、內を窺ひ、生垣を破り、下の方へ忍びこむ。西心、件の鍬を取つて、慄へながら土を掘る事あつて、やう／＼土を掻きのけ

西心　お若いの、これが只今葬むりました、女中の佛

權三　世話でござつた、中改めるは、身共が即ち

ト刀にて繩切り解き、桶の蓋を取り、中へ手を差しこみ、思ひ入れあつて

變り果てたるこの姿。なれども放さぬ一念は

ト折紙の箱を引出す心。小萬、この箱を摑みしまゝ半身出る。白の古き小袖、淺黄の扱帯、髪をさばきしな姿にて結びゐる。この時、小萬、パッチリと眼を開く。西心、これを見て「ハッ」と云うて蒲團をかむり、慄へゐる。權三、ギヨッとする。小萬、茫然となる。權三、ためらふうち、小萬、折紙の箱を持つて、スックと立ち、あたりを見廻して、よろ〳〵と行かうとする。これを權三とめる。小萬、向うへ行かうとして、バッタリと坐し、件の箱を放さぬ事。權三、手を捕へ、立ち身にてキッとなる。

鳴り物、笛の入りし合ひ方。木魚を打ちこむ。

小萬　入水したると覺えしが、その後とては何事も、知らぬ姿を、どうやらこれでは

ト我れながら合點のゆかぬ思ひ入れ。

權三　お前は世を去り、この墓所へ、葬むるとの噂ゆゑ、尋ね來りし甲斐あつて、さては蘇生の

小萬　アヽ、さういふ聲は、ほんに床しい

ト縋らうとする。權三、思ひ入れあり

權三　アヽコレ……「浮環の、晝くる事のかなはねば、よる手にさへる蜘蛛の絲」……サ、さゝがにの

ト思ひ入れ。

小萬　いとしいお方が、ようも尋ねて。

西心　そんなら佛は

小萬　すりや蘇生して、又もこの世へ

權三　その苦勞せしばつかりに、コレ

ト件の短刀を探らせ、思ひ入れあり

二品揃へば、二人とも

西心　戀ゆゑ死んで戀ゆゑに、又も蘇生の

權三　イヽヤ、忠義のつま重ね。

小萬　忠義と戀の二道に

西心　二人の男を

權三　ヤ。

ト思ひ入れ。此うち障子を明け、源五兵衞、樣子を窺ひゐる。

西心　一旦土をかけたる佛、寺法にもない掘りかへし。ならう事なら今一度

小萬　この世の風の身に浸みて、殊には水に溺れた體。心が附けば身内の惱み。

ト苦痛の思ひ入れ。

西心　川へ沈んだ女中様、死ぬる時節が來ねばこそ、又も蘇生のめでたい便り。わしが嗜むこの藥。サ
　これを服んで、心を慥かに
　　ト佛壇の藥の包みを持ち來り、あたりを尋ね、湯を汲んで持ち行き、小萬に服ます。小萬こなしあつ
　　て件の藥を服む
　もしや女中様、肌に懸けたる守の中に、水難除けのお守が
小萬　さう仰しやればその以前、水天宮のお守を、肌の守へ父親の、手づからわたしに
　　ト襟に掛けたる守り袋を出す。西心、思ひ入れあつて
西心　すりや、水天宮の懸け守、水に溺れし身ながらも、不思議の蘇生は、水難除けの守の奇特……そ
　の水難は除けたれど、劍難除けは佛神の、よもお力にも
權小　エ。
　　ト思ひ入れ。
西心　アイヤ、劍難ならでまだも仕合せ。水に溺れし女中様、焚火にあたつて身の療治。火の出來るま
　でこの蒲團、春風防ぐ足しにもと……ア、併し、この子の寢かせ所が
　　ト蒲團を取り、赤子を置く所に困る思ひ入れ。小萬聞いて

小萬　この子といふは、もしや血縁の

西心　ヤ。

ト源五兵衞、思ひ入れあつて

源五　蘇生の女中、療治いたさう。

權三　どうか似寄りの

ト思ひ入れ。源五兵衞、身拵らへして、小萬が後へ廻り、一腰を拔き、振りあげる。三人、これを知らず

西心　今に焚火でほつかりと

權三　ぬくもりあらば大方に

小萬　身内の凍えも

源五　たつた一突き。

西心　ドリヤ、さしくべて

ト焚きつける。源五兵衞、小萬が胸許へ白刃をさしつける。この時、焚火、パツと燃えつく。皆々顔見合せ

小萬　ヤ、お前は

權三　あなたは

源五　今ぞ恨みの

トこれにて兩人、門の方へツカ〳〵と行く。源五兵衛、入れかはり、門を閉す。西心、小萬を見て

西心　娘の小萬。

小萬　父さん。

ト權三、行かうとする。源五兵衛、白刃を突きつける。これにて權三、ちよつと下に居る。西心、小萬を庇ふ。この時、合ひ方變つて、大笛入りの樂の稽古になり、四人、よろしくキツトなり

源五　過ぎし春よりこの如く、乳呑み子抱へ諸所方々、云ふに云はれぬ艱難も、寶の行くへ二つには、何卒二人にめぐり逢ひ、實否を糺すその爲に　心を碎くも刀の手前。三十餘年立て通し、磨きに磨きし武士道も、二人の爲に後指。今宵計らずこの所で、尋ね逢ひしは生死の切端、包まず隱さず有體に、返答いたせ、女房權三。いよ〳〵、兩人不義いたして、事露顯に詮方なく、短刀盜み立去りしか。但しは理を持ち非に落ちて、云ひ譯無さに心にも、あらで屋敷を出奔せしか。品によつてはこの刀に、血を注がずに鞘へ納めん。但しは不義に相違はないか。善惡邪正有やうに、

サヽ、返答いたせ、ドヾ、どうぢや。

權三　申し譯なき仕儀ながら

小萬　その云ひ譯は

トつかへる。この時、西心、小萬を引きよせ

西心　おのれはなア／＼。年たけた子のある身で、この前髪と密通なすとは、犬め、猫め、畜生め。さうとは知らず貰つたる、悴はおのれが餓鬼であつたか。憎い奴でも可愛さの、あまつて二人は死んだつもり。助かる筋もと思ひしに、今となつては源五兵衛どのへ、おれが濟まぬワ。親の面を穢させをる、うぬはなア／＼。

トきつとなつて思ひ入れ。

權三　アイヤ、その云ひ譯の種にもと、心を盡せし兩人が

小萬　その甲斐あつて紛失の

權三　寶は揃うて、コレ爰に。

トこれにて源五兵衛、入れかはり、眞中へ來り、權三は下手より短刀、小萬は上手より折紙の箱を差出す。

源五　誠や　これにて二品揃ひし上は

小萬　云ふに云はれぬ二人が越度。

權三　戀の叶はぬその意趣に、釣り竿の祕法口傳の時、解いた帶を證據と僞はり

小萬　不義の科そと喚きしまゝ、立出て見れば寶の紛失、南無三、短刀失ひなば

權三　お家の大事とその場より。直ぐに立退き、寶の詮議、

小萬　共に歩くは人目の關、男姿に吉原や、深川三界駈けあるき

權三　盡す心の念願屆き、寶は出ても多くの人を、殺めし上は命を捨て

小萬　この箱ばかりは離さぬ念力。よみがへりしよりこの身の幸ひ。

權三　何卒これにてお疑ひ、お晴らしなされて元々の

小萬　夫よ、妻よと、云はせてたもれ、源五兵衛どの

源五　オヽ、疑ひ晴れた。某も、いつぞや箱根に殘りし手紙、權三が二品、下郎の彌助め。

權三　それに荷擔の嘉十郎、手に入る密書で事詳しく、親の敵と知れたる上は

ト此うち西心、思ひ入れあつて

西心　それがこなたの敵なら、討つたる奴は、あの首塚に。

權三　ヤ、なんと。
西心　云ふも現在親の身の、その惡黨は我が子の嘉十、母を殺してその場にて、八百屋の女房お千代とやら、直さま討つてその首は、親の見る目の獄門に、殘る姉にも恥辱をば
小萬　そんなら弟の嘉十郎
權三　姉が手にかけ敵討、濟んだる上はこの權三、何とて世間へ武士道が……ホヽホイ。
　　　ト當惑の思ひ入れ。
小萬　非道な母さん、それゆゑに
西心　矢ツ張り非業も心がら。
源五　心がゝりなお家の成行き。片時も早く二品を
權三　御持參あつて
小萬　お家の納まり。
源五　やがて歸參の
　　　トこの時、伴右衞門、ズツと出て
伴右　イヽヤ待たれよ源五兵衞、二つの品は揃へでも、殘る一つを忘れては、おてまへ、武士が立つま

いが。

ト源五兵衞、伴右衞門を見て

源五　昔殿は屋敷を御勘當

權三　受けたる賤ヶ谷、何ゆゑに

小萬　我れ〳〵二人がこれまでの、艱難苦勞も其方の業。

伴右　その艱難は心がら。今日歸參の伴右衞門。こなたはいつぞや屋敷にて、二人を討つて二つの首、持たねば罷り歸らぬと、番つた詞は反古にはなるまい。

源五　その時こそは二人が身の上、不義の實正糺せし上は、その申し譯、御前に於て

伴右　して、不義でない、しるしがあるか。

源五　某し養子のこの權三、まだうら若き女房小萬、人の譏りを憚りて、心の誓ひに二人とも、書きし菩薩は五大力、宮守の血汐はなか〳〵に、消えぬ文字は一度でも、密通なせば消え失せる、それを二人が誓約に、書きしが今では身の潔白。

トこの時、權三、小萬、顏見合せ、ホッと思ひ入れ。

伴右　イカサマ、聞き及んだる宮守の奇特、この場の潔白、然らば見ようワ。

西心　お目にかけるも、この身の面晴れ。
源五　疑ひ晴るゝ二人の腕。
小萬　そんなら爰で
權三　腕のしるしを
源五　早くそれにて
兩人　サア、それは。
西心　キリ〳〵、出さぬか。
作右　出さねば密通。
皆々　サア〳〵〳〵
　　　ト兩人、苦しき思ひ入れ。
源西　この場に於て
作右　とく〳〵二人を
　　　ト源五兵衞は權三の腕、西心は小萬の腕を引出し、双方とも文字無きゆゑ、皆々驚ろき
源五　ヤヽ、文字の消えしは

西心　そんなら二人は

伴右　間男したに極まつた。これぢやアよもや武士道が

源五　さては二人は、包むとすれど

　　ト源五兵衛、キッとなる。權三、小萬、思ひ入れあつて

權三　いかにも密通いたせし兩人。

小萬　夫を重ねしこの小萬。

西心　さては、いよ〱

　　トこの時、源五兵衛、兩人へかゝるを、西心、これを留める。權三、小萬思ひ入れあつて、キッとなる。合ひ方變る。

權三　遁がれるだけはと存じたが、しるしに書きし五大力。

小萬　消えたる上はこの場にて、わたしとこれなる權三どの、似合はぬながらも、これも約束。

　　ト思ひ入れ。西心、キットなつて

西心　コリヤヤイ、娘の聟を、なんでおのれが

小萬　寝取るも道理、いとしい男。

權三 男づくより侍ひの、役目が濟むまい、薩摩氏、よもやこれでは此まゝに、捨てゝ置いては武士が立つまい。

源五 武士道立たねど恩愛の、子に引かされて、母めが事も

ト赤子の方を見て、未練の思ひ入れ。

伴右 こなたは我が子と思はうが、權三が胤を、いかい御苦勞。

ト嘲笑ふ。

源五 ナニ、幼子は權三めが

ト思ひ入れ。

權三 又も僞はる伴右衛門、何を證據に身共が胤と

伴右 證據は卽ち悴の名前、權三といふ字をどぢぐじに、その餓鬼の名は三五郎。

源五 すりや、女房が口出しして、三五郎と附けさせたは

伴右 權三が胤を育てる心。それを大事とこなたには、我が子と心得、三五大切、抱き歩いたが氣の毒千萬。子で子にあらぬ時鳥、てつぺんかけたる……ハヽヽヽヽ。

小萬 疑ひうけても不義せぬ潔白。さはさりながら夢のうち

權三 幼しながら横しまが、通じて消えし文字の樣子。云ひ譯なければ口惜しや、密夫に落入る身の覺悟。

小萬 其方の心が据わりし上は、わたしが命も今日限り。サ、こちの人、今日まで包み隱せしが、天命遁がれぬ身の覺悟。密夫の上は、よもやお前は

權三 助けはしまい。源五兵衞どの、不義密通のこの權三、人の皮着た人面獸心。

小萬 不義ぢや／＼。

權三 不義者だ。

ト兩人とも切られて死ぬ思ひ入れ。

西心 すりや、二人とも覺悟の樣子。因果といへど間柄

源五 ハテ、何にも申すな、人ではないわえ。

權三 その人でなしを、よもや助けて

小萬 サ、切つてお前の侍ひを、立てゝ下され……コレ、斯う云はれても切られませぬか。

源五 イヽヤ切る氣になつた。證據は卽ち

ト小萬が抱きし幼子を源五兵衞、引取る。小萬、寄るを西心、支へる。源五兵衞、手早く一腰を拔き、

赤子を刺す。小萬、驚き寄るを、權三、引附ける。伴右衛門「これは」とかゝる目先へ、赤子を差しつける。西心、手を組み、泣顔を隠すこなし。キツとなる。

胡亂な忰この通り。これも何故最前の、誓ひに立てした大力、消えたる上はこれまでの、三九大事に育てしも、みな無駄事のこの場の仕儀。なれども血汐は

ト我が腕を突き、手水鉢の桶へ入れ、赤子の血汐と一つになし

アレ〳〵、血汐の一つに寄つたるは、我が子のしるし。

西心　そんなら、可哀や

小萬　殺すも矢ツ張り武士の道、立てさせたさにこの場にて

作右　子は殺しても、女房はよもや

源五　イヽヤ助けぬ女敵の、兩人討つて寶を持參、覺悟きはめてそれへ直れ。

トきつとなる。

權三　現在われが女房を、密夫されたるなまくら刃金、權三に立たうか、覺束ない。もう斯うなつては武士の意地、是非とも小萬は拙者が貰ふ、それも承引なきなれば、刀にかけても申し受けます。

小萬　わたしも今の夫へ附き、幸ひ爰に

ト赤木作りの短刀を取つて

源左兵衛どのへ刃向ふは、權三どのへ立てる心中。

内心　あの世この世の罪業を、滅する爲に此やうに、頭を剃つた甲斐もなく、忰や嫁めがあの死ざま。この道心が逆さまな、囘向するさへある中に、初めて逢うた初孫は、マアむごたらしいあの成行き。それも何ゆゑ小萬めが、この前髪と密夫して、その詰め開きの生死を、老いさらばうたこの親が、いま目の前に見やうとは、何たる因果のつくばいか、思へば／＼……ハア、。

ト大泣きに泣き落し

子仲まである實の聟。仇とはいへど若者に、憎いながらも娘の小萬、あの世を助ける鉦撞木。

ト鉦と撞木を持つて思ひ入れ。

源五　然らば二人は劍を持つて、いよ／＼討つかよ。

權小　刃向ひまする。

内心　その修羅道を草庵にて

作右　三人一つに

三人　イザ／＼／＼。

ト三人、立廻つてキッとなる。西心、上手にて撞木を持ち、鉦を鳴らし、念佛申す。作右衛門、思ひ入れ。鳴り物になり、三人よろしく立廻り。此うち西心、ヒヤ／＼する心。源五兵衛危ふくなれば、これを助け、兩人、危ふくなれば、作右衛門、弓張りを差出すを、西心、打ち落す。これより暗がりのこなし。作右衛門、一腰を拔き、中へ入り、寶を奪はうとする心。源五兵衛、權三に、逃げろといふ思ひ入れ。逃げぬこなし。西心は小萬を逃がさうとする。此うち作右衛門、源五兵衛に切りつける。源五兵衛、これを庇ふ思ひ入れ。作右衛門、間違つて權三を切る。權三「アツ」と叫ぶ。この聲に小萬寄るを、作右衛門と心得、源五兵衛、小萬に一太刀浴びせる。小萬「ウン」と反る。この間に作右衛門、寶を持つて行きかゝる。源五兵衛、これを捕へて

源五　すりや、作右衛門、おのれ寶を

ト この聲に權三、小萬、さてはと心得、兩人、作右衛門を切る。また權三小萬、暗がりゆゑ、作右衛門かと心得、合打ちに切る事。

西心　ヤ、手を負うたるか。せめて別るゝ未來の門火。

ト 枯れ樒を圍爐裏へくべる。これにて燃え立ち、顏見合せ

權三　おのれが爲す業。

ト件右衛門を切り倒す。小萬、源五兵衛に縋つて

小萬　死んだ跡にて、娘が事を

源五　知らぬ事とて、娘も倶に。

ト前幕のお雪が衣裳にて拵らへたる襠を、懐より出して見せる。

小權　すりや、この世には

西心　昨日の娘は

源五　即ちお雪、盲目の娘に聾の身共、短刀持つたる女ゆゑ、欲しさのまゝに我が子とも、知つて知られぬ片輪と片輪。刃に血汐滴りて、雷の響きに明いたる耳、跡で名乘りし親と子の、これも因果の約束事。

權小　エヽ、不便な事を。

西心　南無阿彌陀佛〳〵。

源五　忠義といへど間違ひにて、彌助が女房、二人の子供、權三小萬を手にかくれば、五人切つたる源五兵衛

權三　二つの首に二品の

小萬　寶揃へば少しも早う。

西心　跡の念佛は坊主の役目。

源五　箱根に於て手に入る畫像、出石の身寄りへ屆けなば、この身の歸參はこの佩刀、一念届いて渡せし折紙。

伴右　それを。

ト折紙の箱へ手をかける。權三、よろぼひながら立廻つて、この人數、思ひ入れあつて、二重舞臺へ上がり、キツとなつて

小萬　されども水に浸りし折紙。

權三　中改めて

ト源五兵衞、蓋を開き、取出し見て

源五　ヤ、、こりやコレ似せ物。

三人　エ、。

ト恟りする。

權三　命に替へて

小萬　取り得し折紙。

源五　短刀出ても揃はぬ折紙。

權三　これといふのも兩人が、濡衣ながら不義の科。

小萬　あくまで因果な……權三どの。

權三　小萬さま。

　　ト顔見合せ、思ひ入れあつて小萬は赤木の短刀、權三は一刀を腹へ突立てる。西心、駈けよる。源五兵衞、これを見て

源五　かほどに心盡しても

權小　ヤ。

源五　身共が武士は

作右　うぬを。

　　ト寄るを源五兵衞、見事に作右衞門を切り

源五　すたつたわえ。

　　ト無念の思ひ入れ。兩人、刃物を引廻す。西心、顔を外けて念佛し、鉦打ち鳴らす。この仕組みよろ

しく、時の鐘の送りにて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、眞中、二間の葛家葺き、反古貼りの半障子、鼠壁、繩暖簾の入り口、上の方、淨瑠璃臺、爰に淸元連中。下の方、漉き返しの紙を干したる板、大分並べ、この側に梅の立ち木、同じく吊り枝、花の盛り、日覆より朧月出てゐる。すべて汐入村、紙漉き家の體。道具とまる。

ト矢張り右の鳴り物にて、奥よりおみの、洗ひ髪、肩へ前垂れをかけ、廣袖、やつし世話な形の拵らへにて、徳利を提げ、出て來り、こなしあつて

みの　今夜はモウ何時かしらぬ。こちの人は、なぜに歸りが遲いやら。寐酒を買うて待つてゐたら、機嫌そこねる事もあるまい……これはしたり、何かに取紛れ、干し板も取込まぬさうな。ドリヤ、こちの人の戻らぬうち、夜なべ仕事に、屑を選り分けて置きませうか。

ト軒下にある屑籠を取入れやうとして、中よりグル／＼卷いたる反古を取出し

常の反古と違ひ、どうやらこれは皺にもならぬが、なんであらうな。

ト卷き紙をよく／＼見て、淨瑠璃の役觸れ、よろしくあつて

みの　おきやァがれ。こりやァ芝居の役觸れだ。アヽ、さうして見れば、こちの村ばかりではない。い

つくも色の世の中ぢやなア。

ト直ぐに浄瑠璃。紙屑を選り分けようとして、中よりいろ〳〵反古、古本なぞ出して見てゐる。

〽夢の世と、知らで甲斐なき現にも、おぼろ〳〵とまゝならぬ、あやにくなもの花に風、今は仇なる命もかけて、書きおく文の數よりも、迷うて爰に二人連れ。

ト誂らへの合ひ方になり。おしぼからげ、一本差し、肩へ毛氈を掛けたる千太郎。鶴吉、對の形、相合傘にて、腰へ樒を差して出て來り

〽幾夜々々の睦言も、每度々々の誓文も、この日の本の神さんを、名立てがましう云うたが罪か、廣き世界に相合傘を、傾むけ見れば客にさへ、女夫々々はあるものを 〽どうぞ一夜は嘘なしに、ほんの女夫と打解けて 〽云はれぬ事は、よく〳〵な、淺い緣とばかりにて、行き惱みてぞ立ちどまる。

トこの文句にて兩人、舞臺へ來て、おみのを見附け

千太 コレ〳〵、お女中、ちと物が尋ねたうござります。私しども二人は、淺草寺へ參詣いたし

鶴吉 道に迷うて參つた者、爰はマア、何と申す所でござります。

みの ハイ、爰は石濱、汐入村といふ所、見れば若いこなさん方二人。ハヽア、こりや心中ぢやな〳〵

千太　イエ〳〵、左樣な者ではござりませぬ。私しは御當地不案内の者、噂に聞いた都鳥、木の葉寺や鏡ケ池。

鶴吉　又と申すも女子の身の上、どうぞ隅田川添へを、お敎へなされて下さりませ。

みの　鏡ケ池も隅田川も、ツイそこらぢやが、それを聞くは、大方身を投げる心と見えるわえ。

兩人　イエ〳〵、其やうな者ではござりませぬ。

みの　そんならなんで今時分、池や川を尋ねるのぢやえ。

兩人　サア、それは。

みの　合點のゆかぬ二人の衆、池と川とを尋ねるからは

〽油斷がならぬ〳〵、陸へ上がつた川太郎夫婦、但しは池の泥鰌泥龜、龜の子網や忠兵衞がお傾城の櫛は朝鮮鼈甲か知らねど、笄を澤山さうに、それによう似た二人連れ、ほんに氣輕な紙砧、その女房と知られたり。

千太　成る程、こなたの云はるゝ通り、みな色情の徒らから、親々に苦をかけて、猶恐ろしき不孝の罪それを思へば二の宮どの、今より親の手許へ戻り、孝行つくして下さりませ。

鶴吉　そりや聞えませぬ、あなたのお詞、あれほど互ひに云ひ交し、覺悟極めしわたしなば、生き長ら

へよとは、胴慾な。

〽そもやお前と引き別れ、片時生きてゐられうか〽深いわたしを振り捨てゝ、よその女中と末かけて〽人の目顔を忍び駒、三味線胡弓手習ひの、稽古々々をかこつけに〽その中斐もなう今さらに、わたしにこれから歸れとは、そりや胴慾もしどけなく、袂を浸すばかりなり〽さほどに思ふ心根を、何とて一人見捨てべき、さはさりながら兩親に、先立つ不孝とばかりにて、跡は詞もむせびゐる。

みの　最前より見てゐれば、年も似合ひの二人連れ、添ふに添はれぬ事ゆゑに、未來とやらで添ふ心かそりや惡い料簡。死んで花實は咲かぬとは、コレ、この本にもある通り、古い文句や新内節、行きかふ人の仇口にも

〽竹の柱に茅の屋根、どんな暮らしもいとやせぬ、御機嫌まかせ御意次第、朝も我れらが置き炬燵、炭團もいけて釜の下、膳立てしてから、そろ〳〵と、お腰が痛まば按摩でも、次手に火鉢へお齒黑も、かけしや夜着の上おろし、女房孝行と云はりよとまゝよ、嬉しがらせて蔭口に、おらが嚊衆は丹波の生れ、猫脊獅子鼻猿眼、胸はひよい出た鳩胸、歩く姿はかつくりこ、ひよつくり變つた器量よし〽なんの因果で惡緣を、結ぶの神も聞えぬと、末にや科

ない神さんを、恨んで三下り半とやら、ようあるもじやないかいな。

トこの文句のうち、おみの、徳利を提げ、花道へかゝる。

みの　わたしは酒屋へ一走り。

〽とつくり跡でおしけりと、つもる話しの其うちに、こちは色より酒の燗、酒屋をさして入りにけり。

トおみの、花道へ入る。兩人殘り、思ひ入れあつて

鶴吉　あれ聞かしやんしたか、世に人鬼は無いとの譬へ。

千太　我れ／＼二人へ今の教訓、さりながら、寶が手に入らねば、歸參も叶はぬこの身の上、兩親にじめ苦勞をかけし、半兵衛どのへこの書置。

ト懐より書置を出す。鶴吉も同じく出し

鶴吉　そりやわたしとても同じ事、この身の徒らより事起り、お前の難儀となつたるも、罪は變らぬ最期の場所。

千太　もしやは人に見咎められ、死そこなうては互ひの恥。

鶴吉　二人一緒に。

ト行かうとする。下座にて人音する。兩人、思ひ入れ。

千太　ヤ、、あの人音は

鶴吉　モシ、お前は大事のお身の上。

千太　もしやは人に見咎められ、繩目の恥は親への不孝。

鶴吉　ちつとの間

千太　あの小蔭で

ト兩人囁き、千太郎は碑のあたりへ隱るゝ。鶴吉、あたりへこなし

〽寒さ忘るゝ男山、一杯機嫌の色上戸、名も百足屋の千鳥足、ひよろり〳〵と管まきかけて

ト下座より金兵衞、捨ぜりふにて出て來り

金兵　イヤア、おぬしは鶴吉ではないか。

鶴吉　ヤ、お前は金兵衞さん。

ト逃げようとするを引ッ捕へ

金兵　ドッコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。日頃から口說いても、承知せぬ女、爰で逢うたが緣の橋場、總泉寺の松原で、どうだ〳〵。

鶴吉　エヽ、アタしつこい、其やうな機嫌ぢやないわいな。

ト突き放す。

金兵　イヤア、此奴、なか／＼手剛い女だわえ。さてこそ鶴吉は、以前武士の娘と聞いたが、いま時分、爰にうせるからは、千太郎と駈落ちだな。この上は、色氣を捨てゝ、うぬら二人を縛りおけ、鎌倉へ引いて行く。おれと一緒にうしやァがれ。

鶴吉　なにを。邪魔せずと、そこ退きや。

金兵　イヽヤ退くまい、エイ／＼。

〽百足屋金兵衞さまの、お通りとも憚らず、立ちはだかつて、コレ、慮外な奴、とゝしやツ面を見てくれべい。

ト鶴吉と立廻る所へ、松太、花道より駈け來り

松太　イヽヤ、さうはならぬわい。

金兵　オヽ、われは松太だな。何しに來やァがつた。

鶴吉　オヽ、其方は

松太　構はずと行かつしやりませ。

金兵　イヽやらぬ、この金兵衛がやらぬヮ。

松太　何を小癪な。

ト木魚の鳴り物になり、兩人ちよつと立廻つて

ちよこ才な。

〽元は浮氣で藍染川よ。深くなるほど車井は、覗いて見たき釣瓶繩。

ト立廻りあつて

兩人　どつこい。

〽どつこいさうはと引き戻し、互ひに摑む力草、鷹の目鵜の目いどみ合ひ、腕を限りに金兵衛松太〽引いて見たさよあの清搔の、棹は紫檀かたがやさん、その三味線も風につれ、〽折から聞ゆる太鼓の音、囃す神樂に浮かせ狐、こん〳〵ちきちこんちきち、獅子はでれつく〳〵どん、どんがらいどん〳〵〳〵、はずみを打つて投げ返せば、これは堪らぬ、あいたたこ〳〵。

金兵　アイタヽヽヽヽ。

松太　アイタヽヽヽヽヽ。

金兵　アイタヽヽヽ。

松太　アイタヽヽヽヽ。

兩人　アイタヽヽヽヽヽ。

〽顏をしかめてひよつとこ囃子、引いて見たさよあの花だしは、江戸の花かや、よい聲かけやれ、これはさ、よいやな　〽屋體囃子に投げ撥曲撥　兜鉢　〽しころ正天神田丸　〽きはひかゝつて若者二人、大間鎌倉岡崎女郎衆、あのしよんな女郎衆初やまとは、浮氣な心よい女郎衆、梢を傳ふ花の雨、花に色ます花櫓。

トこの文句にて兩人、立廻りよろしくあつて納まる。

松太　ちつとも早く、お二人樣の

金兵　あと追ッかけて

松太　うぬをやつては

金兵　何を小癪な。

〽やり過してはずんでんころり、慾と嫉妬の二筋は

ト文句のうち、兩人、立廻つて、松太は金兵衛の跡を追うて向うへ入る。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、向う黒幕、所々に土手板、これに小松のあしらひ。上の方、池の模様。この周圍、草土手。下の方に鏡ヶ池と記したる石碑、柳の吊り枝、同じく立ち樹、この枝に今の毛氈と、千太郎鶴吉の書置を懸けある。すべて淺茅ヶ原、鏡ヶ池、夜の體、時の鐘にて道具とまる。

ト直ぐに淨瑠璃。

〽小夜更けて　よその妹脊は夢結ぶ、我れは忠義に兎や角と、心を碎く時も時、最早九ツ半兵衛が、色をも香をも面やつれ。

ト本釣り鐘、淨瑠璃の合ひ方になり、向うより半兵衛、着流し、一本差し、頰かむりにて出てくる。

〽お主の行くへ一種の、寶の在所身にかゝり、曇り勝ちなる朧月、鏡ヶ池の水に澄む、鴛鴦の番ひ羽あるものを、離れて爰に片思ひ、うつらうつらと胸せまり、根からむ草に爪つきて。

トこの文句にて舞臺へ來り、思ひ入れあつて

半兵　御主人の身にかゝる、寶の詮議も今日一日に限るゆゑ、心を盡した甲斐あつて、一つの寶は手に入つたれど、いま一つの寶が無いゆゑ、若旦那は家出なされ、もしも御身に凶事あつては、大恩受けし大旦那・宅左衛門さまへ申し譯がない。少しでも侍ひの、飯を食つたお庇には、忠義ゆゑには苦勞をするわえ。この間思はず手に入つたこの折紙、定めてこれゆゑに、苦勞してゐる人も

あらう。どこの誰れか知らぬが、どうぞ手渡ししてやりたいものだ。

ト序幕の折紙を出し、思ひ入れ。この時、思はず枝に懸けてある文を見附け

なんだ。爰に毛氈と、手紙らしい物があるが、此やうな時には、少しの事も尋ねる手蔓になるものだ。何は兎もあれ

ト件の二通を取つて、月あかりにて、よく〳〵見て

ヤヽヽヽ、こりやコレお二人様の御手蹟。爰にあるからは、仔細が………ムウ。

ト思ひ入れ。本釣り鐘鳴る。半兵衛、件の文を讀みにかゝる。

〽思ひは同じ妻鳥も、來かゝる野邊の道もせに〽お千代は一人小提灯、どこが畔やら畑やら、そつと怖毛に〽あれ〳〵、あれは狐火か、我が跫音に嚇されて〽見かへる後に松の風、便り求めてどうぞして〽夫の願へ庚申、さるとは何か氣にかゝり〽女心の一筋に、淺茅ケ原にぞさしかゝる。

トこの文句よき時分、東の口よりお千代、小提灯を持ち、出て來り、よろしくあつて舞臺へ來る。半兵衛は二通の文を讀み終り

半兵　ヤヽヽヽ、こりやコレお二人様の書置。そんなら疾に御最期か。ハアヽ。

ト思ひ入れ。お千代、この聲を聞いて

千代　ヤ、さういふ聲は半兵衛さん、ようマア無事でゐて下さんしたなア。

半兵　さうぢや。南無阿彌陀佛。

ト腹切らうとする。お千代、その手に縋り

千代　モシ、半兵衛さん、お前はなんで死なしやんす。

半兵　なんで死ぬとはこの書置。お二人樣は寶の行くへ知れざるゆゑ、最早御最期の樣子。大切なる御主人樣を先立てゝは、生きて詮ないこの半兵衛。それぢやによつて

千代　コレ、待つて下さんせ。お前の爲にもお主なら、わたしも遁がれぬ身の覺悟。それぢやによつてお前と一緒に、未來へ共々

半兵　イヤ〳〵、其方は跡に長らへて、親の位牌所、二つには御主人樣、次手におれが亡き跡で、一遍の回向してくれ。死ぬるは半兵衛一つの命。

千代　そりや胴慾でござんす。夫婦は二世とありふれし、浮世の譬へあるものを、他人行儀な、半兵衛さん。

〽なぜ其やうによそ〳〵しう、うとみ隔てゝ下さんす、互ひに斯うなる上からは、譬へ泣い

ても悔んでも、解くに解かれぬつま結び、死んで生れてやう〳〵と、夫婦の緣の切れ目なく、また繰りかへし神さんに＼願うてどうぞ果しなき、變らぬ仲と樂しみを＼わたしに跡へ殘れとは、あんまりつれないお心と、涙ながらに抱きしめて、離れがたなき風情なり。

半兵　覺悟はよいか。

千代　南無阿彌陀佛。

＼南無と一聲云ひさして、跡は涙に見え分かぬ、斯うとはかねて知りながら、思ひの外の庚申、利益は後にいちじるき、及ばぬ筆に書き傳ふ。

トこの文句のうち、兩人よろしく書置を持ち、毛氈を肩にかけ、爰にて顏を見合せ、「ハア、」と思ひ入れ。時の鐘にて道具廻る。連中、打ちかへしにて隱す。

本舞臺、三間の間、向う黒幕、松並木同じく吊り枝。眞中に石の大地藏。この前に源九兵衞、小萬權三の首級を、目じるしの袖にて包み、並べ置き、捨石に腰をかけ、思案の思ひ入れ　淺茅ヶ原、大川先の體。時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

源五　女敵の首、天國の、短刀は手に入つたれど、無くて叶はぬ折紙無ければ、二つの首級は是非なく

犬死。さりながら、計らず手に入る星の畫像、これもお家の寶の一つ。折紙の代り、せめてもの申し譯に、この場に於て我れは切腹。夜明けぬうちに、オヽ、さうぢや。

ト時の鐘になり、切腹しようとする。バタ〳〵になり、下座より半兵衛お千代、手を取り、四人の捕り手、追うて出てくる。

半兵　最期の邪魔する、うぬらも道連れ。

ト拔き身を振りあげる。捕り手は下座へ逃げて入る。

千代　又もや妨げないうちに

半兵　片時も早く

兩人　南無阿彌陀佛。

ト死なうとするを、源五兵衛見て

源五　コレ、早まるまい。見れば、まだうら若き二人の衆、何ゆゑ命を

半兵　お尋ねにあづかり、申しあぐるも面目ない。私し主人は、出石千太郎と申す者。

千代　お家の重寶を失ひしゆゑ、心を碎く甲斐あつて、一つの寶は手に入りましたが、いま一種の寶無きゆゑ

半兵　御主人には、はや御最期。
源五　ヤヽ、すりや千太郎どのには最期とや。ハテ、是非に及ばぬ。さては其許は噂に聞きし、半兵衞御夫婦か。
兩人　して、あなた樣は。
源五　同家中たる薩摩源五兵衞。我れも一品、折紙無きゆゑ、この場で切腹。
半兵　その折紙と仰しやるは、もしやこれではござりませぬか。
　ト以前の折紙を出す。源五兵衞、見て
源五　これこそ尋ぬる天國の折紙。エヽ、忝い。千太郎どのが預かりの、畫像は即ちコレ爰に。
　ト畫像を出す。半兵衞、見て
半兵　ヤヽ、これこそ尋ぬる一種の
千代　寶揃へど、お二人樣は
源五　疾に命を捨てられしか。
三人　ハテ、是非に及ばぬ、
　ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、下座より黑の捕り手四人、千太郎と鶴吉を引ッ立て出て來り

捕手 動くな。

半兵 イヽヤ、それには及ばぬ。月星一幅の畫像といひ

源五 天國折紙揃ひし上は

千代 千葉のお家は萬代不易。

千鶴 すりや、寶は手に入りしか。

皆々 チエヽ、忝い。

ト思ひ入れ。

捕頭 ソレ、やるな。

捕皆 動くな。

半源 なにを。

皆々 どつこい。

半兵 まづ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

曾我中村穐取込

そがなかむらあきのとりこみ



役人替名

さかい町

中村座

曾我中村穐取込

第一番目　三建目

裾野狩屋の場
江の島金龜山の場
袂ケ浦別莊の場

役名——滿壽君、賴家公。曾我の家臣、團三郎。漁師、地獄清左衛門。盜人、隱亡權助。鬼王新左衛門。中間、三平。百足屋金兵衛。二の宮太郎朝忠。近藤七郎國清。一條次郎忠頼。井上太郎忠長。仁科次郎。江島三郎。劍澤彈正左衛門。箱根別當行實。江の島所化、雲泥。稚兒、出羽菊丸。女六部、海月。盜賊、呼坂長平。海女、お冬。同、お文。曾我の母、滿江。團三郎女房、お幸。

本舞臺、三間の間、黒幕、眞中に狩場の木戸口。爰に近藤七郎、胴丸の形。勢子四人、突棒、刺股にて取巻きゐる。ドン〳〵、早笛にて幕明く。

ト よろしく立廻りあつて、皆々折重なり、七郎を取つて押へ、繩をかけ

勢一　夜中といひ、御狩家を窺ふ狼藉者。

勢二　正しく曾我の餘類の者か。

勢三　一の柵は七郎國中、固めの場所。

勢四　我れ／＼が役所へ引く。サア、尋常に

四人　うせをらう。

ト皆々寄ツて引ツ立てる。

七郎　ヤイ／＼、おれだ、近藤七郎だワ。

四人　ヤア。

七郎　おのれらは、身が組子の者ではないか。主へ對して慮外千萬。身が繩解いてそれへ直れ。眞二つに致す。

トきつとなる。皆々驚ろき

四人　これは大きに不調法、眞平御免下さりませう。

七郎　イヽヤ、罷りならぬ。

勢一　成る程、御立腹は御尤もでござりまするが、ここが雨天と申し、暗がりゆゑ

勢二　なんでもあなたを曾我の十郎、祐成ぢやと存じまして

勢三　祐經さまへ仇なす兄弟。

勢三　手柄は仕勝ちと、それゆゑ

四人　祐成と存じまして。

七郎　ナニ、身共を祐成と見違へたと申すか。

四人　御意でござります。

七郎　ムウ、無理もない……然らば赦す。繩を解け〳〵。

四人　へイ〳〵。

ト皆々よつて繩を解く。

七郎　弟の時致めは、大力無双の童と聞く。今にもこれへ參らば、其方ども、搦めとれ。また身と取違へて、祐成めを逃がしてしまふな。

四人　へイ〳〵、畏まりました。

トこの時、木戸の内にて、太刀音して、ドン〳〵、アリヤ〳〵の聲する。

七郎　アヽ、太刀音は、もしや時致參らば一大事。君子は危ふきに近寄らず、靜かな方へ、闇めいて行く

四人　ハア。

ト七郎先に、四人附いて下座へ入る。時の鐘、ドン／＼、早拍子木、ドリヤ／＼の鳴物にて木戸口より長半、陣笠、勢子の形にて、この中を遁がれ出でし體。あたりを窺ひ、吐息をつき

長半　先づしてやつたワ。劍澤彈正さまに頼まれて、賴朝の枕刀、曉丸のこの一腰、夜討のドサクサ幸ひに、勢子に紛れて、まんまと首尾よく。忝い。

ト腰に差したる赤木作りを取つて

まだその上に祐經が、狩家の内に落しあつたるこの短刀、慥かに赤木作りとやら。こいつもなんぞ物を云ひさうな代物だ。また曉丸の盜賊は、曾我兄弟の奴等に塗りつける。斯うもよい都合にゆくものか……ちつとも早くこの一腰、彈正さまへ。さうだ。

ト行かうとする。よき時分より七郎、後に窺ひゐて

七郎　おのれ、曲者。

トかゝるを、ちよつと立廻り、キッとなる。この時、奥にて

○　ヤア／＼、狩家の面々よく聞かれよ。曾我の十郎祐成は、仁田の四郎が討取つたり。弟五郎時

致は、五郎丸重宗、組みとめたり、

大勢 エイ／＼オウ。

トこれを聞き長半、思ひ入れあつて

長半 さては曾我の兄弟は

七郎 兩人ともに捕はれしか。

長半 さすれば劒の盜賊は、二人の奴等へ

七郎 ヤ、何とも怪しき

ト又かゝるを、振りほどいて見事に當て、腰を抱へ、向うへ走り入る。カケリにて、道具變る。

本舞臺、うしろ一面の岩組みの幕、眞中に石の大鳥居、これに金剛山と題したる唐銅の額をかけ、下の方に蒼龍鱗の紋附いたる幕を張り、左右に杉の立ち樹、同じく吊り枝。舞臺前に浪板。爰にお冬、お文、腰眞、海女の形。忠頼、忠長、素袍の下を高括りにて扣へゐる。踊り地の切れにて道具とまる。

兩人 ヤンヤ／＼。

太郎 忠頼どの、なか／＼一興でござつた。

忠頼　イヤハヤ、暫時欝散いたしてござる。今日た其方どもを召しよせたは、若君、當社へ御參詣につき、お慰みとして、別當方にて御遊覽。有り難くお請け致せ。

ふゆ　冥加にあまる事ながら、海女の手業は藻汐貝、煙りも細き絲屑で、網すく外は白浪の、寄する岩根に日を送り、裾や小褄もしほ〳〵と

ふみ　人のみるくひ恥かしく、ほんにこの身のしゞみ貝、友呼ぶ鷗、松吹く風、浮洲にすだく浦千鳥、啼く音より外知らぬわたしら。

兩人　お恥かしう存じまする。

忠頼　ハテサテ、惡い合點の奴ぢや。絲竹の調べはさておき、舞の御遊も珍らしからぬ御身なれど、鄙びたところが、却つて又お慰みぢやワ。

忠長　左樣でござる。只今下々で流行いたす、彼のよしこのなぞをお聽きに達したらば、さぞ御滿足にも思し召さうが、さも相成らぬ事ゆゑに、そこを存じて劍澤が計らひ

兩人　感心いたした儀でござる。

トこの時、向うにて

呼び　頼家公參詣。

ト呼ぶ、

忠頼　最早頼家公お入りとあらば

冬文　左様なら私しどもは

忠長　御沙汰あるまで別當方に。

冬文　畏まりました。

ト　お冬お文、下座へ入る。また向うにて

呼び　頼家公のお入り。

ト下がり葉になり、向うより頼家、烏帽子狩衣、中啓を持ち、素袍の侍ひ、長柄さしかけ、仁木太郎、江島三郎、素袍の下股立ちにて、青籠に貝づくしの入れたるを持ち、朝忠、上下大小。彈正、同じく上下大小にて、白丁の仕丁大勢附き出る。鳥居の内より雲泥、青坊主の役僧。菊丸、稚兒にて附き出て、出迎へる。皆々花道にて

頼家　欽明帝の詔によつて、初めて禮祭ありしより、靈驗世々にいちじるく、この度父上の富士の御狩、御武運を祈らん爲の、今日の社參。皆々の警衛、滿足せい。

皆々　ハヽア。

次郎　仰せの如く、その利生もあらたにて、殊には風景美妙の靈場。
三郎　御參詣の道すがら、君を祝するその爲に、漁夫が捧げし鯛子の數々。
朝忠　あけて數へん御威勢によつて、四海の浪も穩やかに、庶民太平を謳ふも、これ全く賴朝公の御仁政。
彈正　實に萬代の金龜山、ゆるがぬ御代の礎固く、岩本院にて御饗應には、何がなと、拙き海女が一さしも、納まる時を越天樂、天津乙女の舞よりも、却つて神慮に叶はんと、それゆゑ彈正、申しつけましてござります。
忠賴　お先詰めとして一條次郎忠賴。
忠長　井上太郎忠長。
菊丸　お供物役は出羽菊丸。
雲泥　お出迎ひとして、當院の役僧雲泥坊。
彈正　賴家公には、イザまづあれへ
皆々　お入りあられませう。
賴家　方々、來れ。

皆々　ハア、。

ト右の鳴り物にて、皆々舞臺へ來り、よろしく並ぶ。

賴家　父上御歸舘あるまでは、當社に於て日夜の修行。衆徒の面々、それ〳〵大儀にこそあれ。猶も怠る事なかれ。

雲泥　ハッ、尊命の如く、上の宮、下の宮、十二の巖窟、天女の守護神。

菊丸　末社々々に至るまで、社殿には榧の百燈、百味を捧げ

雲泥　神前には千卷の陀羅尼、晝夜讀誦仕り居りまする……二の宮さまへ申しあげます。かねてよりの院主が願ひ、彈正さまにもお出でこそ幸ひ、お執成し願ひ奉りまする。

彈正　二の宮どの、彈正へ、當院よりの賴みとは。

朝忠　その儀は斯樣でござる。先達てお咎めを蒙むりし、箱根山の別當行賢、當院にお預けありしを、今日た賴家公、御參詣の折を幸ひ、鎌倉へお詫びの一條、其許樣よりのお執成し、願はんとの儀でござらう。

彈正　ハヽヽヽヽ、弓矢取る身であるならば、いかなる大罪にも行はるべきを、格別の思し召しを以て、當院へのお預けは、有り難い事と存じて、御沙汰を待つべきところ、お詫びなんぞとは、あ

まりに上を蔑がしろ。さりながら、貴殿も折角御推擧あるゝ事ゆゑに、これへ呼び出し、[illegible]に於て今一應

雲泥　然らばこれへ行實を

彈正　呼出しめされい。

雲泥　ハツ。

ト立ちあがり、揚げ幕へ向つて

それに扣へられし、箱根山の別當行實どの。急いでこれへ。

行實　ハツ。

ト音樂になり、向うより行實、靜々と出て、花道に平伏する。

皆々　して、別當が願ひとは。

行實　お願ひとて外ならず、當寺へお預けと相成りしこの行實、きつと愼しみ罷りあれど、未だ何の御沙汰もなく、それゆゑ推して愚僧が願ひ。いかなる事のお咎めにや、その罪に居てその罪を存せぬ行實。願はくはその儀をお糺しあつて、偏へにお慈悲のお執成し、願ひあげ奉りまする。

彈正　その儀は身が申し聞けん　兩人とも、近う〳〵。

行實　ハツ。

ト行實、舞臺へ來る。

羅正　先達て箱根山へ、奉納の友切丸、まつた微塵丸の劍、二振りともに紛失との事。源家重代のその御劍。いはゞ天下の御寶を、我が物顔に失ふとは、これ大いなる罪にあらずや。別當行實、鎌倉公へお答へは、サア、どうぢや。

行實　サヽ、その儀は

ト思ひ入れ。

忠頼　それと申すも、同じ清和の類葉なれど、義仲の一子、冠者義高どの、御養女たる大姫君の、云ひ號けとは申せども

次郎　朝敵たる木曾の公達。殊に行くへも相知れず、もしやはそれに荷擔なし

三郎　二振りの劍を渡し、もし露顯に及びなば、紛失したと云ひ觸らし、御沙汰に及ばぬその時は、それなりけりで、置く心か。

忠長　但しは曲げたか、賣つたのか。表面は地藏のやうなれど、箱根山に棲むからは、これがほんの、狼に衣とやらでござらうて。

行實　こは思ひもよらぬ御仰せ。朝敵木曾の殘黨に、與みせしなんどのその御詮議、權現を始めに、誓言かつて覺えござらぬ。元より出家沙門の身として、何とてかゝる惡念に……御賢察あつて、お疑ひを晴らさせられ、お慈悲の執成し、偏へに願ひ奉ります。

彈正　たとへいかやうに申せばとて、御劍出でざる其うちは、矢張り當寺へお預け。猶も心を附けられい。

雲泥　畏まり奉つてござりまする。

行實　すりや、御劍の出づるまでは、矢張り行實、この寺に、いつがいつまで果しなき

雪泥　矢ツ張り此方の厄介ものサ。

菊丸　米の高いに、困つたものだ。

大名　箱根へ歸參は、叶ひ申さぬ。

賴家　天に罪を受くる時は、祈る所なしと、佛に仕ふるその身にて、かゝる天災、是非もなし、只この上は時節を待ち、猶も神慮を仰ぐべし。

朝忠　冥加にあまる君の御諚

行實　エヽ、有り難うござりまする。

彈正　益なき事に暫時の遲刻。賴家公には別當方へ。

雲泥　然らば拙僧御案内。

皆々　君のお入り。

仕丁　ハア、。

ト下がり葉になり、この人数皆々、鳥居の内へ入る。行實、菊丸殘る。音樂になり

行實　假初めならぬ劍の紛失。その尼について讒者の舌頭、身は雲を踏み、心は空。もしも劍の出でざる時は……ア、、これも定まる宿業がなであらうか。かゝる憂ひもあればこそ、思ひもよらぬ稚王が、弟の禪司坊に見えしより、恥かしながら行實が、其方を賴んで送りし文。それに色よき返事もなく、今は心の切なる要、扇に染めし彼の一首、其方へ返事は、どう致した。

菊丸　行實さまのお賴みゆゑ、密かに扇を渡せしところ、讀むと其まゝ腹立つて、幾度仰しやつても、否と云ふより返事は無いと、劍もほろゝのその素振り、その上、送りし扇まで

ト懷より引裂いたる扇を出す。行實、取つて

行實　すりや、斯くまでに心を盡し、認め送りし甲斐もなう、引裂き返せしその心底。

菊丸　それと云はねどあなたには、お預けのお身ゆゑに

行實　見侮つてのつれない仕方。兄弟王も身が養育、その意に愛でゝも斯くまでに。
菊丸　固意地者の禪司坊。
行實　よくも恥辱を與へたな。
　　トきつと思ひ入れ。唄になり、行實、奥へ入る。菊丸、あと見送り、思ひ入れあつて
菊丸　文をやつても口說いても、得心せぬ禪司坊。そこへ附けこみ此方から、無理に仕掛けてお寢間の伽。いつまで稚兒で居ようより、この身を捨てゝ元手にありつき、女房持つて在家の住居。これや好い工風が出羽菊丸。なんでも側へ附きそうて……さうぢや。
　　ト大拍子になり、奥へ入る。向うより三平、奴の形にて、六部の荷を負ひ、權助、雲助にて、竹の息杖を刺し、これを引立て出るを、海月、女六部にて、これを詫びながら出る。金兵衛、跡に附き、供の男、荷を擔ぎ、これも詫びながら出て、花道にて
權助　サア、濟まないぞ〳〵。
三平　おれが惡いから料簡さつしやい。
權助　イヤ、われにやァ構はぬ。この荷が相手だ。
海月　どうもそれでは私しが、迷惑を致しまする。

金兵　さうよ。おれも聞いてゐたが、六部どのが否だと云ふのを、どうぞ一杯飲ませてくれろと、無理に賴んだ譯だ。其方のこみやりは兎も角も、六部どのが困るワ。マア、堪忍さつしやいな。

權助　否だ〳〵、料簡ならねえ。サア、うせい〳〵。

ト引立て、皆々も舞臺へ來る。

コレ、息杖一本で世渡りをしても、殊によれば千兩萬兩の金も、宰領無しに宿次に送るにも、雲助にも御定法があつて、渡世をするのだ。サア、何にしろこの荷は、問屋へ行つて渡してやるから、問屋まであゆべ。

海月　成る程、いま仰しやる通り、お前樣が皆御尤もでござりまするが、何を申しまするも、その沸樣は、申さば私しも渡世道具。もう重ねてから、其やうな儀もござりますまいほどに、どうぞ今日のところは

權助　エヽ、やかましいわいの。こなさんも、擔がしたが不請だ。譯の附くまで、この荷はやる事はならねえ。わりやア大方、護摩の灰かも知れねえ。サア、うせい〳〵。

ト又た引立てるを、金兵衞とめて

金兵　ハテサテ、こんたも強情な男だ。それだからおいらも共々に、また賃錢を出した人までも詫びる

ぢやアねえか。濟まざア濟まねえやうに、當人を連れて行つて、煮焼きもするまい、さ、何も荷を留めるといふ理窟は、ありさうもねえもんだ。……ア、、聞えた。女六部だと思つて、おつに澄るのだの。さういふ譯ならおれも又、道連れになつたが不請だ。この六部さんに成り代つて、どこがどこまでも、腰押しをしにやアならねえワ。サア、問屋はおろか、代官樣へでも行つて、この譯道を附けにやアならねえ。……とサ、云つて見た時にやア、實も蓋もねえ。こいつや斷うさつし。こんたの手から小揚げにやつたと思へば、腹も立つまい。その代りにやア、駄賃はこんたにやるワ。

ト懷中より金を一分出してやる。

サア、酒手ぐるみ。これで料簡さつしやい、

ト權助にやる。三平、權助に思ひ入れあつて

三平　ナニ滅相な。およしなさればいゝに。それではお氣の毒でござります。

權助　エヽコレ、われも只置く奴ぢやアないが、旦那があれ程に仰しやるから……ハヽヽヽ、これはお有り難うござります。

金兵　そんならその中から、この人にもいゝやうに進ぜて下さい。

權助　そりやハヤ、先から山割り……イヤサ、山へでもお出でなさつたら、又お目にかゝりまさア。

三平　左樣なら、御機嫌ようお出でなされませ。大きに御苦勞をかけました。

兩人　有り難うござります。

ト兩人、下座へ入る。

海月　イヤモウ、どうなる事かと存じましたに、あなたのお取扱ひで、事なう相濟みまして、なんとお禮の申しやうもござりませぬ。

金兵　あれも、ほんのその日の災難だ。時に、お六部さん、御生國はどこだえ。

海月　ハイ。私しは伊豆の國の者。もう今年で十八年、廻國を致しまする。

金兵　さうかえ。まだお若いに御奇特だ、そんなら御一緒に、參詣いたしませう。

海月　左樣なら、御同道いたしますでござりませう。

ト大拍子になり、海月、荷を負ひ、金兵衞と供の男附いて、鳥居の内へ入る。引違へて雲泥、三方に神酒德利を載せ、ウロ〱と出て來り

雲泥　禪司坊は居らぬか。禪司坊々々々。

ト探し

アヽコレ、禪司坊に逢うて、天日坊より頼まれたこの文、早う渡してやりたいものぢやが。

ト文を持つて、ウロ／＼してゐる。この時、奥より菊丸、出て來り

菊丸　コレ／＼、雲泥さん、アヽ、禪司坊を、なんでお前、其やうに

ト件の文を見て

なんぢや「禪司坊どのへ、焦るゝ僧より」……ハヽア、聞えた。コレ、雲泥どの、ようもお前は禪司坊に、わしを見更へさんしたの。エヽ、腹の立つ／＼。

雲泥　どうマア見更へていゝものか。こりやア天日坊よりの頼みゆゑ。

菊丸　イヤ／＼、道理こそこの頃は、供物はおろかお供餅まで、何一つこの出羽菊にはくれもせず、すげなうするもそれゆゑに、見更へられたが、口惜しい／＼。

トこづき廻す。此はずみに雲泥の衣は脱げて、あたりへ落ちる。

雲泥　てもマア、疑ぐり深い、なんで其方を

菊丸　イヤ／＼、長の年月こなたには、チッと辛抱してゐた菊丸。さういふ心の雲泥坊、もうこれまでの意趣返し。

ト雲泥を捕へる。

雲泥　ナニ、この雲泥を……こいつは大變々々。

ト三方も捨てゝ下座へ逃げて入る。

菊丸　斯う云ひ出したら日頃の腹癒せ。いつくまでも……さうだ。

ト大拍子になり、菊丸、跡追うて入る。勢子太鼓、向うバタ〱になり、長半、以前の勢子の形にて吸ひ筒を下げ、赤木作りを手拭にくるんで差し、曉丸を絲立てに包み、走り出て來り、舞臺へ來て奥へ向ひ

長半　いかに物申さん。當山に頼家公のまします由。警護のお方も御座あらん。富士の根方に於て、御大事出來せり。御注進々々々。

ト呼はる。奥より頼家先に以前の大名皆々附き、出て來り

頼家　心ならざるその訴へ。

朝忠　見れば見馴れぬ小者なるが、君の狩家へ從ふ面々、祐經どのを始めとして、諸侯も多きその中に其方が訴へいぶかしい。さりながら、御大事とは氣遣はしい。して、其方は。

長半　ハッ、下郎めは、梶原さまの組子にて、勢子に召されし者でござります。

彈正　その傅きも多き中に、擢でたる先驅けの訴へ。小者に似合はぬ、天晴れのその働き。

皆々　それにて具に申しあげい。

長半　ハッ、夜前八ッ時とも思しき頃、曾我兄弟の者共が、御狩家へ忍び入り、祐經さまを討ち、[illegible]、假家々々へ暴れこみ、殊に怪しき御領の狩家、大祖父伊東の仇敵、頼朝公を討ち奉らんと、近寄る時致、支へる人々、片ッ端より切り散らし、鎌倉武士には數多の手負ひさせれども、十郎祐成は、仁田四郎が討ち取つたり、弟の五郎時致は、五郎丸どの組みとめて、狩場の騒ぎは鎮まれども大方ならざる事ゆゑに、直さま下郎が御注進、斯くの通りでござります。

朝忠　ヤ、すりや兄弟の者どもは、御場所をも辨まへず、ホヽホイ。

忠頼　たとへ親の仇にもせよ、私しの宿意を以て

三郎　御狩家騒がす尾籠の振舞ひ。

次郎　殊には御領の御狩家目がけ、敵と號して物取り半分

忠長　どうで餓えて死ぬるより、世間體よく仇討と、ひもじいゆゑの出來心か。

四人　イヤハヤ、言語に絶せし儀でござる。

頼家　さはさりながら五郎時致、見所ある者ゆゑに、召使はんと存ぜしところ、父君へ敵對なんどとは憎くき心底。

彈正　二人の奴等は重罪人。工藤の家へもキッとお咎め。拙者はこれに相とゞまり、猶又君の御武運を

忠頼　頼家公には、一先づ館へ

四人　我れ〱は君の警衛。

頼家　いそふれ、方々。

彈正　君の御歸館。

皆々　ハア、。

ト早めたる下がり葉になり、頼家先に皆々附きそひ、向うへ入る。彈正、長半殘り、こなしあつて

長半　彈正さま、かねてのお企み、まんまと首尾よく

彈正　コリヤ。

ト音樂になり

當時聞えし盜賊のその一人、坪坂長半として、その曉丸は

長半　お氣遣ひなされますな。御覽の如く身をやつし、夜討の騷ぎに紛れこみ、祐經を殺さんと窺ひ寄りしが、折に幸ひ、曾我の奴等が先越して　手も濡らさずに片附けさせ、そのドサクサに御領へ入りこみ、曉丸は此方へ卷きあげ、盜んだ科は二人の奴等へ……なんと、いゝ都合でござりま

せう。サア、お受取りなされませ。

ト絲立ての中より、件の曉丸を出して渡す。

彈正　紛ふ方なき曉丸。

長半　ひん盜んだ歸り足、祐經が狩家を見れば、血に染みあつたこの短刀、慥かに赤木作りとやら。

ト差したるを出して見せ

これもまんざらな、代物でもござりますまい。

彈正　ムウ、出かした／＼。かねてよりこの祐兼、兄祐經が妻の梛の葉、手に入れんとは思へども、祐經世にある其うちは、某が心に任せず、それと悟つて我れを勘當。劍澤へ養子となり、只今にては緣切れども、工藤の家の斷絕を、見るも殘念。これといふのも曾我の奴等。さすれば當寺に預けある、禪司坊を始めとして、滿江までも行くへを探し、殺してしまふ手段は無いか。

長半　何より容易いそのお賴み。滿江ことは、袂ケ浦に居りますれば、仲間の奴等を狩り集め、忍び入つてその次手、おッ片附けるになんの手間隙。又お心をかけらるゝ、その梛の葉は由井ケ濱の漁師の娘で磯くさき、鹽水よして泥水を、手越の里で勤め奉公。どうした運か工藤の奥樣。これも餘ッほど苦勞したが、晚から獨り寢の、ひもじい所へ附け込まば、直さまあなたへ靡くは定。

何から何まで首尾よくゆかば

彈正　この恩賞は又別段。まだその上に彈正が、範頼公へ推擧して、武士に取立て遣はさん。この上ともに、働らけく。

長半　さういふ事なら命もきはに、あなたのお頼み。して、この短刀を

彈正　赤木作りは、暫らく其方に。

ト曉丸へ思ひ入れあつて

この一腰とてかゝる時節、人目に立たば

トまた絲立てへ包み、繩にて結へ

それに扣へし三平參れ。

ト奥にて

三平　ネイ。

ト下座より三平、出て來り

お旦那樣、御用でござりますか。

彈正　其方はこの品持參し、暮れるを待つて鎌倉へ。

三平　ヘイ／＼、畏まりました。左樣なれば、あなた樣は

彈正　身はこれより、直さま館へ。コリヤ

ト囁き

隨分その品大事にかけ、別當方にて時刻を待て。

長半　この長半は、かねての手番ひ。

彈正　必らずぬかるな。

長半　お氣遣ひなされますな。

三平　然らば下郎は

彈正　早行け、三平。

ト浪の音、大拍子になり、彈正向うへ、三平は下座へ入る。長半殘り、こなしあつて

長半　蛙變じて石になり、盜人變じて武士になると、こいつはまんが直つて來たわえ。ドレ、祝ひに半分やらかさうか。

ト腰に提げたる吸ひ筒を取つて、口から飲みゐる。下座より權助、息杖を差し、出て來り

權助　モシ、お頭、どうやら浮いた樣子ぢやの。

長半　浮いたどころか、おりやモウ、おッつけ武士ぢやぞ。

權助　ナニ武士ぢや。武士になるとか。そりやハヤえらい出世ぢやな。したが、わしも又、いつがいつまで、盗人の提灯持ちをしてゐても詰まらぬものぢや。なんぞ相應な事があらば、おれに半分さして下され。

長半　そりやハヤ、われが働らき次第で、幸ひ今夜は、頼まれた仕事にかゝらねばならぬから

權助　して、その先は、どこでごんす。

長半　コリヤ……ナ、よしか。

ト囁く

權助　そんなら何と云はつしやる。今夜の仕事を首尾ようやれば、頭は武士にか……さうして、わしらは。

長半　その時に、中間に取立つてやるワ。

權助　ナニ、折助にか。それでは矢ッ張り提灯持ちぢやな。六部の道中で、果しが無いなう。

長半　馬鹿を吐かせ。眞人間にしてやるのだ。コレ、われは、この刃物と吸ひ筒を持つて、跡から來い忘れるな。

ト件の赤木作りと吸ひ筒を渡す。

權助　この刃物と、この酒を、どこらあたりへ、何時頃に。

長半　今夜の丑滿、八ッ松原。

權助　出會ふ所は砥上ケ原。

長半　仲間を引いて、袂ケ浦へ

ト落ちてある衣を取上げて

形を變へるに幸ひな……必らず手筈を違へるな。

權助　くどう云はずと、承知でごんすワ。

長半　ドリヤ、手下の奴等へ觸れべいか。

ト浪の音、大拍子になり、衣を抱へて向うへ入る。

權助　イヤ又、おれも盜人にも附合つたが、あんなにも慾の深い盜人もないものぢや。畢竟、海山越えて、こんな渡世すりやこそ、親方々々と崇めてゐればいゝかと思うて、コレ、おれも護摩の灰から取上がつて、京大阪を股にかけ、九州の果までもぐづり歩いた、隱亡の權助ぢや……待てよ、いま聞いたこそ幸ひ、頭めをおッ殺して、今夜の仕事を此方へ捲きあげる、いゝ工風が……オヽ、

あるぞ〳〵。

ト思はず持つたる短刀を、あたりの三方の上に置き、息杖の栓を取り、竹の中より蛇を出し

工風といふのはこれぢや。この蛇は、いゝい、ひばかりといふ大青蛇ぢや。この血汐を酒に入れ、彼奴に喰はせ、コロリとやつたその跡で、仕事はおれが……さうぢや。

ト此うち始終、掠めたる浪の音にて、件の蛇を引裂き、件の吸な筒の中へ血汐を絞りこみ、あたりにある徳利を見附け

喰ひ足らずば、こいつにも

トまた徳利の口へも血汐を入れる。この時、下座より雲泥、ウロ〳〵して出て来り

雲泥 エヽコレ、出羽菊丸めにかゝつて、神酒も衣も、どこへ忘れたやら。

トこれを見つけ

ヤ、此奴が〳〵、勿體至極もない。なぜいぢり居る。寄越し居れ。

ト短刀を載せたまゝ三方を引ッたくる。權助とめて

權助 アヽモシ、それにはちつと

雲泥 ナニちつと。馬鹿な奴だ。まだ供へぬワ。

ト振り切つて奥へ入る。

權助　エヽ、いま／＼しいづく入め。

ト吸ひ筒を振つて見て

えゝワ、これで澤山ぢや。ドリヤ、おッ片附けてこまさうか。

ト鳴り物になり、急いで向うへ入る。奥より金兵衛、供の男、荷を擔ぎ、跡より三平、以前の喰丸を持ち、出て來り

供男　左樣なら、袂ケ浦へお出でなされまするか。

金兵　さうよ。今夜は坊へ泊つてもよいが、袂ケ浦の滿江さまから取つた、逆澤瀉の鎧、月限れだからこたへて行かねばならぬ。

三平　モシ／＼、旦那、先刻は大きにお氣の毒でござりました。時に、あなたは江戸かえ。

金兵　アイ、わしはこの雪の下で、百足屋金兵衛といふ質屋だが、今ぢやア江戸の淺草、七軒町へ出見世を出して、矢ッ張り質商賣。したが、大概江戸に居ります。

三平　エヽ、さうかね。それについて、ちつとお賴みがござりやす。わしも江戸の者だが、この鎌倉へ來てゐやすが、住んで見ればいかねえ所だ。女は無し、と云つて歸るにも路銀は無し、どうぞコ

レ、連れて行つてとも云ひ悪いが、質屋をなさるこそ幸ひだ。これを一つ見ておくんなさいやし
ト弾正より預かりし曉丸を出す。金兵衛、見て
金兵 こりやァ立派な物だ。燒刃、金色、只の物ぢやァあるめえ。本阿彌へでもかけたら、値も開かうが、質ぢやァマァ拵らへばかりサ。
三平 どの位な物でござりませうね。
金兵 さうさね。質に取りやァ三十兩サ。
ト三平、恟りして
三平 ナニ三十兩。客人、どうぞ取つてくんなせえ。路銀が無くて、困り切りやす。
金兵 途中といひ、請け人のない質物は御法度だが、お前も築地で度々見る顔だ。相違もあるまい。三十兩でよくば、取つてあげませう。
三平 いゝどころか、よすぎる位だ。
金兵 そんなら、あそこの茶屋まで行つて、金をお渡し申しやせう。
ト三人、花道へかゝり
三平 そりやァ有り難いね。三十兩ありやァ通し駕籠で

金兵　これぢやァ笨迎へ

三平　百度も踊られるのサ。

金兵　サア、ござりまし。

ト大拍子になり、話しながら向うへ入る。この道具廻る。

本舞臺、三間の間、藁葺きの世話場。上の方に障子屋體、内に滿江、絹蒲團を敷き、病氣の體。[illegible]滿江の肩を揉んでゐる。正面、暖簾口、引き戸の門口。藪垣、上の方は卯の花垣、浪板。よき所に[illegible]敷幟、朝顔と紅葉に鹿の模樣、庵に木瓜の紋附き、尤も振り袖にて拵らへ、枠にかけて不斷臺に向け[illegible]爰にお幸、お文手傳ひ、粽を拵らへゐる。すべて秋ヶ浦、曾我の別莊、五月末の景色、てんつゝ、[illegible]り神樂にて道具とまる。

ふみ　モシ〳〵、これで粽は、大抵よいぢやないかえ。

かう　アイ〳〵、これでもう出來あがりました。サア〳〵、一服のみなさんせえ。

ふゆ　モシ、御老母樣、もそつと揉んであげませうかえ。

滿江　イヤ〳〵、もうようござんす。サア〳〵、茶々なりと飮みなさんせ。

かう イヤモウ、どなたも／＼、よう手傳うて下さんした。友達だけに心置きなう、わたしもお前方を使うたわいなア。

ふみ なんの、そりやお互ひの事。それはさうと、御老母樣の御病氣は、少しはよろしうござんすかえ

ふゆ 御用があらば、何なりと致してあげませうぞえ。

滿江 それはマア、優しうよう云うて下さんした。この間中から持病が起つて、何やかや、あのお幸が世話になりまする。殊にあの子は、團三郎が胤を懷姙して、身重ではあり、殊に今日は兄弟の子供が、有卦に入つた祝ひといひ、五月の末ぢやに、あのやうに粽拵らへて、神樣へ上げたのも、わしが頼み。モウ／＼、氣の毒に思ひまするわいの。

かう これはしたり、其やうに思し召しまするな。云はゞ端午のお節句に、致しまする粽を、申さば今日は五月の二十九日、今時分拵らへまするは、粽ぢやなうて、遲まきでござりまする。ホヽヽほんに、有卦に入る祝ひかして、太神樂が參りました。

ふゆ ほんに、有卦とやらいふ祝ひで、時ならぬ太神樂。お前も身持ちの事ぢやによつて、早う嬰兒さんを産むやうに、太神樂呼んで、祝はせなさんせいなア。

ふみ さうでござんす。まだ子も産まぬその先に、幟立てゝの御祝儀か知らぬが、このマア幟が、振り

袖のやうに見えるぞえ。

滿江　そりやその筈の事いの。この幟は、祐成や時致が、まだ一萬箱王と云うた時、兄弟二人が着やつた振り袖。垣に朝顏、紅葉に鹿、五ッや三ッのその頃に、由井ヶ濱なる敷皮の、大磯通されためでたい小袖に、その振り袖を幟に直し、今度狩場へ二人とも、獸狩りに行きやつたは、よい手柄してお見出しに、あづかりたいとの兄弟の願ひ。その供にもと、鬼王や團三郎が行きましたわいの。

ふみ　エヽ、左樣かいな。それでアノ阿母樣も、この別莊へお出でなされましたのかえ。

かう　イエ〳〵、左樣ではござんせぬが、お連合ひ祐信さまは、富士の裾野へ武將のお供、お留守の間は、この御別莊へ、御病氣の事ゆゑお氣晴らしに、私しがお連れ申しました。御兄弟お二人も、狩場へお越しなされたゆゑ、よいお手柄のあるやうにと、遲なはつた幟、兜、神樣へ粽拵らへ上げるのも、御兄弟の御武運を、お祈り申す爲ぢやわいなア。

ふゆ　エヽ、さうかいな。併し、御兄弟の御武運より、てつきりお前は

ふみ　團三さんへ手柄をさせたい、願ひでがなござんせう。

かう　なんのマア其やうな

ふみ　イエ〱、そこらでござんせうわいな。ホヽヽヽヽ。

ト笑ひになり、皆々あたりを片附ける。てんつゝになり、向うより清左衛門、老けたる拵らへ、絆纏脚絆、腹がけ、小揚げ體の形にて、なまりぶしを入れし籠を大分、兩掛けにして天秤にて擔ぎ、その中に風呂敷包みを入れ、これを擔ぎ出て來り、直ぐに門口へ來て

清左　コリヤ、娘、お幸よ。歸りがけに、ちよつと寄つて行きませう。

かう　オヽ、父さん、いま歸りなさんすかえ。サヽ、茶を飲みなさんせ。

ト茶を出す。

清左　イヤモウ、分けて今年は暑さが強いで、重荷持つては大儀ぢやわいの。今日は腰越の問屋から、甲府へやるなまりの荷、大磯まで擔いで行つて、歸りがけに大磯の宿で、あの虎どのがわしを呼びかけ、承れば御老母樣が、御病氣との事、お案じ申しまする。殊に御兄弟樣方も、狩倉につき、富士野へお出でなされたとの事、さぞ御不自由にござりませう、これは又憚りながら、阿母樣の搔卷に遊ばしませと、コレ〱

ト風呂敷の中より八反やうの大縞の搔卷、紫の扱帶なぞを出し

御寐なる時のお裾へなりと、お掛けなされませと、コレ〱、お寐衣の帶までも、氣を附けて寄

越されました。聞けば、虎どのも少將どのも、來月にはいよ／＼年が明けて、身受になるとの事。その節はつゐ／＼と、御老母様の御介抱いたしませうと、それ樂しんで居りまするよ。イヤモウ深切な二人の衆。勤めする女にも、あのやうな氣立てのよい女郎衆があらうかいの……コレ／＼わしにも酒飲んでお歸りなされと、南鐐一片。イヤモウ、あんな女郎衆が、唐にもあらうかいの。

ト二朱銀を一つ出して、喜ぶ思ひ入れ。

イヤモウ、氣立てなら器量なら、二人ともキツとした、大身代の御新造様にも、なりかねませぬ女中ぢやが、アヽ、どうした事やら、錢も無い曾我の御兄弟衆に打込んで、アヽマア、貧乏屋敷へ嫁入りがしたいとは、蓼くふ蟲も、好き／＼なものぢやわいの。

ト何心なう云ふ。お幸、氣の毒なる思ひ入れにて、袖を引き、こなし、清左衛門、心附いて

イヤ／＼、さうばかりは云はれぬ。武士は一文持たいでも、そこが侍ひ。食はねど高楊枝といふ例しもあるて。

ト云ひ紛らす。

蒲江　イヤモウ、云はんす通り、それは／＼優しい生れ。殊にあの虎少將は、二人ともに實の姉妹。只儘ならぬは、二人の實の親といふは、誰れあらう工藤の家來、近江の小藤太、今では何やら浪人

二立目　同じく





してゐやるとの事。その娘ゆゑ有やうは、兄弟の者どもへ、嫁に持たすは世間の手前。よく〳〵思へば、曾我と工藤は、現在の敵同士。

トお幸と顔見合せ、こなしあつて

サ、堅い氣質の祐信さま、そればつかりが心にかゝつて

ト思ひ入れ。

清左　イヤモウ、お案じなされますな。私しも娘を、二人まで持つて居りまするが、このお幸が姉めは離別いたした女房に附けまして、親子の緣は切れましたが、そこが世に云ふ、女は氏なくして玉の輿と、あの工藤さまのお妾にあがりまして、奥様がお亡なりなされ、その跡へズル〳〵と御本妻。今では梛の葉といふは、このお幸が實の姉。その妹は、まだ祝言はさせませぬが、團三郎と云ひ號け。いつの間にやら腹はほてれん。イヤモウ、運の善いと惡いのは、お月樣と泥龜と、今さら思へばあの姉めを、わしが方で育てたら、この貧乏はせまいものを。

かう　これはしたり、また其やうな事云ひなさんす。云はゞわたしは、團三さんとは云ひ號け。殊に主には、お小夜さんといふ妹御さん、あの子はお前が

清左　オヽ、お小夜はわしが預かつて、奉公させようと、好い内へ目見得にやつて置いたわいの。

滿江　これいなう、粽が出來たら、神樣へも、また生先祝ふ兄弟二人、狩場の手柄に賴朝公へ、お目見得なりと致す願ひ。ほんに、あの子供衆にも、めい〳〵進ぜて

かう　ハイ〳〵、そりや神棚へは、出來ると早々上げました。あのお孃のお二人へは、御老母樣のお手づから。この子達へは私しが

ト粽を好きほどに持ちゆき

サヽ、こりやお前方、歸りにお土産にしなさんせや。

ト二人へ渡す。

ふみ　こりや忝うござんす。もそつと手傳うてあげたいが、汐時ぢやによつて、濱仕事に行てから、また來るぞえ。

ふゆ　そんなら貰うて行きやんせう。阿母樣、後に參つて、肩揉んであげませう。

滿江　そりや忝うござるぞや。そんなら必らず後に來て

清左　また揉んであげやいの。

かう　そんなら、また來て下さんせえ。

兩人　アイ〳〵、直に來るぞえ。

清左　ドリヤ、肩休め致さうか。

ト唄になり、清左衞門は奥へ、お冬お文は粽を提げ、山下駄を履いて向うへ入る。此うち粽を三方へ載せ、お幸、滿江が前へ持ちゆき

かう　ハイ／＼、これはお前樣から、あのお幟へ

滿江　ドレ、母が供へませう。

ト件の三方を幟の前へ供へ、思ひ入れあつて

これはマア、二人ともに、遲なはつた端午のお節句。それといふのも時致、其方はわしが勘當、祐成が挨拶で、やう／＼赦した時致、其方はわしが昨日今日。併し、祝ひ事は延すがよいと世の噂。この上ともに、ア、狩倉にも手柄して、御知行取りになつたら、その時は母ばかりぢやない。祐信さまも、さぞお喜びであらうわいの。

かう　そのお手柄にあやかつて、わたしも云ひ號けの團三どのと、早う祝言調ふやう、それが叶へば直ぐに團三どのは、御兄弟の御家老樣、こんなめでたい事はございませぬ。

滿江　さうとも／＼。鬼王は年よつたれば、差詰め家老は團三郎。ヤ、めでたい／＼。

かう　アイ／＼、めでたうございます／＼。

ト喜ぶ思ひ入れ。この時、上の方、卯の花垣の間より、小蝶一羽飛んでくるを、猫一匹出て追ひ、蝶を取つて咬へる。蝶は又飛ぶと、猫は飛びつき、争ふうち、飾りつけの幟へ駈け上がり、二本の幟倒れて、二本とも竹は折れ、朝顔の幟は破れる。此うち二人は猫を追うて歩き、蝶を喰ひ殺して猫は逃げゆく。

満江　それ〳〵、幟の竹が折れたぢやないかや。

かう　左様でござります。竹ばかりではござりませぬ、朝顔の幟が破れましたわいな。その上に、コレコレ、可哀さうに、猫に追はれて、爰に今の蝶が死んで居りまする。ほんにマア、あの猫めは、よう蟲けらを取つて

ト蝶の死んでゐるのを取上げる。

満江　ヤ、何と云やる。今の蝶をアノ猫めが取つたかいの。アノ蝶を

ト竹の折れたる朝顔の幟を取つて

取分け今日は二人が生ひ先、祝ふが爲の座敷幟も、猫めが爪で朝顔の、模様も破れ此やうに

かう　弟御時致さまの、召してお出での地紋の模様は、蝶の散らし染め。

ト両人、顔見合せ、思ひ入れあつて

滿江　アヽ、心にかゝる、物の知らせか。
　　　ト泣入ることなし。
かうアヽモシ、なんのキナ〳〵、お案じは……エヽコレ、鶴龜松竹々々々々。
　　　トこなしあつて
ドレ、お脊中を、撫つてあげませうか。
　　　ト滿江が後へ廻り、脊中を撫つて思ひ入れ。時の鐘、時鳥の聲、これより床にて淨瑠璃になる。
〽時鳥、啼くや皐月の雨あがり、心細くも二人連れ、狩場の供は叶はずと、是非なく〳〵も故鄕へ、袖に涙の乾く間も、落ちて濡るゝやう〳〵と、袂ケ浦に辿りつき
　　　トこの文句のうち、向うより鬼王、團三郎、兩人とも、棒茶筌の鬘、派手なる裁附け、草鞋、山形木瓜のやゝし、手甲、誂らへの袖無し羽織に上帶を締め、大小にて、陣笠を腰に差し、團三郎は馬の鞍と鐙を、小六染の手綱にて結び、肩へ掛け、鬼王は簱の弓をかたげ、舞臺際まで來り、思ひ入れあつて。
團三　サア、兄者人、もう爰が、滿江さまの御座なされた、袂ケ浦の御別莊、泣き顏隱して、ござりませ。

鬼王　コレ〳〵、團三、てまへも酷い事を云ふものだ。なんぼ兄の鬼王だといつて、御兄弟が狩場へ附し、おいらばかり歸つたと云つて、どの面下げてオメ〳〵と。おれは否だ〳〵

團三　これはしたり、尤もではござるが、あの方の御樣子を、申しあげいで濟みませうか。マア〳〵、左樣なら私しが……サ、わしに附いて、ござりませ。

ト門口へ來り、思ひ入れあつて、

ハイ〳〵、團三郎でござりまする。只今罷り歸りました。

〽入る夫に喜ぶ女房、老母は猶更機嫌顏。

かうオヽ、團三さん、戻つてかいな。今も今とて、御老母樣のお噂。サア〳〵、早う入りなさんせ。

滿江　して、兄弟二人も、戻つてか〳〵。

鬼王　ハイ〳〵、私しも戻りました。

ト悄々と内へ入る。

滿江　オヽ、鬼王か。二人の者は初めての狩倉、よい手柄しやつたか。して、二人の供して來やつたであらうの。

鬼王　ハイ〳〵、左樣ぢやさうにござります。

滿江　して、兄弟は、どこに居やるぞいの。

かう　左樣でござります。弓矢も馬具も持つてござんしたからは、お歸りでござりませう。お二人樣はどれへお出でなされました……アヽ、聞えた。お手柄あつた御祝儀に、大磯へお立寄り遊ばしたのかえ。團三さん、さうかいな〳〵。

團三　アイヤ、旦那方お二人も、お供いたして歸りました。マア〳〵、其方も、ソワ〳〵せずと下に居や、下に居や……御老母樣、御兄弟お二人は、お歸りでござります。お歸り遊ばされました。

鬼王　アヽコレ、團三、なんでマアお二人樣が、どうしてお歸りなさるものか。

團三　ハテ、なんであらうと、お歸りでござります。ナ、ソレ、しかも鬼王團三めが、お供いたして即ちお歸り。殊には今度の狩倉に、この上もなき大手柄。流石は萬夫不當とも、呼ばれし河津の胤なりと、類る稀れなるお手柄を、只今お話し申しませう。お歸りなされし證據には、弓矢は勿論鞍、鐙まで、此やうに私しどもが、先へ持參仕りました。

〽辻褄合はぬ口上に、老母も流石武士の、妻ほどあつて聞にあひの、團三が詞、何とやら、女房の身にも、案じられ。

かう　して、御兄弟お二人は、お戻りなされて、いづれにおいで。

團三　御歸宅ありしお二人は、即ちこれに、御老母樣、お手柄ありし殿方へ、お褒めのお詞、これにて下し置かれませう。

へ云ひつゝ差出す二通の書き物、兄弟二人の鬢の髮、添へて悄々見せければ、

滿江　ナニ、アノ、これが祐成時致。

かう　樣子ありけな、この書き物。

ト滿江、書き物を取上げ

滿江　「母上樣へ、祐成時致。」

かう　ほつれし黑髮添へられしは、さては御主人、お二人は

鬼王　めでたく本望遂げ給ひ、共に消えゆく夏の富士。

團三　裾野の露と

滿かヤ。

團三　御落命でござりまする。

かうヤ、。

滿江　ヤイ、團三郎、鬼王もよく聞け。この度兄弟、富士の裾野に出立は、かねて期したる事あつて、

大切の供先に、主人の最期、おめ／＼見捨て、立歸つたる不所存者。御最期でござりますとは、どの顔下げて云ひ居つた。腑甲斐ないと云はうか、不所存者と云はうか、云はうやうない、不忠者めが。

かう　コレ、こちの人、お前に限つて、よもや御最期を見捨て、おめ／＼戻りはなさんすまい。これには何ぞ譯がござんせう。サア、譯を云はしやんせ。

滿江　樣子があるなら云ひ居れやい。

かう　サア、云はしやんせ。

滿江　譯は

かう　樣子は

滿江　どうぢやぞいやい。

鬼王　御尤もでござりまする。お道理でござりまする。申しあげうと存ずれども、胸一杯に涙が先立ち仔細申すも便なけれど、

團三　アヽコレ、その夜のあらまし團三めが、お物語り仕らん。お心靜めて一通り、お聞きなされて下さりませ。

〽お物語りと座を占めて。
既に殿方お二方の、お供をなして駿河の國、彼の厚原の、御狩家近く
〽着せし時刻は黄昏時、聞きしにまさる狩場の構へ、迂濶に通路の叶はゞこそ。

その時、我れ〳〵兩人を、傍に招かれ、仰せあるやう、いかに汝等、承れ、十八年の天津風、今吹きかへす今日只今、かねての本望、今宵に限れり、されども義理ある養父の大恩、この期に及んで形見の品々、手馴れし弓と矢、それに添へ

鬼王 馬鞍鐙は祐信さま、この書き物に鬢の髪、母上樣へ兄弟が

團三 形見なりとて差上げよ、その上願ふは母人の、一滴の水、一枝の花、只一遍の御回向が、草葉の蔭よりお願ひと、其お詞に我れ〳〵も、何とてお側離るべき、たつて御供願ひしかど、老いたる母の身の上を、頼むは其方たち兩人と、烈しき仰せに詮方なく、涙と共にすご〳〵と、千鳥小蝶に引別れ、褄もがれし心にて、黑白も分かぬ皐月闇、末の八日の雨の足、しげき中をば步みし折柄俄に狩場は篝の光り、數多の人音、太刀音の、手に取る如く聞ゆれば……すは一大事と走せ歸り入らんにも木戸口固め、通路叶はず、矢來のこなた、主人の成行き如何ぞと、心も心ならざる折柄。

鬼王　狩家の方には大音あげ、ヤア〳〵、夜討の入つたるぞ、油断あるなと呼はる聲々。暫し爭ふ其うちに

團三　又も聞ゆる知らせの人聲、今宵の夜討は曾我兄弟、左衞門祐經討取つて、狩家を騒がす祐成は、仁田の四郎が討取つて

鬼王　弟五郎時致は、御所の重宗生捕つたり、御安堵あれと聞くよりも

團三　頼みの綱も切れ果てゝ、現在主人の御最期を、まざ〳〵見聞く團三が心。御老母樣、御推量下さりませ。

鬼王　團三は格別、取分けて、役にも立たぬ新左衞門、なぜ代りにやつては下されぬ。天道樣も聞えませぬ。

團三　それが自由になるなれば、我れ〳〵兄弟

滿江　老い年よつたこの母が、生きて嘆きを見んよりもかう儘にならぬが浮世の有樣。

滿江　鬼王、團三。

團三　御老母樣。

かう　こちの人。
鬼王　弟。
團三　是非もなき身の
皆々　轉變ぢやなア。
かう　その御樣子を聞くにつけ、物の知らせか最前の、幟の折れしも皆前表。蟲も多いに小蝶の樣子、心にかゝる事ばかり。
滿江　狩場へ行きやつたその跡にて、祝ふその日は二十八日、兄弟二人がその以前、由井ヶ濱の敷皮に乘りやつた時の二人の小袖
かう　垣に朝顏、紅葉に鹿、その振り袖を此やうに、縫ひ直したる小幟は、お命助かるめでたき品、お立てなされたお心も
滿江　所詮二人は本望を、達せし上はオメ〱と、何とて曾我へ歸るべき。屋敷を出たが二人の命日、たとへ命は捨つるとも、大敵引受け、父御の敵、僅か二人でよう討つた。めでたい吉左右、わがみもさぞや嬉しからう。めでたいなう〱。
かう　ハイ〱、おめでたうござりまする……其うち分けて御秘藏な、祐成さまが御最期ありしを、お

めでたいとのお詞は、流石は武家の奥方の、そのお心根がおいとしい。モシ、おいとしうござりますわいなア。

〽泣かぬ顔する母親の、心を感じ猶更に、悔む涙に滿江も、形見の書き物抱きかゝへ、我れを忘れて叫ぶにぞ、鬼王團三兄弟も、齒をくひしばる忍び泣き、道理にも又いぢらし。

ト四人よろしくあつて納まる。團三郎、こなしあつて

團三　かゝる嘆きを見んよりも、お供いたして切り死をと、願へど叶はず立歸り、母を頼むの御一言、是非なうすご／＼戻りました。祐成さまの討死も、かねて覺悟の上の事。まだも頼みは時致さまお命あるうち今一度、願ひをあけてお命も

鬼王　さうぢや／＼。われは直さま北條さままで、時致さまの命乞ひ。

滿江　それが叶へば母も滿足。

かう　ちつとも早う、團三さん、北條さまのお屋敷へ

團三　ドリヤ、お願ひに。

トお幸、世話して、團三郎、門口へ出かける。時の太鼓になり、向うより股立ちの侍ひ四人、大小凛凛しく、鉢巻きにて、十手を構へ、走り出て來る。跡より彈正、朝忠、矢張り上下にて、窺ひ出て、

跡より金兵衞、附添ひ來り、よき所に扣へる。侍ひ四人、ツカ〳〵と駈け入り

侍ひ　動くな。

　ト取卷く。團三郎、思ひ入れあつて

團三　こりや、いづれもには、何ゆゑ狼藉おしやるのぢや。

　トこの時、門口の彈正

彈正　その狼藉も身が云ひつけ。

團三　して又、あなたは。

彈正　まだ新參の劍澤彈正、それへ參つて云ひ聞かさん。者ども、引け。

侍ひ　ハツ。

　ト扣へる。鼓の合ひ方になり、兩人、式禮あつて、彈正朝忠、内へ入り、上座になり、床几へかゝる金兵衞、門口に殘る。皆々合點のゆかぬこなし。滿江、手を仕へ

滿江　妾ことは、祐信が妻滿江。

鬼王　御用の趣き一通り

團三　お聞かせなされて下さりませう。

彈正　上使。

鬼團　ハヽア。

彈正　賴朝公の仰せを受け、罷り越したるこの彈正。

朝忠　申さずとても一家の某、役目にござれば上座の二の宮。

團三　して、御兩所樣の御入來はな。

彈正　今日富士野の御狩家より、彼の地の騷動、追ひ〳〵に知らせの早打ち。祐經橫死は曾我兄弟が敵討ぞと、事明白に解りしかど、時致重ねて賴朝公の、御狩家目がけて亂入なし、大祖父伊東の敵ぞと、君に敵たふその咎め。殊更その節御祕藏の枕刀、曉丸の劍の紛失。これとても曾我の難儀。

朝忠　それのみならず、箱根山へ奉納ありし、源氏重代の友切丸、まつた微塵丸の一腰、先達て紛失と別當よりの訴へあれど、我が君よりのお疑ひ。行實ことは岩本院へ、疾よりお預け。然るに失せたるその二腰、曾我兄弟の者ども、狩家へ切り入るその砌り、帶し居たりと諸武士の取沙汰。彼れこれ以て、疑ひかゝりし曾我の一門。

彈正　狩場へお供の太郎祐信、曉丸の出づるまで、狩野之助へ御預け。曾我の屋敷は暫らく揚がり家

近頃以て笑止千萬。

滿江　すりや、曉丸の紛失ゆゑ

鬼王　祐信さまは狩家へお預け。

團三　重ね〴〵の主人のお家、思ひ廻せば……女房ども。

かう團三さん。

兩人　ハテ、是非もなき

ト思ひ入れ。

彈正　されども失せし曉丸、詮議の日限りも追つての御沙汰。出でざる時は祐信は死罪。それにつき團三郎、只今途中で、身共へ願ひの者あつて、召連れ參つた。これとても覺えがあらう。

團三　して、願ひの者とは、いづれの何者。

トこの時、金兵衞、前へ出て

金兵　ヘイ〳〵、私しでござります。百足屋でござりまする。

團三　ヤ、其方は。

金兵　雪の下に居りました、百足屋金兵衞、只今にてはお江戸の住居。モシ、團三さま、質に取つた逆

澤瀉の鎧、お請けなされぬ其うちに、彈正さまより御內意のお尋ね、其方かたに曾我より預かる鎧があらう、僞り申さず、有體に申しあげい、陳じるに於ては身の上なりとのお詞に、質にある事申しました。あの一件も、よろしく方を附けて下さりませ。斷わりましたよ。

團三 すりや、先達て其方かたへ、預け置いたるあの鎧、その儀をあなたへ明白に

ト思ひ入れ。

彈正 二の宮どの、お聞きなされたか。云はゞ我が君お預け置かるゝ、八領の鎧のうち、武將の寶を町家へ質入れ。それで役儀が立ちまするか。近頃以てみだら千萬。

朝忠 御尤もなる貴殿のお詞、逆澤瀉の一件は、この二の宮が承れば、いづれ拙者が、この身にかへても差上げまする。彈正どの、武士のお情、御存じなきか、偏へに賴み入ります。

彈正 さほどに貴殿がお云やるなら、いかにも拙者は存ぜぬ體で罷り居らうが、必らずともに

朝忠 御承知下され、先づは滿足……コリヤ、金兵衞とやら、この二の宮が、承る上からは、必らずこの儀、他聞口外仕るな。

金兵 ヘイ、請けてさへ下されば、何しに他人へ觸れませう……コレ、團三さん、應對するのはお前ばかり。とても兄貴のよい／＼殿が、受合うたとて夢に駒。お前、必らず捨て置かずと

團三　きつと團三が、挨拶いたさう。

金兵　頼みましたよ。

彈正　コリヤヤイ、金兵衛、鎧の事は、二の宮どのまで願つて出ろ。もし解らずば、その時身共が、ト……承知したか〳〵。

ト目顔にて呑みこます。

金兵　彈正さまのお聲がゝり、きつと相待ちまするでござりませう。ヘイ、有り難うござります。

彈正　天下の寶を輕々しく、質入れ致す身を以て、親の敵も凄まじい。今こそ他家へ養子の身、以前を申せば次郎祐兼、兄祐經が敵ぞと、曾我の身寄りを其まゝに、致し置かぬは武士の意地よい折柄に他家へ養子、工藤の家と只今では、緣が切れたで大きな仕合せ、さもない時は江の島の、稚子となつたる禪司坊、一番駈けに彼奴等が命、其まゝ置かうか。ハテ、仕合せな丁稚めだな。

ト　きつと思ひ入れ。朝忠、こなしあつて

朝忠　仰せ渡しの相濟む上は、急ぎこの旨、頼家公へ

彈正　言上いたさう。サ、御同道

ト兩人、門口へ出かゝる。團三郎、おづ〳〵出て

團三　御兩所樣にはお役目御苦勞。この上伺ひまする儀は、兄祐成は討死いたせど、囚はれとなる五郎時致、命乞ひなと致しなば、助かりまする御沙汰あつてか。この由、何卒御推擧あつて

ト朝忠へ思ひ入れ。

朝忠　サ、その儀は追つて

ト云ひかけし思ひ入れ。彈正、聞いて

彈正　どうして〳〵、御領の狩家へ切りこむ大罪、なんで命が助からうや。朝忠どのには御存じないか時致ことは罪科きはまり、工藤の家人に下されて、鷹ヶ丘にて縛り首。敷皮ならぬ荒むしろ、盜人夜盜に等しき死ざま。アヽ、よい氣味〳〵。

團三　すりや、時致さまは罪極まり

滿江　武士にあるまい縛り首。

かう聞くも悲しい御最期は、さぞや無念と時致さま

鬼王　そのお怒りを見るやうで、思へば〳〵、團三郎

團三　鬼王どの、アヽ、味氣なき、成行きぢやなア。

ト彈正、こなしあつて

彈正　兄祐經の罰が當つて、聟が死ざま。

金兵　盜人夜盜同然に、縛り首とは、みじめな死ざま。

朝忠　いはれぬ惡口、扣へて居らう……イザ、彈正どの。

彈正　歸宅いたさう……アヽ、笑止千萬。

ト唄、時の鐘になり、彈正朝忠、家來に金兵衛附いて向うへ入る。この時、清左衛門、出かゝつて窺ふ。皆々殘り、思ひ入れあつて

園三　すりや、賴朝公の寢所にありし、曉丸の紛失より、祐信さまの御身の御難儀。その劍さへ尋ね出さば、云ひ分立つて

鬼王　曾我のお家も別條なく、もしやお家の立たぬ時は、祐信さまへおいら兄弟、どうして顏が合されう。コレ、園三、どうぞ好い智慧を、出してくれ〳〵。

かう鬼王さまも、あのやうに云はしやんす事、どうぞその劍の在所を、お前、尋ねてあげなさんせいなア。

園三　園三に如才は無けれども、どこを當途に劍の詮議が

清左　成る程、出來まい。大腰拔けの園三郎、われが男を見損なうたワ。

團三　ヤ、さうお云やるは舅どの。そんなら樣子を

清左　オヽ、先刻にから聞いてゐた。兄弟二人を狩場へ殘し、おめ〳〵歸つた大腰拔け。一體われは、侍ひとはいふものゝ、おれが娘のこのお幸、片瀨の在で三味線稽古、そこへおぬしが浸けこんで武士のあるまい遊藝好み。それだによつて、今度の大事の間に合はぬワ……娘、われも又、この團三にくらひこみ、親もやらぬに、この別莊へこけこんで、女房同然。それといふも七年以前、團三が妹のあのお小夜、おれが里に取つて、育てゝやつたが緣となり、あのお小夜めはおれが厄介。彼奴が事は格別、やらうと思つたお幸は、もう〳〵女房にはやらぬ。いま連れて行く、おれに返しやれ。姙んでゐても大事ないわえ。

團三　ア、そんなら今更こなたは、わしが女房を

清左　コレ、女房とは誰れが事だ。貴樣にやつた覺えは無い。約束はしたが、やつた覺えはわしは無いぞよ。まだ女房にやらぬうちに、よくこなたは姙ませたな。なんであらうと、女房ではない。

團三　サ、約束いたした上からは、私しが女房と申しても、よいぢやござりませぬか。

かう　アイ、云うても大事ござんせぬ。互ひにやらう、貰はうといふ、約束をなされた上、今更主が落目になつたを附けこんで、ならぬといふはそりやお前、我まゝといふもの。どなたが何と云はし

やんせうが、わたしや女房ぢや／＼、アイ、團三さんの女房ぢやわいな。

鬼王　さうだ／＼、どうかおいらが浪人でもしようと思つて、それで假に

清左　默らつしやい……ヤイ、われも默れ。コレ、兄貴、浪人でもしやう……これから先が浪人で、今まではで浪人ではないか。食ふや食はずの曾我の屋敷……ヤ、こりや阿母様、御免なされませ。ヤイ不作法な……併し、あんまり違ひござりますまい。娘、われも父、親がやらいで、誰れが女房にやつた。コレ、今まで貰ひませうといふしるしに、酒一升貰うた覺えはないぞ。それぢやによつてもう／＼やらぬ。戻してもらはう／＼。

團三　左樣なれば、私しが願ひましても、姙娠になつたこの女から今更わたしが縁切つて、そんならお前は

清左　引分けるのが男の爲だワ。聞けば何やら劍の詮議、それを尋ねて祐信さまの、難儀を救うてあげたなら、阿母樣もさぞかし喜び。それだによつて、てまへはおれが連れて行く。女房があつても主人に難儀かゝつては、役に立つまい。殊に妹のお小夜は、七年あまりも育てたからは、まんざらおれも他人ではあるまい。

滿江　成る程、こりや其方の云やる通り、失せたる劍が手に入らば、その時こそは、めでたく添はるゝ

女夫仲。これまで祝言したといふではなし、眉も落さず、鐵漿も附けず。

團三 そんなら親御の詞を立てゝ

かう 少しの間の過去りは、世間にいくらもある習ひ。先の事さへ間違ひなくば

滿江 そりやこの母が、その時仲人

清左 痩せても枯れても曾我の奥様

鬼王 お詞が重いと思うて

團三 劍詮議の其うちは

かう 飽かぬ離別もお主のお爲。

清左 そんなら當分

團三 遠ざかりませう。

清左 それ〳〵、さう温なしく出れば、何も云ひ分は無いといふものだ。

滿江 それにつき、この母は、露と消えたる兄弟が、跡を尋ねて、せめて一枝の花なりと、この書置の

願ひの如く

かう お墓參りも御尤も。それには差詰め團三さん、お供申して

滿江　イヤ〳〵、それでは人目あり、目立たぬやうにわし獨り

鬼王　どうして〳〵、まだ道遠き富士の根方。この鬼王も鎧の儀、二の宮さまへ申しあげ、直ぐに跡より旅の御供。

團三　わしはこの由、江の島に、おいでなさるゝ禪司坊さま、あなたの方へもお知らせ申して

清左　そんなら差詰め道中で、面の賣れたる清左衞門、わしがお供に行きませう。

團三　それでは双方安堵の思ひ、即ち今日は日柄もよし

かう　爰から直ぐに、旅の調度も

清左　わしが内にて、ゆるりとお支度。

鬼王　この鬼王はお二人の、跡弔ふ爲に今日から道心。

團三　左樣ござらば御老母樣。

滿江　少しの間を

かう　父さん、必らず

清左　氣遣ひしやるな……サ、參じませう。

ト唄、時の鐘。滿江、杖を突き、鬼王と清左衞門附いて向うへ入る。團三郎お幸殘る。合ひ方、捨て

鐘。お幸、跡見送り

かう　父さん、必らず御老母樣を賴んだぞえ……アヽ、お年寄りのおいとしい、蝶よ花よと御秘藏あり
し御兄弟、いかに勇士の習ひぢやとて、現在親に先立つて

團三　苦に苦をかけるお二人の、義理は養父の祐信さま、お家に疵の附く時は、草葉の陰にてさぞやさ
ぞ、迷ひ給はん御兄弟、それを助くる劍の詮議、アヽ、いづれを當に

かう　尋ね求めて末長う、夫婦の語らひ。それといふのも、腹のこの子を

團三　隨分大事に、わしぢやとて

かう　取り得るまでは

團三　夫婦別れて

ト兩人、顔見合せ

かう　エ。

團三　佛間へ御燈。

かう　アイ、あげて參りませう。

ト唄になり、ツイと奥へ入る。團三郎、思ひ入れあつて、あたりより硯箱と紙を持ち來り、奥を見や

つて

團三 ムウ、女にそれと云はねども、劍詮議に出る時は、日數の程も心許なし。その上に、底意の知れぬあの舅、去り狀殘して、心置きなう

ト思ひ入れ、硯箱引寄せ、時の鐘、こなしにて去り狀を書く、此うち合ひ方、時の鐘、向うより權助先に、件の毒の入りし吸ひ筒を腰に提げ、長半、件の衣を着て、雲助、觸藏、五十日鬘、古小袖、一つ着、一本差し、尻からげ、頰かむりにて、盜人の拵へ、この家を目がけて出て來り、花道にて囁き合ひ、窺ひ／＼、下の方へ忍び入る。團三郎、此うち去り狀を書きしまひ、あちこちするうち、奧よりお幸、行燈に灯をつけ、これを持ち、出て來り

かう コレ、團三さん、佛壇へ御燈をつけたれど、ちよつとわたしや、樒を買うてくる程に、お前、必らず、どこへも行きなさんすなえ。

ト云ひ捨て〻行かうとする。

團三 ア、コレ、樒はわしが買うてくる程に、其方はちよつと、マアこれを

ト渡す。お幸、思ひ入れあつて、書き物を見て

かう ヤ、こりやコレわたしに暇の狀、そんなら、お前は

團三　俺も俺かれもせぬ仲ながら、いま聞く通りの劍の詮議、どこを目當の尋ね物。分けて頼むは蒲江さま、朝夕の起臥しも、心を附くるは其方が役。幾年かゝるも知れぬうち、貧苦に迫ればどのやうな……サ、賤しい勤めはおろかな事、君傾城も身過ぎ世過ぎ、立てるも貞女、破るも操。サさうした事になるとても、心さへ正しくば、團三郎が宿の妻。その艱難に迫る時、男があつては忠義の妨げ。それぢやによつて暇の状。めでたう逢ふまでマア其方へ、渡して置けば一つの安堵。

かう　すりやアノお前はその品を、尋ね求める其うちは、わたしを去つて、心置きなう

團三　縁があつては萬一に、其方に氣遣ひ。

かう　そりや父なんで、わたしへ難儀が

團三　ハテ、失ふ品は高位の御劍、さすればいづれに所持するか、金で買はれぬその時は、切り取りするも武士の常。

かう　さてはお前はその劍、品によつてはその身の横しま

團三　その横しまと知りながら、お主のお爲、少しの間、縁切るしるしの三下り半、殊に其方に頼み置く、わしが妹のお小夜の事、數へて見れば七年以前、それから顔もろく／＼に

かう　覺えぬながらも血筋の妹、あの子はわたしが父さんへ養子同然。お小夜さんにもこの由話し、今

からお前と、尋ねる品を
團三 イヽヤ、足弱を同道して、劍の詮議はそりや出來ぬ。今日からこの身はさま〴〵に、姿を變へて
と思ふから、それゆゑ去つた暇の状。
かう イエ／＼、今から附き添うて、苦勞するのも男の爲。
團三 それでは御主人、御老母樣は、誰れが附添ひ御介抱。
かう サア、それは。
團三 サア
かう 殘るも忠義さりながら、只ならぬ身の女の大役。
ト團三郎に取りつくを
團三 未練な事を
ト刀の鐺にて拂ふはずみに、思はず當り、お幸、タヂ／＼となるを見捨て、向うへ行かうとして、心にかゝるゆゑ、立戻り、また氣を變へ、スッと行かんとするを、お幸心附き、裾に取りつき
かう 夢見たやうな門出の、行く先とても
團三 生死不定の、旅から旅へ

かう二世の契りも振り捨てゝ

ト取りつくを

園三 三世の御恩は

ト門口よりお幸を内へ突き入れ、門の戸を外よりシヤンと閉すを木の頭。内にてお幸、「ハア」と泣き落す。

捨てられぬわい。

トしめ泣きに泣く。これをキザミ、よろしく、ひやうし

幕

第一番目 四建目

福泉寺堤の場

久澤庵室の場

役名――近江の小藤太成家。尼、待宵實ハ大磯の虎。尼、十六夜實ハ化粧坂少將。舞鶴屋女房、お

民。曾我の母、滿江。工藤の後家、梛の葉。漁師、地獄清左衞門。大藤内後家、榊。判人、十作村の勘吉。百姓、勘六。供男、馬八。百姓、箱根の畑右衞門。庄屋、十作。舞鶴屋傳三。所化、大日坊實ハ清水冠者義高。

本舞臺、正面、狩場の木戸、朽ちたる體、秋草重なり、所々に毀れし柵矢來。よき所に塚を築き、大塔婆二本立て、これに高崇院淨岩良雪禪定門、俗名祐成、建久四年五月二十八日、下に、鷹岳院士山良富居士、俗名時致、建久四年五月三十日、と記し、その前に蓆を敷き、十作、庄屋の拵らへにて伏せ鉦を打ち、百姓四人、珠數を繰り、百萬遍の體。下の方に毀れし狩屋の竈のこり、榊、細やつし年增女房にて、大藥罐を掛け、茶を煮てゐる。すべて駿州厚原、狩場跡の體にてんつゝにて幕明く。

皆々 南無阿彌陀佛〳〵。

ト百萬遍よき程あつて

十作 願以志功德平等精一切生發菩提心往生安樂。南無阿彌陀佛。

ト納まる。

榊 ヤレ〳〵、大儀でござんした。サア、茶を進ぜませう。

ト盆に茶碗を載せ、めい〳〵へ出す。

皆々　これは忝うござります。

十作　時に、後家御は、賤しい人とも見えぬが、なんで此やうに世話をさつしやります。

榊　さいの、わしはこの邊の庵室に、掛り人の身の上、夫に別れて獨り身ゆゑ、この狩場跡へ來て、殘つた竈で茶を拵らへ、往來の旅人の足休め、腰掛け茶屋をする心ぢやわいの。

十作　アヽ、さうかいの。わしは又、祐信さまのお下の百姓、この間曾我兄弟の衆が、この狩場で親の敵、工藤さまを討たしつて、直ぐに討死。その死骸を埋めて、この塚へ跡弔ふ爲に、近所の衆を勸めて、百萬遍を申して進ぜました。

榊　ヤ、なんと云はつしやる。この塚に埋めたは、曾我兄弟の奴等が死骸かいの。エヽ、腹の立つ。わしや、さうとは知らいで、念佛申したこなた衆に、煮花を拵らへ、飲ませたが腹が立つ。コレ聞かつしやれ。わしが夫は大藤内というて、吉備の神主、お願ひの筋があつて、祐經さまの御狩家に、泊つた晩は二十八日。あの兄弟の奴等が切り入つて、罪もないこちの男、行燈を持つて逃げるのを、切り居つたは彼奴等二人。思へば〳〵亭主の敵。この卒塔婆、へし折つて腹癒せしようか。

ト二本の塔婆へ立ちかゝるを、十作はじめ皆々總がゝつて

十作　これはしたり、いかに亭主の敵ぢやというて、その戒名の知つた事でもござるまい。マア〳〵、鎭まらつしやりませ〳〵。

榊　イエ〳〵〳〵、わしや腹が立つ〳〵。曾我兄弟が戒名なりや、二本ともに、踏み折つてしまふわいの。

十作　これは短氣な。マア〳〵、鎭まらんせいの。

榊　イヤ〳〵、踏み折つてしまふ〳〵。

皆々　これサ、待たつしやりませ〳〵。

ト立ちかゝつて留める。てんつゝになり、向うより畑右衞門、百姓の形にて、大きなる草刈り籠を脊負ひ、鎌を持ち、咬へ煙管にて出てくる。跡よりお民、女郎屋の女房にて、駕籠に乘り、同じく勘吉半合羽にて、判人の拵へ、四つ手駕籠に乘り、駕籠舁き、舁いて出てくる。馬八、供男にて、旅形菅笠をかむり、提げ箱の辨當、一升入りの酒樽を兩掛けにして出て來り、花道にて

馬八　モシ〳〵、あの卒塔婆の立てゝある所かえ。

畑右　左やう〳〵、あれが兄弟の衆の塚でござります。參つて進ぜさつしやりませ。

たみ　アイ〱。お前、案内して下さんせ。

畑右　心得ました。サヽ、ござりませ〱。

ト皆々舞臺へ來り、この爭ひを見て

これは庄屋の十作どの、お念佛しかけて、何を爭はつしやる。

十作　オヽ、畑右衛門どのか。今日は新盆の事なり、この塚で百萬遍を始めたら、この女中と少し爭ひが出來ましたわいの。

榊　イエ〱、わしやこの衆に構ひはないが、立つてある曾我の卒塔婆が、氣に喰はぬからの爭ひぢやわいの。

たみ　ハテマア、變つた物がお前の氣にかゝりまするの……コレ、駕籠の衆、勘吉どのを起して下さんせ。

駕舁　ハイ〱……サ、旦那、厚原へ參りました〱。

馬八　よい加減に起きなさい。長い面で、旦那面も呆れるわえ。勘吉さん〱。

ト皆々搖り起す。勘吉、目を覺まして

勘吉　ヤレ〱、いゝ心持ちで、すつかりと寐たさうな。モシ、おかみさんえ、まだ親方はござりませ

ぬぞえ。

たみ　アイ、まだござんせぬが、主の遲いので、こなさんの仕合せになつたぞえ。

勘吉　左やうサ、駕籠が一挺遊んでゐるから、幸ひと親方顏で乘つたやつサ……駕籠の衆、大儀であつたの。

駕舁　ハイ〳〵、よく御繁昌なりましたね。そして旦那は、見掛けによらぬ、とんだ目方がございますね

勘吉　ハテ、そりやァその筈サ。斯う見えても懷には、いつでも、しつかりだぞ〳〵。

ト懷中の胴卷に金のある事をひけらかす。

たみ　これはしたり、勘吉どの、道中といひ、なんでマアうか〳〵と。コレ、嗜まんせいなア。

勘吉　イカサマ、持ちつけぬ物を持つて、我が物面で、こいつはあやまりました。

ト懷へよろしく思ひ入れ。

たみ　さうぢやわいなア。江戸の內でも、吉原といふ遊女町でござんす。わたしが旦那どのは、舞鶴屋の傳三というて、色を商ふ廓から、夫婦連れ立ち箱根へ湯治。殊にこの吉原宿に、奉公人があると聞き、商賣がてら、相談に參つたわいなア。

勘吉　附いて來たわしは、江戸の吉原で、半合羽の勘吉といふ判人サ。親方の供をして來やしたが、敵

を討つた曾我の墓へ、參詣ながら來て見れば、こりやァ卒塔婆ばかりで、墓は立ちませぬかえ。

畑右　アヽ、どうして〳〵、いはゞ親の敵を討たしやつた、孝行な兄弟衆。賴朝さまも、感心はなされたが、何をいうても、工藤さまばかりでよい事に、賴朝さまを討たうとさつしやつて、御狩家を騷がしたお咎めで、滅多に墓は立てられませぬて。

たみ　ハテ、それは氣の毒な事でござんす。して、その討たれなさんした、祐經さまのお跡は、立つて居りませうの。

榊　サア、それも少々譯あつて、ゆかりのお方が髪をおろして、俄に尼御。誠に貞女なお方ぢやわいの。

馬八　モシ、おかみさんえ。もう時分が來たに、この辨當は、どこで開きなさるえ。

勘吉　それだといつて、茶屋が無くては開かれぬが……モシ、おかみさん、爰らに茶屋は無いかえ。

榊　アイ、その茶屋はわたしぢやが、見たところが江戸のお客、このマァ穢い茶もあがるまい。斯うしなさんせ、この鷹ヶ丘といふ所に、いま云うた尼御の庵室がござんす。そこへ行つて開かんせいな。

十作　成る程、この頃出來たあの庵室、あそこなら綺麗でようござります。コレ、後家御、もし手がい

らば、手傳うてやりませう。

榊　ほんにお前、頼むぞえ。

十作　心得ました。

勘吉　そんなら、その庵を借りて、晝食としやせう。

馬八　わしは腹が餘ッほど北山時雨だ。

たみ　そんなら、その庵を借りませう。モシ、お前、案内して下さんせ。

榊　合點ぢやわいなア。

畑右　そんなら江戸のお客、爰で別れませう。

勘吉　大きにお世話になりました……サ、駕籠の衆も來さつしやい。

たみ　ハイ、お前さん、其うちお目にかゝりませう。

ト念佛太鼓になり、榊、先に立ち、お民勘吉、馬八は辨當を持ち、駕籠の者。百姓と十作は伏せ鉦な
殘し、皆々捨ぜりふにて下座へ入る。畑右衛門、殘って

畑右　ドリヤ〳〵、今日も又、孝行な曾我兄弟の衆、野に咲く花を手折つて來た。ドリヤ、花あげて、
回向して進ぜませうか。

ト籠の中の秋草を出し、塔婆の左右へ立て、敷捨ての席の上へ後向きに坐り、戒名を唱へ、念佛申して鉦を打つ、よきキッカケに義太夫になり、蟲の音する。

〽浮世とは、思ひなりせど子ゆゑの闇、住みにし曾我を老の身で、杖を便りに駿河なる、厚原とのみ聞くばかり、思はず連れに大磯の、虎も妹の少將も、切り下げ髪の尼二人、老をいたはり慰めて、鷹ヶ丘にぞたどり來て。

トこの文句のうち、向うより滿江、高からげ、女菅笠を持ち、竹の杖。待宵、十六夜、虎少將にて、切り下げの尼、鼠の衣裳、淺黄の平帶、前で結び、白の手甲、脚絆、網代笠と珠數を持ち、中拔き草履、淸左衞門、旅形のやつし、菅笠、草鞋、柳行李の割掛けを肩にかけ、四人よろしく出て來り、花道にて

滿江　コレ、二人の衆、このマア遠い道もせを、さぞや、しんどうごんせうの。

待宵　イエ〳〵、私しどもより阿母樣、習はぬ旅を老の身で、あなた樣こそお疲れが……なう、十六夜どの。

十六　さいなア、道はかゆかぬ長の旅。併し、あのやうに、萩や薄の穗に出でゝ、秋の眺めは、また一しほでござんすぞえ。

清左　左やう／＼、桔梗苅萱女郎花、秋の七草揃うた野邊は、筆に及ばぬこの風景、斯ういふ所に酒があつて、取りたての鰹の刺身、一杯きめたうござりまするて。

滿江　また氣散じなその戯むれ。其方が無くば、女子ばかりの三人連れ。

十六　誠にそれではお氣の結ぼれ。戯むれ唄ふ者もなう

待宵　道はかゆかぬでござんせうが、あのお人が居さんすので、草臥れもなう

ト思ひ入れあり

アレ／＼、向うに鉦の音の聞えるは、もしやお二人の御廟ぢやござんせぬか。

滿江　ほんに、あの鉦の音の聞える方へ

十六　サア／＼、小しも早う、おひろひなされませ。

ト合ひ方、鉦の音にて皆々舞臺へ來り、あちこち見廻し

清左　アレ／＼、あそこに塔婆が二本立つてあるは、もしやはあれがお二人樣の御廟所か知れぬぞえ。

十六　お二人樣の御廟所か知れぬぞえ。

待宵　御戒名が書いてあるわいな。ドレ、讀んで見ませうわいな。

ト上の方へ立寄り

十六　高祟院淨岩良雪禪定門、建久四年五月二十八日。俗名は曾我の時致。

　　　鷹岳院士山良富居士……この命日は五月二十日、俗名は曾我の祐成とあるからは、さてはこれなる二本の塔婆は

待宵　ヤヽ、この俗名は、曾我の祐成とあるからは、さてはこれなる二本の塔婆は

滿江　二人の子供が、なきしるしかいの。コレ、この塚の下に、兄弟が埋んであるかいなう。

淸左　そんならこれが、お二人の塔婆でござりまするか。御老母樣

滿江　二人の衆

待宵　淺ましい身に、ならしやんしたなア。

〽二つの塔婆に取りすがり、母はあたりへ撲と伏し、前後正體なき入れば、畑右衞門はウロウロ見て。

ト女形三人、塔婆に取りつき、思ひ入れ。淸左衞門、下の方へ來り、荷を下ろし、悄氣たる體にて、煙草打ちつけてのむ。畑右衞門、よく〳〵見て

畑右　アヽ、こりやお前方は、その埋んだ佛に、ゆかりのお人さうな。回向して進ぜさつしやりませ。

待宵　アイ〳〵、爰へ參つた者は、みな身寄りの者でござんすが、見れば塔婆のこの命日、變つてござんすが、そんならお二人は別々に

十六 お果てなされましたかいなア。モシ、知つてなら、どうぞ敎へて下さりませ。

滿江 所の衆なら知つてもあらう。サヽ、話して下さりませ〳〵。

兩人 どうぞ話して下さりませ。

ト畑右衛門に縋つて思ひ入れ。

〽取りすがられて迷惑涙。

畑右 オヽ、血筋の人なら、悲しいは尤も。それに我れらは、在所を眼前見ては猶悲しい。しかも皐月の暗がりに、狩場へ切り入り、祐成どの。

〽多勢に圍まれ大童、切ツつ切られつ戰ふところ、仁田の四郎といふ人が、相手になつたと思うたら。

忽ち片足きり〳〵す、ちんがらもがらで働らけど、遂には命も枯れ〴〵に、腕は腕、足は足、ちぎれ〳〵におちこちの。

〽たつきも知らぬ裾野の露、あまり見る目の氣の毒さ。

一つに集めて塚に築きました。

ト此うち待宵、泣きおとす。十六夜、縋りよつて

十六　モシ、五郎さまは、どうなされました。時致さまは、どうマアおなりなさんしたぞいなア。

ト取りすがつて思ひ入れ。此うち清左衛門、居眠りゐる事。

畑右　オヽ〱、その五郎といふ人は、強い人ぢやが情ない、五郎丸といふ人が、縛りからげてその後は、工藤の身内へ下さつて、しかも三十日の暮れ方に、鷹ケ丘の草叢で、祐經さまの侍ひが、太刀取り願うて縛り首、跡は骸もずた〱に、さも憎さうに切つたわいの。

〽切つたわいのと跡云ひかね、其まゝそこに貰ひ泣き、二人の尼も母親も、様子を聞いて猶更に、嘆き涙は富士川の、堤も切れし如くなり、待宵やう〱顔を上げ。

待宵　親に孝なる御兄弟、そのお二人がなんでマア、かゝるいぶせき野の末に

十六　この御最期は何事ぞ。天の助けも無い事か。

待宵　コレ〱、祐成さま、わたしやお前の後世の爲、この通りの尼法師。

十六　少將とても髮切つて、法名即ち十六夜と申しまする。

待宵　わたしや待宵と變へました。モシ、未來は浮んで下さりませ。

滿江　母も尋ねて來たわいの。コレ、さぞや最期のその時は、無念にあらう、口惜しかつたであらう。心の内が思はれて

〽胸に張裂く思ひごと、悔むを聞いて二人の尼、その悲しみはわたしらも、同じ思ひと咽かへり、聲も得立てず身を顫はし、前後不覺に泣きけるは、目も當てられぬ風情なり。側の清左は眼をほつちり。

ト捨て鐘。清左衛門、居眠りゐたりしが、爰にて眼を覺まし

清左　アヽ、氣の毒やノ〳〵。お前方の悔み事、よそのやうに聞いてゐた……アヽ、あの鐘は何時であらうなう。泣いてばかりゐて、宿取り損なうては、それこそ泣いても泣きおふされぬ。ドリヤノ〳〵、悔み事云はつしやる間に、宿借りて來ませうか……モシ、お前、この荷を賴みます。ドリヤ、宿借りて參らうか。

〽宿を借りにと彼の男、荷物かたげて走りゆく、畑右衛門は眼を揩り赤め

畑右　エヽ、マア、この悲しみを餘所に見る、無得心な供の男。又それには引かへ、しるしを立てゝゐかりのお人、是非とも尋ねてござらうと……思ふに違はぬ、お年寄は、母御樣。お二人は虎少將、名高い女郎衆。わしは又、福泉寺のお住持樣へ賴うて、戒名附けてこの塚へ、コレノ〳〵

ト草苅り籠より二振りの劍を出し

これは兄弟のお方が、持つてござつた刃物であらふ、斯ういふ事もあらうかと、夜討の跡で、拾ひ集

めたこの切れ物。お前方へ渡します。形見に持つてござりませ。
〽渡せば二人は嬉しげに。
侍宵 さてはおなぐ〜お暇の、源氏重代友切丸。
十六 また一振りは微塵丸。わたしら二人へ好きな形見。
侍宵 日頃願ひは重ねしが、大望抱へしお二人の、かゝる大事を打明けて、語り給はぬ心の内。
十六 明日は年明けお夫にと、思ふそのうち情ない、夢見たやうなこのお別れ。殊に常々母様の、お噂のみなされしは、御母様をわたしらへ、お頼みなさるゝ御胸中。
満江 さうとは知らず詐致み、勘當したは我が誤まり。兄が願ひにやう〜と、四五日以前親子の對面これに間もなう二人とも
侍宵 冥土の鳥ともろともに、啼く音血を吐くこの悲しみ。もし此あたりに御寺もあらば、佛事供養も致したい。どうぞ教へて下さりませ。
畑右 そりや易い事。左樣なら、この裾、鷹ヶ丘へ出來たあの庵室、そこまで案内いたしませう。サアサア、お支度なされませ。
〽勸めに母も尼御前と、涙片手に立ちあがり、老をいたはりかしづきて、館同士なる庵とも

知らぬ庵に木瓜の、住家へこそは。

ト時の鐘、蟲の音、木魚入り、望みの合ひ方になり、畑右衛門、籠を脊負ひ、案内して、待宵十六夜、件の劍を、めい／＼袱紗に包み、これを差し、滿江をいたはり、介抱の體にて、東のあゆみへかゝる。念佛の聲、伏せ鉦聞え、この道具、ずり／＼と廻る。

本舞臺、二重に飾り、正面、佛壇、盆棚を飾り、障子たてきり、緣側附きの庵室。よき所に圍爐裏、左右は柵矢來、狩場の殘り、これに蔦の葉搦め、萩紫苑、盛りの體。門口の柱へ楯の板二枚、戸に見立て、嵌めてあり、すべて鷹ヶ丘、梛の葉草庵の體。爰に件の四つ手駕籠二挺、門に置き、榊、圍爐裏にて茶を沸かしゐる。馬八、提げ重の品を食つてゐる。十作、圍爐裏の火を焚きゐる。清左衛門、盥にて足を洗ひゐる體。件の鳴り物にて道具納まる。

十作　コレ、若い人、茶を進ぜうか。

馬八　アイ／＼、思ひに思つた提げ重を、たうとう平げた。

清左　モシ／＼、わしらは四人連れぢやが、寐られますかの。

榊　なんの、四人や五人は、樂々と寐られまする。

ト此せりふのうち件の四人、花道より廻つて門口へ來る。

畑右　サア〳〵、この庵室でござるぞ……モシ〳〵、泊り客がござるぞ。

榊　面白い〳〵。まだ千人でも泊られまする。

畑右　そんなら此方へ、お入りなされませ。

トこれにて門口の四人、内へ入る。清左衞門見て

清左　オヽ、阿母様、二人の尼様、宿取つたゆゑ、いま迎ひに行く所でござつたわいの。

待宵　此お方のお世話で、阿母様もお連れ申したわいの。

滿江　爰は庵室でござりまするか。

十六　左様見えまするわいな。サア〳〵、お入りなされませ。

榊　サア〳〵、お茶あげませうわいな。

ト茶を汲んで出し

ほんに此やうにお客がおほくては、醤油も油も、取らずばなるまいわいの。

十作　そりや、どうでわしが歸りがけに、久澤の酒屋へ、よう云うてやりませう。

榊　そんならお前、頼みましたぞえ。

畑右　ア、、そんなら先刻の江戸のお客も
榊　爰に泊つてお出ぢやわいなア。
清左　イヤモウ、今日は大道をなされたから、さぞ阿母様は、お疲れてござりませう。有やうは私しも、大きに草臥れました。
満江　そんなら其方は、奥を借りて寝さんせいの。
清左　ハイ〳〵、左様いたしませう。
馬八　連れがあるなら、おいらも寝ようか。
畑右　寝さんすならば、わしも附合ひませうか。
十作　寝るにはお辭儀はせぬがよい。
榊　サ、斯うおいでなされませ。

ト唄になり、榊先に立ち、満江、清左衛門、馬八、畑右衛門、奥へ入る。十作は向うへ入る。待宵、十六夜殘る。あと合ひ方になる。思ひ入れあつて

十六　丁度幸ひ、今宵の宿り。
待宵　これも大方、佛の導き。ドリヤ、御回向いたしませうか。

ト兩人、佛間に向ひ、回向の體。時の鐘の入りし合ひ方になり、向うより天日坊、誂らへの頭巾、鼠合せ白帶、高野聖の拵らへにて、誂らへの荷を脊負ひ、澁團扇を持ち、出て來り、花道にて

天日　秋の日永といふうちに、今日も慥かに入相ごろ。どうぞ泊りを頼みたいが、向うは正しく庵室さうな。あれへ使つて、今夜の泊りを

ト思ひ入れあつて門口へ來り

ハイ、ちとお頼み申したい。愚僧は高野山より出て、諸國を巡る僧でござるが、一夜の宿を御無心申しまする。

ト訪れる。兩人、こなしあつて

待宵　これはしたり、折角のお頼みなれど、わたしらとても只今、やう〳〵お宿願うた旅の者。御庵主樣はお留守といひ

十六　まだわたしらも、お目にかゝらぬ御庵主樣、お頼みあつても、殿達なれば

天日　宿はならぬと云はつしやるのか。然らば、爰は尼御の草庵、男は決して

待宵　大方お泊めなさるまいと、泊つた尼がいらぬ左平次。

天日　アヽ、他からござつた尼達か。さう聞いては、頼んだというたとて

十六　わたし達が自由にも、致し悪うござりまする。

天日　これは尤も。殊には浮世の雑説にも、高野聖に宿貸すなと申す、娘子供の口すさみもござれば、成る程、泊りは叶ひますまい。ドリヤ、外々を頼みませうか。

ト時の鐘、雲上なる笙の入りし合ひ方になり　天日坊、思ひ入れあつて、引返して向うへかゝる。入相の鐘、揚げ幕より椰の葉、切下げ尼の鬘、藤鼠やうの衣裳、白の平絎け、庭下駄にて、墓場手桶に秋草を入れたるを提げ、水晶の珠数を持ち、出て来り、天日坊と入れかはり、思ひ入れあつて

椰葉　聞く人の、袖にぞ結ぶ萩の葉の、風にとまらぬ秋の夕露、分けて物憂き黄昏に、野寺の鐘も

ト思ひ入れあり

南無阿彌陀佛々々々々々。

トこなし。天日坊、立ちどまり、思ひ入れあつて

天日　見ましたところが、まだ年若な尼御様。そんならお前が、憚りながら、向うに見える庵室の、御庵主様かな。

椰葉　アイ、成る程、わしはあれなる庵の主。して、修行のあなたは。

天日　暮れに及んで宿もなく、一夜の御無心申したところ、御庵主のお留守といひ、殊に尼御の庵室ゆ

ゑ、出家なれど、男はならぬと、お斷わりゆゑよんどころなう、立歸りまする。道にてお目にかかりましたも、いはゞ佛の導きか。尼御樣、お泊めなされては下さりませぬか。

梛葉　ナニサマ、殿達とはいふものゝ、高野聖の旅の御出家。成る程、お宿いたしませう。

天日　それは何よりよき善根。左樣ござらば御庵主樣、そのお詞に甘へまして

梛葉　秋風寒き草の庵、何は無くとも、今宵一夜を

天日　御報謝になりませうか。

　トまた鳴り物になり、兩人、門口へ來り

梛葉　榊どの、居さんすか。いま戻つたぞえ。

　ト内へ入る。天日坊は門口へ笈を下ろし、草鞋を脱いで思ひ入れ。待宵、十六夜、こなしあつて

兩人　ハイ、只今お歸りでござりまするか。

　ト云ふ顏見て、心得ぬ思ひ入れにて

梛葉　見れば二人の尼御達、ついに見馴れぬ若いお方が

待宵　左樣でござりまする。私しどもは旅の者、まだ足弱の老母を誘ひ、思ひがけなうお宿の御無心。

梛葉　アヽ、左樣かいなア。妾が留守に、泊らしやんしたと云はんすか。何につけても不自由な庵室。

心置きなう、旅の疲れを

ト挨拶のうち、二人の尼が袱紗に包みし二腰の刃物に目を附け

見れば二人の尼御には、佛の道に入りながら、なんで一腰用意して

ト云はれ、兩人、つゝ包みの刀を、ちよつと隱して

待宵　こりや一腰ぢやござりませぬ、剃髪いたすその砌り、申し請けたるあらたな名號、この一軸は尊い正筆、妹も同じ六字の曼陀羅。

ト十六夜へ呑みこませるこなしにて

梛葉　すりや二人とも、持參の一軸、六字の名號。刃物ではござりませぬ。

十六　アイ、慥か左様な

待宵　コレ。

ト思ひ入れあつて

兩人　それに相違はござりませぬ。

梛葉　そりや有り難い御名號でござりませう。

ト思ひ入れあつて

天日　ハイ〳〵、お許されませ。今日は、分けて草臥れましたて。

サ、旅の御出家、ゆるりと庵へ。

ト内へ入る。

天日　ハイ、旅僧でござります。庵主のお留守と、尼御達の挨拶。是非なく歸る道すがら、御庵主にお目にかゝり、お願ひ申して今夜の泊り。こりや、お前方も

十六　こりやお前はたつた今、お宿の無心を仰しやつた

十六　アイ、わたしらは年寄りの女中を誘ひ、相模の方より駿河路へ、志す佛の廟所を

天日　アヽ、左様か。御奇特な事でござります。二人の衆は相模から、駿河へござる尼御達、また年若な様子といひ、只人ならぬ取り廻し。こりやアてつきり大磯か、小磯の里の色達が、思ふ男のその爲に、髪切つたと申す事か。左様かな〳〵。

待宵　イエ〳〵、なんの其やうな、世にある者ぢやござりませぬ。

天日　イヤ〳〵、隱せど色に現はれて、慥か大磯虎御前、又お一人は少將どのか。

兩人　どうして左様な。

ト思ひ入れ。梛の葉、これにて二人へ目を附け

梛葉 成る程、旅僧のお詞の如く、以前は花の勤めの女中、剃髪しても秋草の、姿色ある二人の尼君。妾も夫におくれし身の上、憂を語らばよい慰み、今宵は夜ととも

兩人 アイ、そりやお嬉しうござります。

ト此うち天日坊、二人へ思ひ入れあつて

天日 誠に愚僧もついにない、此やうなよい宿に泊りまして、尼とはいへど色氣ある、桔梗苅萱女郎花中の聖は鬼薊。

ト云ひさま佛壇に向ひ

ほんに、手前ばかりの喜びに、まだ本尊へお禮も遂げぬ。誠に麁相な旅の僧……ア、爰に魂棚がござるな。ドリヤ〳〵、まづ御先祖の佛樣から

ト盆棚へ立ちより、正面に飾りある、庵に木瓜の紋附きし大位牌を見て

ハテ、結構な御位牌。紋は庵に

ト云はんとする。

待十 エ。

ト思ひ入れ。梛の葉、ハツと思ひ入れあつて、三人に見せじと、持つたる珠數を魂棚目當てに打ちつける。誤またず、件の位牌に當り、バッタリ音して、俯向きに倒れる。兩人恟りして

オヽ怖。

ト飛びのく。天日坊も思ひ入れあり

天日　今の音は、ありやァなんだの／＼。

梛葉　イヱ／＼、怖いものぢやござるまい。定めし鼠が供物を引きに、それで妾が我れを忘れて

ト思ひ入れあつて

勿體ない／＼。

ト盆棚に立ちより、投げたる珠數を取りあげる。

ドリヤ、御灯をあげませうか。

ト常香盤の火を附木へ移し、魂棚へ灯をつけ、よき所より短檠を出して差置き、灯をつける。

十六　なんぢややら、怖い／＼と思ふので、鼠が出ても今のやうに

待宵　仰山なあの驚ろき……したが、お前は大方

天日　なにサお前、山々嶽々歩いたが、別して怖いといふ事も

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

話しがありますかえ。

椰葉　御出家には、それをなんで聞かしやんすのぢやえ。

待宵　その父曾我のお二人が、敵を討てば

十六　どう致したぞいなア〳〵。

ト聞きたき思ひ入れ。

天日　サ、そこが今日のお話しだが、併し女中方を捕へて、役にも立たぬお話しを、イヤ、こりやア、云ひますまい〳〵。

椰葉　でも、その立山の物語り。

二人　その後は、どうぢやえ〳〵。

ト詰め寄せて云ふ。

天日　サア、聞きなさるなら話しませうが。話すも嶮岨のそのお山、岩に取りつきやう〳〵と、登つたところが今申す、炎の光り物凄く、跡に聞けばこれ修羅道、吹きくる風に誘はれて、太刀音鎗う叫ぶ聲、火炎の中には異形の者、三人まで現はれ出て、打ちあふ有樣、血は瀧津瀨、白刃に五體は失ふとも、遁がさじものと挑みあふ、修羅の巷を眼前に、玆ぞ出家の役目ぞと、念佛おそらく數

百遍、唱へし功徳か亡者の姿、次第々々に消えました。わしも唱ふる功徳にや、すや／＼眠氣が兆して來て、思はずそこへ突俯して、前後も知らず高鼾。サ、寢た夢に、聞かつしやれませ。わしが枕許へ、三人連れの勇士の姿、煙りの如く現はれて、その聲高く、ヤイ出家、其方不思議に登山なす事、我れ／＼三人詞を交す因縁ならめ、この亡靈は曾我の兄弟、今一人は祐經よ、父の仇とて討ち討たるゝは、皆現世よりの業因にて、討つては討たれ、討たねばならぬ、娑婆の役目はこれ孝道、曾我と工藤の血緣の者、娑婆にあるは、これ宿業の盡きざるところ。汝その者どもにめぐり逢ひ、施餓鬼回向を怠りなく、供養を賴むと云ひ聞かせよ。人もし其方を疑はゞ、コレ

ト赤木の短刀と、兩袖を出し

曾我兄弟の亡者の兩人、引きちぎつたる片袖二つ、血汐の附きしは修羅の巷、赤木作りは祐經どのゝ止めの短刀、亡者の三人、渡せし修羅の品々を、今にも血緣に逢ふ時は、物語りして亡者の賴み、修羅の苦患を助けたいが、わしが願ひ。思ひ出しても身の毛がよだつい。ア丶、恐ろしや恐ろしや、今に惣身が、コレ、冷汗になりましたわいなう。

ト口に任せて僞はり話す。三人誠と心得

椰葉　すりや、その劍が止めの短刀。この上苦患を助くるは

待宵　身寄りにあらねどお二人の、未來を助くる石碑の營み。
十六　施餓鬼供養も致しなば、その修羅道の苦も遁がれ、成佛あるは
天日　高野山にて石碑の營み、祠堂金など送りなば、正に成佛得脱の
椰葉　今の話しを聞く度に、恨むお方も恨まるゝ
待宵　それもこの世に亡き人を、恨むは愚痴の至りにて
十六　たとへこの身を捨てゝなと、あの世の苦患を、わたしら二人が
天日　助けるなれば石碑を立てゝ……それも二人の石塔は、地獄の沙汰も金次第、金が先立つ
待十　浮世の習ひ。
天日　これぞ石碑の註文は、兄は熨斗目の磯千鳥、弟も蝶の片袖を、二人の尼御へ
　　ト投げてやる。兩人、蝶千鳥の片袖を取上げ見て
兩人　そんならこれを
天日　二人の尼御へ、旅僧が布施物。
兩人　エヽ、嬉しうござんす。
天日　また短刀は切尖に、錆びつく血汐は

椰葉　ヤ……アノそれが

　　ト きつとなる。

天日　今宵のお禮に．赤木の短刀。

　　ト差出す。椰の葉、ツカ〳〵と寄つて、短刀を取上げ、切尖を見て、無念の思ひ入れあつて

椰葉　その御最期も

天日　蝶と千鳥の

兩人　エ。

　　ト椰の葉、シヤンと鞘へ差す　待宵、十六夜、片袖を一度に懷中する。

天日　ドリヤ、臥りませうか。

　　ト唄、時の鐘。思ひ入れあつて、三人、奥へ入る。椰の葉、殘つて思ひ入れ。

椰葉　今の二人の尼御こそ、慥かに曾我にゆかりの女子、連れの老母は、もしや母の滿江なるか。殊には今の聖の話し、妾に渡せし赤木の短刀、止めの劍とあるからは、白刃に殘る　夫の生血。

　　ト拔いて、よく〳〵見て思ひ入れあり

さぞ御無念でござりませう。寢所に切りこみ、寢鳥を刺す卑怯な兄弟、その者どもが手にかゝり

過ぎさり給ふ。武運も薄き

　ト思ひ入れあり

只この上は夫の石碑、供養が肝腎。さりながら、昨日に變る今の身は、諸領屋敷を召上げられ、一﨟職の妻ながら、かゝるいぶせき草庵に、三箇の莊も上がり地にて、佛事供養も心に任せず。さはいへ旅僧の物語り、夫の修羅の苦患の程、なんと聞きすて置かれうぞ。聞くも悲しき

　ト思ひ入れあつて

南無阿彌陀佛々々々々々々。

　ト小鼓の入りし誂らへの合ひ方にて、梛の葉、件の短刀を佛前へ直し、回向の體。この鳴り物にて、向うより小藤太、深編笠、切緘ぎ羽織、衣裳、大小にて、小鼓を打ちながら出てくる。跡より勘太、木綿やつし、股引、在鄕廻りの番太の拵らへにて、附いて出て來り、花道にて

勘太　コレ〳〵、鼓を打つお人、見りやアこなさん、二本べい差してござるから、武士の浪人かは知らぬが、たとへ武士でも侍ひでも、袖乞ひをすれば物貰ひだよ。そんなら、村預かりの番太の所へ挨拶に來る筈だ。この村方は、番太のわしが預かりだ。笠を脱いで、近附きにならつしやい。コレサ、挨拶をさつしやいよ。

ト此せりふ云ひながら附いて舞臺へ來る。小藤太、矢張り物乞はずに行き、門口へ立ち、鼓を打つて
ゐる。

これ程云ふに、こなさん、聾か、唖か、このマア笠を

ト手をかけるを小藤太、突き廻し、鼓にてちよつと當てる。勘太、見事にかへるを、見向きもやら
ず、門口にて謠をうたひ、鼓を打つ。梛の葉、この音色を聞きつけ

梛葉　鉦鼓の聲に事かはり、音も面白き鼓の調べ、袖乞ひさうな。手の内入れて

ト捻りの錢を持ち、庭下駄にて、門口へ行き

袖乞ひの御浪人、手の内を入れませう。

ト差出す。小藤太、取つて押戴き、懷中するを勘太見て

勘太　手の内貰へば矢ッ張り乞食、物貰ひ、笠を脱ぎやれなつ

ト手をかけるを、鼓にて見事に投げ、起上がるを足下に踏まへ、懷中より立て文の願書を出す。梛の
葉、この物音にて驚ろき、奥へ入らんとするを、外より袂を扣へ、鼓に載せて願書を差出す。梛の葉
不思議さうに取上げ

梛葉　委細も申さす、願書とあるこの書き物。今の妾に、なんの願ひを

ト上書取つて、よく〳〵讀む事あつて、其まゝ門口へ願書を捨てる。小藤太、ハツと思ひ入れ。

勘太　そんなら、これに身の上が

ト願書に手をかけるを、引ッ捕へて立廻りに、勘太、笠に手をかけ、タヂ〳〵として、片手に笠を持つたまゝ、小藤太、門口の藪の中へ勘太を投げこみ、奥へ行かうとする梛の葉の袂を又ぞろ扣へて

小藤　主君の後室、梛の葉さま、すりや、此やうに願ひましても、お取上げはござりませぬか。

トきつとなる。

梛葉　叶はぬ事、ならぬ事。殊に主君の後室とは、そりや何事。妾が夫は名にしおふ、今は世に無き祐經どの、その主人より勘當うけ、いま浪人の小藤太成家、主君なぞとは慮外であらうぞ。

小藤　サア、その仰せはさる事ながら、これまで數度のお願ひを、是非ともこの度

ト袂に縋り、奥へ行かんとする梛の葉に引かれて、タヂ〳〵と内に入り

お叶へなされて下さりませ。

ト兩手を突いてキッと思ひ入れ。

梛葉　イヤ、そりや叶はぬ。この上勘當詫びの願ひは、いつかな〳〵

小藤　そりや又、何ゆゑ叶ひませぬな。

梛葉 何ゆゑとはコレ、よう聞けよ。

ト合ひ方。

この度夫祐經どの、曾我兄弟に討たれ給ふは、誰れが業、これ皆小藤太が爲せる業。祐經どの、未だ金石のその昔、祐親にお恨みあつて、遠矢にかけんとありけるを、いはれぬ其方がさし出是非とをひうけ誤まつて、科なき河津を射とめしゆゑ、曾我兄弟の者どもが、親の敵とつけ狙ひ夫を討ちしは、こりや武士にあるべき道理。その間違ひより夫の勘當、殊に夫は世を去り給ふ。さすれば其方が勘當を、赦すお方はこの世にない。主なければ家斷絶、今は世になき梛の葉が、有髪の尼のこの庵室。重ねて願ふな。アノ小藤太の、不所存者めが。

トきつと思ひ入れある。小藤太、こなしあつて

小藤 そのお憤り尤も至極。さりながら、前非を悔いての拙者がお願ひ。今さら斯樣に申すのも、身の云ひ譯と思さんが、先年木曾どの都にあつて、粟津の一戰終らぬ砌り、某つくゞゝ存ぜしは、何卒御主君祐經さまへ、一つの功を立てたる上、勘氣の詫びと存じつき、義經公の士卒に加はり、主君の姓名金石と、記せし矢の根持參なし、手勢に紛れ窺ふところ、粟津ヶ原にて、よき武者振りの只一騎、駒に鞭打ち落ちゆく樣子。すはしれ者と尖り矢しぼつて、切つて放てば誤ま

たず、内兜に發矢と當り、折しも場所は深田の畦道、いで首取つてと思ふうち、石田の爲久駈けよつて、首打ち落し大將の、實檢に供へしに、これこそ朝日將軍義仲どの、射とめし手柄はこの成家。殊には矢の根に主人の名、茲ぞ主君の御手柄と、思ふに相違の石田が高名、我れは武運に盡き果てて、弓矢神の助けもなく、流浪の身にて暮らすうち、主君は狩場で空しき御最期、これ皆曾我の兄弟二人が爲せる業と、無念の齒嚙みも御勘當、何卒御赦免あるならば、おのれ殘りし曾我の血筋、主君の鬱憤、仇がたき、河津が胤の禪司坊こそ當の敵、彼奴を討たんがさるにても、御勘氣ゆりねばそれとても、主君の心に違ふの道理と、さてこそ日毎に奥方の、御隱れ家を窺ふ成家。仔細と申すはこの一條。梛の葉さま、何卒御勘氣御赦免を、偏へに願ひ奉りまする。

ト此うち障子明けて、天日坊、立ち聞いてゐる。

梛葉　イヤ、そりや今さらに詮なき企て。討つべき兄弟この世を去り、ゆかりの女は虎少將、それぞ即ち成家が、實の娘であらうがな。

小藤　すりや、兩人の女ばら、曾我兄弟と契約の、ござるとあつて猶更に

梛葉　よもや我が子は

小藤　エ。

梛葉　討たれまい。

ト思ひ入れ。唄になり、梛の葉、こなしあつて、奥へ入る。小藤太殘り

小藤　すりや、尼御には二人の娘が、緣を思うて……ハテ、何とやら

ト思案の體。待宵と十六夜、奥よりツカ〳〵と出て、小藤太に向ひ

待宵　父上樣、あつて益なきわたしら二人。

十六　敵同志なる曾我のお家、娘の緣ゆゑ主君の疑ひ。

待宵　晴らす仕樣は、わたしら姉妹

兩人　勘當なされて下さりませ。

ト思ひ入れ。小藤太、こなしあつて

小藤　絶えて久しき二人の娘、親が活計にあるまじき、廓の勤めに大磯へ、その身を賣りし二人の娘、曾我兄弟と云ひ交し、緣を組みたる若後家の、合せものは離れもの、今こそ互ひに他人と他人、曾我のゆかりは、もう切れた。

待宵　イヽエ、その緣は切れませぬ。切れぬといふは二人とも、剃髪いたして女子の道を捨てたるからは、未來永々祐成さまへ、添ひとぐるもあの世にて、證據は即ち久澤に立つ、塔婆の夫のこの戒

名。

ト懷中より紙位牌の戒名を出す。十六夜も同じく戒名を出し

十六　わたしも同じ尼法師、お側離れぬこの戒名、時致さまと離れぬ證據。この世にあるうち念佛供養しら姉妹。敵同士もなんのその。いとはぬ氣儘なわたしら二人、却つてお前の御身の仇。今よりしてはわた

待宵　勘當なされて下さりませ。父さん、これがお前へ

兩人　二人が願ひ。

ト思ひ入れ。小藤太、こなしあつて

小藤　曾我殿原と契約なし、二人が死後にいつまでも、尼となつたる貞女の娘。男へ女の操は屆けど、親にとつては不孝の二人。殊に敵同士といひ、御主人樣へ申し譯、わいら二人は願ひに任せ、勘當いたす。緣が切るれば他人の女、亡者となりとも添ひとげ居らう。

トきつと云ふ。

待宵　嬉しうござんす。勘當うくればわたしが身儘。

十六　尼にならうとこの上は、どのやうな身持ちをしようとも、よもや父さん

小藤　なんの構はう、親子でない。縁切る上は目通り叶はぬ。いづれへなりと

ト二人を引立て、門口へ突き出す。最前よりお民馬八、下手より出て、門口に窺ひゐて、この時、顔見合せ

たみ　今のお二人。

十六　お内儀さん

待宵　首尾よう親子の

たみ　縁が切れゝば願ひの通り、高野へ送る祠堂金、尼御の二人が江戸へ出て、二度の勤めの身の代は二人揃へて二百兩。落ちつく所はお江戸の吉原、舞鶴屋まで尋ねてお出で。サ、直ぐにお前へ。

ト二百兩の包み金を待宵に渡す。

待宵　嬉しうござんす。これが即ち祠堂金、又は主人の尼御様、憚りながら貢ぎの爲。

十六　父さんよろしう、御主人様へ、差上げた上、お前の勘當お詫びの願ひ。

ト二百兩の包みと件の紙位牌を、小藤太が前へ持ちゆく。小藤太、見て思ひ入れ。

小藤　さては二人はこの親が、勘當詫びの種にもと、且はあの世の兄弟が、石碑供養と又ぞろや、その身を賣つて、二度の勤めを

待宵　サア、二度の苦界にこの世から

十六　無間へ沈む廓の呵責。

ト思ひ入れあつて、兩人、門口の駕籠に乘る。馬八、履物を直す。よき時分、滿江、畑右衛門、出かかりゐて

滿江　何にも云はぬ、二人の衆、尼のその身を又ぞろ江戸へ

待宵　お別れ申せどお形見の、この一振りは大切に

十六　一念凝つた夫の魂ひ。

滿江　その魂棚の待ちうけも、先刻に參つたしるしの塔婆を

畑右　直ぐに用ひて盆棚に、その手傳ひは畑右衛門。わしが送つて

ト盆提灯をともし、草物を下げて先に立つ。

小藤　貞女ながらも不孝な娘。二人が二人敵同志。これも前世の…………サ、役にも立たぬ、いづれへなりと……コレ、隨分まめで

ト思ひ入れあつて

勝手に暮らせ。

ト顔を外けて思ひ入れ。此うち梛の葉、物蔭に窺ひゐる。

待十　お前も御無事で

小藤　これが別れに

待十　エ。

ト駕籠より振りかへる。皆々、思ひ入れあつて

たみ　駕籠やらんせ。

ト唄、時の鐘になり、畑右衛門先に盆燈籠を持ち、草物を擔ぎ、お民、満江、馬八附き、向うへ入る

小藤太殘る。梛の葉、思ひ入れあつて

梛葉　推量に違はず、二人は其方が

小藤　御覧の通り縁切つた、娘二人が身の代を、残し置いたもこの親と、縁は切れども主従の、縁を結ばん二百兩。御用に立たば、何卒よろしう

梛葉　イヽヤ、其方の二人の娘、曾我に縁ある者どもの、その身の代は、いつかないかな。そりや其方が所持いたし、とつとゝ早う

小藤　すりや、この金は後室様、お心に叶ひませぬか。

椰葉　いまいふ通りこの庵、奥には修行の高野の旅僧、供養いたすも盂蘭盆の、殊に今宵は佛のお迎ひ
門火も焚いて
小藤　その儀は拙者が
椰葉　ハテ、其方は送り火、歸つてたも。
トつかくと寄り、門口へ突きやり、戸をシヤンと閉す。唄、時の鐘。椰の葉、思ひ入れあつて、奥へ入る。あと合ひ方。小藤太、外より奥の方を見やり、件の二百兩を懷中して
小藤　この小藤太が御勘當、赦さぬといふ胸中は、もしや御舍弟
ト云はんとする。よき時分より、勘太、窺ひ出て
勘太　先刻の侍ひ。よくひどい目に
ト又かゝるを、立廻つて内へ投げ込む。勘太、起きあがる。
小藤　いま一應も
ト内へ入らんとする。勘太、戸をシヤンと閉して押へる。
意見の加へるものなれば、どうでこの身を
ト戸をしやくるも明かぬゆゑ、思ひ入れあつて

最早今宵も

ト思案のこなしあつて、下の方へ入る。時の鐘、唄、内には勘太、思ひ入れあつて、ソッと戸を開け外を見て、出ようとして

勘太　イヤ〳〵、出る度々にツケが悪い。この庵室にいしかつて

ト思ひ入れ。奥にて

榊　サア、來なさんせいな〳〵。

ト聲するゆゑ、うろたへて、そこらへ隠れんと凍れ廻り、精靈棚の眞菰をあげて、棚の下へ這ひこむ。此うち合ひ方。奥より清左衛門先に、勘吉、寢惚けたる體にて、目を擦り〳〵出るを、榊、引ッ張つて出る。

勘吉　コレ〳〵、もう夜が明けたか〳〵。

清左　おれもグッスリと一寢入りした。又なんで起すのだ。

榊　エヽ、おかつしやいな。まだ日が暮れて間は無いわな。

勘吉　その間の無いに、なぜ起したのだ。

榊　起さいでわいの。お前方はちつとのうち、座敷を貸したのに、いつまでも高鼾で、コレ、連れの

かみさんは、疾に歸りなすつたわな。

勘吉　ナニ、かみさんは歸らしつたえ……イヤ、とんだ人だ。おればかり藪蚊に喰はせて、寢こかしとは悪い洒落だぞ。それにしても、アノ奉公に行きたいと云つた、二人の尼御の相談が

榊　サ、その相談が出來ての事サ。二人ながら駕籠に乘せて、あのかみさんが附いて、歸りなすつたわな。

勘吉　ハテ、さうか。ハテ、人ぢらしな。

清左　コレ〳〵、かみさん、そんならわしが連れて泊つた、二人の若い尼を連れて行つたのか。して、もう一人の阿母はどうした。

榊　あの婆さんには、畑右衛門といふ人が附いて、先刻の塚へ、盆棚拵らへるというて行かんしたわいの。

清左　ア、、さうして、今夜の禮でもして行きましたか。

榊　イエ〳〵、そりやまだ貰ひませぬぞえ。

清左　イヤ、それは大變。おれが方にはモウ、小遣ひも無い〳〵。

榊　コレ〳〵、勘吉さんとやら、何を隱さう、わたしが亭主は、大藤内と云つた神職、狩場に於て不

悋な横死。それからわたしは後家暮らし。あの二人の尼達が、身賣りの相談が出來て、お前の所のかみさんが、二百兩渡して連れてござんしたで、わたしも心が味になつたわいな。なんとお前物は相談、わたしも百兩ばかりに買つて下さんせ。吉原へ行て、おいらんになつて見たいわいなア。

勘吉　ナニ、おいらんになりたい。イヤ、胴亂が聞いて呆れる。コレ、お前も吉原へ行きたくば、わしが世話をして、お針か遣り手の口はきいてやらうが、それでもよしか。

榊　エヽ、そんなら、おいらんの口は無いかえ、遣り手かえ。ちとお情ないね。それでも百兩になるかえ。

勘吉　イエ〳〵、ぎり〳〵の所が、一分二朱が當りサ。

榊　オヤ、大分下直だね。併し、この話しを、爰の梛の葉さまには沙汰なしに。

勘吉　ナニ、梛の葉とは、あの庵主の事か。

トこの話しを清左衞門聞いて、思ひ入れあり

清左　コレ〳〵、かみさん、その梛の葉といふは、工藤の奥方、それであらうな。

榊　さうぢやわいな。その梛の葉さまが、尼にならんしたのぢやわいなア。

清左　道理こそ〳〵。いよ〳〵おれが、梛の葉に極まれば……コレ、勘吉どのとやら、こなさんにも相談が

勘吉　商賣がらなら聞きもしよう。慥かこなたは、大磯におれがゐた時、お小夜といふ女を賣りたいと云つた、清左衛門といふ人ではないか。

清左　ほんに、その時、世話をした判人衆だの。

勘吉　さうサ、いゝ相談なら聞きませうが、奉公人かえ。

清左　マア、そんな話しサ。そんなら道で、わしが頼みを

勘吉　連れ立ちませうか。

榊　わたしも遣り手の相談を

勘吉　道々ゆるりと

清左　マア、来て下さい。

ト合ひ方、時の鐘に鐃鉢の音。清左衛門に勘吉と榊ついて向うへ入る。矢張り合ひ方、鐃鉢の音聞える。奥より梛の葉、苧殻と、焚き物の火鉢を持ち、出て来り

梛葉　何かに紛れて、まだ肝腎の迎ひ火も焚かずにゐた。ドリヤ、少しも早う。

ト盆棚より水向けの小桶、蓮の葉なぞを取つて來り、門口へ來て、苧殼に一寸火を焚きつける。此うち饒鉢の鳴り物。奧より天日坊、出て來り

天日 ヤレ〳〵、ツイうか〳〵と暮れ過ぎまで、一寢入りやらかした。御出家樣が盆にかまけて、棚經を忘れるとは、とんだお寺だ。ドリヤ〳〵、回向いたしませうか。

ト盆棚に向ひ、回向する。梛の葉、迎ひ火を焚く。下の方より小藤太、顏色拵らへにて出て來り、梛の葉の方を見て、思ひ入れあり、又ぞろ懷中より最前の願書を出し、梛の葉の方へ差出し

小藤 梛の葉さま、迎ひ火のゐに、亡者にあらぬ生精靈、又お願ひに參りました。

ト願書を出す。

梛葉 又も最前持參の願書、相も變らず勘氣の詫びを……幾度云うても、叶はぬ繰り事。

小藤 左樣あつても成家が、息あるうちはくどくもお願ひ。灰になつたらいざ知らず、もうこの度は動かず去らず、お詫びの程を梛の葉さま、お聞かせなされて下さりませ。

トよき時分、天日坊、短檠の灯にて、小藤太を、よく〳〵見て

天日 見ましたところ、分別ざかりのお侍ひ、知らぬながらも其許は、勘氣の詫びと聞きましたが、モシ、御主人にその詫び叶ひ、忠義を勵む心でも、命がなうてはそれも無駄事。して又、貴公は命

に掛替へござつてか。

小藤　ヤ、なんと。

梛葉　ナニサマ、旅僧の詞の如く、詫びを願はゞ一つの功、その孝道の立つたる上、品によつては、願ひに任せ

小藤　功を立つるは主人の敵、また敵とは申せども、拙者が粗忽は御主人の、御身の仇となつたる越度申し譯には只今これにて、主君の討ちし曾我兄弟、仇を討んずこの成家。娘が渡せし二人が戒名。この場に於て

ト紙の位牌を出し、キツとなつて

いかにや曾我の兄弟、兩人よつく聞け。存命ならば討つべきに、今は二人も苔の下。それゆゑ準えし二人の戒名。今こそ家來小藤太が、鸚鵡返しのこの仇討。思ひ知らさん、思ひ知れ。

ト刀を拔き、紙位牌を突き貫き

嬉しやこれにて心の潔白、只この上は兩人の、娘が迷ひしこの金子、石碑を營む御用金、お役に立て、拙者めが、御勘氣御赦免下さらば、有り難う存じまする。

ト件の金子を前へ差出し、キツと思ひ入れ。梛の葉、こなしあつて

梛葉　流石は小藤太、戒名ながらも兄弟を、討つといふのが面白い。妾が心に叶ひし上は、草葉の蔭の祐經どのに成り代り、今ぞ勘當赦したぞ。

小藤　すりや、御勘當御赦免とや。エ、忝い。さすれば以前に變らざる、御家來なれば主人の御供、疾より覺悟の事なれば、木部屋の内にて主君の追ひ腹、まッこの通り。

ト兩肌脱ぐ。腹切つて、白布にて結びある體。

梛葉　さては五音も鮮かならず、狂ふ調子に死相を現はし、眼中澱み、苦痛の樣子、仔細あらんと思ふに違はず

小藤　御勘氣ゆりれば以前の主從、末期に及んで成家が、今際の遺言。

梛葉　ヤ、なんと。

小藤　成家ならぬ工藤祐經、卽ちこれへ。

ト持つたる件の鼓を打つ。調べほどけて、皮は落ちる。中より祐經の白木作りの位牌出る。手早く取つて

梛葉　ヤ。

これこそ祐經さまの御位牌。梛の葉どの

ト寄るを引附け、位牌にて梛の葉を打擲して

小藤 エヽ、こなたはなう……現在夫の弟たる、祐兼どのと怪しき素振り。大殿ひそかに我れを召され正しく弟祐兼は、あの梛の葉に心をかくるその胸中。もし不義がましき事あつては、この身の恥辱いかばかり。女は賤しき匹夫の娘、辨まへなき事、萬が一あらんも計り難し、内々其方、彼の梛の葉を討つて捨てよ、さすれば勘當赦してくれんと、仰せあるほど心に恥ぢ、もしや其うち横しまの、直りもせんかと日限を、今日か明日かと延すうち、狩場に於て落命ありし祐經さま、人は知らじと思さうが、御存じあつたる左衞門さま。只今勘當赦りたる上は、この由あなたへ物語る。心を入れかへ、今よりして、御本心におなりなされよ、後室樣。

ト引附けて意見の思ひ入れ。梛の葉、こなしあつて

梛葉 そりやお情ない我が夫樣。尤も自ら、まだ手廻りのその砌り、お部屋住みの祐兼さま、妾を捕へてお戯むれ、それを兎やかう云ひ拔けて、一度の御返事仕らず。其うち次第に、この身の立身、奧方死去のその後は、思ひがけなきこの身の幸ひ、冥加にあまる身の出世と、殿を大切御大事と妾は思へど御殿の内、それを拒むは女の習ひ、宇佐美の局が讒言に、祐兼さまと不義なりと、沙汰させしを誠と思され、それゆゑ其方へ今のお頼み。まこと不義あるものならば、まだ三十路に

も至らぬ梛の葉、斯く佛門に入るべきぞ。この世を捨てしが心の潔白。これにて疑ひ晴らしてたも。

小藤　そのお詞に僞はりなくば、この上もなき貞女の鑑。

天日　イヽヤ、それでは貞女にならぬ。佛いぢりは坊主の役目。修羅の迷ひのあの世の有様、助くる心のあるならば、曾我の身内の者あらば、夫の敵と觀念なし、殺害なさば祐經どのゝ、修羅の苦患も免かれんが、佛事供養は、却つて佛の爲にならぬ。さはいへ女儀の事といひ、その働らきは、どうして／＼。

ト焚きつける思ひ入れ。

梛葉　イヤ／＼、たとへ女の身なりとも、夫の未來を助くる一念。いよ／＼それにて佛果に到らば鬼ともなつて曾我の族を、なに安穩に置くべきぞ。幸ひ旅僧の渡せし短刀、赤木作りの切尖に、とゞまる錆は夫の生血、この御最期の白刃を以て、目當は二人が母親滿江、今にぞ思ひ知らさで置かうか。

ト赤木作りを脇挾み、キツと思ひ入れ。小藤太、聞いて

小藤　イヤ／＼、たとへ奈落に沈むとも、佛法修行の功力の外、人を害して供養にならんや。矢張り御

椰葉　身は佛道に歸依なし、主君の菩提、あと懇ろに恨みを晴らしてその後は、この身を捨つるがこの身の願ひ。庵に來りし敵の母親、歸しやつたがなんのマア、夫の心に叶はうか。跡追ひかけて、當の敵を

ト身拵らへして、行かうとする。

小藤　天魔の見入りか、後室樣、その御心を幾重にも

椰葉　いつかな〳〵ひるがへさぬ。母滿江が跡追うて

小藤　イヤ、その儀は

椰葉　夫の佛果は

ト止むるを振り切る。また寄るを天日坊支へて

天日　わしにお主の布施物を

椰葉　おのれ、滿江。

ト時の鐘、思ひ入れあつて、位牌と短刀を持ち、一散に向うへ入る。

小藤　エヽ、流石は匹夫の娘のしるし。この後願ふは主君の菩提、二人の娘が志し、無にさせぬが出家の役目。この金持つて跡の弔ひ、心を附けて、旅僧へ願ひ。

　　ト二包みの金を渡す。天日坊、思ひ入れあつて

天日　とひ弔ひは出家の役目。お頼みなれば致して進ぜう。然らばこれなる祠堂金、高野山にて祠堂の營み。愚僧が手より送つて進ぜう。氣遣はずとも其許には

小藤　往生とぐるは貴僧の引導。介錯たのむ。

天日　心得ました。

　　ト件の金を懷中なし

臨終稱念。覺悟めされい。旅僧が引導。南無阿彌陀佛。

小藤　南無阿彌陀佛。

　　ト腹帶を解かんとする。天日坊、その手を止めて、懷より矢の根を出し

天日　南無阿彌陀佛。

　　ト小藤太の目先へ差出す。キッと見つけて

小藤　ヤ、流儀の矢の根

天日　覺えがあるか。

小藤　ヤ。





ト寄るを、足にて椽より蹴落す。この時、盆棚に忍びし勘太、窺ひ出て

トかゝるを天日坊、見事に投げのけ、立廻りに勘太、天日坊の頭巾を摑み、タヂ〳〵として見事にかへる。この時、天日坊、大百日の鬘にてキッとなる。これにて誂らへの鳴り物。小藤太こなしあつて

勘太　曲者。

小藤　さては旅僧と申せしは

天日　最前われが物語り、聞くと其まゝ心を附けしに、慥かに斯くいふ某が、父上最期はこの矢の根。さすれば覘ふ仇敵は、曾我にもまさるわれなりしに、知らぬ事とて殘念至極。さはさりながらこの身の大望、用金集むる今この時、最前二人の女ばら、曾我にゆかりと見たゆゑに、跡形もなき立山の、あの世の話しに流石は女、亡者の袖が餌になり、尼のその身を苦海の勤め。その金子にて石碑の營み、又は高野へ祠堂金、棚の藥までも騙しこみ、集むる金は企みの用意。それと知らざる小藤太成家、いはゞ汝は予が敵と、知れたる上はこの身の喜び。アラ〳〵、喜ばしやなア。

トきつとなる。

小藤　さては汝は賣僧なりしか。さはさりながら、所持なす矢の根は覺えあり。如何いたして手に入りしぞ。

天日　これぞ形見の矢の根の生血。この後望むは六十餘州、その軍神の血祭に、折も幸ひ眼の小藤太、本望達する時到れり。

小藤　その時至つて某を、敵と覘ふは曾我殿原、その外およそ天が下、敵持つべき小藤太ならず。實名あらん、姓名名乘りしその上にて、敵と申せ。さもないうちは、覺えはないワ。

天日　その詞至極なり。さあらば實名明かしてくれん。先年粟津の一戰に、父にて候ふ朝日將軍義仲公、汝が矢先に深田の落命。矢の根は即ち澤瀉形の工藤の流儀、首級は三郎爲久と、世以てこれを知るところ、汝は勘當詫びの種、工藤の手柄にさせんとて、仕負せしかど鵐の嘴。

小藤　斯程の大事を存せし其方。して、木曾どのを父上とは。

天日　知らずや成家、斯くいふ我れこそ、朝日將軍義仲の一子、箱根の深山に生ひ立ちし、天日坊といひし出家の某こそ、淸水の冠者、源の義高なるワ。

ときつとなつて思ひ入れ。

小藤　さてこそ朝敵義仲の、實の公達、その形相。さりながら、天下を望む不敵の雅。手負ひながら聞きすて置かれぬ一大事。いま成家が

ト切つて行く。立廻りに白刃を天日坊、打ち落す。

仕損じたるか。口惜しい。

ト思ひ入れ。天日坊、キッとなつて

天日　父の御無念、近江なる、粟津の深田の流れ矢も、射かけし主こそ近江の小藤太、巡りあひしも天の與へ。今より出家の姿を引かへ、天日坊が破戒の始め。師の坊殺せしその上に、曾我にゆかりの禪司坊、衆道の戲むれ稚兒ケ淵、證據の品の爲、辰姫殺し、梛の葉煽でゝ滿江殺させ、盆の功德に殺生戒。これぞ出家が破戒のしるし。

小藤　ムウ。さてこそ四海を騷がす逆徒、源家の類葉ながら、その本を食む大毒蟲。さてはいよ〳〵、義高なるか。

天日　ホウ、現世の羈を切つたる汝、閻羅に至る思ひ出に、重ねて我が名をよつく聞け。阿波倶梨迦羅その餘の戰ひ、英名あまねく四海に轟く、朝日將軍木曾義仲の嫡子。身を箱根に隱し、天日坊とその名を呼び、釋尊出世の曉と、經卷に眼を曝せしも、一度忿怒の利劍を引ッさけ、修羅の魔王に誓ひを立て、父の無念を受けつぐ上は、やがて天下を掌中に握らん。我れこそ清水の冠者源の義高なるワ。目近く寄つて、面相拜め

トこの時、勘太心附き、かゝるはずみに天日坊、引拔きになる。小藤太、キッと思ひ入れ。勘太、ホ

ンとかへるを木の頭。

奉れえゝ。

ト小藤太、無念の思ひ入れ。天日坊、見下す。双方引張りよろしく、ひやうし　幕
引附けると禪のツトメにてツナギ。直ぐに後の方より幕を明ける。

本舞臺、以前の狩場跡、塔婆立てたる道具に戻る。雨の音、雷、夕立の體。

ト爰に滿江は、深手を負ひ、梛の葉、赤木作りを拔き、工藤の位牌を咬へ、短刀を振りあげる、畑右衞門、手を負ひ、梛の葉を組みとめんとしてゐる。上の方、高燈籠へ灯をともしあり。時の鐘、雷の音にて、三人、立廻りよろしくあつて

滿江　さては庵主は工藤の連合ひ、梛の葉といふ女子よな。兄弟二人に祐經討たれ、その腹立ちにこの母を、害せん心であつたよな。

畑右　おれも道づれの阿母を、よう此やうに切りつけたな。それも亭主を殺された、恨みがあつてか、梛の葉どの、何にも知らぬおれまでも、なんで切るのぢや、コレ梛の葉。

梛葉　其方に恨みはなけれども、妨げなすゆゑ思はぬ側杖。滿江どのは祐經を、討つたる曾我の二人が

母親、旅僧の教へに夫は修羅道、その苦しみを助くるは、身寄りの其方をあの世へ遣はし、夫の苦患を救はにやならぬ。殊に左衞門祐經どのゝ、これなる位牌で老母の介錯。打つて無念の恨みを晴らさん。思へばく

ト件の位牌にて滿江な、さんくに打ち、キツとなる。

滿江　エヽ、恨めしいその一言。二人の尼にも別れしに、供に連れたるあの者は

ト思ひ入れ。

畑右　氣遣ひさんすな。わしがお前を助けます。サア、梛の葉どの、刃物を寄越せ。

トもぎ取らうとする。梛の葉、疊みかけて切りつけるゆゑ、滿江、タヂくとなつて、撻となる。梛の葉、切つて行くな、畑右衞門、割木を持つて梛の葉へかゝる。此うち雷。三人、立廻りあつて、下座より淸左衞門出て來り、この體を見て、差したる一腰を拔き、畑右衞門を切り倒し、乘りかゝるを見て、梛の葉、その間に滿江なしとめ、兩人、顏見合せ

梛葉　ヤ、見馴れぬ男子が妾を助太刀。して、其方は。

淸左　コレ、見忘れたか、姉のお米、今日出世の工藤の後家、梛の葉といふ噂は聞けど、緣が切れて逢はぬ娘。われが妹のお幸を連れ、夫婦別れも由井ヶ濱、漁師を業の淸左衞門、われが爲には、眞

實の親ぢやわい。

ト云はれ、椰の葉、悄りして

椰葉　ヤヽ、そんなら未だ幼少の、その時別れし父樣かいの。

清左　オヽ、親ぢや〳〵。

椰葉　それにこれまで、なんの便りも

清左　サア、便りをするも、縁の切れたる此方は親、娘が夫は三箇の莊、領知さつしやる大々名、その奥方の父親が、その日暮らしの漁師では、われが恥ぢやと思ふから、これまで便り音つれも

椰葉　そんなら、お前が、わたしが實の

ト駈けよつて、よく〳〵見て

お顔を見れば思ひ出す、別れし時とはお面の、變らせ給へど見覺えの、眦の黒子、違はぬ父さんよう息災で御座ありしぞ。絶えて久しき親子の對面。おなつかしい〳〵、おなつかしうござんしたわいなア。

ト縋つて思ひ入れ。

清左　オヽ、尤もだ〳〵。親子の名乘りはそりや格別、今は其方も、奥方ならぬ尼の身で、曾我の老母

を殺害なし、この事世上に沙汰ある時は、曾我の身寄りの者どもが、二度の仇討、心元ない。

椰葉 仰しやる通りお上より、お咎めうけて恥かしい、死を遂げんより自らは、夫を止めの短刀にて、この場に於て

ト自害せんとするを、清左衛門とめ

清左 これサ、短氣な、死ぬるより、この場を遁がれて姿を變へ、八百年も生きるが常世。殊に夫の石碑の手當も、死んでは跡で誰れあつて、金拵らへる者もなし。おれが思ふは、爰より直ぐに、東の方へ身を隱し、髮を生やして昔傾城、まだ年若い突出し盛り、その相談に極めてしまやれ。

ト勸めこむ。椰の葉、思ひ入れあつて

椰葉 さう仰しやれば惜しからぬ、命の代り、石碑の金子、拵らへるため尼の身を、傾城遊女に身を沈め、譏りを受けるも、御恩を受けし殿樣の、苦患助ける勤めとあらば、笑はゞ笑へ、いかにもこの身を、苦海へ沈めて

清左 先刻に二人のあの尼を、勤めさせんと買つたる親方、江戸吉原の舞鶴屋、逗留なして居るのが幸ひ、先刻にちよつと當つて置いた。おれは爰から一走り。

椰葉 さはさりながら大それた、人を殺めし上からは

清左　ハテ、それを知つたはこの親ばかり、外に知り手の無いうちに、ちつとも早うこの國を……マア
　最前の判人に、逢つて何かの

梛葉　そんなら爰から、お前と共に

清左　支度しやれ。

　ト身拵らへして二人は、切りすてしまゝ、梛の葉は赤木作りを差し、清左衛門、手を引き、向うへかかり、思ひ入れあつて

南無三、人が

　ト小石を取つて高燈籠へ打ちつける。灯、消える。清左衛門、手拭をかむり、梛の葉を連れ、東の花道へかゝる。誂らへの合ひ方、蟲の音、捨て鐘。向うより傳三、半合羽、一本差し、下駄がけ、櫁の束ねたるを持ち、吉原宿問屋といふ小田原提灯、白張りの傘をさし、曾我の塚へ墓參の體にて、出てくる。これを見て二人は、中の間の歩みを通り、揚げ幕へ入る。

傳三　さて、俄な夕立であつた。曾我兄弟の塚といふのは、爰らかしらん。

　ト舞臺へ來り、あちこちと尋ねるはずみ、滿江の死骸に爪づき、恟りして飛びのき、よく／＼見て

爰に女が切られて……しかも年配

ト灯にて見るうち、畑右衛門が呻くゆゑ、また悔りして、よく／＼見て、息あると心得介抱して

コレ、切られた人、氣を慥かに、持たつしやい／＼。

ト介抱する時、落ちてある祐經の位牌を拾ひ、取上げる。畑右衛門、心附きし體。

コレ、氣が附いたか。心を慥かに……コレ、氣が附いたか。

ト呼び生ける。畑右衛門、苦しき思ひ入れにて

畑右　おのれ、梛の葉、人殺し／＼。梛の葉が／＼

トあと云はんとして、次第々々に弱り、苦痛の體。傳三、聞いて、位牌を見て

傳三　供か、相手か、切られた男、梛の葉とばかり云ひ、跡は言舌次第に絶え／＼。捨てゝあつたる位牌には、紋は庵に木瓜を……そんならもしや、工藤の家の梛の葉か。切られた女が、位牌の紋は庵といひ、割符の合うた

ト思はず提灯を取落す。爰にて一つ鉦の頭を打つ。傳三、悔りする。畑右衛門、バツタリと落入る。

これを木の頭。傳三、思ひ入れあつて

ハテ、氣の毒なものだ。

トこれをキザミ、三重よろしく、伏せ鉦の音交り、ひやうし

幕

第一番目 大詰

田中舞鶴屋寮の場
吉原大門口の場
屋根仕合ひの場

役名——舞鶴屋白藤太夫實ハ梛の葉。同新造、朝顔實ハ大磯の虎。同、楓實ハ化粧坂少將。同、遣り手、おくろ實ハ榊。舞鶴屋女房、お氏。劍澤彈正左衞門祐衡。荒井の藤太。太鼓持ち、萬七。同、此五郎。同、仙八。同、專次。同、茂十。同、作六。同、長三。判人、勘吉。女中、お臭。同、お辰。大磯屋小の八。舞鶴屋傳三實ハ京の次郎祐俊。

本舞臺、三間の間、正面、風雅なる亭屋體、軒口、大和葺き、伊豫簾をかけ、眞中、地袋、違ひ棚、これに重ね硯の箱、蒔繪の料紙箱、本などよろしく飾りつけ、上の方、床の間、掛け物、花瓶、障子張りの障子。上の柱、見切り、梧桐。此あたりよりすべて舞臺前、秋草の盛り。下の方、綺麗なる枝折り戸、一體この道具、淺草田中舞鶴屋寮のかゝり。鳴り物、車曳のサラシにて幕明く

ト爰に此五郎、浴衣の上へ金冠白衣を引ッかけ、時平の拵らへ。仙八、同じく浴衣の形にて、櫻丸の鬘をかけ、一體に俄狂言、惣ざらひの體にて、兩人、摑み合つてゐると、萬七の松王、專次の梅王、

その外、茂十、伴六、長三、白丁の形にて、ワヤ〳〵云つて留めてゐる。

皆々 これサ、マア、靜かにするがよい〳〵。

仙八 否だ〳〵、コレ、金箔の附いたおれの櫻丸を、櫻丸ではない、梅櫻丸だと吐かしやアがつた。

此五 云つたがどうした。コレ、うぬも父、時平は時平だが、芥子人形の時平だと云やアがつたな。

萬七 エヽ、なんの事たな。芥子人形と云はうが、廿日鼠と云はうが、打ツちやつて置くがいゝ。カウ、仙公も、梅櫻丸と云はれといつて、野暮を云はずといゝぢやアないか。

仙八 野暮を云やアどうするのだ。

萬七 なんだ、てめえ、強勢に熱くなるな。

仙八 熱くならうが、涼しくならうが、うぬらが知つた事ではない。

萬七 ナニ、うぬとは、おれが事か。

茂十 これサ、どうしたものだな。惣淩ひになつて、そんなにカタピシされては、側が難儀するわな。

長三 サア〳〵、仲を直して、もう一遍淩ひ直すがよい。

伴六 サア〳〵、手を打たう〳〵。

此五 否だ〳〵。濟まない〳〵。あの野郎め、金冠白衣でゐるおれを、よく足蹴にしやアがつた。

仙八　オヽ、踏み倒したがどうしたのだえ。

作六　サア〳〵、摑み合ふとも死合ふとも、勝手にしやァがれ〳〵。

皆々　これサ、どうたものだな〳〵。

三人　否だ〳〵、濟まないぞ〳〵。

ト立ちかゝる。皆々とめる。流行り唄になり、向うよりお民、女房の拵らへ。藤太、羽織大小、縲りさげにて、跡よりお辰、お夏、吉原藝者の拵らへ。小の八、茶屋の亭主。勘吉、判人にて附き出て、花道にて舞臺の樣子を見て、お民と勘吉、中へ入り

たみ　これはしたり、お客さんもござんしたに、どうしたものでござんす。マア〳〵、靜かにしやんせ靜かにしやんせ。

萬七　モシ、おかみさん。この田中の寮をお借り申して、俄の淩ひを始めると、あの仙八が、とんだ野暮を云ひ出しやして

仙八　カウ〳〵、おれが何を野暮を云つたのだえ。

勘吉　これサ〳〵、お前方、どうしたものだ。內證のおかみさんが、客人を連れさしつて、惣淩ひを見物にござつたに、そんなに交ぜツ返しがあつては、お慰みにならない。こりやマア一體、どうい

ふ間違ひでござりやす。

此五　コレ、判人の勘吉、聞いて下さい。なんぼ俄狂言だといつて、あの仙八が、眞面目に櫻丸をしてくれずともの事だ。

仙八　なぜ、おれが櫻丸をすればどうする。

たみ　これはしたり、こなさん達も、素人かなんぞのやうに、爰へ客人も來てお出でなさんすに、御挨拶もせず、其やうに聲高に、モシ、野暮もいゝ加減にしやしやんせ。マア／＼、なんであらうとこの喧嘩は、わたしに預けるがよいぞえ。

藤太　コレ／＼、おぬし達、何か知らぬが、舞鶴屋の内儀もあのやうに云ふ事ゆゑ、互ひに料簡いたすがよいぞえ。

小ひ　サア／＼、旦那もあのやうに仰しやる事、殊に、お前方にこの寮を貸して、惣浚ひをさせる舞鶴屋の旦那へ、聞えてもドツとしない事だ。ナア、勘吉。

勘吉　さうサ、なんでもこりやア、何にも云はずに、あのおかみさんと、折角挨拶に入らしつた旦那に預けて

藤太　サア／＼、仲直りをするがよいぞえ／＼、

萬七　お前さん方に、其やうに云はれて見れば、あんまり野暮らしいやうで、面目もござりやせん。

仙八　アヽ、埓もない。今さら面でもかぶりたうござります。

藤太　コレ〳〵、てめえがかぶる面は、ひよつとこか潮吹か。

仙八　また旦那が悪口を。ハヽヽヽ

勘吉　サア、その笑つた所で、一つ〆めやせう。

萬七　それがよい〳〵。

皆々　ヨイ〳〵〳〵。

ト皆々手を打つ。

なつ　モシ〳〵、仲直りが濟んだなら、早く惣浚ひを始めなさんせ。

たつ　ほんに、早く仙八さんの櫻丸が見たいと

仙八　ソリヤ、どんなものだ。おれが櫻丸を見て、お前方、女房子のある所へ、驅けこんで來まいよ。

萬七　こりやァ大方、驅けこんで行くであらう。モシ、旦那そんなら惣浚ひを、御見物なされやすか。

此五　こいつは茶番でやらずばなるまい。

たみ　サア〳〵、お前方の惣浚ひを、見物しようと云うてござんした藤太さま。

小の　サア／＼、始めたり／＼。

皆々　そんなら始めやせうか。

藤太　イヤ／＼、措け／＼。身共、其やうな事、見物には參らん。コリヤ、大磯屋の亭主、舞鶴屋の内儀もよく聞きやれ。身共と一座で參る、豆州大盡の相方は、おいらんの白藤。この藤太は新造の朝顏に、首ッ丈の心中見せても、何か氣に入らぬやら、毎夜々々ひもじい思ひをさせるのがもどかしさに、あの楓めと見立てがへにしたところが、これも矢ッ張り伊達道具、振つて／＼振りちらすが、こりやァ大方、内儀、こなたの云ひつけで、身共を振らすのであらうがな。

たみ　これは又、迷惑な事。朝夕、箸の上げ下ろしにも、お客大事に勤めいと云ひ聞かしまするは、そりやどこの内證でも同じ事。客人を振れと云ひつける遊女屋の女房が、どこの國にあるものでござりますぞいなァ。

藤太　イヤ／＼、さうではあるまい。外の客は兎も角も、この藤太をば、振れと云ひつけるに違ひない

勘吉　モシ／＼、旦那、それはあなたの、邪推と申すものでござります。

小の　左やうサ、あなたに限つて振つてもよいと、云ひつける譯がござりませぬ。

なつ　モシ、舞鶴屋のおかみさんが、なんのつきに其やうな野暮を

たつ　そりやみんな、お前さんの廻り氣といふものでござんすわいなア。

萬七　モシ〱、旦那、それには又私しどもが、樹の取りやうで、どうにもなりませう。

此五　マア、御機嫌直しに、この廓の秋草を御覽じながら

皆々　リツサリと

藤太　否だ〱、コレ、內證で云ひつけぬものが、なんで又二人ながら、あの新造どもが身共を振る。但しこの荒井の藤太は、のつぺらぼうか、德利子か、片輪者か。

皆々　イエ〱、どう致しまして。

藤太　ソレ見をれ、十目の見るところ、十指の指さすところ、おてまへらが目にも、隨分美男と見ゆるであらうな。

勘吉　イヤモウ、業平そこのけ。

萬七　光源氏も叶ひますまい。

藤太　イヤ、それ程でもないが、隨分ともに、百人並にも勝れて男もよい上に、誰れあらう、御所の五郎丸の附け人で、金滿な身共を振らう譯がない。それぢやによつて、あの女房の

たみ　モシ〱、其やうに思し召してお出でなされますからは、私しが云ひつけと思ひなさんすも、無

理ではござんせぬが、モシ、あの子達の判人の、勘吉どのも爰に居てゞござんすが、あなたに限らず、どの客人でも、振つてなりませぬゆゑ、仕置の爲にいつぞやから、新造に下ろして置きまするが、それでさへ見かねて、この竊へ連れて來て、とつくりと意見するというて、今朝から爰へ來てゞござんすが、ほんに勘吉どの、二人ながら、歷としたおいらんで、仲の町を張られる器量を持ちながら、どうした事やら、あの我まゝには、わたしもホッとするわいな。

藤太　コレ〳〵、なんと申す、そんならあの朝顏と楓が、當分參つてゐると申すのか。よし〳〵、然らば、否でも應でも、今日は身共が、手に入れねばおかぬ。それとも心に從はぬと、、その返報は、どこへ持つて參らうも知れぬ。どいつも、こいつも、さう思つてゐろ。

ト思ひ入れ。この時、奥にて

朝楓　否ぢや〳〵、否ぢやわいなア。

ト吉原雀の唄になり、朝顏、新造の拵らへ、垣に朝顏の振り袖。楓、紅葉に鹿の子の振り袖、同じく新造にて、遣り手のおくろとせり合ひながら出て來り、おくろ、二人を捕へて

くろ　コレノ〵、お前方は、あれほど割ッつ口說いて云うて聞かせても、聞分けのない。そんならどうでも、客人を取る事は、否でござんすか。

朝顏　アイ、そりや座敷ばかりはどうなりと、お前の云ふ通りに勤めやうが、客人と寢る事は否でござんす。

楓　コレ、おくろどん、床の內の事は、振らうと振るまいと、わたしらが胸にある事。捨てゝ置きなさんせ。遣り手の指圖は受けぬわいなア。

くろ　イヤ、呆れたものぢや。幸ひ爰に內證のおかみさんも、判人の勘吉どのも聞いてござんすが、コレ、其やうに又客人が否なら、なぜ身を賣つて勤めにござんした。イヤサ、大磯や化粧坂の、宿場とは違ひます。花のお江戸のこの吉原、新造衆にそんな我まゝをさせては、二階を預かるこの遣り手が、多くの女郎衆のしめしがなりませぬ。サア、客人と寢る事が、いよ／＼否か。性根を据ゑて、返事をしやしやんせ。品によつては遣り手の役、どのやうな折檻もせにやならぬ。サアなんとでござんす。エヽ、どうするのぢやぞいなア。

ト喚きちらす。お民、こなしあつて

たみ　おぬしが其やうに云やるも、遣り手の役ぢやに尤もぢやが、何をいうても、まだ廓馴れぬ奉公人だん／＼と吉原の風が染みたなら、精出してお客を勤めるやうにもならうほどに、マア、氣を長う、何なと合點のゆくやうに

勘吉　イエ〳〵〵、おかみさん、そりやァあんまり結構過ぎて、わしが判をついた奉公人に、そんな體裁があつては、聞捨てにはなりませぬ。コレ、お前方も、場所こそ變れ、一日勤めをした身の上ぢやァないか。それに又、なんでこの吉原へ來ては、客人を取る事がならないのだ。サア、それを聞きやせうね。

朝顔　内證のおかみさんも、聞いてゐやしやんすその前で、お前に其やうに云はれるのが、小刀針で身を裂かれるより辛うござんすが、云ふに云はれぬ譯あつて、二度の勤めのわたしら二人。

楓　傾城遊女に身を賣りながら、夜毎の客に帶解かず、氣まゝ勤め一ぱいを、憎い奴ぢやと叱つても下さんせず、美しう云はしやんすほど、猶々二人が身にとつては、マアどのやうに辛からう。

朝顔　どうぞこの上のお情には、外の女郎の見せしめに、朝晩の水仕の業など、せめて手傳はせて下さんせ。それをせめてのお仕置と

兩人　モシ、堪忍なされて下さんせいなァ。

ト思ひ入れ。お民、こなしあつて

たみ　二人が二人其やうに、詞を揃へて云ふからは、深い樣子が無けりや叶はぬ。その樣子も、大概それと……コレ、朝顔、楓も其やうに、心遣ひせぬがよい。緣なればこそ姉妹二人、抱へたから

は子供同然。

くろ　モシ〳〵、おかみさん、お前さんが其やうに、結構人ぢやによつて、遣り手のわたしが云ふ事も

勘吉　聞分けなけりやァ、判人のこの勘吉が、仕様がござりやす。

ト勘吉、兩人の側へ來て

サア、二人ながら、ちよつと逢ひやせう。エヽ、うぢ〳〵せずと、此方へ來さつしやい。

ト兩人を引ッ立てにかゝる。

藤太　ヤイ〳〵、勘吉とやら、わりや、その二人をどうするのぢや。この藤太が相方に、指でもつけると免さぬぞ……コリヤ〳〵〳〵、朝顔も楓も、身が附いてゐるからは、おいらが手籠めにはさせぬほどに、落ちついてゐやれ。成る程、嫌な客なら振るがよい。決して外の客に、帯紐解くはいらぬ事。身共が心にさへ從へば、身まゝに勤めても大事ない。また、當時鬼神と呼ばれたる、御所の五郎丸どのゝ附き人、この荒井の藤太などが云ふ事を、背く奴はほんの身知らず よもや二人も本心本性、コリヤ、身共が詞を背くのではあるまい。左やうか〳〵。

楓　アイ、その鬼神と呼ばれる、五郎丸さまのお附き人だけ、猶さら好かぬわいなァ。

藤太　ナニ、五郎丸さまのお附き人だけ好かぬと。そりや又なぜ。

楓　サ、いはゞ敵の……サ、堅いお屋敷の客人にも、好いたもあれば好かぬのも　あるが中にも譬への節、花は三吉野、人は武士、わたしら風情に振られても、猶懲りずまの藤太さま、たとへお前が九十九夜、通うて心中見せたとて、なんの心に從はう。ほんに、五郎丸さまの附き人と、聞く度々に口惜しう、イヤサ、顏見る度に、馬鹿らしう見ゆるわいなア。

藤太　此奴が〱、どうがなして手に入れようと思へばこそ、嚇しつ騙しつ口說くのに、武士を捕へて嘲弄なす。もう料簡が、と云ふ所だが、おのれがやうな奴には構はぬ。コレ、朝顏、其方は姉だけ勘辨もあらう。コリヤ、身共が心にさへ從へば、なんなりと望み次第。

朝顏　イエ〱、わたしも妹の緣につれ、どうした事やら、五郎丸さまの御家來は、とんと嫌ひでござんす。アイ、否でござんす。

藤太　イヤ、此奴が〱、武士を捕へて嘲弄なす、もう料簡が、と云ふ所だが、あのやうな野暮にはもう構はぬ。コレ、楓、どうして見ても其方がよい。コレ、身共が心に從ふ氣はないか。どうぢやどうぢや。

楓　わたしや、お前の顏見るも、否ぢやわいなア。

藤太　うぬ、もう料簡が、と云ふ所を、グッと氣を變へて、コリヤ〱、朝顏、身共が心に

朝顏 エヽ知らぬわいなア。

藤太 知らずば楓、どうぢや〳〵。

楓 エヽ、好かぬわいなア。

藤太 好かずば朝顏、イヤ、楓にしようか。

ト兩人を押へる。兩人、その手を拂ひのけ

兩人 エヽ、しつこい。

トつんとこなし。藤太、思ひ入れあつて

藤太 そんならどうでも、身が心には從はぬのぢやな。もう斯うなつては武士の意地、否と云はうが、應と云はうが、帶紐解いて從はす。サア、二人とも奥へ來をらう。

ト兩人の襟髪を取つて引立てる。その手を兩人、キツと締める。

アヽ、女に似合はぬ手練の手の內。アイタヽヽヽヽ。

ト兩人、キツとこなしあつて

朝顏 賤しい勤めの身ながらも、親はよしある武士の果。女子のいらぬ事ながら、ちつとやそつと手の內に、覺えた業もござんすからは

楓　たとへ手籠めにあふとても、嫌な客ならどこまでも、振つて〳〵振り通し

朝顏　まだその上にも、惡冗談しやしやんすと

楓　コレ、此やうに

ト藤太、振りほどいてかゝるを、楓、ちよつと柔術の立廻りに藤太を投げて

投げるわいなア。

ト思ひ入れ。藤太、顏をしかめ、身の骨痛んで、口のきかれぬこなし。

皆々　ほんに、呆れた女郎衆もあるものだ。

くろ　コレ〳〵、勘吉どの、あのやうに客人に、慮外する新造衆。こりやモウ、折檻せにやならぬぞえ

勘吉　あんまり呆れて物が云はれない。その根性を叩き直して

くろ　どうするか見やしやんせ。

ト勘吉おくろ、楓にかゝるを

楓　ホヽヽヽヽ、お前方も藤太さんの、相伴がしたうござんすか。なんぼしがない女郎でも、お前方の自由には、ならぬわいなア。

ト兩人を投げつける。勘吉、おくろ起きあがつて

勘吉　アヽ、痛い〳〵。コレ、長い頭が、割れたぞ〳〵。

皆々　ほんに、大さうな響きだ〳〵。

萬七　コレ、貴樣の頭が割れたら、燒接ぎにするがいゝ。

くろ　なんの事だな。こなさん達は、人の氣も知らないで、エヽ〳〵、どうしてくれう。新造子供の分際で、遣り手を捕へてひどい目に。エヽ、腹の立つ。いつその事に

ト　そこにある駒下駄を取つて、ぶつてかゝるを、朝顔とめる。楓、立廻つて、拂ひのけるはずみに、この駒下駄飛んで、正面の簾の内へ入る。

小の　モシ〳〵、慥か今の駒下駄が、あの客人のゐる座敷へ

皆々　飛びこみましたぞえ。

ト　皆々思ひ入れ。簾のうちにて

彈正　心の浮かぬ酒宴の只中、折も折とて珍味の肴。こりや何者が仕業ぢや。禿ども、簾を揚げろ。

禿　アイヽ。

ト　早めたる唄になり、正面の伊豫簾を揚げる。上の方に白藤、誂らへの白の裲襠、傾城の姿にて、蒔繪の文庫によりかゝり、本を見てゐる。下の方に彈正、鉢かつら、羽織、大小にて、今の駒下駄の入つ

たる杯を持ち、禿二人、酌をしてゐる見得。皆々これを見て、惘りして

たみや、豆州さんの杯へ

なつ あの駒下駄が、どうしてマア

勘吉 とんだ話！だつこの納まりは

此五 こりやァ直ぐ素面には

皆々 おいらぢやないよ／＼。

ト立騒ぐ。白藤、こなしあつて

白藤 これはしたり、騒々しい、靜かにしやしやんせ。女子の履ける足駄にて、作れる笛には秋の鹿、必らず寄るとの諺に

彈正 今のこの身にくらべこし、夜毎日毎に通ひ來て、夫どふ鹿の聲音まで、やつれる程に身をやつすは、武士のあるまい事ながら、成る程、戀は曲者だなア。

藤太 でも貴殿にはあやかり者、思ひ思つた白藤どのを、たうとう廓で手に入れて、これなる庭の秋草を、見ながら二人水入らず、献いつ献されつ氣まゝ酒。

彈正 イヤ／＼、荒井氏、其やうに煽てゝもらふまい。下地からこの梛の葉に、イヤこの白藤に打込ん

で、附けつ廻しつ口説けども、物堅い屋敷風に行く末知れぬ人の身の上、嫌ホの流れの身、これ幸ひと手を取れど、未だに雪の肌をば、見せぬ白藤、偏屈者、もうこの上は武士の意地、近々のうち身請けして、否でも應でも抱いて寢る。

白藤　すりや、いよ〳〵わたしを身請けして

彈正　身共が閨の花と眺める。

白藤　エ、アノ、お前が

彈正　なんと、侍ひの惚れ意地は、また格別なものであらうがな。

藤太　ハヽア、それで解つた木履の狂言、貴殿の口說きがうるさいゆゑ、新造どもに云ひつけて、恥を與へたその上で、廓の通路をやめさせる、その計略に違ひはあるまい。

彈正　成る程、左樣な事もないとは云はれぬ。いよ〳〵白藤、その心底なら、身共も武士の意氣張りつく。下世話に申す厄病神、この杯の敵を討たにやア濟まされない。

白藤　ホヽヽ、こりやをかしいその廻り氣。よしどれほど客人が嫌であらうと、なんのマア、新造衆と馴れ合つて、お前の足元見るやうな、そんな卑怯な後暗い、女郎ではござんせぬ。否なら否で、濟ましてしまふわいなア。

藤太　否なら否で濟ましても、泥まぶれな女郎の履物、投げこんだ杯ばかりは、豆州大盡、並大抵で濟ましたら、貴殿のお顔が、立つまい〳〵。

彈正　立つる仕樣は、コレ白藤、おぬしも今では太夫職、廓の意氣張り達引に、この杯の納まりが、見たいな〳〵。

白藤　アイ、そりや後とも云はず、たつた今、わたしが爰で……コレ、遣り手衆、どういふ譯で、あの駒下駄を豆州さんの杯へくろ。そりや爰にゐる新造衆の業。それといふのもモシおいらん、お前も仕つけが惡うござんす。座敷の新造衆のふざけるのは、お前の押しが利かぬゆゑ。こりや、きつと折檻せずばなりますまいぞえ。

藤太　成る程、こりやア遣り手が云ふ通り、折檻も折檻、きつと仕置をせねばなるまい。

彈正　身共の顏へ泥を塗る、木履の肴の納まりは、白藤、おぬしが胸にある事。魚心ありや水に流して濟ましてしまふ。又おぬしが方にも、水心の無い時には、玉散るばかりの太刀の魚、白刃の肴も取りそへて、舞鶴屋夫婦の者へも、品によつては献さずばなるまい。

トこなし。お民、思ひ入れあつて

たみ　そりや、抱へた子供の誤まりは、事によつては內證で、引受けまする商賣冥利。隨分ともにお杯。

藤太　これサ、すりや劍の舞も合點で

たみ　アイ、お獻しなされて下さりませ。

彈正　そんなら獻すぞよ。

ト刀を取つて立ちあがる。白藤とめて

白藤　アヽコレ、待たしやんせ。その杯の納まりは、差詰め獻さねばならぬ人がござんす。わたしに任せて

藤太　そんなら見事、その杯の納まりを

彈正　白藤、おぬしが附けるなら

藤太　器を變へて、一獻飲んで

彈正　身共は爰で

兩人　見物いたさう。

ト彈正、藤太、外の杯にて酒を飲む。白藤、駒下駄の入りし杯を取つて立ちあがり

白藤　モシ、朝顔さん、楓さん、二人ながら改めて、この白藤が、ちよつと爰で

朝顔　様子は慥かに杯の、その納まりは知らねども、姉女郎の白藤さんが

楓　この場で逢はうと云はしやんすほどに、怯めず臆せず、朝顔さん

朝顔　そんなら爰で

二人　逢はうかいなア。

ト掛り鉦入りの鳴り物になり、皆々よろしくこなし。白藤、舞臺へ下りて來り、三人よろしく

白藤　水の流れと人の身は、變る習ひといひながら、云ふに云はれぬ譯あつて、恥もいとはずこの廓の苦海に沈むわたしが身の上。知らず計らずお前方、同じ櫺子の月花も、共に眺める傍輩どし。

朝顔　わたしらとても譯あつて、二度の勤めにこの廓へ、流る寄るべの姉妹二人。

楓　不思議な緣は厚原の、庵でちよつと逢うたるお前。

白藤　こりやお前方、其やうに、何にも知らず、……サア、何にも知らず、この白藤を、姉と頼ましやんしたか

朝顔　アイ、世話になるのを姉といひ、憂を語るを妹と、名に呼び交す習ひとやら。

楓　姉妹二人はお前の妹。姉と頼むは白藤さん

ト白藤、こなしあつて

白藤　そんなら、いよ／＼お前方……その心なら改めて、この白藤が杯さゝう。これへ來やしやんせ。

兩人　エ。

白藤　姉妹ともに、ズッと來や。

兩人　アイ。

ト誂らへの鳴り物になり、兩人、こなしあつて、白藤が側へ行き、思ひ入れあつて

朝顔　わたしら二人へ改めて、杯さゝうと云はしやんすは、云はねどそれと三つ歯の駒下駄、思はぬ麁相はこの身の科。

楓　イエ、姉さんより日頃から、お轉婆者のこの楓、麁相は有うち白藤さん、その杯は妹のわたしが戴きやんせう／＼。

白藤　イヽヤ、姉だけ朝顔へ、順に廻してさす杯は、カウ／＼／＼。

ト杯の中にある以前の駒下駄を取つて、朝顔を打つ、皆々思ひ入れ。楓、ツカ／＼と寄つて白藤を突きまはし、朝顔を圍つて

楓　こりや聞分けない白藤さん、なぜにわたしを打たしやんせぬ。

白藤　望みとあれば、其方も共に……カウ〳〵。

ト楓を打つ。楓、その手をキッと捕へて

楓　わたしは元より打たるゝ覺悟、姉さんまでを打たしやんしたは、恨みでござんす。白藤どの、その仕返しは、わたしがキッと。

トきつとなるを朝顔、ヂッと留めて

朝顔　コレ、其方の麁相は、わたしが麁相、必らず短氣を……姉の云ふ事きかぬかいなう。

ト思ひ入れ。楓、ヂッとこなし。お民、見かねて

たみ　コレ白藤、いかに姉女郎の高下ぢやとて

なつ　日頃に似合はぬおいらんの

たつ　あまりと云へば、その折檻。

ト寄るを藤太、刀の鞘にてお民を隔てゝ

藤太　イヽヤ寄るまい。こりや斯うなうては叶はぬ所。身共を振つたその報ひが、忽ちめぐつて木履の返報。ハテ、よい態だ。

くろ　ソレ見た事か日頃から、遣り手のわしが云ふ事を、聞かぬ氣まゝの新造衆、滿座の中で駒下駄を

頭へ履いたは、ハテ、よい氣味な」

勘吉 イヤ、この位な事は有うちサ。

皆々 ハテサテ氣の毒、笑止な事だ」

彈正 元より不和な一家の端に、かゝりや繋がる二人の新造、坊主が憎けりや袈裟とやら、その縁の納まりは、まだ／＼手緩い。思ひ入れぶつてぶち据ゑろ。

ト楓、無念のこなしあつて

楓 いかに麁相があるとても、品もあらうに駒下駄にて、わたしばかりか姉さんまで、ようマアお前は

白藤 その恨みよりまだ外に、わたしへ恨みは厚原の、

兩人 エヽ、なんとえ。

白藤 イヤサ、厚かましい新造衆、自體その身の我まゝから、氣に働らきの無い癖に、夜毎の客を振り通し、それで女郎の勤めが濟むか。揚句の果にはこの麁相、あの通り客人の、腹立たんすも無理ではない。妹女郎の誤まりは、姉のわたしが紀さにやならぬ。但し、それとも心を改め、あの藤太さんと寢やしやんすか」

楓　ナニ穢らはしい。假にも敵の

白藤　これはしたり、なんであらうとこの廓へ、苦海に沈む上からは、嫌な客にも帶解いて、一つ寢するが女郎の役、その約束の奉公で、勤めを嫌うて我まゝ氣まゝ、侍ひならば地行の盜賊、祿盜人。

朝顔　たとへ盜人と云はれうとも

楓　何しにこの身を

白藤　穢さぬからは、いよ／＼盜人。コレ、この新造衆は、盜人でござんす。盜人ぢや／＼。サ、斯う云はれるが口惜しくば、藤太さんと寢やしやんすか。

兩人　サア、それは。

白藤　但し盜人にならしやんすか。

兩人　サア、それは

白藤　寢やしやんすか。

兩人　サア

三人　サア／＼／＼

白藤　妹女郎に盜人があつては、この二階の外聞に、かゝりや繫がるわたしが恥、その根性をため直

す、仕置の仕様は……カウ〳〵〳〵。

ト又以前の駒下駄にて兩人を打ちすゑる。兩人、こなしあつて

朝顔　身の顔相より事起り、もし内證の難儀にもと、チツと堪へてゐるものを。

楓　卑怯未練に二度三度、現在穢れし履物にて、わたしら二人を、滿座の中で

白藤　ぶつたがどうした。叩いたが、誤まりか。

楓　こりやモウどうも

トきつとなる

朝顔　コレ……わたしや辛抱するわいなア。

白藤　なんと骨身に、こたへやうがな。

兩人　チエヽ。

ト泣き落す。白藤こなしあつて

白藤　ホヽヽヽ、わたしに此やうに叩かれたのが、口惜しいと思ふなら、いつ何時でも仕返しの、恨みは覺悟の……サ、武士の妻なら覺悟して、この仕返しはせにやならぬ。たとへ賤しい川竹の、流れの身にも廓の達引。女郎の意氣地はわたしより、よう知つてゐるお前方。よもや此まゝ……それ

も甲斐ない心では、矢ッ張りこの白藤を、姉にしやんすか。ほんに笑止な、新造衆ではあるわいなう。

トよろしく思ひ入れ。藤太、おくろ。白藤を見て

藤太　イヤ、きついもの／＼。厄病の神で敵とやら、毎晩々々、二人にかゝつて、咽喉を鳴らしたこの藤太も、これで大きに腹が癒た。イヤ、大出來々々。

くろ　ほんに、これで遣り手の顔が立つ。流石はおいらん大明神樣。

藤太　イヤモウ、恐れかんしん股潜りとは、どうぢやな／＼。

萬七　マア旦那、恐れ入谷の鬼子母神とはどうでござります。

此五　これは生新らしい地口を、いふもんの上下とはどうだ。

小の　イヤ、さうは虎の門の金毘羅。

仙八　これサ、もう堪忍しなの御門跡。

勘吉　イヤ、嘘を築地の善公ではない彦左衛門。

くろ　その彦左衛門なら毎日々々。

萬七　芝居へ通ふに

專次　小長い頭で
茂十　照つても降つても
勘吉　合羽でござれや。
皆々　せつかち〱。

ト皆々踊り出す。

彈正　ヤイ〱、騷々しい。靜かにしろ。コレ、白藤、今おぬしが彼奴等に云ふには、客に帶解かぬ傾城は、盜人ぢやと云うたぞよ。人の七難より我が身の八難と、わりや、なぜ身共に帶解かぬのぢや。
白藤　サ、わたしがお前に帶解かぬは、心に問うて見やしやんせ。
彈正　イヽヤ、心に問ふまでもない。身共は武士の意氣張りづく、是非ともおぬしを身請けして、その時こそは
白藤　金に任せた今の身の上。體ばかりはどうなりと
たみ　櫛笄の斑のまだらは、それと一目に見ゆれども、心のまだらは目に見えぬ。あの白藤が胸の内糺した上で二人が恥は、わたしら夫婦が濯いでやる。必らず短氣を起さずに

なつ　モシ、チッと辛抱しやしやんせえ。
藤太　サア、豆州大盡、これからグッと氣を變へて、今日は八朔、仲の町の雪を見ながら
皆々　大酒と出かけませう。
彈正　イカサマ、それもよからうわえ。白藤、おぬしも共に
小の　私しどもへ入らつしやりませ。
萬七　丁度幸ひ、おいらんに借りた長柄は俄の道具。ちよつと間に合ひ、若い衆と、一役勤める松王丸
ト長柄をさしかける。
此五　提灯持ちは時平の大臣。
ト提灯を持ち　先へ立つ。
仙八　梅と櫻は手明きでござる。
長三　これでは車曳ではなうて
勘吉　廓行きになつたと云ふのか。
小の　そんなら、おいらん。
皆々　サア、お出でなされやし。

ト白藤、思ひ入れあつて

白藤　あの振り袖の物好きは、垣に朝顔、紅葉に鹿、色づく山の楓葉は、この夕暮れに恨みの丈を、サ客に恨みて間夫に待つ。この夕暮れを待つて見よかし。

兩人　エ。

ト二人、顔見合せ

白藤　子供、來や。

ト摺り鉦入りの唄になり、白藤、彈正、藤太、お民、その外皆々入る。あと時の鐘、蟲の音。朝顔、楓、思ひ入れあつて

朝顔　親は由ある侍ひの、娘と生れ來ながらも、どういふ因果か姉妹ながら、一度の流れの憂き勤め。

楓　同じ流れの白藤に、いかに誤まりあればとて、泥にまむれし履物にて、この身ばかりか姉さんまで

朝顔　妹も共に打ち打たれ、身の憂き恥はいとはねど、未來にござんす祐成さん、さぞ腑甲斐ない女子ぢやと、なき我が夫の、下げすましやんすも恥かしい。

楓　こりやモウいつそ。

兩人　潔う。

ト兩人、心々の思ひ入れにて、程よくフツと顔見合せ、こなしあつて

楓　モシ、姉さん、よく〳〵思へば、今おいらんの云はしやんした詞、成る程、無理はござんせぬ。わたしやこれから氣を變へて、客人を取る氣でござんすが、お前は何と思はしやんす。

朝顔　すりや、其方はアノ、ほんまに客人を……サ、わたしもよう思うて見れば、勤め奉公に身を賣りながら、この身の操が立てたいとて、客と寢ぬのも主人へ不忠、祿盜人と云はれたも、さら〳〵無理とは思はぬわいな。

楓　そんならお前もほんまに。その氣に……サ、わたしや、初馴染になつて行かしやんした、松屋の客衆の所へ、迎ひの文やらうと思ふわいなア。

朝顔　わたしも、裏になじんで下さんした、客人の所へやる文を書かしやんすか。そんならわたしも

楓　二人一緒に

朝顔　迎ひの文を

兩人　書かうかいなア。

ト兩人よろしくこなし。これをキッかけに獨吟になり、兩人、短檠を眞中に置き、違ひ棚の重ね硯箱を一重づゝ持ち來り、左右に別れて文を書きかゝる事。この獨吟をかり、向うより傳三、八朔梅の枝を提げ、出て來り、花道よき所へ來る。この時、唄一くさり切れる。傳三、こなしあつて、揚げ幕の方へ向ひ

傳三　ホイ〳〵、忘れた〳〵。オイ〳〵、勘公々々、新庫から帳場へ出して置いた懸け物箱を、女房に斷わつて、持つて來て下ツし。コレ、忘れまいぜ……エヽ、忘れまいと云へば、今日も又、庭道りがぶん流しさうだ。

ト舞臺の方を見る事あつて

アヽ、いゝ風だ。成る程なア、日本堤の蟲の音に、勝來寺の薄紅葉、三の輪あたりの紙砧、玉姫の遲れ水鷄に、髮洗ひ橋の殘る螢、來る道々も惡くはない。どうして見ても、風流はこの邊に止めを刺すわえ……併し、燒場の匂ひには、あやまるなア。

トこなし。また獨吟になり、傳三、門口へ來り、內の樣子をソツと見て、門口に窺ふ。內には兩人、文を書きながら、朝顏は楓に心を附け、楓は朝顏に氣をくばるこなしよろしくあつて、兩人、文を書き終り、楓は朝顏に隱して、硯箱の小柄を紙に卷き、思ひ入れ。これと一ぱいに獨吟切れる。楓、こ

なしなって

楓　南無阿彌陀佛、

ト死なうとするを朝顔、驅けよつて縋り留めて

朝顔　イエノヽ其方は、殺さぬノヽ、コレ、姉のわたしを差おいて、死なうとは胴慾な。大方此やうな事であらうと思うた。いま書いたあの文は、迎ひの文とは僞はりにて、書置であらうがな。コレ其方が死んでは姑御の、滿江さまのお嘆きは、どのやうにあらうと思ふぞいの……イエノヽ、なんぼでも其方は、殺さぬノヽ。

楓　な、姉さん、さう云ふお前が聞えぬわいなア。お前の書いたあの文も、ありや書置でござんせうがな。

朝顔　エヽ、そんならそれを

楓　知らいでならうか。わたしを措いて、お前ばかりが死なうとは、そりや、胴慾ぢやノヽ、胴慾ぢやわいなア。生きてゐるその時は、最前の恥といひ、肌身を穢さぬその時は、今の主人へ不奉公。所詮死なうと思ふなら、なぜ打明けて姉妹一緒に、死んで下さんせぬぞいなア。

朝顔　成る程、わしが誤まつた。其方も、わしも武士の胤、殊に夫は誰れあらう。富士より高き名を揚

けし、曾我兄弟でありながら、いかに菩提の爲とて、二度の勤めの憂き恥は、夫々に先立てて、生き殘つたる罰當り。最前の仕儀といひ、所詮生きてはゐられぬこの身。

楓　モシ、お前がさういふ心なら、二人一緒に潔う

朝顏　未來の夫の跡追うて

楓　死出の山路も

朝顏　三途の川も

楓　姉妹一緒に

朝顏　手に手を取つて

兩人　行かうわいなア。

ト思ひ入れ。この時、窺ひゐたる傳三

傳三　御無用、と云ひたい所だな。

トずつと內へ入る。兩人、恟りして

朝顏　ヤヽ、いつの間にやら

楓　旦那さま。

傳三　おれが窯へおれが來たに、何も其やうに悋りする事はない。コレ、二人とも爰へ來やれ。

兩人　ハイ〳〵。

ト思ひ入れ

傳三　コレサ、用があるから來やれと云ふに。

朝顔　そんならあなたは今爰で、わたしと妹が云うた事を

楓　アノ、殘らず

傳三　聞いたによつて、おぬし達に、云つて聞かせる事がある。サ、下にゐや。ハテ、下にゐやれと云ふに。

ト兩人、こなしあつて下にゐる。これより紙砧の音、誂らへの合ひ方になり

いま女房の話しで聞けば、今日おいらんの白藤に、大勢の人中で、駒下駄でぶたれたといふ事、それから爰へ來て見れば、姉妹ながら生きてはゐられぬ、二人一緒に死なうとは、成る程おぬし達の氣性では、まんざら無理とも云はれないが、コレ、二人ながら、まだ何にも知らないな。

朝顔　二人ながら、何にも知らぬとは、

楓　モシ、旦那樣、そりや何をえ。

傳三　敵を。

兩人　エ、敵を知らぬとわえ。

傳三　敵といふ奴は、何にでもある。コレ、明日の茶花の投入れに、持つて來た八朔梅。この花にさへ敵があるが、知つてゐるか。

朝顔　花の敵と云はしやんすは、嵐は花の

楓　敵なりけり。モシ、風でござんせうわいなア。

傳三　サ、風よ。その敵が、この花の先にゐるが知らないやつよ。

トそこらにある團扇を取つて

コレ、木を割りて見よ花のある家で……この團扇に、風は仕込んで置かないが、それからすると解るて。

ト片手に團扇、片手に梅の枝を持ち、團扇にて梅をあふぐ。梅、ハラ〳〵と散る。

なんと、花の敵の在所は知れやう。イヤ、こいつは花を微塵にしたわえ……サ、丁度このやうなもので、ツイ目の前にゐるその身の敵を、おぬし達は知るまいがな。

朝顔　お心ありげなそのお詞。わたしら二人が敵とは

楓　そりや何の爲の、敵でござんす。

傳三　コレ、姉妹二人が姑と、頼んで行く末孝行に、しようと思やる滿江さまは、人手にかゝつて、お果てなされた。

ト兩人、愕りして

朝顏　エヽ、すりや、滿江さまは、人手にかゝつて………ホヽホイ

楓　そりや何者が殺したのぢや。

兩人　サ、云うて聞かせて下さりませ。

傳三　滿江さまを手にかけたは、工藤の後室、梛の葉さま。

朝顏　すりや、梛の葉どのが姑御を………たとへいづくに忍ぶとも

楓　姑の敵、討たいで置かうか。サヽ、姉さん、ちつとも早く

兩人　さうぢや。

ト兩人、勢ひこんで駈け出さうとするを

傳三　これはしたり、二人ともに、うろたへて、どこへ駈け出すのだ。

朝顏　サア、滿江さまを討つたる梛の葉。

楓　ちつとも早く、行くへを尋ねて

傳三　コレ、おぬし達は、その梛の葉の顔を知つてゐるか。

兩人　サア、それは。

傳三　ソレ見た事か。現在敵の顏も知らず、當途もなしに驅け出して、コレ、狐にでも化かされまいぜ。これサ、そこが目の前にある敵を知るまいとは、ソレ、その事だ。

ト兩人、戾つて來て

朝顏　モシ、滿江さまを討つたる敵が、目の前にあるとは

楓　そりや誰れでござんす。

朝顏　何者でござんす。

傳三　外でもない、おぬし達が姉女郎、おいらんと賴む白藤だ。

朝顏　エ、そんならアノおいらんが、梛の葉どのでござんしたか。さうとは知らず今日が日まで、姉と賴みしあの白藤。

楓　コレ、姉さん、それにて思ひ合すれば、いつぞや夫の菩提の爲、あの厚原の庵にて、一夜を明かせし折からに

朝顔　泊り合せし旅僧の、怪しき話しを聞くよりも、白藤どのゝ面色變り
楓　深くも曾我に恨みを含み、卑怯にも滿江さまを、手にかけた上又ぞろや
朝顔　敵の末と最前も、木履を以ての打ち打擲、恨みは此方にあるものを
楓　返す〴〵も、恨み重なるあの梛の葉。
朝顔　ちつとも早く、敵を討つて
楓　姑御さまの修羅の妄執、晴らさで置かうか。
朝顔　妹、ちつとも早う。

トまた駈け出さうとするを

傳三　これはどうだ　人の話しを半分も、聞かずに又駈け出すのか。マア〳〵、急がずと、おれが云ふ事を、姉妹ともに、トツクリと聞きやれ。

ト思ひ入れ。兩人こなしあつてとまる。これより合ひ方變る。

コレ、中年者でもあの白藤は、おれが内では一枚看板、それをおぬし達に殺されて見ると、人を殺した奉公人も使つてゐられず、見す〳〵杖柱と頼む立派な女郎を、三人棒に振つた上、この傳三も袴を引ッかけて、砂利の上へ出にやアならない。又おぬし達も、以前は侍ひの娘で、女一通

りの事は云ふに及ばず、色氣のない、木刀の持ちやうまでも、覺えこんだ身の上にましろ、今ではこのありんす國へ身を沈めて、元日も大晦日も、オヤ馬鹿らしいで濟まして行かれる、振れ袖新造が敵を討たうとは、三味線彈く和尚樣で、ちつと身分に相應しない。コレ、そんな野暮な心は、流れの里の水にして、これから二人とも客を大事に、勤めに精出して、行く〳〵は仲の町を張る、おいらんになつたところで、あの白藤が顏、見返してやるがいゝ。それが女郎の意氣地といふもの。その時こそはおぬし達が、今日の恥も却つて爲。ソレ、茲がこの七月、追善をした玉菊がよい手本。百年過ぎてもあのやうに、その名朽ちせずうつろはず、廓の者は云ふに及ばず、寄る者も觸る者も、ヤレ玉菊々々と、持囃されるは、元はといへば勤めを精出し、客を大事にした冥加で、仲の町へも太鼓持ちへも、派手な事が出來たによつて、今の世までも全盛、その愛嬌は廓中に溢れてゐるではないか。ぢやによつて、おぬし達も、爰の道理を辨まへてくれゝば、まつ第一家が繁昌、姉妹二人も忽ちおいらん。さうなる時は、三方四方の仕合せ。又こなた衆が、思ふ存分にして見られると、この舞鶴屋は、數年仕來つた商賣を止めにやァならない。ぢやによつて、もう〳〵、フツ〳〵、敵を討たうの死なうのといふ、時代な心は改めて、舞鶴屋の身上の、行きたつやうにしてもらひたい……………とサ、云ひたい所を、これぱつかりは、主が奉公人に手を下け

て、頼んでなりとあの白藤、姑の敵を姉妹に、討たせたいといふ譯は、傳三が爲にも現在母の……

……サ、現在身許を洗つた時、あの白藤と其方衆二人は、仇ある仲と承知の上で、抱へこんだ上からは、折を見合せ、敵討をさせたい心。姉妹心を一致にして、あの梛の葉を討ちおほせ、未來にござる滿江さまの、修羅の御無念、晴らしてあげてはくれまいか。

朝顔　エヽ、嬉しうござんす、さりながら、そのお詞の端々を聞くにつけ、あなたの素性は、もしや噂に聞き及びし

楓　河津さまの御總領にて、御兄弟の兄上の

傳三　京の次郎、ではない京町の女郎だ。今では町人、舞鶴屋傳三も、ともぐ\助太刀して、あの梛の葉を討ちたいが、おれが弟にしてもよい、曾我兄弟の人々は、十八年の艱難を、忍んで大敵祐經を、討つた譽に引きかへて、小指の先でも自由になる、抱への女郎を烏滸がましく、母の敵と名を附けて、討つたと世間の口の端に、笑はれるはいとはねど、傾城遊女に珍らしい、夫の菩提その爲に、二度の勤めに身を沈めた、天晴れ貞女の其方衆に、とてもの事に水入らず、姑の敵を討たせてやつて、未來の曾我の兄弟に、喜ばせたい傳三が寸志。なんと合點が行つたであらう。

トこなし。兩人、思ひ入れあつて

朝顏　エヽ、有り難うござんす。なんとお禮を申してよいやら

楓　姉さん

ト顏見合せ

兩人　エヽ、嬉しうござんす。

ト兩人、傳三へ手を合す。

傳三　なんのその禮。コレ、まんざら他人の仲ではないぞえ。

ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、向うより勘吉、掛け物の箱を抱へ、一散に走り出て來り、内へ入つて

勘吉　サ、モシ旦那、掛け物の箱を持つて來やした。

傳三　オイ、御苦勞。なんだ、貴樣は、強勢に急きこんで來たな。

勘吉　わしが急きこんで來たのは、外ぢやアござりやせん、あの白藤さんを豆州大盡が身請けしようと云ふ。おいらんは不承知。それで大悃着でござりやす。ちよつとお歸りなされやせ。

傳三　いゝサ、打ッちやつて置け。どうか納まるだらう。

勘吉　それでも旦那、お前さん、ちよつとお歸りなすつて、どうか身請けになるやうに、相談を極めておやりなさいやし。さうすると、わしらも大きに浮みやす。

傳三　慾張る男だ。いま行くから、いゝ加減に云つて置け。
勘吉　そんなら早くお歸りなされやせ。どうぞ身請けになればよいな。
ト捨ぜりふにて勘吉、足早に向うへ入る。朝顏、楓、思ひ入れあつて
朝顏　身請けと聞いては、こりやモウ猶豫はならぬぞえ。
楓　廓を出ぬうち、ちつとも早う
傳三　ハテ、急く事はない。たとへ百萬兩金を積んでも、年季證文を握つてゐるはこの傳三、大門の外へは一寸でも、足踏みをさせる事ではない。併し、今宵を過さずに、本望とげる二人の者へ、邪魔をさせようと取寄せた、二幅の對のその掛け物。それにて易々
朝顏　そんなら爰に
ト掛け物箱の蓋を取る。朝顏、思ひ入れあつて一腰を取出し
ヤヽ、こりやコレいつぞや、お預け申せし夫の形見。
ト楓も箱より一腰を出し
楓　夫の形見のこの一腰。
傳三　ゆかりと知らねどこの傳三を、男と見込んで預けた二腰。それは正しく

朝顔　過ぎにし富士の狩場にて、夫十郎祐成どの、敵左衛門祐経に、初太刀を打つたる敵討也。

楓　夫は新身の亂れ燒、のつて開いたこの太刀も、歩みの板まで切り下げて、譽をあげし友切丸。

傳三　それは過ぎたる皐月の富士ケ根、今日は葉月の初めつ方、しかも八朔白重ね。

朝顔　雪の白藤、紅るの

楓　鹿の子まだらに恨みの刃。

傳三　本望とげたら、ソレ

ト掛け物の箱の中より切手を取出し、楓へ投げてやる。楓、取上げ

楓　こりや二枚まで

傳三　狩場にあらぬ

楓　廓の切手。

傳三　次手にこれも

ト同じく箱の中より證文を二本取出し、朝顔へやる。

朝顔　こりや、わたしら二人が

傳三　それも狩場の、繪圖面ならぬ

朝顔　年季證文。
兩人　何から何まで

ト この時、ゴンと五ツの鐘鳴る。

傳三　ありやモウ初夜の
兩人　かねて覺悟は

ト 兩人、目釘をしめし、ツカ〳〵と門口を出さうにするを

傳三　ハテ、まだ早い。急いては化けが現はれる。コレ、間夫に逢ふのは
兩人　エ。

ト 振り返つて、傳三の顏を見る。これを木の頭。

傳三　引け過ぎがよからう。

ト よろしくこなし、この仕組み、早めたる砧、捨て鐘にて、ひやうし

幕

時の鐘のツナギにて引返し。

本舞臺、正面、吉原の大門口、尤も引け過ぎの景色、大門締まり、下の方に潜りの出入り、黒板塀、

忍び返し、誰哉行燈、この道具よろしく、時の鐘、拵めたる俄の鳴り物、淺り拍子にて幕明く。

ト潜りより地廻りの女郎買ひの仕出し、捨ぜりふ、そゝり節にて出入りある。右の鳴り物にて、茶屋の若い者一人、大磯屋傳三といふ仲の町の看板提灯を持ち、彈正、草履取りの中間を連れ、小の八、此五郎、萬七、仙八、附き、出て來り

萬七　小の八さん、お駕籠は入つてゐるかね。

小の　入つてゐる筈だが……オヽイ、大磯屋の三枚並は入つてゐるか。

ト揚げ幕にて

駕舁　ハイ〳〵。

ト駕籠舁き、四つ手を一挺擔ぎ、出て來る。

彈正　サア〳〵、其方達は俄の淩ひで取込んで居らう。歸りやれ〳〵。

此五　モシ、どうで今夜は、夜通しでござります。

仙八　左樣なら旦那、また明晩入らしつて、私しが櫻丸を、御覽じて下されまし。

萬七　その車曳より、どうか荒れ場らしくなつて來たが、こりやァ一夕立なけりやァよいが。

小の　さうサ、どうか降つて來さうになつた。

彈正　コレ、降つて來さうになつて來たと云へば、大磯屋、是非ともあの白藤は、身共が身請け致すによつて、今宵中に舞鶴屋へ、掛合つて置きやれ。身共はこれより屋敷へ歸り、明朝早く、金子を其方の許まで持たせ遣はす。たとへいか程でも苦しうない。きつと掛合ひを附けて置きやれ。

小の　畏まりました。いづれ私しが精一ぱい、働らいて置きませう。

萬七　ヤア、そんなら、いよ〳〵彼のおいらんを、旦那が身請けの段でござりまするか。

此五　それはおめでたい筋でござりますな。そんなら明日は、おいらんの廓の名殘に、みんなが寄つて藝づくしの、大洒落を致しませう。

萬七　藝づくしの大洒落より、貝づくしの年玉はどうだ。

仙八　また無地口の口が明いて來たわえ。

萬七　口が明いて來たと云へば、こりやア、ポチ〳〵落ちて來たぜ。

此五　この男は、よく雨を苦勞にするな。

萬七　雨苦勞（友九郎）といふ鬘師になるつもりだ。

此五　おきやァがれ。

彈正　そんなら大磯屋、身請けの一儀は、其方に任せるぞ。

ト駕籠に乗る、

小の　畏まりました。左様なら旦那。

皆々　明日お目にかゝりませう。

ト矢張り掠めたる渡り拍子にて、駕籠に中間附いて向うへ、皆々は捨ぜりふにて大門の内へ入る。本釣り鐘、時の鐘、次第になり、下座の謠。

〽名殘り小鹿の隱れ里、富士の裾野にからうよ。

ト謠切れる。本雨、ザッと降りくる。カケリになり、向うより楓、白縮緬の振り袖、蝶千鳥を藍にて染め、扱帶、島田を引ッくりかへしにしたる誂らへの鬘、簑を着て、以前の一腰を差し、劍菅笠をかざし、俄の手燭を持ち、一散に走り出てくる。續いて朝顏、對の拵らへにて出て來り、花道にて入れかはつて、ツカ〳〵と本舞臺へ來り、あたりを見廻し、左右へ別れてホッと思ひ入れ。これより琴入り六段の合ひ方。朝顏、こなしあつて

朝顏　秋の夜の、千夜を一夜となせりとも、詞殘りて鷄や鳴く、それは過ぎにし大磯にて、祐成どのに逢ふ夜さの、閨の怨みのかこち言。今宵はそれに引かへて

楓　僅か一時二時も、三千年に只一度、花咲き實る桃よりも、待つ間の程ぞ久しけれ、今宵ぞ思ひや

るせなき、十八年の春秋を、待たれし二人の夫の心。

朝顔　思ひ比べて袖しほる、その五月雨の空ならで、夜もしん〳〵と秋雨に、更けし廓の大門口。

楓　時こそ來れ姑の敵、二人に恥を與へたる、木履の仕返し。あの白藤を、ちつとも早う

ト行きさうにするを

朝顔　サ、氣の急くは尤もぢやが、敵娜の葉、いつもの座敷か但し又、客衆を送つて仲の町か、その使りの知れぬうちは、こりや迂闊には

楓　ぢやというて、いつまで爰に。

朝顔　コレ、必らず急かずと……どうぞ便を、聞きたいものぢやなア。

ト思ひ入れ。よき時分より、お民、蛇の目の傘を持ち、潜りより出て、窺ひゐて

たみ　浪に揺らるゝ沖津船

朝顔　エッ　慥かお聲は

楓　内證の

たみ　アヽコレ、夜は人の名云はぬ事……引け四ツ過ぎての大門口、廓の勝手もろく〳〵に、知らぬ二人の旅人客、見るも氣の毒笑止さに、わたしが引手を……コレ。

ト兩人に囁く。

朝顏　そんなら敵は

楓　仲の町。

たみ　アコレ、しるべの山は

兩人　エ。

たみ　此方ちやわいなア。

ト傘を開く。雨車、時の鐘にて、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、仲の町茶屋のかゝり、二階に障子閉て、内に灯うつる。下家には揚げ簾を揚げ、殘らず戶を締め、尤も戶に大磯屋と紙札を貼り、すべて夜更けの體。薄めたる二挺鼓の合ひ方にて、道具とまる。

ト時の鐘、誂らへの合ひ方に變り、二階の障子を開く。白藤、以前の姿にて、手摺にもたれ、思ひ入れあつて

白藤　ほんに、定めなきは、人の行く末、秋の空、賤しい生れのこの身でさへ、祐經どのに思はれて、

宿の妻と召されしを、去年皐月の末つ方、曾我殿原のその爲に、夫を討たれ、家は退轉。夫の菩提のその爲に、厚原村に庵を結び、行ひ濟ませし折からに、怪しき僧の敎へになづみ、滿江どのを手にかけしも、夫の修羅の妄執を、晴らしたいばつかりに、跡にて思へば淺ましい、因果はめぐる小車の、親の非道や亡き夫の、供養の科に誰れあらう、三箇の莊の大名の、工藤の妻椰の葉が、ためし少なき河竹に、沈まにやならぬ譯となり、この吉原の憂き勤め。同じ流れの妹女郎素性を聞けば虎少將、云はゞ互ひに敵同士。今日田中にて滿座の中、無理の有り丈云ひ立つて、木履で位牌を穢せしも、姉妹二人に氣を持たせ、その仕返しと二人に、討たれて死にたい心の願ひ。さあある時には一家の端、我が手にかけし滿江どのへ一つの云ひ譯、又二つには夫の弟、祐兼どの、附けつ廻しつこの里まで、横しま非道の横戀慕、承引せぬを曲事とて、明日は身請けと聞く悲しさ。たとへ肌身は穢さずとも、未來の夫へ面伏せ。所詮生きてはゐられぬこの身と、さてこそ最前あの體裁。どうぞ二人が白藤を、深う恨んで、今宵のうちに

ト思ひ入れあり

ても儘ならぬ事ぢやなア。

ト思ひ入れ。この時、奥にて

くる　モシ〳〵、おいらん。白藤さん、必らず油斷をなさんすな。

ト此の聲を聞き白藤、手早く障子を締める。バタ〳〵と音して、障子へ血煙かゝる、直ぐに誂らへの鳴り物になり、下家の上の方の戸を切り破り、朝顔、白藤の切り首を引ッさげ、拔き身にて、外へ出る途端、下の方の大戸を押し破り、楓、同じく拔き身にて出て、兩人、白藤が首をきッと見て

朝顔　嬉しや易々姑の仇、梛の葉どのを討ちとるからは、所詮生きてはゐられぬ身の上。

楓　もうこの上は夫に習うて、刀の刃金の續くだけ、切つて〳〵切り死して、祐成さんや時致さんに健氣な奴ぢや、強い奴ぢやと、未來へ行つて褒められたい。

朝顔　わたしも矢ッ張りその心。そんなら名乘りをあげうかえ。

楓　サア〳〵早う、名乘らしやんせ。

ト思ひ入れあつて

朝顔　ヤア〳〵、廓の人々聞かしやんせ。工藤の後室梛の葉御前、今のその名は遊君白藤。姑の敵、この身の仇、虎少將が討取つたり。

楓　我れと思はん人々は、サア出であうて、組みとめなさんせ。

朝顔　勝負なさんせ。

兩人　勝負〳〵。

ト聲々に名乘る。この時下座にて大勢

皆々　ソリヤ、人殺しだ〳〵〳〵〳〵。

トどん〳〵、早拍子木、アリヤ〳〵の聲にて、大勢の若い者、めい〳〵六尺棒を持ち、出て來り、「人殺し〳〵」と二人を取卷く。兩人、無暗に切り立てる。これにて皆々逃げて下座と向うへ入る。アリヤ〳〵の聲にて、以前の鳴り物。下座よりおくろ、大肌脫ぎにて、行燈を提げて、うろたへ出て來り、兩人を見て

くろ　ヤア、人殺しだ。

ト立ちかゝるを兩人、おくろと立廻つて、見事に切り下げる。この時、下座より勘吉、萬七、此五郎仙八、專次、茂十、伴六、長三、窺ひ出て

皆々　人殺し。

トかゝるを兩人、左右へ白刃を構へる。これより誂らへの鳴り物になり、皆々、肌脫ぎのタテあつてトヾ、ごつちやになり、兩人を花道と下座へ引分ける仕組みの立廻り。花道の中程にて

朝顏　コレ妹、必らず側を離れぬやうに

楓　必らず怪我して下さんすな。

ト寄らうとするを、皆々隔てゝ、トゞ朝顔を揚げ幕の方まで押して行き、楓は屋體の際へ押して行く仕組み。

朝顔　妹いなう。

楓　姉さんいなう。

トこの見得よろしく、朝顔は揚げ幕へ立廻りながら入る。楓は向うへ行かうとするを、皆々隔てる。この立廻りよろしく、早舞にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、正面黒板塀、忍び返し、見越しの柳、側に丸桁の井戸。上の方、誰哉行燈。この道具、揚屋町の景色。時の鐘、掠めたるドン／＼、アリヤ／＼の聲にて道具納まる。

ト下座より朝顔、大童になり、刀を杖に出て來り

朝顔　妹いなう。

ト尋ねるこなし。下座より勘吉等窺ひ出て、「やらぬワ」とかゝる。よきキッカケに鳴り物になり、朝顏、六人を相手に烈しき立廻りあつて、トゞ或ひは切りすて、又は追ひこみ、ホッと思ひ入れあつて、

妹やい。少將いなう。

ト刀を杖に呼ぶ。時の鐘になり、下座より藤太、大小、繩襷、尻からげ、甲斐々々しき形に出て來り

藤太　ヤア、人殺しの朝顔め、この場で身共が組みとめて、否でも應でも抱いて寐る。手向ひひろがば刀の錆。性根を据ゑて返答しろ。

朝顔　ホヽヽヽ、願ふ所へ藤太さん、お前も御所家の侍ひなら、ちつと云ひ分あるお方、ならば手柄に朝顔を、サア、組みとめて見やしやんせ。

藤太　さう云やおのれ、生けては置かぬ。打つて捨てるぞ、觀念ひろげ。

朝顔　そんなら見事、アノわたしを

藤太　小癪な事を。

兩人　どつこい。

トこれより鳴り物をかり、兩人立廻りあつて、トゞよき見得になる。この道具廻る。半分頃より雨落ちの所へ三尺ほどの忍び返し附きの黒板塀の頭をセリあげる。

本舞臺、一面のこけら屋根、うしろ黒幕、吉原の天水桶、この屋根の上に楓、大童、拔刀にて、仙八

此九郎その外大勢の若者、捕り物の道具。提灯、縄ひぐハみな持ち、取巻いてゐる。ドレ〳〵、ヤ〳〵の聲にて道具とまる。

ト是より誂らへの鳴り物になり、屋根仕合ひの模樣よろしく、尤も下より二三挺、梯子をかける事。楓、この人數を屋根より切り落し、又は屋根傳ひに追ひ、大ダテあつて、刀を構へ、キッとこなし。

この時、下座にて

たみ　コレ、朝顔さん、心を慥かに。朝顔さん〳〵。

ト呼び生けるこなし。楓、これを聞いて

楓　ヤヽ、すりや姉さんは、手を負うてか。ホヽホイ……もうこの上は、姉妹一緒に。さうぢや。

ト下へ飛ぼうとする。この時、下より、アリヤ〳〵の聲にて、捕り物の道具、提灯を夥しく差出す。楓、これに構はず、飛び下りようとする。この時、後の方より傳三、浴衣をかぶりし形にて窺ひ出て楓が帶際を取つて引き戻す。ちよつと組とめ、五郎丸の見得あつて、兩人、シヤンととまる。これをキツカケに所々に鷄笛して、後の黒幕を切つて落す。夜明けの體。うしろ一體に遠見の廓の屋根、末に秋の富士を描きたる張り物。尤も誂らへなり。

ヤヽ、お前は。

傳三　最早夜明け(ゝ)、阿房烏め。

楓　エ。

傳三　高飛びしやれ。

　　ト突きはなす。

楓　所詮この身は

　　ト思ひ入れ。この時、下より高張り、弓張り、捕り物の道具、夥しく差出し、アリヤ〳〵の聲。傳三、楓なキッと圍ふ。

傳三　コレ。

これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

　　トどん〳〵、カケリ、アリヤ〳〵の聲よろしく、この引張りにて、一番目大詰・幕を引く。

第二番目　序幕

下谷田圃道の場

役名――鬼王新左衞門道心。藝者、小雛實ハ團三郎女房お幸。團三郎妹、十六夜。水茶屋瀧右衞

門。所化、雲念。曾我の家臣、團三郎。

本舞臺、うしろ黒幕、枳木の生垣、卒塔婆交り、石塔、柳の大樹、爰に下谷廣德寺境内と書きし標示杭。正面、小さき板屋の非人小家、流れ灌頂、飾り竹、焚捨ての蚊やり、一つ鉦、かすめて禪のツトメにて幕明く。

ト一つ鉦聞え、この鳴り物にて向うより鬼王、坊主の形、息せきと出て來り、小家のあたりにて、跡先へ思ひ入れあつて

鬼王 なんでも今夜中に買ひとるには、第一、弟とも相談の上で

ト小家の側へ差寄り

コレ、團三、起きてゐるか。留守か／＼。急な用で／＼

ト小聲にて菰垂れへ聲かける。爰にて篳篥の入りし樂の稽古の合ひ方になり、矢張り一つ鉦にて、菰垂れをあげ、團三郎、五十日かつら、非人の形にて出て

團三 アイ／＼、こりやア兄貴ぢやアござらぬか。急な事と云はつしやるは、もしや尋ぬる曉丸の、在所の便りが

鬼王 オヽ、知れた／＼。それゆゑ急に知らせに來た。常々われが云ふには、詮議の爲の非人ゆゑ、必

らず人目のあるうちは、氣を附けて物を云へと、云ひ教へては置くものゝ、今日の用事は、おいら二人が身にかゝつた、曉丸の在所の知れたは、天道樣のお見捨てないところ。數へて見れば去年の夏から、もう一年も上の事。

関三　その尋ねる劍ゆゑ、女房とも別れ〳〵。殊に去年去り狀やつてより、音信不通、その時は懐妊の身の上。もう今頃は、平産が致したであらうが、わしが苦勞を苦に病んで、どこにどうして暮らすやら……もう〳〵、それは格別、じて、その曉丸は、いづ方にござります。

鬼王　サア〳〵、知らぬ事とてアノ前度、鎌倉に居た百足屋金兵衞、今はこの下谷に來て質屋商賣。鎧の事で去年も尋ね、何かの頼み。曉丸も、あの百足屋が方にあつて、賣り物に出すといふて、今日淺草で逢うて、對談はして置いたが、何をいうても、その代金は二百兩。

関三　左樣ならその劍は、アノ百足屋に……よし又金が出來まいが、お前も私しも、此やうな態になつて、尋ねまするはこの劍。何卒首尾よう此方より、差上げますれば、祐信さまの御難儀を救ひ、未來へお出でなされたる、兄弟は勿論、おいとしや滿江さま、草葉の陰にて、これはかりは迷ひの種。

鬼王　サ、それだによつて、急にその金の相談……イヤ、まだ話がある。アノてまへの女房、お幸が親の淸左衞門は、おいらが妹のお小夜が、慥か八つの年、あの親仁めが欲しいと云ふから、何も苦

抜けと、何氣なしに遣つておいたを、屋敷奉公と僞つて、大磯へ賣つて、その金を取る。其上、お小夜を連れて江戸へ駈落ち、その上今では非人になつて、今日、淺草で逢うたわいの。

園三　エ、すりや妹のお小夜めを、遣はしました清左衛門、非人になつて此あたりに。その妹も、幼年の砌りゆゑ、いま逢うたとて、お小夜の顔も、とんと忘れてしまひました。併し、心が悪うても清左衛門は舅の事、その者までが淺ましい、非人の世渡り。劍詮議といふものゝ、わしも當時は非人の身、逢うたとて妹も、よもや見覺えも致しますまい。マア、何よりは曉丸、金の工面を致すうち、少しの間留める賴みを

鬼王　そりやモウ、今日も成たけは賴んだが、もう一遍掛合うて來ざなるまいが、何よりは二百兩、コレ、工面が出來るか。よいか〳〵。

園三　ハテ、この態で二百兩、どうして工面が、と云うてはならぬ。是非々々金は拵らへますると、マア百足屋は一寸延し。其うちには、よい手懸りも出來ませう。マア〳〵、お前は早う、外へ相談せぬやうに、賴んでござりませ〳〵。

鬼王　合點ぢや〳〵。ドリヤ、鹽梅よう云ひくるめて

ト此うち六ツの鐘鳴る。園三郎、思ひ入れ。鬼王もこなしあつて

ア、、もう暮れるか。それでは歸りは眞の闇。コレ、提灯をともしやれ。

閻三　モシ〳〵、此やうな態をして、貸し提灯がありませうか。殊にこの間からの鳥眼、夜に入つては皆目見えませぬ。もう〳〵、日の暮れるのが苦勞になつてなりませぬ。殊に其やうな便りを聞いては、一時も早う、この眼が癒してほしうござります。

鬼王　ア、、まだ鳥眼は癒らぬか。それは難儀。どうぞ早う癒るやうに、日朝さまへ願掛けをするがよい……ドリヤ、一走り行きませうか……併し、歸りが苦勞で

閻三　モシ〳〵、爰に盆の燈籠がござります。これでも持つてござりませ。

ト精靈行燈を出す。鬼王、取つて

鬼王　オ、、時の用には鼻そけと、これさへあれば結構ぢや。これを借りて、ドリヤ、一走り行て來ませう。

ト暮れ六ツの鐘になり、鬼王、燈籠を持つて、スタ〳〵と入る。閻三郎殘り、思ひ入れあつて

閻三　ア、、もう暮れるのか。夜に入ると盲目も同然、殊に俄に二百兩、金拵らへる身分では、日が不自由では一倍氣が急く。ア、コレ、どうぞ早う鳥眼が……今夜あたり、癒つたかも知れぬが

トあちこちと見廻し、空を眺め、いろ〳〵思ひ入れあつて

さてこそ又、今夜も見えぬワ。エヽ、氣の揉めた事ぢや。折惡いこの病、どうぞ早く、癒つてくれぬか〳〵

ト氣の揉める思ひ入れ。向うバタ〳〵になり、お小夜、一散に走り出て來り、團三郎に行きあたる。兩人、恟り飛びのき

小夜　ハイ〳〵、御免なされませ。わたしや人に追はれて參りました。幸ひとお前樣、どうぞ安らへ、隱して置いて下さりませ。お賴み申します〳〵。

ト向うへ心遣ひの思ひ入れ。團三郎、聞いて

團三　エヽ、なんでござりますか、人に追はれてござつたのかえ。賴まつしやる態度、娘の子のやうぢやが、アヽ、こりやてつきりと惡者が、冗談に弄つて見ようと、お前を追うて……其やうな事でござりませう。何を申すも私しは、此お寺の境内の、乞食非人でござります。その上、この間は鳥眼の病で

ト云はんとせしが、思ひ入れあつて

そりや憎い奴でござりますな。

小夜　サア、どうぞ隱して下さりませ〳〵。

團三 そんなら、むさい所なりやが、わしが寐所。非人の小屋へちつとの間、入つてござりませ。コレ、爰でござります〳〵。

ト小家を明けて敎へる。

小夜 アイ〳〵、有り難うござります。そんなら爰へ

ト小家へ差寄つて、揚げ幕にて人聲するゆゑ、お小夜隱るゝ。團三郎、思ひ入れあつて

團三 さぞ蚊が居ませう。ドリヤ、燻しを仕掛けて

ト探りよつて、蚊遣りへ燻しを仕掛ける。禪のツトメ、時の鐘。向うより瀧右衛門、雲念の胸ぐらを取り、所化二人、弓張りを持ち、これをなだめ〳〵、出て來り、花道にて

瀧右 コレ〳〵、お前方も、丁稚子供に渡したと云つて濟むものかな。假にも二百兩といふ金を、なんでもわしは、濟まされぬよ〳〵。

雲念 これサ〳〵、さう云うたというて、一の富の當り札を持つて來たのは、いま云ふ丁稚だ。札と引替へにしたからは、此方に間違ひはないわな。

瀧右 それだといつて、札を買つたはわしだわな。

所化 そんならこなた、札があるか。

瀧右　ハテ、札があれば、何も云ひ草はないが、札を失したからの話しだ。

雲念　ソレ、見さつしやい。失すが惡い。それをおいらが知るものかな。

瀧右　して、その丁稚は、どこの丁稚だ。

雲念　どこの小僧だか知らないが、いま見付けたから、捕まへやうとするうちに、ツイ逃がした。なんでも、その丁稚を捕まへさへすれば解る話しだわな。

瀧右　そんなら早く、捕まへて下さい〳〵。

所化　ハテ、この人は性急な男だ。

　　　トわや〳〵云うて舞臺へ來り

瀧右　コレ〳〵、てまへ、此お寺の堂の非人か。

園三　ハイ、左樣でござります。

雲念　いま爰へ、十五六の丁稚が一人、駈けて來たが、何方へ行つた。

園三　エヽ、丁稚が來たえ。なんだかわしは眼病で

　　　ト云はんとせしが

アヽ、來ました〳〵。その丁稚は、アヽ、どちらへか行きやしたが、なんでマアその子供を、其

やうに追ひかけてお歩きなされます。

瀧右　コレ／＼、非人、聞いてくれろ。今日、一の富が當つて二百兩取つたが、ツイ札を失して、丁稚めがその札を拾うたやら、おれが札で、うま／＼二百兩取つてうせた、その餓鬼を尋ねて歩くのよ。

團三　エヽ、そんならその若衆は、二百兩持つてゐますかえ。

皆々　さうサ。何方へ行つた。教へてくれ／＼。

ト團三郎、思ひ入れあつて

團三　慥かその丁稚は、金杉か……イヤ／＼、入谷の方へ參りました。

其念　アヽ、入谷の方へ行つたか。そんならその道を尋ねませう。

所化　わしらも尋ねてやりませう。

瀧右　イヤモウ、大枚の二百兩を、犬骨折つて鷹とやら、誠に恐れ入谷の……コレ、鬼子母神の方を尋ねよう。

皆々　さうさつしやれ／＼。

ト捨て鐘になり、ワヤ／＼云うて下座へ入る。

團三　入谷の方をお尋ねなされませ。あちらに違ひござりませぬ。此方にはモウ、居りませぬぞえ〳〵

ト心遣ひしながら小家の内より、お小夜の手を取つて、ソロ〳〵と連れ來り

サア〳〵、もう氣遣ひはないぞえ。わしは父、態度が女子のやうぢやゆゑ、娘の子と思うたら、お前は丁稚どのさうな。

トあちこちを探り見て、頭を撫で、

小夜　アイ〳〵、こりや有り難うござります。左様なら、此方の方へ行たならば

アヽ、成る程、若衆の子ぢや〳〵。わしは父、娘の子ぢやと思ひました。

團三　それ〳〵、その態度が矢ツ張り娘ぢや。

小夜　アイ、有り難うござりまする。わたしやこの道を

ト花道の方へ行かうとする。團三郎、これを引留め

團三　アヽ、コレ〳〵。お前、行くはよいが、今の衆の話しでは、アノ富の金を二百兩持つて、走つてござつたではないか、

ト小聲で訊きかける。

小夜　アイ。思ひがけなう授かりましたこの金。殊に身内の人が、金につかへて難儀な最中、こりや、

その身寄りの人に、渡して遣はしませう。

ト何氣なう行かうとするを引留め、思ひ入れあつて

團三 イヤ／＼／＼、待たつしやりませ／＼。この暗いのに子供が一人、金持つてゐては、用心が悪いぞえ。して、その金は、大事に持つてか。

小夜 アイ、爰にござりまする。二百兩とやらあるさうにござります。

トうか／＼と差出す。團三郎、金を探り見て

團三 ヤ、こりやコレ違はぬ二包み、しかも小判で

ト思ひ入れあつて

ア、大それた。この大枚な金を持つて、どうしてマア、一人歩くは

小夜 アイ、わたしもさう思うて、どうやら怖うござります。とてもの事に、どうぞお前、わたしを送つて下さりませ。

團三 ナニ送つてくれ……アイ、心得ました。送つてやりませう。

小夜 そりや嬉しうござりまする。

團三 サア、送りませう／＼。この道を連れて行きませう。

ト鳥眼を隱す思ひ入れにて、下座の方へ行きかける。お小夜は、花道の方へ行かうとして

小夜　アヽモシ、わたしや此方へ行けと云はしやんしたゆゑ。

團三　ほんに、さうだつけの。暗いといふものは、アヽ、どこがどこやら

ト鳥眼を隱すこなしにて

サア、行きませう。

ト思ひ入れ、手を引きかける。誂らへの合ひ方、一ツ鉦鳴る、團三郎、思ひ入れあつて、立ちどまり

アヽコレ、丁稚どの、わしやちつとお前に、願ひがあるが、きいて下さるか。

小夜　そりやモウ、世話になつたお前の事、なんなりと云うて見なさんせ。

團三　外の事でもござらぬが、持つてござるその金を、わしにどうぞ貸して下さりませ。

小夜　エヽ。

ト恟りする。

團三　サア〳〵、お前も聞けば身内の人に、遣らねばならぬ金とあるが、わしも主の爲に、無ければならぬ二百兩。此方の願ひが叶うた上は、きつと返します。此やうな態でも、腹からの非人でもござらぬほどに、氣遣ひなしに、どうぞ貸して下さりませ。

ト云はれ、お小夜、こなしあつて

小夜　アイ〳〵、そりやモウ、お前の云はんす事は、なんなりと聞いてあげたいものなれど、身寄りの人に渡さにやならぬこの金、どうもそればかりは、免して下さりませ。

團三　サヽ、さうでもあらうが、わしも無くてはならぬ金。是非に借りにやなりませぬ。どうぞ貸して下さりませ〳〵。

小夜　サヽ、それや聞分けてゐるけれど、わたしぢやというて、無ければならぬ金ゆゑに、こればつかりは、どうもお前には

ト云ひさま逃げんとする。團三郎、探り〳〵捕へて

團三　貸されまい〳〵。モウ〳〵〳〵、この金が無いと、お主の命に

ト無體に懐へ手を差込み、金を引出す。

小夜　アヽコレ、無體な事を……アレ、この人が、わたしの金を、取りますわいな〳〵。

團三　これはしたり〳〵、其やうに大きな聲をしては、こなたの爲にならぬわいの。サ、聞分けて、どうぞ金を

トいろ〳〵思ひ入れ。此うち團三郎、番屋の内より、菰に包みし一腰を出す。

小夜　イエ〳〵、こりや成りませぬ〳〵。アレ、この人が金盗みまするわいな。誰れぞ來て下さんせ、誰れぞ來て下さんせ。

ト聲立てるゆゑ、團三郎、お小夜をキツと引附け、思ひ入れあつて

團三　尤もぢや〳〵。尤もぢやが、此方も主人のお命救ふ、忠義にかゝるこの金は、非道と知りつゝ無心云ふ。たつて成らぬと云ふも尤も。さすれば互ひに因果同士。鬼になつても借りねばならぬ。どうでも貸さぬか、丁稚どの。

小夜　アレ、誰れぞ來て下さんせ。

團三　こりやモウ是非に及ばぬわえ。

ト云ひさま、腰の白刃を拔き、見えぬ思ひ入れにて、お小夜を切り下げる。ワツと云うて逃げるを、鳥眼の立廻りにて引附ける。

小夜　アレ、人殺し〳〵。

ト叫ぶを團三郎、心遣ひの思ひ入れにて、見えぬながらも、切り立て〳〵、立廻りよろしく、これより一ツ鉦の念佛、忍び三重。團三郎、鳥眼の思ひ入れにて、お小夜を切る事。兩人、立廻りあり、此うちお小夜の袖を掴み、團三郎、思はず引切る。お小夜、よろめき〳〵、金を持つて逃げるを、團三郎

捕へて切りこむ。その手に縋つて、團三郎の左の小指を食ひ切る。團三郎苦しみ、思ひ入れにて又切りつける。その手に縋つて

そんなら、どうでも殺すのかいの。

團三　サヽ、不便ながらも、お主の爲に

小夜　わしも二人の兄さんへ、この金渡して、武士の一分

團三　尤もぢや、尤もぢやが、この金見ては、どうも其まゝ捨て置かれぬ、年端もいかぬ貴様を殺す。願ひ叶はゞ金拵らへ、こなたの兄御に渡した上、敵と名乘つて切られてやる。サ、貴様の兄のその名はなんと。して、町人か侍ひか。

小夜　なんのおのれが、女を殺して金取る奴、盗人ぢや、其やうな奴が、なんの返すもので……さいながら、云はゞおのれは非人といひ、その盗人の手にかゝり、いかに世の末なればとて、曾我の家來の身を以て、おのれがやうな非道の刃に死ぬるのが、口惜しい〳〵、口惜しいわいなう。

ト此せりふを聞き、團三郎、恟りして

團三　ヤアヽ、そんなら丁稚と思うたは、女であつたか。殊には曾我の家來とは、もしや一家の

ト云はんとして思ひ入れ、

小夜　鬼王團三が末の妹。

團三　ヤヽ、そんなら幼名、お小夜と云うたか。

小夜　ヤヽ、それを知つたる盜人は、

團三　コレ、われが兄の、團三郎は、おれぢやわやい。

小夜　エヽ、お前がわたしの八つの時、他家へ養子の

團三　淸左衞門といふ者へ、養子同然預けたる、おれが妹

小夜　その譯知つての上からは、疑ひもない、わたしが、兄さん。

團三　團三郎ぢや、コレお小夜。

小夜　兄とも知らず大膽な、よしないわたしがこの金を、渡さばお前にそれほどな

團三　サヽ、その渡さぬも有やうは

小夜　お前の苦勞が助けたく

團三　苦勞の元も主人の御難儀、知らぬ事とて現在の

小夜　兄の刃で死ぬるのも

團三　因果同士の

同引返し



中幕



小夜　兄さん
團三　妹
小夜　かゝる例しも
兩人　あらうかいなう。
ト縋つて思ひ入れ。
團三　丁稚子供と聞いたゆゑ、よもや女であらうとは、神ならぬ身の情なや。殊に鳥眼の煩ひにて、云はゞ盲目同然な
小夜　その兄さんのお顔さへ、久しう逢はねばろく／＼に、覺えぬ上に其やうな、非人の姿でゐさんすゆゑ、なんの兄さんと思ひませうぞ。お前に怪我をさせたのが、どうもわたしや云ひ譯が
團三　イヤ／＼／＼、妹と知つたら、なんの殺さう。他人と思うて大それた、殺す心が天の御罰。併し眼病なればとて、聲を聞いても知れやうが、子供の時に逢うたまゝ、主用しげく今日までも、逢はずにゐたが皆間違ひ。赦してくれよ、コレ妹。成人したるわれが顔を、見たうて／＼ならねども、それさへ見えぬ因果な鳥眼。
小夜　お前のお主と仰しやれば、わたしが爲にもお主樣。道ならねども思はずも、手に入つたこの金で

御難儀救うて下さりませ。

團三　サヽ、さほど忠義を辨まへて、兄弟思ふ妹を、可哀やかゝる災難に、あふは何事、神も佛もござりませぬか。エヽ、情ないこの成行き。して又われは、どうしてこの地へ。

小夜　それも常から固ましい、養子の親に連れられて

ト云はんとして苦痛の思ひ入れにて

アヽ、苦しうござんす。こりやモウわたしや

ト頻りに苦しむ。

團三　コレ〳〵、氣を慥かに持て。コリヤ、妹。

ト探り〳〵介抱する。お小夜、苦しみ〳〵、縡切れて「ウン」と落入る。團三郎、探り見て

こりや妹、われは死んだか。コレ、免してくれ〳〵。南無阿彌陀佛々々々々々。

ト回向の思ひ入れあつて

この悲しみも約束事、妹ながらも人殺し。この事沙汰あるその時は、妹は犬死、金もお役に立たざる時は、矢張り主人の

ト思ひ入れあつて、件の金を取つて

命を捨てし志し。エヽ、忝い。

ト思ひ入れ。この時、揚げ幕にて

喜助　お急ぎなされませ〳〵。

ト人聲するゆゑ、金を懐中して、蚊遣りの際へ來り、探り〳〵水をかけ、燃さしを消す。流行り唄、時の鐘になり、向うより喜助、箱持ちの男、ぶらを下げ、繼ぎ棹の箱を抱へ、小雛、藝者の拵らへ、草履下駄にて、團扇を持ち、出てくる。

喜助　なんだか今夜は、急に呼びに來やしたね。

小雛　それおやというて、もそつと靜かに行かずば、その刻限が

喜助　アイ〳〵、靜かには參りませうが、ひよつと外の手合ひが、其うち先へ

ト此せりふにて花道を通りながら、兩人、本舞臺へ來り、死骸を見附け

ヤ、人が切られて……人殺し〳〵。

ト提灯を持つたるまゝ逃げて入るとて、恟りして箱を投げ出す。はずみに蓋は明き、中より鋸、金槌その外盜人の道具一つに結へしが、よき所へ落ちる。小雛、恟りして、三味線を毀れる心にて探る。團三郎、恟りして、立退かんとして、爪づいて、件の道具の上へころげて、右の足に疵つくを、程よ

く落ちてある片袖にて足を結へ、件の道具を取って、尋ねる思ひ入れ。此うち忍び三重、捨て鐘、蛙の聲、蜩の聲、一つ鉦聞える。下座より鬼王、件の盆燈籠をともし、何心なく出て窺ふ。小雛探り〳〵團三郎が食ひ切られし小指を拾うて思ひ入れ。團三郎、件の道具を拾ひ、探り見て思ひ入れ。

小雛　こりやコレ指が……オヽ怖。

ト捨てる。この指、程よく三味線箱へ入る。

團三　大工道具に變りし拵らへ。こりやコレどうやら

ト探り〳〵、合點のゆかぬ思ひ入れ。鬼王、燈籠を差出して

鬼王　そりや泥坊の

ト思はず大音に云ふ。兩人恟りして、團三郎、思はず上の方へ件の道具を投げる。程よく小雛にあたり、手早く取って三味線箱へ入れ、シャンと蓋をする。鬼王、燈籠を投げ出し、我が聲に恟りする。團三郎、ヨロ〳〵として撞と座し、件の足を結へし片袖を、しっかと結ぶ。一度に途端木の頭。三方よろしく、キザミにつれ、寺鐘の送りにて、よろしくひやうし

幕

第二番目　中幕　稽古所の場

役名

──稻の谷半兵衛實ハ非人、團三郎、曾我の禪司坊、石部金太夫、甘縄運八、非人、隱亡權助、地獄清左衛門。下女、お春、盜賊、喜助。百足屋金兵衛。鬼王新左衛門道心、藝者、小雛實ハ團三郎女房お若假名稻葉幸藏。

本舞臺、稽古所の體、門口に三味線指南小ひなといふ標札。上の方、障子屋體。正面、押入れ、暖簾口。よき所に門弟札を掛け、稽古三味線二三挺提げ、刀掛けを取りつけ、門口に丸井戸、路地の出入り。すべて下谷池の端仲町のあたり。流行り唄、角兵衛獅子の鳴り物にて賑やかに幕明く。

トよき所に小雛、ふだん着にて、前垂れを肩へ掛け、盥、櫛道具取散らし、洗ひ髮にて、文を書いてゐる。お春、下女の形にて、赤子をあやし、手遊びを散らし、喜助、手遊の太鼓を打つてゐる。此もやうよろしく

喜助　浮かそや〳〵長松さんを浮かそ。お坊さんを浮かそ。浮かそ〳〵。

ト無暗に太鼓を叩いて踊る。

はる　アヽコレ、喜助どん、坊さんを遊ばせ申すはよいが、其やうに騷がんすと、此お子がおびえなさるほどに、靜かに遊ばせ申すがよいわいなア。

喜助　ナニ靜かに遊ばせろ。其やうにむづかしい子守りがあるものか。おいらは有やうは、長松さんはかこつけで、めん〳〵の遊びが第一だ。

はる　ソレ見さんせ。手前勝手ばかり云ふ程にの。殊に小雛さんは、今日は髮洗うておいでなさんすりや、一倍埃がかゝるわいな。モシ、お前さんも、お髮洗ふも早々に、何を其やうにお書きなさるのだえ。

小雛　わたしやお馴染のお客の所へ、お月見の事について、俄に文をあげにやならぬ用事、髮洗うたゆゑ遲なつたわいの。

はる　左樣でござりますか。イヤモウ、お前さんは、晝の間はお座敷はござんせぬが、夜に入ると毎晩毎晩、それは〳〵、よう雇ひの先がござりまするな。

喜助　そりやアその筈サ。當時、池の端の仲町で、小雛さんといつては、主ほどな町藝者があるものかほんの事だが、足駄がけで、暗がりを歩かうが、轉ぶなぞといふ事は、これ程もねえの。併し、その坊さんは、ありやァどうして出來やしたえ。

小雛　喜助どんの、阿房な事云はんす。あの子の事は　わしがまだ藝者にならぬ、その前方に持つた亭主の、胤を懷姙、產み落したその長松、父親は譯あつて、今に別れてゐるのぢやわいな。

はる　エヽ、そんなら、旦那さんはござんしたかえ。道理でこの間、あの百足屋から、男物の浴衣をお買ひであつたが、その着る物を、その色男さんにあげなさるつもりだね。

小雛　この春とした事が、其やうなじやれを云うて

ト件の文を書きしまひ

コレ、喜助どん、こなさん、この文を、いつもの所へ持つて行て下さんせ。

喜助　アイ／＼、心得ました

ト文を取つて

そんならアノこれを、仲間の權助

小雛　アノコレ……アノ仲間の藝者衆の所へナ。間違はぬやう……合點かえ。

喜助　アイ／＼、きつと持つて參ります。

はる　モシ／＼、小雛さんえ。わつちやア坊さんに見せうと、コレ／＼、番太で花火を買うて來やした。今ともさうかえ。

ト薄の花火を出す。

喜助　エヽ、埒もねえ。晝ともされるものか。晩の事サ。

はる　そんなら晩に。そいつは有り難いね。コレ、喜助どん

ト喜助へ縋りつく。

喜助　エヽ、神奈川鰒め。放しやアがれ〳〵。

ト兩人爭ふ。角兵衛獅子の鳴り物になり、向うより金太夫、運八、大小にて出て來り、門口へかゝり

金太　オヽ、爰ぢや〳〵。小雛ぼう、お宅にか〳〵。

喜助　これはお屋敷の旦那方、サア〳〵、お通りなされませ。

金太　オヽ喜助か。この間は逢はぬの。

小雛　金太夫さま、よう入らつしやりました。

金太　どうぢや、いつも御盛んぢやな。

運八　身共も同道いたしたて。

小雛　サヽ、あれへお通りなされませ。

金太　時に、この間稽古いたした「城木屋」の義太夫場、イヤ、餘ほど手に入つたものぢや。その上に、「小雛半兵衛大津の段」イヤ、聽かせたい〳〵。小雛が前で小雛の淨瑠璃、イヤ、聞かせたいて

蓮八　身共も始めた。「鈴ヶ森」はうまう出來るて。そこで、コレ〳〵、山下で拔本を求め參つた。

ト「昔八丈」と「小雛」の拔本を出す。

喜助　それは承りたうござりまする。見ますれば、お上下で、どれへお出でなされます。

金太　イヤ、今日は公用で所々へ參つたが、あまり氣欝いたしたゆゑ、ちと遊里へ參る心掛けぢやて。
その御用の趣きは　コレ〳〵

ト禪司坊の畫繪を出して見せる。

小雛　その稚兒の繪は、そりや何でござりまする。

蓮八　これは去年五月の頃、江の島に於て、箱根山の住職行實を、手にかけ逃げ去りし禪司坊、まつたこの程當所にあつて、盜人の張本、稻葉幸藏と申す奴、武家屋敷は勿論、富家の町人へ押入り、劍ばかりに目をかける奴、手下も多くあるとの噂。

金太　內々彼奴を詮議の役目、昨夜も下谷三間町、百足屋方へ亂入して、質物の劍を奪ひしとの事。なんと世には、恐ろしい奴があるではないか。

小雛　成る程、そりや怖いお話しでござりまする。

金太　イヤモウ、その役目で、殊の外心遣ひ。それゆゑ今日は湯島天神へ參詣いたし、ちと若衆をあげ

て洒落ようと存じ、家來どもを殘し、兩人で參つたが、あまり上下大小でも物堅う見ゆるゆゑ、大小はこれへ預けて參らうと、それゆゑ立寄りました。

小雛　それは〳〵、お心易いお頼み。左樣なら私しが方へ、お預かり申しませう。

金太　サア〳〵、頼み申す〳〵。

ト大小を取つて、上下を脱ぎ、着流しになる。

歸りに立寄るであらう。

はる　ハイ〳〵、私しが

ト大小を受取り、正面の刀掛けへ刀を掛ける。

金太　さて、まだ頼みがあるぢや。身共、不案内ゆゑ、若衆茶屋は何屋と申すがよいか、其方、同道いたしてはくれまいか。

喜助　ハイ〳〵、畏まりましたが、ちと私しは

ト思ひ入れあり

コレ、お春どん、旦那を菊鶴屋へお連れ申さつしやい。

はる　アイ〳〵、畏まりました。私しがお連れ申しませう。その代り、藝者同樣に、わたしが洒落ます

ゐぞえ。

金太　イヤ、それはあやまるの。

蓮八　何分よく茶屋へ頼むぞよ。小雛ぼう、必らず來てくりやれ。

小雛　ハイ、お跡から參じまする。

金太　コレ、この繪姿も觸れ書も、預けて參らう。

ト件の繪姿を殘し、權助が入替へ置きし刀を曉丸と知らず、金太夫預け、丸腰にて門口へ出て

イヤ、腰が輕うて至極よいわえ。

權助　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、件の四人、捨ぜりふにて向うへ入る。小雛殘り、赤子をよき所へ寢させ、こなしあつて

小雛　昨夜雇ひの道すがら、廣徳寺の堀際に、切られてゐたはこちの人、團三郎どのゝ實の妹、幼少の時分から、父さんの手しほに育ちしお小夜どの、何者の仕業やら。義理ある事ゆゑ、願うてやりたいものなれど、去り狀取れば緣の切れたる夫の妹。今朝思はずも三味線の箱に、切つた小指が正しく昨夜、あの場所で、手に觸つたその時に、この三味線箱の中へ、取落して入りしか。せめて囘向と、御出家を頼みにやつたが、なんでマア遲いやら……さはさりながら、有り難いは

女の念力、届いて取り得し

ト あたりを窺ひ、前栽の道具箱を出す。押入れより曉丸の似せ物を出し

夫の尋ねる曉丸、手に入つたこの事を、早う團三どのに逢うて、知らせたいものぢやなア。

ト 思ひ入れ。木魚の合ひ方になり、人聲するゆゑ、押入れの中へ手早く隱す。向うより鬼王、ミス
タと出て門口へ來り

鬼王 ハイ、御免なされませ。齋坊主を呼びに遣はされたは、お前でござりまするか。

小雛 アイ、此方でござりまする。サ、お入りなされませ。

鬼王 左樣なら御免なされませ。

ト 内へ入り、兩人、顏見合せ

ヤ、藝者の小雛と、いふはてまへか。

小雛 お前は兄さん、鬼王さんぢやござんせぬか。

鬼王 サ、その鬼王も今道心、御兄弟方の菩提の爲の鬼坊主、知らぬ事とて、そんならてまへは

小雛 團三さんに別れてより、この江戸へ來て以前の通り、三味線指南の名も小雛、お客の先を勤める
も、在所の知られ劍の詮議。

鬼王　サ、團三もおれも、今に知れざる曉丸、尋ねる爲に弟も、コレ〳〵、この近所まで來てゐるワ。

ト云はれ、小雛、愕りして

小雛　エヽ、そんなら團三さんが、アノこのあたりに來てかえ。そりやマア、どこに來てゐさんすえ、ゐさんすえ。

鬼王　サ、來てはゐれども、てまへに云ふも、あんまり外聞のよい話しでもない。なんと、早速訊かうは、てまへ、懷姙であつたが、産れたかノ〳〵。

小雛　アイ、仕合せと安産して、しかも男の子でござんすが……誠に、人の仕合せ不仕合せは、今日坊さんを招いだも、ちつとわたしが、志す佛があつて

鬼王　アヽ、志すとは、どこの佛だ。

小雛　サ、その志すは現在お前の

ト云はうとして思ひ入れあり

お前と知らず呼びにあげたを、來なさんしたも佛の導き。そんなら奧の佛壇で、なんであらうとお念佛申して下さんせ。

鬼王　そいやモウ、お齋坊主の商賣、念佛はいくらでも申さうが、お布施は二百、コレ、掛けには致さ

ぬ。ハヽヽヽヽヽ。ドリヤ、お念佛申してやりませうか。

ト唄、時の鐘にて、鬼王、暖簾口へ入る。小雛、あと見送り、こなしあつて。

小雛 昨夜横死のお小夜さん、死骸は貰うても目立つゆゑ、心ばかりのとひ弔ひ、坊さん呼べば直様の、實の兄御の鬼王さん、妹の回向と露知らぬ、その心根が

ト奥の方へ思ひ入れあつて

殊に夫の團三どの、このあたりにと聞くからは、逢うて手に入るあの劔、早う渡して

ト思ひ入れ。向うバタバタになり、團三郎、片袖にて、足の疵を結へしまひ走り出てくる。跡より非人二人、追ひかけて來り、花道にて

非人 人殺しの事につき、詮議の者だ。うせろと云ふに。

ト立ちかゝるを、物云はずに殴りのけ、二人を投げちらす、これにて非人は這々に逃げて揚げ幕へ入る。團三郎、一散に駈けて來り、内の戸明けてあるを幸ひ、ツカツカと入り、内よりシヤンと戸を閉す。小雛、恟りして

小雛 これはしたり、恟りしたわいの。案内もせず駈けこんで、こなさん、どこからござんした〳〵。

團三 ハイハイ、ちと口論を致して參りました者。少しの間、お庭の隅へなりと。

ト絲立て包みの一腰を隱して思ひ入れ。

小雛　エヽ、滅相な。サ、出て行きなさんせ〳〵。

ト立寄つて、外へ出さうとして、兩人、顏見合せ

團三　ヤ、女房ではないか。

小雛　團三さんかえ。今も今とて、お前の噂をアノ兄さんと

團三　アノ、見えられたか。

小雛　アイ、志す佛の事で、思ひがけなうござんして、お前の話しを聞きました、よう息災でござんしたの。マア、此方へござんせいなア。ようマア來て下さんした。サ、お茶あげませう。

ト團三郎を上座へ連れ來り、莨盆や茶を運び、嬉しき思ひ入れ。團三郎は手前の姿を見て恥かしき思ひ入れよろしくあつて

團三　これサ〳〵、其やうに叮嚀に挨拶されては、……今ではこの態、どうもおれは、穴へでも入りたいが、斯う見たところが、そんならてまへは、昔取つた杵柄で、こりや藝者をしてゐやるのか。

小雛　アイ、お前に別れて、父さんにも音信なう、わたしや疾から、爰へ來て居りまする。

團三　さう云やれば、表に打つた標札の、小雛といふは、てまへの事であつたか。知らぬ事とて……マ

ト受取り、よく〳〵見て

無銘とは聞いたるが、似せか誠かわしとても、見るが初めて。いよ〳〵正宗正銘の、噂にも稀な
らば、祐信さまの御身のあかりも立つといふもの。エヽ、忝い〳〵。この上もなき團三が喜び。
ア、この喜びが、一日早うあつたら、あのやうに、酷い目も見まい、昨夜の間違ひ。

小雛　エ……昨夜とわえ。

團三　サ、夕も待たで朝にも、手に入つたのでお主の御難儀、お助け申すはこの劍。ちつとも早う御上
人を預かる、狩野家へ持參して

小雛　主人を助けるその品を……さはいへお前の髪形……ほんに、兄御さんも來てゐさんす。ちよつと
マア、髪も束ねて月代も

團三　そんなら兄貴に、ちよつと剃つてもらはうか。アノ髪道具は、

小雛　アイ、奥の棚にあるぞえ。丁度幸ひ、取寄せて置いたあの着替へ。

ト爰にて團三郎が足の疵を見附け

お前、その足の疵わえ。

團三　こりやァ昨夜、病犬に噛みつかれて

小雛　危ない事でござんしたの。

ト云ひさま押入れより件の包みを出して

もしも尋ねてござんしたら、着替へにあげうと古手屋から、買うて置いたこの着替へ。これなと召して

ト包みを渡す。

團三　こりや忝い。流石は女房。併し、大分工面がよい、もしやは外に、世話する者が

小雛　なんのマア、お前をのけて、そんな浮氣が

ト團三郎の手を取る。

團三　アイタヽヽヽ。

小雛　ヤ、お前の小指は

團三　サア、ついした怪我で

小雛　そりや、危ない事を。

團三　サ、その危ない事をとは、雁ひの先で多くの客に……して、今の其方の名は何と。

小雛　アイ、柴屋の小雛。

團三　わしも今では半兵衞と。

　　ト拔本を見附け

　コレ〳〵、この拔本の「小雛半兵衞」

小雛　それは大津の柴屋町、わたしは柴屋。

團三　そんならおれもあやかつて、稻の谷半兵衞、後の浮名と

小雛　心中者の淨瑠璃世界、ほんに浮氣な

團三　時代にあらぬ、今に流行りの

小雛　エ。

團三　世話になりませう。

　　ト唄になり、團三郎、思ひ入れあつて、一腰の曉丸を持つて、奥へ入る。小雛、赤子を受取り、泣き出すゆゑ、添へ乳しながら

小雛　慥か夫の左の小指、昨夜思はずあの箱へ、投げこんだのも男の小指、場所もあの子が切られたあたり。これもどうやら氣がかりな。

　　ト思ひ入れ。件の唄をかり、向うより權助、非人の形にて　小雛がやりし手紙を見ながら、跡より來

助、附いて出て來り、花道にて

權助　こりやアこの手紙の樣子では、曉丸が手に入つたゆゑ。仲間の者へ、その趣き、知らせてくれよと小雛の文體。

喜助　云はつしやる通り、昨夜俄に上首尾サ。それについて、わしは又、外の者へも知らせてくる。爰で別れませうか。

ト時の鐘になり、引返して向うへ入る。

權助　この手紙の文言では、劍が手に入つた上からは、此方の仲間はこれぎりと、先を構はぬこの文體、小雛がその心なら、此方もその氣で釣出す手段。殊に昨夜の人殺しも、廣徳寺の堀際の、非人は慥かに團三郎、この内へ入つたと、非人めらが噂、そんなら仕掛けて……さうだ。

ト手紙を懷中して、内へ入り

小雛さん、お内かえ。

小雛　アイ、どなたでござんすかえ。

權助　外でもない。權助さんぢや。

小雛　ヤ、そんならお前、先刻の手紙で

權助　オヽサ、この手紙が來たゆゑに、わざ〳〵お馬を乘り出した[illegible]權助、今まで品の出ぬうちは魚と水。願ひが叶へば直ぐに長棹。さうつれなくはせぬものだ。その上、仲間の非人どもが、昨夜下谷の人殺し、慥かにこれと黑星つけたは、矢ッ張り非人、それも大方この内と、詮議ながらに仕掛けたのだ。

小雛　エヽ、非人とは、そりや誰れが

權助　しら切らんすな、この內へ附込んだ、詮議者の非人は奧に

　　トつか〳〵と行くを小雛、支へて

小雛　こりや、こなさんは、覺えもない事云ひ出して、そんなら奧へ

權助　家探して、引摺り出す。

　　ト立廻つて上の方、障子の內へ入らんとする。この時、內より權助の手を取つて、したゝか捻ぢあげる。

　アイタヽヽヽヽ、こりやアどうするのだ。この權助が利腕を、捕へた奴は

團三　わしでごんす。半兵衞といふ町人でごんす。

權助　ヤ。

團三　そこへ行つて、知る人になりませうか。

ト權助を見事に投げ、障子の内より團三郎、剃立て、誂らへのやつし衣裳にて、一腰提げて出て來り
よき所へ坐る。

小雛　そんならお前、今のもや〳〵。

團三　オヽ、兄貴に賴んで髮月代、着る物着替へる間もなう、無遠慮千萬、氣を附けさんせ。

權助　イヽヤ、遠慮も何もいらぬ。コレ、こなたはなんで、おれを投げた。

團三　ハテ、いま云ふ通り、女子供のこの住居、殊に理不盡、男の居間へ、なんで蹻を踏みこんだ。コレ、今までとは違ふ、わしは、この小雛の亭主だ。アイ、しかもたつた今、出來たての秋の中、その當り年、稻の谷半兵衞といふ、實入のよい男でごんす。

權助　ナニ、稻の谷半兵衞……こいつはをかしい、世話の世界に小雛半兵衞、仲間入りもせぬ、その上に、素人となつたら足洗ひ、その祝儀を貰はうかい。

小雛　イヤ〳〵なんのマア、其やうな事を機にして、女子ばかりぢやと思うて、コレ、今までとは違ふぞえ。獨り身ぢやござんせぬ、今からは男のある身、アタなめ過ぎた……サヽ、出て行かしやんせ〳〵。

權助　コレ〳〵、其やうに安くせぬものぢや。オヽ、歸る事は否ぢや。亭主が出來たら、猶々祝儀を貰

はうかえ。

園三　イヤ、遣られぬ。いま始まつた聟ではなし、妾にゐる乳呑子の、聟の父親、そんなら前から嫁にゐるおれぢや。殊に非人の身を以て、歸る事は否ぢやとは、大風きめる横貫ひめ、素人の牢屋衛が相手になつて

ト立ちかゝる。權助、悔りして門口へ出て、思ひ入れあつて

權助　コレ、何も其やうにきめる事はない。歸れと云ふなら、成る程歸るが、どうでおれ一人では、なんというても、危ないもの。大勢頼んで、この返報は

園三　どうしたと。

權助　覺えてゐろよ

ト合ひ方になり、歸らうとして引返し、下座へ入る。よき時分、鬼王、劍を持つて出かゝりゐて

鬼王　ォヽ、歸つたかく。さてく彼奴は、このあたりの非人のうちでも、小胸の悪い奴ぢや。コレそれはさうと、小雛が働らきで、手に入つた曉丸、ちつとも早う、狩野之助さまのお屋敷へ

園三　そんならお前、大儀ながら、委細は跡から私しが

小雛　一時も早う、兄さんには

鬼王　合點ぢや〳〵。ドリヤ、一走り

ト合ひ方、時の鐘にて、鬼王、劍を持ち、向うへ行きかゝる。この途端に向うより金兵衞、息せきと出て來り、花道にて行きあたり

金兵　おいたしこ。オヽ、痛い〳〵。晝日中、眼を明いて歩かないか。

鬼王　ハー〳〵、これは御免々々。あんまりスタ〳〵歩いたゆゑ、スタ〳〵坊主に、ツイ行きあたりました。

ト金兵衞、これを聞いて

金兵　ヤ、貴樣は鬼王坊主ぢやアないか。

鬼王　左やう〳〵。百足屋どのか。

金兵　コレ〳〵、わしは貴樣の所へ、相談に行く所だ。アノ約束の曉丸が

鬼王　アヽ、もうようござる〳〵。此方へ請けようというたあの劍は、どうか間に合ふ樣子。それだによつて、もう、お斷わりだ〳〵。慥かに斷わりを云ひましたよ。

ト解らぬ事を云ふ。金兵衞、合點のゆかぬ思ひ入れにて

金兵　ナニ、團三どのからあれ程までに、留めて置いた代物を、ツイそれなりに斷わるとは、そいつは

どうも合點のゆかぬ。

鬼王　サ、合點がゆかうがゆくまいが、大方斷わりであらうよ。

金兵　そんなら團三どのに逢うて聞かうが、あの男の内は

鬼王　弟は向うの内に來てゐるのサ。

金兵　そんなら團三どのに逢うて……あの内は藝者の小雛、そんならあそこにか。

ト云ひさま、鬼王の持つてゐる袱紗を見附け

ヤ、この袱紗の裂れは、おれが内の、コレ〳〵、印が

鬼王　ヤ。

金兵　見せさつしやい、慥かにこれは

トよく〳〵見て

これだ〳〵。貴樣はこれを、誰れの手から受取つて來た。

鬼王　この劍か。こりやア弟の團三の手から。

金兵　いよ〳〵さうか。

鬼王　違ひなしサ。

金兵　それで解つた。懸り合ひだ。來さつしやい〳〵。

ト引ッ張る。

鬼王　コレ〳〵、どこへ連れて行くのだ。

金兵　團三が小雛の内になら、マア差當つてあそこの内へ……サア、來さつしやい〳〵。

ト鬼王を無理に引ッ立て、門口へ來り

御免なさい。百足屋金兵衞でござります。お前の内に

ト云はうとする

團三　ヤ、金兵衞どのか。

金兵　オヽ、團三どの、いま道で、兄貴のお坊に逢つたところ、持つてゐるこの品は、貴樣が渡したといふが、その代物は、いよ〳〵こなたが

團三　成る程、わしが手からたつた今、兄貴へ渡したが、それがどうした。

金兵　どうもしないが、さる所から來てゐるのを、欲しがる事ゆゑ貴樣達にも話して、賣らう買はうの相談最中、昨夜わしが内へ、家尻を切つて盜人が入つて、盜まれたこの代物、それが其方の手にあれば、殊に誰れより欲しがるこなた衆。疑ひがかゝるぞよ。盜人の出るまでは、貴樣達は懸り

合ひ。この代物は、おれが物だワ。

ト引ッたくつて思ひ入れ。小雛、ハッと思ひ入れ。團三郎、こなしあつて

團三　コレ〳〵、金兵衛どの〳〵、マア、靜かに云はつしやりませ……コレ〳〵、小雛、この品はてまへ、何者の手から受取りやつた。サヽ、今のやうに聞いては、モウ〳〵〳〵、灰汁の抜けぬ代物出所を云や〳〵。

ト小雛、切なき思ひ入れあつて

小雛　サヽ、その品は、アノ、さるお屋敷のお客さんから

ト間に合ひを云ふ。

金兵　アヽ、お客から貰つたのかえ。そんなら、その客の名所が懸り合ひだ。

ト云はれ、小雛、モヂ〳〵してゐる。

サア〳〵、客先を云ひなさいな。それを云はねば爰の内が、盗人の宿元だ。二百両といふこの代物、引揚げられてたまるものか。筋よく返せばその通り。ならぬと云へば願つて出る。それとも内引で濟ませるなら、二百両持つて來い。その時、品も渡してやり、内々で濟ませるワ。この返事はコレ、小雛さん、どうだえ〳〵。

ト云はれ、小雛、思ひ入れあつて

小雛 サア、さう云はんしても今さらに、差當つたるその金が

金兵 無いのかえ。無いならどうも仕方がない。訴へて出たその上に、この代物は元々へ。コレ、斷わりましたよ。

ト劍を持つて行かうとする。これまで團三郎、思ひ入れあつて、差扣へてゐたりしが

團三 イヤ、金兵衞どの、待たつしやい。その劍、金で濟むなら何もかも、一まくしに濟ませませう。

金兵 エ、濟ませるとあれば內々で、二百兩さへ渡したなら

團三 事穩便に濟ますなら、品と引替へ、ソレ、二百兩。

ト前垂の二百兩を出す。小雛、鬼王、惘りして

小雛 ヤ、そんならお前は大枚の、耳を揃へて二百兩。どうして金が

團三 サ、劍の質請け致さんと、身を粉に碎いた二百兩、差當つてこの場の役に……金兵衞どの、金受取つてその品を

金兵 金さへ取れば盗人に、取られた品も元々へ、損さへせねば此方は仕合せ。そんなら金とこの劍。

團三 引替へにして

ト兩人、取替へて受取る。

金兵　これで其方も内分に

鬼王　もや〳〵濟んで、マア〳〵めでたい。めでたい次手に妹のお小夜、あれが行くへを尋ねて來ようか。

ト何心なき體。小雛、團三郎、心々に思ひ入れ。

金兵　金受取れば百足屋は、首尾のよいうち、お暇いたさう。

團三　そんなら必らず何事も

金兵　承知しました。小雛さん

小雛　金兵衛さん

金兵　おやかましうござりました。

鬼王　ドリヤ、連れだちませうか。

ト唄、時の鐘になり、兩人、捨ぜりふにて向うへ入る。此うち權助、出かゝつて、門口より窺ひ、向うを見送り、思ひ入れ。團三郎、側近く差寄り

團三　コレ、小雛、何か解らぬ劍の出所。してマアこの品は、どこから其方は

小雛　サ、尤もなお前の尋ね。その劔の出所ばかりは、どうもそれと

ト當惑のうち

權助　コレ、半兵衛どの、その出所は、わしでごんす。

團三　ヤ、われは先刻の

小雛　アヽコレ、それを今さら

ト心遣ひの思ひ入れ。

權助　氣遣ひさんすな。その出所ならこの權助。

團三　そんならこの品、アノわれが

權助　アヽ、盗み物サ。

團三　ヤ。

權助　モシ、驚ろきなさるな。高が昨夜、三間町の百足屋の、家尻を切つて盗み出したその代物。それといふも、藝者に似合はぬ小雛さん、お前が欲しがるゆゑ、夜盗に入つたこの權助。わしが盗んでこの子に渡した。夜盗はわしだ。この子の疑ひ、晴らして下さりませ。

小雛　エ、そんならそれを、その身に引受け

團三　人の難儀を買つて出る、これには樣子が

權助　隨分あるね。併し、この程淺草で、あちらこちらとどぶ口を、やつて置いた上からは、質屋の方が慥か似せ物。

ト云はんとする。

小雛　エ。

權助　イヤ、首を元手の質屋の家尻、切つて入つたこの權助、それといふのも小雛さん、疾からお前に惚れたが病、女房に持ちたい念願で、それで盜んで渡したが……ハテ、その盜人はわしだによ。何もお前にこれ程も、苦勞をかける事ぢやアない。案じなさんな……モシ、半兵衛さんとやら、この子に毛頭科はない。その科人は、わしでごんす。斯う引受ける上からは、その代りには小雛さんは、女房に貰ひやす。マア、さう思つて半兵衛さん、乞食の女房に下さりませう。

トねだりかけるを、小雛、思ひ入れ。

團三　成る程、その譯聞くからは、何か怪しい劍の出所、身に引受ける非人の權助。早速返事したけれど、何を云ふにも女の氣前が

小雛　イ、エ、わたしは行く氣だね。

團三　ヤ。

小雛　わたしがやうな不意氣者、しみつたれ藝者をそれ程まで、思つてくれる非人の權助。たとへ亭主は侍ひでも、水臭い氣になつたこなさん、子のある仲でも愛想が盡きた。色には非人乞食でも、眞實見えたが女の見込み。今日向わたしを思ひ切り、乞食の女房にやつておくれ。

團三　そんなら久しう逢はぬうち、われが氣前も

小雛　イヽエ、わたしは變らねど、お前の心が水臭い。

團三　して、その譯は。

小雛　色があるゆゑ。

團三　ヤ、どうしておれに色戀が

小雛　イヽエござんす。あるといふのはこなさんは、どこの女中と心中さんした。

團三　ヤ、なんで心中

小雛　心中せぬなら、どうしてお前、指切らしやんした。

團三　ヤ。

ト思ひ入れ。

小雛　その心中に切つた指、廻り廻つてわたしが方に。モシ

ト三味線箱より小指をソツと出して見せる。

園三　どうしてそれが

小雛　サ、これぢやによつて、お前は外に色があるから、さつぱり縁を切らしやんしたが、お前も先のその女中、明かして見たら、血で血を洗ふ……サ、色の女と思ふから、粋を通してわたしが方から、暇もらふが、お前の爲に、ナ……モシ、なんとさうではござんせぬかえ。

ト思ひ入れにて云ふ。園三郎、こなしあつて

園三　成る程、仇な色事に、思ひがけなう切つた指、その戯むれの折も折、ツイ爪ついて足の疵、刃物は怪しき

ト思ひ入れあつて

縁切つたれど去り狀は、去年別るゝその砌り、渡して置けば、爰では去り狀渡すに及ばぬ。

小雛　イヽエ、改め去り狀おくれ。ハテ、去年は去年、また改めて、去り狀がはり、お前のその魂ひをどうぞわたしに

園三　すりや、去り狀の代りには、この一腰を預かりたいと、縁切る女房が望みなら、此方も女房の魂

小雛　預けやんせう。分けて藝者の魂ひは、コレ、この三味線が

ト太棹の三味線を出して

五大力の狂言に、藝者の小萬が譬への三味線、それに習つて、わたしが手馴れた、女藝者の魂ひを、渡してあげるその上に、又いたいけな置き土産、この子を殘すが別るゝ證據。ハテ、男の子ゆゑ、男に附くのはお定まり、跡でお前はその子供の

權助　そんなら今から、小雛は非人のおかみさん、小家へ連れゆき女房に持つ、しるしは小雛と契約の、劍を尋ねて女房と、あの淺草の床几の上、さる侍ひの刀の內、摺りかへ置いたを持ち主が、差してうせたで、今に行くへが

小雛　すりや、その劍をこなさんが

權助　サ、仕事はしたがたつた今、誠の劍が百足屋から、出たので大方おれが手で、摺りかへ置いたはどちらがどうとも

團三　ヤ、そんなら求めた曉丸、まだその外に

ト思ひ入れ。

權助　なにサ、無いのサ、そんな劍が何本あらうぞ………さてこれからは、お觸れの書き物。コレ／＼、
これだ。

ト件の繪姿を取上げ

行實とやらを殺したる、禪司坊が人相書………昨夜娘を殺した奴、金を取つたといふ噂、是へは
今では素人に、丈の知れねえ太い奴が、あるではないかえ。

團三　そんなら昨夜のあの丁稚、それも女と露知らず

權助　覺えがごんすか。

團三　どうしておれが

權助　よもや覺えはごんすまい。

ト思ひ入れ。合ひ方、時の鐘にて、向うより清左衛門、白布かけ早桶を連尺にて背負ひ、足早に出て
門口に窺ひ

清左　コレ／＼、藝者の小雛といふはこの内か。コレ、親の清左衛門が尋ねて來た。娘、内にならら、逢
うてくれ／＼。

ト忙しく云ふゆゑ小雛、團三　これを聞いて

小雛　ヤ、さう云ひなさんすは

團三　オヽ、舅どの、マアノヽ入つて

ト清左衛門、見て

清左　ヤ、こなたは娘へ去り狀渡した、團三ぢやの。別れた顏で親にも沙汰せず、又ズルノヽに二人コツソリ……マアノヽ、そのこみやりは後へ廻して、コレノヽ娘、團三どの、逢ふと早々、さて大變が出來たわいの。

ト早桶を下ろして、急込んで云ふ。

小雛　父さん、何事が出來たのぢやぞいな。

清左　コレノヽ、聞いてくれ。てまへの緣で世話をした、あの團三の妹お小夜、今では親子同然に、われが行くへを尋ねて、この江戸へ來は來ても、仕合せは惡し、よんどころなう袖乞ひして尋ねるうち、昨夜可哀や、廣德寺の橫手に、お小夜が切られてゐたわいのノヽ。

ト思ひ入れ。團三郎、小雛、さてはト思ひ入れ。

團三　そりやマア、不便な事を致しました。

小雛　して、その殺した者が、知れて居りますかえ。

清左 サヽ、それが知れぬ。聞けば、どういふ事やらあのお小夜が、大枚の金を持つてゐたとの噂。おれが身に覺えがないが、切られた死骸を申しうけ、どこへ葬むらうと思ふうち、聞き傳へたわれが住家、池の端で藝者の小雛と、聞くと早々尋ねて來た。コレ、團三どの、いはゞこなたは武士の事、コレ、妹の敵を、討つてやつて下されノ\。

團三 成る程、お頼みなうても妹が敵、尋ね出して

小雛 そればかりは、討たれやすまい。

清左 コレノ\、娘、なんでこの人は、妹の敵が討たれぬのぢや。

小雛 サア、それはナ

ト思ひ入れ。

權助 コレノ\、小雛、敵を討たうが討つまいが、あの男の實の妹、縁が切れゝば赤の他人、此方で何も構ふ事はない。サ、おれが女房だ。長居をせずに

ト小雛の手を取つて引立てる。淸左衞門、見て

清左 コレノ\、娘、お小夜が切られたその一件、頼みに來たはわれが內、弔ひなりとしてやりたさ。それにわいらは、驚ろく氣色もないといひ、非人と見えるこの男、われを女房といふからは、そ

んなら今では
小雛　去年別れて今日までも、男を持たぬ藝者の世渡り。それなやによつて、どこにどうしたこんやり
が、あらうも知れぬ女の獨り身。
團三　親御は評判しあるまいが、女に逢うたは、かしも思はず今日宴て、小兒の出來たも聞いたが初め
て。何か其うち義理合ひて、男の出來たを去り狀を、出した亭主が今さら何とも
清左　貴様が云はずばこの親か……コレ、娘、われはそんなら、昔馴染を振り切つて、このマア乞食
の女房になる氣か。
小雛　サ、それも義理あるお人の爲
權助　義理といふのもこの手紙。
ト出しかけて見せ
見れば男のこなたも縁どひ、その縁なら遁がれぬ仲、乞食が聟になるのが無理か。何も違つた譯
しはないぞえ。
清左　そんならどうでも、娘も承知で
小雛　主のお世話に、なつて見ようと思ふから

清左　その心なら是非がない。エヽ、見下げ果てたる

ト立ちかゝる。團三郎とめて

團三　お前の實の娘ぢやが、以前に違ふ彼奴が根性。實に愛想が

清左　彼奴が性根、親も愛想が

小雛　盡きたが仕合せ。今から貰うた男の魂ひ。

團三　此方も女房が女の魂ひ、この三味線のばち當り。

ト思ひ入れ。

小雛　罰も利生も觸つた上は

團三　品によつたら

小雛　二度の結びを

ト思ひ入れ。暮れ六つの鐘鳴る。團三郎、思ひ入れあつて

團三　ありやモウ暮れ六ツ。

小雛　慥かお前の

團三　病の刻限。

小雛　それを見捨てゝ

ト こなし。權助、無理に引立て

權助　いらぬ左平次。

ト この時、小雛より來りし手紙を落す。

清左　ろく／＼親に

ト 立ちかゝるを團三郎、引留める。小雛、振りかへつて

小雛　父さん、跡からお出よ。

ト 唄、時の鐘にて、一腰を持ち小雛を、權助、無體に引立て／＼、向うへ入る。兩人殘つて

清左　おれが娘といひながら、心の腐つたあの女。團三どの、腹も立たうが、何を云ふにも女の事、料簡さんせ。何よりかより、こなたは尋ぬる劍の詮議、それが肝腎。

團三　忝うございます。その曉丸はコレ、見さつしやりませ、二百兩といふ金を拵らへまして、さる質屋より質請け致し、卽ち爰に

ト 見せる。

清左　それは耳寄り。マア／＼、何よりはこなたの妹、明日は早々娶むるにも、今夜ばかりは爰の内に

こなたも通夜してやらつしやい…………コレ〳〵、爰らを借りますぞよ。

團三　何分よろしう。

清左　ドリヤ〳〵、爰へ

トよき所へ掛を直し、あたりより机を出し、燈明をともす。

机もあらうの。

團三　ハイ、私しも今夜参りまして、内も勝手も知らぬ上、鳥眼でござります。

ト探り〳〵手傳ふ事。清左衛門、燈明、行燈の灯をともす事。時の鐘、合ひ方、向うより金太夫、窺ひ〳〵出て来り、外より内を覗き、思ひ入れあつて清左衛門を招く。清左衛門、門口へ出る。此うち團三郎、探り〳〵、曉丸を押入れにしまふ。清左衛門、これをよく〳〵見定める事。

清左　金太夫さま。

金太　コリヤ。其方が知らせにて、彈正どのより指圖を受けし某、いよ〳〵この家に團三めが

清左　今は町人、半兵衛とやら。鳥眼を幸ひ、彼奴が手にある曉丸、いま引出して彈正さまへ

金太　首尾よく致せ。

ト囁き合ひ、金太夫、外にゐる。清左衛門、ソロ〳〵押入れへかゝり、そつと明けて、件の劒を盗み

出す。團三郎これを知らず、足の疵の布を締め直す。清左衛門、ソツと門口へ出て招く。金太夫、近寄り

ト渡す。

清左　これが頼みの曉丸。

金太　出來た〳〵……コレ、おれが預けた大小が、そこらにあらう、尋ねてくれろ。

清左　ハテ、さま〴〵な事を

ト内へ入り、刀掛けに心附かず、あたりを尋ね、三味線箱を探り、蓋を明け、中なる小雛の大小を取つて、小聲にて

しまんだ所に大小が……サア、これかえ〳〵。

ト渡す。金太夫、取つて、暗がりゆゑ心附かず

金太　これだ〳〵。コレ、後から參れ。

ト小聲にて云ふ。清左衛門、早く歸れ〳〵と仕方するゆゑ、金太夫うろたへ、花道まで行き、心附いて引返し

どうか大小が違つたやうだが……オヽ、それ〳〵、上下も預けた。コレ〳〵

トいふ〳〵思ひ入れして

アヽさうよ。明日の事に致さう。

ト捨て鐘に、向うへ入る。

清左　コレ〳〵、團三どの、どうもわしは、お小夜を殺した奴が合點がゆかぬ。

ト此うち團三郎、何氣なく足の疵を結へし片袖に心附かず、行燈の前にて締め直してゐる。清左衞門その片袖へ目を附ける思ひ入れ。

團三　サア、私しもさう存じまする。何をいうても、主人の大事のその砌り、妹が横死の何もかも、一時にさしかゝり、殊には夜に入つてから、鳥眼の病で、御覧じませ、誠に仮盲目でござります。

ト此せりふのうち、足を結へし片袖に、よく〳〵目を附け、桶の内の死骸の着てゐる着物と、行燈を提げてゆき、見比べる思ひ入れあつて、獨り頷づき

清左　コレ〳〵、喜ばつしやい。お小夜の敵が、知れたワ〳〵。

團三　エヽ、妹の敵が知れましたとは、そりや何者でござります。

清左　イヤ、外でもない、以前は實の兄の團三、今は町人半兵衞とやら、こなたであらうが。

團三　エヽ、合點のゆかぬその詞。コレ、現在兄が妹を、殺したと云ふにはなんぞ

清左　コレ、しらを切るな。盗人野郎め。

ト團三郎を引附け

聞けば、あのお小夜めは、富の札を拾うて、思はず當つた二百兩、その金持つて走つたを、同胞他人の始まりと、われが殺してその金を、一人横取りしたであらうが。

トきつと云ふ。團三郎、思ひ入れあつて

團三　コレ、舅どの、わしが妹を殺したといふは、なんぞ慥かな證據が

清左　われは鳥眼で見えまいが、コレ〳〵……臑の瓶口結へてゐる、木綿の裂れは千切れし片袖、お小夜が着てゐる男物。その褞袍の千切れてあるが、何より證據。他人のおれさへ不便だが、われは妹を殺したな。

ト詰めよつて思ひ入れ。團三郎、さてはトこなしあつて

團三　成る程、思へば横しま非道は、忽ち當る天の御罸。云はつしやる通り、主人の爲に二百兩、無ければならぬ事あつて、いかにも妹を、この兄が

清左　殺したというては濟まぬ。現在實の妹でも、七ツ八ツからこれまで育てたこの親仁、當てが無くては他人の娘、なんで世話をするものだ。育てゝ置いて金にもと、地切りを入れたを殺されては

蛇蜂取らぬ損の上塗り。それにおのれは有りもせず、他人に言ひかけた上、殺してふんだくり二百両。サア、その金を寄越すとも、それがならずば同胞でも、今は町人半兵衛が、人殺しだと騒つて出ようか。

園三　サア、それは。

清左　それが否なら金を寄越すか。

園三　サア、それは。

清左　無いと云ふのか。コレエヽ、なんぼおのれが妹でも、他人の金を盗まうと、人を殺して助からうか。妹の下手人、兄の身で、わりや獄門にかゝるぞよ。

園三　すりや、その金をこなさんに、渡さぬ時はこの事を、訴へて出て、妹が敵を

清左　他人のおれが取つてやるのだ。金を寄越すか。深切者であらうがな。

園三　サア、その金はアノ、どのやうに申しても、聞分けなければ、ハテ、是非もない。
ト思ひ入れ。この時、捨て鐘、合ひ方。向うより小雛、件の一腰を抜き、これを持つて、あわたゞしく走り出て來り、花道にて胸撫で下ろし、思ひ入れあつて

小雛　この身の大事を知つたる權助、騙しすかして内を出て、途中に於て人知れず

トこなしあつて

さぞ今頃は乳が無うて、あの子もせわらう。男の身では、それを苦勞に

ト思ひ入れあつて、窺ひ〳〵、門口へ來り、白刃を納め、門口の井戸へ寄り、水を汲みあげ、手足の血を洗ふ事。內にはこれを知らず

淸左 サア〳〵、どうだ。これ程云つても金は寄越さぬか。どうするものか、是非がない。この事直ぐに代官所へ、訴へ出でゝ

ト行かうとするを、團三郎とめて

團三 アヽコレ、今更それを云はれては、御主人の御身の納まり、見定めもせず牢舍いたすが、いかにも殘念。左樣なら金拵らへて渡すまで、手に入りし曉丸、あの品お前に渡さうほどに、少しの間この身の訴人を

淸左 コレ〳〵、あの劍を口ふさげに、渡さうと云ふのか。コレ、その曉丸は、疾におれが捲きあげて、彈正さまへ渡してやつたわエヽ。

トこれを聞き、門口の小雛、恟りする思ひ入れ。

團三 エ、すりや、どうしてアノ劍を

清左　これサ、騒ぐな。どうで娘と縁の切れた赤の他人、われが鳥目を幸ひに、あの押入れから引出して、使ひの武士に渡してやつたワ。ナ、コレ、彈正さまは、祐経さまの弟御、あなたの爲にも曾我は敵、おれが爲にも、實の娘の棚の葉を、老母の敵と二人の女が父敵、その意趣返しは曾我の祐信、腹を切らせる目論見に、暁丸は渡してやつたワ。なんと膽が潰れたか。

ト大音に云ふ。門口の小雛、これを聞いて思ひ入れ。團三郎、こなしあつて

團三　すりや、手に入りしあの劍、彈正方へ渡せしとや。思へば〳〵、武運に盡きし身の成る果。エヽ口惜しい。

トきつとなる。

清左　武運に盡きたも凄まじい。うぬが妹を殺した事、訴へ出て仕舞ひをつける。待つてけつかれ。

ト團三郎を蹴飛ばし行くを、いろ〳〵留める事よろしく、清左衛門、タヂ〳〵として門口を離れ、外へ出かゝる。門口にて清左衛門、小雛に行きあたり、差してゐる團三郎の一腰をひツたくり、團三郎に切りつけんと拔かうとするを、小雛、もぎ放さうとする、はずみに清左衛門の刀、鞘走り、白刃にてしたゝかに我が身を切り下げ、「ワツ」と云うて

うぬ、おれを切つたな〳〵。

團三 どうして〳〵、決して左樣な

ト寄らんとして行燈に行きあたり、灯は消える。

清左 うぬ、よくもおれを

ト探り廻り、出刃を取上げ

うぬも叩き切つて

ト切つてかゝるを團三郎、留めながら、その手を捕へ、出刃をもぎ取り、介抱せんとして、思はず持つたる出刃を爭ひ、脇腹へ突き立てる。

アレ、人殺し〳〵。

トよろぼひながら門口へ出て、小雛とちよつと立廻つて、思はず入り口の井戸へよろぼひ落ちる。内にて赤子泣くゆゑ、小雛、心附き、内へ入り、抱きあげていぶりつける。團三郎、鳥眼ゆゑこれを知らぬ思ひ入れ。水音せしゆゑ、探り〳〵井戸側へ寄り、思ひ入れあつて

團三 そんなら井戸へ……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト此うち小雛、赤子を寢させ、灯消えしゆゑ、火打ち箱を探り、これを打つ。團三郎、聞きつけ

ヤ、灯をつけるは、誰れぢや〳〵。

小雛　アイ、わたしでござんす。

團三　ヤ、さういふ聲は、小雛ぢやないか。あれ程男に恥かゝせ、なんで戻つて

ト思ひ入れ。

小雛　サ、尤もでござんす。定めし腹も立ちませう。したが、先刻の男に、あれ程までにおうて見せねば、ちつと此方に譯ある事。モシ、腹も立たうが、堪忍して下さんせえ。

團三　そりやモウ、苦勞をかけた其方の事、譯ある事なら腹は立てぬが、して、同道したあの男は

小雛　一旦向うの云ひ條立て、連れ立つて行た先で、いろ〳〵なだめて得心させ、手を切つて戻つたもこの子に心が引かされて、どう片時も別れて外へ

ト云ふを聞いて、心得ぬと思ひながら

團三　そりや親子の情愛、さうありさうなものぢや。そんなら今日向、どこへも行かぬか。

小雛　アイ、行かぬ證據は、先刻に預かるお前の魂ひ、これをお返し申すのが、外へは行かぬわたしがしるし。

ト件の一腰を渡す。團三郎、取つて

團三　男の魂ひ戻したからは、わしが預かる其方の魂ひ、この三味線を

ト探り〳〵三味線を取つて差出す。

小雛 イヽエ、そりや、矢ツ張りお前へ預ける魂ひ。

團三 そりや又なぜに。

小雛 ハテ、お前とわたしがその以前、馴れ馴染んだも稽古所の、その三味線が戀の仲立。

團三 成る程、云へばそんなもの。まだ年若な浮氣盛り、張つて見ようと有やうは、撥の持ちやうろくろくに、知らぬうちから手を取つて、斯うなさんせと敎へくれ、武士のいらざる遊藝に

小雛 それが二人の馴れ馴染むと、つひには親の目を忍び、身重になつたは

團三 ほんに、それ〳〵、その時稽古は「妹脊の門松」……この腹帯を母さんが、見附けさんしてコレお染……。

ト一口語り

てまへがおれに、親に知れたと氣を附けられ

小雛 それから後のもや〳〵は、産むかおろすか、こりやいつそ、桂川にもならうかと、案じるよりは

團三 産むが保名の子別れは、たつた一度で彈ければこそ。その不器用な産れぢやが、其方の敎へた「鈴ヶ森」百合太夫場は今に忘れず。

小雛　出来るかえ。弾いて見やしやんせ。

園三　ハテ、よい機嫌な。このマア苦勞のその中で、三味線どころか。それや狂人の沙汰であらう。品によつては命の瀬戸、悪い浮名を流さにやならぬ。

小雛　そりやお前ばかりか、連れそふわたし、色の浮名は「八百屋のお七」、また城木屋の

園三　駒に驛路は鈴ヶ森、「双紋巴」は大膽な、ありや盗人の親子連れ。

小雛　エ。

ト恟りする思ひ入れ。

園三　ハテ、仰山な驚きやう。その子がおびえるわいの。ほんに、守は附けてあらうの。

小雛　アノ、天満宮の梅の守が

園三　そりや結構ぢや。随分と煩らはぬやうにしてたもや。

小雛　アイ、それぢやによつて、アノ湯島の天神様へ、お前の御武運、この子の爲、毎夜々々、お参り申しますわいな。

園三　それは奇特な。そんなら今宵も

小雛　アイ〳〵、この子を連れて行てくるほどに、お前、留守して下さんせ。

團三　アヽ、行て來やるか。烏眼のおれが留守したら、定めて確か。

小雛　その留守のうち、わたしが魂ひ、お前に預けて行くほどに、この三味線は女房ぢやと、思うて藝者の魂ひを、無駄彈きなりと氣晴らしに

ト件の三味線を渡す。團三郎、取つて見て

團三　これはしたり、かゝる苦勞のその上に、お主の大事を眼前に、浮氣な遊びがならうかいの。

小雛　サア、その三味線は、今云ふ通りわたしが魂ひ。それぢやによつて、ちつとのうちは

團三　成る程。烏眼のおれが今にても、目が潰れたら差當る、刀に代る三味線の、それが渡世にならうも知れぬ。稽古の爲に

小雛　留守の其うち、氣晴らしに

ト思ひ入れ。赤子泣く。小雛、いぶりつけて

すゝ、よい物を見せませう。わが身の好きな、これ爰に、花火がござんす。

ト件の花火を附けて、見せる。これにて時の鐘の頭を打込み、合ひ圖と心得、向うより喜助、先に、股引、凜々しく、一本差し、頬かむり、跡より盜賊四人、いづれも怪しき姿、小袖、一本差し、草鞋、龕燈を持ち、窺ひ／＼出て來り

盗一　講中揃へて
皆々　迎ひに來ました。
小雛　ア、申し、ようお出でなされました。ちよつと髪を撫でつけて
園三　そんなら其うち。モシ、どなたも、お入りなされませ。
　　ト心附かぬ思ひ入れ。
皆々　構はんすな。
盗一　靜かに身じまひ
盗二　ゆるりとなさんせ。
園三　そんならわしは
　　ト三味線を取上げる。
小雛　喜助どん、手傳うておくれ。
園三　〽思ふ事、叶はねばこそ憂き事の、戀と義理とのもろ手綱、不便やお駒は夫の爲、かゝる憂き身の縛り繩、顔さし入るゝ懐を、洩れて流るゝ涙橋。
　　ト此うち小雛、赤子の顔を見詰め、愁ひのこなし。赤子泣く。いぶりつける。

〽首に掛けたる水晶の、珠數の數さへ消えてゆく、屠所の羊の歩みより、果敢なき身ぞと觀念なし、力なく〳〵引かれくる。

ト團三郎、彈き語りのうち、鏡臺を出し、小雛、洗ひ髪を藁にて結び、門口の五人、窺ひ入り、二枚折りの屏風を立て、葛籠の中より盜人形の衣裳を出し、長襦袢やうの下がりと、忍びと見ゆる頭巾を出し、小雛、これを持つ。三味線やめて

團三　今に重なる憂き難儀、その身を以てたわけたる、武士のあるまいこの身持ち。誠にこれが引廻しの小唄同然、やがてこの身も町中を

小雛　エ。

ト團三郎を見て、思ひ入れ。團三郎氣を變へ、淨瑠璃に紛らし

團三　〽お駒は顔をふりあげて、……南無三、この後をトンと忘れた。小雛、この後は、何とか云うたの。

ト此うち皆々手傳ひ、身拵らへしてゐたりしが

小雛　ア、、詞か。オ、それ〳〵……〽御見物樣、いづれも樣……どうやらお駒の引廻し、それによう似た、この身は親を

ト ほろりとする。

團三 ア、そりや違うた。親ではない。思ひ出した／＼。へ夫を殺す大罪人、さぞ憎い、非道大膽者、いたづら者と皆様の、お憎しみもあるけれど、云ふに云はれぬ譯あつて、夫殺しの罪人と、死恥さらす身の因果、不便と思し一遍の、御回向願ひあげまする。

小雛 可愛い夫へ義理を立て、斯く恐ろしき姿にて、果はこの身も町中を、引廻さるゝ大膽な、お罰にまさる身の科は、この世からなる劍の山。

團三 それ／＼、此やうな文句であつた。へ身を切り裂かれ憂き恥を、晒すも定まる因縁づく、約束事とあきらめて、二世の契りのその人と、一世を限る兩親の、もしや群集のその中に、見えはせぬかと伸びあがり、伸びあがりても竹垣の、透間隱れの一群れに、眼も泣き腫れて見え分かぬ、心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかりけり。

ト 此うち皆々手傳ひ、小雛、ぶツ裂き羽織、野袴、黑裝束、支度して門口へ來り、立ち身にて足を踏み出し、喜助、草鞋を穿かせる事。小雛、赤子を懷中して

小雛 そんなら參つてくる程に、併し夜道は女子でも、犬おどしは、いつもの用意の

ト 顏で知らす。喜助、呑みこみ、三味線箱を出し、蓋を明け、中を見て、大小無きゆゑ、ウロ／＼と

て

京助　いつもしまふはこの箱の

　　ト あちこち見廻し

道理こそ、爰にあつた。

　　ト 刀掛けにある金太夫が預けし大小を取つて出す。小雛、取つて思ひ入れ。

小雛　こりやコレ違うて、両腰とも

團三　ヤ、、両腰とは

　　ト 何氣なく思ひ入れ。

小雛　アヽ、こりや大方、お預けなされた金太夫さまの、慥かあなたの

團三　犬おどしなら、何でもよいぞや。

小雛　アイ。そんならこれなと

　　ト 両腰を差す。

團三　後を逐うてもらひたいが、夜の更けぬうち、ちつとも早う

小雛　この子を連れて、御願ほどきに

團三　願ひ叶へばその身の仕合せ。

小雛　品によつては、この子も共に

團三　アヽコレ、何を其やうに

小雛　サ、子持ち臭うてもしひよつと、愛想が盡けうかと、それぱつかりが

團三　〽それぱつかりが悲しいと、いま死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさに、思ひやりつゝ兩親は、前後正體打倒れ、せきあげ〱叫び泣き、春の濱邊に打寄する、浪に浪ます涙なり。

ト淨瑠璃をさまる。

こりやいつにない、大汗になつたわいの。

小雛　そんなら參つて參じませう。

團三　して、坊主めは。

小雛　わたしが肌に。

ト皆々、門口へ出る。

團三　風ひかしやんな。

小雛　お前も御無事で……もしやはこれが

團三　長い別れに

トこの時、赤子泣く。

小雛　せわるこの子も

團三　蟲が知らせて

五人　最早子の刻。

小雛　片時も早う

五人　彈正屋敷へ

小雛　コレ、

ト思ひ入れあつて、氣を變へ

行てくるぞえ。

ト時の鐘の頭を打込み、キツと氣を變へ、洗ひ髮のふツつり切れし前髮がツくりいはせ、百日鬘の見得よろしく、男の振りにて、赤子をいぶりつけ〳〵、先に立ち、五人は龕燈を照らし、附添ひ、凄き合ひ方にて向うへかゝる。揚げ幕より禪司坊、天蓋に面を隱し、虚無僧の形にて、尺八を吹きながら出て來り、小雛と行きあひ、兩人思ひ入れあつて、別れて皆々向うへ入る。禪司坊、門口へ來り、思

ひ入れあつて

禪司　またいとけなき幼子を、抱きまゐらせたる今の若者、男とも又女とも、[illegible]
星の光りに、怪しの出立ち。ハテ、何とやら。

ト思ひ入れあつて、裏身になり、尺八を吹く。内には團三郎、思ひ入れあつて

團三　心を盡せし曉丸、女房小雛が働きにて、手に入る劍は彈正方へ、遣はせしとは、申し譯なき上。
人の手前、所詮死すべきこの身にて、戯むれ事もこの世の別れ。さは知らずして女房が、神詣で
より歸らぬうち、腹搔き切つて

ト小雛が戻せし一腰を取つて、スラリと抜いて、柄に血汐の滴りある様子、手に觸るゆゑ思ひ入れあ
つて

ヤ、こりやコレ慥かに、柄には血の滴りあり。さては小雛が

ト思ひ入れあつて

南無阿彌陀佛

ト腹切らうとする。

禪司　御無用。

ト尺八をやめて聲かける。團三郎、思ひ入れ。

團三　門に修行の梵論字の、無用と聲をかけたるは

禪司　忠義の程を忘れしか。生害なさば義理ある主人を、誰れが殘つて養育なすぞ。それゆゑ無用と此方より、止めし我れこそ

トつか／＼と入り、天蓋を取つて

曾我にゆかりの禪司坊、見忘れたるか、團三郎。

團三　ヤヽ、さてはあなたが主人の若殿、絶えて久しき御目見得。拙者はこの程烏眼の難病、お面拜む事さへも、心に任せぬ身の因果。恥つらかゝぬ其うちに

トまた死なうとする。その手をとめて

禪司　ヤレ早まるな。其方こと、兄弟二人の討死より、いま囚はれの祐信さま、某とても日陰の身の上力とならん心は無きや

團三　其お詞さる事ながら、御身は正に江の島にて、行實殺せしその科にて、今お尋ねの御身の上。

禪司　その行實は毒酒にて、横死といへど情なや、その科この身にかゝるも災難。その上かりにも契約せし、天日坊が最期のほど、首級なければこれとても、殊に御母辰姫さま、御最期ありしも稚兒

ヶ淵、討つたる奴こそ御所持なされし、みな紅ゐの陣扇、それを奪うて立退く曲者。

ト此うち團三郎、よく／＼聞いて

團三　すりや辰姫を母上とは、さては御身は祐安さまの

禪司　血筋にあらぬ、様子は追つて……必らず團三、早まるな。

ト刀の手を止める。この時、權助が落したる手紙を取上げる。

團三　然らばあなたの詞に愛で、今の生害、暫時の間

ト此うち禪司坊、件の手紙を、よく／＼見て

禪司　ハテ心得ぬこの文體、手跡は女と見えながら、名宛は即ち稻葉幸藏……尋ね求むる曉丸、念願叶うて手に入る上は、これにて皆々安堵の思ひ。仲間の者へと記せし密事。さすれば劍は當世の盗賊、稻葉幸藏が方に奪ひ置きしか。

團三　ヤ、、その文言の、密書がいづれに

禪司　即ちこれに落ちたる狀、これぞ劍のよき手懸り。この品持參し祐信さまの、お命乞ひを致すが肝要。

團三　然らば書面を狩野家へ持參し、主人の御難儀日延べのお願ひ。さるにても、この姿にて持參なさ

んも

禪司　見れば、これには麻上下、粗服ながらも、其まゝこれを

ト金太夫が預けし掛け竿の上下を取つて出す。團三郎、取つて

團三　お心附かれしこの一品、着して直ぐに

禪司　證據は名宛のこの密書。

ト團三郎へ渡す。

團三　然らばこの狀

禪司　大事に持つて

ト向うバタ〳〵にて、鬼王、走り來り

鬼王　コレ〳〵弟、大事が起つた〳〵。

團三　兄者人、あわたゞしい。

禪司　姿は變れど、鬼王ならずや。

鬼王　さう仰しやるは禪司坊さま。モシ〳〵、御大事とはあなたの事。

禪司　ヤ、なんと。

鬼王　只今これへ参る道にて、多くの付ひ、十手捕り繩、捕り手の樣子。別當害せし禪司坊、殊に昨夜の人殺しは、非人のうちにて見馴れぬ者、慥かその名は半兵衞とか、この稽古所に來てゐると、ひそめく樣子を聞いて來ました。アレ〳〵、向うへ來るのは慥かに捕り手。

ト　うろ〳〵する。兩人、思ひ入れあつて

禪司　命惜しむに似たれども、願ひある身の暫らくも

團三　御身を忍び、一先づ爰を

ト身拵らへする思ひ入れ。時の鐘にて、向うより運八、絆纏股引、跡より捕り手八人、黑具の形、大小にて、窺ひ〳〵出て來り、門口にて內を窺ひ

運八　コレ〳〵、藝者の小雛は內か。ちよつと明けてもらひたい〳〵。

ト門口を叩く。鬼王、內より覗き見て

鬼王　來ました〳〵。來た〳〵〳〵。

ト　いろ〳〵思ひ入れ。

團三　何百人來るとも、品によつては拙者が相手に。暫らくあなたは

鬼王　お供いたして

ト介抱して障子の内へ入る。運八、思ひ入れあつて

運八　ソリヤ。

ト下知する。大勢、バラ〳〵とこみ入り

皆々　動くな。

ト取巻く。

團三　こりや何ゆゑに、この家の内へ

運八　配符の廻りし禪司坊、殊に夜前の人殺し、慥かにこの家に………ソレ、召捕れ。

皆々　捕つた〳〵。

トかゝる。團三郎、鳥眼にて、大勢を相手に立廻りのうち、行燈を蹴倒し、暗くなる。捕り手、思ひ入れあつて

運八　南無三、行燈が消えたるぞ。

皆々　眞暗闇だ。取逃がすな。

ト大勢立騒ぐ、團三郎、聞いて思ひ入れ。

團三　すりや、灯が消えて眞の闇、さすれば鳥眼は一人ならず、殘りの衆も皆盲目、眞の闇なら千人力

相手は嫌はぬ。サヽ殘らず相手だ。

トきつとなる。

運八 召捕れ。

皆々 捕つた〳〵。

トかゝるを團三郎、拔討ちに早切りに切りちらす。皆々「ワツ」と云うて下の方へ、運八はじめ退く。團三郎、思ひ入れ。此うち時の鐘、早拍子木烈しく、この時、奥より禪司坊、小雛が脱ぎすてし世話形を上へ引ッかけ、袖頭巾を持つて、鬼王、介抱して、窺ひ〳〵出て來り、團三郎に行き當り、思ひ入れあつて

團三 禪司坊さまか。

禪司 小雛が着類を暫らく借り着。

鬼王 お供いたして

團三 幸ひ妹が

ト探りよつて、早桶の白布を取り、内より死骸の髻を掴み、後向きにて掻き首して、直ぐに引提げ出て

コレ兄貴、即ちこれが若旦那。

ト差出す。禪司坊、探り見て

禪司　ヤヽ、こりやコレ首級を

鬼王　首の身替り。

團三　少しも早う

ト鬼王、手を引き、門口を明け、兩人、花道に行く。この時、運八、捕り手、下手より窺ひ出て

運八　ヤ、慥かに向うへ

ト目を附ける。

團三　お尋ねなさる即ち科人、まツこの通り。

ト内より首級を見せる。

皆々　ヤア。

團三　配符の廻りし

鬼王　アヽコレ、禪司坊さまが首。

禪司　我れに代つて

團三　アヽコレ

ト思ひ入れ。木の頭。捕り手、裏身にて内を窺ふ。團三郎、戸の戸をさす。捨て鐘、時雨唄、女の聲りにて、鬼王附いて向うへ入る。これをキザミ、ひやうし

幕

昭和二年六月二十五日印刷
昭和二年六月二十八日發行

『大南北全集第十卷』　非賣品

校訂　坪内逍遙
編纂者　渥美清太郎

發行者　和田利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者　堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所　常磐印刷所
東京市小石川區諏訪町五十六番地

發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地

